

茨城県教育財団文化財調査報告第419集

吉 十 北 遺 跡 勘 十 郎 堀 跡

東関東自動車道水戸線(銚田～茨城空港北間)
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

第3分冊

平成29年3月

東日本高速道路株式会社
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第419集

吉
十
郎
北
遺
跡
勘
十
郎
堀
跡

(第3分冊)

公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第419集

よし じゅう きた 遺 跡
かん じゅう ろう ぼり 跡
吉 十 北 遺 跡
勘 十 郎 堀 跡

東関東自動車道水戸線(鉾田～茨城空港北間)
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

第3分冊

平成 29 年 3 月

東日本高速道路株式会社
公益財団法人茨城県教育財団

目 次

—第3分冊—

第3章 吉十北遺跡	
第3節 遺構と遺物	
1 縄文時代の遺構と遺物	
(4) 土坑（第602号土坑～第729号土坑）	579
2 奈良時代の遺構と遺物	695
竪穴建物跡	695
3 その他の遺構と遺物	700
(1) 炭窯跡	700
(2) 溝跡	702
(3) 遺構外出土遺物	704
第4節 まとめ	718
第4章 勘十郎堀跡	788
第1節 調査の概要	788
第2節 運河跡	788
第3節 まとめ	795
付 章	798
茨城県鉾田市勘十郎堀跡採取試料の年代測定	パリノ・サーヴェイ株式会社

第 602 号土坑 (第 531・532 図 PL87)

位置 調査区西部の C 2 h0 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 25 号竪穴建物跡、第 603 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部は長径 2.45 m、短径 1.80 m の楕円形で、長径方向は N - 15° - E である。底面は長径 2.32 m、短径 1.50 m の楕円形で、ほぼ平坦である。確認面からの深さは 65 cm で、壁は北東部が内傾し、その他はほぼ直立している。

ピット 南西壁際に位置し、長径 46 cm、短径 40 cm のほぼ円形で、深さは 20 cm である。位置や形状から、補助的な貯蔵施設の可能性がある。

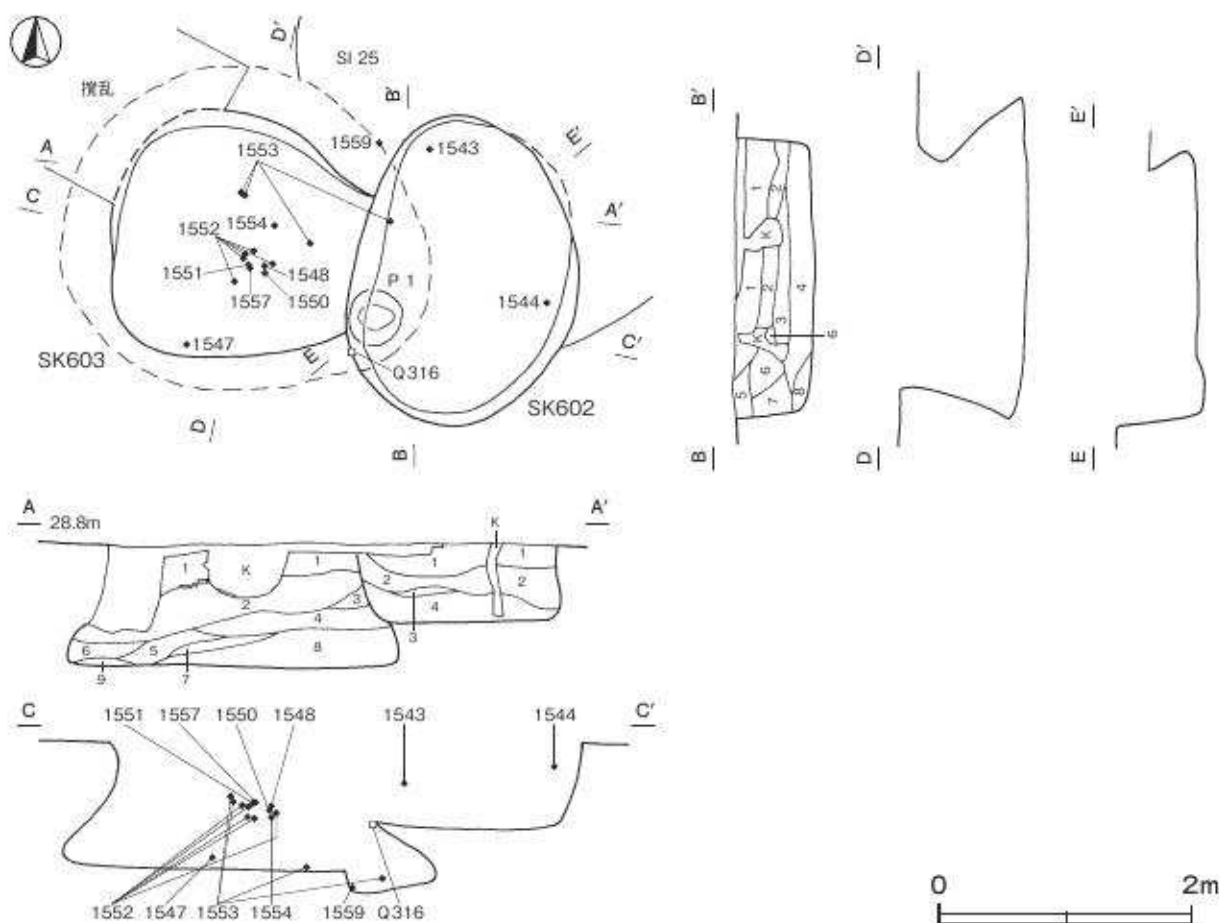
覆土 8 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

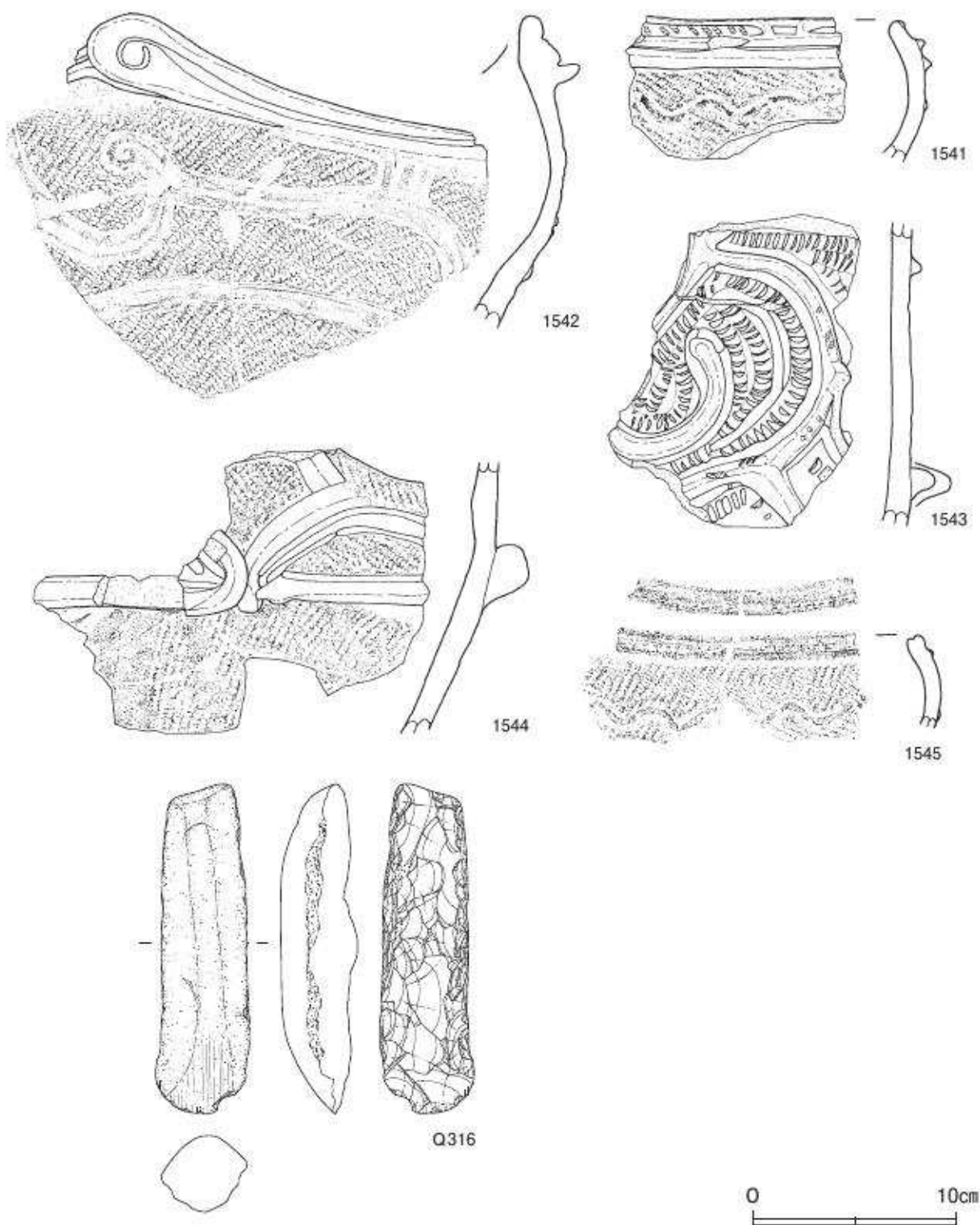
- | | | | |
|---------|------------------|-------|-----------|
| 1 にぶい褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 5 灰褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 6 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 明褐色 | ロームブロック少量 | 7 褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 明褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 縄文土器片 105 点 (深鉢 102、浅鉢 3)、石器 1 点 (磨製石斧未成品) が、覆土中から散乱した状態で出土している。Q316 は南西壁際の底面から出土し、埋め戻す前に遺棄されたか投棄されたものと思われる。1543 は覆土中層、1544 は覆土上層からそれぞれ出土し、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第 531 図 第 602・603 号土坑実測図



第 532 図 第 602 号土坑出土遺物実測図

第 602 号土坑出土遺物観察表 (第 532 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1541	縄文土器	深鉢	-	(70)	-	長石・石英	灰褐色	普通	単節縄文LR(縦)上に青褐色隆帯による区画 区画内断面半円状の隆帯による波状文	覆土中	
1542	縄文土器	深鉢	-	(177)	-	長石・石英・赤色 粒子	明黄褐色	普通	波頂部渦巻文・口縁に沿う膨状隆帯と断面半円 形の隆帯で胴部と区画。区画内沈線に伴う青褐 れ隆帯による渦巻文。胴部単節縄文RL(縦) 施文	覆土中	10% PL153

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1543	縄文土器	深鉢	-	(15.5)	-	長石・石英・雲母	にふい赤褐色	普通	溝状隆帯による曲線文 隆帯上に突起 隆帯に沿って連続爪形文	覆土中層	
1544	縄文土器	深鉢	-	(14.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・磁鉄	にふい赤褐色	普通	縄文栴文の隆帯と厚みのある隆帯で口縁部区画区画内同隆帯による曲線文 胴部単節縄文LR(斜・縦)施文	覆土上層	
1545	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	灰褐色	普通	口縁に沿って隆帯 単節縄文LR(横)上に隆帯による流状文	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q316	磨製石斧 未成品	16.2	4.6	3.8	346.9	アフライト	表面自然面 表面初磨調整 刃部は片面を軽く研ぎ出す	底面	PL171

第 603 号土坑 (第 531・533 ~ 535 図 PL87)

位置 調査区西部の C 2h0 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

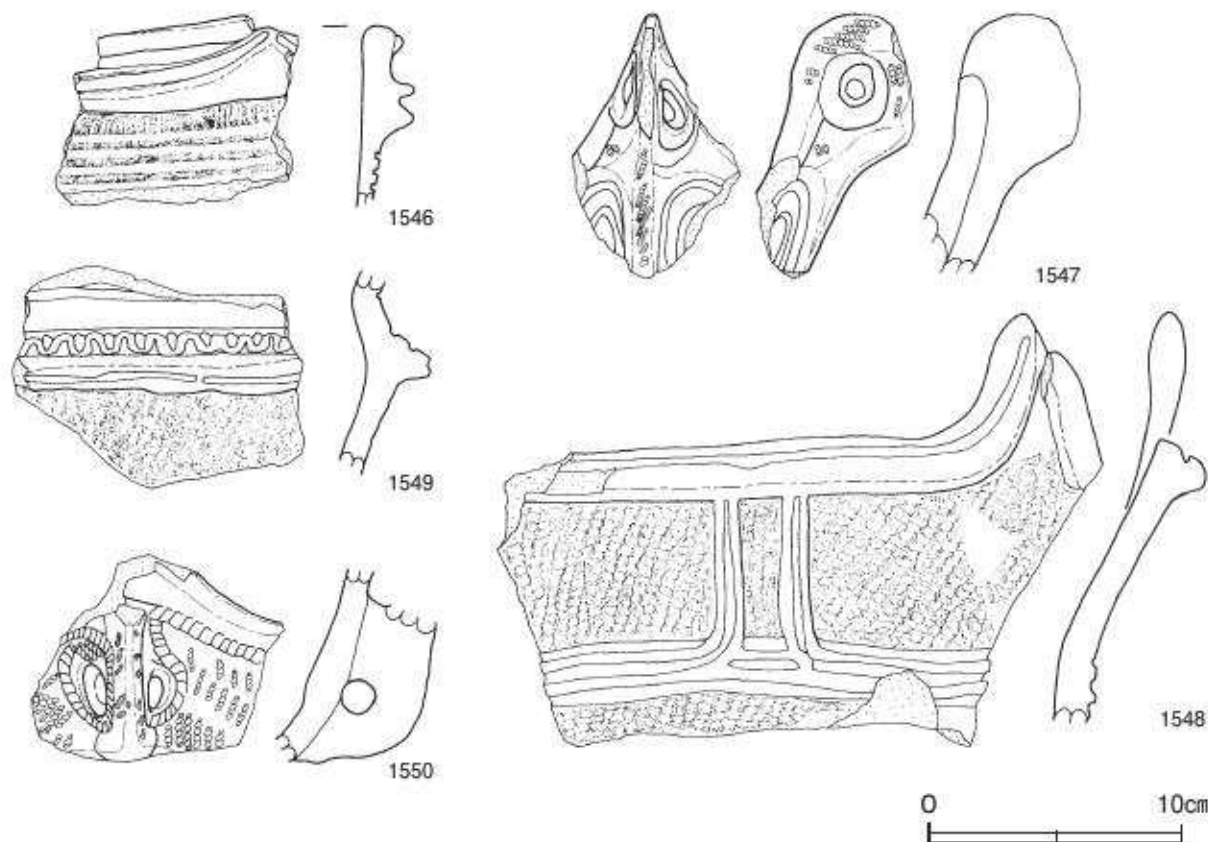
重複関係 第 25 号竪穴建物跡を掘り込み、第 602 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は径 1.92 ~ 2.00 m の不整円形である。底面は長径 2.93 m、短径 2.56 m の楕円形で、平坦である。確認面からの深さは 100 cm で、壁は内傾して袋状を呈している。

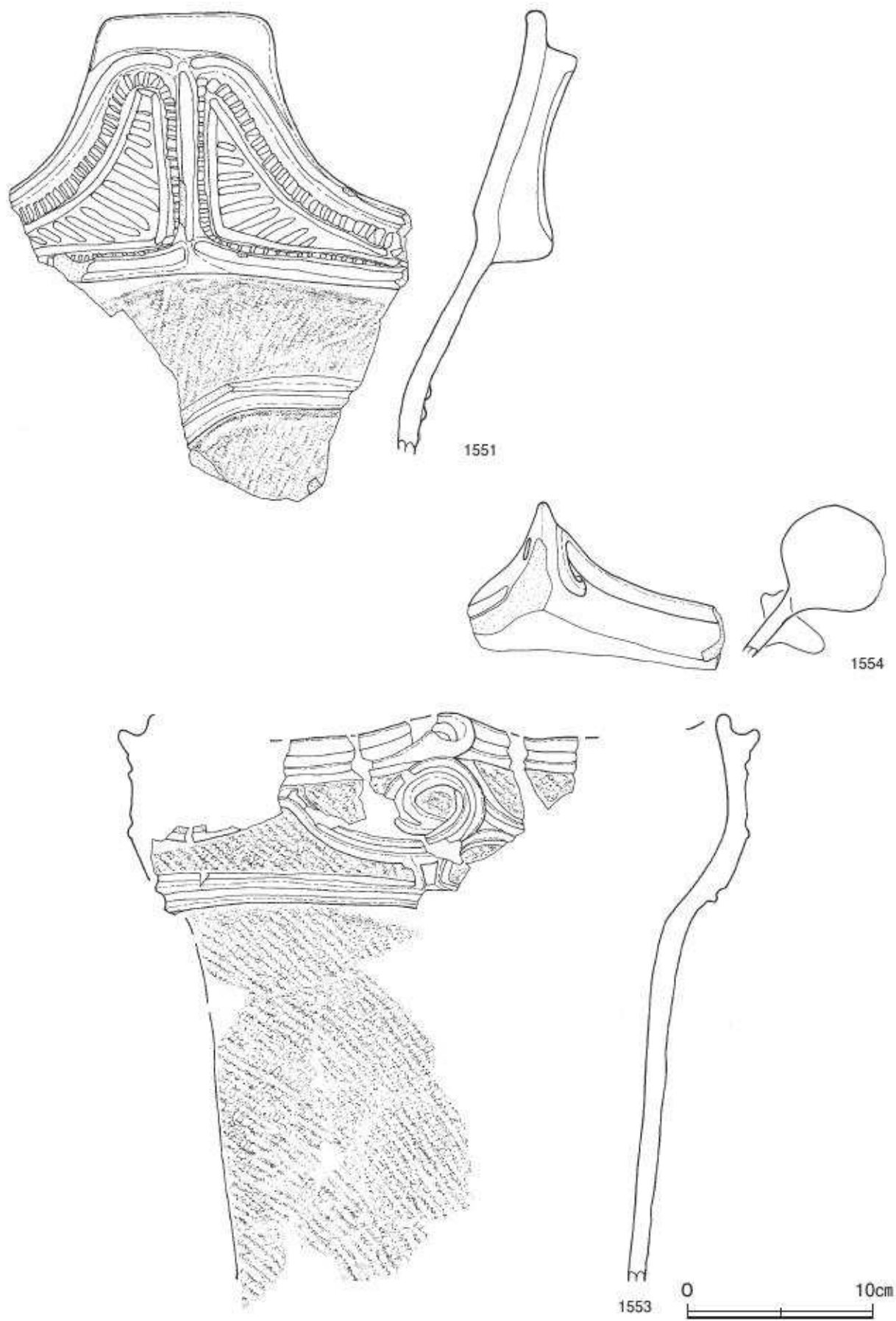
覆土 9 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

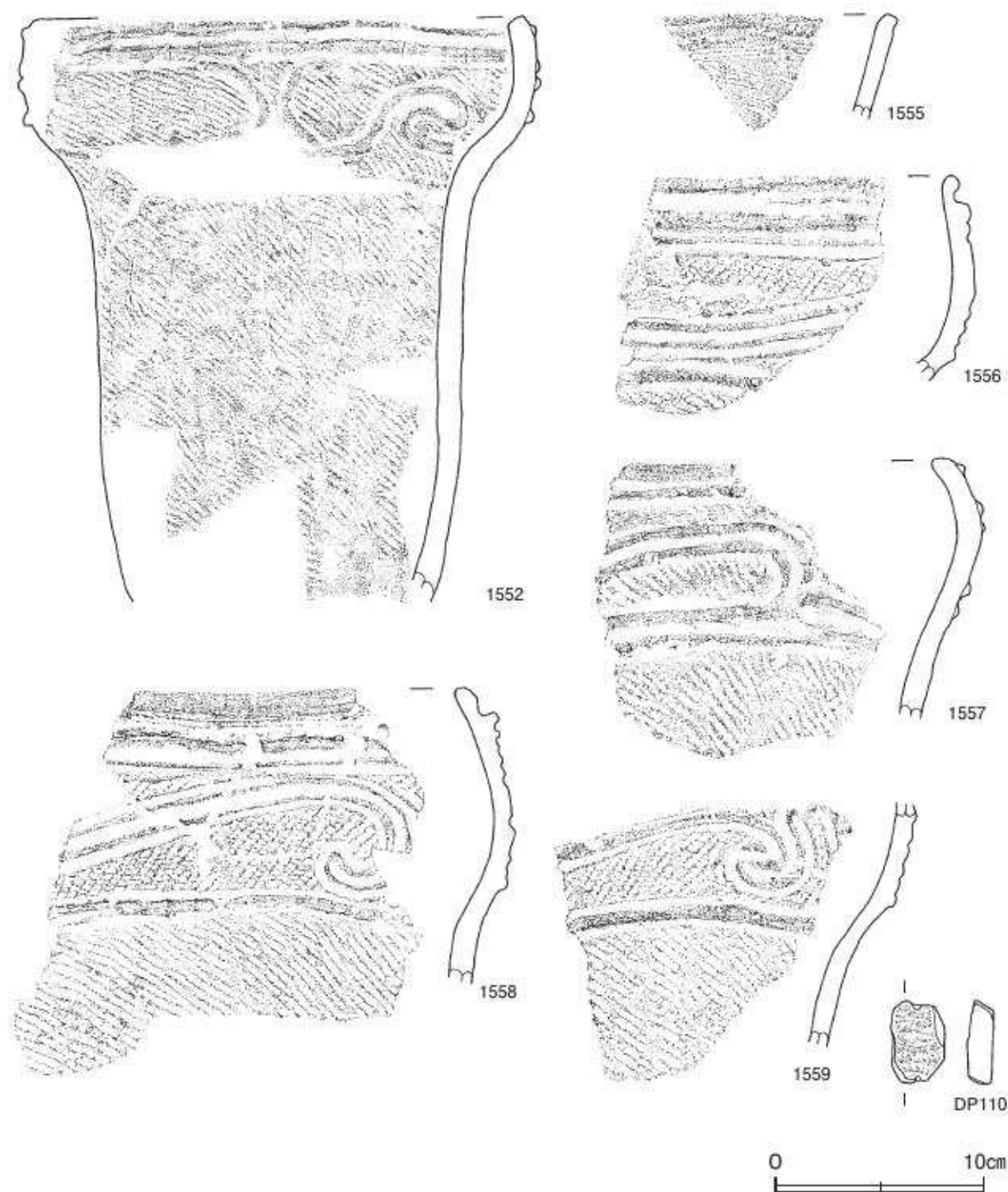
1 褐色	色	ロームブロック・炭化粒子少量	6 褐色	色	ロームブロック少量
2 明褐色	色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量	7 暗褐色	色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
3 褐色	色	ロームブロック中量	8 褐色	色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
4 暗褐色	色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	9 褐色	色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量			



第 533 図 第 603 号土坑出土遺物実測図 (1)



第 534 图 第 603 号土坑出土遗物实测图 (2)



第 535 図 第 603 号土坑出土遺物実測図 (3)

遺物出土状況 縄文土器片 297 点 (深鉢 296, 浅鉢 1), 土製品 1 点 (土器片錘) が, 覆土中層を中心に散乱した状態で出土している。1553 は底面から出土したものと覆土中層から出土したものが接合していることから, 破碎して投棄したと思われる。1559 は底面から出土し, 埋め戻す前に投棄されたか遺棄されたと思われる。1547 は覆土下層から, 1548・1550～1552・1554・1557 は覆土中層からそれぞれ出土し, 埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から, 貯蔵穴と考えられる。時期は, 出土土器から中期中葉と考えられる。

第 603 号土坑出土遺物観察表 (第 533 ~ 535 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1546	縄文土器	深鉢	-	(7.3)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい褐色	良好	口縁に沿って隆帯貼付。突起を伴う凹状の背割れ隆帯一帯。扉位の条線文上に半截竹管による横位の沈線文。	覆土中	
1547	縄文土器	深鉢	-	(10.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	不良	液加部側面に縄文施文の隆帯による凹文。凹部から厚みのある隆帯垂下。隆帯に沿って沈線文。	覆土下層	
1548	縄文土器	深鉢	-	(17.2)	-	長石・石英・雲母・ 細砂	にぶい褐色	普通	口唇部に太沈線文。液加部鋭角。単節縄文 RL (斜) 上に沈線を伴う背割れ隆帯による矩形区凹文。	覆土中層	20% PL151
1549	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	横位の沈線間交互斜突文。凹状の背割れ隆帯貼付。単節縄文 RL (斜) 施文。	覆土中	
1550	縄文土器	深鉢	-	(8.3)	-	長石・石英・雲母・ 細砂	灰褐色	普通	口縁に沿って溝状隆帯貼付。有部沈線文を伴う縄文施文の隆帯による眼鏡状把手。単節縄文 RL (斜) 施文。	覆土中層	
1551	縄文土器	深鉢	-	(26.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁に沿う背割れ隆帯と口縁部下の凹状隆帯で口縁部区画。区画内隆帯に沿って連続凸形文・沈線文。横位・斜位の沈線文で充満。単節縄文 RL (縦) 上に2条の隆帯による曲線文。	覆土中層	10% PL151
1552	縄文土器	深鉢	[23.5]	(28.2)	-	長石・石英・細砂	灰褐色	普通	口縁に沿って断面半円状の隆帯貼付。同隆帯による栞円形文・渦巻文。無節 L (縦) 施文。	覆土中層	30%
1553	縄文土器	深鉢	[30.6]	(30.5)	-	長石・石英・赤色 粒子	暗赤褐色	普通	液加部に渦巻文。間に沈線を伴う2条の隆帯で口縁部区画。区画内同隆帯による渦巻文。胴部0段多条単節縄文 LR (縦) 施文。	覆土中層 底面	20% PL151
1554	縄文土器	浅鉢	-	(9.0)	-	長石・石英・雲母・ 細砂	明赤褐色	普通	液加部鋭角で唇面に凹文・渦巻文。口唇部凹状で中央部に凹線文。	覆土中層	
1555	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	半截竹管による断続する横志文・斜行文。	覆土中	
1556	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	沈線を伴う隆帯による区画文。区画内単節縄文 LR (横) 上に沈線を伴う3条の隆帯による曲線文。	覆土中	PL151
1557	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙褐色	普通	口縁部鋭角で唇面に凹文・渦巻文。口唇部凹状で中央部に凹線文。	覆土中層	PL151
1558	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	口縁に沿ってやや深めの沈線文。沈線を伴う隆帯により口縁部区画。区画内単節縄文 LR (横) 上に沈線を伴う2条の隆帯による渦巻文。胴部同原体による(縦)施文。	覆土中	PL151
1559	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部沈線を伴う隆帯による区画文。区画内単節縄文 LR (横) 上に同じ隆帯による渦巻文。胴部同原体による(縦)施文。	底面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DE110	土器片鏝	4.0	2.6	1.3	16.0	長石・石英・雲母・ 黒色粒子	にぶい橙褐色	周縁部部分的に研磨。両端にキザミ目。	覆土中	

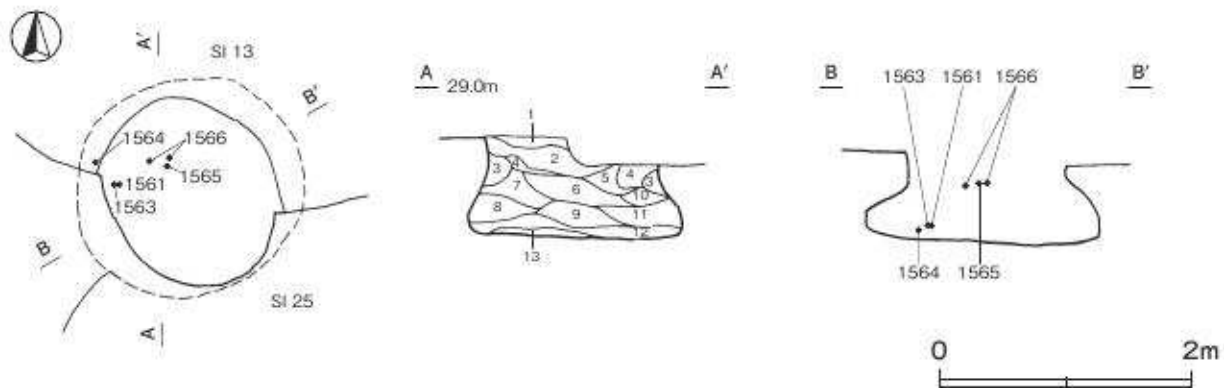
第 604 号土坑 (第 536 ~ 538 図 PL88)

位置 調査区西部の C 2 g0 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 25 号竪穴建物跡を掘り込み、第 13 号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径 1.55 m、短径 1.30 m の楕円形で、長径方向は N - 30° - W である。底面は長径 1.85 m、短径 1.74 m のほぼ円形で、平坦である。確認面からの深さは 77 cm で、壁は中位まで内彎して袋状を呈し、土位はほぼ直立している。

覆土 13 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

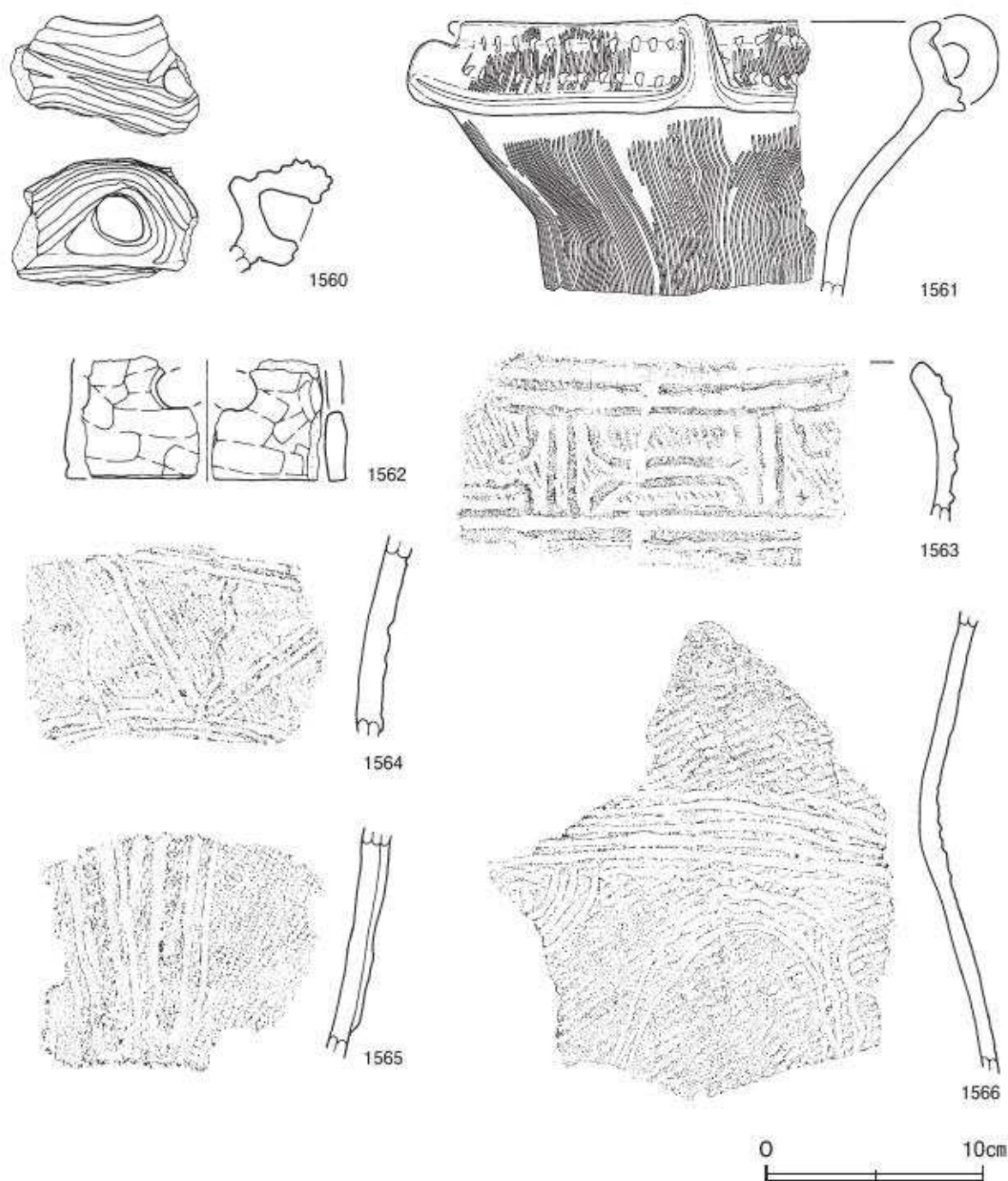


第 536 図 第 604 号土坑実測図

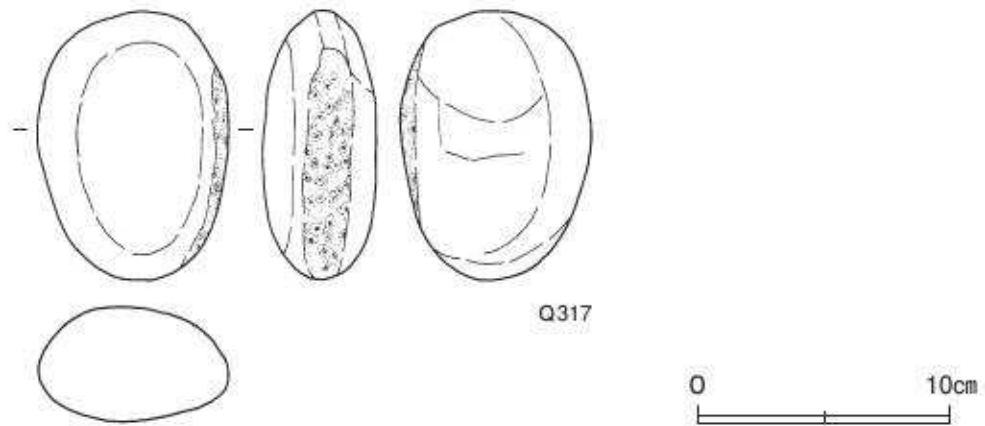
土層解説

1	極暗褐色	黒色土ブロック少量	8	灰褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
2	極暗褐色	黒色土ブロック中量、ロームブロック少量	9	明褐色	ロームブロック中量
3	明褐色	ロームブロック多量	10	明褐色	ロームブロック少量
4	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	11	褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
5	極暗褐色	ローム粒子微量	12	褐色	ローム粒子少量
6	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	13	褐色	ロームブロック少量
7	灰褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量			

遺物出土状況 縄文土器片 43 点（深鉢 40、浅鉢 2、器台 1）、石器 1 点（磨石）が、覆土下層から中層にかけてまばらに出土している。1561・1563・1564 は覆土下層から、1565・1566 は覆土中層からそれぞれ出土し、埋土と一緒に投棄されたと思われる。



第 537 図 第 604 号土坑出土遺物実測図(1)



第 538 図 第 604 号土坑出土遺物実測図 (2)

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第 604 号土坑出土遺物観察表 (第 537・538 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1560	縄文土器	深鉢	—	(5.8)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	3本の沈線文を伴う中空把手	覆土中	
1561	縄文土器	深鉢	[22.6]	(13.0)	—	長石・石英・雲母	褐色	普通	突起を持つ泥状の青銅製帯で胴部と区画。筒状工具による縦定文で器面調整。口縁下と隆帯に沿って連続刻文	覆土下層	20% PL151
1562	縄文土器	器台	—	(5.5)	—	長石・石英・雲母	明褐色	普通	脚部片 2孔・外・内面指ナゲ	覆土中	
1563	縄文土器	深鉢	—	—	—	長石・石英	にぶい褐色	普通	間に沈線文を伴う之余の隆帯による口縁部区画無筋上(縦)上に同隆帯による縦区画 区画内相対する年形文	覆土下層	PL151
1564	縄文土器	深鉢	—	—	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	基部縦文 L (縦) 上に半截竹管の沈線による積位区画 区画内 V 字及び蛇行沈線施文	覆土下層	
1565	縄文土器	深鉢	—	—	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	単部縦文 L (縦・斜) 上に縄文施文の隆帯垂下隆帯に沿って半截竹管による沈線文	覆土中層	
1566	縄文土器	深鉢	—	—	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	0段多葉単部縦文 L (縦) 上に2本の波状文と4本の沈線文周囲 2-3本の弧状文	覆土中層	PL151
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q317	磨石	10.7	7.5	4.5	533.5	砂岩	全面を欠けに研磨	片側縁に微細な鋸打痕 敲石兼用	覆土中	PL181	

第 605 号土坑 (第 539 図 PL88)

位置 調査区西部の C 2 g9 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 655 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径 1.90 m、短径 1.59 m の楕円形で、長径方向は N-76°-W である。底面は長径 2.11 m、短径 1.85 m の楕円形で、ほぼ平坦である。確認面からの深さは 61cm で、壁は内彎して袋状を呈している。

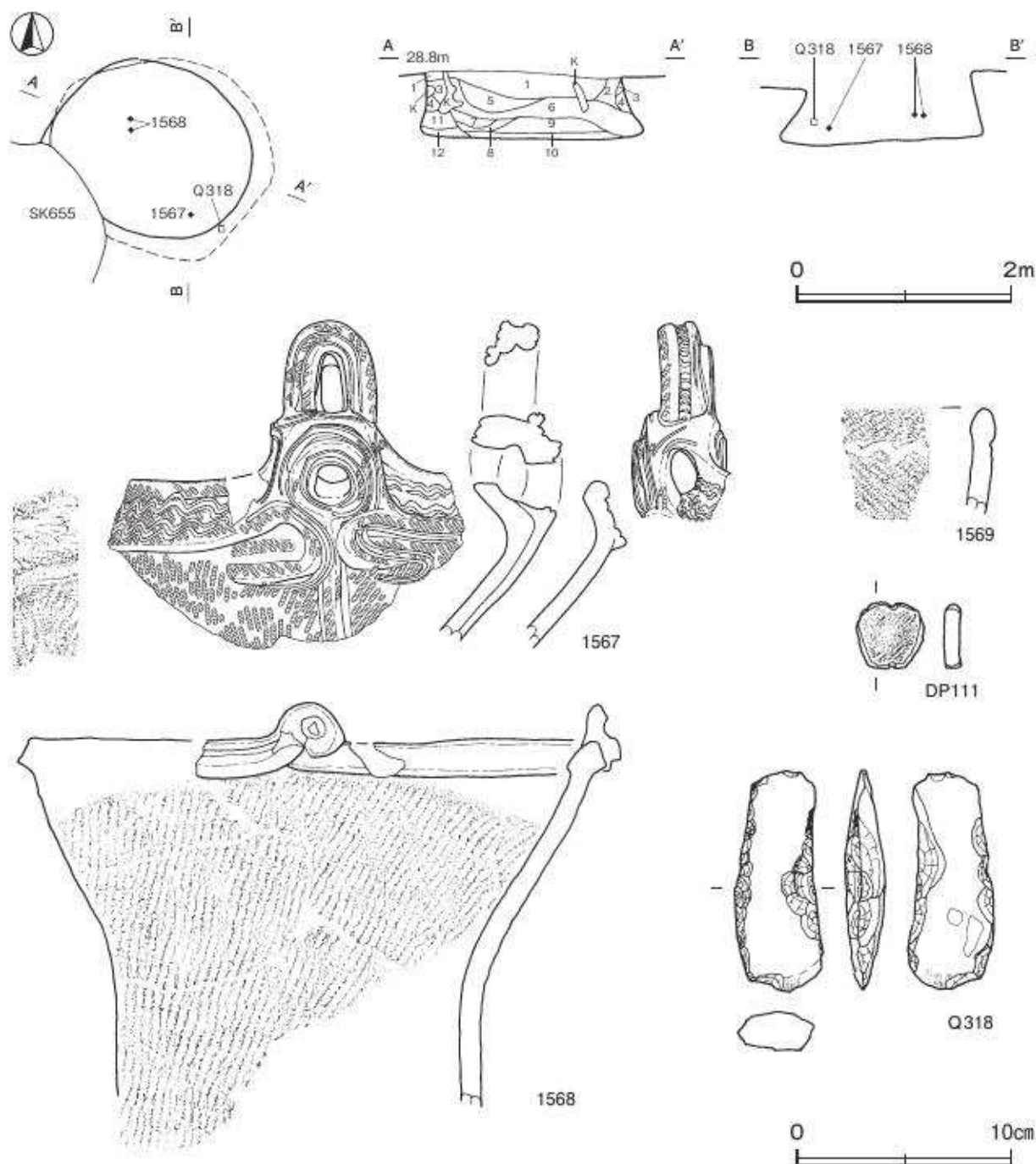
覆土 12 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	7 暗褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック微量
3 暗褐色	ローム粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック少量
5 黒褐色	ローム粒子少量	11 にぶい褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
6 黒褐色	ロームブロック少量	12 にぶい褐色	ロームブロック微量

遺物出土状況 縄文土器片 97 点 (深鉢)、土製品 1 点 (土器片鏟)、石器 1 点 (打製石斧)、剥片 1 点 (チャート) が出土している。1567・1568、Q318 は覆土中層から出土し、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第 539 図 第 605 号土坑・出土遺物実測図

第 605 号土坑出土遺物観察表 (第 539 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1567	縄文土器	深鉢	-	(15.4)	-	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	半截竹管文と縄文施文の隆帯による中惣把手 把手頂部側面に有部沈線文。縄文施文の隆帯に よる口縁部区画。区画内単節縄文 RL (横) 上 に半截竹管による 2 列の波状文。胴部単節縄文 RL (縦・斜) 上に縄文施文の隆帯並下	覆土中層	20% PL151
1568	縄文土器	深鉢	26.0	(18.9)	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	口縁に沿って環状の突起を伴う断面薄蹄形の隆 帯貼付。隆帯下全面に単節縄文 RL (縦・斜) 施文	覆土中層	30% PL151
1569	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口縁に沿って隆帯貼付。隆帯上に単節縄文 LR (横) 施文。隆帯下同原体による (縦) 上に横 位の航行沈線文	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
D911	土器片鉢	30	30	0.8	9.4	長石・石英	にぶい褐色	周縁部粗雑に研磨 両端にキザミ目	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q318	打製石斧	10.3	4.0	1.8	86.8	砂岩	扇形 片面に自然面 両側縁微細な敲打痕 刃部は表裏を研磨	覆土中層	P1.165 被熱

第 612 号土坑 (第 540 図)

位置 調査区東部の C 4 g6 区、標高 29 m ほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第 26 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 1.43 m、短径 1.24 m の楕円形で、長径方向は N - 56° - E である。底面は平坦で、深さは 58cm である。壁は外傾している。

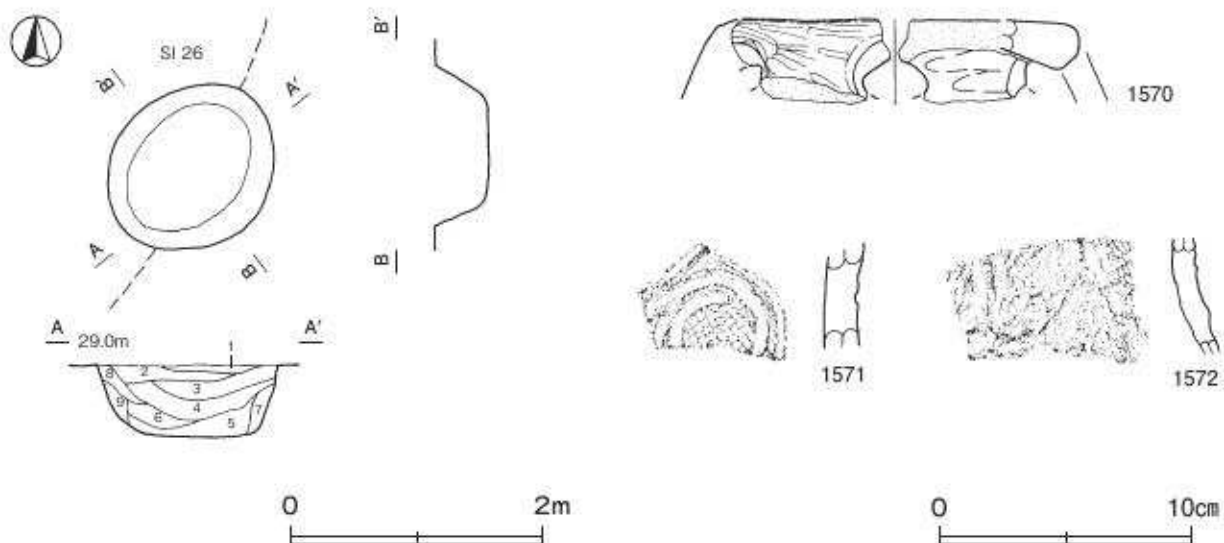
覆土 9 層に分層できる。ロームブロックを含む層が堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片 22 点 (深鉢 18、浅鉢 3、器台 1) が、覆土中からまばらな状態で出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第 540 図 第 612 号土坑・出土遺物実測図

第 612 号土坑出土遺物観察表 (第 540 図)

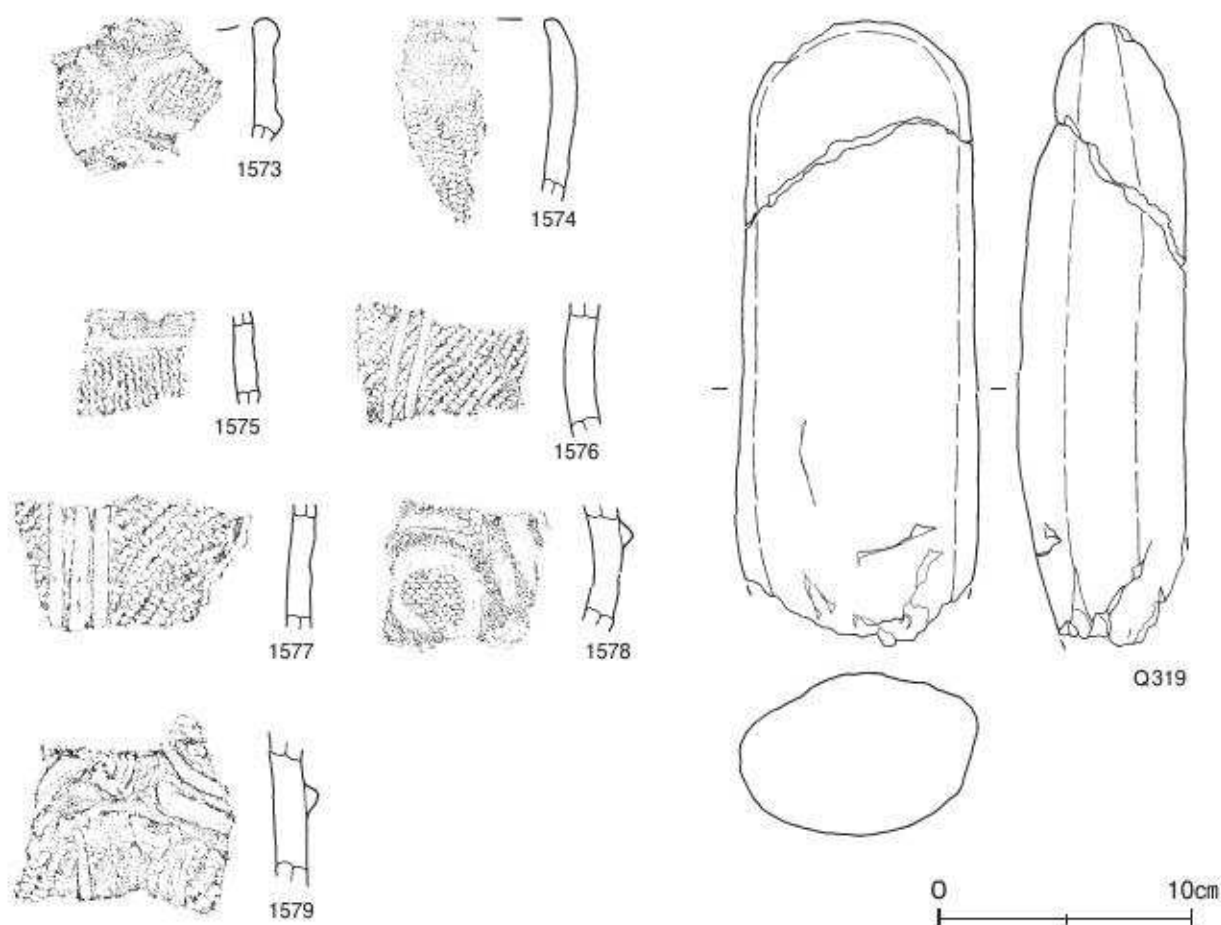
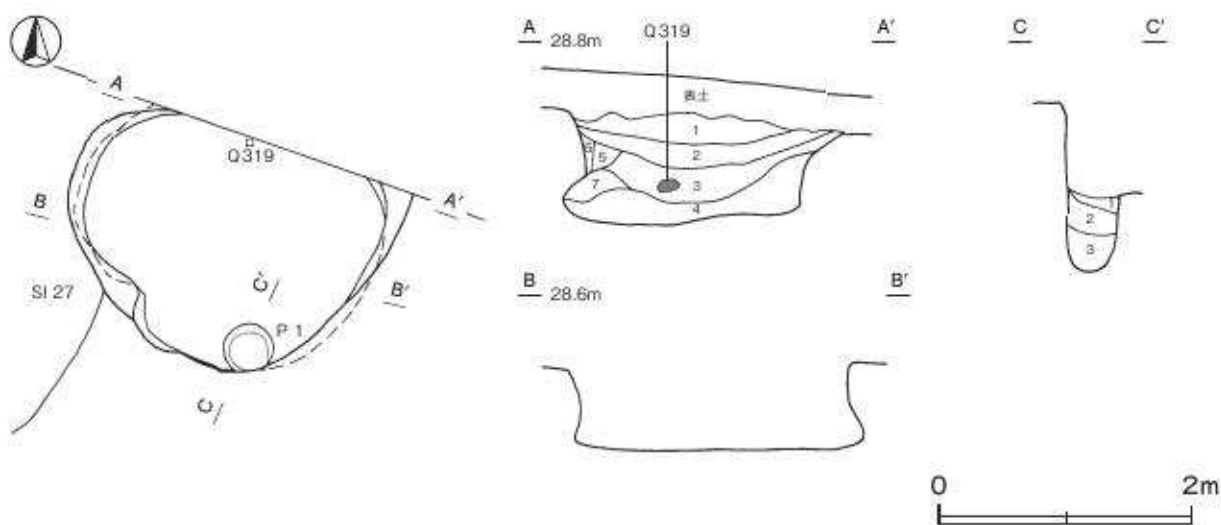
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1570	縄文土器	器台	[14.0]	(3.4)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子・赤色粒子	褐色	普通	器受部平坦で入念な磨き 脚部やや鋭く 2 孔 赤彩痕	覆土中	
1571	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	腹節縄文 LRL (縦) 上に沈線による渦巻文	覆土中	
1572	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	腹節起線による文様区画 区画内草節縄文 LRL (縦) 充填	覆土中	

第 619 号土坑 (第 541 図 PL88)

位置 調査区北東部の C 4 f0 区、標高 28 m ほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第 27 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北東部が調査区域外へ伸びているため、北西・南東径は 2.49 m で、北東・南西径は 1.82 m しか確認できなかったが、長径方向が $N - 65^{\circ} - W$ の不整楕円形と推定できる。底面は北西・南東径 2.40 m で、北東・



第 541 図 第 619 号土坑・出土遺物実測図

南西径は1.80 mしか確認できなかったが、ほぼ平坦である。確認面からの深さは85cmで、壁は南部が直立し、その他は内彎して、袋状を呈している。

ピット 南壁際に位置し、深さは64cmである。形状から柱穴の可能性がある。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |

覆土 7層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化材微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片75点（深鉢74、浅鉢1）、石器1点（炉石）が、覆土中からまばらに出土している。

Q319は、覆土中層から出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。

第619号土坑出土遺物観察表（第541図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1573	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい橙	普通	太沈線を作る隆帯による楕円形区画 区画内単節縄文RL（縦）光磨	覆土中	
1574	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐	普通	口縁に沿って無文帯 無文帯下単節縄文RL（斜）施文	覆土中	
1575	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	隆帯の惣糸文上に横位の太沈線文 太沈線間磨消	覆土中	
1576	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	単節縄文RL（縦）上に2本の沈線垂下	覆土中	
1577	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	単節縄文RL（斜）上に3本の沈線垂下	覆土中	
1578	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	灰黄褐	普通	隆帯と太沈線による文様区画 区画内単節縄文RL（縦）施文	覆土中	
1579	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部太沈線を作る隆帯による区画 胴部単節縄文RL（縦）2本の太沈線垂下 沈線間磨消	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q319	炉石	(24.7)	9.8	6.8	(2321.6)	石英斑岩	砥石転用 全面に砥面 上部部火熱を受け変色 下部部欠損	覆土中層	

第620号土坑（第542図 PL89）

位置 調査区北東部のC4e5区、標高29mほどの台地中央部に位置している。

規模と形状 長径2.35m、短径2.10mの楕円形で、長径方向はN-13°-Eである。底面は平坦で、深さは46cmである。壁は外傾している。

ピット 2か所。P1は北壁際、P2は中央部に位置し、深さは44cm・25cmである。P1は位置や形状から、補助的な貯蔵施設の可能性がある。P2は規模と形状から、柱穴の可能性がある。

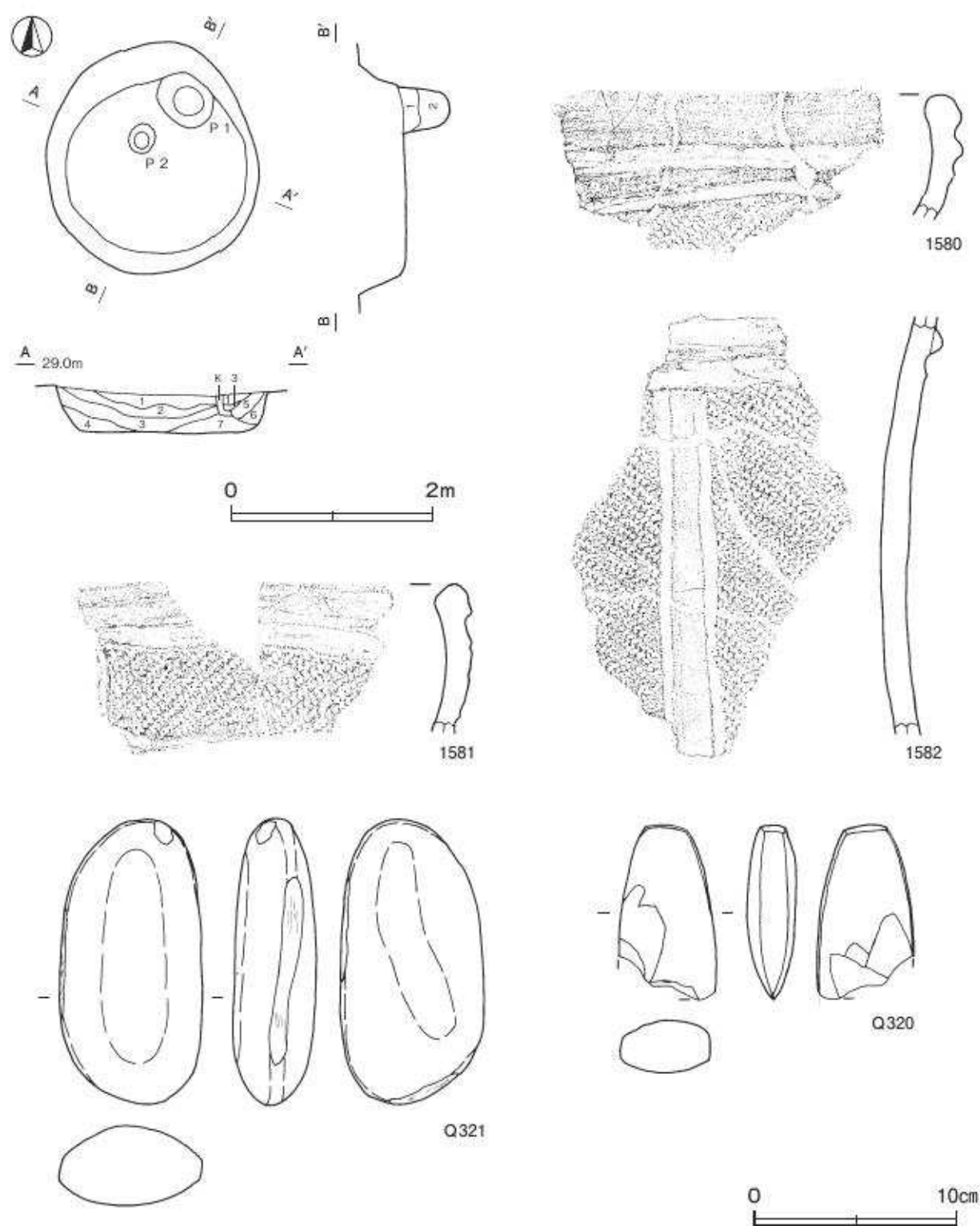
土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 褐色 | ロームブロック多量 |
|-------|-----------------------|------|-----------|

覆土 7層に分層できる。ロームブロックを含む層が堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量、焼土ブロック微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| | | 7 暗褐色 | ロームブロック中量 |



第 542 図 第 620 号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片 144 点（深鉢 140、浅鉢 4）、石器 2 点（磨製石斧、磨製石斧未成品）が、覆土中から散乱した状態で出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。

第 620 号土坑出土遺物観察表 (第 542 図)

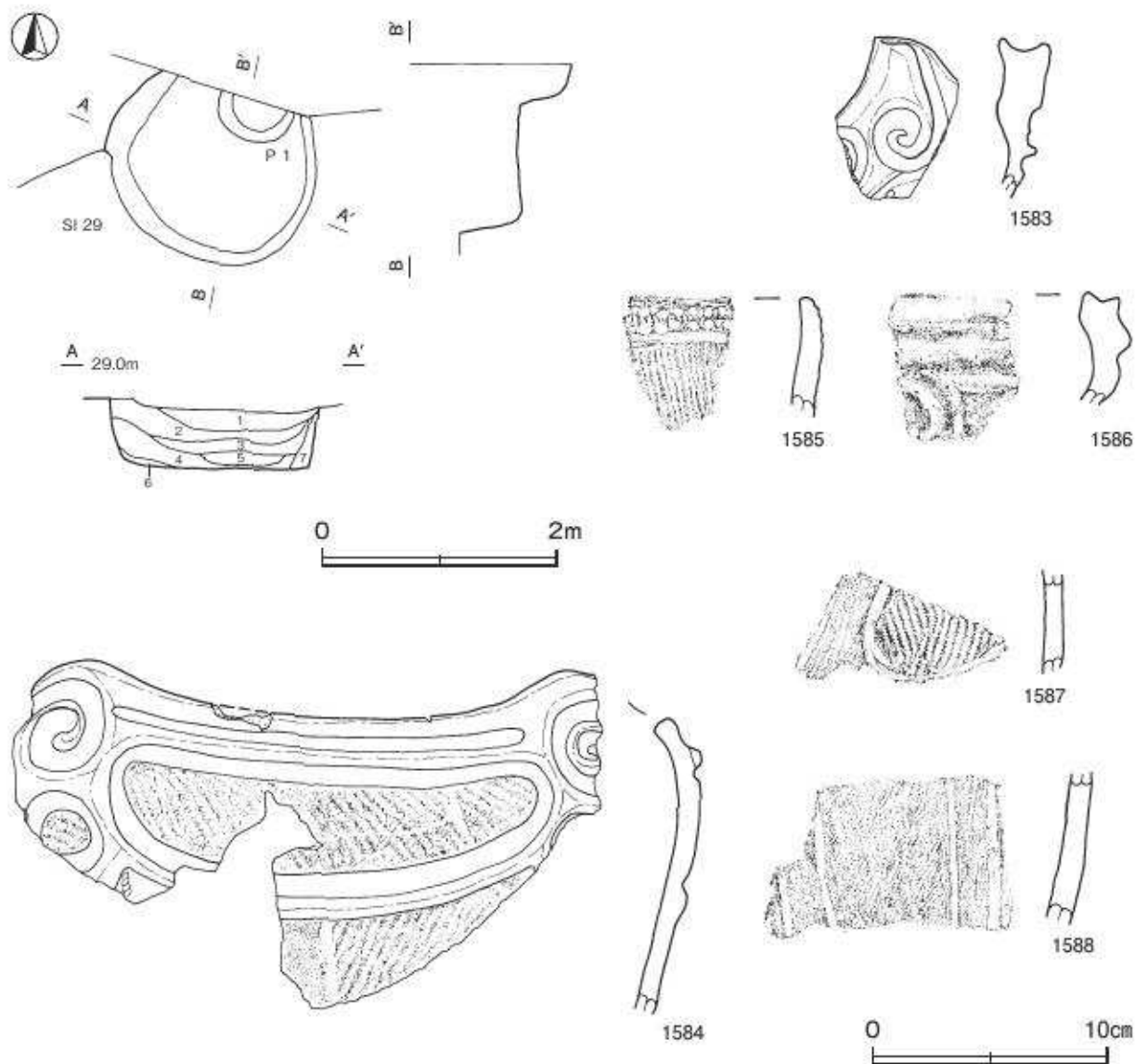
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1580	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい橙	普通	口縁に沿って太沈線を伴う隆帯貼付 複節縄文 LRL (横) 施文	覆土中	
1581	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤母 粘土	にぶい橙	普通	口縁に沿って太沈線を伴う隆帯貼付 沈線による 矩形の文様区画 複節縄文 LRL (横) 施文	覆土中	
1582	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい橙	普通	凹線を伴う隆帯で横部と区画 扇部複節縄文 LRL (縦) 上に 2 本の太沈線垂下 沈線間磨消	覆土中	PL154

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q320	磨製石斧	(8.7)	4.9	2.5	(146.9)	砂岩	定角式 全面研磨 刃部欠損 再刃	覆土中	PL167
Q321	磨製石斧 未成品	14.1	7.2	4.2	611.0	ホルンフェルス	全面磨り調整 両縁部強い研磨痕	覆土中	PL171

第 622 号土坑 (第 543 図)

位置 調査区北東部の C 4 e6 区、標高 29 m ほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第 29 号竪穴建物に掘り込まれている。



第 543 図 第 622 号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、東西径は1.79 mで、南北径は1.43 mしか確認できなかったが、円形と推定できる。底面は平坦で、深さは55cmである。壁はほぼ直立している。

ピット 北東壁際に位置し、形状は径64cmほどの円形と推定できる。深さは48cmである。位置や形状から、補助的な貯蔵穴の可能性はある。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックを含む層が堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1	黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	5	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	6	褐色	ロームブロック中量
3	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	7	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック少量			

遺物出土状況 縄文土器片111点（深鉢107、浅鉢4）、剥片1点（ホルンフェルス）が、覆土中から散乱した状態で出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。

第622号土坑出土遺物観察表（第543図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1583	縄文土器	深鉢	-	(6.8)	-	長石・石英・黒色粒子	明赤褐色	良好	波頂部に隆帯による渦巻文 内面に稜	覆土中	
1584	縄文土器	深鉢	-	(14.9)	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	波頂部に渦巻文・口縁部太沈線を持つ隆帯による稀円形区画文・区画内単節縄文RL（縦）施文 胴部同原体（縦）上に太沈線垂下・沈線磨擦消	覆土中	10% PL153
1585	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	橙	普通	地文の縦位の隆帯文上に口縁に沿って2本の円形刺突文と横位の沈線文一帯	覆土中	
1586	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	太沈線を持つ隆帯による区画文 区画内同隆帯による渦巻文	覆土中	
1587	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	太沈線を持つ隆帯による区画文 区画内単節縄文LR（縦・斜）施文	覆土中	
1588	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	細い単節縄文RL（縦）上に2本の沈線垂下・沈線磨擦消	覆土中	

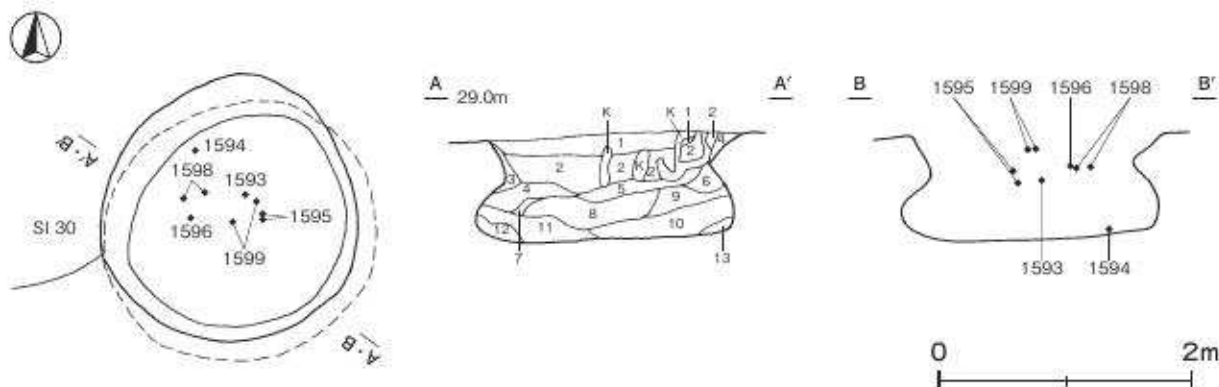
第626号土坑（第544～546図 PL89）

位置 調査区南西部のC2h9区、標高29 mほどの台地縁辺部に位置している。

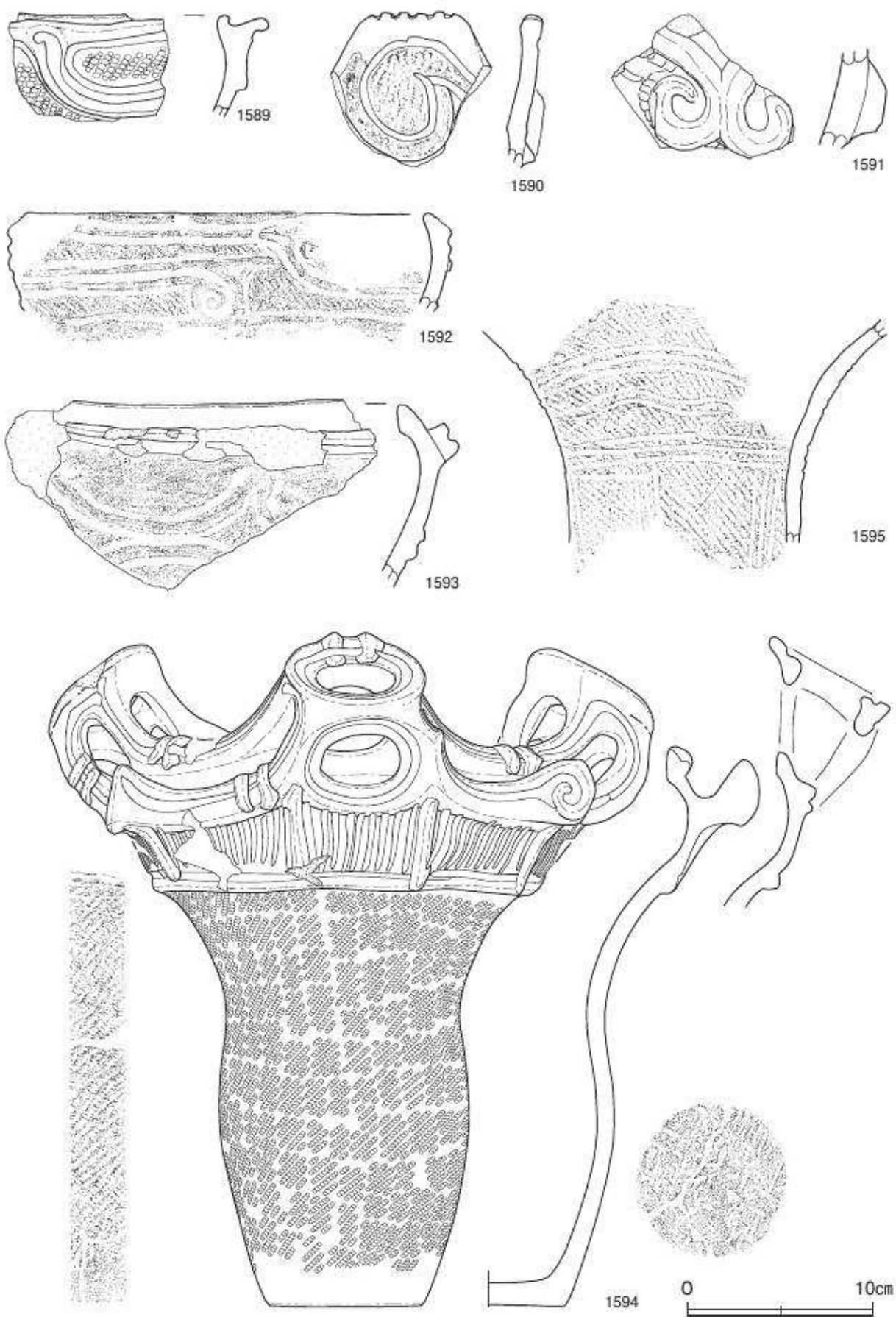
重複関係 第30号堅穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部は径2.03～2.15 mのほぼ円形である。底面は径2.04～2.12 mのほぼ円形で、平坦である。確認面からの深さは82cmで、壁は内彎して袋状を呈している。

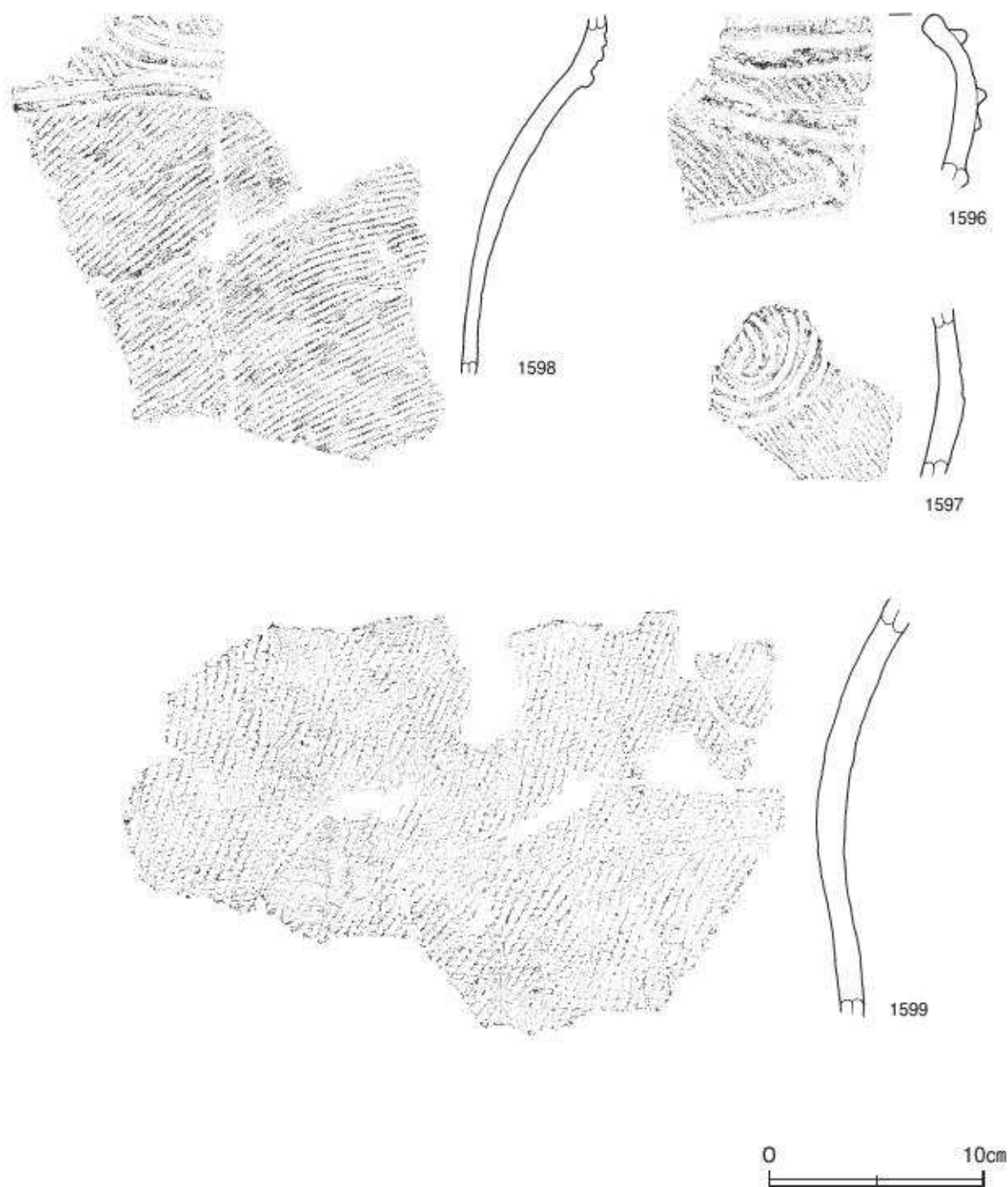
覆土 13層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。



第544図 第626号土坑実測図



第 545 图 第 626 号土坑出土遗物实测图(1)



第 546 図 第 626 号土坑出土遺物実測図 (2)

土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------|-----------|----------------------|
| 1 黒 褐 色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 8 褐 色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒 褐 色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 9 黒 褐 色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗 褐 色 | ロームブロック少量 | 10 黒 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 4 黒 褐 色 | ロームブロック微量 | 11 黒 褐 色 | ロームブロック・炭化物少量 |
| 5 黒 褐 色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 12 にぶい黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 6 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 | 13 褐 色 | ロームブロック多量 |
| 7 暗 褐 色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片 164 点（深鉢 162, 浅鉢 1, 器台 1）, 石器 3 点（磨石 2, 凹石 1）が出土している。1594 はほぼ完形で横位の状態で底面から出土し、埋め戻す前に遺棄されたものと思われる。1593・1595 は覆土中層から、1596・1598・1599 は覆土上層からそれぞれ出土し、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第 626 号土坑出土遺物観察表（第 545・546 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1589	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・細砂	にぶい褐色	普通	底状隆帯による区画、区画内単節縄文 RL（横）上に管割れ隆帯による曲線文	覆土中	
1590	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	波頂部にキザミ目、縄文施文の隆帯による区画、区画内渦巻文、単節縄文 RL（斜）で充填	覆土中	
1591	縄文土器	深鉢	-	(7.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・細砂	にぶい褐色	普通	厚みのある隆帯による相対渦巻文、隆帯に沿って連続爪形文	覆土中	
1592	縄文土器	深鉢	[21.4]	(5.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	単節縄文 RL（横）上に沈線を伴う 2 条の隆帯で口縁部区画、同隆帯による横走文・渦巻文	覆土中	PL154
1593	縄文土器	深鉢	-	(10.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁に沿って底状の管割れ隆帯貼付、沈線を伴う隆帯による相反弧状文	覆土中層	
1594	縄文土器	深鉢	21.0	36.4	8.0	長石・石英・細砂・黒色粒子	赤褐色	良好	底状の管割れ隆帯で口縁部 2 分割、底部に渦巻文を持つ 3 単位の突起、口縁下半部切手から垂下する 2 条の隆帯で区画、区画内沈線文で充填、胴部単節縄文 RL（縦）施文、底面割代痕	底面	90% PL154
1595	縄文土器	深鉢	-	(12.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	単節縄文 LR（縦）、胴部 3 本組沈線による横走文・2 本組沈線による波状文、胴部 3 本組沈線による雲垂文	覆土中層	10%
1596	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	黒褐色	普通	単節縄文 L（縦）上に 2 条の隆帯による区画、区画内同隆帯による曲線文	覆土上層	
1597	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	褐色	普通	縦めの単節縄文 RL（横）上に数本の沈線による渦巻文	覆土中	
1598	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	0 段多条単節縄文 RL（横）上に沈線を伴う 2 条の隆帯による曲線文、胴部同原状（縦）	覆土上層	
1599	縄文土器	深鉢	-	(19.8)	-	長石・石英・雲母・細砂	灰褐色	普通	0 段多条単節縄文 RL（縦）施文	覆土上層	10%

第 628 号土坑（第 547・548 図）

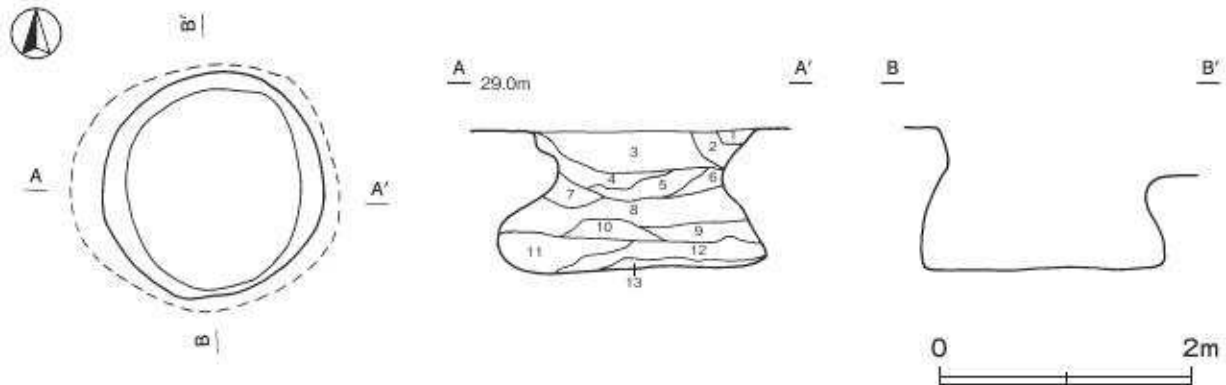
位置 調査区西部の C 2 e9 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 開口部は径 1.82 ~ 1.88 m のほぼ円形である。底面は径 1.95 ~ 2.13 m のほぼ円形で、平坦である。確認面からの深さは 108 cm で、壁は中位まで内彎して袋状を呈し、上位は外傾している。

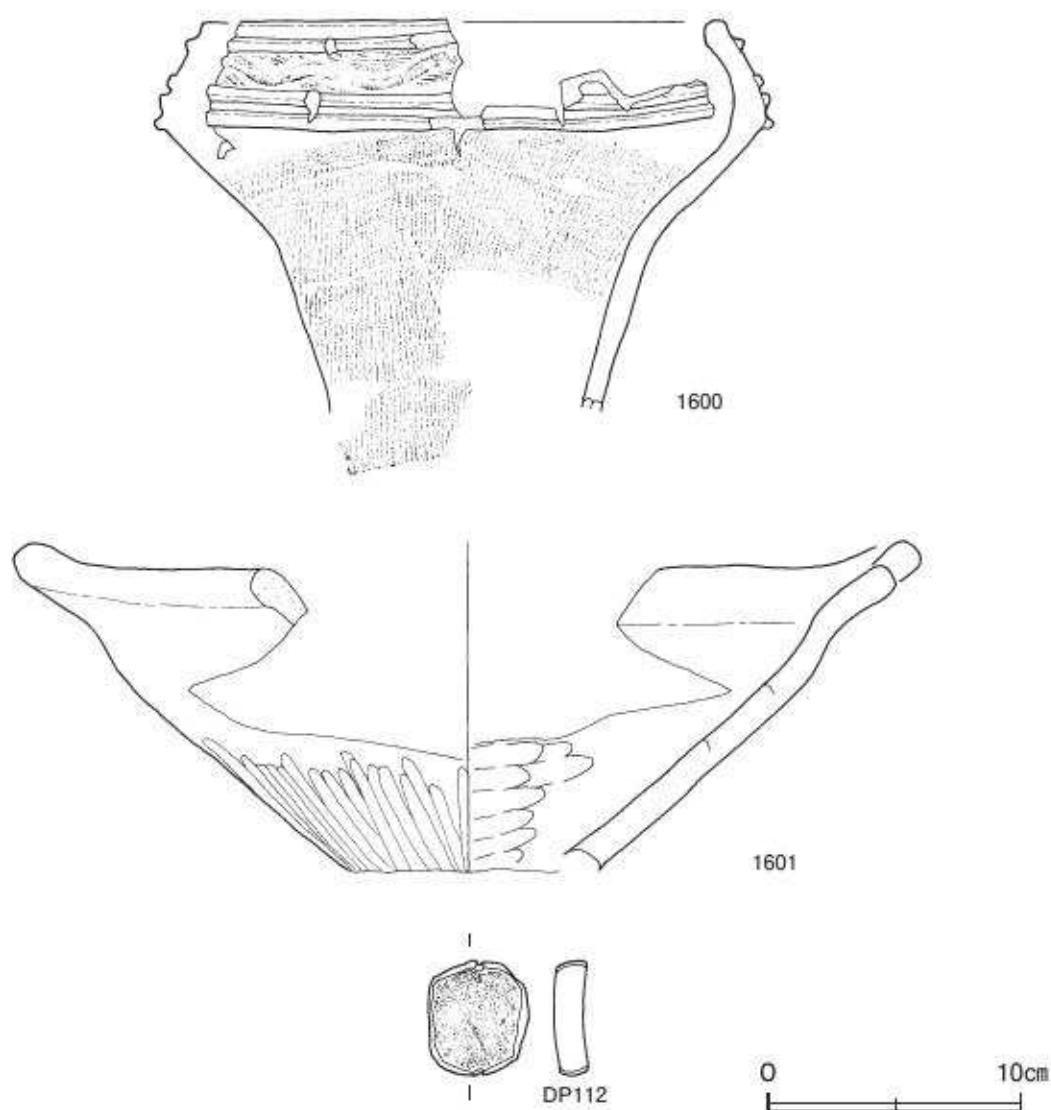
覆土 13 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 極暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	9 褐色	ローム粒子・焼土粒子中量
3 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	10 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・鹿沼バミス粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	11 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	12 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子中量
6 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	13 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子少量
7 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量		



第 547 図 第 628 号土坑実測図



第 548 図 第 628 号土坑出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片 204 点（深鉢 200, 浅鉢 4）、土製品 1 点（土器片錘）、石器 7 点（スクレイパー 1, 磨製石斧 2, 磨石 2, 敲石 2）、剥片 4 点（瑪瑙 2, チャート 1, 石英 1）が、覆土中から散乱した状態で出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

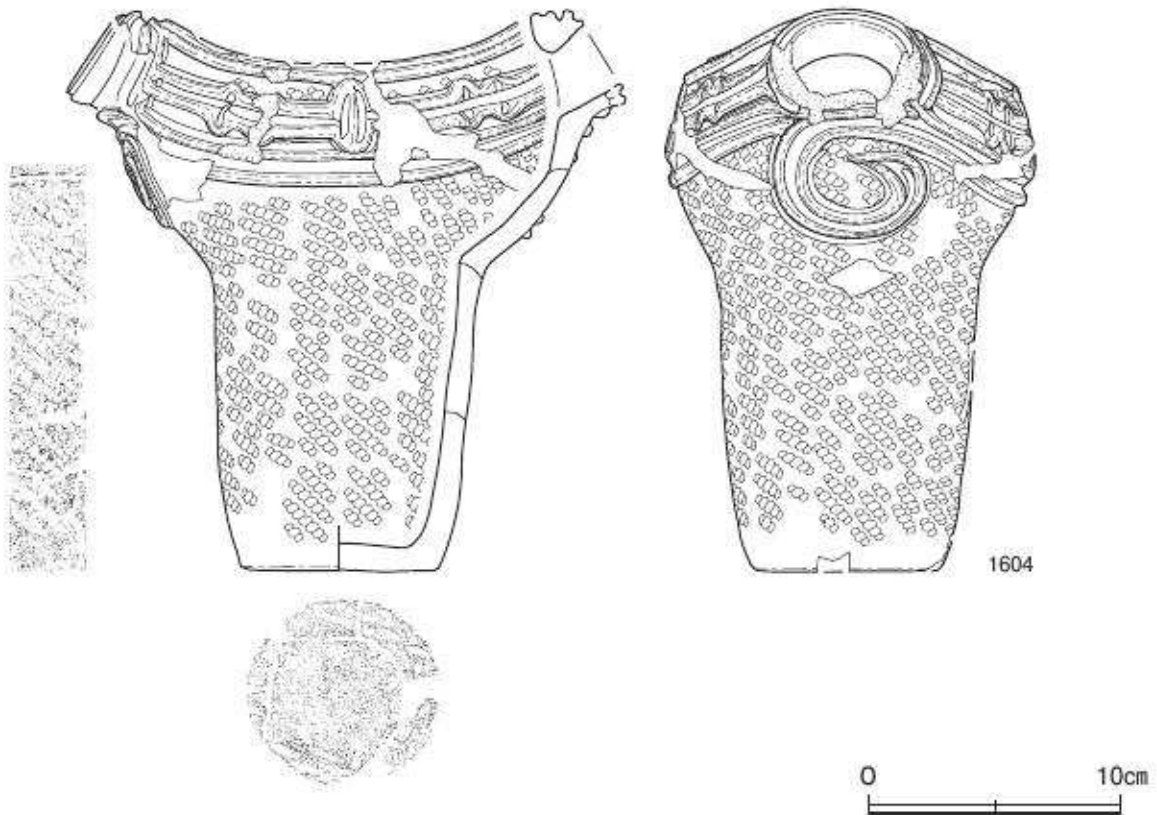
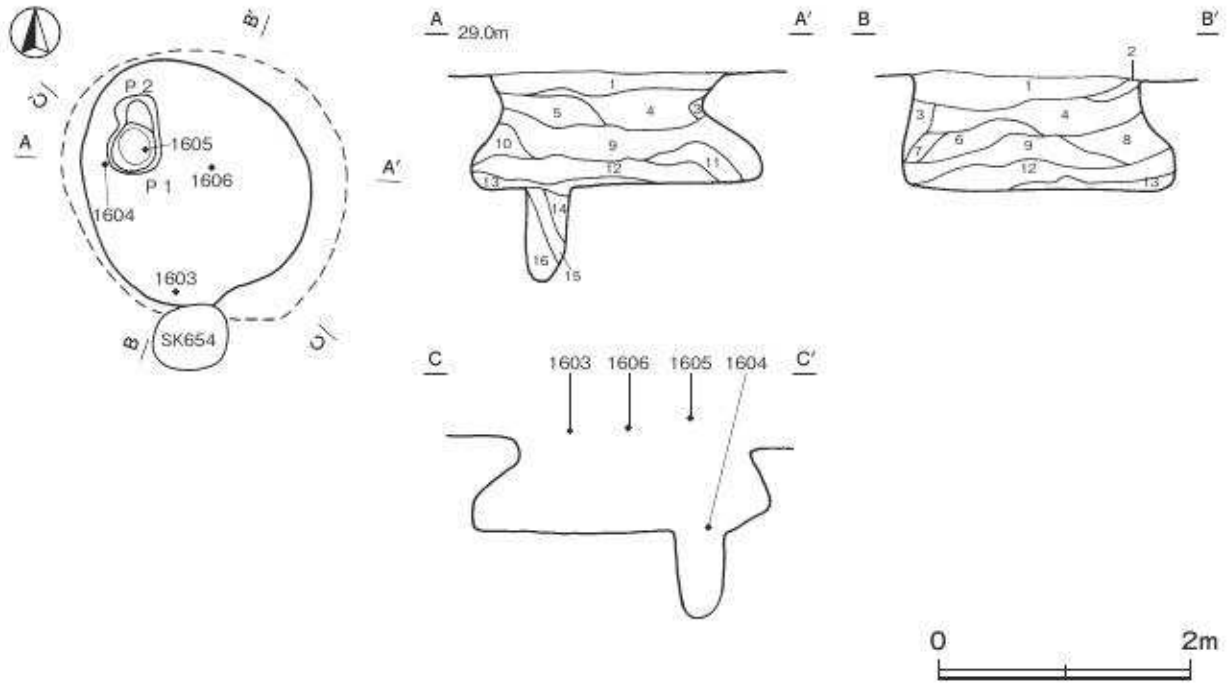
第 628 号土坑出土遺物観察表（第 548 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1600	縄文土器	深鉢	[19.9]	(15.5)	-	長石・石英・燧石	灰黄褐	普通	縁位の褐色文上に 2 条の背割れ線帯で口縁部区域区画内隆帯による波状文。胴部縦位の褐色文。	覆土中	10% PL154
1601	縄文土器	浅鉢	[35.0]	(12.0)	-	長石・石英・雲母・燧石	明赤褐	普通	胴部下半部磨き。内面稜。下半部ナデ。	覆土中	30% 保存者
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考	
DP112	土器片錘	4.5	4.0	1.3	29.8	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰褐	周縁部研磨。両端にキザミ目。	覆土中		

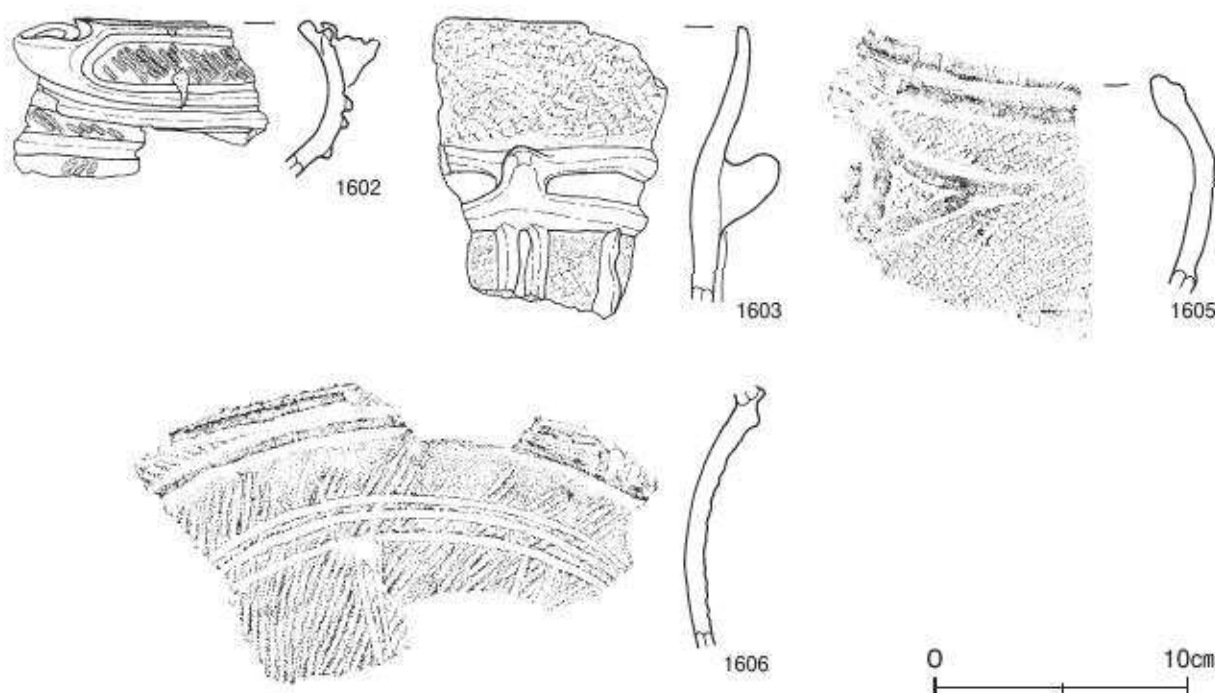
第 629 号土坑 (第 549・550 図 PL90)

位置 調査区西部の C 2 e9 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 654 号土坑に掘り込まれている。



第 549 図 第 629 号土坑・出土遺物実測図



第 550 図 第 629 号土坑出土遺物実測図

規模と形状 開口部は長径 1.97 m、短径 1.76 m の楕円形で、長径方向は N - 42° - W である。底面は長径 2.42 m、短径 2.11 m の楕円形で、平坦である。確認面からの深さは 95cm で、壁は内彎している。

ピット 2か所。P 1・P 2 は北西壁寄りに位置し、深さはそれぞれ 78cm・22cm である。P 1 は、形状から柱穴の可能性がある。P 2 は性格不明である。

覆土 13層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。第 14～16 層は P 1 の覆土である。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック、焼土粒子、炭化粒子少量	9	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
2	暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子、炭化粒子微量	10	極暗褐色	ローム粒子少量
3	褐色	ロームブロック少量	11	極暗褐色	ロームブロック少量
4	暗褐色	ロームブロック、焼土粒子少量、炭化粒子微量	12	極暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
5	暗褐色	ロームブロック、炭化粒子微量	13	褐色	ロームブロック中量
6	暗褐色	ロームブロック少量	14	黒褐色	ローム粒子少量
7	暗褐色	ロームブロック、炭化粒子少量	15	黒褐色	ロームブロック少量
8	暗褐色	ロームブロック、焼土粒子、炭化粒子微量	16	褐色	ロームブロック多量

遺物出土状況 縄文土器片 47 点（深鉢 42、双口深鉢 1、浅鉢 4）、石器 2 点（磨製石斧、磨石）、剥片 1 点（頁岩）が、覆土上層を中心にまばらに出土している。1604 はほぼ完形で底面から出土し、埋め戻す前に遺棄されたものと思われる。1603・1605・1606 は覆土上層から出土し、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第 629 号土坑出土遺物観察表（第 549・550 図）

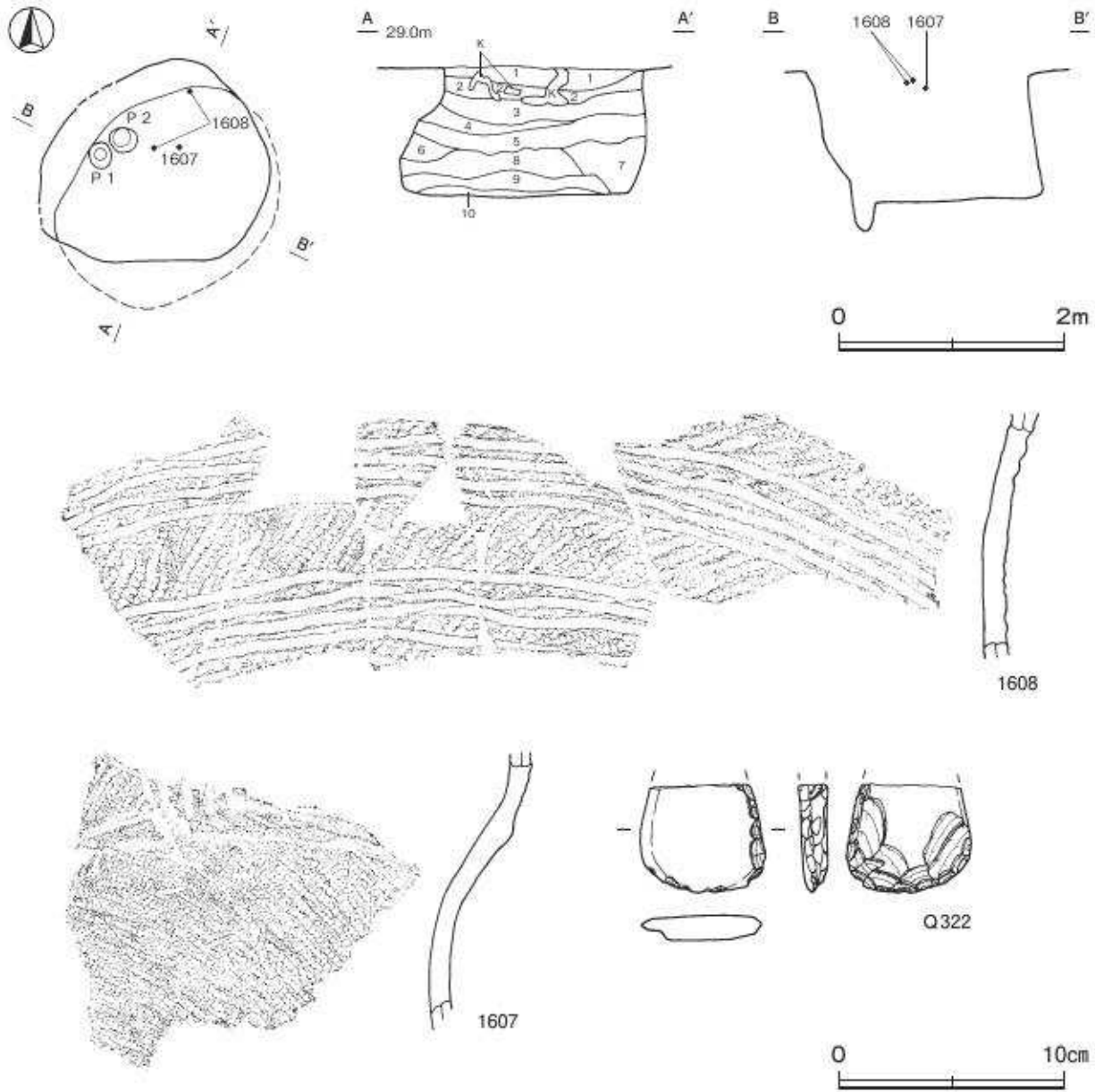
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1602	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	によい赤褐色	良好	突起部に沈線による渦巻文、口縁部単節縄文 RL (横) 上に沈線を伴う 2 条の隆帯による曲線文	覆土中	
1603	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子・赤色粒子・磁鉄	橙	普通	口縁部単節縄文 RL (縦・斜) 口縁下半部 2 条の隆帯状隆帯による区画文、区画接点揃み状突起、胴部単節縄文上に 2 条の隆帯垂下	覆土上層	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1604	縄文土器	双口深鉢	長径 14.7 短径 12.1	22.3	7.5	長石・石英・雲母・ 細砂	にぶい褐色	普通	口縁に沿う隆帯と沈線に伴う隆帯で口縁部区画 区内2条の隆帯による横走文・小波状文・木 の葉文。注口部に背割れ隆帯貼付。注口下沈線 に伴う背割れ隆帯による渦巻文。胴部太目の単 節網文LR(縦)旋文。底面網代裏	底面	90% PL154
1605	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	溝脊状隆帯で口縁部区画。区内単節網文LR (横)上に同隆帯による渦巻文・剣先文	覆土上層	
1606	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口縁部0段多条単節網文RL(横)上に沈線を 伴う隆帯による曲線文・同原体(縦)上に3本 の沈線による横走文で胴部と区画。胴部2本の 沈線による縦走文	覆土上層	PL154

第 630 号土坑 (第 551 図 PL90)

位置 調査区西部のC 2f9区、標高 29 mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 開口部は、径 1.96 ~ 2.02 mの不整形円形である。底面は長径 2.14 m、短径 1.76 mの楕円形で、平坦である。確認面からの深さは 117cmで、壁は北東部から南西部にかけて内彎して袋状を呈している。



第 551 図 第 630 号土坑・出土遺物実測図

ピット 2か所。P1・P2は北西壁寄りに位置し、深さはそれぞれ26cm、20cmである。P1・P2ともに性格不明である。

覆土 10層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説		6	暗褐色	ロームブロック少量	
1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	7	褐色	ロームブロック中量
2	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	8	褐色	ロームブロック多量
3	極暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	9	褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミスブロック少量
4	極暗褐色	ロームブロック少量	10	褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミスブロック微量
5	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量			

遺物出土状況 縄文土器片134点（深鉢）、石器1点（打製石斧）が、覆土上層を中心に散乱した状態で出土している。1607・1608は覆土上層から出土し、埋土と一緒に投棄されたと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第630号土坑出土遺物観察表（第551図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1607	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口縁部単節縄文LR（横）上に沈線に伴う隆帯による区麻文、胴部向胴体による（縦）捺文	覆土上層	
1608	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	単節縄文RL（縦）上に5本の沈線文が2段周回	覆土上層	PL155

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q322	打製石斧	(4.8)	5.6	1.2	(57.0)	砂岩	撥形、表裏面研磨、片側縁表裏を敲打、刃部は片面を敲打、基部欠損	覆土中	

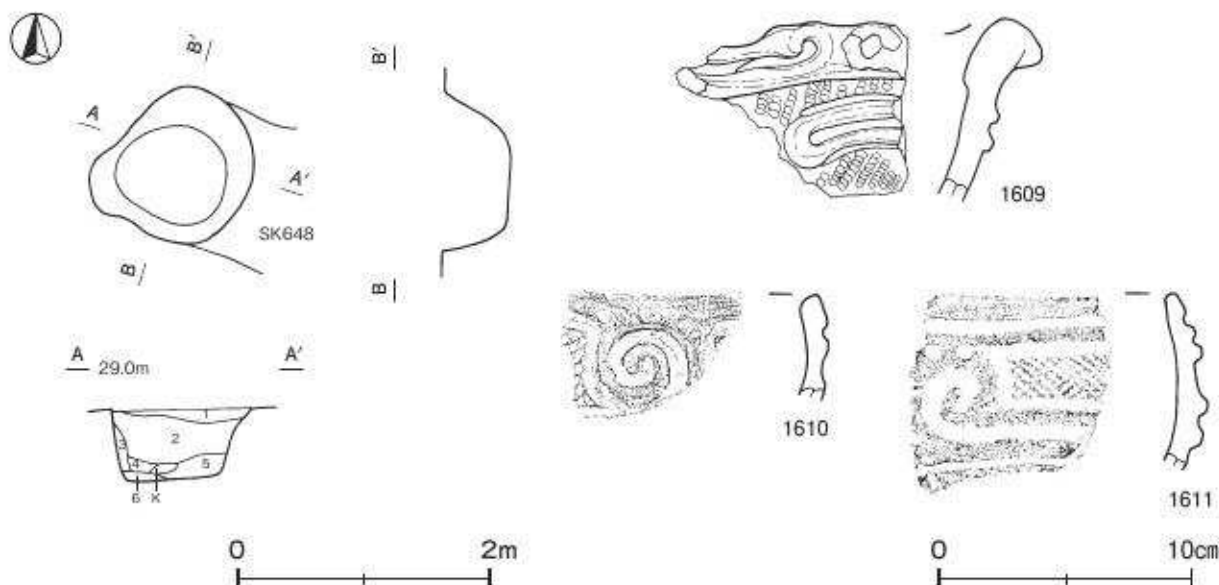
第631号土坑（第552図）

位置 調査区西部のC29区、標高29mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第648号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 径1.25～1.29mの不整形円形である。底面は平坦で、深さは55cmである。壁は外傾している。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックを含む層が堆積していることから、埋め戻されている。



第552図 第631号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量 | 6 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片 123 点（深鉢）、石器 1 点（敲石）が、覆土中から散乱した状態で出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。

第 631 号土坑出土遺物観察表（第 552 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1609	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	口唇部裏手状の沈線文、口縁部単節縄文 LRL（横）上に青割れ漆器による曲線文、口縁内面に段帯による渦巻文	覆土中	
1610	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部複節縄文 LRL（横）上に太沈線に伴う段帯による渦巻文	覆土中	
1611	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	褐色	普通	口縁部単節縄文 RL（横）上に太沈線に伴う段帯による区画文、区画部円形刺突文・渦巻文	覆土中	

第 634 号土坑（第 553 図）

位置 調査区北東部の C 4 e6 区、標高 29 m ほどの台地中央部に位置している。

規模と形状 北部が調査区域外へ伸びているため、北東・南西径は 1.30 m しか確認できなかった。北西・南東径は 1.09 m で、長径方向が N - 23° - E の楕円形と推定できる。底面はほぼ平坦である。深さは 33cm で、壁は外傾している。

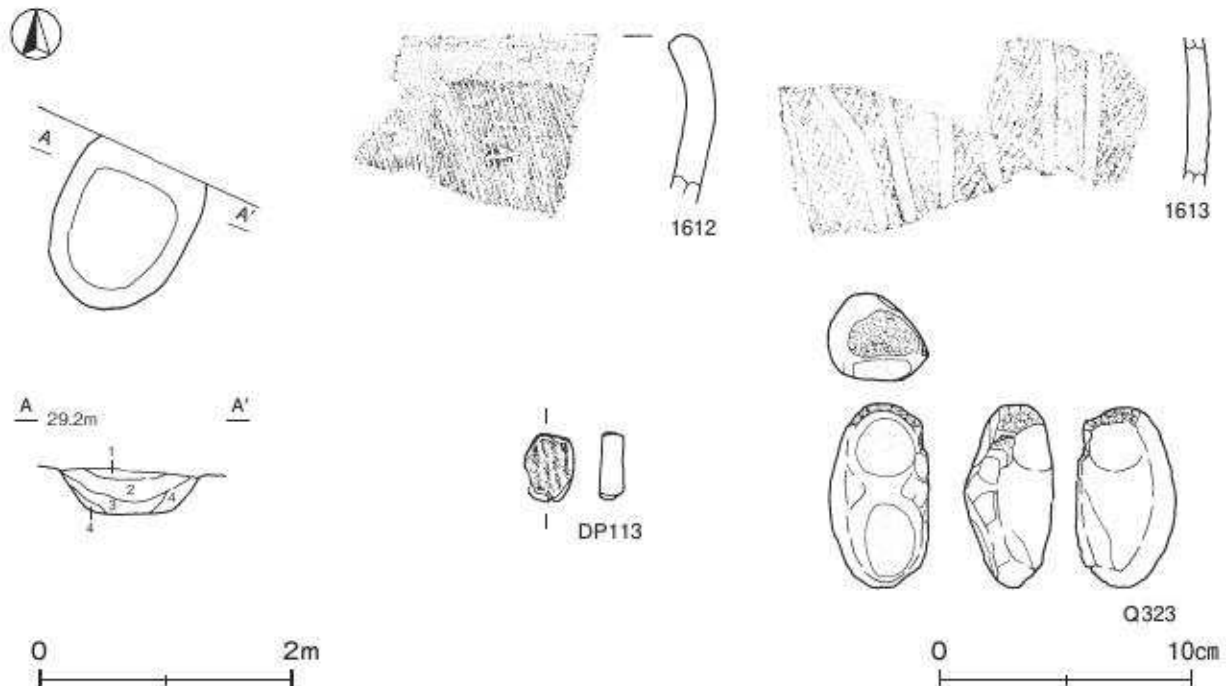
覆土 4 層に分層できる。ロームブロックを含む層が堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 縄文土器片 15 点（深鉢）、土製品 1 点（土器片錘）、石器 1 点（敲石）が、出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第 553 図 第 634 号土坑・出土遺物実測図

第 634 号土坑出土遺物観察表 (第 553 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1612	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁下衝刺状工具による条線文	覆土中	
1613	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	橙	普通	単筋縄文文(縦)上に太沈線による懸垂文・曲線文・沈線間磨消	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP113	土器片鉢	27	(2.0)	0.9	(6.2)	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい橙	周縁部丁寧な研磨 両端にキザミ目 一部欠損	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q323	敲石	7.2	3.9	3.5	129.5	砂岩	表裏面研磨 上端部に微細な敲打痕 磨石兼用	覆土中	

第 635 号土坑 (第 554 図 PL91)

位置 調査区北東部の C 4e7 区、標高 29 m ほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第 661 号土坑を掘り込み、第 29 号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、東西径 1.50 m で、南北径は 1.43 m しか確認できなかったが、円形と推定できる。底面は平坦で、深さは 72cm である。壁はほぼ直立している。

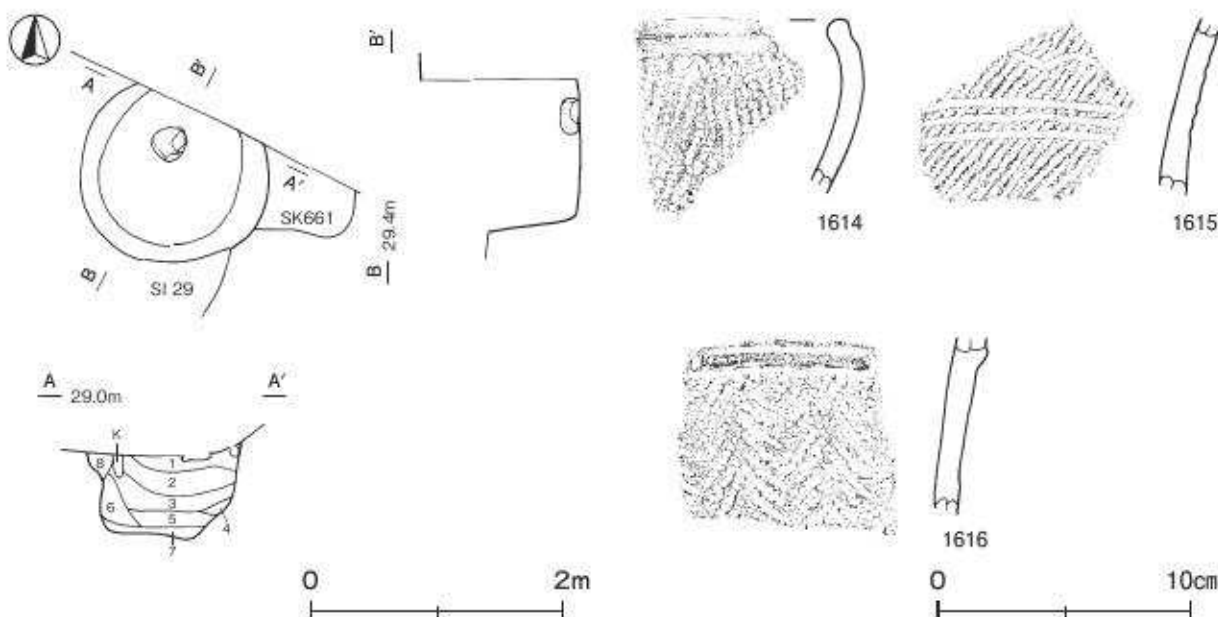
覆土 8 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 8 褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 縄文土器片 129 点 (深鉢 127, 浅鉢 2)、石器 1 点 (磨製石斧)、礫 1 点 (花崗岩) が、覆土中から散乱した状態で出土している。花崗岩の礫は、径 30cm ほど、重さ 22.7kg で、中央部の底面から出土しており、廃絶時に遺棄されたものと考えられる。土器製作の際に粉砕して、粘土の混和材とした可能性がある。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第 554 図 第 635 号土坑・出土遺物実測図

第 635 号土坑出土遺物観察表 (第 554 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1614	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁に沿って太沈線周囲 単節縄文 RL (斜) 旋文	覆土中	
1615	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	褐	普通	0段多条単節縄文 RL (縦) 上に3本の沈線による横旋文・1本の沈線による波状文	覆土中	
1616	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	褐	普通	断面半円状の唇帯により口縁部と胴部を区画 側部単節縄文 RL と LR による (縦) の羽状構成	覆土中	

第 640 号土坑 (第 555 図 PL91)

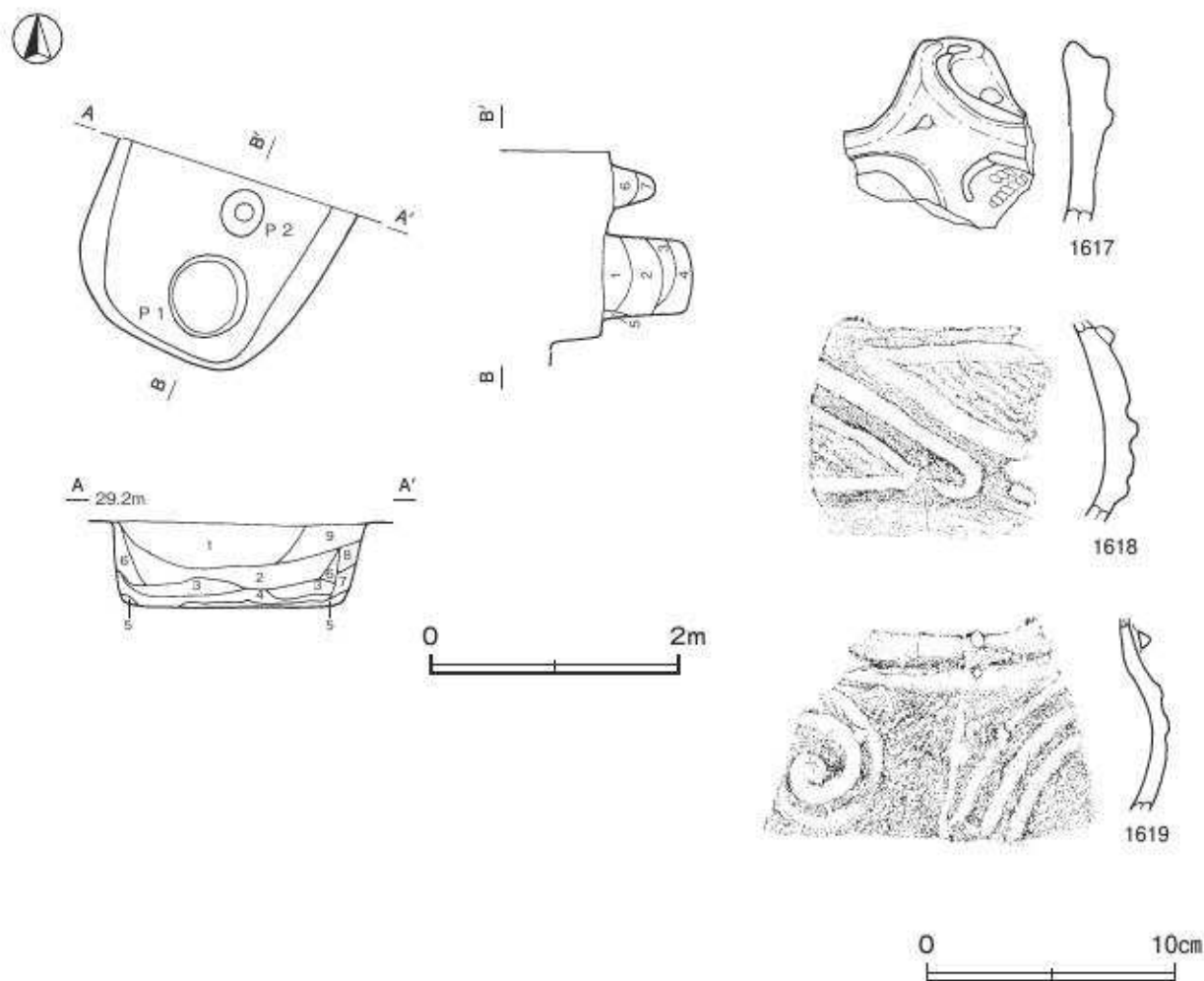
位置 調査区北東部の C 4 d5 区、標高 29 m ほどの台地中央部に位置している。

規模と形状 北部が調査区域外へ伸びているため、東西軸は 1.99 m で、南北軸は 1.50 m しか確認できなかったが、長軸方向が N - 22° - E の隅丸方形と推定できる。底面は平坦で、深さは 68 cm である。壁はほぼ直立している。

ピット 2か所。P 1 は南壁寄り、P 2 は中央部に位置し、深さはそれぞれ 73 cm・30 cm である。P 1 は位置や形状から、補助的な貯蔵施設の可能性がある。P 2 は位置や形状から、柱穴の可能性がある。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 7 褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | | |



第 555 図 第 640 号土坑・出土遺物実測図

覆土 9層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・炭化物微量	6	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量・炭化粒子微量	7	明褐色	ロームブロック多量
3	明褐色	ロームブロック中量	8	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
4	褐色	ロームブロック少量	9	暗褐色	ロームブロック少量
5	明褐色	ロームブロック中量・炭化粒子微量			

遺物出土状況 縄文土器片 149 点（深鉢 140、浅鉢 8、有孔鈎付土器 1）が、覆土中から散乱した状態で出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第 640 号土坑出土遺物観察表（第 555 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1617	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	橙	普通	波頂部に渦巻文・隆帯による区画文・区画内単純渦文 RL（縦）筋文	覆土中	
1618	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	橙	普通	無筋渦文及（横）上に太沈線を伴う隆帯による区画文・隆帯上に沈線による筋手文	覆土中	
1619	縄文土器	有孔鈎付土器	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	単純渦文 RL（縦）上に前面三角形の隆帯鈎付隆帯に穿孔・太沈線を伴う隆帯による渦巻文・曲線文	覆土中	

第 641 号土坑（第 556 図 PL91）

位置 調査区西部の C 2d4 区、標高 28 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 398 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 北部が攪乱を受けているため、長径は 1.75 m しか確認できなかった。短径 1.52 m で、長径方向が N-9°-W の楕円形と推定できる。底面は平坦である。深さは 42 cm で、壁は外傾している。

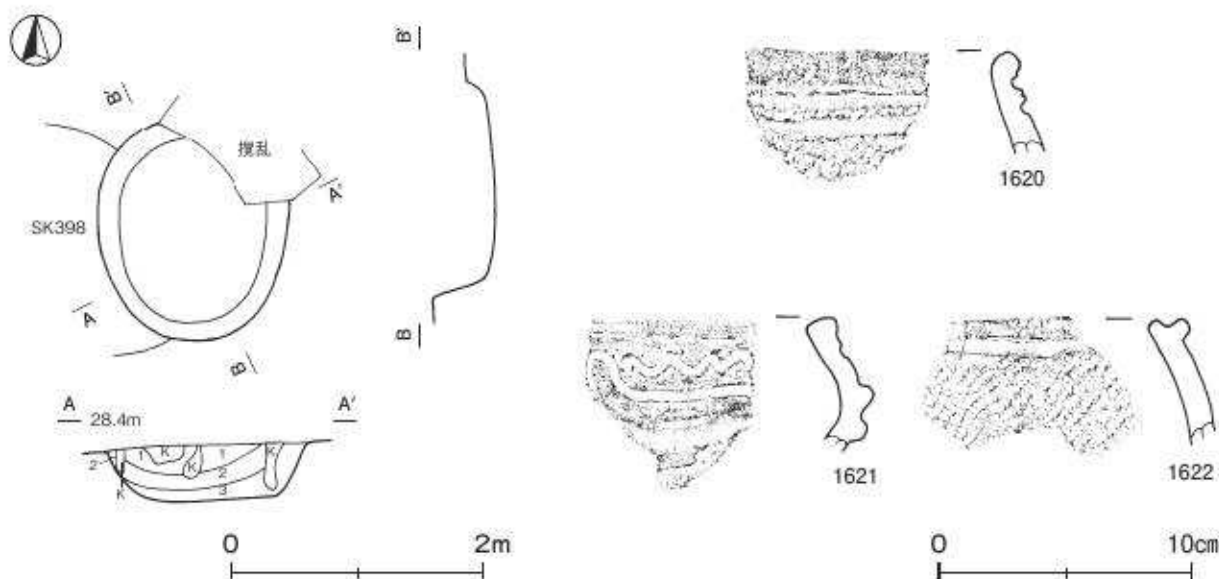
覆土 3層に分層できる。暗褐色土がレンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	3	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	炭化粒子少量			

遺物出土状況 縄文土器片 6 点（深鉢）が、覆土中からまばらに出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第 556 図 第 641 号土坑・出土遺物実測図

第 641 号土坑出土遺物観察表 (第 556 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1620	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	口縁に沿って隆帯貼付。隆帯下単面縄文LR(縦)上に2本の太沈線一帯	覆土中	
1621	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にがい赤褐色	普通	口縁に沿う隆帯と蒲鉾状隆帯による区画文区画内縦行沈線文	覆土中	
1622	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にがい赤褐色	普通	口唇部に沈線文。口縁に沿って太沈線を伴う隆帯貼付。単面縄文LR(横)施文	覆土中	

第 642 号土坑 (第 557 図 PL92)

位置 調査区西部の C 2 c5 区、標高 28 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 7・32 号堅穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は、長径 1.59 m、短径 0.95 m の不定形である。底面は径 1.92 ~ 2.06 m のほぼ円形で、平坦である。確認面からの深さは 90 cm で、壁は内彎して袋状を呈している。

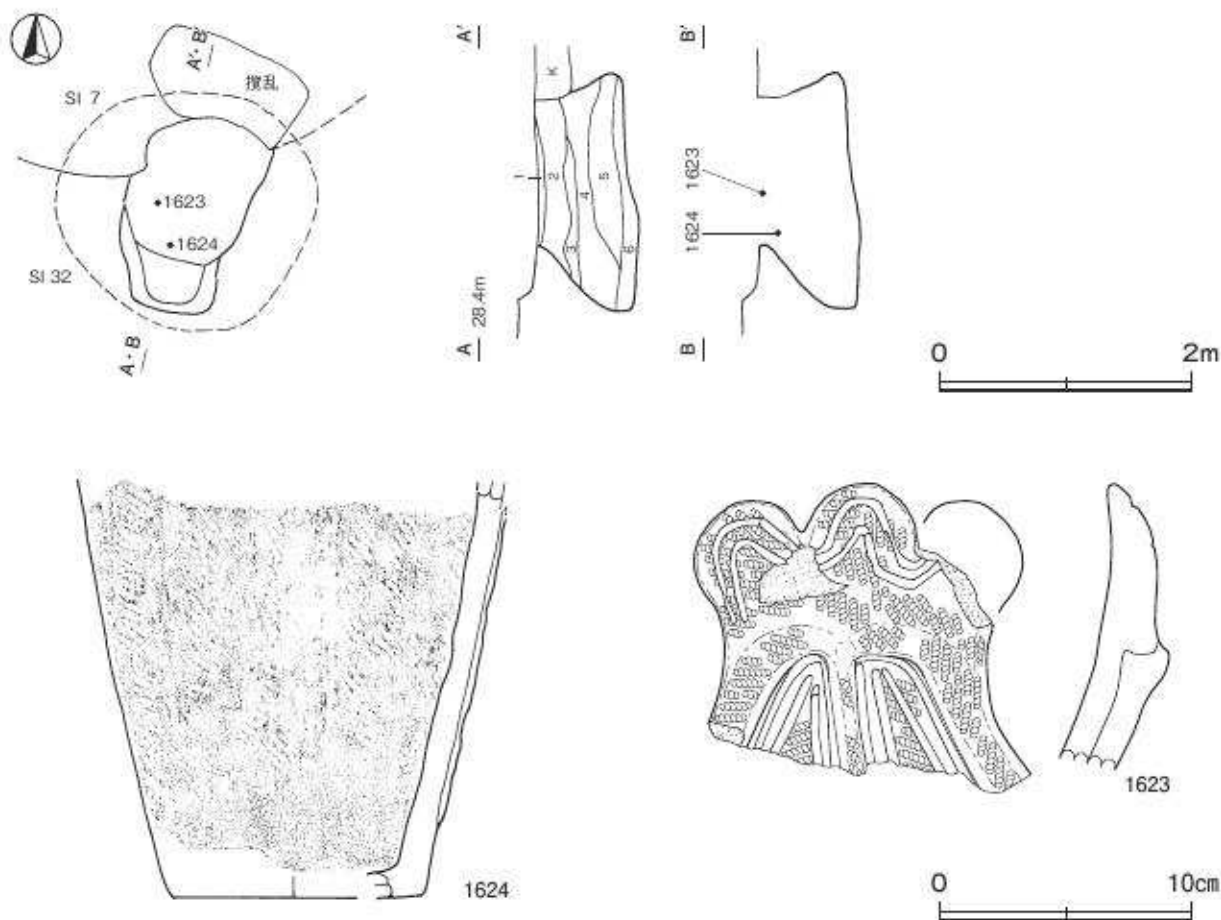
覆土 6 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 明褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子少量 | 6 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片 13 点 (深鉢 11、浅鉢 2)、石器 2 点 (磨石、敲石) が、覆土上層を中心にまばらに出土している。1623・1624 は覆土上層から出土し、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第 557 図 第 642 号土坑・出土遺物実測図

第 642 号土坑出土遺物観察表 (第 557 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1623	縄文土器	深鉢	-	(12.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	把手肩部から垂下する隆帯と口縁に沿う平頭刺文 RL 施文の隆帯による区画文 隆帯に沿って 2本の沈線文	覆土上層	PL155
1624	縄文土器	深鉢	-	(16.6)	(10.0)	長石・石英・輝石	明赤褐色	普通	無節縄文 L (縦) を竊状に施文 下端部指ナデ	覆土上層	30%

第 643 号土坑 (第 558 ~ 560 図 PL92)

位置 調査区西部の C 2 d5 区, 標高 28 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 697 号土坑を掘り込み, 第 9・32・33 号竪穴建物に掘り込まれている。

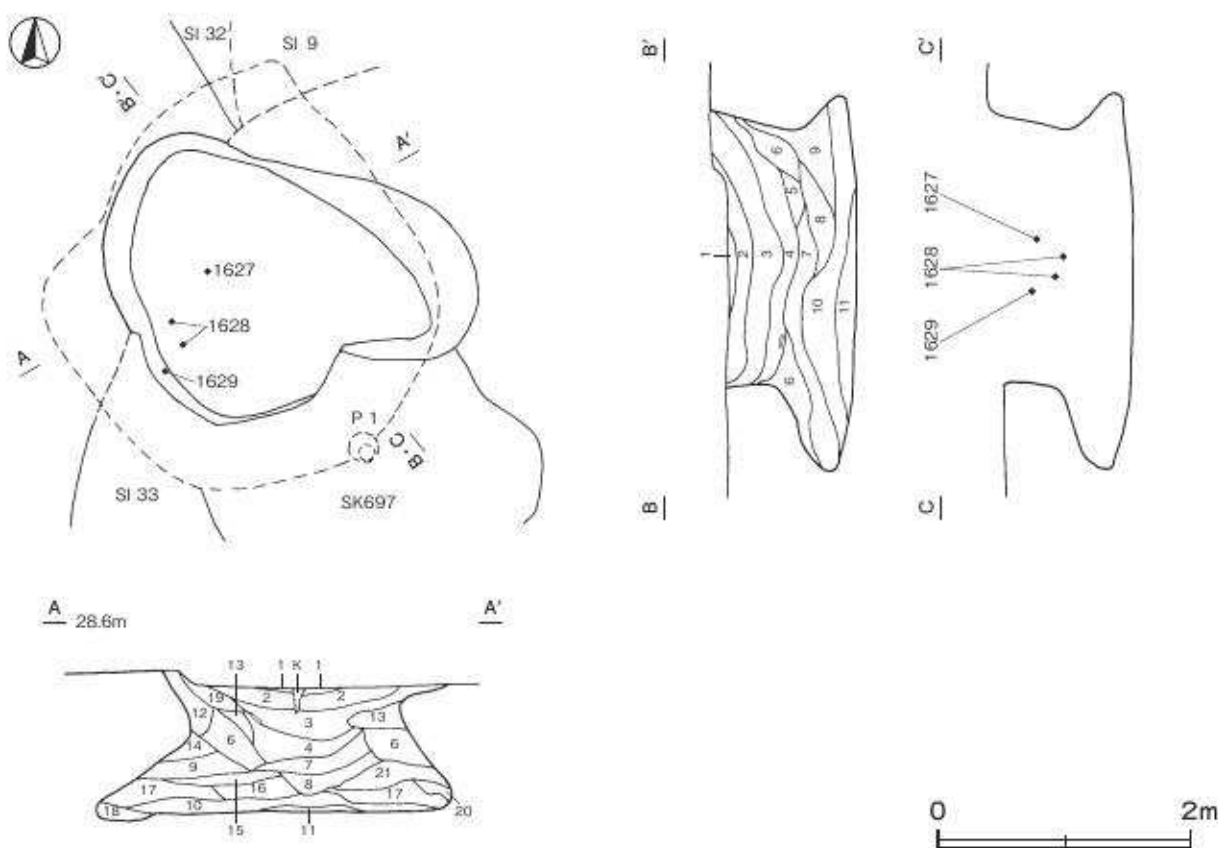
規模と形状 東部の崩落により, 開口部は長径 3.00 m, 短径 2.00 m の不定形である。底面は長径 3.42 m, 短径 3.14 m の不整楕円形で, ほぼ平坦である。確認面からの深さは 112 cm で, 壁は中位まで内彎して袋状を呈し, 上位はほぼ直立している。

ピット 南東壁際に位置し, 深さは 28 cm である。性格は不明である。

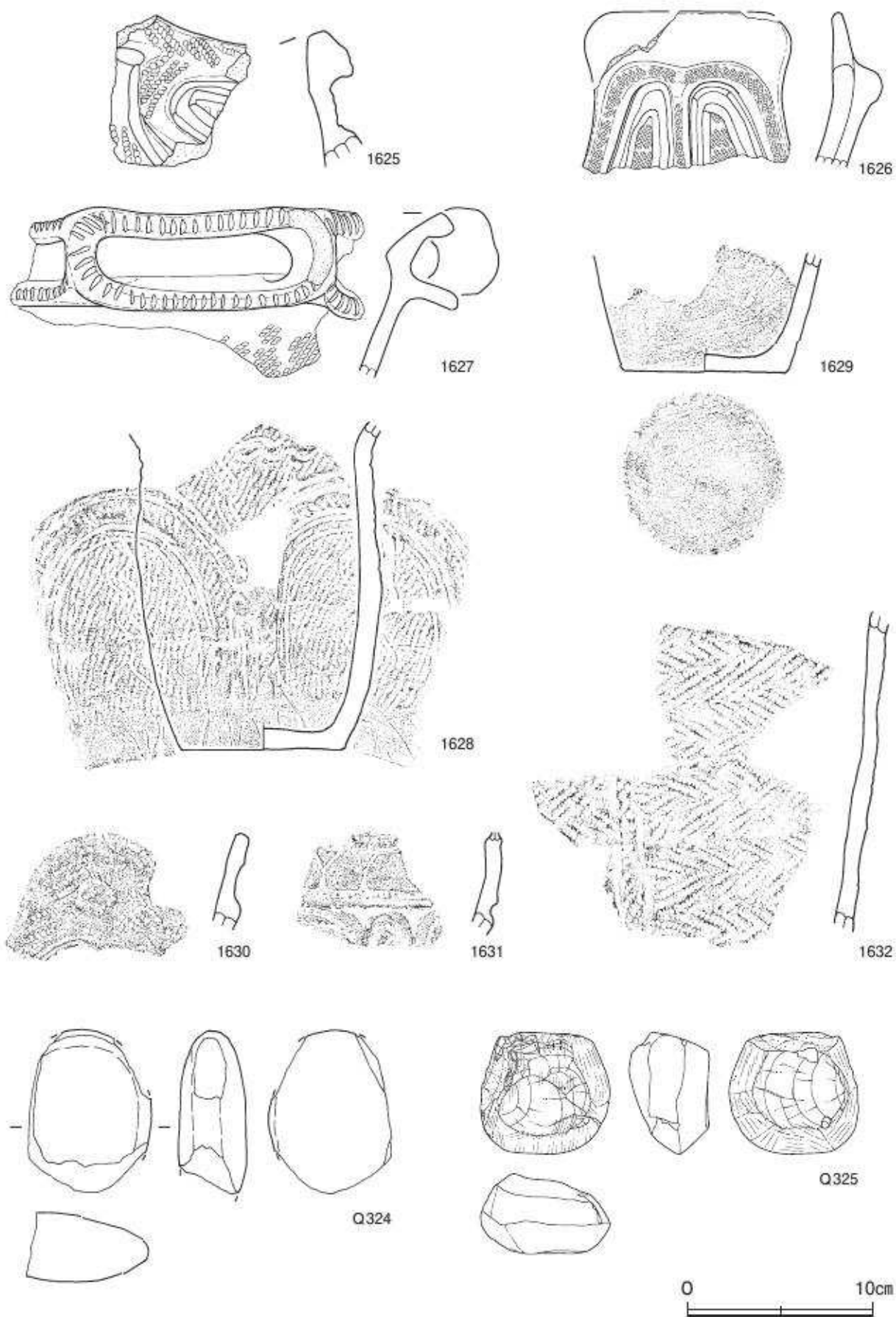
覆土 21 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから, 埋め戻されている。

土層解説

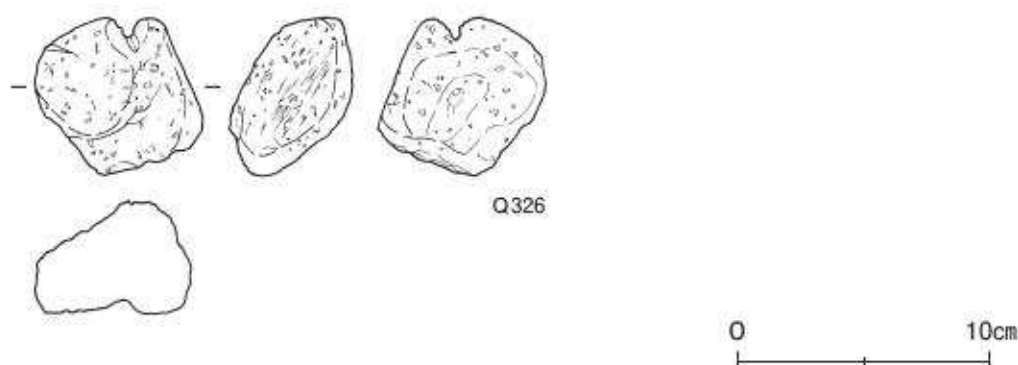
1 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	8 にぶい褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量	10 褐色	ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量	11 褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	12 褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量
6 にぶい褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化物微量
7 暗褐色	ロームブロック中量	14 褐色	ロームブロック多量, 炭化粒子微量



第 558 図 第 643 号土坑実測図



第 559 图 第 643 号土坑出土遗物实测图(1)



第 560 図 第 643 号土坑出土遺物実測図 (2)

15	褐色	ロームブロック多量	19	灰褐色	ロームブロック・焼土粒子中量, 炭化粒子少量
16	暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子微量	20	にぶい黄褐色	ロームブロック多量
17	褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量	21	黄褐色	ロームブロック多量
18	褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量			

遺物出土状況 縄文土器片 182 点 (深鉢), 石器 6 点 (磨製石斧 1, 磨石 3, 敲砥石 1, 浮子 1) が, 覆土中層を中心に散乱した状態で出土している。1627 ~ 1629 は覆土中層から出土し, 埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から, 貯蔵穴と考えられる。時期は, 中期中葉と考えられる。

第 643 号土坑出土遺物観察表 (第 559・560 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1625	縄文土器	深鉢	-	(8.1)	-	長石・石英・雲母・磁鉄	黒褐色	普通	単節縄文 RL (縦・横) 施文の厚みのある隆帯による区画文。隆帯に沿って洗線文	覆土中	
1626	縄文土器	深鉢	-	(8.7)	-	長石・石英・雲母・磁鉄	灰褐色	普通	口縁に沿って断面溝状の単節縄文 RL 施文の隆帯貼付。波面部から垂下する隆帯と口縁に沿う隆帯による区画文。区画内隆帯に沿って 2 本の洗線文・単節縄文充填	覆土中	
1627	縄文土器	深鉢	-	(9.2)	-	長石・石英・雲母・磁鉄	にぶい赤褐色	普通	口縁に沿ってキザミ目を伴う断面隆帯と胴部を区画する洗線隆帯による格内形区画文。胴部単節縄文 RL (縦) 施文	覆土中層	10% PL154
1628	縄文土器	深鉢	-	(17.1)	[8.8]	長石・石英・雲母・磁鉄	橙	普通	単節縄文 RL (縦) 上に断面溝状で縄文施文の隆帯を逆 Y 字状に貼付。隆帯に沿って半截竹管文。ほぼ等間隔に半截竹管による懸垂波状文	覆土中層	40% PL154
1629	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	8.8	長石・石英・雲母・磁鉄	明赤褐色	普通	胴部単節縄文 RL (縦) 施文。下部部指ナデ	覆土中層	10%
1630	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口縁に沿って単節縄文 RL (縦・横) 施文。波面部中央部に指頭による円形の凹み	覆土中	
1631	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	断面三角形の隆起線による口縁部区画。区画内有筋洗線による Y 字文。胴部連続爪形文を伴う隆起線による風状文	覆土中	
1632	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	単節縄文 RL と LR による扇形凹の羽状隆帯。単節縄文 RL (縦) 施文の隆帯直下	覆土中	PL154

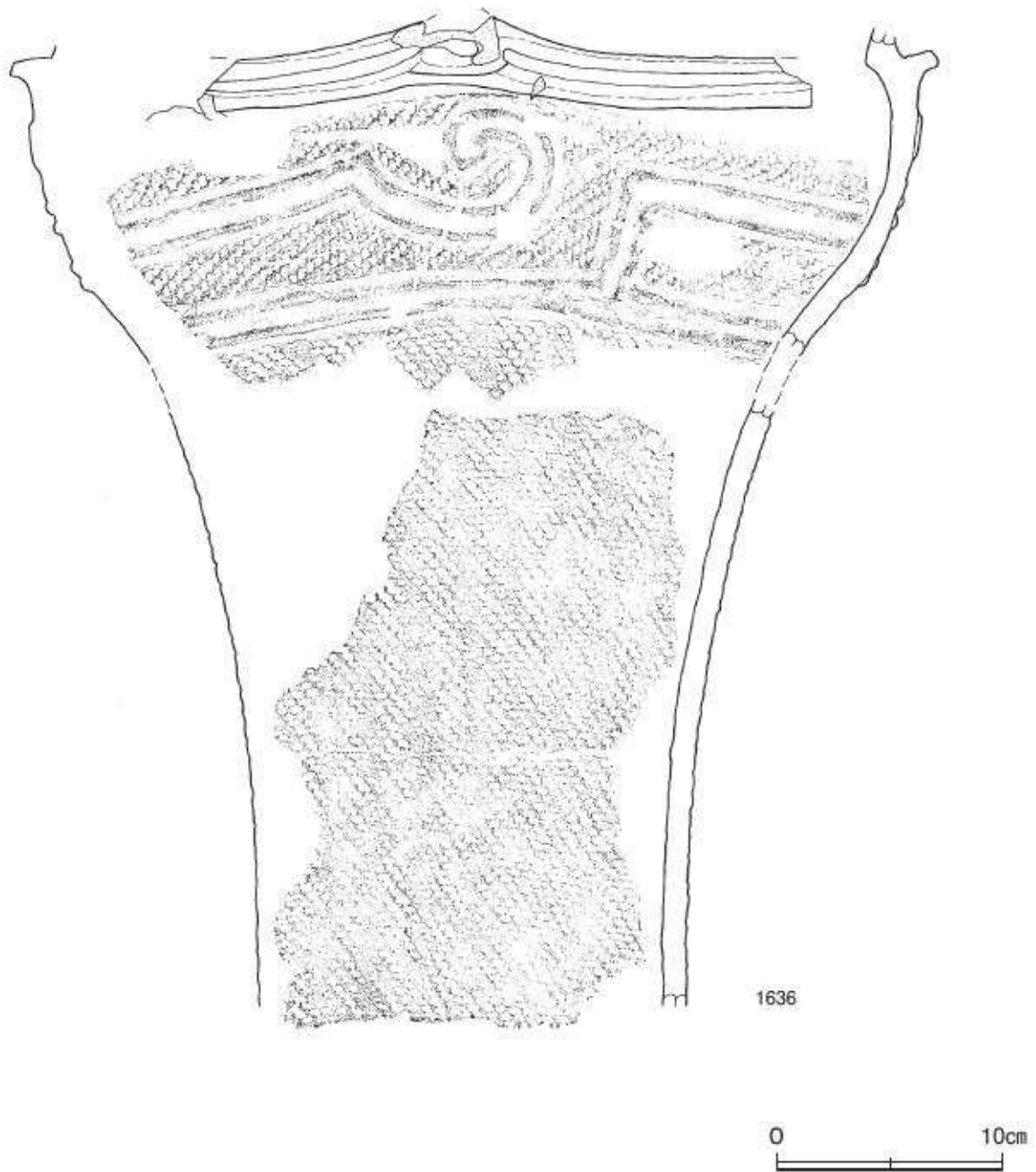
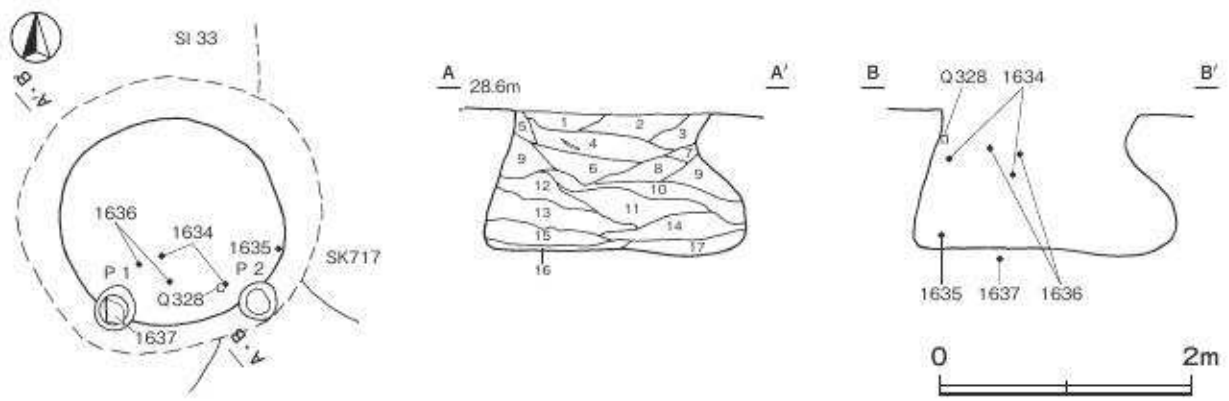
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q324	磨石	(8.2)	(6.7)	3.8	(307.3)	砂岩	全面入念な磨り調整。全面磨り面。下部欠損	覆土中	
Q325	敲砥石	6.6	7.0	4.3	258.7	チャート	円縁の縁縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	覆土中	PL173
Q326	浮子	6.2	6.6	4.8	31.2	軽石	上部部に穿孔痕。両面中央部に凹み。縁縁部磨り調整	覆土中	PL181

第 644 号土坑 (第 561・562 図 PL92)

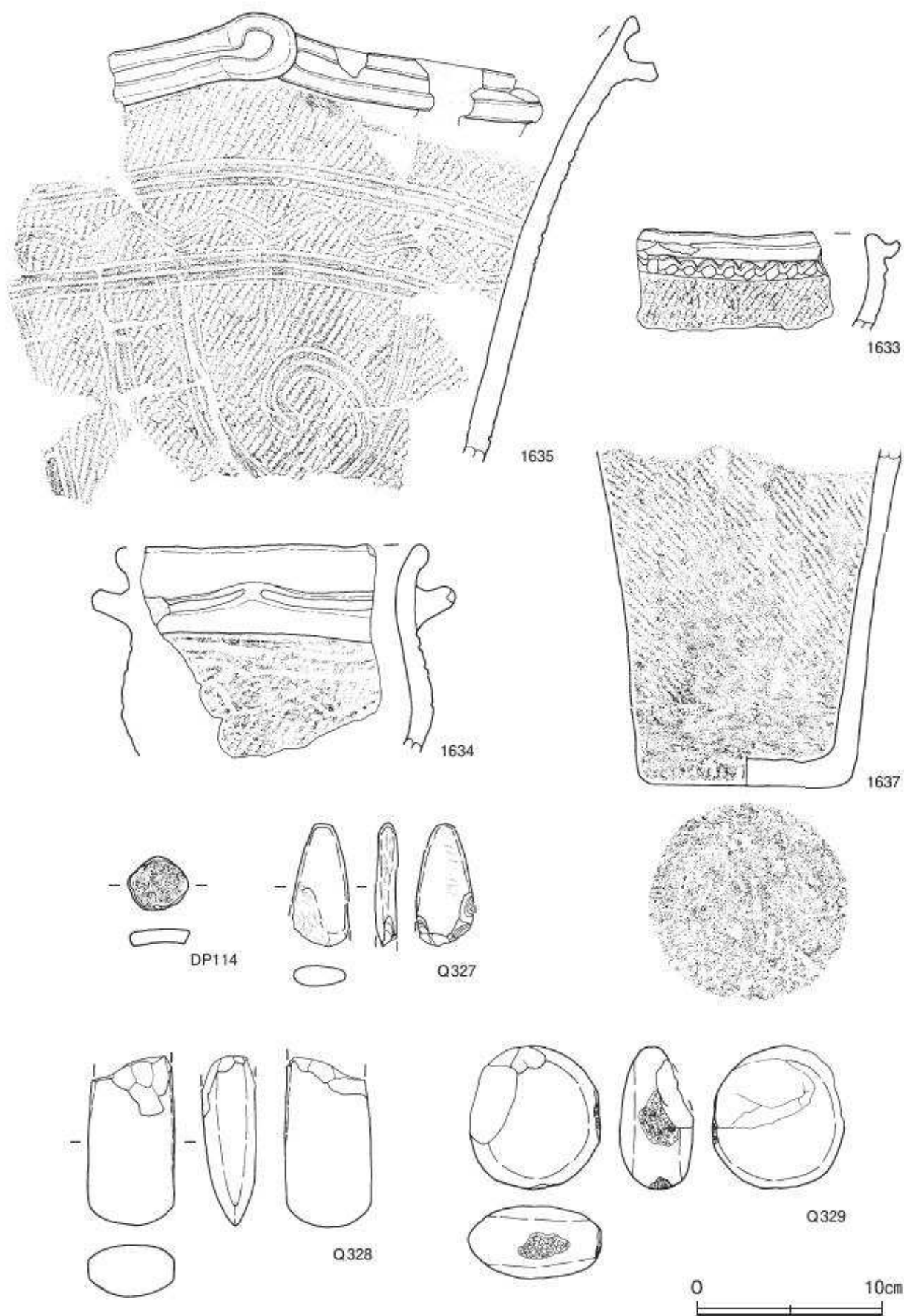
位置 調査区西部の C 2 e6 区, 標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 33 号竪穴建物跡, 第 717 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部は径 1.67 ~ 1.79 m のほぼ円形である。底面は径 2.17 ~ 2.38 m のほぼ円形で, 平坦である。確認面からの深さは 110cm で, 壁は内彎して袋状を呈している。



第 561 图 第 644 号土坑·出土遗物实测图



第 562 図 第 644 号土坑出土遺物実測図

ピット 2か所。P1は南壁寄り、P2は南東壁際に位置し、深さはそれぞれ30cm・26cmである。P1・P2ともに性格不明である。

覆土 17層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化物微量	10 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	11 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	12 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	13 におい青褐色	ロームブロック中量、炭化物微量
5 灰黄褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	14 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
6 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	15 灰黄褐色	ロームブロック多量
7 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	16 におい青褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
8 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	17 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
9 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量		

遺物出土状況 縄文土器片628点（深鉢626、浅鉢2）、土製品1点（土器片円盤）、石器3点（磨製石斧2、敲石1）、剥片2点（チャート）が、覆土全体から散乱した状態で出土している。1637はP1から横位で出土し、埋め戻す前に遺棄されたものと思われる。1634は覆土中層から、1636は覆土上層からそれぞれ出土し、離れた位置のものが接合していることから、破碎したものを投棄したと思われる。1635は覆土下層から、Q328は覆土上層からそれぞれ出土し、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第644号土坑出土遺物観察表（第561・562図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1633	縄文土器	深鉢	—	—	—	長石・石英	におい橙	普通	口唇部太沈線文一端、口縁に沿って隆帯状付隆帯下交互刺突文、結節文を伴う単節縄文RL（縦）施文	覆土中	
1634	縄文土器	深鉢	[16.0]	[11.5]	—	長石・石英・赤色粒子	におい橙	普通	口縁下部突起を有する彫状の首附れ隆帯、隆帯下単節縄文RL（縦）上に3本の沈線と蛇行沈線同位	覆土中層	
1635	縄文土器	深鉢	—	[24.1]	—	長石・石英・雲母	暗褐	普通	流頂部隆帯による渦巻文、口唇部深い沈線文、単節縄文RL（縦）上に半截片管による横走文、連続山形文、胴部同縄文上に半截片管による懸垂文・嵌手文	覆土下層	10% PL155
1636	縄文土器	深鉢	—	[43.4]	—	長石・石英・雲母	におい橙	普通	間に沈線文を伴う之条の隆帯で口縁部区画、区画内同隆帯による渦巻文・クランク文、胴部単節縄文LR（縦）施文	覆土上層	20% PL155
1637	縄文土器	深鉢	—	[18.2]	10.7	長石・石英・雲母・赤色粒子・磁鉄	におい橙	普通	単節縄文LR（縦）施文、下縁部指ナゲ、底面網代直	P1覆土上層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP118	土器片円盤	2.9	3.2	0.8	9.5	長石・石英・雲母・黒色粒子	におい橙	周縁部粗雑に研磨	覆土中	土器片録の未成品。

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q327	磨製石斧	(6.7)	(3.1)	1.3	(36.8)	変質ドレイイト	小型 周縁部に浅 刃部欠損	覆土中	PL169
Q328	磨製石斧	(9.2)	4.7	2.9	(203.1)	緑色凝灰岩	定角式 全面研磨 基部欠損 刃部ハマグリ刃	覆土上層	PL167
Q329	敲石	7.8	7.1	4.0	(254.7)	砂岩	全面に研磨痕 下縁・周縁に部分的に微細な敲打痕 磨石兼用	覆土中	

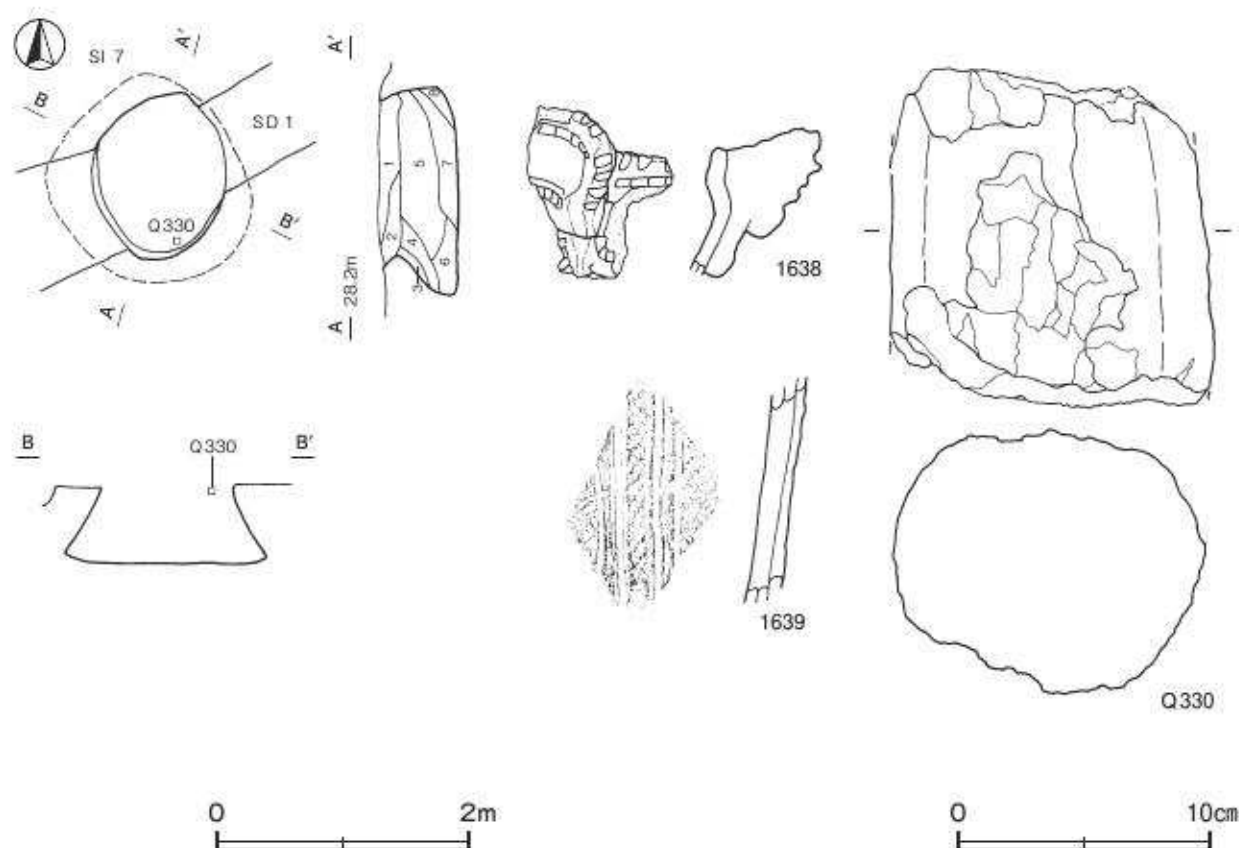
第645号土坑（第563図 PL93）

位置 調査区西部のC2b5区、標高28mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第7号竪穴建物、第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径1.34m、短径1.07mの楕円形で、長径方向はN-15°-Eである。底面は長径1.64m、短径1.52mの不整円形で、平坦である。確認面からの深さは63cmで、壁は内彎して袋状を呈している。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。



第 563 図 第 645 号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化物微量 | 5 褐色 | ロームブロック多量, 炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 縄文土器片 8 点 (深鉢), 石製品 1 点 (石棒), 剥片 1 点 (瑪瑙) が, 覆土中からまばらに出土している。

所見 規模と形状から, 貯蔵穴と考えられる。時期は, 出土土器から中期前葉と考えられる。

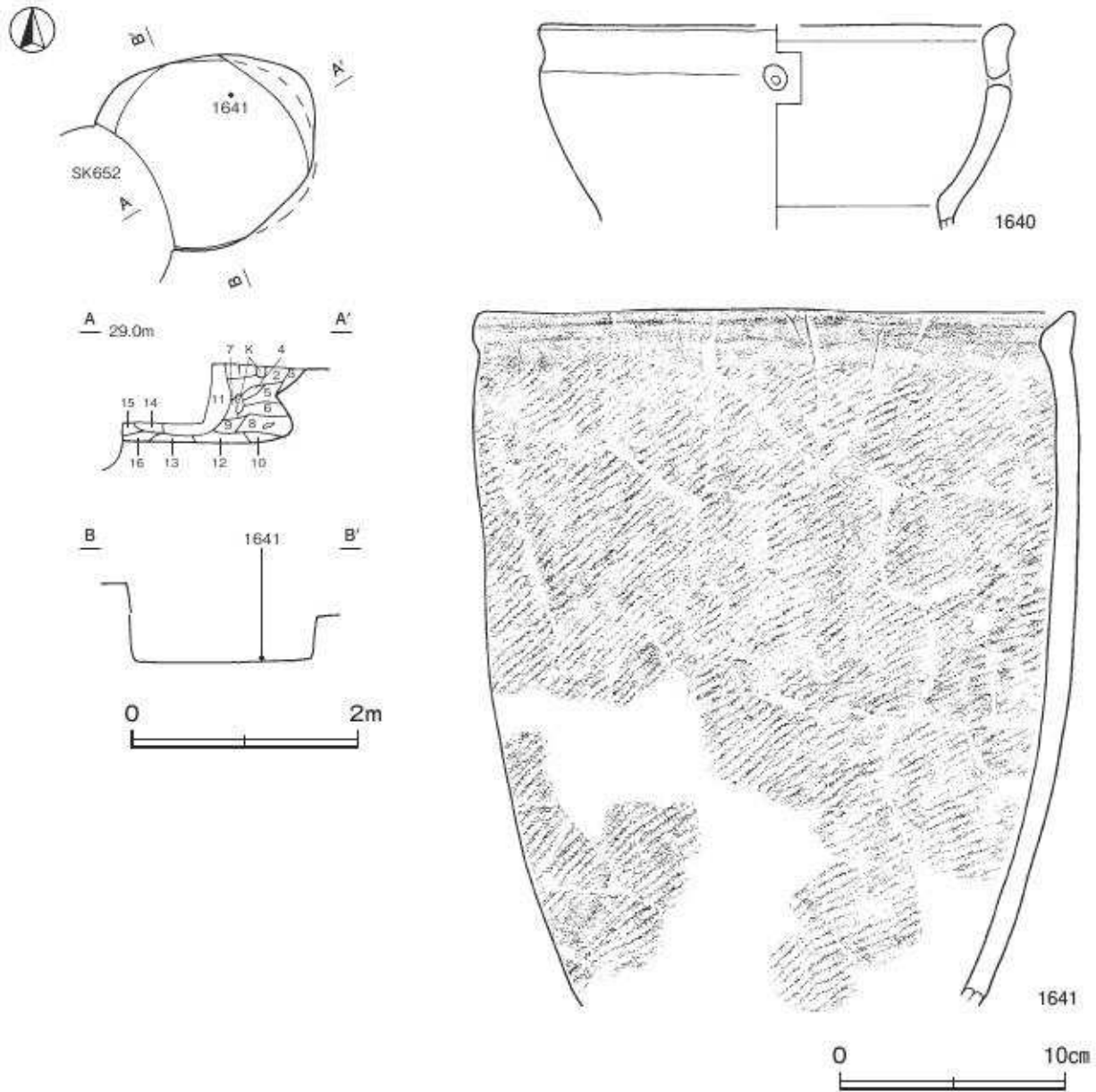
第 645 号土坑出土遺物観察表 (第 563 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1638	縄文土器	深鉢	-	(6.9)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	キザミ目をもつ隆帯による層状把手。口縁に沿って有節沈線文を伴う隆起線陪付。内面に有節沈線文。	覆土中	
1639	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい橙	普通	平節縄文 RL (縦) 上に縄文隆文の隆帯垂下隆帯に沿って並行沈線文。沈線間磨消。	覆土中	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
Q330	石棒	(135)	12.9	10.6	(2552)	花崗岩	全面に研磨痕。表面・側面の一部に凹み痕。上・下端部欠損。			覆土上層	破砕が石に転用。

第 647 号土坑 (第 564 図 PL89・93)

位置 調査区西部の C 2h9 区, 標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 652 号土坑に掘り込まれている。



第 564 図 第 647 号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 開口部は長径 1.80 m、短径 1.60 m の楕円形で、長径方向は N - 60° - E である。底面は径 1.68 ~ 1.76 m のほぼ円形で、平坦である。確認面からの深さは 66cm で、北東壁は中位まで内彎して袋状を呈し、上位は外傾している。

覆土 16 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------|-----------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量 |
| 3 灰黄褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック・炭化物中量 |
| 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 13 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子少量 | 14 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 15 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |
| 8 にぶい黄褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 16 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片 43 点（深鉢）、石器 1 点（磨製石斧）が、覆土中からまばらに出土している。1641 は底面から出土し、埋め戻す前に遺棄されたか投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第 647 号土坑出土遺物観察表（第 564 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1640	縄文土器	深鉢	[20.6]	(9.1)	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口縁に沿って指頭による凹み、頸部並行沈線文外・内面横方向のナデ、補修孔	覆土中	10%
1641	縄文土器	深鉢	26.5	(30.7)	-	長石・石英・赤色粘土	赤褐色	普通	口縁に沿って隆帯附付、隆帯下指頭によるナデ、全面に0段多条単節縄文RL(縦)施文	底面	50% PL155

第 650 号土坑（第 565・566 図）

位置 調査区西部の C 2 e8 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 352 号土坑を掘り込み、第 651・659 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径 1.94 m、短径 1.41 m の不整楕円形で、長径方向は N-57°-E である。底面は長径 2.28 m、短径 2.02 m の楕円形で、平坦である。確認面からの深さは 103 cm で、壁は中位まで内彎して袋状を呈し、上位はほぼ直立している。

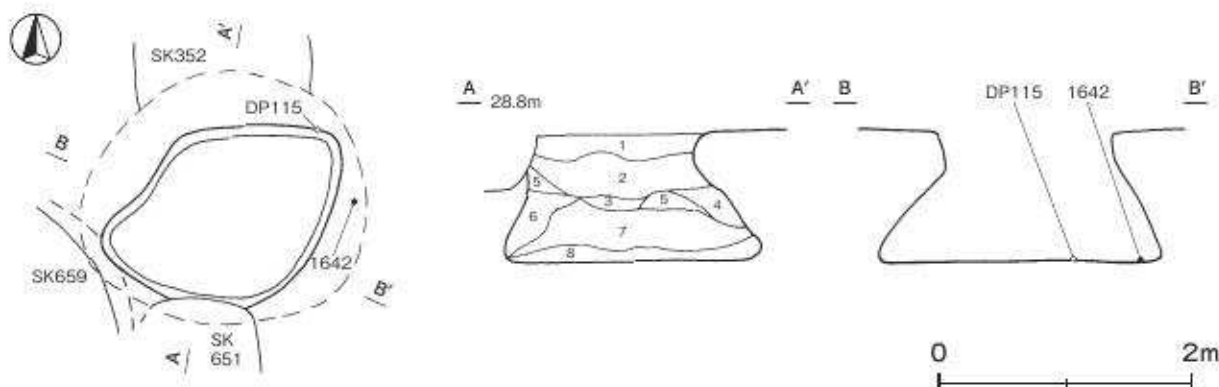
覆土 8 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

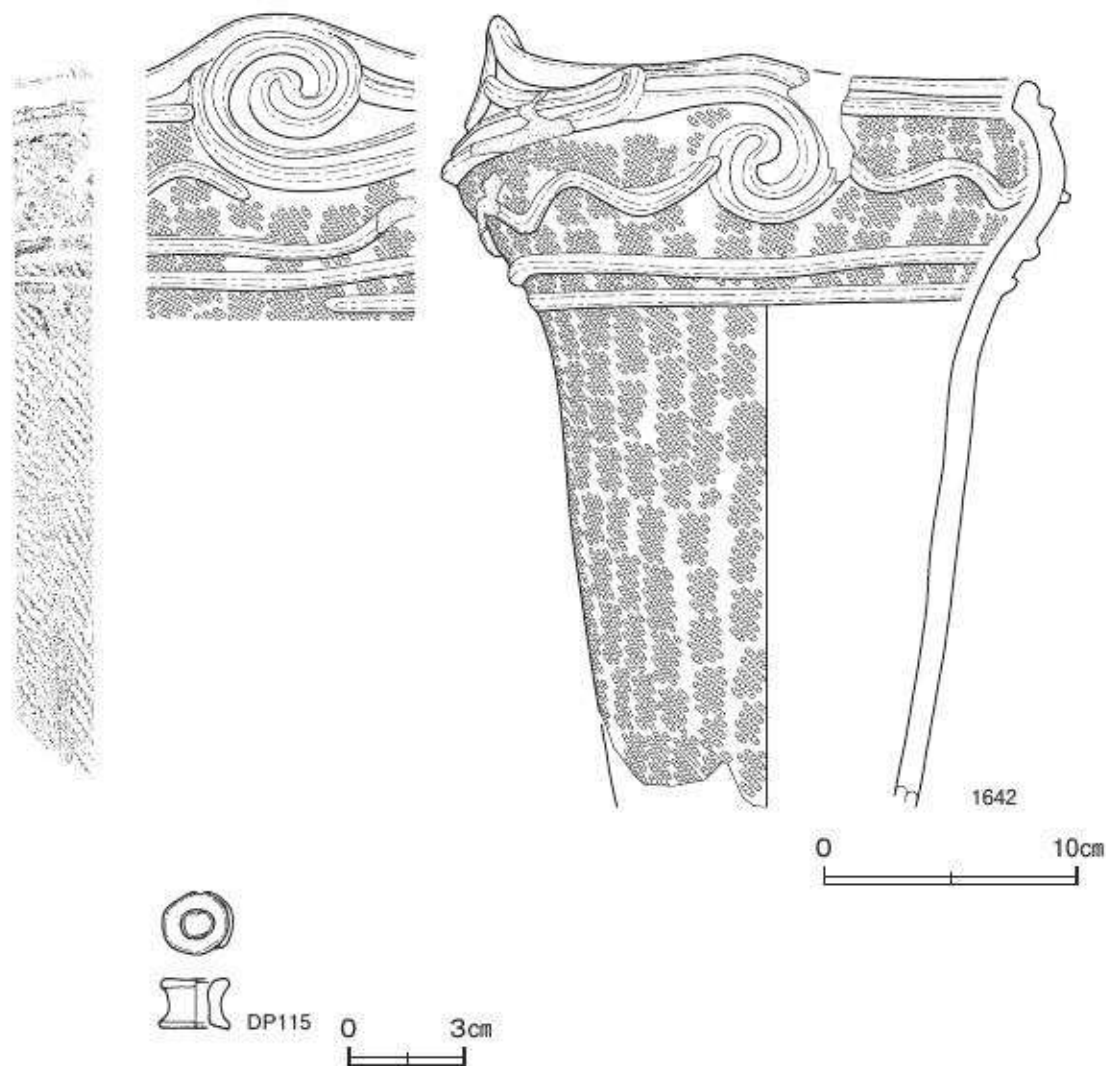
- | | | | |
|-------|--------------------------|---------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化物中量、焼土ブロック少量 | 6 ぶい黄褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量、焼土ブロック微量 | 7 褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス少量 |

遺物出土状況 縄文土器片 63 点（深鉢 59、浅鉢 4）、土製品 1 点（耳栓）が、覆土中からまばらに出土している。1642 と DP115 はほぼ完形で底面から出土し、埋め戻す前に遺棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第 565 図 第 650 号土坑実測図



第 566 図 第 650 号土坑出土遺物実測図

第 650 号土坑出土遺物観察表 (第 566 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1642	縄文土器	深鉢	21.0	(31.4)	-	長石・石英・雲母・黒色砂子・赤色砂子	にぶい赤褐色	普通	波頂部割れ縁帯による渦巻文・2条の縁帯による口縁部区画・区画内断面半円形の縁帯による波状文・胴部半節縄文LR(縦)施文	底面	90% PL155
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考	
DP115	耳栓	(1.7)	[1.9]	1.3	(2.3)	長石・石英・赤色砂子	にぶい褐色	碗形・両端部突出・中央部に孔・外・内面ナデ・一部欠損 孔径8-9mm	底面	PL160	

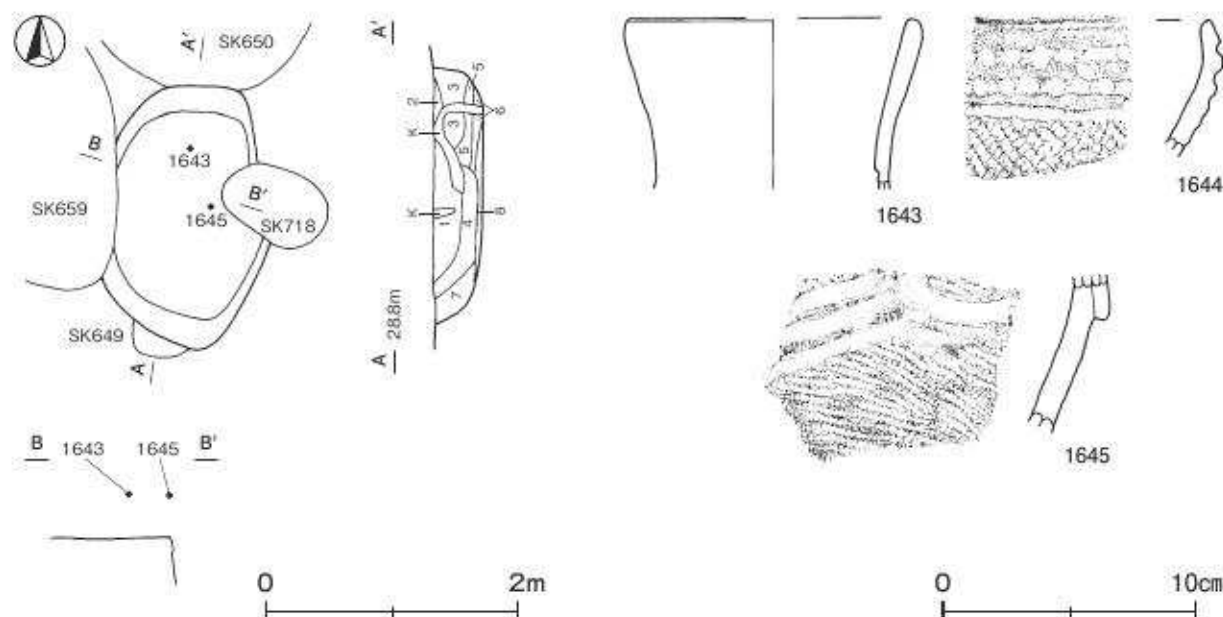
第 651 号土坑 (第 567 図)

位置 調査区西部のC 2 e8 区。標高 29 mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 649・650 号土坑を掘り込み、第 659・718 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部を第 659 号土坑に、東部を第 718 号土坑に掘り込まれているため、確認できた南北径は 2.12 m、東西径は 1.26 mで、長径方向は N-5°-W の楕円形と推定できる。底面は平坦で、深さは 41cm である。壁は外傾している。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。



第 567 図 第 651 号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片 30 点（深鉢）、石器 1 点（凹石）が、覆土中からまばらに出土している。1643・1645 は覆土上層から出土し、埋土と一緒に投棄されたと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。

第 651 号土坑出土遺物観察表（第 567 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1643	縄文土器	深鉢	[11.6]	(6.8)	-	長石・石英・赤色 粒子	灰褐色	普通	外・内面横・斜位の磨き	覆土上層	10%
1644	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁に沿って2列の円形刺突文 横位の太沈線文 単筋縄文 RL (弱) 施文	覆土中	
1645	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	単筋縄文 LR (弱) 上に太沈線文を伴う隆帯に よる区画文	覆土上層	

第 652 号土坑（第 568・569 図 PL89・93）

位置 調査区西部の C 2h9 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

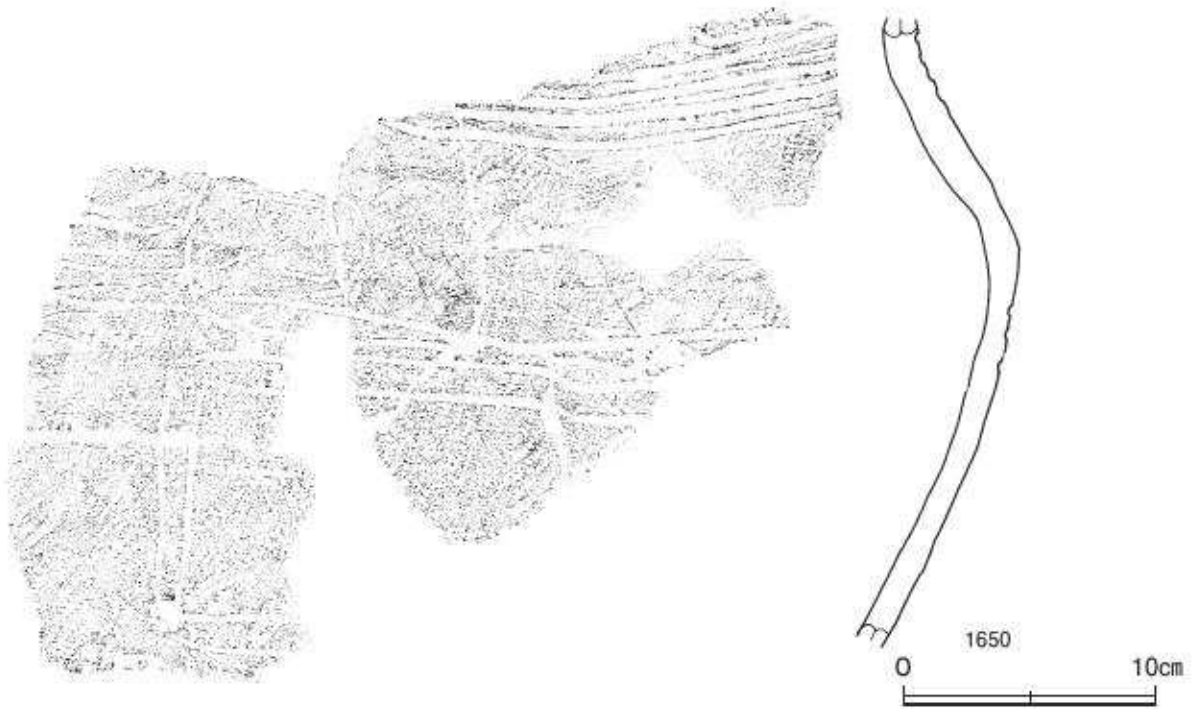
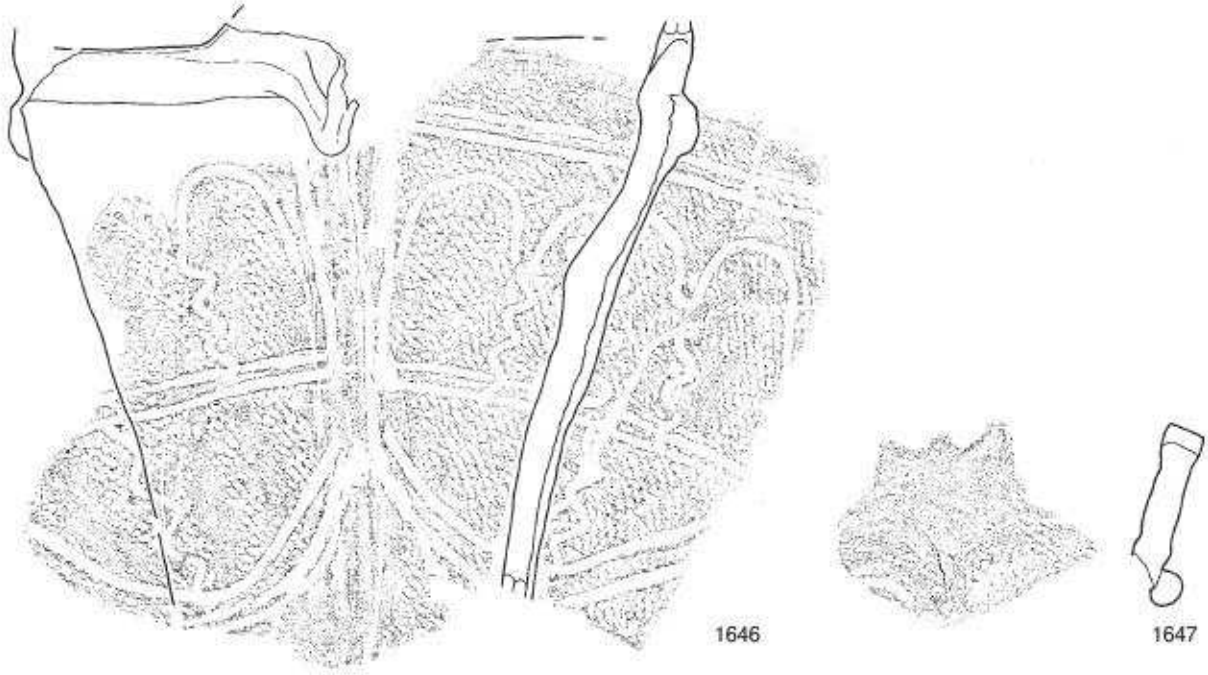
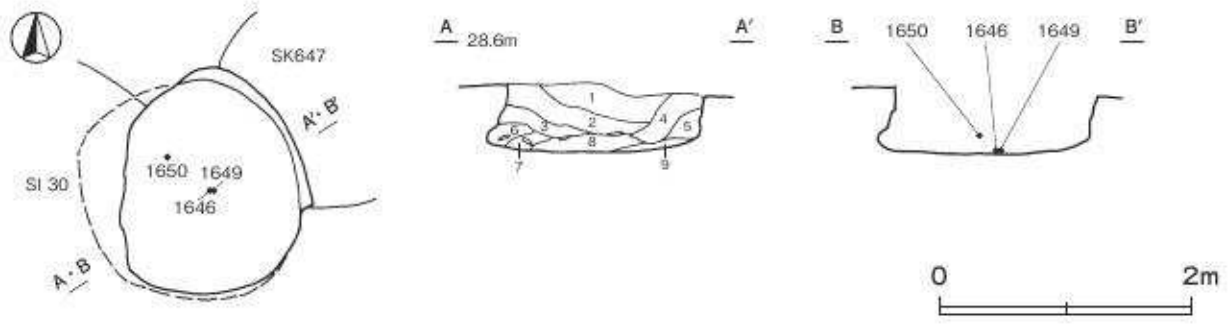
重複関係 第 30 号竪穴建物跡、第 647 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部は長径 1.78 m、短径 1.47 m の不整形円形で、長径方向は N-9°-E である。底面は径 1.70 ~ 1.84 m のほぼ円形で、平坦である。確認面からの深さは 52cm で、壁は内傾して、袋状を呈している。

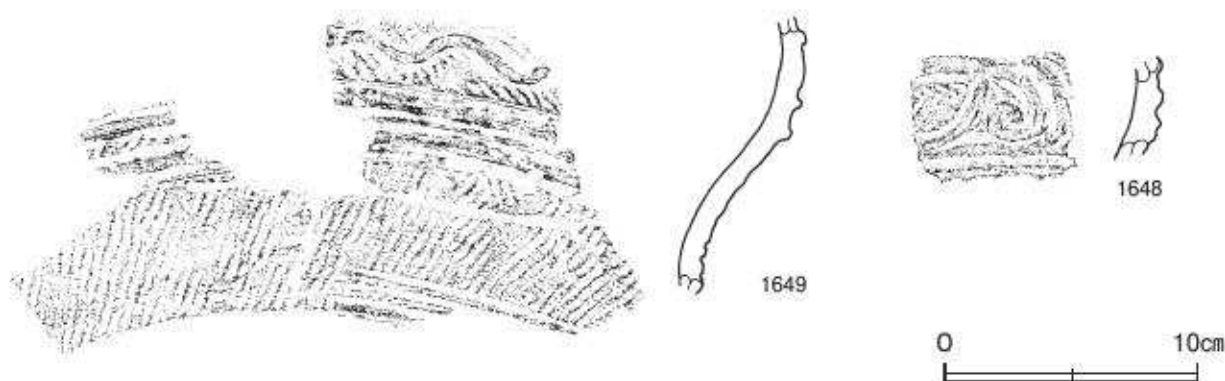
覆土 9 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|----------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量 | 6 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |



第 568 图 第 652 号土坑·出土遗物实测图



第 569 図 第 652 号土坑出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片 58 点（深鉢）、石器 3 点（打製石斧、石皿、磨石）が、覆土下層を中心にまばらに出土している。1646・1649 は底面から出土し、埋め戻す過程で遺棄されたと思われる。1650 は覆土下層から出土し、埋土と一緒に投棄されたと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

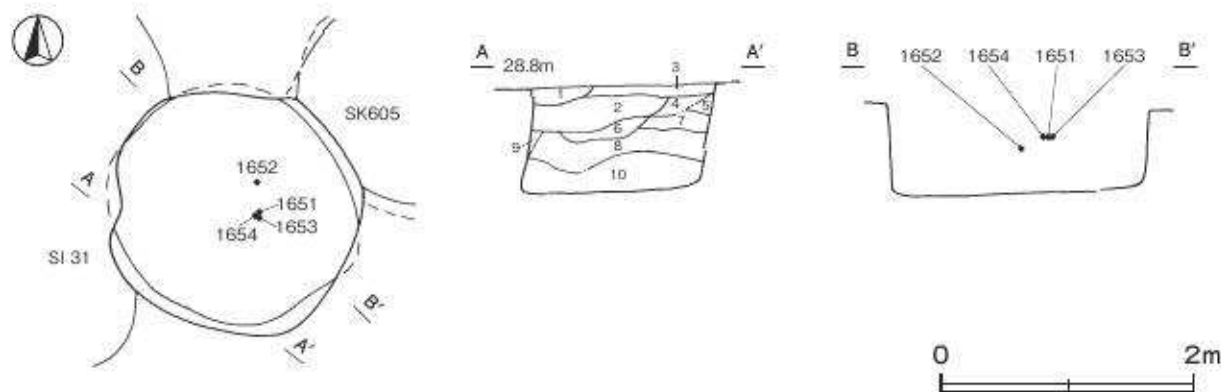
第 652 号土坑出土遺物観察表（第 568・569 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1646	縄文土器	深鉢	26.0	(22.8)	-	長石・石英・雲母・赤色鉄子	暗褐色	普通	口縁に沿ってV字状凸凹文を伴う隆帯一帯。林節縄文し(縦)上に隆帯による縦区画(区画内2本の沈線による上下区画)上半部沈線による3単位の風状文・波状縦垂文・下半部2本組の沈線による風状文	底面	50% PL156
1647	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色鉄子	暗赤褐色	普通	波頂部特頭による押圧 無節長(横)施文の隆帯による風状文	覆土中	
1648	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色鉄子	灰黄褐色	普通	単節縄文RL(縦)と単節縄文RL(横)による羽状縄文上に沈線を伴う隆帯による区画文(区画内同隆帯による渦巻文)	覆土中	
1649	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色鉄子	にぶい褐色	普通	単節縄文RL(縦)上に2本の隆帯による区画文(区画内縦行隆帯一帯、頸部同一原体(縦)上に半縦竹管による横走文)	底面	PL156
1650	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	単節縄文LR(縦)上に沈線による3から5本の横走文・2本の縦走文	覆土下層	PL156

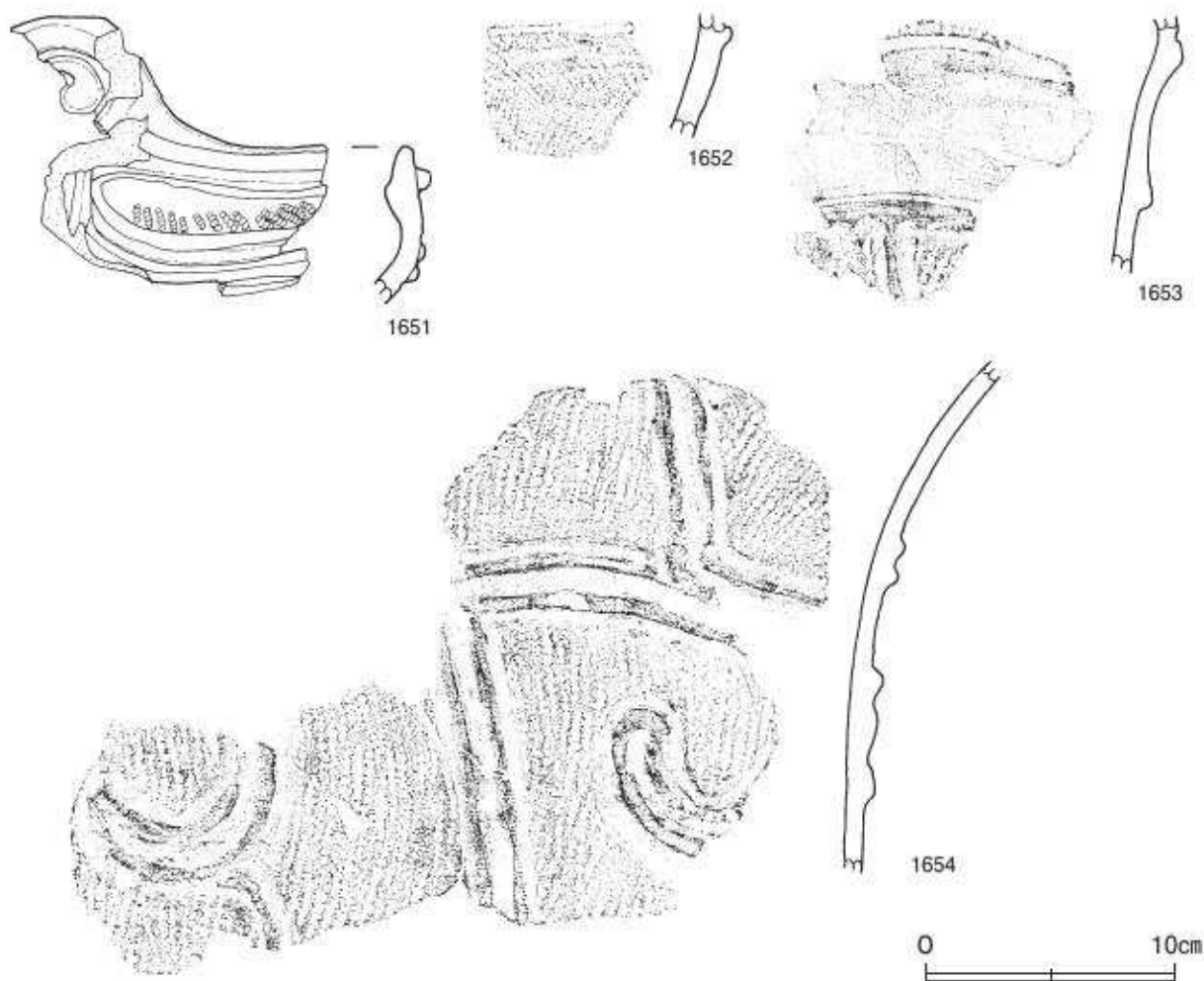
第 655 号土坑（第 570・571 図 PL88）

位置 調査区西部のC 2 g9 区、標高 29 mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 31 号竪穴建物跡、第 605 号土坑を掘り込んでいる。



第 570 図 第 655 号土坑実測図



第571図 第655号土坑出土遺物実測図

規模と形状 開口部は径1.99～2.09mのほぼ円形である。底面は径1.91～2.06mのほぼ円形で、平坦である。確認面からの深さは82cmで、壁は北西部がわずかに内傾し、それ以外はほぼ直立している。

覆土 10層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 8 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量 | 10 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片62点（深鉢）、剥片1点（石英）が、覆土中からまばらに出土している。1651～1654は覆土中層から出土し、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第 655 号土坑出土遺物観察表 (第 571 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1651	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	波状部に高卷文・太沈線を伴う隆帯による楕円形区画文・区画内単節縄文RL(横)充填	覆土中層	
1652	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	沈線と縄文筋文の隆帯で頸部と区画・単節縄文RL(横)と単節縄文LR(横)による羽状構成	覆土中層	
1653	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐色	普通	頸部隆帯間無文帯・胴部単節縄文RL(縦)上に2条の隆帯垂下	覆土中層	
1654	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	単節縄文LR(横・斜)上に沈線を伴う2条の隆帯による直線文・曲線文	覆土中層	PL156

第 657 号土坑 (第 572 ~ 575 図 PL94・99)

位置 調査区西部のC 2 15 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 35 号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径 1.48 m、短径 1.24 m の不整楕円形で、長径方向は N - 2° - E である。底面は径 2.48 ~ 2.65 m のほぼ円形で、平坦である。確認面からの深さは 107 cm で、壁は中位まで内彎して袋状を呈し、上位は外傾している。

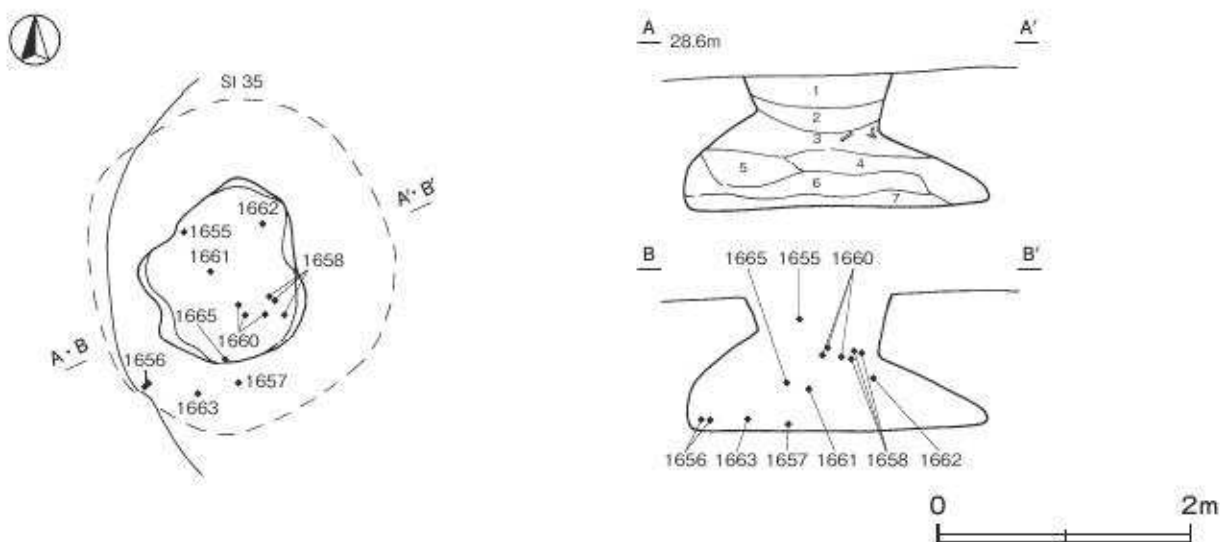
覆土 7 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

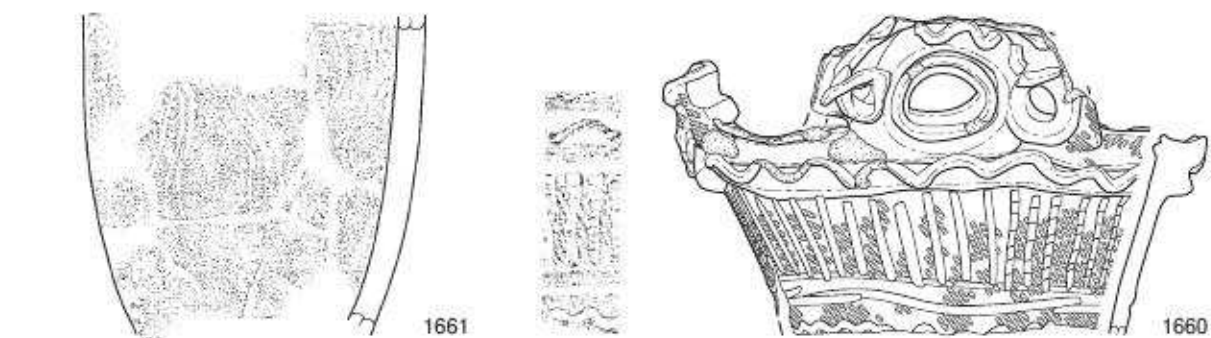
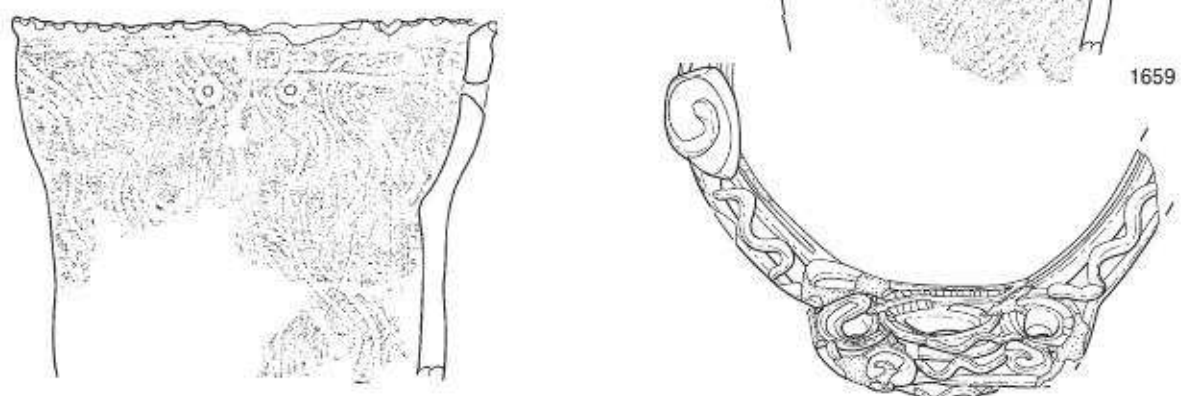
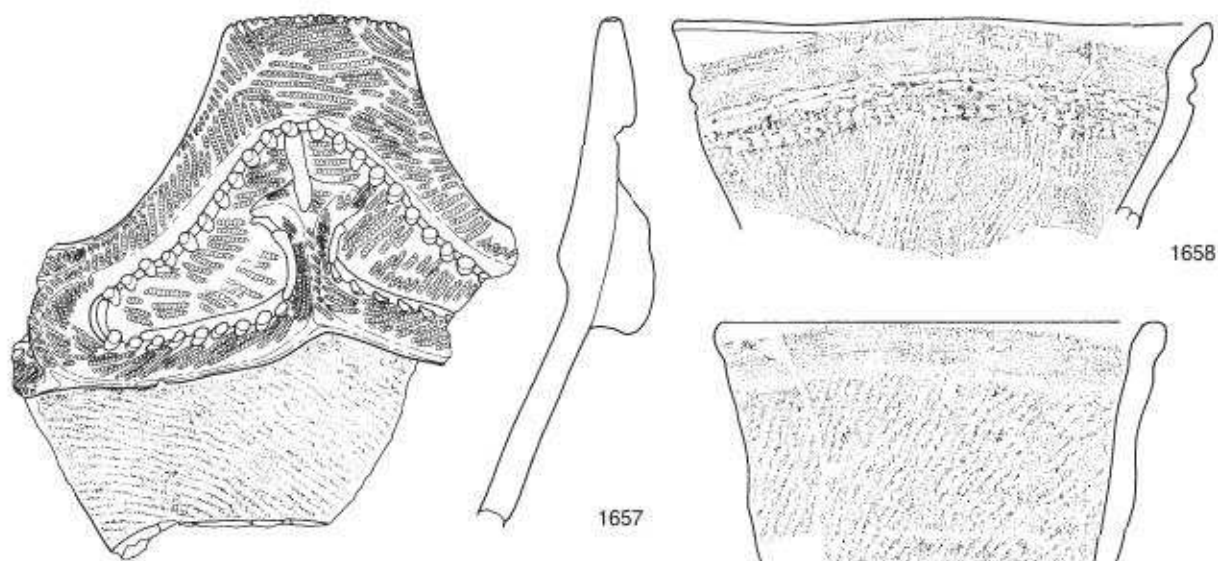
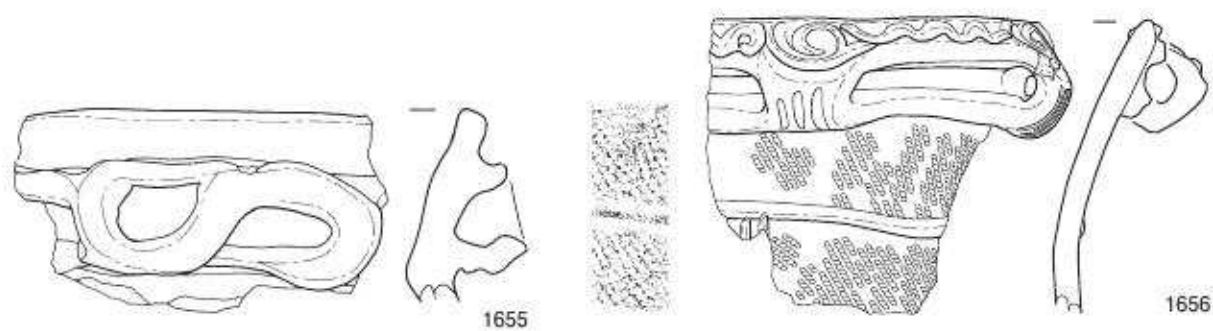
- | | | | |
|-------|----------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 6 褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 | 7 黄褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片 184 点 (深鉢 157、浅鉢 27)、土製品 1 点 (土器片円盤)、石器 2 点 (磨石)、剥片 1 点 (チャート) が、覆土中層を中心に散乱した状態で出土している。1665 はほぼ完形で覆土中層から出土し、ある程度埋まってから、遺棄されたものと思われる。1656・1657・1663 は覆土下層から、1658・1660 ~ 1662 は覆土中層から、1655 は覆土上層からそれぞれ出土し、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

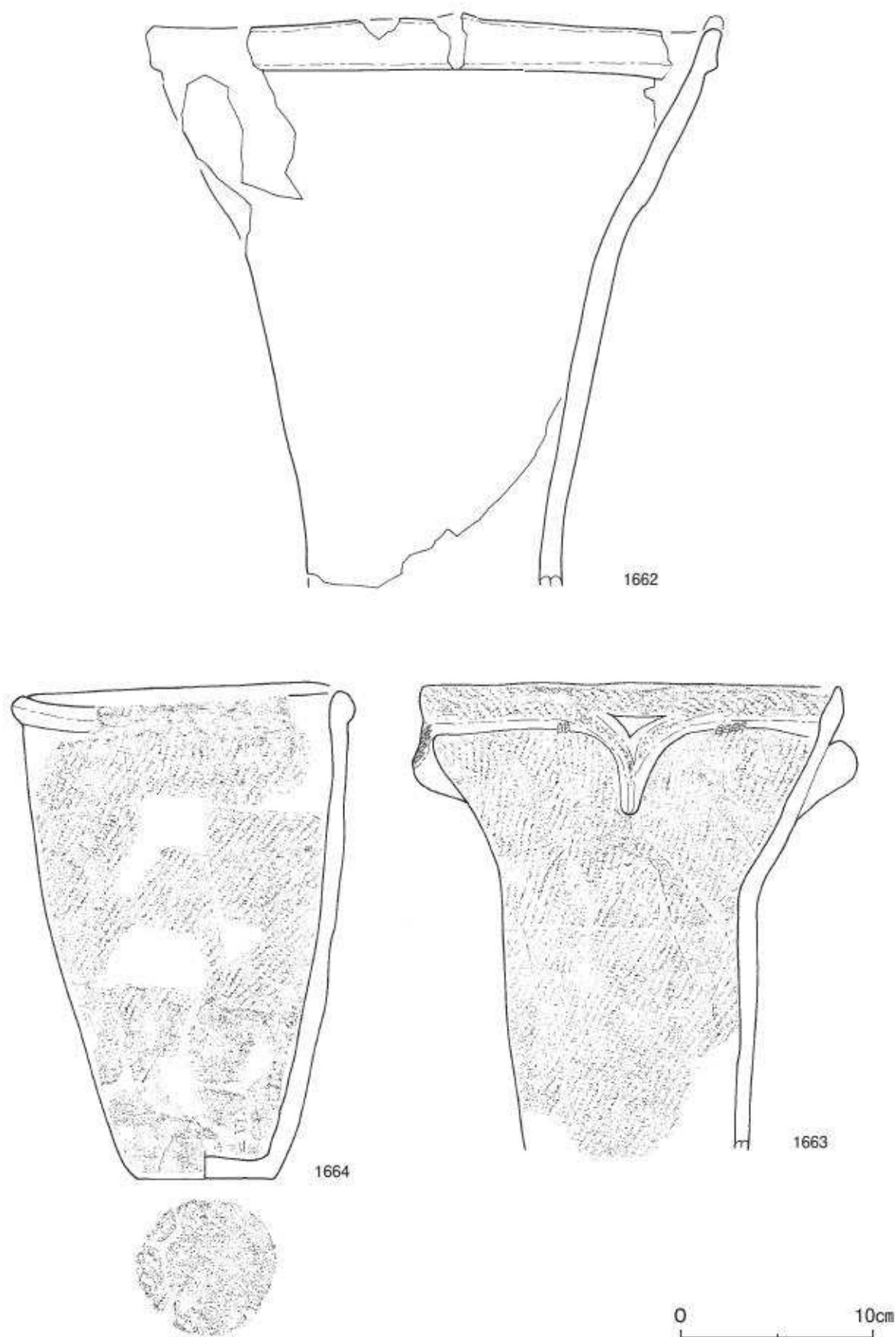
所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



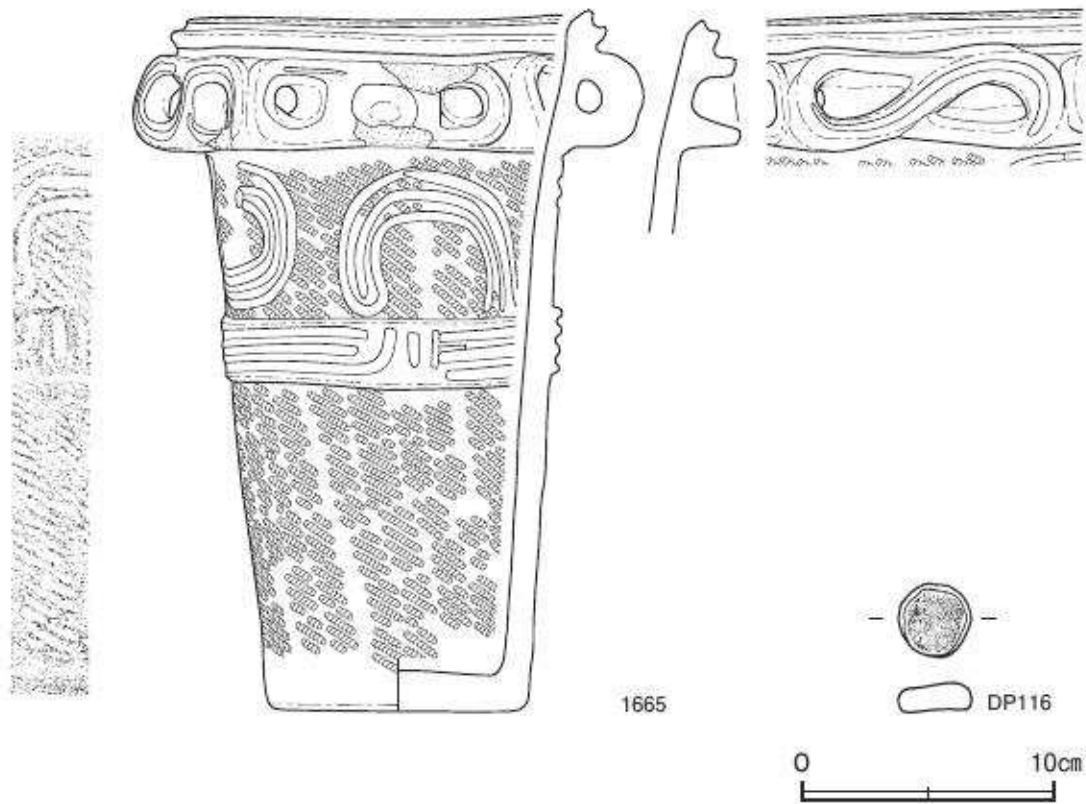
第 572 図 第 657 号土坑実測図



第573图 第657号土坑出土遗物实测图(1)



第 574 図 第 657 号土坑出土遺物実測図 (2)



第 575 図 第 657 号土坑出土遺物実測図 (3)

第 657 号土坑出土遺物観察表 (第 573 ~ 575 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1655	縄文土器	深鉢	—	(8.0)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	厚みのある隆帯で口縁部区画 横S字状の隆帯による眼蓋状把手	覆土上層	
1656	縄文土器	深鉢	—	(11.8)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁上部隆帯による渦巻文を伴う波状文 口縁下部背割れ隆帯による楕円形区画文 胴部単節縄文LR(縦) 隆帯により胴部と区画	覆土下層	PL157
1657	縄文土器	深鉢	—	(20.3)	—	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰褐	普通	波状文にキザミ目 単節縄文LR 隆帯の口縁に沿う厚みのある隆帯と庇状隆帯による区画文 隆帯に沿って連続する円形刺突文 胴部同一原体(縦)	覆土下層	10% PL157 破断面・内面 赤彩痕
1658	縄文土器	深鉢	21.4	(8.3)	—	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口縁上部無文 2列の有部沈線周回 楕円状工具による(斜・縦)条線文	覆土中層	30%
1659	縄文土器	深鉢	17.4	(13.9)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁に沿って隆帯貼付 隆帯下指頭による凹み 胴部単節縄文RL(縦) 施文	覆土中	30%
1660	縄文土器	深鉢	20.9	(12.6)	—	長石・石英・黒燐	にぶい赤黒	普通	3孔を有する楕円状把手 口縁部部広で中央部に凹み 凹部に隆帯による波状文 口縁部縄文施文の隆帯と庇状隆帯による区画文 区画内隆帯による波状文 胴部単節縄文RL(縦) 上に縦位の沈線文 沈線文で胴部と区画	覆土中層	20% PL157
1661	縄文土器	深鉢	18.6	(27.3)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部部頭による押し文 口縁に沿って半截竹管文 胴部楕円状工具による縦波状文 1対の補修孔	覆土中層	70% PL157
1662	縄文土器	深鉢	[29.2]	(29.3)	—	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	口縁に沿って隆帯貼付 外面縦方向の指ナゲ 内面横方向の指ナゲ	覆土中層	30%
1663	縄文土器	深鉢	21.5	(24.2)	—	長石・石英・雲母	褐	普通	口縁に沿って縄文施文の隆帯貼付 隆帯下に4單位のV字状貼付文 胴部単節縄文RL(縦) 施文	覆土下層	80% PL157
1664	縄文土器	深鉢	16.7	25.7	7.2	長石・石英・雲母・細砂	にぶい黄橙	普通	口縁に沿って厚みのある隆帯貼付 隆帯下指頭による凹み 胴部単節縄文RL(縦) 施文 底面縄文原体圧痕	覆土中	70% PL157
1665	縄文土器	深鉢	15.8	28.0	10.1	長石・石英・雲母・黒色粒子・赤色粒子・細砂	明赤褐	普通	口唇部深い波状文を伴う隆帯周回 口縁部背割れ隆帯による眼蓋状把手 胴部沈線を伴う4条の隆帯で上下に区画 上半部0段多象単節縄文LR(縦) 上に3本組の沈線による瓦状文・嵌手文	覆土中層	95% PL157
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考	
DP116	土器片断	3.0	2.9	1.1	9.7	長石・石英	暗褐	周縁部丁字交研磨	覆土中		

第 662 号土坑 (第 576・577 図)

位置 調査区西部の C 2 c5 区、標高 28 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 663 号土坑を掘り込み、第 9・32 号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は径 1.21 ~ 1.31 m の不整円形である。底面は長径 1.92 m、短径 1.65 m の楕円形で、ほぼ平坦である。確認面からの深さは 74cm で、壁は内彎して、袋状を呈している。

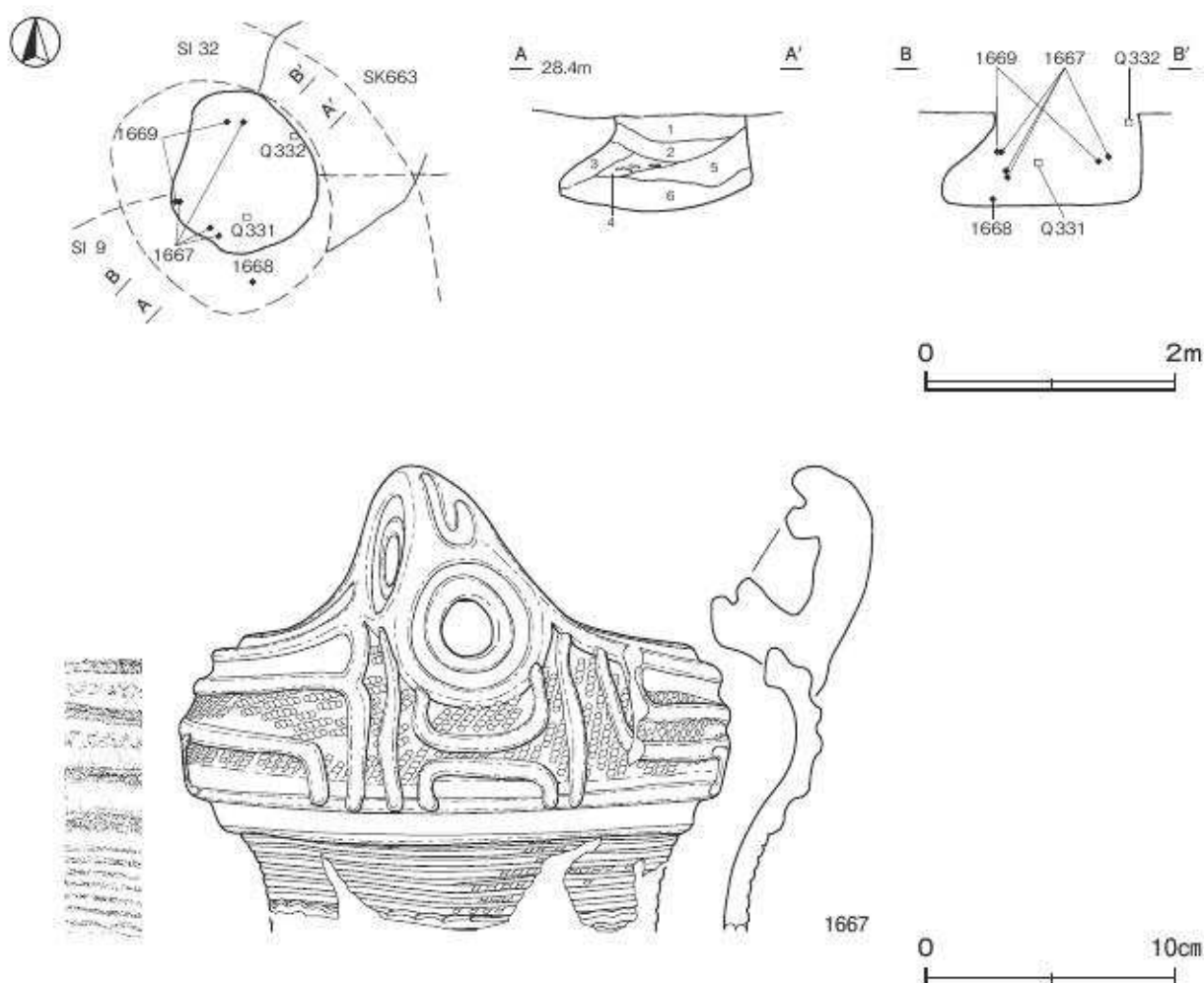
覆土 6 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

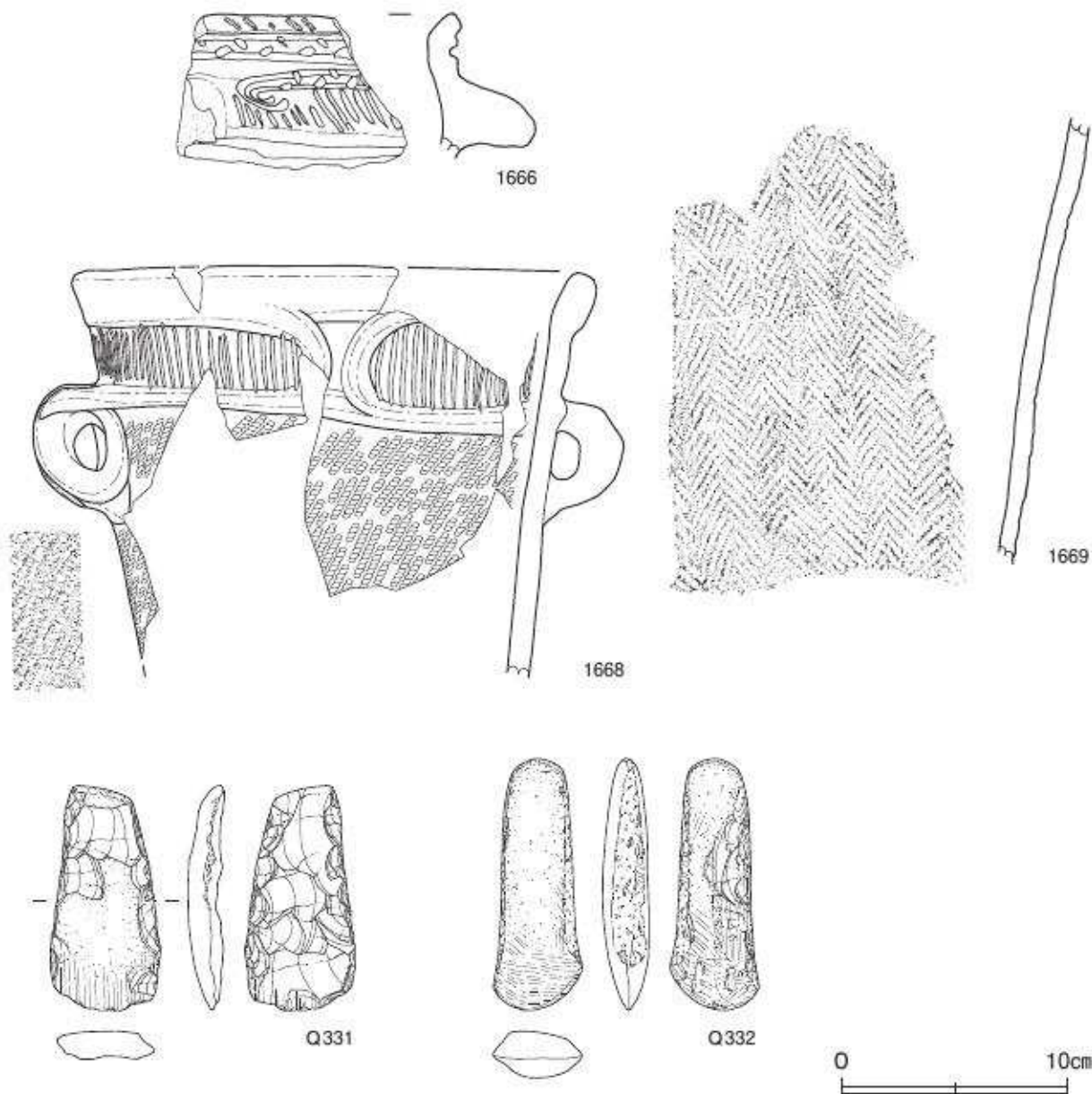
1 灰黄褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	4 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化物微量	5 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量	6 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量

遺物出土状況 縄文土器片 68 点 (深鉢 66, 浅鉢 2)、石器 4 点 (磨製石斧 2, 打製石斧 2)、剥片 1 点 (安山岩) が、覆土中層を中心に散乱した状態で出土している。覆土中層から出土した 1667・1669 は、離れた位置にあるものが接合していることから、破碎したものを投棄したと思われる。1668 は覆土下層から、Q331 は覆土中層から、Q332 は覆土上層からそれぞれ出土し、埋土と一緒に投棄されたと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第 576 図 第 662 号土坑・出土遺物実測図



第577図 第662号土坑出土遺物実測図

第662号土坑出土遺物観察表（第576・577図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1666	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	単節縄文RL（横）施文の隆帯と凹状隆帯で口縁部区画。口縁に沿って交互斜突文。区内縦位の沈線文で充填	覆土中	
1667	縄文土器	深鉢	18.4	(18.8)	-	長石・石英・雲母・細礫	灰褐色	普通	口唇部に凹線文。前面半円状の隆帯による口縁部区画文。区内単節縄文RL（斜・縦）上に2条の隆帯によるクランク文。頸部同原体上に横位の多条沈線文	覆土中層	50% PL156
1668	縄文土器	深鉢	[23.0]	(18.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁に沿って隆帯隆帯。口縁部隆帯による楕円形区画文。区内沈線文で充填。頸部上位に1対の眼縁状把手。単節縄文RL（縦）施文	覆土下層	30% PL156
1669	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	単節縄文RLとLRによる縦羽状構成	覆土中層	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q331	打製石斧	10.0	4.9	1.8	91.1	ホルンフェルス	脱形	片面に自然面。両側縁微細な敲打痕	覆土中層	PL165	
Q332	磨製石斧	11.1	4.0	2.1	110.1	流紋岩	脱形	表裏面研磨。両側縁微細な敲打調整。刃部は表裏から研ぎ出す「ハマグリ刃」	覆土上層	PL168	

第 663 号土坑 (第 578 図 P94)

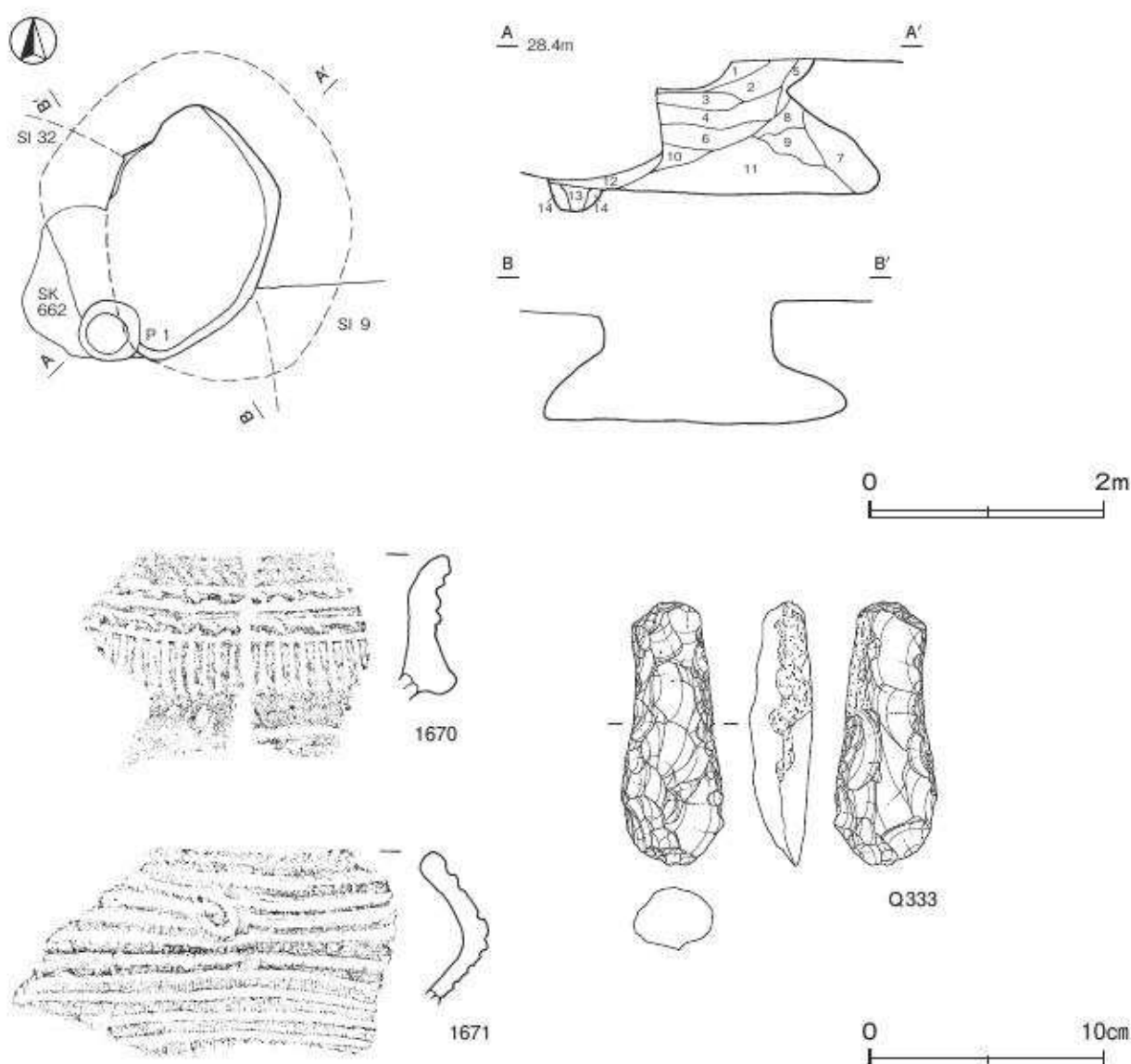
位置 調査区西部の C 2 c6 区、標高 28 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 9・32 号竪穴建物、第 662 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径 2.25 m、短径 1.44 m の不整楕円形で、長径方向は N - 10° - E である。底面は長径 2.87 m、短径 2.63 m の楕円形で、平坦である。確認面からの深さは 112 cm で、壁は中位まで内彎して袋状を呈し、上位はほぼ直立している。

ピット 径 50 cm ほどの円形で、深さは 20 cm である。位置や形状から、補助的な貯蔵施設の可能性がある。

覆土 12 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。第 13・14 層は、P 1 の覆土である。



第 578 図 第 663 号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------|-----------|-----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 8 褐灰色 | ロームブロック中量、炭化物少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 9 灰黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 におい黄褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 10 灰黄褐色 | ローム粒子多量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 11 褐色 | ローム粒子多量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 におい黄褐色 | ローム粒子多量 |
| 6 褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 | 13 褐色 | ロームブロック中量 |
| 7 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 14 灰黄褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 縄文土器片 62 点（深鉢 61、浅鉢 1）、石器 1 点（打製石斧）が、覆土中から散乱した状態で出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考える。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第 663 号土坑出土遺物観察表（第 578 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1670	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	におい黄褐色	普通	単部縄文 KL（横）施文の隆帯と隆帯状隆帯による区画文 区画内 2 列の交互斜交文・縦位の条線文	覆土中	
1671	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	橙	普通	口縁部隆帯による区画文 区画内 滑帯文を伴う 5 本の横走沈線文 頸部熱赤文上に 3 本の横走沈線文	覆土中	SK676 1695 と同一個体。
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q333	打製石斧	11.3	4.4	2.9	1522	ホルンフェルス	鏡形	側縁部微細な敲打調整 刃部は表裏を敲打	覆土中	PL165	

第 664 号土坑（第 579 図 PL94）

位置 調査区西部の C 2 e5 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 33・35 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径 1.38 ~ 1.50 m のほぼ円形である。底面は平坦である。深さは 74cm で、壁はほぼ直立している。

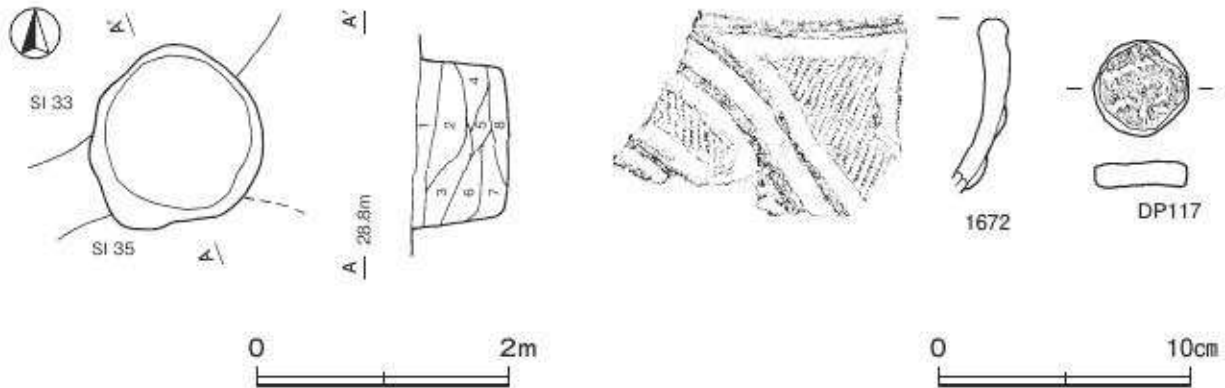
覆土 8 層に分層できる。ロームブロックを含む層が堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 縄文土器片 29 点（深鉢）、土製品 1 点（土器片円盤）、剥片 1 点（石英）が、覆土中からまばらに出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第 579 図 第 664 号土坑・出土遺物実測図

第 664 号土坑出土遺物観察表 (第 579 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1672	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	単節縄文 RL (縦) 上に太沈線を伴う陸帯による曲線文	覆土中	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考	
BP117	土器片(円盤)	3.8	3.7	1.0	17.4	長石・石英・赤色 粒子	暗褐色	周縁部丁寧な研磨	覆土中		

第 665 号土坑 (第 580 図)

位置 調査区西部の C 2 f5 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 35 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径 1.82 ~ 1.90 m のほぼ円形である。底面は平坦である。深さは 70cm で、壁は外傾している。

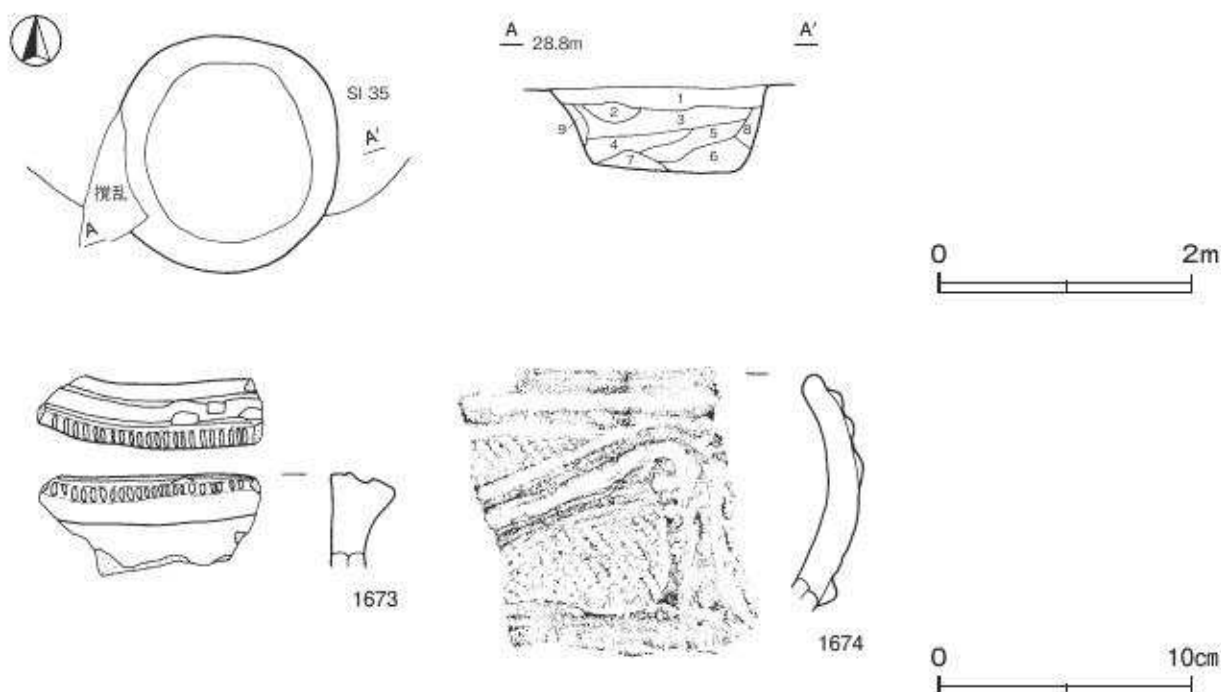
覆土 9 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 | 9 褐色 | ローム粒子多量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片 49 点 (深鉢 47, 浅鉢 1, 器台 1), 石器 1 点 (石皿) が、覆土中からまばらに出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第 580 図 第 665 号土坑・出土遺物実測図

第 665 号土坑出土遺物観察表 (第 580 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1673	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・黒緑・黒色粒子	にぶい褐色	普通	口唇部にキザミ目と交互刺突文 口縁に沿って陸帯同回	覆土中	
1674	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	束節刺突文 RL (横) 上に沈線を伴う陸帯による区画文 区画内之条の陸帯による滔沓文	覆土中	

第 666 号土坑 (第 581 図)

位置 調査区西部の C 2 c4 区、標高 28 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 8 号堅穴建物跡を掘り込み、第 7 号堅穴建物・第 1 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径 1.92 m、短径 1.67 m の不整楕円形で、長径方向は N - 78° - E である。底面は長径 2.37 m、短径 1.91 m の不整楕円形で、平坦である。確認面からの深さは 85cm で、壁は北東部を除いて内彎して袋状を呈している。

ピット 北壁際に位置し、径 48cm ほどの円形で、深さは 45cm である。位置や形状から、補助的な貯蔵施設の可能性がある。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

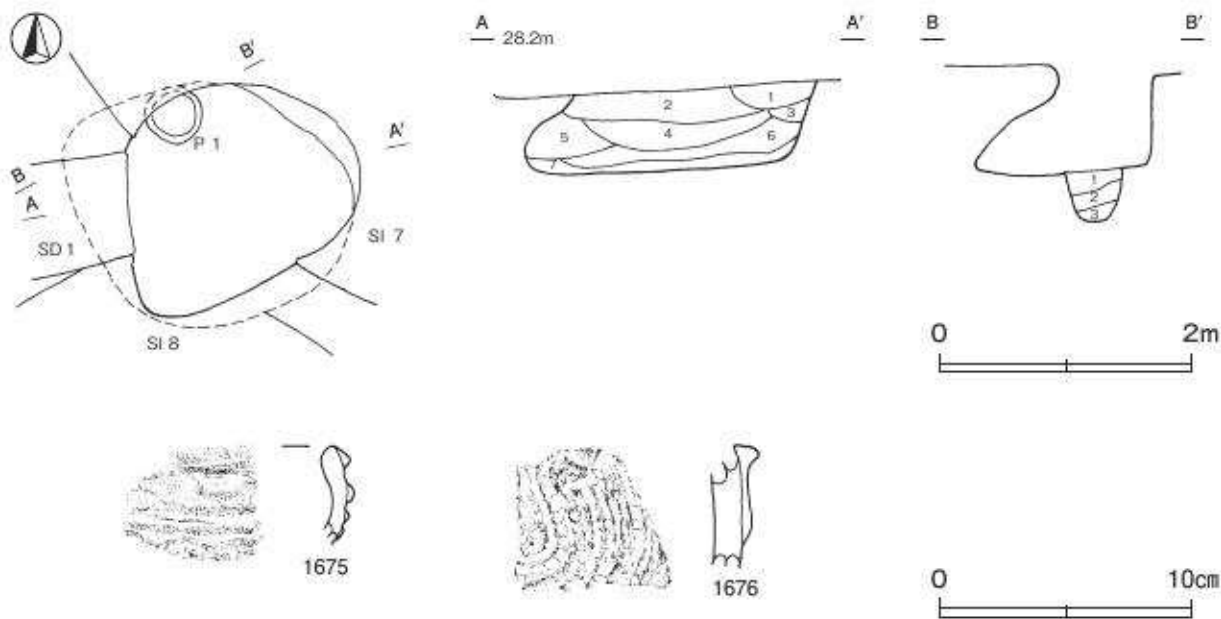
覆土 7層に分層できる。ロームブロックを含む層が堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ロームブロック中量、鹿沼パミス微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 7 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片 32 点 (深鉢) が、覆土中からまばらに出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第 581 図 第 666 号土坑・出土遺物実測図

第 666 号土坑出土遺物観察表 (第 581 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1675	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁に沿って背割れ隆帯貼付 隆帯に沿って隆帯による小波状文	覆土中	
1676	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	2条の隆帯による曲線文 隆帯に沿って2本の有筋沈線文	覆土中	

第 671 号土坑 (第 582 図)

位置 調査区西部の C 2 e7 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 672・673 号土坑を掘り込み、第 34 号堅穴建物、第 678 土坑に掘り込まれている。

規模と形状 径 2.50 ~ 2.51 m の不整円形で、底面は平坦である。深さは 50 cm で、壁は北東部は内彎し、それ以外はほぼ直立している。

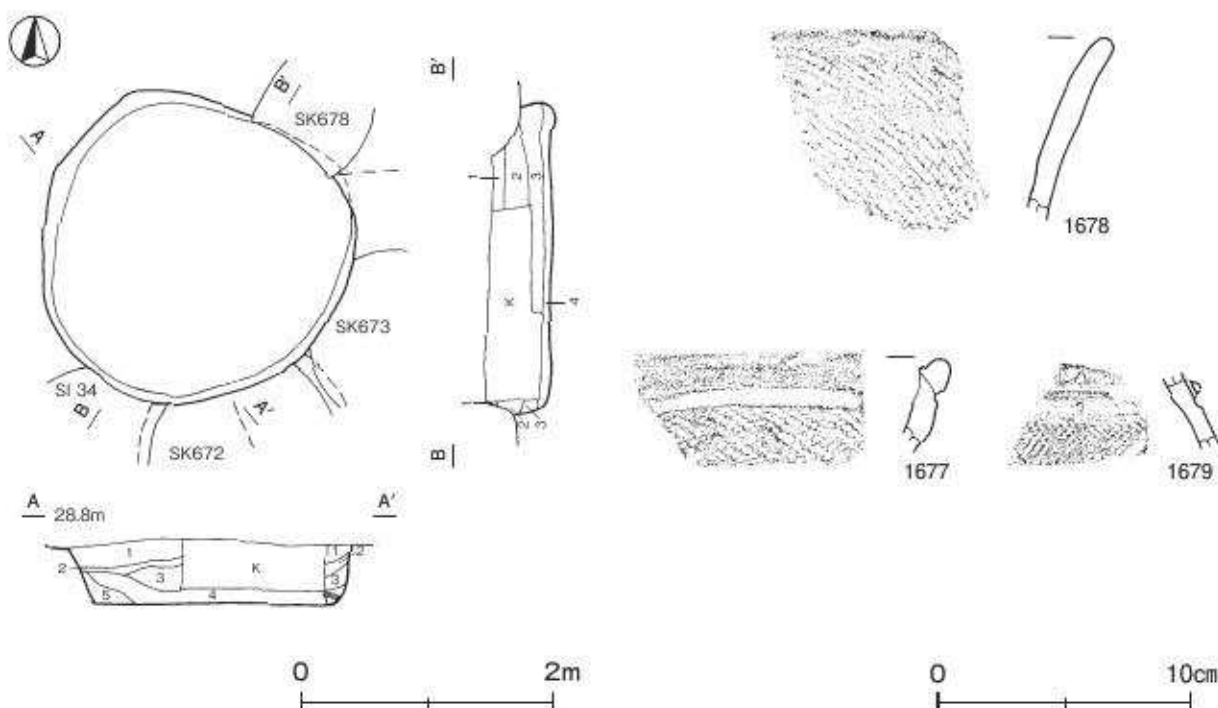
覆土 5 層に分層できる。ロームブロックを含む層が堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片 75 点 (深鉢 74、有孔罎付土器 1) が、覆土中から散乱した状態で出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第 582 図 第 671 号土坑・出土遺物実測図

第 671 号土坑出土遺物観察表 (第 582 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1677	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁に沿って太沈線を伴う隆帯貼付 単節縄文 LR (縦) 施文	覆土中	
1678	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	灰褐色	普通	単節縄文 LR (縦) を全面に施文	覆土中	
1679	縄文土器	有孔筒状土器	-	-	-	長石・石英	褐色	普通	此状の隆帯で胴部と区画 隆帯に垂直に穿孔 胴部細めの単節縄文 RL (横・縦) による羽状構成	覆土中	

第 672 号土坑 (第 583・584 図)

位置 調査区西部の C 2 f7 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 34 号竪穴建物、第 671 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は径 1.55 ~ 1.60 m の円形である。底面は長径 1.96 m、短径 1.64 m の楕円形で、平坦である。確認面からの深さは 48 cm で、壁は内彎して袋状を呈している。

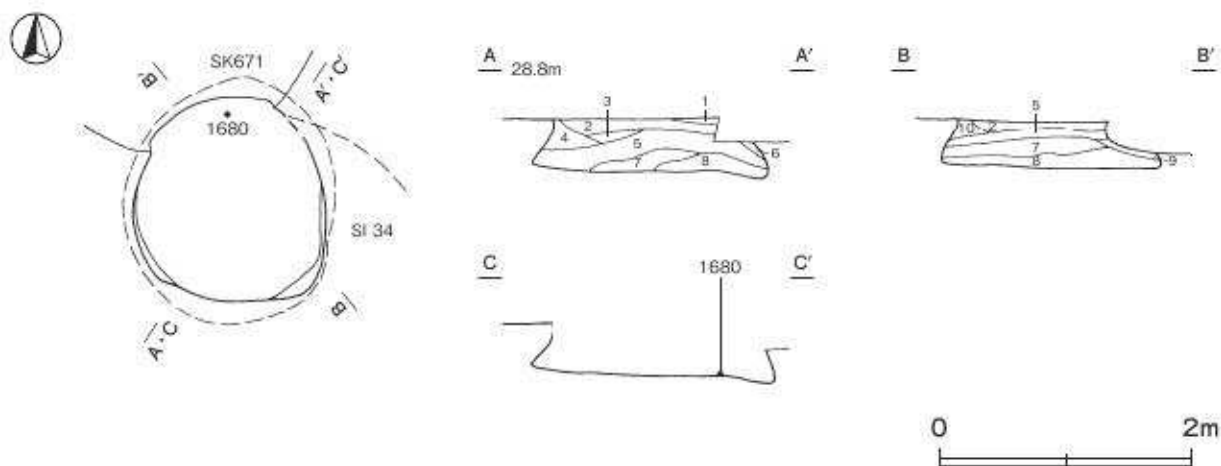
覆土 10 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|----------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 7 にぶい黄褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 8 褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片 74 点 (深鉢)、土製品 1 点 (土器片錘)、石器 1 点 (打製石斧) が、覆土中から散乱した状態で出土している。1680 は底面から出土し、埋め戻される前に遺棄されたと思われる。

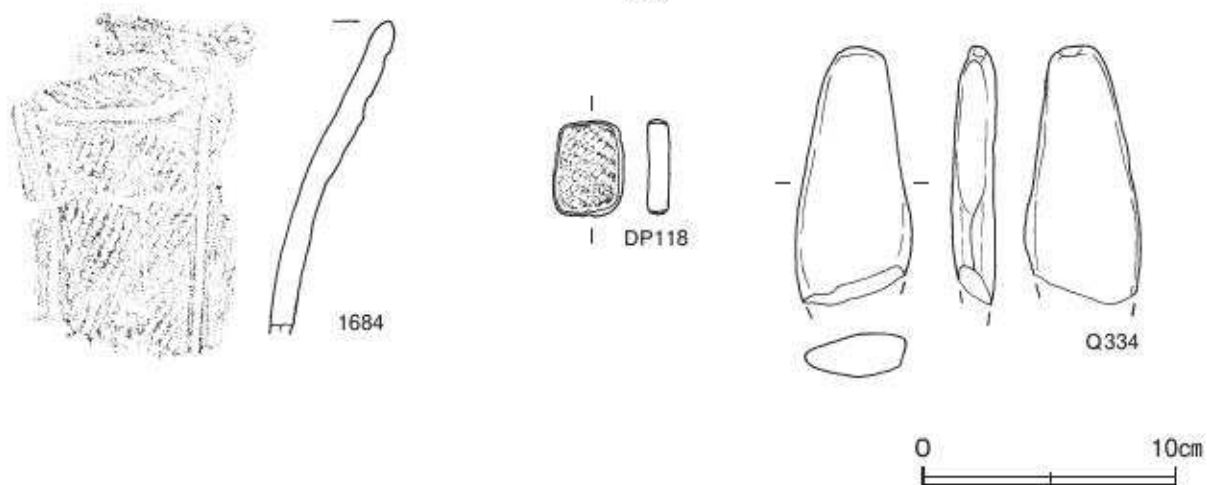
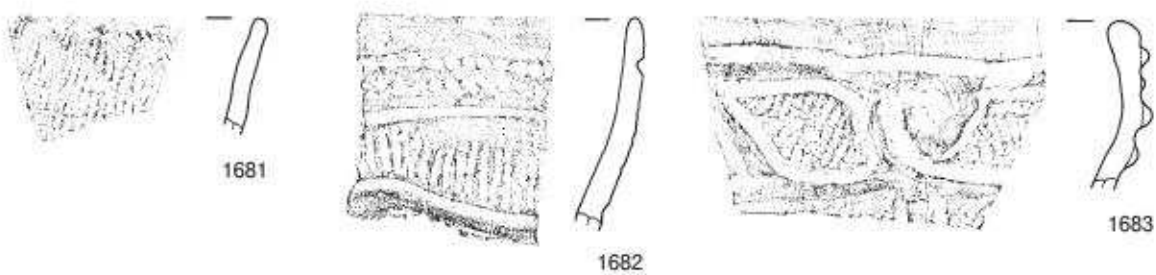
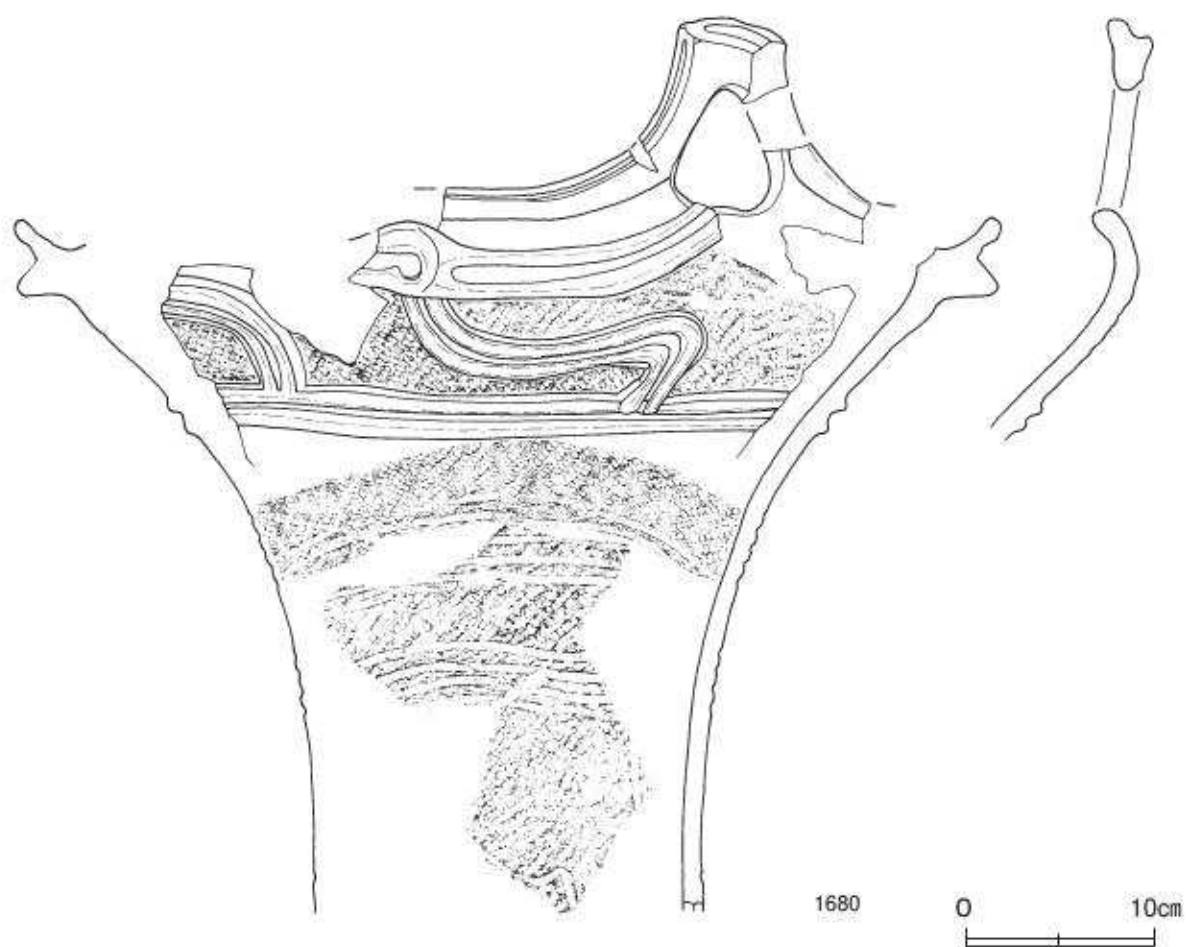
所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第 583 図 第 672 号土坑実測図

第 672 号土坑出土遺物観察表 (第 584 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1680	縄文土器	深鉢	[51.4]	(47.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口唇部凹線文・滑溜孔隆帯による口縁部文様帯分刻 下部同隆帯によるクランク文 胴部単節縄文 RL (縦) 上に 2 組 4 本単位の横走文 胴部同縄文上に沈線による壁垂文	底面	25% PL156
1681	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	灰黄褐色	普通	単節縄文 RL (斜・横) 施文	覆土中	



第 584 図 第 672 号土坑出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1682	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁に沿って2列の刺突文。縦位の刺突文上に沈線を伴う隆帯による区画文。区内隆帯による波状文。	覆土中	
1683	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	太沈線を伴う隆帯による区画文・渦巻文。単面刺突文L(縦・斜)充填。胴部2本の沈線垂下沈線間磨治。	覆土中	
1684	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	灰褐	普通	口縁に沿って隆帯貼付。太沈線による稀円形区画。区内単面刺突文L(横)充填。隆帯下から2本の沈線垂下。沈線間磨治。	覆土中	PL156

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP118	土器片鏃	38	29	08	124	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	両縁部丁寧な研磨。両端に浅いキザミ目。	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q334	打製石斧	(10.4)	4.8	1.9	(110.7)	砂岩	鋭形。扁平な自然礫。刃部欠損。	覆土中	PL165

第 673 号土坑 (第 585 ~ 588 図)

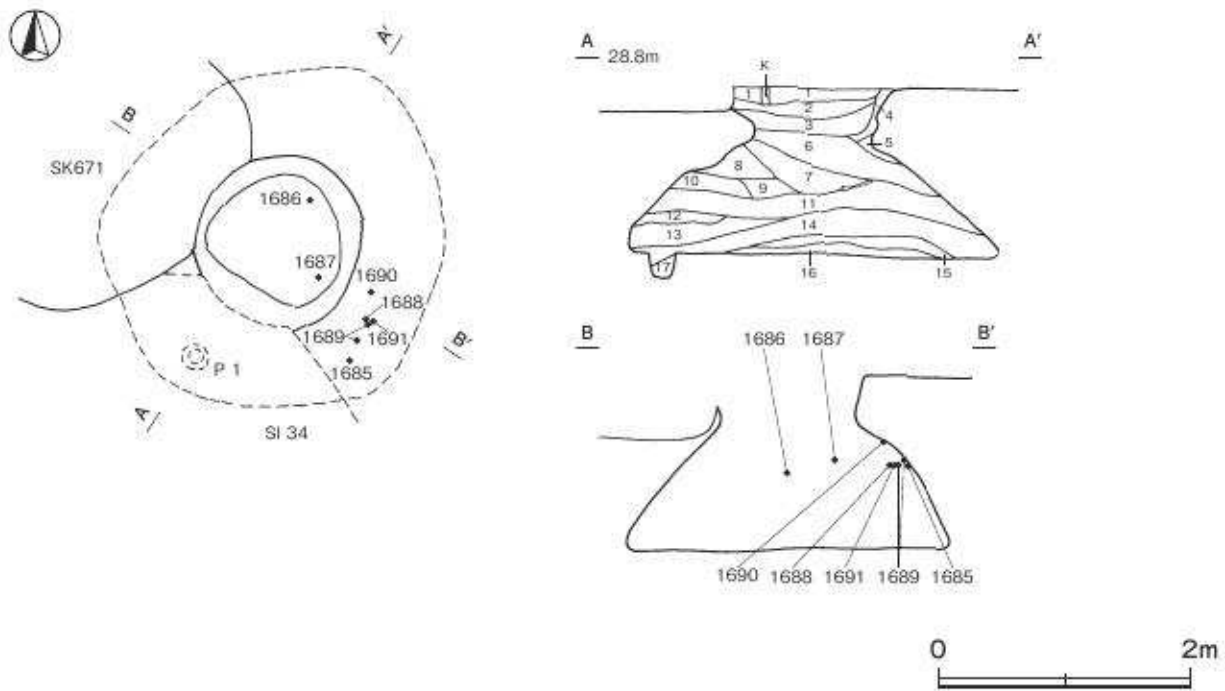
位置 調査区西部の C 2 f8 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 34 号竪穴建物、第 671 号土坑に掘り込まれている。

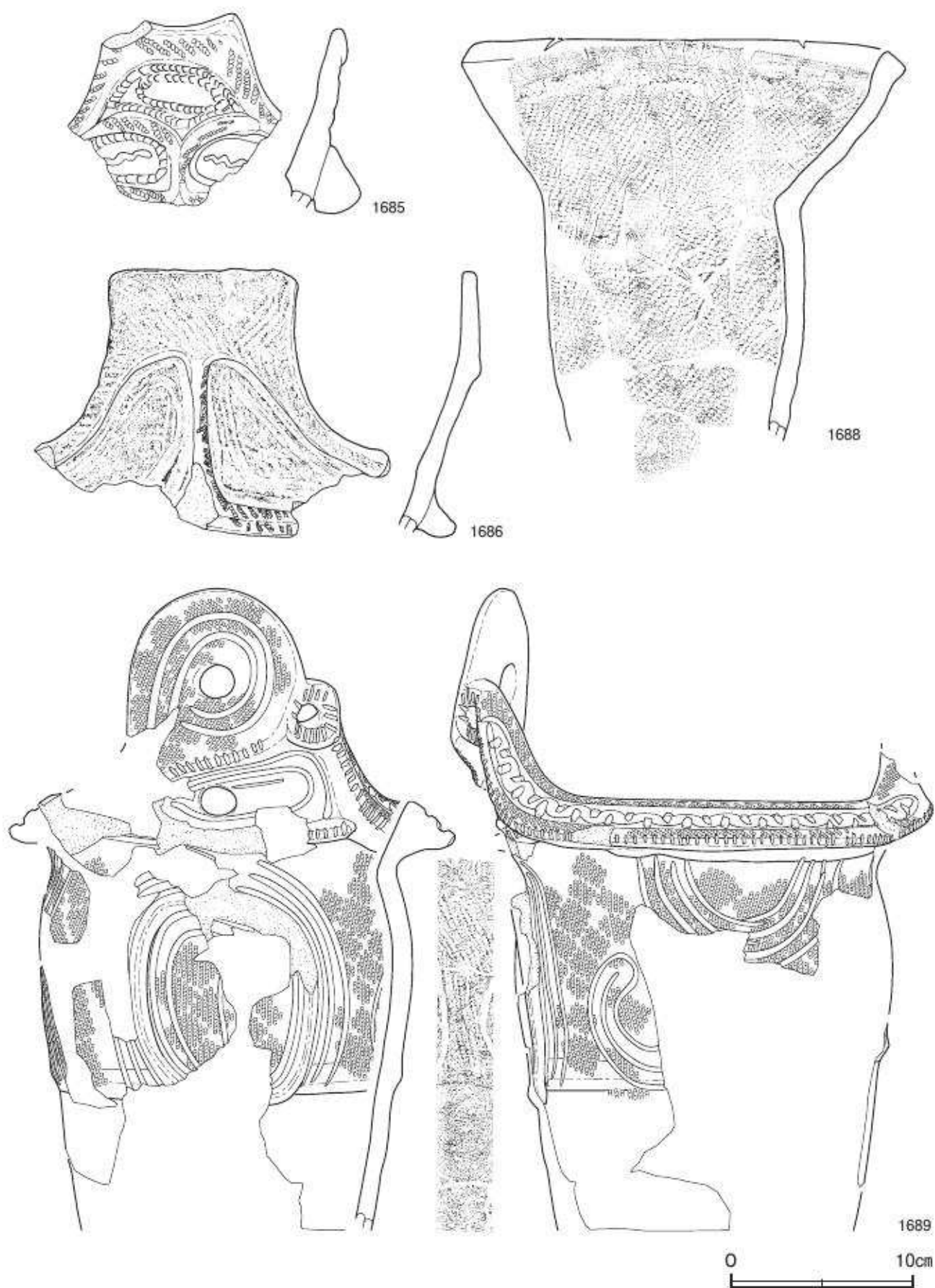
規模と形状 開口部は径 1.33 ~ 1.40 m のほぼ円形である。底面は径 2.75 ~ 2.82 m のほぼ円形で、平坦である。確認面からの深さは 135cm で、壁は中位まで内灣して袋状を呈し、上位は外傾している。

ピット 南西壁寄りに位置し、深さは 22cm である。性格は不明である。

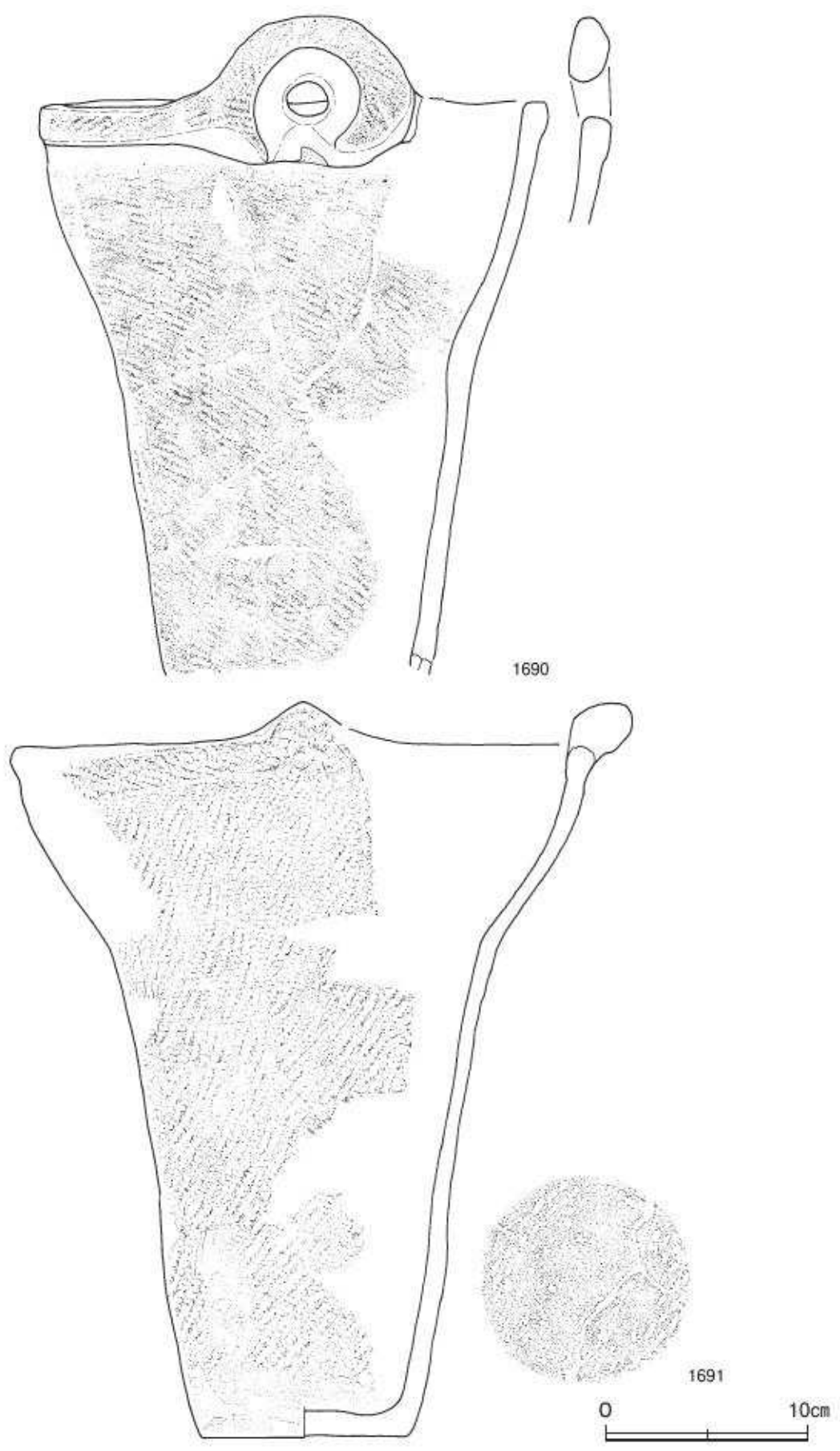
覆土 16 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。17 層は P 1 の覆土である。



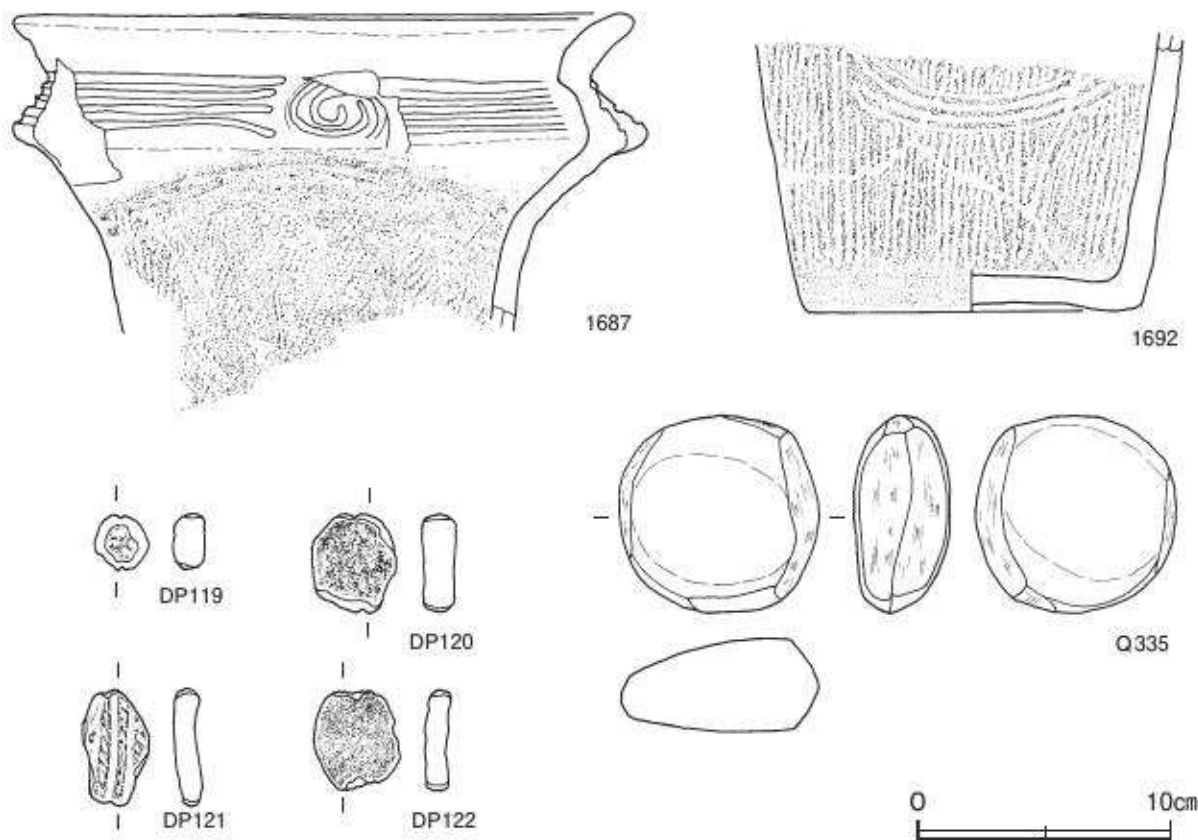
第 585 図 第 673 号土坑実測図



第 586 図 第 673 号土坑出土遺物実測図(1)



第 587 図 第 673 号土坑出土遺物実測図 (2)



第 588 図 第 673 号土坑出土遺物実測図 (3)

土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------|-----------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 10 黒褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック, 炭化粒子少量 | 12 にぶい黄褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 13 黒褐色 | ロームブロック・焼沼バミス微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 14 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子少量 | 15 黒褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子微量 |
| 7 にぶい褐色 | ロームブロック, 炭化粒子微量 | 16 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 8 黒褐色 | ロームブロック少量 | 17 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 9 黒褐色 | 焼土粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片 274 点 (深鉢 273, 浅鉢 1), 土製品 4 点 (土器片錘), 石器 2 点 (敲砥石, 凹石) が, 覆土中層を中心に散乱した状態で出土している。1685 ~ 1691 は覆土中層から出土し, 埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から, 貯蔵穴と考えられる。時期は, 出土土器から中期中葉と考えられる。

第 673 号土坑出土遺物観察表 (第 586 ~ 588 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1685	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁に沿って単節縄文 RL (横・縦) 施文の隆帯貼付。把手中央部から凹隆帯による楕円形区画文。隆帯に沿ってペン先状刺突文。区画内沈線による波状文。	覆土中層	
1686	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子・緑礫	にぶい赤褐色	普通	口縁に沿って単節縄文 RL (縦・横) 施文の隆帯と粒状隆帯による区画文。隆帯に沿って半截竹管文。	覆土中層	
1687	縄文土器	深鉢	24.0	(12.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁下半部 4 本の沈線による横走文・楕円形文・渦巻文。此伏隆帯で割部と区画。割部単節縄文 RL (縦) を籠状に施文。	覆土中層	30% PL158
1688	縄文土器	深鉢	22.6	(22.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁に沿って横ナデ。全面単節縄文 RL (縦) 施文。	覆土中層	70% PL158

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1689	縄文土器	深鉢	[24.5]	(35.3)	—	長石・石英・雲母・黒色粒子・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	波部部孔に沿って2本の沈線文、口縁部縄文施文の隆帯とキザミ目を有する底状隆帯による構内彩区画文、区画内交互刺突文、胴部上半部単節縄文RL(縦)上に隆帯による楕円形文、隆帯に沿って上下に3本の沈線文、胴部下半部段を持ち無文	覆土中層	60% PL158
1690	縄文土器	深鉢	24.7	(32.5)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	口縁に沿って縄文施文の隆帯貼付、胴部単節縄文LR(縦)を縦状に施文	覆土中層	60% PL158
1691	縄文土器	深鉢	[28.4]	36.4	10.4	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁に沿って縄文施文の隆帯貼付、胴部単節縄文RL(縦)を縦状に施文、底面網目状	覆土中層	50% PL158
1692	縄文土器	深鉢	—	(11.0)	[13.4]	長石・石英・雲母・針状炭化物	にぶい橙	普通	隆帯の刺突文上に2本組の半截竹管による張状文、懸垂文	覆土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP19	土器片鉢	22	22	12	5.9	長石・石英	明赤褐色	周縁部研磨 両端にキザミ目	覆土中	
DP10	土器片鉢	39	34	14	231	長石・石英・雲母・赤色粒子・細砂	黒褐色	周縁部粗雑に研磨 両端にキザミ目	覆土中	
DP21	土器片鉢	46	26	11	137	長石・石英・細砂	褐色	周縁部粗雑に研磨 両端にキザミ目	覆土中	
DP12	土器片鉢	39	34	10	163	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	周縁部丁寧な研磨 両端にキザミ目	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q335	燧石	7.8	7.9	3.8	3427	砂岩	円縁の周縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	覆土中	PL173

第 676 号土坑 (第 589・590 図)

位置 調査区西部の C 2 d6 区、標高 28 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 9・33 号堅穴建物、第 682 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は径 1.71 ~ 1.82 m のほぼ円形である。底面は長径 2.22 m、短径 1.96 m の楕円形で、ほぼ平坦である。確認面からの深さは 60cm で、壁は内彎して袋状を呈している。

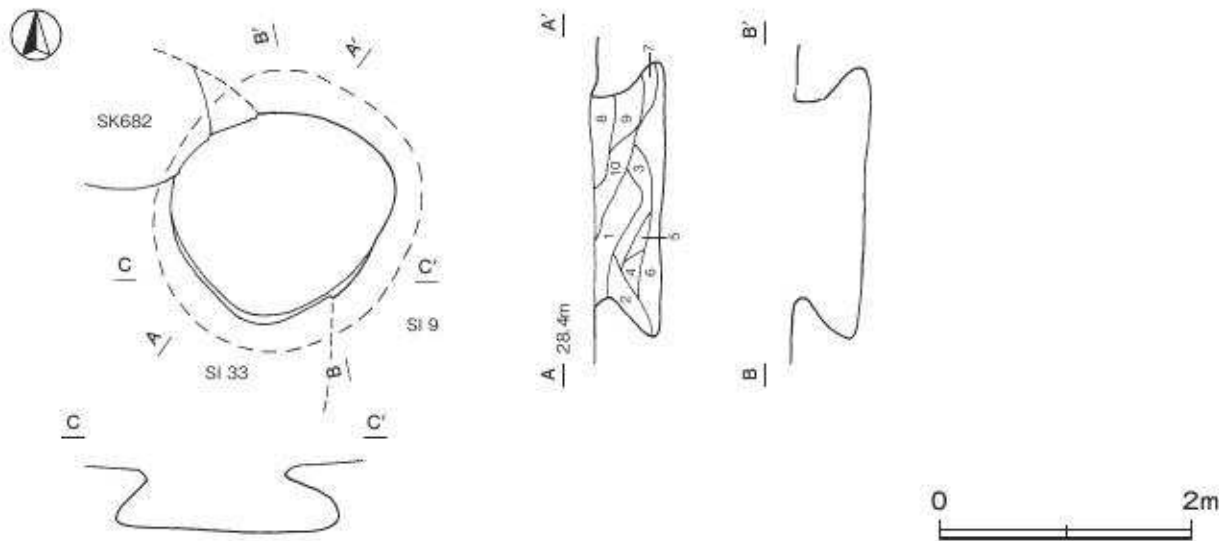
覆土 10 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

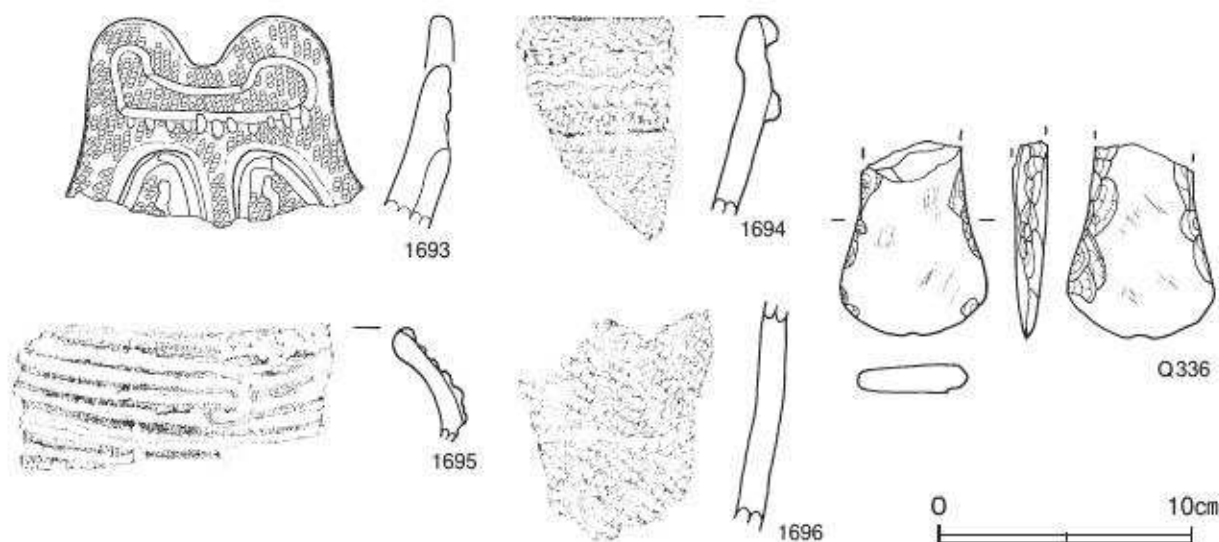
- | | | | |
|----------|------------------|----------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 7 褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 8 にぶい黄褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 9 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 |

遺物出土状況 縄文土器片 52 点 (深鉢)、石器 1 点 (打製石斧) が、覆土中からまばらに出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第 589 図 第 676 号土坑実測図



第 590 図 第 676 号土坑出土遺物実測図

第 676 号土坑出土遺物観察表 (第 590 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1693	縄文土器	深鉢	-	(8.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	単節縄文 RL (縦・斜) 施文の隆帯による区画文 底頂部に沈線による凹字状文・刺突文 隆帯に沿って沈線文	覆土中	PL158
1694	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	断面溝群状の縄文施文の隆帯による区画文 区画内隆帯に沿ってペン先状刺突文 胴部単節縄文 RL (縦) 施文	覆土中	
1695	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	橙	普通	隆帯区画間 5 本の横位沈線文 中央部渦巻文	覆土中	SK663 1671 と同一個体。
1696	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	0 段多糸単節縄文 LR (縦) 施文	覆土中	

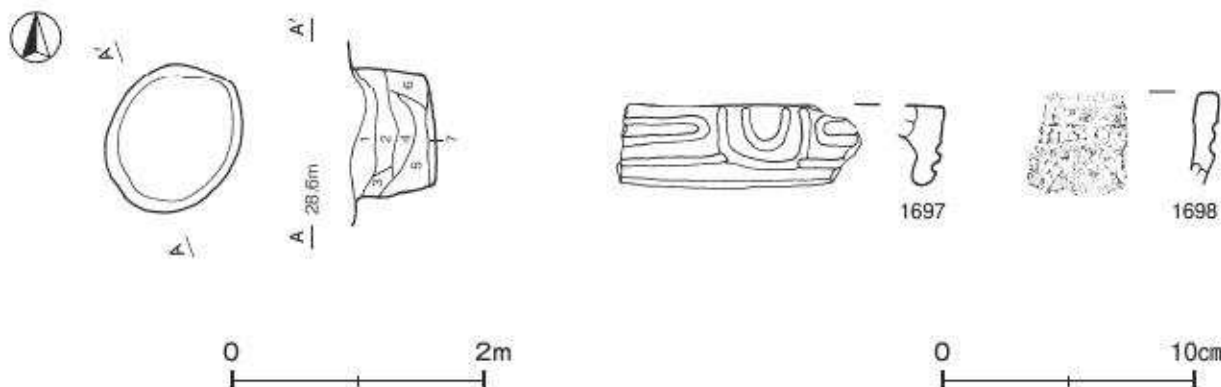
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q336	打製石斧	(7.7)	5.9	1.4	(66.8)	ホルンフェルス	楔形、表裏に自然面 刃部は表裏を研磨 両側縁縁打調整 基部欠損	覆土中	

第 677 号土坑 (第 591 図)

位置 調査区西部の C 2 g 6 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径 1.23 m、短径 1.01 m の楕円形で、長径方向は N-42°-E である。底面は平坦で、深さは 69cm である。壁はほぼ直立している。

覆土 7 層に分層できる。ロームブロックを含む層が堆積していることから、埋め戻されている。



第 591 図 第 677 号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片6点(深鉢4, 浅鉢1, 器台1)が, 覆土中からまばらに出土している。

所見 規模と形状から, 貯蔵穴と考えられる。時期は, 出土土器から中期中葉と考えられる。

第677号土坑出土遺物観察表(第591図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1697	縄文土器	器台	-	(34)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	轉部沈線による長楕円形文・U字文	覆土中	
1698	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁に沿って隆帯貼付 有部沈線による横走文・短横文	覆土中	

第680号土坑(第592図)

位置 調査区西部のC2h6区, 標高29mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第20号堅穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は径1.79~1.89mの不整形円形である。底面は長径2.75m, 短径2.42mの楕円形で, 平坦である。確認面からの深さは89cmで, 壁は中位まで内彎して袋状を呈し, 上位は外傾している。

ピット 2か所。P1は北部に位置し, 径48cmほどの円形で, 深さ40cmである。位置や形状から, 補助的な貯蔵施設の可能性がある。P2は北東部に位置し, 径18cmほどの円形で, 深さは30cmである。性格不明である。

覆土 9層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから, 埋め戻されている。

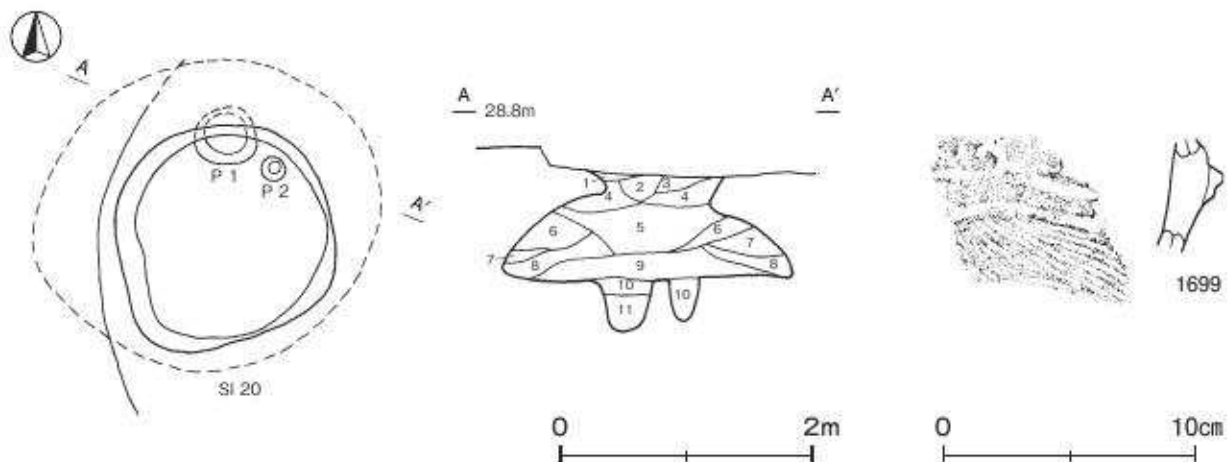
第10・11層はP1・P2の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 褐色 | ローム粒子多量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 10 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 11 褐色 | ロームブロック中量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片14点(深鉢), 石器1点(凹石)が, 覆土中からまばらに出土している。

所見 規模と形状から, 貯蔵穴と考えられる。時期は, 出土土器から中期中葉と考えられる。



第592図 第680号土坑・出土遺物実測図

第 680 号土坑出土遺物観察表 (第 592 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1699	刺文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	浅線を作る隆帯による区画文 無節刺文L(縦) 隆文	覆土中	

第 681 号土坑 (第 593 図)

位置 調査区西部の C 2 e6 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 717 号土坑を掘り込んでいる。

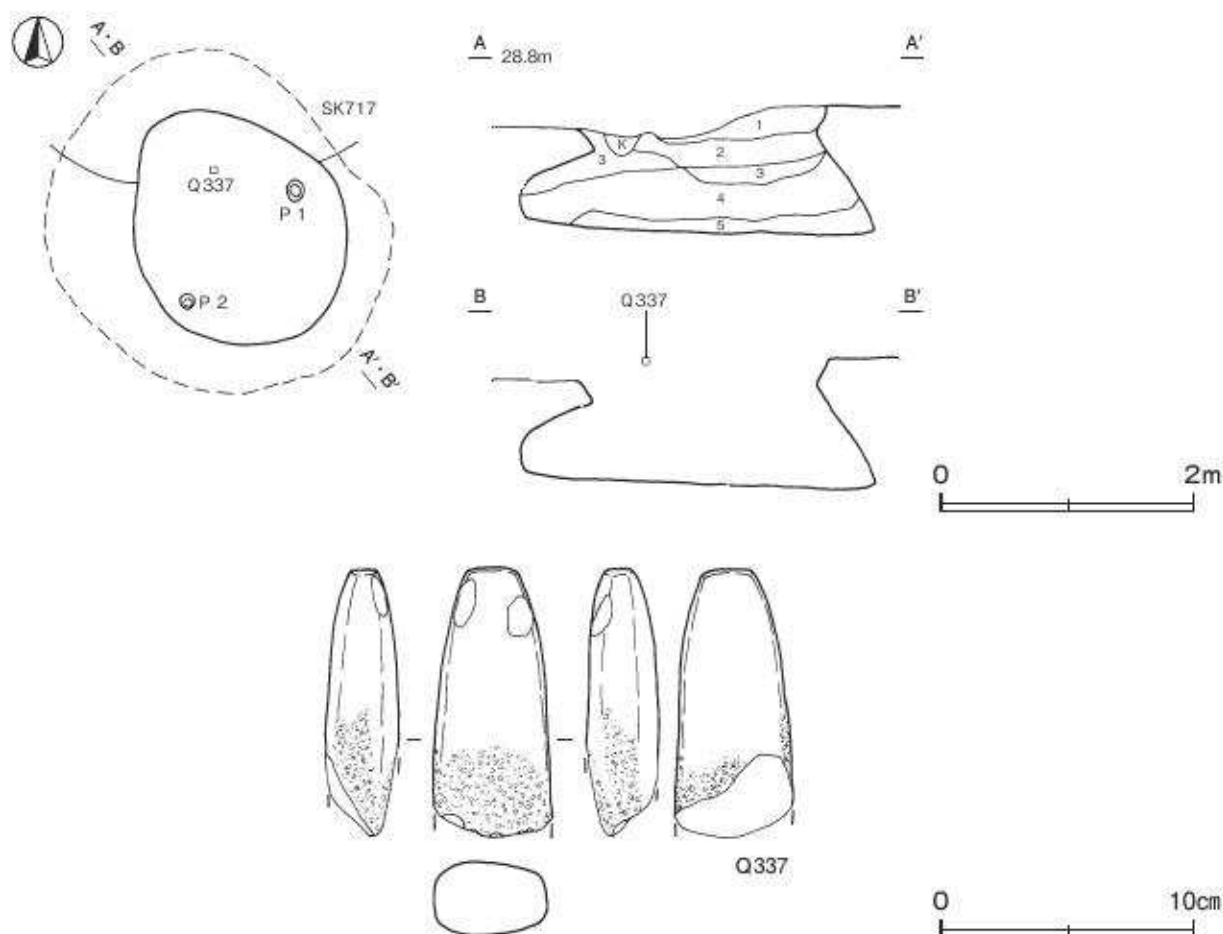
規模と形状 開口部は長径 2.02 m、短径 1.71 m の楕円形で、長径方向は N - 40° - W である。底面は長径 2.84 m、短径 2.38 m の楕円形で、平坦である。確認面からの深さは 101 cm で、壁は中位まで内彎して袋状を呈し、上位は外傾している。

ピット 2 か所。P 1 は北東寄りに位置し、深さは 57 cm である。P 2 は南西寄りに位置し、深さは 15 cm である。いずれも位置や形状から、柱穴の可能性はある。

覆土 5 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|----------|------------------|----------|----------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子・鹿沼バミスブロック微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック、炭化粒子少量 | | |



第 593 図 第 681 号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片 22 点（深鉢）、石器 1 点（磨製石斧）が、覆土中からまばらに出土している。Q337 は覆土上層から出土し、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

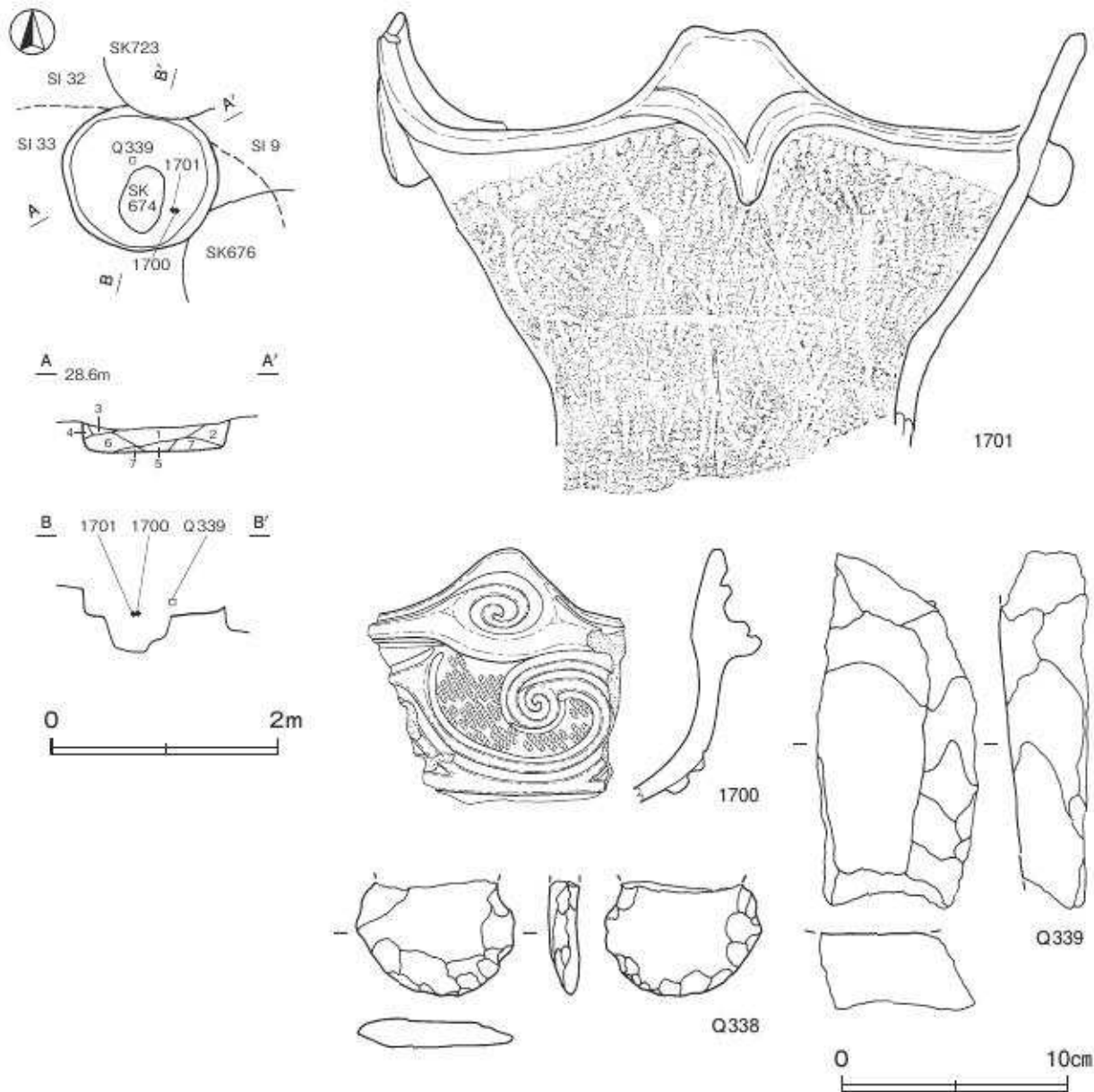
所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期と考えられるが、詳細は不明である。

第 681 号土坑出土遺物観察表（第 593 図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q337	磨製石斧	(10.7)	4.4	2.9	(21.35)	ホルンフェルス	定角式 全面研磨 刃部欠損 下端部微細な敲打痕	覆土上層	PL167

第 682 号土坑（第 594 図 PL94）

位置 調査区西部の C 2 d5 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。



第 594 図 第 682 号土坑・出土遺物実測図

重複関係 第676号土坑を掘り込み、第9・32・33号竪穴建物、第674・723号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.40 m、短径1.23 mの楕円形で、長径方向はN-77°-Wである。底面は平坦である。深さは23cmで、壁は直立している。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	6	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	7	明褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4	明褐色	ローム粒子多量			

遺物出土状況 縄文土器片52点（深鉢）、石器2点（打製石斧、砥石）が、覆土中から散乱した状態で出土している。1700・1701は底面から出土し、埋め戻される前に遺棄されたと思われる。Q339は覆土中層から出土し、埋土と一緒に投棄されたと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は出土土器から、中期中葉と考えられる。

第682号土坑出土遺物観察表（第594図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1700	縄文土器	深鉢	-	(11.2)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	波瀾部隆帯による渦巻文、単節縄文RL（横）上に隆帯による渦巻文・網光文	底面	PL159
1701	縄文土器	深鉢	[31.5]	(19.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	波頂部下にV字状の隆帯文、口縁に沿って隆帯貼付、隆帯に沿って連続爪形文、胴部単節縄文RL（縦・斜）施文	底面	30% PL159

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q338	打製石斧	(5.1)	7.0	1.4	(67.3)	ホルンフェルス	分銅形・表裏に自然面、執り部・刃部は表裏を敲打、片刃部欠損	覆土中	
Q339	砥石	(15.8)	(4.0)	(7.2)	(525.3)	砂岩	表面に曲面を帯びた砥面、表面自然面、割線部剥落	覆土中層	

第686号土坑（第595図）

位置 調査区西部のC2e5区、標高29 mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第697号土坑を掘り込み、第33号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.48 m、短径1.25 mの楕円形で、長径方向はN-6°-Wである。底面は平坦である。深さは40cmで、壁はほぼ直立している。

ピット 北西壁際に位置し、径20cmほどの円形で、深さは26cmである。形状から、柱穴と考えられる。

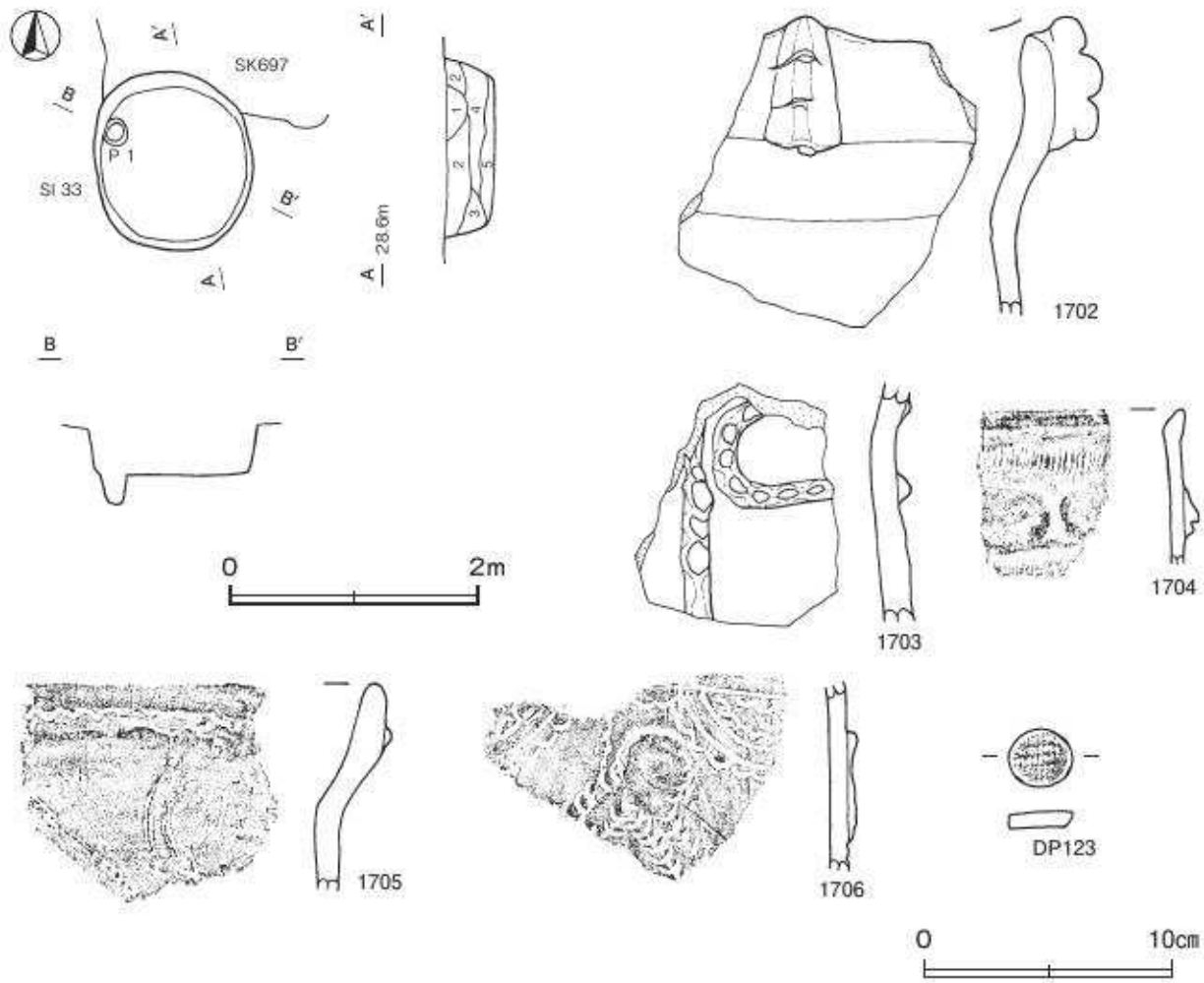
覆土 5層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	4	極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック中量
3	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量			

遺物出土状況 縄文土器片123点（深鉢120、浅鉢3）、土製品1点（土器片円盤）、石器1点（磨石）が、覆土中から散乱した状態で出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期前葉と考えられる。



第 595 図 第 686 号土坑・出土遺物実測図

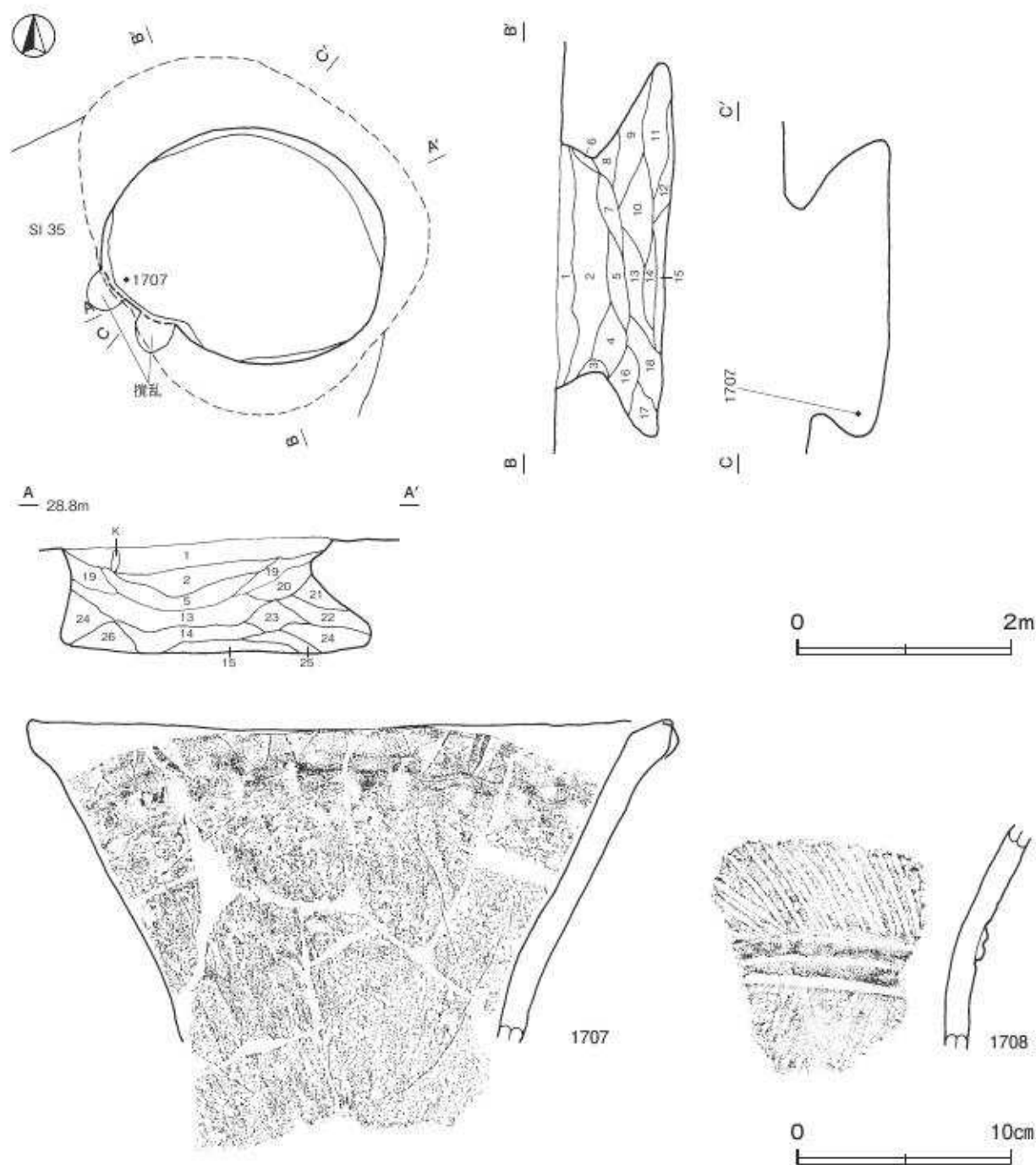
第 686 号土坑出土遺物観察表 (第 595 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1702	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい赤褐色	普通	波頂部にキザミ目を有する隆帯貼付 外・内面横方向のナデ	覆土中	
1703	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粘土	灰褐色	普通	指頭押圧文を有する隆起線による楕円形文・垂下文	覆土中	
1704	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口縁に沿って隆帯貼付 隆帯下連続水形文 断面三角形の隆起線による楕円形区画文	覆土中	
1705	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粘土	にぶい褐色	普通	隆帯に沿って沈線による波状文 断面三角形の隆起線による区画文 区画内2本の有筋沈線による文様描画	覆土中	
1706	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	隆起線による区画文 区画内隆起線による波状文・円文 隆起線に沿って半銃竹管による刺突文	覆土中	
DP123	土製円盤		2.4	2.6	0.6	5.3	長石・石英・雲母	にぶい褐色	周縁部丁寧な研削	覆土中	

第 687 号土坑 (第 596 図 PL94)

位置 調査区西部の C 2 f6 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 35 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。



第 596 図 第 687 号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 開口部は長径 2.70 m、短径 2.23 m の不整楕円形で、長径方向は $N - 75^\circ - W$ である。底面は長径 3.47 m、短径 2.82 m の楕円形で、平坦である。確認面からの深さは 106cm で、壁は中位まで内彎して袋状を呈し、上位は外傾している。

覆土 26層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	ローム粒子中量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	7 黒褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック少量	8 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	9 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック、炭化粒子少量、焼土粒子微量	10 黒褐色	ロームブロック中量

11	暗褐色	ローム粒子中量、炭化物微量	19	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
12	褐色	ローム粒子多量	20	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
13	暗褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	21	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
14	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	22	にぶい褐色	ロームブロック少量
15	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	23	褐色	ロームブロック中量、炭化物微量
16	暗褐色	ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量	24	黒褐色	ローム粒子少量
17	にぶい褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	25	褐色	ロームブロック中量、炭化物少量
18	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	26	黒褐色	ロームブロック・鹿沼ガミス少量

遺物出土状況 縄文土器片 104 点（深鉢）、石器 4 点（磨製石斧 2、磨石 1、石錘 1）、剥片 1 点（チャート）が、覆土中から散乱した状態で出土している。1707 は覆土中層から出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第 687 号土坑出土遺物観察表（第 596 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1707	縄文土器	深鉢	[30.0]	[15.1]	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口唇部指頭押し・口縁に沿って隆帯貼付・外面縦位のナデ	覆土中層	30%、PL158
1708	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	頸部斜位の沈線文・2条の隆帯で頸部と区画・単節縄文 RL（縦）施文	覆土中	

第 689 号土坑（第 597・598 図）

位置 調査区西部の C 2 d7 区、標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 9・36 号堅穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部は長径 1.66 m、短径 1.45 m の不整楕円形で、長径方向は N - 31° - E である。底面は長径 1.62 m、短径 1.45 m の楕円形で、平坦である。確認面からの深さは 70 cm で、西壁は外傾し、東壁は内彎して袋状を呈している。

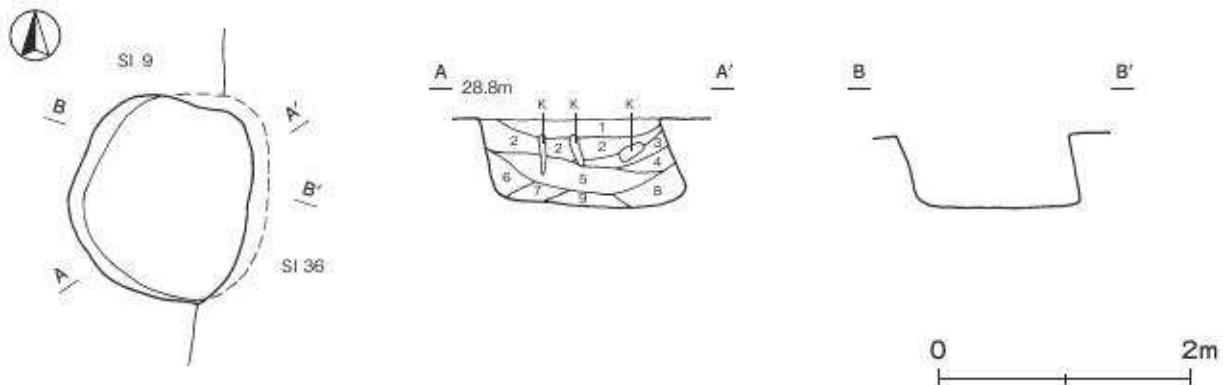
覆土 9 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

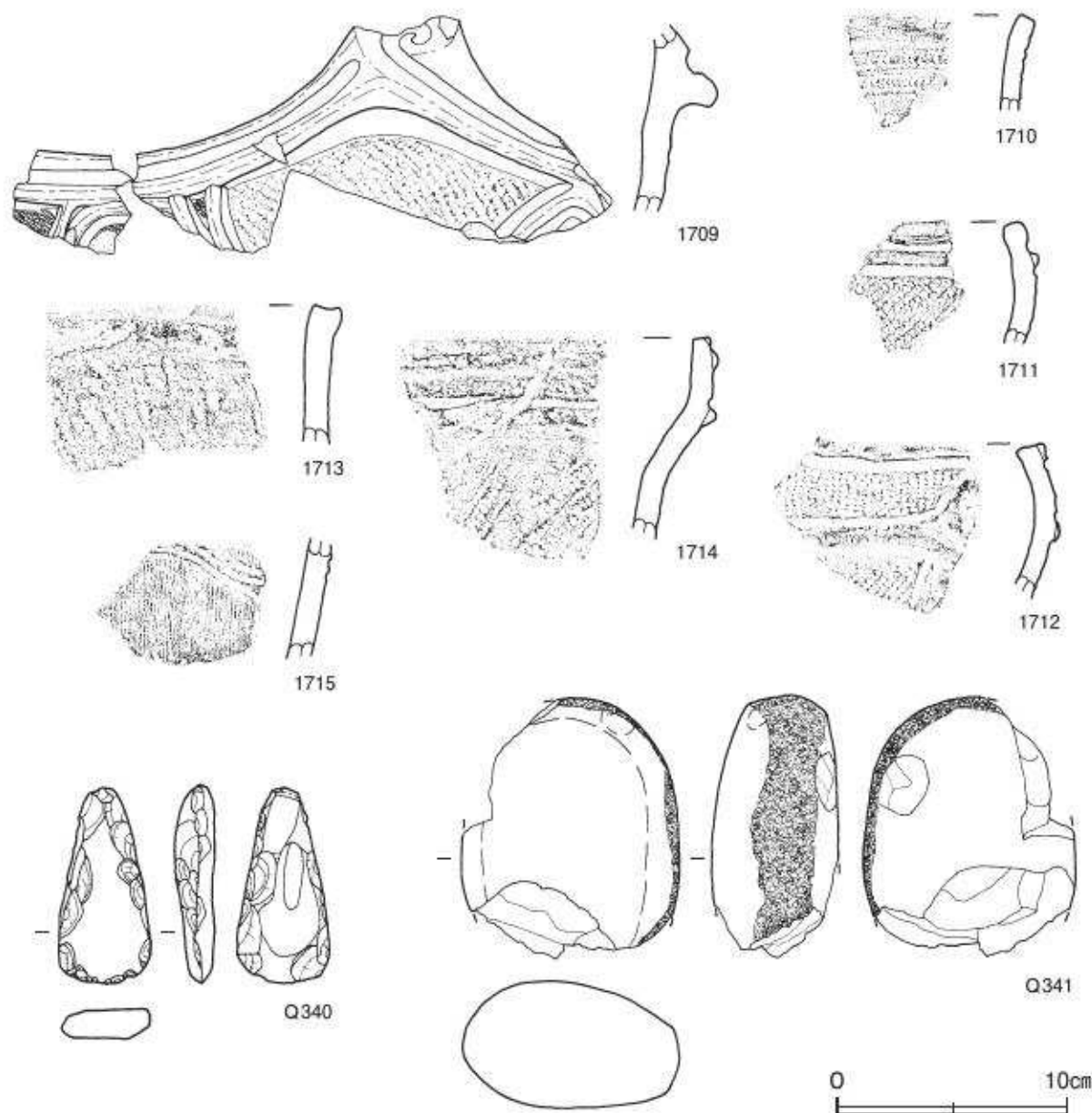
1	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	6	にぶい褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	7	明褐色	ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
3	褐色	ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	8	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量	9	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
5	橙褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量			

遺物出土状況 縄文土器片 221 点（深鉢）、石器 2 点（打製石斧、敲石）が、覆土中から散乱した状態で出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第 597 図 第 689 号土坑実測図



第 598 図 第 689 号土坑出土遺物実測図

第 689 号土坑出土遺物観察表 (第 598 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1709	縄文土器	深鉢	-	(10.2)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	口唇部太沈線文・腹面太沈線による高巻文 0枚多条単節縄文 RL (横) 上に沈線を伴う 2 条の隆帯による区画文	覆土中	
1710	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい赤褐色	普通	口縁に沿って 2 列の連続爪形文	覆土中	
1711	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	明褐色	普通	口縁に沿って太沈線を伴う 2 条の隆帯貼付 0枚多条単節縄文 LR (横) 施文	覆土中	
1712	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	灰褐色	普通	単節縄文 RL (斜) 上に沈線を伴う隆帯による区 画文・胴部同原体 (縦) 上に沈線間帯消垂文	覆土中	
1713	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	暗赤褐色	普通	口唇部中央部凹み 無節 L (縦) 施文	覆土中	
1714	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	単節縄文 RL (横) 上に沈線による区画文・胴 部同原体 (縦) 施文	覆土中	
1715	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	腹位の熱余文上に 3 本組の沈線による弧状文	覆土中	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
Q340	打製石斧	8.5	4.0	1.8	78.1	角閃岩	撥形・両側縁敲打 両部は表裏を研磨 表裏面に棒状の研磨痕 砥石に使用			覆土中	PL165
Q341	敲石	(11.3)	9.4	5.5	(750.0)	砂岩	表裏面研磨 片側側縁部微細な敲打痕 磨石兼用			覆土中	

第 690 号土坑 (第 599 図)

位置 調査区西部の C 2 d6 区, 標高 28 m ほどの台地縁辺部に位置している。

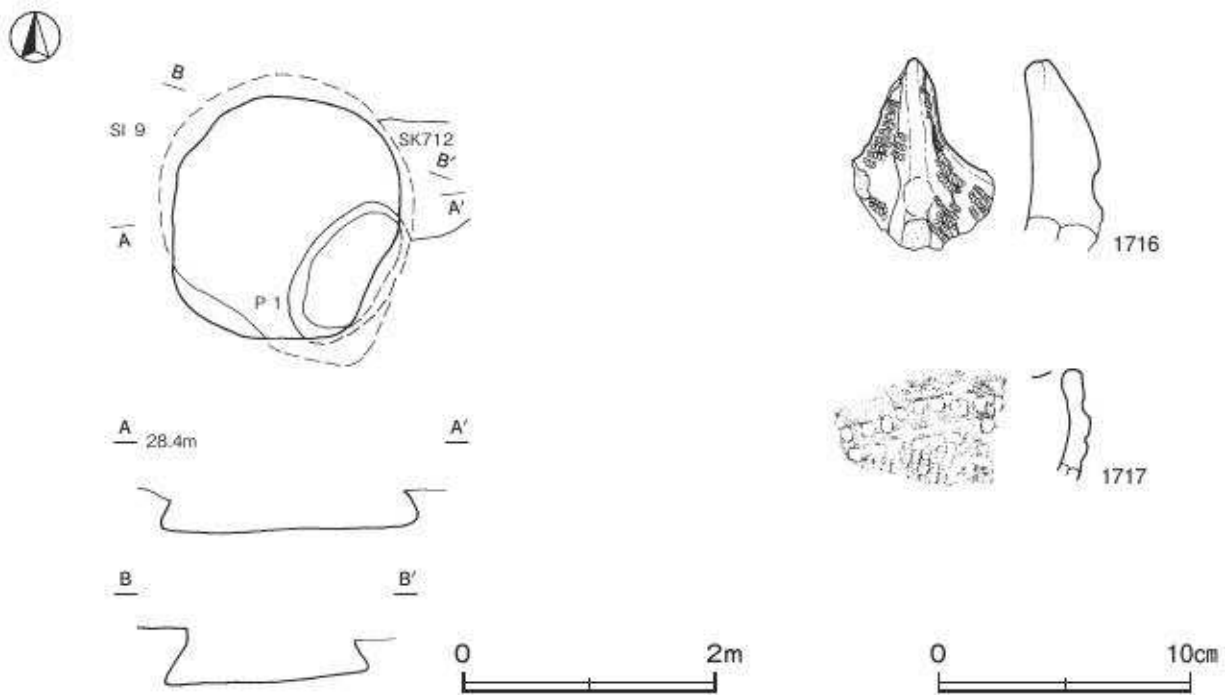
重複関係 第 712 号土坑を掘り込み, 第 9 号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は径 1.75 ~ 1.90 m のほぼ円形である。底面は長径 2.38 m, 短径 1.96 m の不整楕円形で, ほぼ平坦である。確認面からの深さは 44cm で, 壁は南西部を除いて内彎して袋状を呈している。

ピット 南東壁際に位置し, 長径 116cm, 短径 75cm の楕円形で, 深さ 14cm である。位置や形状から, 補助的な貯蔵施設の可能性がある。

遺物出土状況 縄文土器片 26 点 (深鉢), 石器 1 点 (磨石) が, 覆土中からまばらに出土している。

所見 規模と形状から, 貯蔵穴と考えられる。時期は, 出土土器から中期中葉と考えられる。



第 599 図 第 690 号土坑・出土遺物実測図

第 690 号土坑出土遺物観察表 (第 599 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1716	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粘土・凝礫	灰褐色	普通	液頂部から液頸圧痕のある陸帯垂下 陸帯縁部半節縄文 LR (縦) 筋文	覆土中	
1717	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母 にぶい縄		普通	口縁に沿って 2 列の円形刺突文 (縦) 上に沈線による曲線文	覆土中	

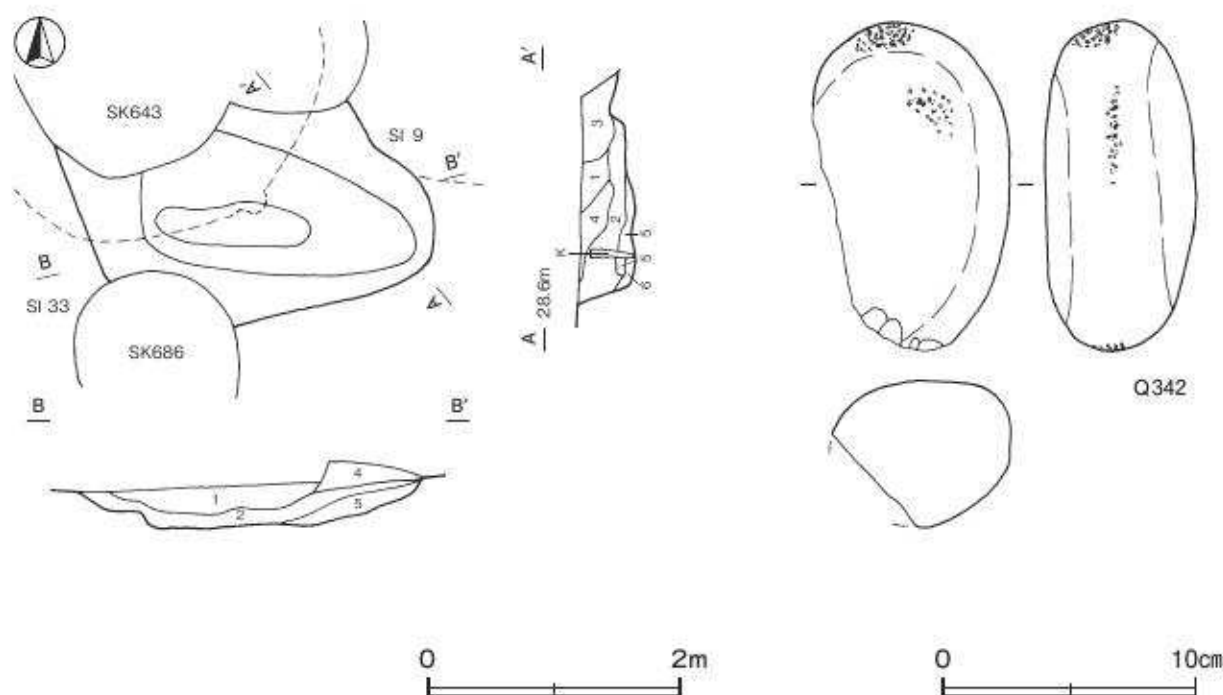
第 697 号土坑 (第 600 図)

位置 調査区西部の C 2 e5 区, 標高 29 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 9・33 号竪穴建物, 第 643・686 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部を第 643 号土坑に掘り込まれているため, 南北軸は 1.73 m しか確認できなかった。東西軸は 2.74 m で, 不定形である。底面は凹凸がある。深さは 40cm で, 壁は外傾している。

覆土 6 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから, 埋め戻されている。



第600図 第697号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 灰黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック、焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 縄文土器片 25 点（深鉢）、石器 1 点（敲石）が、覆土中からまばらに出土している。

所見 性格は不明である。時期は、出土土器から中期と考えられるが、詳細は不明である。

第697号土坑出土遺物観察表（第600図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q342	敲石	13.1	(7.8)	6.0	(717.6)	砂岩	両面磨り面 端部微細な敲打痕 側面部欠損 磨石兼用	覆土中	

第710号土坑（第601図）

位置 調査区西部のC 2 e7区、標高29mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第717号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.05m、短径1.76mの不整楕円形で、長径方向はN-70°-Wである。底面は平坦で、深さは43cmである。壁はほぼ直立している。

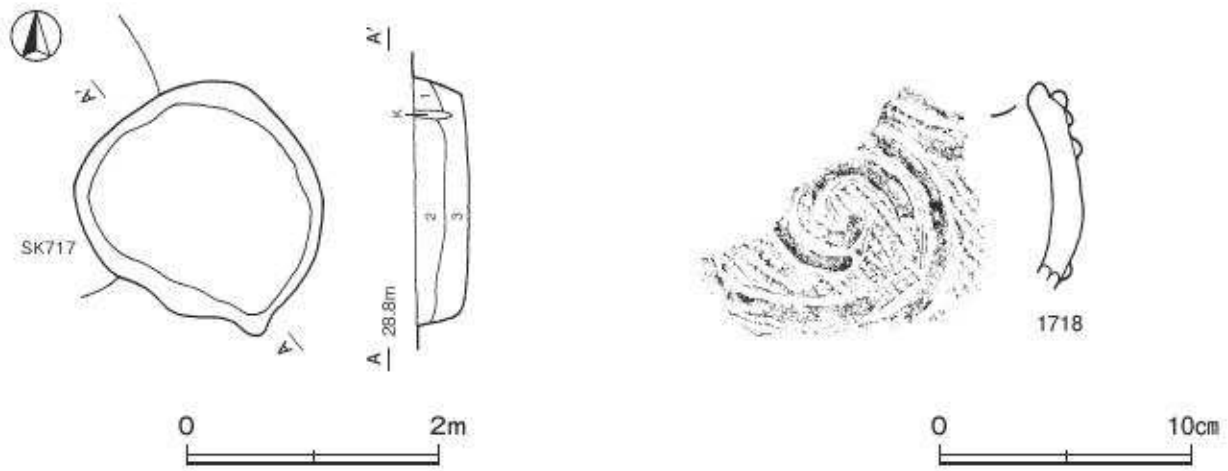
覆土 3層に分層できる。暗褐色土がレンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片 56 点（深鉢）が、覆土中からまばらに出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



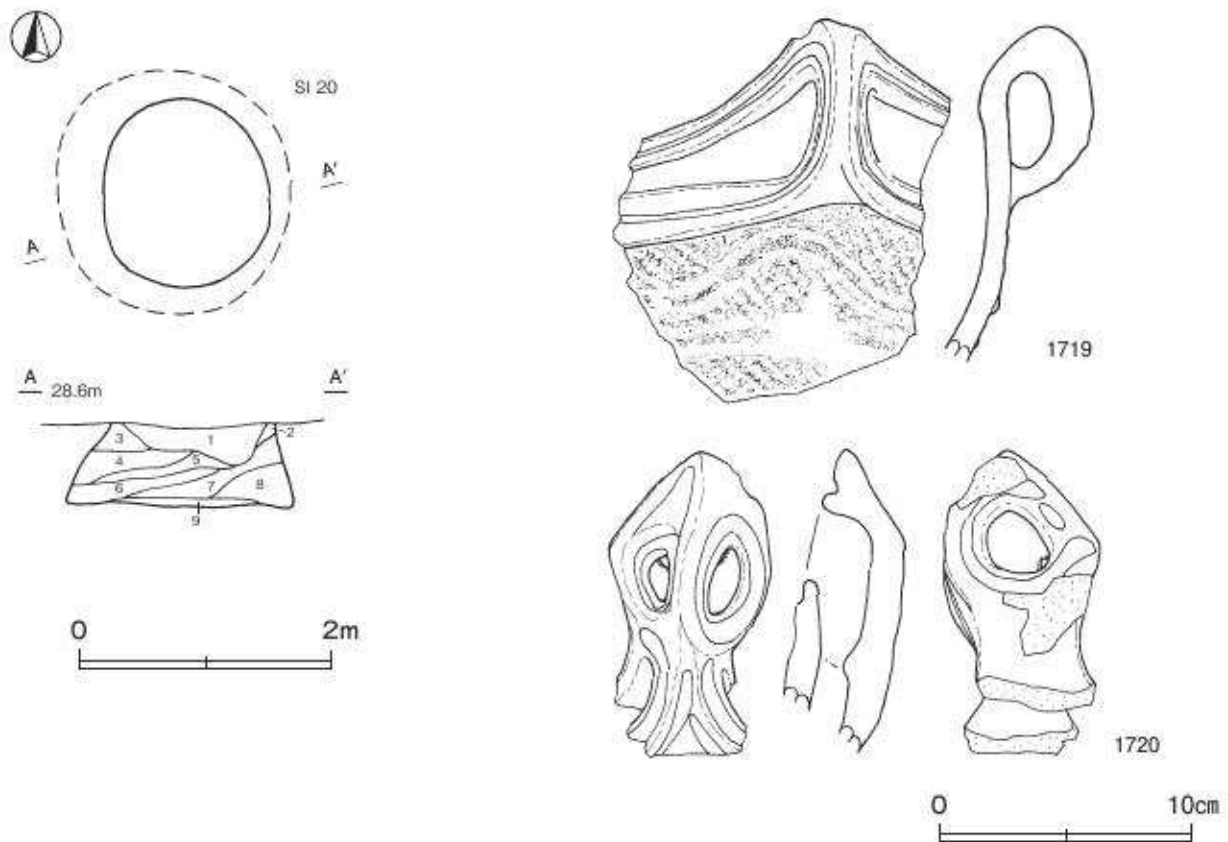
第601図 第710号土坑・出土遺物実測図

第710号土坑出土遺物観察表(第601図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1718	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土	灰褐色	普通	口唇部沈線が一周。早期縄文LR(縦)上に2 条の隆帯による渦巻文	掘土中	

第711号土坑(第602図)

位置 調査区西部のC2g6区、標高29mほどの台地縁辺部に位置している。



第602図 第711号土坑・出土遺物実測図

重複関係 第20号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径1.48m、短径1.30mの楕円形で、長径方向はN-26°-Wである。底面は長径2.02m、短径1.86mの楕円形で、平坦である。確認面からの深さは62cmで、壁は内彎して袋状を呈している。

覆土 9層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック微量	8 暗褐色	ロームブロック微量
4 黒褐色	ロームブロック少量	9 暗褐色	ロームブロック少量
5 黒褐色	ローム粒子微量		

遺物出土状況 縄文土器片15点（深鉢13、浅鉢2）が、覆土中からまばらに出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第711号土坑出土遺物観察表（第602図）

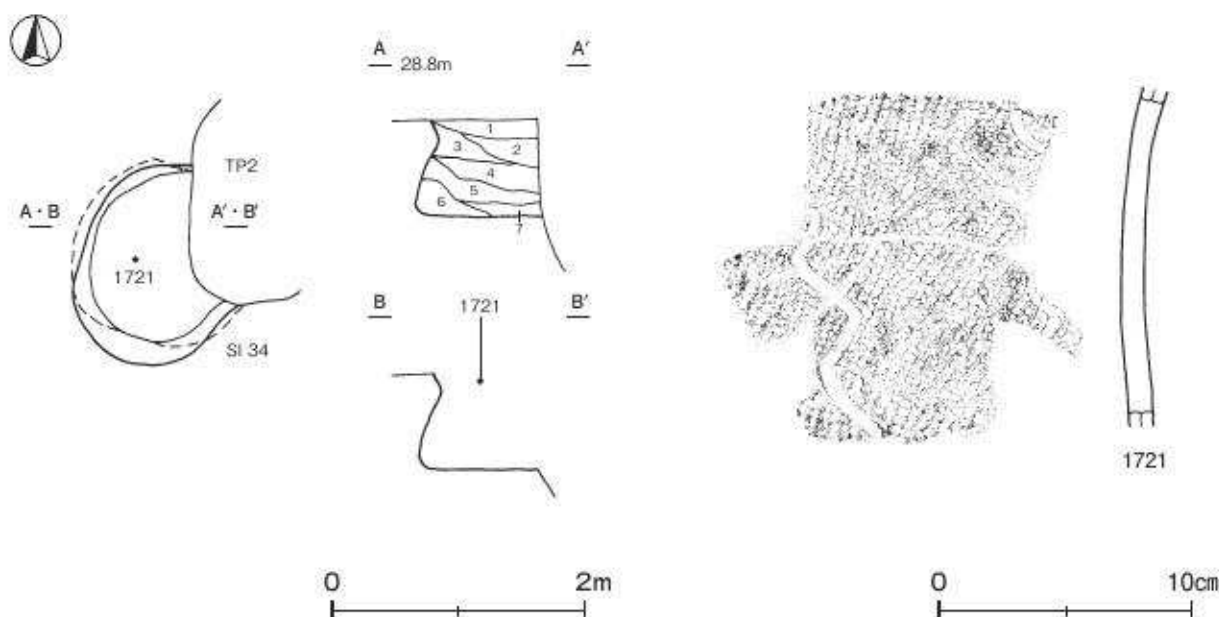
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1719	縄文土器	深鉢	-	(15.1)	-	長石・石英・雲母・緑礫	灰褐色	普通	口縁部上半背割の隆帯による楕円形区画文、口縁部下半沈線を伴う隆帯により胴部と区画区画内半部縄文LR（縦）上に同隆帯による波状文	覆土中	
1720	縄文土器	深鉢	-	(12.0)	-	長石・石英・雲母・緑礫	にぶい赤褐色	普通	剣先状の中空把手 孔に沿って太沈線文	覆土中	

第715号土坑（第603図）

位置 調査区西部のC27区、標高29mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第34号竪穴建物、第2号陥し穴に掘り込まれている。

規模と形状 北東部を第2号陥し穴に掘り込まれているため、確認できた北東・南西径は1.46m、北西・南東径は1.32mで、長径方向はN-25°-Eの楕円形と推定できる。底面は、確認できた長径が1.58m、短径が1.30mで、平坦である。確認面からの深さは78cmで、壁は北西部が内彎して、袋状を呈している。



第603図 第715号土坑・出土遺物実測図

覆土 7層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|----------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 6 におい黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 7 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 4 明褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片6点（深鉢）が、覆土中からまばらに出土している。1721は覆土上層から出土し、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第715号土坑出土遺物観察表（第603図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1721	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	におい橙	普通	単節縄文RL（縦・斜）上に輪行沈線が垂下	覆土上層	

第716号土坑（第604図）

位置 調査区西部のC2f7区、標高29mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第34号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径1.80m、短径1.50mの楕円形で、長径方向はN-8°-Wである。底面は長径2.22m、短径1.67mの楕円形で、平坦である。確認面からの深さは58cmで、壁は内彎して袋状を呈している。

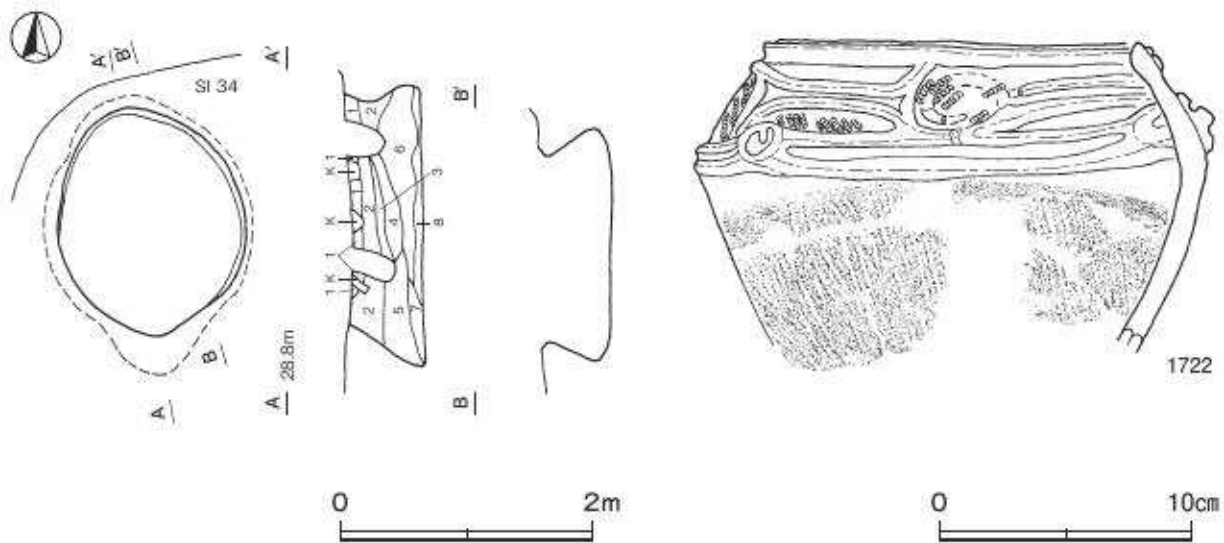
覆土 8層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|----------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 6 におい黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 7 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 4 明褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 縄文土器片3点（深鉢2、鉢1）が、覆土中からまばらに出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第604図 第716号土坑・出土遺物実測図

第716号土坑出土遺物観察表（第604図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1722	縄文土器	鉢	14.2	(12.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口縁部管状隆帯による区画文・区画内隆帯による弧状文・渦巻文・胴部単筋縄文LR（縦・斜） 施文	覆土中	10% PL159

第723号土坑（第605図）

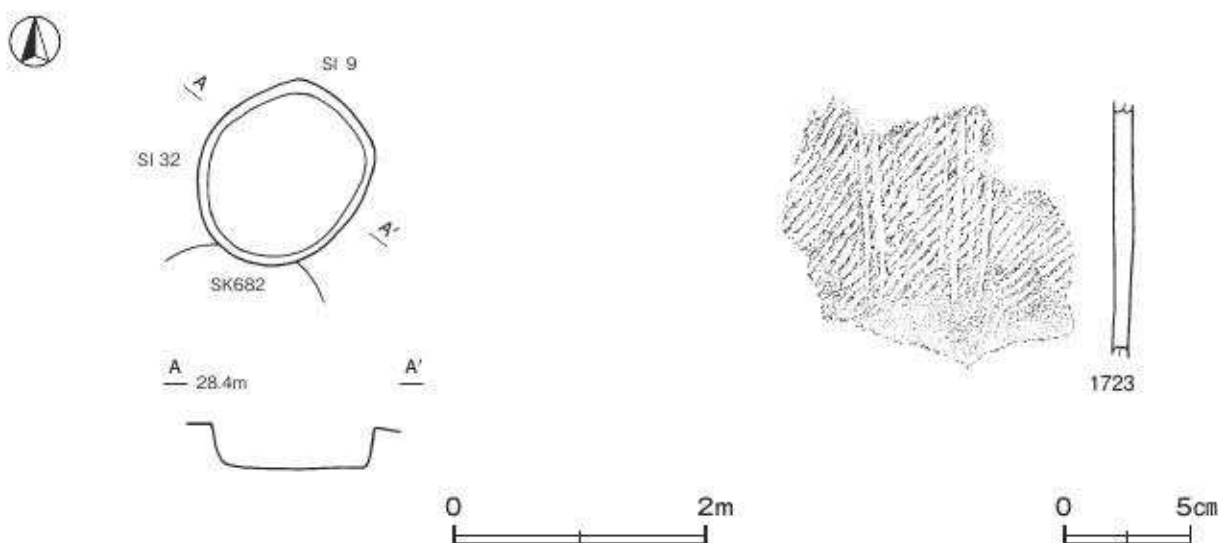
位置 調査区西部のC2d6区、標高28mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第32号竪穴建物跡、第682号土坑を掘り込み、第9号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.50m、短径1.34mの楕円形で、長径方向はN-45°-Eである。底面は平坦である。深さは33cmで、壁はほぼ直立している。

遺物出土状況 縄文土器片2点（深鉢）が、覆土中からまばらに出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第605図 第723号土坑・出土遺物実測図

第723号土坑出土遺物観察表（第605図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1723	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい橙	普通	無筋縄文LR（縦）上に手載竹管による懸垂文 下部部横方向のナデ	覆土中	

第729号土坑（第606図）

位置 調査区北部中央のC3b4区、標高29mほどの台地中央部に位置している。

重複関係 第336号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部は長径1.67m、短径1.36mの楕円形で、長径方向はN-45°-Wである。底面は長径1.74m、短径1.33mの楕円形で、平坦である。深さは87cmで、壁は北東部が直立し、その他はわずかに内傾している。

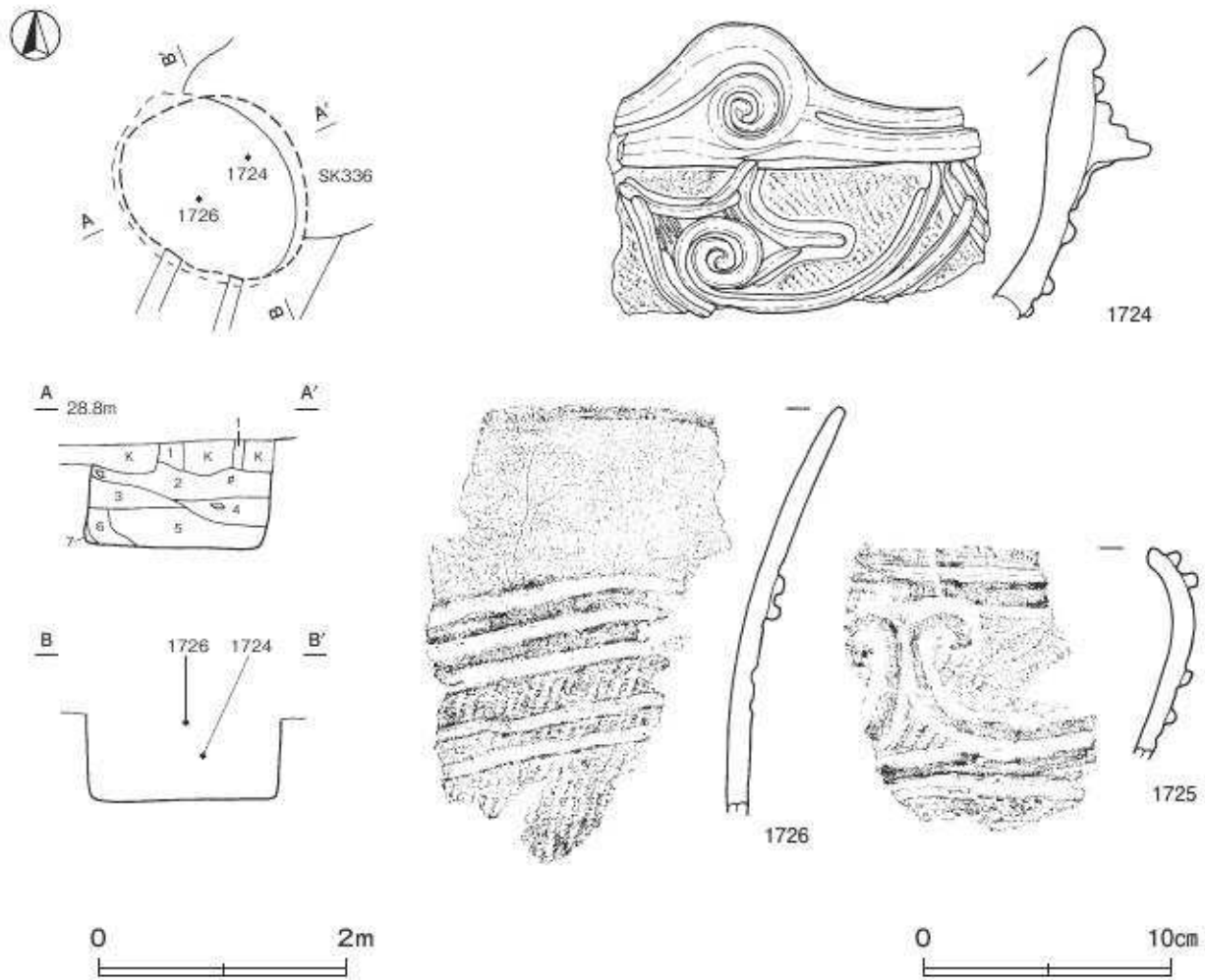
覆土 7層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片3点（深鉢）が、覆土中からまばらに出土している。1724は覆土中層から、1726は覆土上層からそれぞれ出土し、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

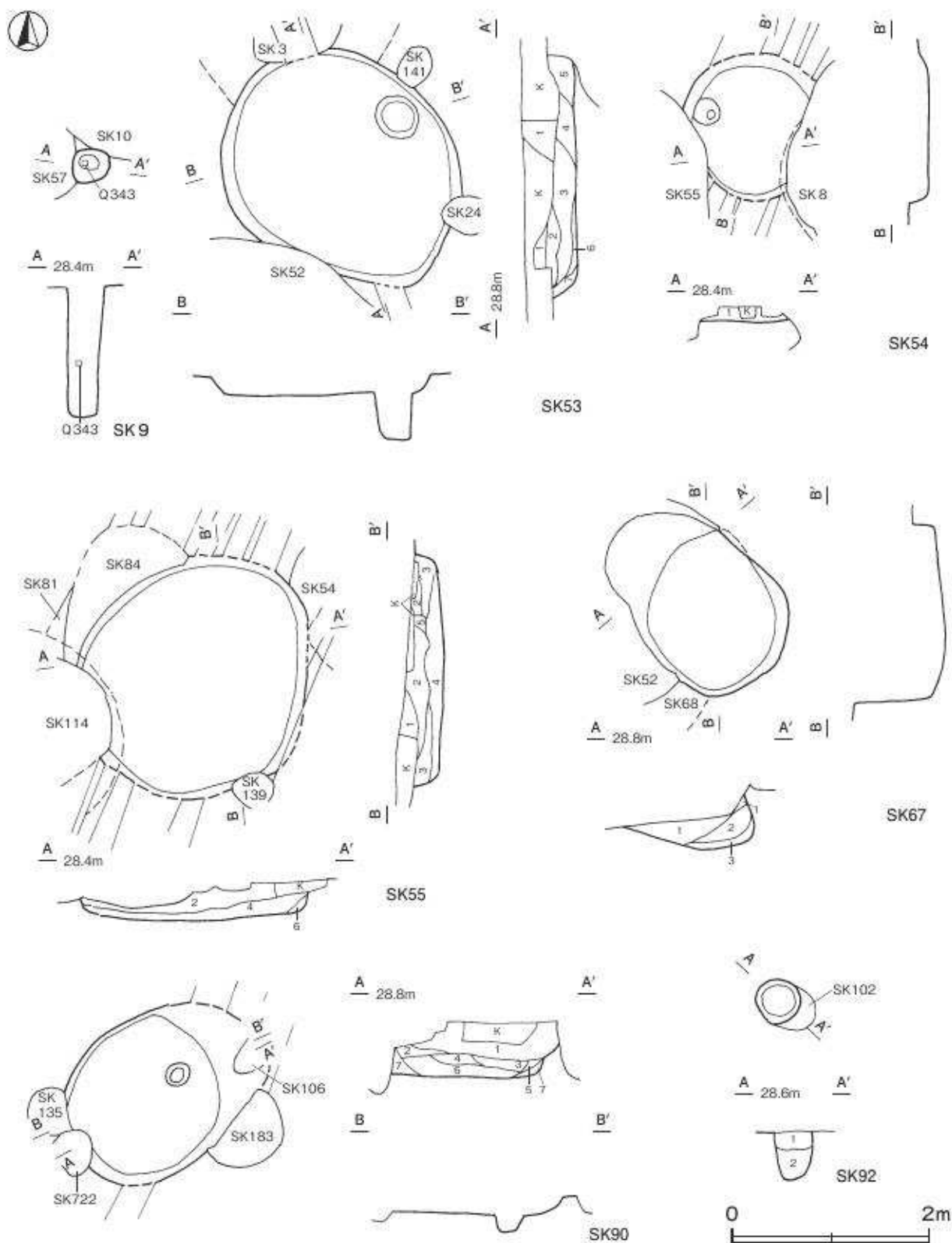


第606図 第729号土坑・出土遺物実測図

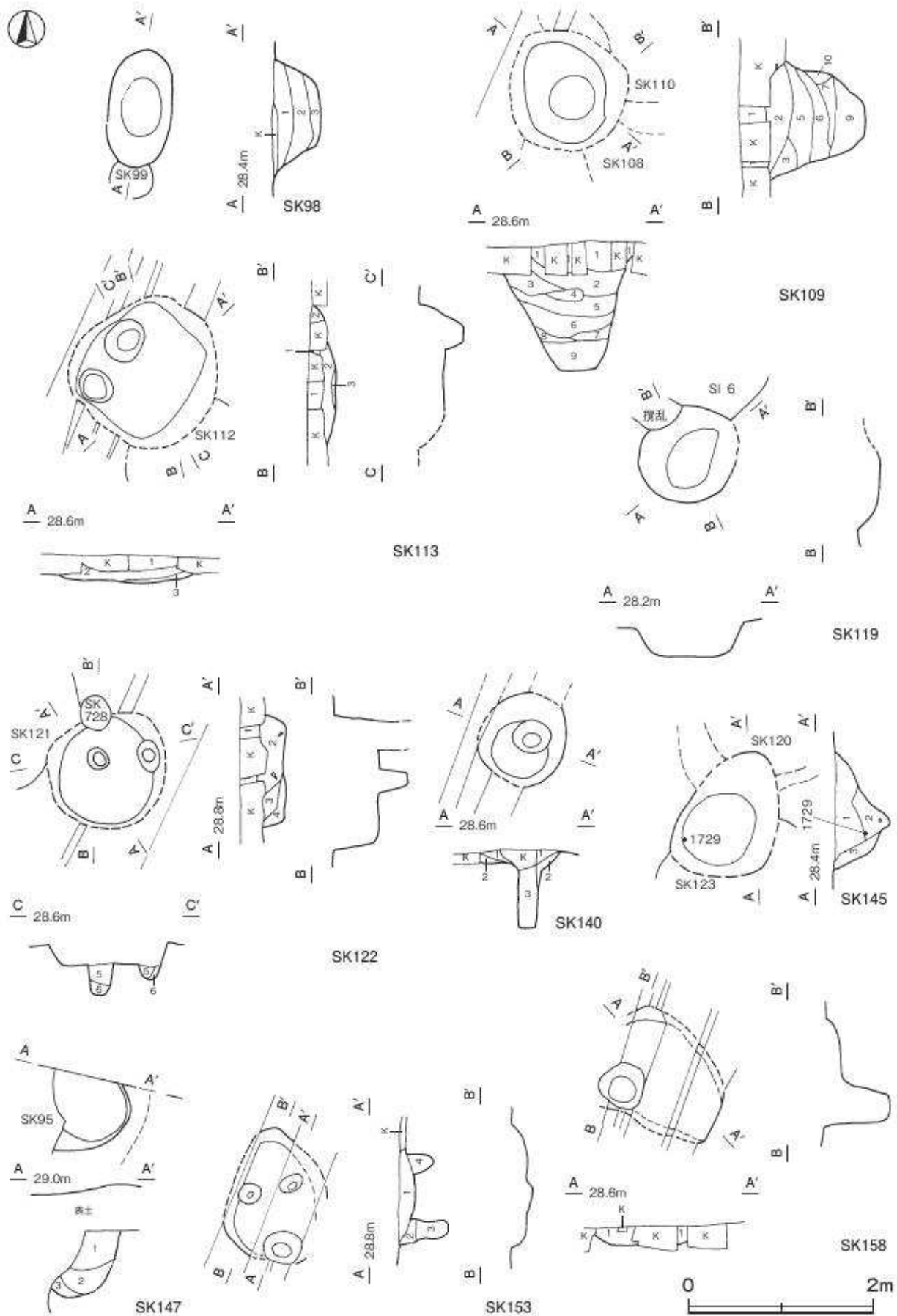
第729号土坑出土遺物観察表（第606図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1724	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・黒色粘土	灰褐色	普通	波頂部に沈澱を伴う隆帯による渦巻文・2条の同隆帯による白線部区画・区画内単節縄文RL（横）上に同隆帯による渦巻文・朝先文	覆土中層	PL159
1725	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい橙	普通	口縁部沈澱一帯・新節半円状の隆帯による区画文区画内0段多条単節縄文RL（縦）上に隆帯による縦手文	覆土中	
1726	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい橙	普通	蒸文帯で沈澱を伴う断面錯綜状の2条の隆帯周囲単節縄文RL（縦）上に2本の横走沈澱帯	覆土上層	PL159

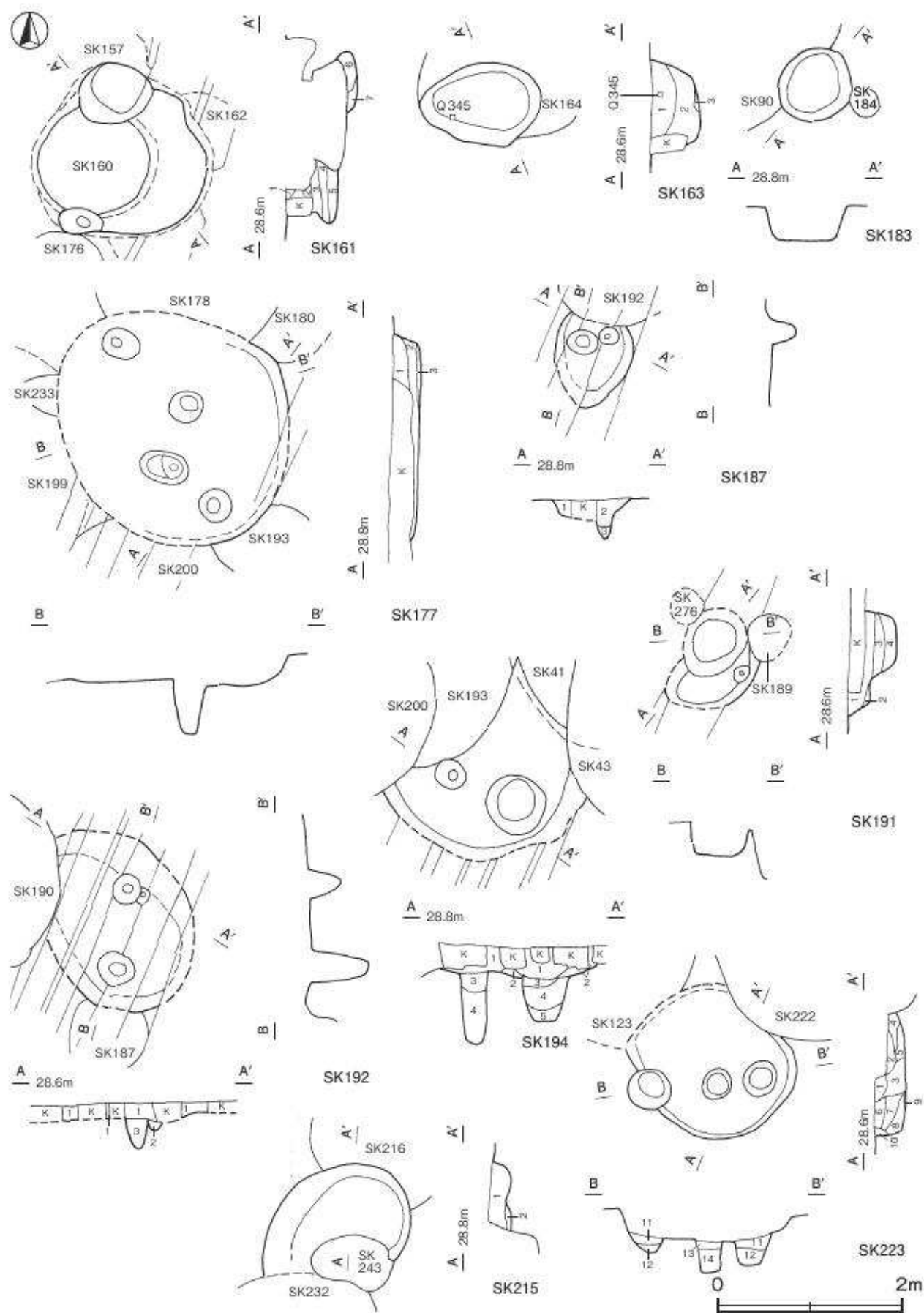
イ) その他の形状が特徴的な土坑 (第 607 ~ 623 図)



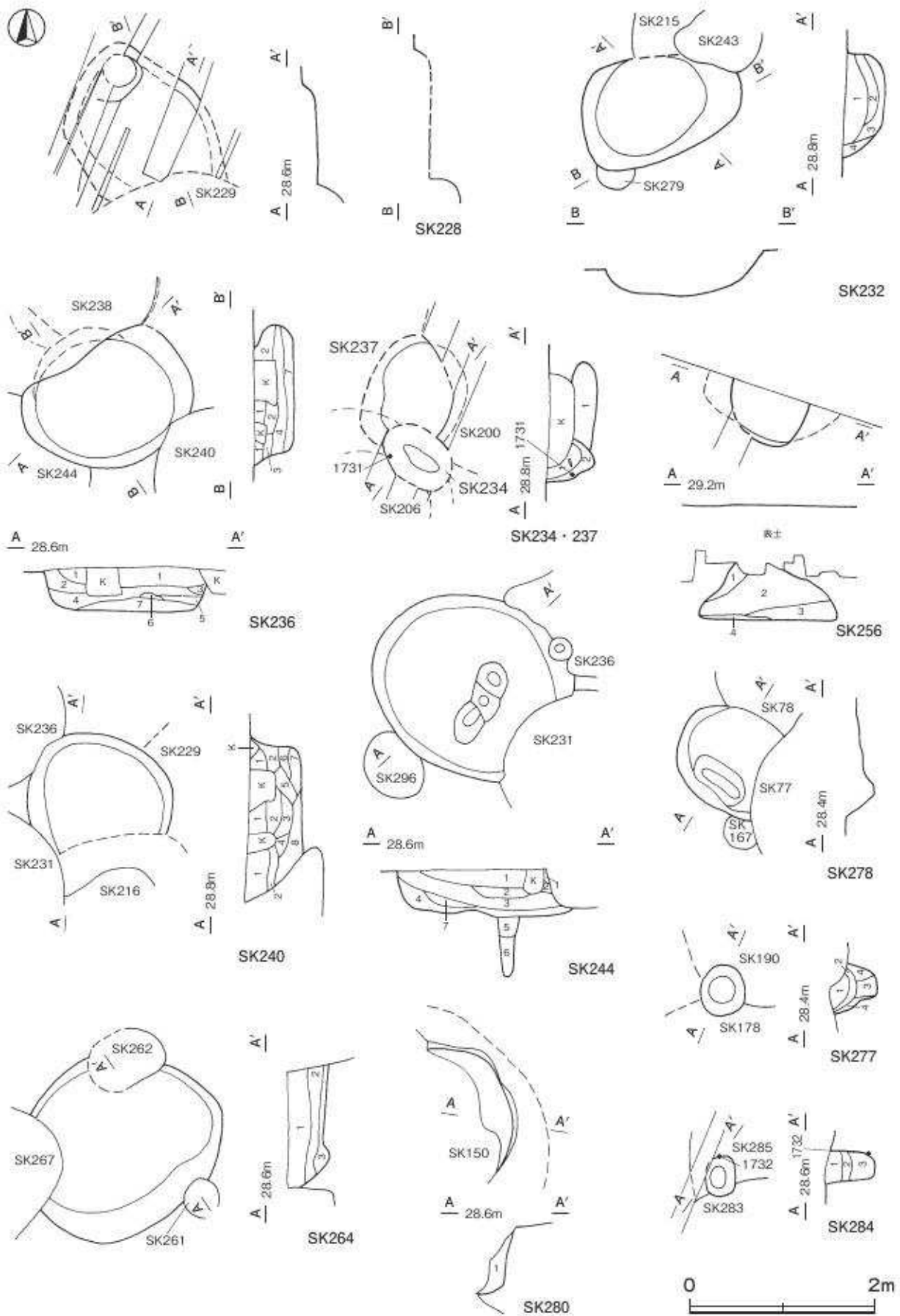
第 607 図 その他の土坑実測図 (1)



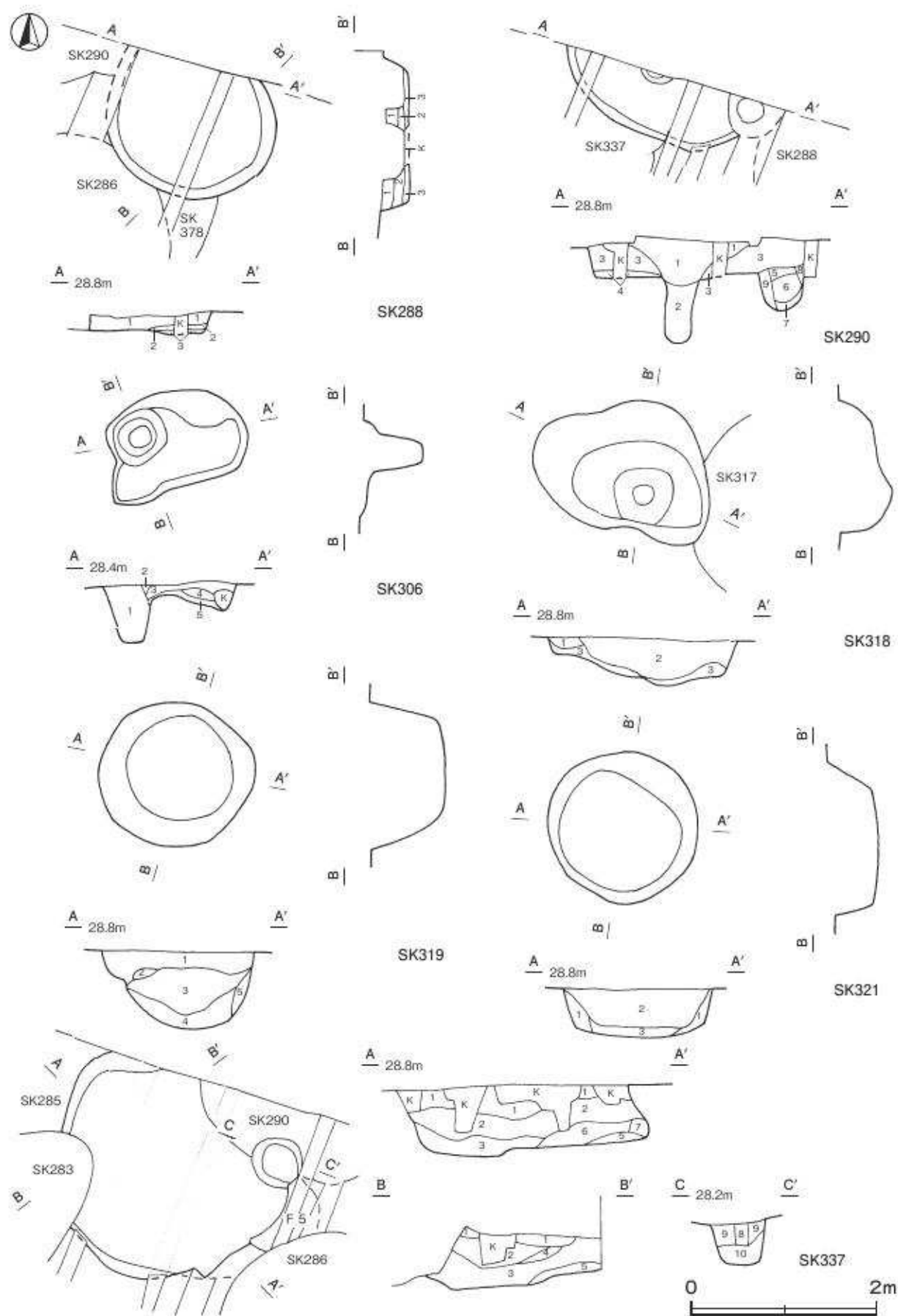
第 608 図 その他の土坑実測図 (2)



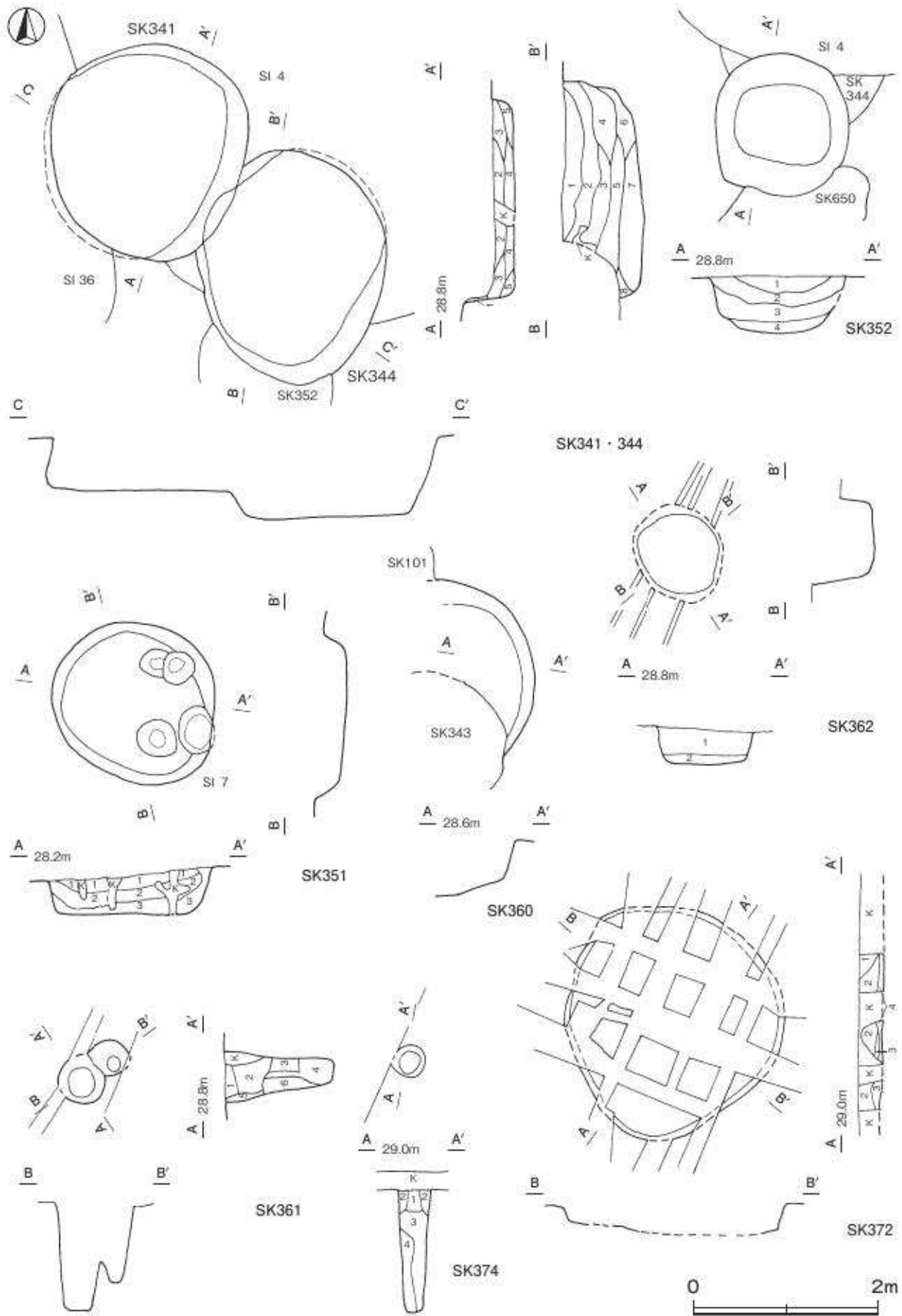
第 609 図 その他の土坑実測図 (3)



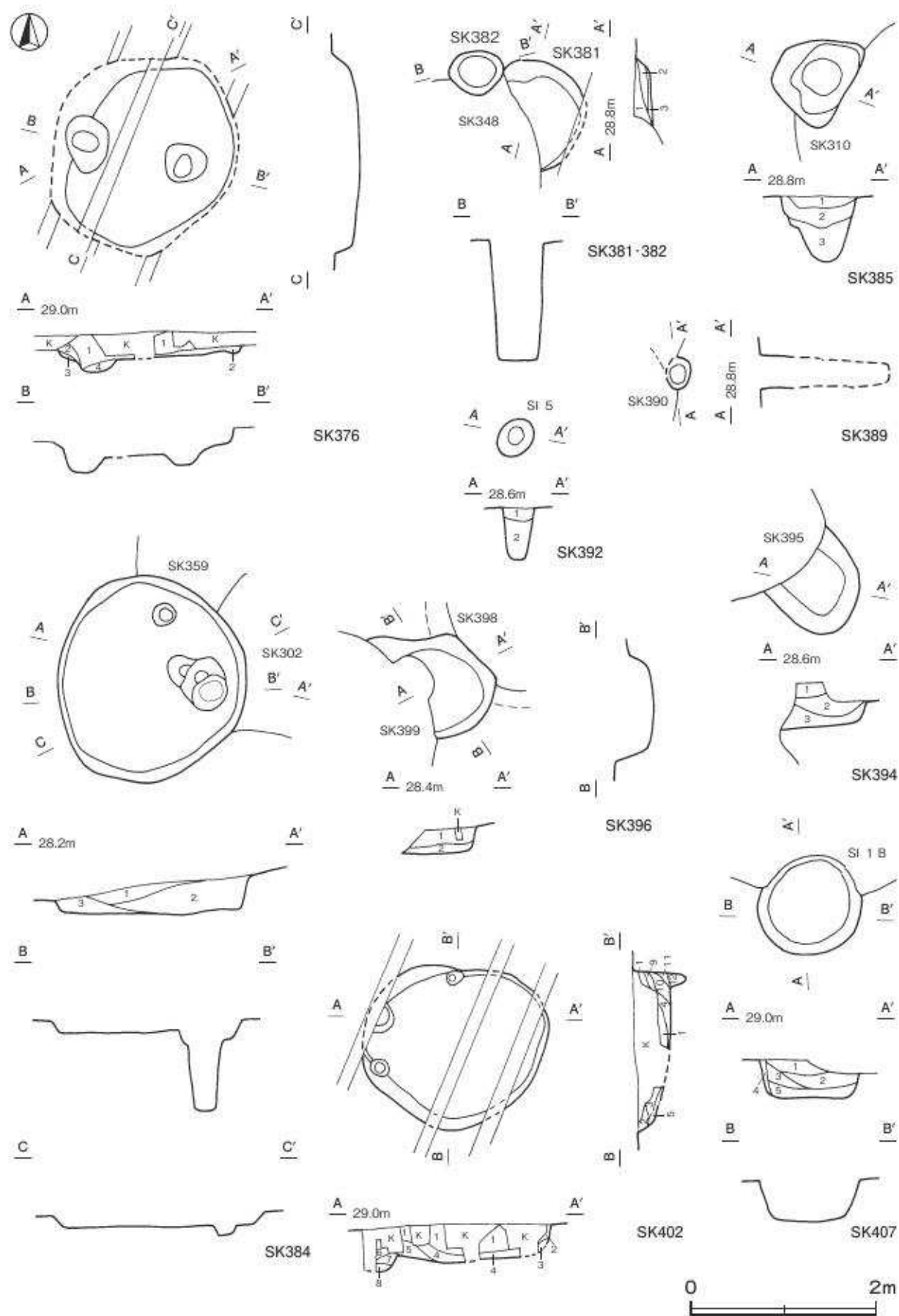
第 610 図 その他の土坑実測図 (4)



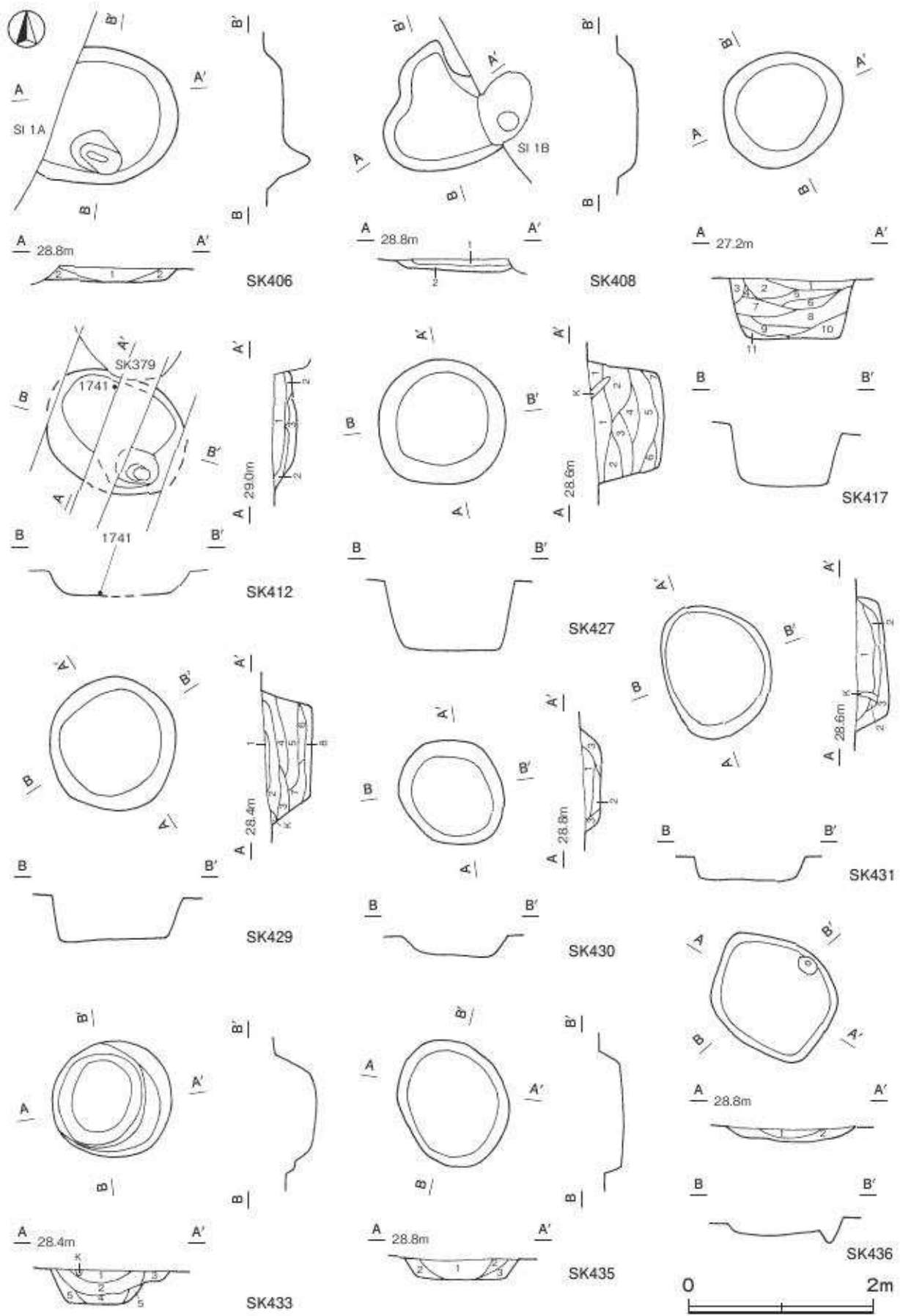
第 611 図 その他の土坑実測図 (5)



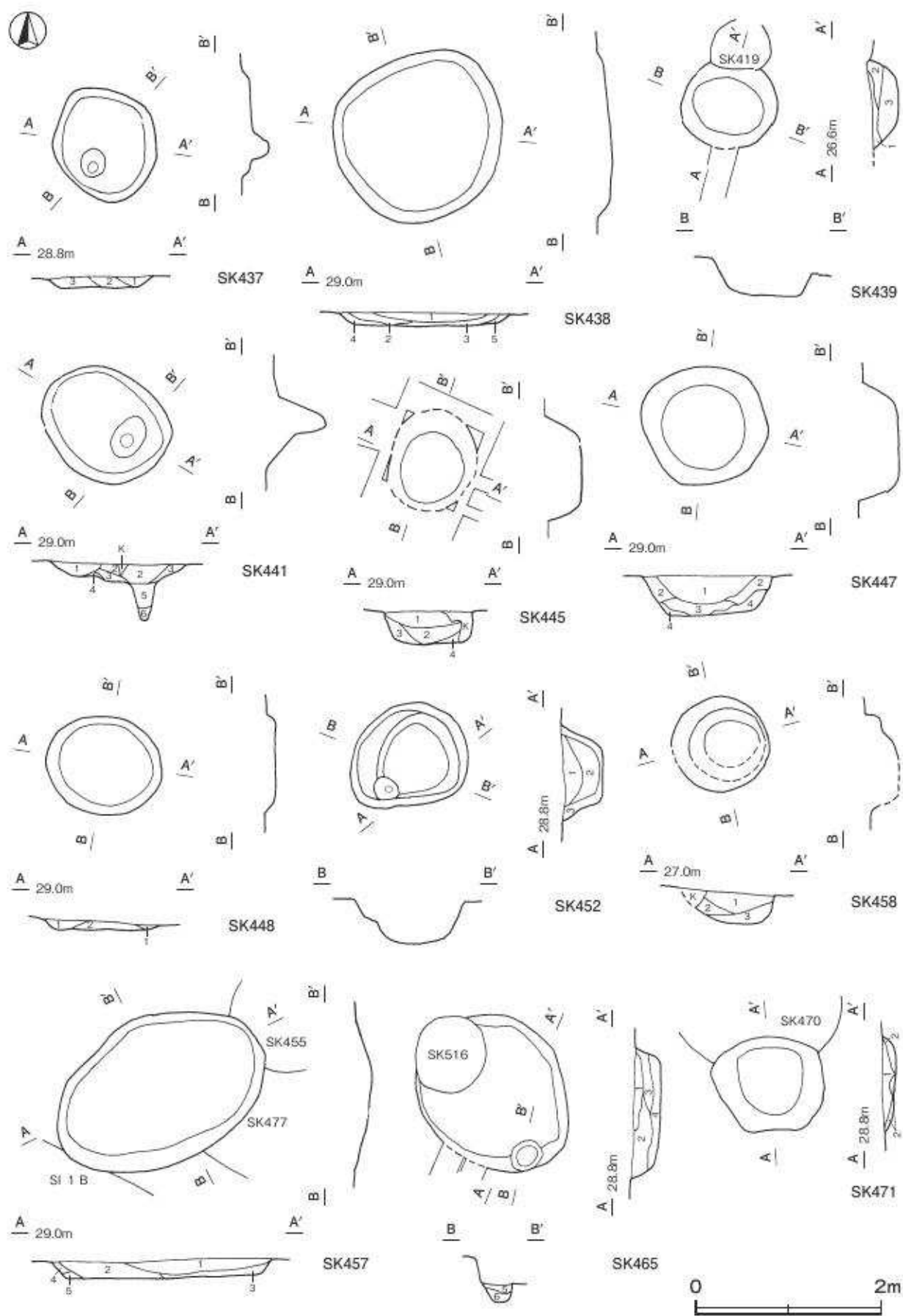
第 612 図 その他の土坑実測図 (6)



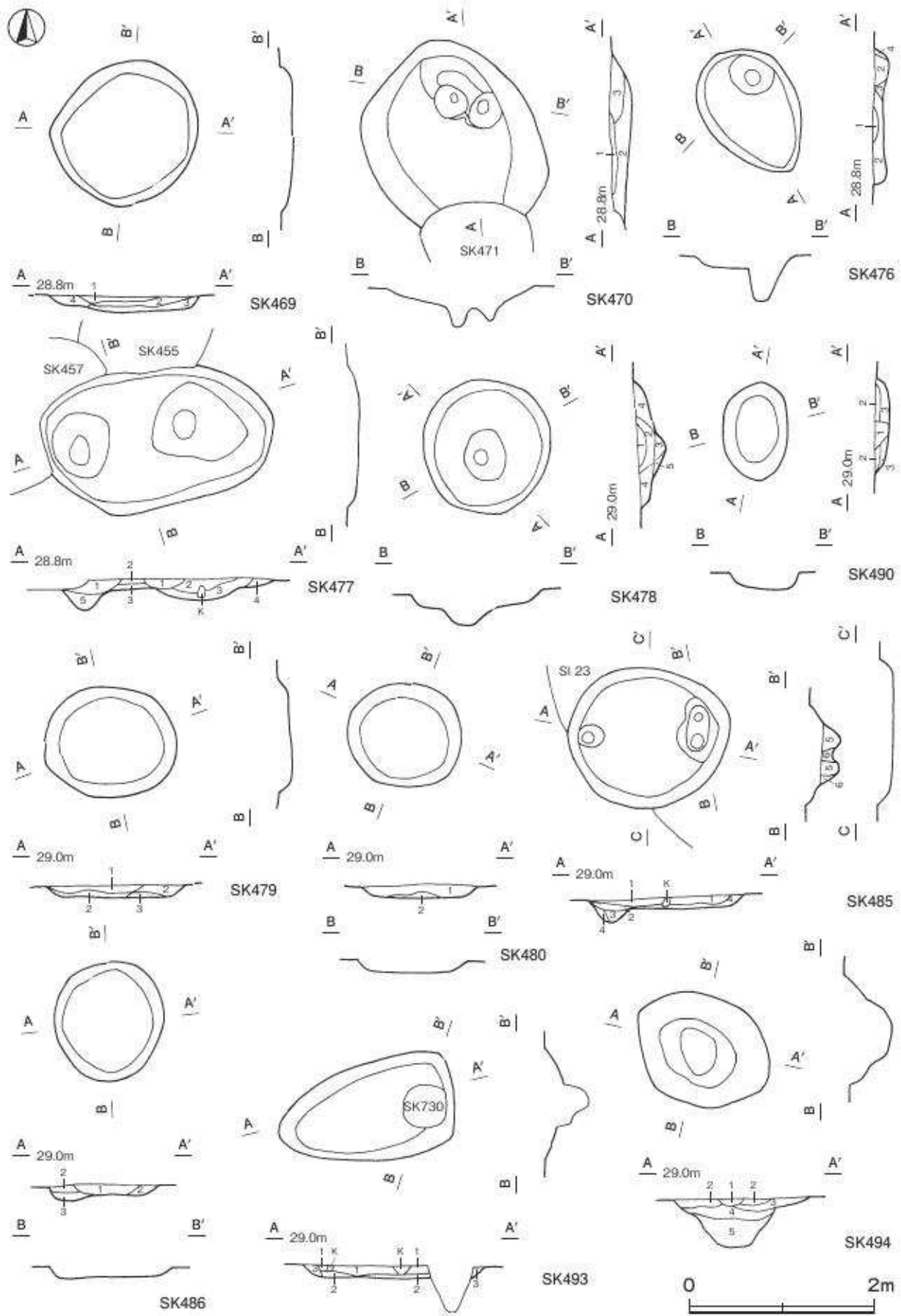
第 613 図 その他の土坑実測図 (7)



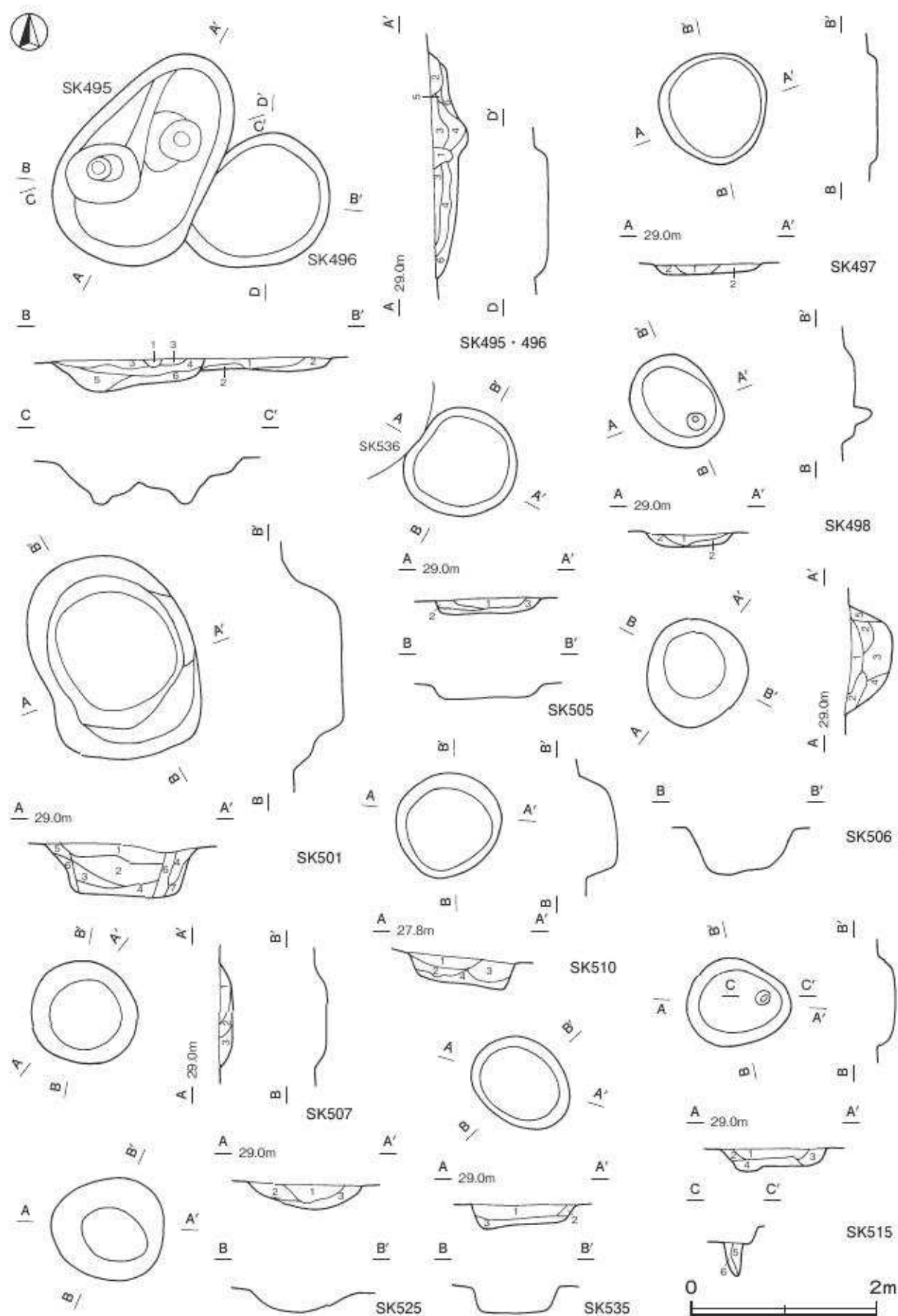
第 614 図 その他の土坑実測図 (8)



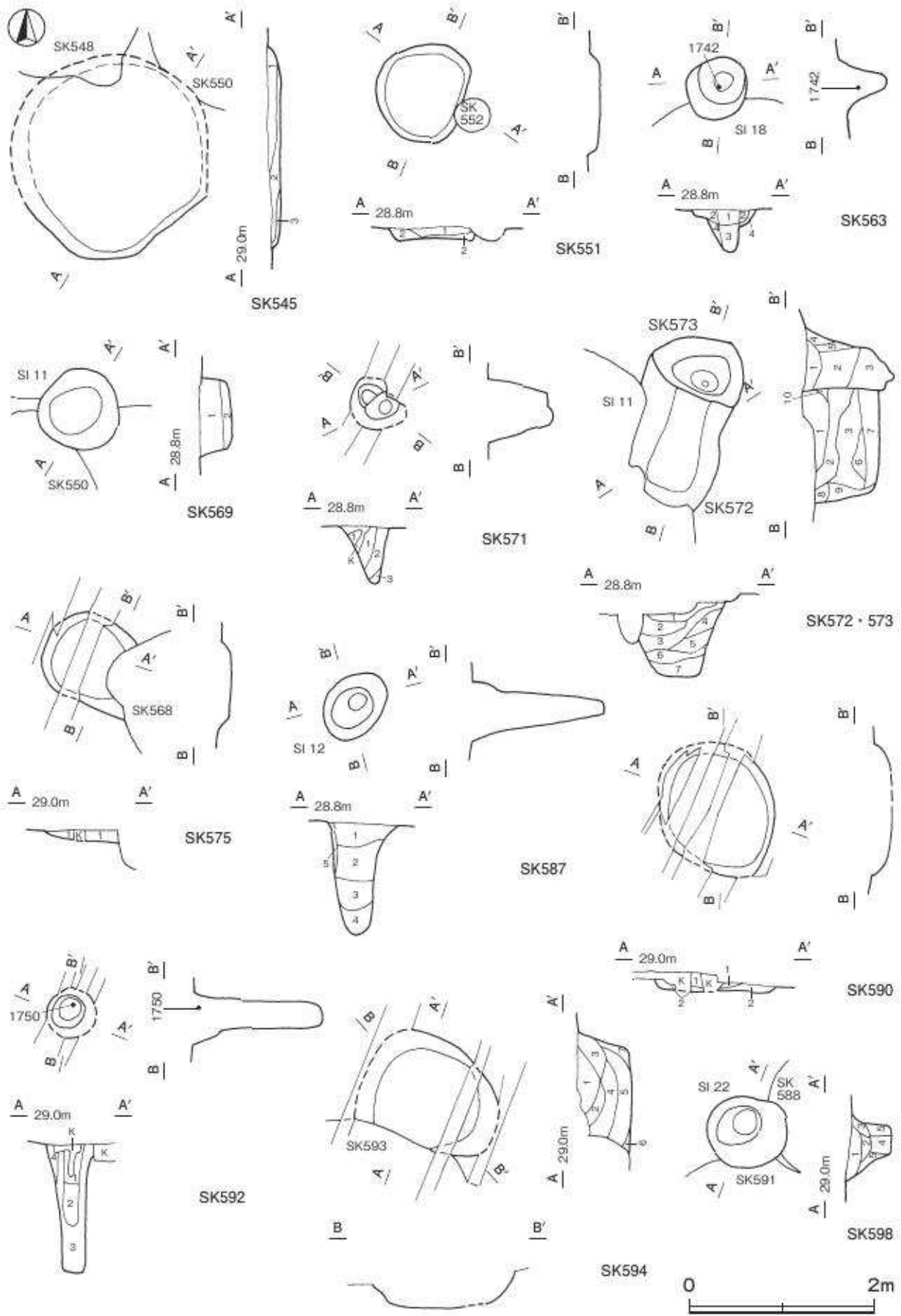
第 615 図 その他の土坑実測図 (9)



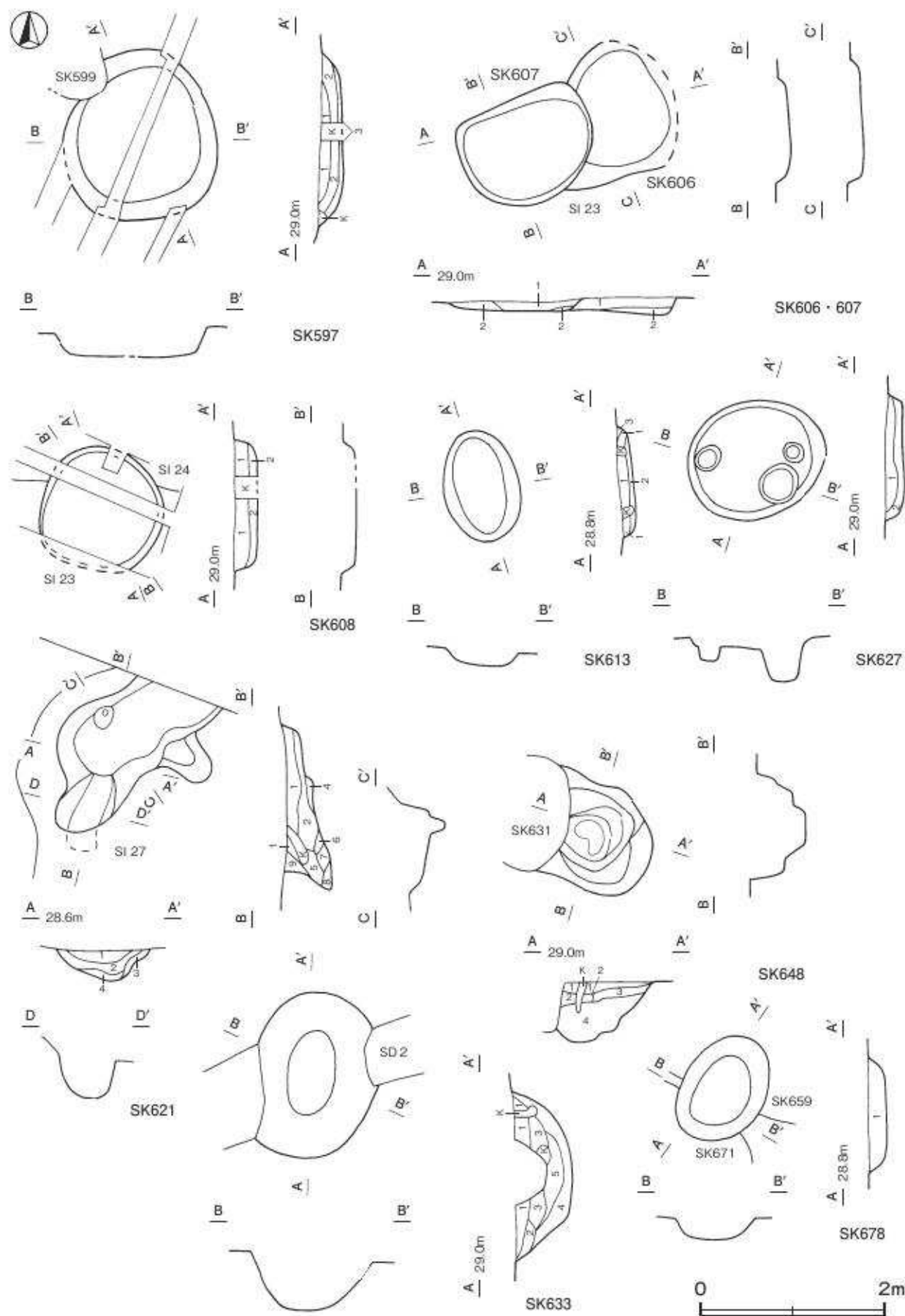
第 616 図 その他の土坑実測図 (10)



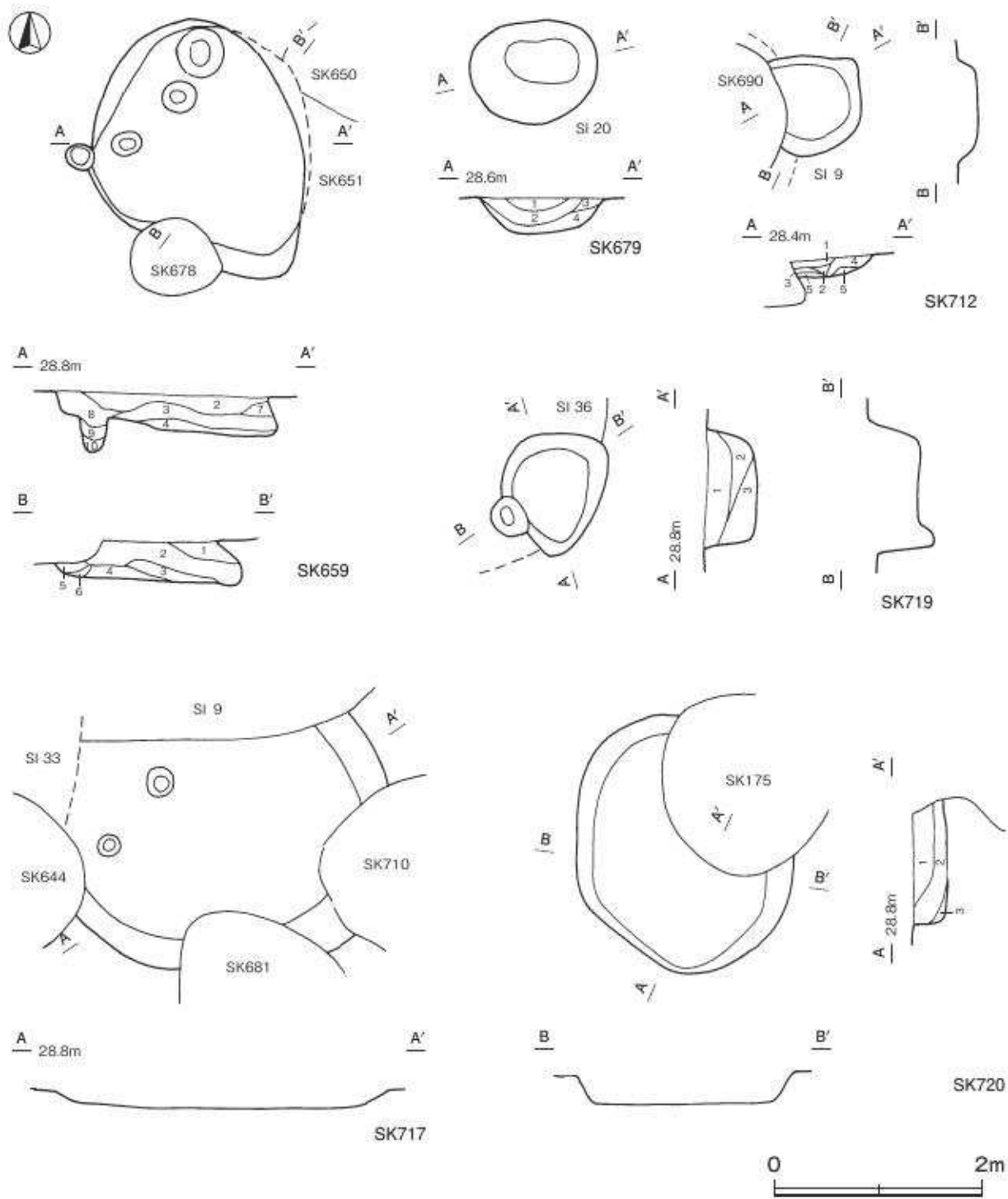
第 617 図 その他の土坑実測図 (11)



第 618 図 その他の土坑実測図 (12)



第 619 図 その他の土坑実測図 (13)



第 620 図 その他の土坑実測図 (14)

第 53 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ロームブロック微量

第 54 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量

第 55 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量

第 67 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

第 90 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ローム粒子微量

第 92 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第 98 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第 109 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量, 骨粉少量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック中量
- 8 暗褐色 ロームブロック中量
- 9 褐色 ロームブロック少量
- 10 暗褐色 ロームブロック少量

第 113 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第 122 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量
- 5 暗褐色 ロームブロック微量
- 6 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

第 140 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第 145 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量

第 147 号土坑 土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第 153 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量

第 158 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第 161 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 7 褐色 ロームブロック少量

第 163 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第 177 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 187 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第 191 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第 192 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第 194 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量

第 215 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第 223 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 4 極暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 9 におい黄褐色 ロームブロック中量
- 10 褐色 ロームブロック少量
- 11 極暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 12 暗褐色 ローム粒子中量
- 13 黒褐色 ローム粒子中量
- 14 黒褐色 ロームブロック少量

第 232 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子中量

第 234 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第 236 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック多量
- 7 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第 237 号土坑 土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第 240 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量
- 8 褐色 ロームブロック少量

第 244 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量

第 256 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

第 264 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第 280 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量

第 277 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量

第 284 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量

第 288 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第 290 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ロームブロック微量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量
- 9 暗褐色 ロームブロック少量

第 306 号土坑 土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量
- 2 赤褐色 ローム粒子少量
- 3 におい赤色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 赤褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 5 におい赤色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第 318 号土坑 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第 319 号土坑 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 褐色 ロームブロック少量

第 321 号土坑 土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック微量

第 337 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 におい黄褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子微量
- 8 黒褐色 ロームブロック少量
- 9 極暗褐色 ロームブロック少量
- 10 暗褐色 ロームブロック少量

第 341 号土坑 土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第 344 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量
- 8 褐色 ロームブロック多量

第 351 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量

第 352 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

第 361 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック微量
- 6 褐色 ロームブロック中量

第 362 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量

第 372 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

第 374 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子微量

第 376 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

第 381 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第 384 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第 385 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第 392 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第 394 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第 396 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第 402 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 5 にい黄褐色 ロームブロック中量
- 6 極暗褐色 ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量
- 8 褐色 ロームブロック中量
- 9 暗褐色 ロームブロック微量
- 10 暗褐色 ロームブロック中量
- 11 にい黄褐色 ロームブロック微量
- 12 暗褐色 ロームブロック少量

第 406 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第 407 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック多量

第 408 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第 412 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 にい黄褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第 417 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量
- 7 黒褐色 ロームブロック中量
- 8 極暗褐色 ロームブロック中量
- 9 黒褐色 ロームブロック少量
- 10 暗褐色 ロームブロック中量
- 11 暗褐色 ロームブロック少量

第 427 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 極暗褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子多量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量
- 7 暗褐色 ローム粒子多量

第 430 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック多量

第 429 号土坑 土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗 褐 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 6 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 7 暗 褐 色 ローム粒子多量
- 8 褐 色 ローム粒子多量

第 431 号土坑 土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 褐 色 ローム粒子多量、炭化粒子微量

第 433 号土坑 土層解説

- 1 極 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子微量

第 435 号土坑 土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック微量

第 436 号土坑 土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック微量

第 437 号土坑 土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック微量

第 438 号土坑 土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 4 褐 色 ロームブロック微量
- 5 黒 褐 色 ローム粒子微量

第 439 号土坑 土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子中量

第 441 号土坑 土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 4 褐 色 ロームブロック多量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子多量
- 6 暗 褐 色 ロームブロック中量

第 445 号土坑 土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子中量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック少量

第 447 号土坑 土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック少量

第 448 号土坑 土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック中量

第 452 号土坑 土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐 色 ローム粒子多量、炭化粒子微量

第 457 号土坑 土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子中量

第 458 号土坑 土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック微量

第 465 号土坑 土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 黒 褐 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 6 暗 褐 色 ローム粒子微量

第 469 号土坑 土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 褐 色 炭化粒子微量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック微量

第 470 号土坑 土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量

第 471 号土坑 土層解説

- 1 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック微量

第 476 号土坑 土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 3 褐 色 ロームブロック中量
- 4 褐 色 ローム粒子中量

第 477 号土坑 土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 4 褐 色 ロームブロック少量
- 5 褐 色 ロームブロック微量

第 478 号土坑 土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 4 褐 色 ロームブロック中量
- 5 褐 色 ローム粒子中量

第 479 号土坑 土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 2 褐 色 ローム粒子中量
- 3 褐 色 ロームブロック中量

第480号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第485号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 にぶい黄褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量

第486号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量

第490号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第493号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

第494号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量

第495号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ロームブロック中量
- 6 褐色 ローム粒子多量

第496号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第497号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第498号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第501号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量

第505号土坑 土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

第506号土坑 土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量

第507号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

第510号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

第515号土坑 土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量

第525号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第535号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第545号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第551号土坑 土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第563号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量

第569号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量

第571号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量

第575号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量

第 572 号土坑 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック微量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量
- 8 暗褐色 ローム粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子微量
- 10 黒褐色 ローム粒子少量

第 573 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量

第 587 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量

第 590 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第 592 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子多量

第 594 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック中量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量

第 597 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

第 598 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 ローム粒子多量

第 606 号土坑 土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第 607 号土坑 土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック、炭化粒子少量

第 608 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第 613 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

第 621 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック、炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック多量
- 8 暗褐色 ロームブロック中量
- 9 褐色 ロームブロック多量

第 627 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

第 633 号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量

第 648 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

第 659 号土坑 土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 褐色 ロームブロック多量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量
- 8 極暗褐色 ロームブロック中量
- 9 暗褐色 ロームブロック中量
- 10 暗褐色 ロームブロック多量

第 678 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子、炭化粒子微量

第 679 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ロームブロック多量

第 712 号土坑 土層解説

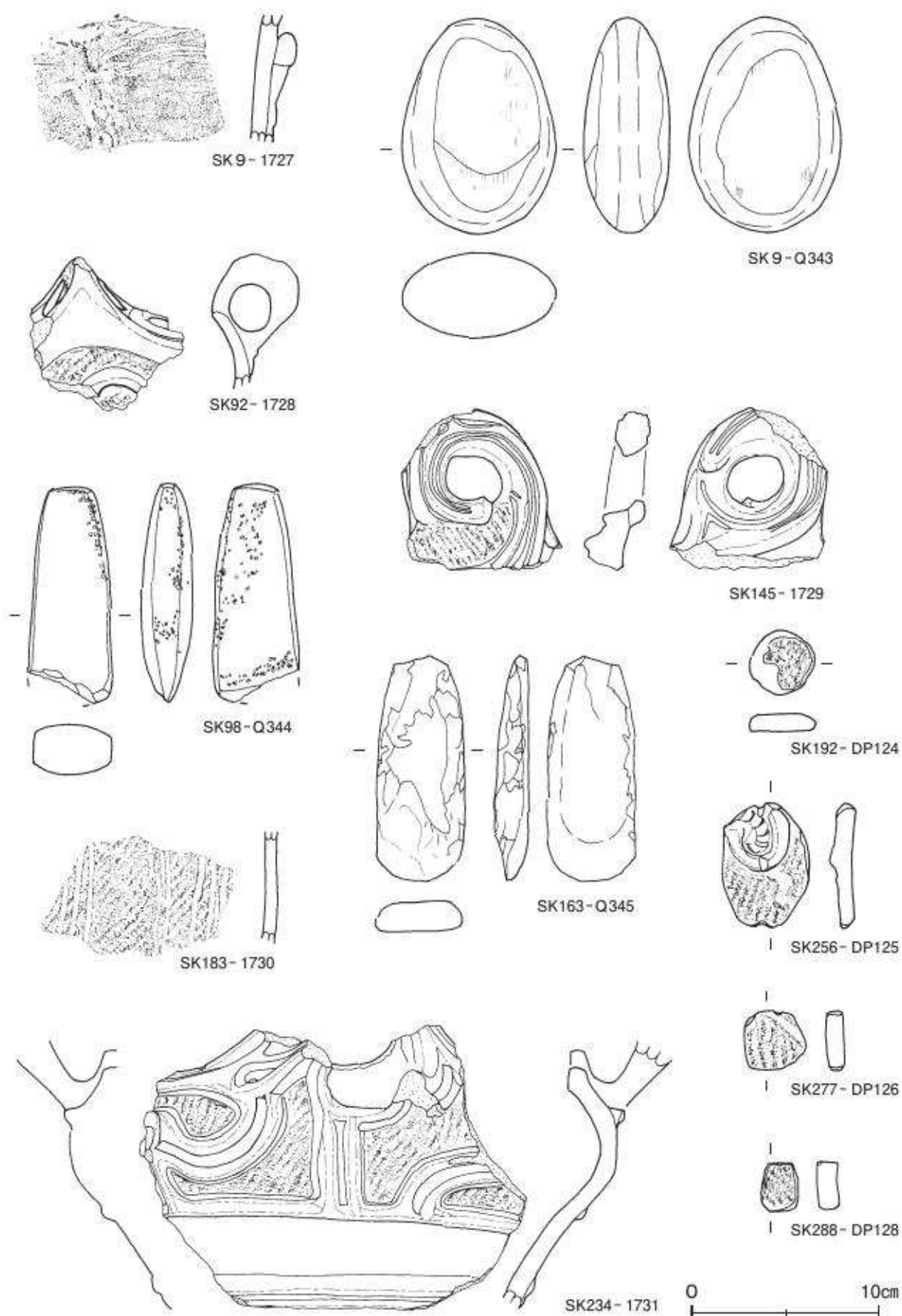
- 1 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック、炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子、炭化粒子少量
- 5 明褐色 ローム粒子多量

第 719 号土坑 土層解説

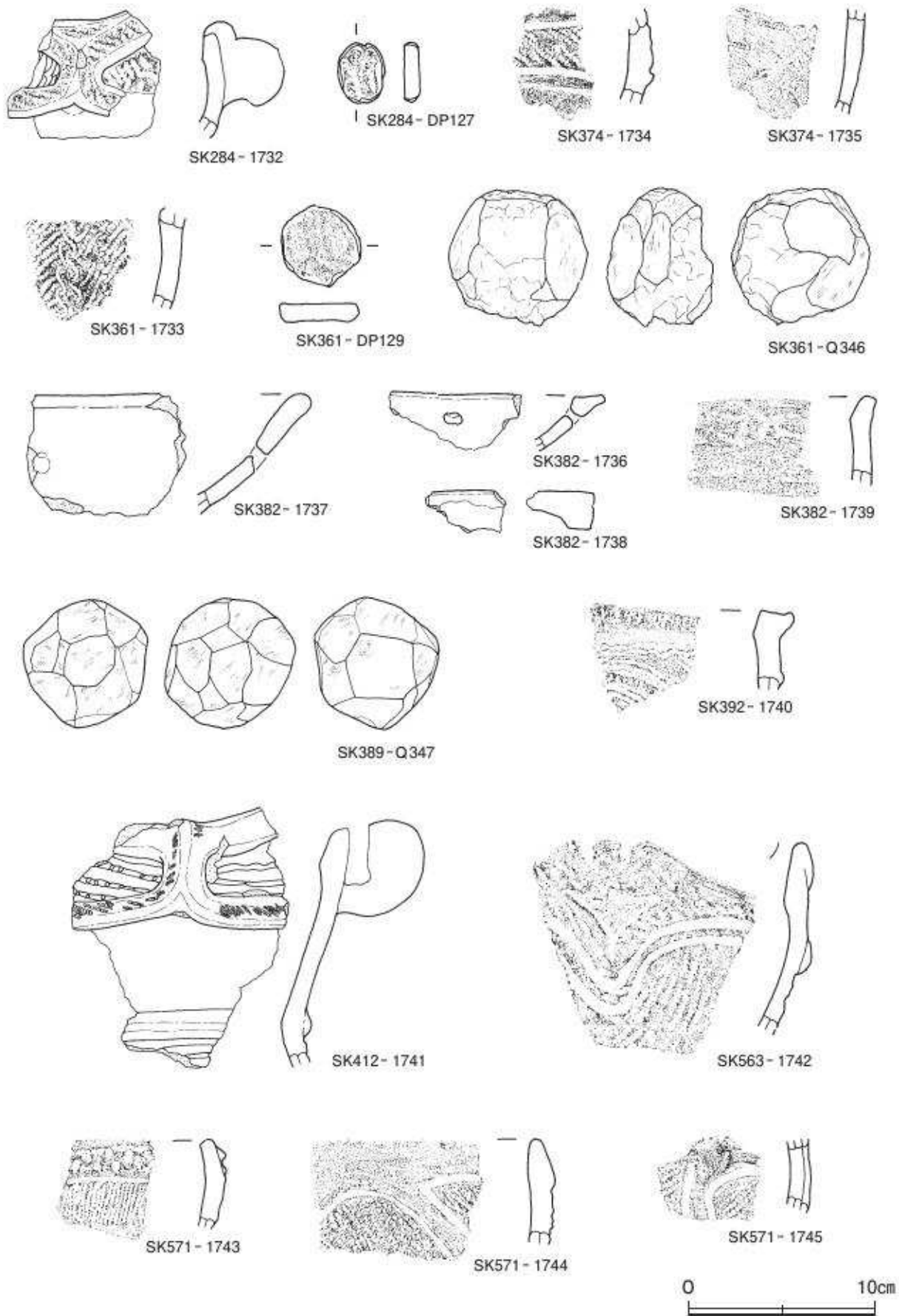
- 1 暗褐色 ロームブロック、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量

第 720 号土坑 土層解説

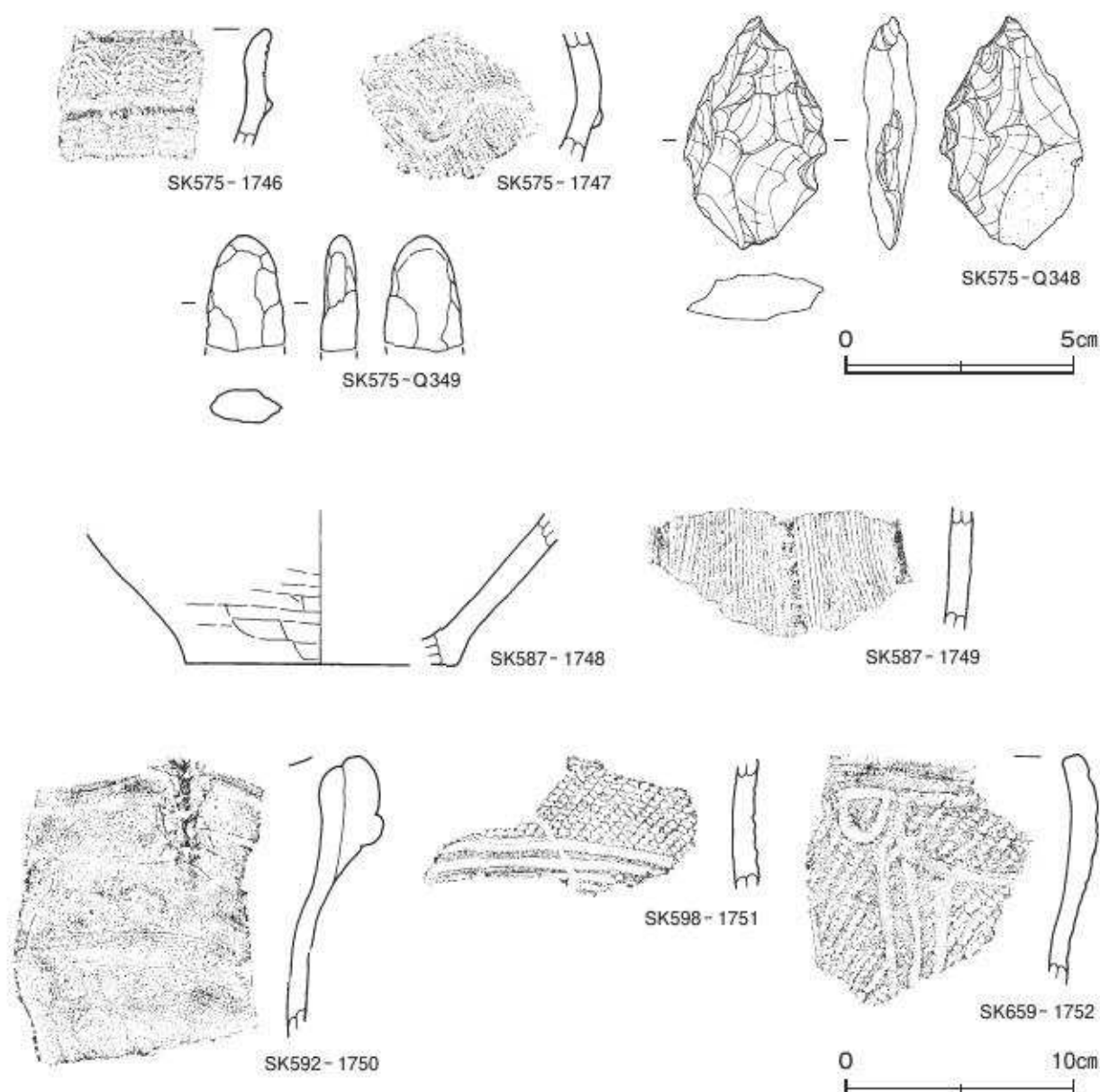
- 1 暗褐色 ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子、炭化粒子微量



第 621 図 その他の土坑出土遺物実測図 (1)



第 622 図 その他の土坑出土遺物実測図 (2)



第 623 図 その他の土坑出土遺物実測図 (3)

第 9 号土坑出土遺物観察表 (第 621 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1727	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	無文土器。柄み状の隆帯貼付。柄み部から隆帯が基下。隆帯上に利突。外・内面横方向のナデ	覆土中	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q343	磨石	115	8.2	4.6	602.3	石英	全面に研磨痕		覆土中層	PL180	

第 9 号土坑出土遺物観察表 (第 621 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1728	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	中央把手。穿孔に沿って単刷縄文RL(縦)隆帯により文様描画	覆土中	

第 98 号土坑出土遺物観察表 (第 621 図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備考
Q 344	磨製石斧	(117)	4.6	2.8	(2401)	砂岩	定角式	全面に微細な敲打痕 刃部欠損	覆土中	PL167

第 145 号土坑出土遺物観察表 (第 621 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	文 様 の 特 徴 ほ か	出土位置	備考
1729	縄文土器	深鉢	-	(8.7)	-	長石・石英・雲母	黒	普通	穿孔把手 穿孔に沿って隆帯による取手区画 隆帯上に沈線 区画外斜の条線文 把手頂部裏面に沈線	覆土中層	

第 163 号土坑出土遺物観察表 (第 621 図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備考
Q 345	打製石斧	12.1	4.8	1.9	1434	砂岩	脱形	片面に自然面 側縁部微細な敲打痕 刃部は片面を敲打	覆土上層	PL165

第 183 号土坑出土遺物観察表 (第 621 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	文 様 の 特 徴 ほ か	出土位置	備考
1730	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	地文に単節縄文 RL (線) 3 本の沈線が垂下	覆土中	

第 192 号土坑出土遺物観察表 (第 621 図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	色 調	特 徴		出土位置	備考
DP124	土器片鏃	3.5	3.5	1.0	123	長石・石英・雲母	橙	削部片	側縁部研磨	覆土中	二次焼成

第 234 号土坑出土遺物観察表 (第 621 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	文 様 の 特 徴 ほ か	出土位置	備考
1731	縄文土器	深鉢	[25.0]	(14.4)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	地文に単節縄文 RL (線) 並行隆帯により文様 描画 中空の把手 隆帯側に取手沈線 頸部無文帯	覆土中層	

第 256 号土坑出土遺物観察表 (第 621 図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	色 調	特 徴		出土位置	備考
DP125	土器片鏃	6.8	4.7	1.5	38.9	長石・石英・雲母	褐	削部片	側縁部研磨 両端にキザミ目	覆土中	

第 277 号土坑出土遺物観察表 (第 621 図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	色 調	特 徴		出土位置	備考
DP126	土器片鏃	3.3	3.4	1.0	12.8	長石・石英・赤色 粘土	にぶい黄橙	削部片	側縁部研磨 両端にキザミ目 下端のキザミ目は浅い	覆土中	

第 284 号土坑出土遺物観察表 (第 622 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	文 様 の 特 徴 ほ か	出土位置	備考
1732	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	隆帯による区画 隆帯上に口段多条縄文 RL (横) 隆帯に沿ってキヤタビラ文	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	色 調	特 徴		出土位置	備考
DP127	土器片鏃	3.3	2.5	0.9	9.3	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	削部片	側縁部研磨 両端にキザミ目	覆土中	

第 288 号土坑出土遺物観察表 (第 621 図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	色 調	特 徴		出土位置	備考
DP128	土器片鏃	2.6	2.0	1.2	8.8	長石・石英・雲母・ 赤色粘土	灰褐	削部片	側縁部研磨両端にキザミ目らしい痕跡	覆土中	

第 361 号土坑出土遺物観察表 (第 622 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1733	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口唇直下から2列の結節縄文(縦)	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP129	土器片	4.2	4.2	1.0	21.3	長石・石英・雲母	黒褐色	胴部片 肩縁部研磨	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q346	敲砥石	7.4	7.4	5.7	370.9	瑪瑙	円縁の肩縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	覆土中	PL174

第 374 号土坑出土遺物観察表 (第 622 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1734	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	隆帯と沈線による横位の文様区画 区画内単節 縄文 RL (横) 頸部無文帯	覆土中層	
1735	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい橙	普通	解けかかった隆帯をまばらに斜施文	覆土中	

第 382 号土坑出土遺物観察表 (第 622 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1736	縄文土器	浅鉢	-	(31)	-	長石・石英・雲母・ 黒色粒子・磁礫	黒褐色(外) にぶい橙(内)	良好	口縁内側に段 外・内面丁寧な磨き 補修孔1	覆土中	
1737	縄文土器	浅鉢	-	(65)	-	長石・石英・雲母・ 黒色粒子・磁礫	明赤褐色	普通	内側に縞い段 外・内面横方向のナデ	覆土中	外面二次焼成
1738	縄文土器	器台	-	(22)	-	長石・石英	明赤褐色	普通	側面に円形の穿孔 外・内面丁寧なナデ	覆土中	
1739	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・ 磁礫	灰褐色	普通	口唇内面内側ざ 横方向のナデ	覆土中	

第 389 号土坑出土遺物観察表 (第 622 図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q347	敲砥石	7.0	6.7	7.1	395.9	安山岩	円縁の肩縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	覆土中	PL174 放射

第 392 号土坑出土遺物観察表 (第 622 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1740	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口唇部内側に段 隆帯貼付により口唇縁部に平 坦面 口唇部にキザミ目 隆帯による文様楕圓 隆帯上にキザミ目 隆帯に沿って有節沈線	覆土中	

第 412 号土坑出土遺物観察表 (第 622 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1741	縄文土器	深鉢	-	(14.1)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	灰褐色	良好	隆帯による文字状区画 交点に楕み状の突起 区画内横位の波状沈線と有節沈線 隆帯に単節 縄文 RL (横) 隆帯を一巡させ頸部無文帯	底面	

第 563 号土坑出土遺物観察表 (第 622 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1742	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	波状口縁 波頂部に2ヶ所の刺突 低い隆帯に よるV字区画 区画に沿って2本の総行沈線 隆帯上に単節縄文 RL (横) 胴部無施文	覆土中層	

第 571 号土坑出土遺物観察表 (第 622 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1743	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部交互刺突文が一部 沈線で区画し斜位の 無施文	覆土中	
1744	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・ 磁礫	にぶい黄褐色	普通	口唇部肥厚 低い隆帯による区画文 隆帯に沿 って沈線 区画内0段多糸縄文 RL (横)	覆土中	
1745	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	黄褐色	普通	低い隆帯による区画文 隆帯に沿って沈線 地 文に単節縄文 RL (縦)	覆土中	

第 575 号土坑出土遺物観察表 (第 623 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1746	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口縁内側に段々4本単位の柳葉状工具による積位の波状文。断面三角形の隆帯が1道。外・内面横方向のナデ	覆土中	
1747	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	地文に単節縄文 LR (縦) 横位の蛇行隆帯が走る	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 348	加工痕のある副片	52	32	12	165	凝灰岩	間線部押し割離 一部自然面が残る	覆土中	
Q 349	打製石斧	(51)	35	17	(41.1)	雲母片岩	撥形 表面面研磨 両側縁敲打 刃部欠損	覆土中	

第 587 号土坑出土遺物観察表 (第 623 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1748	縄文土器	浅鉢	-	(69)	[120]	長石・石英・雲母・細砂	にぶい褐色	普通	底部外側に張り出す。外・内面横方向のナデ	覆土中	
1749	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・細砂	明褐色	普通	板状把手 把手周縁及び中央部隆帯区画 区画内縦位の条線文	覆土中	

第 592 号土坑出土遺物観察表 (第 623 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1750	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	波状口縁 柄み状の突起部付 平飯管による横線文が走る。内面横方向のナデ	覆土上層	

第 598 号土坑出土遺物観察表 (第 623 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1751	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色砂子	にぶい褐色	普通	地文に単節縄文 RL (縦) 4本の沈線を高らせ沈線周縁磨治	覆土中	

第 659 号土坑出土遺物観察表 (第 623 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1752	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	地文に単節縄文 RL (縦) 口縁部浅い沈線による円・楕円区画。3本の浅い沈線が垂下	覆土中	

表 5 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		深さ (cm)	底面	壁面	ピット	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部 長径 × 短径	最大径 長径 × 短径							
1	B 3 jI	N-22°-E	楕円形	1.38 × 1.14	2.34 × 2.10	76	平坦	直立 内壁	1	人為	縄文土器、石器	SK 2 → 本跡
2	B 3 jI	N-84°-E	[楕円形]	[1.78 × 0.87]	-	44	平坦	外傾	-	自然	縄文土器	SK 8 → 本跡 → SK 1-38
3	C 3 a2	-	不定形	[1.20 × 0.94]	2.08 × 1.97	111	平坦	直立 内壁	-	人為	縄文土器、土製品、石器	SK53 → 本跡 → SK128
4	C 3 a2	-	[円形]	[0.77 × (0.73)]	-	9	平坦	直立 外傾	-	自然		SK16 → 本跡
5	C 3 a1	-	円形	(1.09 × 1.08)	2.94 × 2.49	107	平坦	直立 内壁	-	人為	縄文土器、土製品、石器	
6	C 3 a1	N-23°-E	楕円形	1.48 × (1.29)	-	40	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	
7	B 2 j0	-	円形	0.95 × 0.97	-	28	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	SK 8 → 本跡
8	B 2 j0	N-14°-E	楕円形	[2.10 × (1.70)]	1.92 × 1.74	84	平坦	直立 内壁	1	人為	縄文土器、石器	SK54 → 本跡 → SK 2-7-38
9	B 2 i8	N-64°-W	楕円形	0.41 × 0.35	-	142	平坦	直立 外傾	-	人為	縄文土器	SK10・57 → 本跡
10	B 2 i8	-	[円形]	1.80 × 1.74	-	48	平坦	直立	2	自然	縄文土器、石器	本跡 → SK 9・57・144
11	B 2 h7	-	[円形・楕円形]	2.25 × (1.06)	-	50	平坦	直立	4	人為	縄文土器、石器	本跡 → SK40・79
12	C 3 a1	-	[円形]	0.23 × (0.23)	-	19	皿状	直立	-	人為		
13	C 3 a1	N-21°-E	[楕円形]	0.39 × (0.31)	-	45	皿状	外傾 直立	-	人為		
14	B 3 jI	-	[楕円形]	(0.70 × 0.26)	-	109	皿状	外傾 直立	-	人為	縄文土器	
15	B 2 i8	N-68°-W	楕円形	(1.52 × 1.32)	1.92 × 1.72	45	平坦	内傾	1	人為	縄文土器、石器	

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		高さ (cm)	底面	壁面	ε(°)	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部 長径 × 短径	最大径 長径 × 短径							
16	C 3a2	N-21°-E	楕円形	1.05 × 0.80	1.33 × 1.26	52	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→SK 4・17
17	C 3a2	-	円形	1.31 × (1.30)	-	63	平埴	直立	-	人為	縄文土器、石器	SK16→本跡
18	C 3c1	N-62°-W	楕円形	[1.11 × 1.00]	-	18	平埴	外傾	-	自然	縄文土器	
19	C 3c1	N-39°-E	楕円形	[2.10 × 1.90]	-	31	平埴	外傾	-	自然 人為	縄文土器	SK20→本跡
20	C 3d1	N-18°-W	[楕円形]	(1.08) × 0.92	-	28	平埴	外傾	-	自然	縄文土器	本跡→SK19
21	C 3b1	N-21°-E	[楕円形]	(0.37 × 0.30)	-	20	皿状	外傾	-	人為		
22	B 3j2	-	[円形]	(0.96) × 0.93	-	16	平埴	緩斜	1	人為	縄文土器	SK23→本跡
23	B 3j2	N-17°-E	[楕円形]	(0.80 × 0.68)	-	(52)	皿状	緩斜	-	人為		本跡→SK22
24	C 3b2	N-77°-E	[楕円形]	(0.48 × 0.43)	-	61	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	SK53→本跡
25	C 3b2	N-64°-W	[楕円形]	(0.40 × 0.33)	-	(25)	皿状	外傾	-	人為		
26	C 3c1	-	[円形]	0.40 × (0.38)	-	(40)	皿状	直立	-	人為		本跡→SK27
27	C 3c1	-	円形	0.40 × 0.38	-	(30)	皿状	外傾	-	人為		SK26・63→本跡
28	C 3d1	-	円形	(0.34) × 0.31	-	58	皿状	直立	-	人為		
29	C 3c1	N-20°-E	楕円形	(0.49 × 0.43)	-	(14)	皿状	外傾	-	人為		SK47→本跡
30	C 2a6	N-51°-W	楕円形	2.58 × 1.72	-	117	平埴	外傾	3	自然 人為	縄文土器、石器	SK39→本跡→SK58、 SD 1
31	C 2a6	N-30°-E	楕円形	0.65 × 0.52	-	78	皿状	外傾	-	不明	縄文土器	SK59→本跡
32	C 2a6	N-53°-E	楕円形	1.36 × (1.06)	-	28	平埴	外傾	-	自然	縄文土器、土製品、石器	本跡→SK137・138
33	C 3d1	N-33°-W	[楕円形]	(0.64 × 0.48)	-	75	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	
34	C 3d2	-	[楕円形]	(0.36 × 0.32)	-	80	皿状	直立	-	人為	縄文土器	
35	C 3d1	-	不整円形	1.94 × 1.76	2.73 × 2.36	83	平埴	直立 内傾	-	人為	縄文土器、石器	
36	C 3b2	N-57°-E	[楕円形]	(0.39 × 0.23)	-	(40)	皿状	外傾	-	人為		
37	C 3b2	-	[円形]	(0.35 × 0.23)	-	(36)	皿状	外傾	-	人為		SK50→本跡
38	B 2j9	N-65°-W	[楕円形]	2.24 × (1.96)	-	26	平埴	緩斜	3	自然	縄文土器	SK 2・8・39・143 →本跡
39	B 2j9	-	[円形・ 楕円形]	1.13 × (0.72)	(1.38 × 1.10)	70	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、土製品	本跡→SK38・56
40	B 2j7	N-40°-W	楕円形	1.00 × 0.76	-	72	平埴	直立	-	人為	縄文土器、土製品	SK11・79→本跡
41	C 2b0	N-89°-W	楕円形	(2.24 × 1.74)	2.45 × 2.32	80	平埴	内傾	3	人為	縄文土器、石器	SK130→本跡→SK43・45
43	C 2b0	N-13°-E	楕円形	(2.92 × 2.52)	-	41	平埴	外傾	2	自然	縄文土器、石器	SK41・194→本跡 →SK45
45	C 3b1	N-10°-W	楕円形	(2.47 × 2.08)	-	49	平埴	外傾	3	人為	縄文土器	SK41・43・46→本跡
46	C 3b1	-	不整円形	(2.35 × 2.14)	2.38 × 2.26	85	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、土製品	SK65→本跡 →SK45・47・52
47	C 3c1	-	円形	(2.13 × 2.02)	-	45	平埴	外傾	-	人為	縄文土器、石器	SK46・52→本跡→SK29
48	C 3c1	N-41°-W	[楕円形]	(0.29 × 0.24)	-	(50)	平埴	直立	-	人為		
49	C 3c2	N-72°-E	不整楕円形	1.91 × 1.50	3.00 × 2.92	112	平埴	直立 内傾	-	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→SK50
50	C 3c2	-	円形	2.28 × 2.24	-	35	平埴	外傾	2	自然 人為	縄文土器、土製品、石器	SK49・51→本跡→SK37
51	C 3c2	-	円形	2.00 × 1.84	-	67	平埴	直立	-	人為	縄文土器	SK64→本跡→SK59・72
52	C 3b2	N-68°-E	楕円形	3.22 × 2.38	-	66	平埴	外傾	-	自然	縄文土器、石器	SK46・53・65・67・ 68→本跡→SK47・66
53	C 3b2	N-53°-W	[楕円形]	(2.55 × 2.18)	-	53	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器	本跡→SK 3・24・ 52・141
54	B 2j9	N-12°-E	[円形・ 楕円形]	1.51 × (1.20)	-	20	平埴	緩斜 外傾	1	人為	縄文土器	本跡→SK 8・55
55	B 2j9	-	[円形]	2.60 × 2.39	-	50	平埴	緩斜 外傾	-	人為	縄文土器、石器	SK54→本跡→SK81・ 84・114・139
56	B 2j9	N-13°-E	不整楕円形	(1.85) × 1.47	(2.80) × 2.06	86	平埴	直立 内傾	-	人為	縄文土器、土製品	SK39→本跡
57	B 2j8	N-9°-E	楕円形	0.72 × 0.46	-	156	平埴	直立	-	人為	縄文土器	SK10→本跡→SK 9
58	C 2b6	-	円形	0.34 × 0.34	-	78	皿状	直立	-	人為		SK30→本跡
59	C 2a6	-	[円形・ 楕円形]	2.33 × (1.95)	-	41	平埴	外傾	-	自然	縄文土器	本跡→SK30・31・60
60	C 2a6	-	円形	0.56 × 0.55	-	(68)	皿状	直立	-	人為	縄文土器	SK59・71→本跡
61	B 3j1	N-17°-W	[楕円形]	[0.35 × 0.31]	-	56	平埴	外傾	-	人為		
62	B 3j1	N-10°-E	[楕円形]	[0.29 × 0.26]	-	21	平埴	緩斜 外傾	-	人為		
63	C 3d2	N-35°-W	楕円形	2.05 × 1.64	-	35	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SK27
64	C 3b2	-	不整円形	(2.10 × 2.07)	2.26 × 2.10	53	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SK51・104・135

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		深さ (cm)	底面	壁面	口	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部 長径 × 短径	最大径 長径 × 短径							
65	C 3b1	N-12°-W	[楕円形]	1.70 × 1.03	1.88 × 1.69	110	平坦	内壁	-	人為	縄文土器	本跡→SK46・52・66
66	C 3b1	N-32°-W	[楕円形]	(0.89 × 0.59)	-	60	皿状	外壁 緩斜	-	人為		SK52・65→本跡
67	C 3b2	N-46°-W	[楕円形]	(2.09 × 1.42)	-	93	平坦	直立	-	人為	縄文土器、石器	SK68→本跡→SK52
68	C 3b2	-	不整楕円形	(1.94 × 1.80)	1.93 × 1.81	106	平坦	内壁	-	人為	縄文土器	本跡→SK52・67
69	B 3j1	N-68°-E	楕円形	(0.78) × 0.52	-	57	皿状	外壁	-	自然		
70	B 3j1	N-61°-W	楕円形	0.76 × 0.39	-	112	平坦 皿状	直立	-	人為	縄文土器	
71	C 2a6	N-77°-W	楕円形	0.48 × 0.34	-	34	皿状	外壁	-	人為		SK60→本跡
72	C 3c3	N-37°-W	楕円形	2.48 × 2.00	3.10 × 2.90	116	平坦	直立 内傾	3	自然	縄文土器、土製品、石器	本跡→SK73
73	C 3d3	-	[円形]	[2.56 × 2.40]	-	67	平坦	外壁	2	自然	縄文土器、土製品	SK72→本跡
74	B 2i5	N-60°-E	楕円形	2.10 × 1.44	1.98 × 1.79	85	平坦	外壁 内傾	-	人為	縄文土器、石器	
75	B 2j9	N-39°-W	楕円形	2.22 × 1.90	2.85 × 2.22	106	平坦	直立 内傾	-	人為	縄文土器	SK108・131→本跡
76	B 2b4	N-36°-E	楕円形	1.93 × 1.88	-	58	平坦	外壁	-	自然	縄文土器、石器	
77	B 2i7	N-31°-W	楕円形	2.20 × 2.00	2.33 × 2.15	115	平坦	外壁 内傾	-	人為	縄文土器、石器	SK167・278→本跡→SK78
78	B 2i7	-	[円形・ 楕円形]	3.15 × (0.64)	-	80	皿状	緩斜	-	自然	縄文土器、石器	SK77・159・278→本跡
79	B 2i7	N-7°-W	[楕円形]	[1.08 × 0.80]	-	30	平坦	外壁	1	人為		SK11→本跡→SK40
80	B 2i7	N-45°-W	楕円形	1.58 × 1.34	-	50	平坦	外壁	1	人為	縄文土器、土製品、石器	SK157→本跡
81	B 2j9	N-37°-E	不定形	(1.12 × 0.45)	-	24	平坦	外壁	-	人為		SK55→本跡→SK84・114
82	B 2j9	N-15°-W	不定形	[0.95 × 0.65]	-	93	平坦	外壁	-	人為	縄文土器	
83	B 2j0	N-74°-E	[楕円形]	[0.72 × 0.63]	-	35	平坦	外壁	-	人為	縄文土器	
84	B 2j9	N-12°-E	楕円形	1.98 × 1.39	-	30	平坦	外壁	-	人為	縄文土器、石器	SK55・81・114→本跡
85	B 2i9	N-86°-W	楕円形	2.08 × 1.72	-	50	平坦	直立	-	人為	縄文土器、土製品	SK86・87・160→ 本跡→SK170
86	B 2i9	N-41°-E	[楕円形]	(0.38) × 0.36	-	126	皿状	直立	-	人為	縄文土器	本跡→SK85
87	B 2i9	N-50°-E	不整楕円形	(1.46 × 0.98)	1.85 × 1.58	84	平坦	内傾	-	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→SK85
88	C 3c2	N-15°-E	楕円形	1.18 × 1.06	1.92 × 1.78	72	平坦	内傾	1	人為	縄文土器、土製品、石器	
89	C 3c3	-	円形	1.87 × 1.75	-	47	平坦	外壁	3	自然 人為	縄文土器、土製品	SK129・271→本跡
90	C 3b3	N-59°-E	[楕円形]	(2.08 × 1.58)	-	56	平坦	外壁	1	人為	縄文土器	本跡→SK106・135・ 183・722
91	B 3j3	-	[円形・ 楕円形]	(1.75 × 0.76)	2.08 × (0.80)	122	平坦	内壁	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SK124・134
92	C 2a6	N-45°-W	楕円形	0.44 × 0.38	-	48	皿状	直立	-	人為	縄文土器	SK102→本跡
93	B 2b5	N-56°-E	楕円形	2.41 × 1.98	-	30	平坦	外壁	1	人為	縄文土器	本跡→SK94・214
94	B 2b5	N-79°-W	楕円形	0.51 × 0.33	-	55	皿状	外壁	-	人為	縄文土器	SK93→本跡
95	B 2b4	-	[円形・ 楕円形]	(1.94 × 1.14)	2.76 × (1.60)	152	平坦	外壁 内傾	-	人為	縄文土器、土製品	SK147→本跡
96	B 2b5	N-50°-W	楕円形	1.16 × 0.97	-	32	平坦	外壁	-	人為	縄文土器	本跡→SK246・249
98	B 2i5	N-7°-E	楕円形	1.27 × 0.70	-	52	平坦	緩斜	-	人為	縄文土器、石器	SK99→本跡
99	B 2i5	-	円形	0.66 × 0.66	-	67	平坦	外壁	-	人為	縄文土器	本跡→SK98
100	B 2i6	N-67°-E	楕円形	0.94 × 0.53	-	57	平坦	外壁	-	人為	縄文土器	
101	C 2a6	N-23°-W	不整楕円形	2.25 × 1.90	2.92 × 2.62	127	平坦	外壁 内傾	-	人為	縄文土器	本跡→SK343・360
102	C 2a6	N-37°-E	[楕円形]	0.40 × (0.24)	-	80	皿状	直立	-	人為	縄文土器	本跡→SK92
104	C 3b3	N-50°-W	不整楕円形	1.67 × 1.49	1.73 × 1.33	50	平坦	外壁 内傾	3	人為	縄文土器	SK64→本跡
105	C 3d2	-	[円形]	(1.62 × 1.56)	-	(32)	平坦	外壁	1	自然	縄文土器、石器	SK121→本跡 →SK107・185・186
106	C 3b3	N-52°-E	[楕円形]	(0.60 × 0.34)	-	120	皿状	外壁 直立	-	人為	縄文土器	SK90→本跡
107	C 3d2	N-60°-W	[楕円形]	(0.54 × 0.48)	-	(111)	皿状	直立	-	人為	縄文土器	SK105→本跡
108	B 2j8	-	不明	-	-	32	平坦	外壁	-	人為		SK110→本跡 →SK75・109・111
109	B 2j8	-	不整円形	[1.30 × 1.29]	-	128	平坦	外壁	-	人為		SK108・110→本跡
110	B 2j8	-	不整円形	[2.53 × 2.53]	2.90 × 2.62	97	平坦	直立 内傾	1	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→SK108・109・ 111・112
111	B 2j9	N-40°-E	楕円形	1.80 × 1.50	-	40	平坦	外壁	4	自然 人為	縄文土器	SK108・110→本跡
112	B 2i8	N-7°-E	楕円形	1.82 × 1.57	-	50	平坦	外壁	1	人為	縄文土器	SK110→本跡→SK113
113	B 2i8	N-59°-W	楕円形	[1.67] × 1.58	-	28	平坦	外壁	2	人為	縄文土器、石器	SK112→本跡

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		高さ (cm)	底面	壁面	勾配	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部 長径 × 短径	最大径							
114	B 2j9	N-38°-E	不定形	[1.97 × 1.29]	2.47 × 2.05	95	平埴	直立 内傾	1	人為	縄文土器、石器	SK55・81 → 本跡 → SK84
115	C 2b8	N-71°-W	[楕円形]	0.69 × (0.48)	-	53	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	SK229 → 本跡 → SK242
116	B 2b4	N-9°-E	不定形	1.62 × 1.34	2.08 × 1.92	82	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、土製品	本跡 → SI 6
117	B 2j4	-	円形	1.57 × 1.50	1.90 × 1.82	(59)	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、石器	SI 6 → 本跡
119	B 2j4	-	円形	1.12 × 1.05	-	38	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	SI 6 → 本跡
120	C 3a3	-	[円形・ 楕円形]	1.52 × (1.21)	1.95 × (1.68)	54	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡 → SK145
121	C 3d3	-	円形	1.80 × 1.76	1.92 × 1.73	52	平埴	直立 内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡 → SK106・122
122	C 3d3	N-62°-W	楕円形	1.82 × 1.35	-	(50)	平埴	外傾	2	人為	縄文土器、石器	SK121 → 本跡 → SK728
123	C 3a3	N-47°-W	不整楕円形	2.74 × 2.34	2.94 × 2.78	86	平埴	内傾	1	人為	縄文土器、石器	本跡 → SK142・145・ 223・241・725・727
124	B 3j3	-	[円形・ 楕円形]	(1.64 × 0.97)	-	86	平埴	直立	-	人為	縄文土器、石器	SK91 → 本跡 → SK154
125	C 3c3	N-9°-W	楕円形	0.44 × 0.33	-	(84)	平埴	外傾	-	人為		SK129 → 本跡
126	C 3a1	N-45°-W	楕円形	1.50 × 1.28	2.36 × 1.82	81	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡 → SK127
127	C 3b1	-	円形	0.56 × 0.55	-	38	平埴	緩斜	-	人為		SK126 → 本跡
128	C 3a2	-	円形	0.42 × 0.41	-	124	平埴	直立	-	人為	縄文土器	SK 3 → 本跡
129	C 3c3	N-58°-E	楕円形	2.41 × 1.95	-	34	平埴	緩斜	2	人為	縄文土器	SK130・182 → 本跡 → SK89・125
130	C 3b4	N-51°-W	楕円形	1.88 × 1.58	1.71 × 1.69	80	凹凸	内傾	1	人為	縄文土器、石器	本跡 → SK129
131	C 2a8	-	円形	[2.86 × 2.72]	2.78 × 2.58	107	平埴	直立 内傾	2	人為	縄文土器、土製品、石器、 石製品	本跡 → SK75・198
132	C 3c1	N-32°-E	[楕円形]	(0.38 × 0.33)	-	(17)	平埴	外傾	-	人為		
133	C 2c0	N-10°-E	[楕円形]	(0.21 × 0.17)	-	(8)	皿状	直立	-	人為		
134	B 3j2	N-48°-W	楕円形	(0.42 × 0.35)	-	(14)	皿状	直立	-	人為	縄文土器	SK91 → 本跡
135	C 3b3	N-2°-W	[楕円形]	(0.50 × 0.40)	-	(50)	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	SK64・90 → 本跡
136	C 2c0	N-60°-E	[楕円形]	(0.23 × 0.16)	-	(12)	皿状	外傾	-	人為		
137	C 2a6	-	円形	0.52 × 0.52	-	(70)	-	外傾 直立	-	人為	縄文土器	SK32・138 → 本跡
138	C 2a6	N-52°-E	楕円形	(0.56) × 0.48	-	50	-	-	-	人為		SK32 → 本跡 → SK137
139	B 2j0	N-86°-W	[楕円形]	[0.44] × 0.35	-	61	平埴	外傾	-	人為		SK55 → 本跡
140	B 3j1	N-22°-E	[楕円形]	[1.02 × 0.92]	-	86	平埴	外傾	-	人為		
141	C 3a2	N-20°-E	[楕円形]	(0.43 × 0.32)	-	(48)	皿状	外傾	-	人為		SK53 → 本跡
142	C 3a4	N-27°-E	楕円形	(0.79 × 0.52)	-	63	皿状	直立 外傾	-	人為	縄文土器	SK123 → 本跡
143	B 2j0	-	[楕円形]	0.64 × (0.52)	1.55 × (0.80)	61	平埴	内傾	-	人為		本跡 → SK38
144	B 2j8	N-13°-E	[楕円形]	(0.52 × 0.47)	-	117	平埴	直立	-	人為	縄文土器	SK10 → 本跡
145	C 3a3	N-32°-E	[楕円形]	[1.52 × 1.05]	-	(60)	皿状	外傾 緩斜	-	人為	縄文土器	SK120・123 → 本跡
146	B 2j6	-	円形	2.37 × 2.22	-	63	平埴	外傾	3	人為	縄文土器、石器	
147	B 2b5	N-45°-E	楕円形	1.01 × (0.52)	-	75	皿状	外傾	-	人為		本跡 → SK95
150	B 2j6	N-39°-E	楕円形	2.30 × 1.58	3.10 × 2.81	137	平埴	外傾 内傾	1	人為	縄文土器、石器	SK280 → 本跡
151	C 3e2	-	円形	2.20 × 2.14	2.15 × 2.10	57	平埴	外傾 内傾	-	人為	縄文土器	本跡 → SK731・733
152	C 3e3	-	円形	1.93 × 1.90	-	53	平埴	外傾	-	人為	縄文土器、石器	SK181・227 → 本跡
153	C 2b0	N-4°-W	[楕円形]	[1.50] × (0.95)	-	18	平埴	緩斜	3	人為		
154	B 3j3	N-75°-E	楕円形	(0.36 × 0.29)	-	(40)	皿状	外傾	-	人為		SK124 → 本跡
155	C 2b0	N-21°-E	[楕円形]	0.32 × [0.29]	-	74	皿状	直立	-	人為		
156	B 2j8	-	[円形・ 楕円形]	0.32 × (0.22)	-	52	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	
157	B 2j7	N-76°-E	楕円形	2.33 × (1.51)	-	58	平埴	外傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡 → SK80・160・ 161・245
158	B 2j7	N-53°-W	[楕円形]	[1.50 × 1.24]	-	26	平埴	緩斜 外傾	1	人為	縄文土器、石器	
159	B 2b7	-	[楕円形]	(0.78) × 0.54	-	113	皿状	緩斜	-	人為		本跡 → SK78
160	B 2j7	-	円形	1.20 × 1.17	(1.32 × 1.32)	70	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、石器	SK157・161 → 本跡
161	B 2j7	-	円形	(1.84 × 1.80)	(1.90 × 1.90)	(50)	平埴	外傾	2	人為		SK157 → 本跡 → SK160・162
162	B 2j7	N-32°-W	楕円形	(2.65) × 2.36	-	32	平埴	外傾	5	人為	縄文土器	本跡 → SK161・176
163	B 2b6	N-87°-E	楕円形	1.18 × 0.98	-	50	[平埴]	外傾	-	人為	縄文土器、石器	SK164 → 本跡

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		深さ (cm)	底面	壁面	口	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部								
				長径 × 短径	最大径							
164	B 2b6	—	[楕円形]	1.74 × (0.78)	1.88 × (0.68)	137	平坦	外傾内傾	—	人為	縄文土器	本跡→SK163
165	B 2b6	N-83°-E	楕円形	1.20 × 1.05	—	22	平坦	外傾	—	人為	縄文土器	本跡→SK166
166	B 2b6	—	円形	0.60 × 0.60	—	52	皿状	直立	—	人為	縄文土器	SK165→本跡
167	B 2b6	N-61°-W	[楕円形]	(0.42 × 0.30)	—	53	皿状	外傾	—	人為		本跡→SK77・278
169	B 2j9	N-45°-W	楕円形	1.42 × 0.84	(1.84 × 1.80)	(67)	平坦	内傾	—	人為	縄文土器	本跡→SK85・170
170	B 2j9	N-10°-E	楕円形	(0.47 × 0.38)	—	(112)	皿状	直立	—	人為		SK85・169→本跡
171	C 3a3	N-30°-E	楕円形	1.50 × 1.29	2.38 × 2.13	87	平坦	直立内傾	—	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→SK173・725
172	C 3a2	N-61°-W	楕円形	(0.55) × 0.46	—	80	皿状	直立	—	人為	縄文土器	
173	C 3a3	—	円形	(0.44 × 0.43)	—	46	皿状	直立	—	人為	縄文土器	SK171→本跡
174	B 2j8	—	不整形円形	(3.07 × 3.06)	—	55	平坦	直立	2	人為	縄文土器、石器	
175	C 2a9	—	円形	1.78 × 1.69	2.20 × 2.14	119	平坦	外傾内傾	—	人為	縄文土器、石器	SK354・720→本跡
176	B 2j7	—	円形	(1.62 × 1.60)	—	97	平坦	直立	2	人為	縄文土器、石器	SK162・195・218・260→本跡→SK161
177	C 2b0	—	[楕円形]	(2.66 × 2.27)	—	29	平坦	外傾	3	人為	縄文土器	SK178・180・193・199・200→本跡
178	C 2a0	—	円形	(1.95 × 1.95)	—	38	平坦	緩斜	3	人為	縄文土器、石器	SK180→本跡→SK177・179・190・277
179	C 2a9	—	[円形]	(0.46 × 0.43)	—	54	皿状	外傾	—	人為	縄文土器	SK178→本跡
180	C 2b0	—	不定形	(1.28 × 1.20)	1.80 × 1.68	88	平坦	直立内傾	—	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→SK177・178
181	C 3e3	N-38°-E	楕円形	2.52 × 2.15	2.93 × 2.48	(106)	平坦	外傾内傾	—	人為	縄文土器、石器	本跡→SK152・540
182	C 3e4	N-76°-W	不定形	2.01 × [1.51]	2.63 × 2.21	94	平坦	外傾内傾	—	人為	縄文土器、石器	本跡→SK129
183	C 3b3	—	[円形]	(0.85 × 0.80)	—	(37)	平坦	緩斜	—	人為	縄文土器	SK90→本跡→SK184
184	C 3b3	N-37°-W	[楕円形]	(0.35 × 0.30)	—	(31)	皿状	外傾	—	人為		SK183→本跡
185	C 3d2	—	[円形]	(0.32 × 0.30)	—	(22)	皿状	外傾	—	人為		SK105→本跡
186	C 3d2	N-22°-W	[楕円形]	(0.45 × 0.37)	—	(31)	皿状	外傾	—	人為	縄文土器	SK105→本跡
187	C 2a0	—	[楕円形]	(0.95) × 0.83	—	22	凹凸	緩斜	2	人為		
189	C 2a0	N-3°-E	[楕円形]	0.52 × (0.45)	—	84	皿状	直立	—	人為	縄文土器	
190	C 2a0	N-20°-W	楕円形	2.23 × (2.00)	—	49	平坦	外傾	6	人為	縄文土器、土製品、石器	SK178→本跡→SK274
191	C 2a0	N-23°-E	不定形	(1.15 × 0.87)	—	53	有段	外傾	—	人為	縄文土器	
192	C 2a0	N-25°-W	[楕円形]	2.10 × [1.58]	—	17	平坦	緩斜	3	人為	縄文土器、土製品	
193	C 2b0	N-18°-E	[楕円形]	(1.98 × 1.52)	—	53	皿状	直立	—	人為	縄文土器	SK194→本跡→SK41・177・200
194	C 2e0	N-31°-W	[楕円形]	(1.93 × 1.24)	—	35	平坦	外傾	2	人為	縄文土器	本跡→SK43・193・200
195	B 2j7	N-2°-W	[楕円形]	(1.78 × 1.50)	—	90	平坦	外傾	2	人為	縄文土器	SK218・260・409→本跡→SK176
196	C 2a9	N-64°-E	[楕円形]	(0.67 × 0.47)	—	74	平坦	外傾	—	人為		SK197・209→本跡
197	C 2a9	N-61°-E	[楕円形]	(0.75 × 0.56)	—	45	平坦	緩斜	—	人為	縄文土器	SK198・209→本跡→SK196
198	C 2a9	—	円形	2.10 × [2.01]	—	92	平坦	直立	1	人為	縄文土器、石器	SK131・209→本跡→SK197
199	C 2b9	N-60°-W	不整形楕円形	2.98 × 2.55	3.24 × 3.10	98	平坦	外傾内傾	10	人為	縄文土器、石器	SK233→本跡→SK177・200・208
200	C 2b0	—	円形	(2.28 × 2.24)	2.35 × 2.15	102	平坦	外傾内傾	—	人為	縄文土器、石器	SK191・194・199→本跡→SK177・217・234・237
201	C 3a5	N-48°-E	[楕円形]	(1.83 × 1.68)	2.82 × 2.10	103	平坦	内傾	—	人為	縄文土器、石器	SK202→本跡→SK204
202	C 3a4	—	[円形-楕円形]	(1.06) × [1.00]	2.70 × 2.62	126	平坦	直立内傾	—	自然 人為	縄文土器、石器	本跡→SK201・203・204
203	C 3e4	N-65°-W	楕円形	(2.34 × 2.13)	2.26 × 1.98	70	平坦	内傾	2	人為	縄文土器	SK202・205→本跡→SK204
204	C 3a5	N-63°-E	楕円形	(2.77) × 2.21	—	45	平坦	外傾	—	人為	縄文土器	SK201・203→本跡
205	C 3e4	—	円形	1.95 × 1.85	3.30 × 2.80	124	平坦	外傾内傾	—	人為	縄文土器、石器	本跡→SK203
206	C 2e9	N-62°-W	[楕円形]	(1.37 × 1.08)	1.86 × 1.77	82	平坦	外傾内傾	—	人為	縄文土器、石器	本跡→SK234
208	C 2b0	N-38°-W	楕円形	0.55 × 0.40	—	103	平坦	直立	—	人為	縄文土器	SK199→本跡
209	C 2a9	—	[円形-楕円形]	(1.62) × (1.31)	—	40	平坦	直立	—	自然	縄文土器、石器	本跡→SK196・198
210	C 2a9	N-71°-W	[楕円形]	(0.92) × 0.92	—	23	平坦	緩斜	1	人為		
211	B 2i5	N-38°-E	楕円形	1.78 × 1.41	2.38 × 2.28	111	平坦	外傾内傾	—	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→SK345
212	C 2b8	—	円形	1.30 × 1.19	1.97 × 1.82	118	皿状	外傾内傾	—	人為	縄文土器、石器	SK213・358→本跡
213	C 2b8	N-24°-E	不整形楕円形	2.09 × 1.34	2.27 × 2.08	93	平坦	直立内傾	—	人為	縄文土器、石器	本跡→SK212・724

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		深さ (cm)	底面	壁面	口	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部 長径 × 短径	最大径 長径 × 短径							
214	B 2h5	N-37°-W	楕円形	0.38 × 0.30	-	42	皿状	外傾	-	人為		SK93 → 本跡
215	C 2b7	N-40°-E	[楕円形]	(1.45) × 1.28	-	22	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器、石器	SK216 → 本跡 → SK243
216	C 2b7	N-23°-E	不整楕円形	(1.66 × 1.32)	2.45 × 2.14	98	平埴	直立 内傾	-	人為	縄文土器、石器	SK240 → 本跡 → SK215・231
217	C 2c0	N-38°-E	[楕円形]	0.60 × (0.47)	-	(98)	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	SK200 → 本跡
218	B 2j7	-	[楕円形]	(1.38 × 0.61)	-	83	凹凸	外傾	-	人為	縄文土器	SK260 → 本跡 → SK176・195
221	C 3a4	N-30°-E	[楕円形]	2.11 × (1.67)	-	(36)	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器、石器	SK222・224 → 本跡
222	C 3a4	N-63°-W	楕円形	1.94 × 1.70	-	42	平埴	外傾	-	人為	縄文土器、石器	SK223 → 本跡 → SK221
223	C 3a4	N-49°-W	楕円形	[1.70] × (1.38)	-	37	平埴	外傾	3	人為	縄文土器	SK123 → 本跡 → SK222
224	C 3a4	-	不定形	[2.16] × (1.76)	2.06 × 1.90	64	平埴	外傾 内傾	2	人為	縄文土器、石器	本跡 → SK221
225	C 3a5	N-88°-E	楕円形	(0.33 × 0.27)	-	(51)	皿状	直立	-	人為		
226	C 3a5	N-19°-W	楕円形	(0.45 × 0.39)	-	(42)	皿状	外傾	-	人為		
227	C 3e2	N-64°-E	不整楕円形	1.76 × 1.45	1.72 × 1.78	81	平埴	直立 内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡 → SK152
228	C 2a8	N-20°-W	[楕円形]	(1.58) × 1.50	-	15	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器	本跡 → SK229
229	C 2b8	N-80°-W	[楕円形]	(2.84) × 2.38	-	47	平埴	外傾	2	人為	縄文土器、土製品	SK228 → 本跡 → SK115
230	C 2a7	-	円形	0.42 × 0.42	-	46	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	
231	C 2b7	-	円形	1.93 × 1.80	-	57	平埴	外傾	-	人為	縄文土器、土製品	SK216・240・244 → 本跡 → SK239
232	C 2b7	N-79°-E	楕円形	1.75 × 1.15	-	50	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器	SK279 → 本跡 → SK243
233	C 2b9	N-66°-W	[楕円形]	[0.62] × 0.54	-	(24)	平埴	緩斜	-	人為		本跡 → SK199
234	C 2c9	N-60°-W	[楕円形]	[0.83 × 0.57]	-	50	皿状	緩斜	-	人為	縄文土器	SK200・206・237 → 本跡
235	C 2a7	N-22°-E	楕円形	1.68 × 1.38	2.76 × 2.57	105	平埴	直立 内傾	-	人為	縄文土器、石器	
236	C 2a7	N-78°-E	楕円形	1.88 × 1.35	1.88 × 1.55	47	平埴	外傾 内傾	-	人為	縄文土器	SK238・244 → 本跡
237	C 2b9	N-11°-E	[楕円形]	[1.25 × 0.93]	(0.94) × 0.90	52	平埴	内傾	-	人為	縄文土器	SK200 → 本跡 → SK234
238	C 2a7	N-83°-W	楕円形	1.58 × 1.34	1.62 × 1.60	79	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡 → SK236・259
239	C 2b7	N-57°-E	楕円形	0.79 × 0.57	-	79	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	SK231 → 本跡
240	C 2b7	N-12°-W	[楕円形]	(1.55 × 1.15)	-	59	平埴	外傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡 → SK216・231
241	C 3a3	N-50°-W	楕円形	0.61 × 0.46	-	52	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	SK123 → 本跡
242	C 2b8	-	円形	0.47 × 0.45	-	41	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	SK115 → 本跡
243	C 2b7	N-80°-E	不定形	0.94 × 0.70	-	58	皿状	緩斜	-	人為		SK215・232 → 本跡
244	C 2b7	N-55°-W	[楕円形]	(1.92 × 1.76)	-	48	平埴	外傾	3	人為	縄文土器	SK236 → 本跡 → SK231・236
245	B 2j7	-	円形	1.50 × 1.48	-	48	平埴	外傾	1	人為	縄文土器	SK157 → 本跡 → SK248
246	B 2h5	-	円形	0.30 × 0.30	-	58	皿状	直立	-	人為	縄文土器	SK96 → 本跡
247	B 2j6	N-37°-E	楕円形	2.00 × 1.66	-	67	平埴	外傾	3	人為	縄文土器、石器	本跡 → SK266
248	B 2j7	N-27°-W	楕円形	0.55 × 0.50	-	53	皿状	直立	-	人為	縄文土器	SK245・266 → 本跡
249	B 2h5	-	円形	0.47 × 0.46	-	48	皿状	外傾	-	人為		SK96 → 本跡
250	C 2a7	-	[円形]	[0.25 × 0.25]	-	(21)	皿状	直立	-	人為	縄文土器	
253	C 3b6	N-10°-W	楕円形	0.46 × 0.34	-	131	平埴	直立	-	人為	縄文土器	
254	C 3b6	N-81°-E	楕円形	0.32 × 0.29	-	61	平埴	外傾	-	人為	縄文土器、石器	
255	C 3b6	-	円形	0.36 × 0.34	-	(44)	平埴	外傾	-	人為		
256	C 3a4	-	[円形・楕円形]	(0.86 × 0.57)	(1.48 × 0.49)	(50)	平埴	直立	-	人為	縄文土器、土製品	
259	C 2a7	N-86°-W	[楕円形]	[0.63 × 0.41]	-	104	皿状	直立	-	人為	縄文土器	SK238 → 本跡
260	B 2j7	-	円形	1.46 × 1.37	1.88 × 1.78	109	平埴	内傾	1	人為	縄文土器、石器	SK409 → 本跡 → SK176・195・218
261	B 2j6	N-8°-W	楕円形	0.44 × 0.40	-	50	平埴	外傾	-	人為		SK264 → 本跡
262	B 2j6	N-45°-E	[楕円形]	0.58 × (0.45)	-	56	皿状	直立	-	人為	縄文土器	SK264 → 本跡
264	B 2j6	N-58°-E	楕円形	2.25 × 1.89	-	46	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器	本跡 → SK261・262・267
265	B 2j7	-	楕円形	0.53 × 0.46	-	(37)	皿状	外傾	-	人為		SK266 → 本跡
266	B 2j6	N-80°-W	楕円形	(1.52) × 1.18	1.70 × 1.56	120	平埴	外傾 内傾	1	人為	縄文土器	SK217 → 本跡 → SK248・265
267	B 2j6	-	不整円形	2.08 × 2.05	2.25 × 2.24	176	平埴	外傾 内傾	2	人為	縄文土器、石器	SI 5、SK264・265 → 本跡

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		深さ (cm)	底面	壁面	口付	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部 長径 × 短径	最大径 長径 × 短径							
271	C 3e3	N-44°-E	楕円形	0.44 × 0.36	-	68	平坦	直立	-	人為	縄文土器	本跡→SK89
272	C 3a5	-	不定形	(2.20 × 2.10)	2.60 × (1.98)	87	平坦	内巻	2	人為	縄文土器、石器	本跡→SI 3
274	C 2a0	-	円形	(1.87) × 1.80	-	36	平坦	外傾	1	自然	縄文土器、石器	SK190→本跡
275	B 2j0	-	円形	0.33 × [0.32]	-	73	皿状	直立	-	人為	縄文土器	
276	C 2a0	N-12°-E	[楕円形]	[0.46 × 0.38]	-	53	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	
277	C 2a0	N-5°-W	[楕円形]	(0.55 × 0.48)	-	(50)	皿状	外傾	-	人為	縄文土器、土製品	SK178→本跡
278	B 2b6	N-18°-W	[楕円形]	1.28 × (0.89)	-	32	皿状	緩斜	-	人為	縄文土器、石器	SK167→本跡→SK77・78
279	C 2e7	-	円形	0.43 × (0.42)	-	58	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	本跡→SK232
280	B 2b6	-	不明	(1.46 × 0.38)	-	(54)	-	直立	-	人為	縄文土器	本跡→SK150
281	C 3b5	-	不整円形	1.93 × 1.86	2.40 × 2.32	92	平坦	外傾 内巻	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SK282・293
282	C 3b5	N-74°-W	楕円形	2.45 × 2.09	-	48	平坦	外傾	-	人為	縄文土器、石器	SK281→本跡→SK280
283	C 3b6	N-58°-E	楕円形	2.50 × 1.74	-	78	平坦	外傾	1	人為	縄文土器、石器	SK285・337→本跡
284	C 3b6	N-2°-E	[楕円形]	0.43 × (0.33)	-	52	皿状	直立	-	人為	縄文土器、土製品、石器	SK285→本跡
285	C 3b7	N-53°-E	楕円形	2.90 × 2.65	3.25 × 3.15	118	平坦	緩斜 内巻	-	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→SK283・284・337
286	C 3b7	-	円形	2.66 × 2.47	2.82 × 2.55	86	平坦	内傾	-	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→F 5、SK288
287	C 3b8	-	[楕円形]	0.47 × (0.28)	-	(94)	皿状	直立	-	人為	縄文土器、石器	
288	C 3b8	N-42°-W	[楕円形]	(1.87 × 1.42)	-	32	平坦	外傾	-	人為	縄文土器、土製品、石器	SK286・378→本跡
290	C 3b7	-	-	(2.48 × 0.73)	-	43	平坦	外傾	2	人為		SK337→本跡
291	C 3b9	-	[円形]	(2.59 × 2.45)	[2.52 × 2.52]	62	平坦	直立 内傾	1	自然	縄文土器、石器	
292	C 3b3	N-70°-W	[楕円形]	[2.34 × 1.79]	2.77 × 2.74	83	平坦	直立 内傾	-	人為	縄文土器、土製品	
293	C 3b5	N-81°-W	楕円形	0.63 × 0.52	-	54	平坦	外傾	-	人為	縄文土器、石器	SK281・282→本跡
294	C 3b4	N-65°-W	楕円形	0.43 × 0.34	-	(42)	平坦	外傾	-	人為		
295	C 3b8	N-38°-E	[楕円形]	1.97 × (1.71)	-	42	平坦	外傾	-	自然	縄文土器	
296	C 2b6	N-32°-W	楕円形	0.76 × (0.74)	-	40	平坦	外傾	-	人為		本跡→SK214
298	B 2b6	N-9°-E	[楕円形]	(0.43) × 0.37	-	(38)	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	
299	C 2e7	N-68°-W	不整楕円形	(2.29 × 2.06)	-	57	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	SK342→本跡→SI 4
300	C 2e8	N-50°-E	楕円形	1.48 × 1.15	2.00 × 2.00	56	平坦	内巻	2	人為	縄文土器、石器	本跡→SI 4、SK355
301	C 2d3	N-83°-W	楕円形	1.46 × 1.25	-	40	皿状	外傾	-	人為	縄文土器、石器	SK399→本跡
302	C 2e4	-	円形	2.18 × 2.05	-	55	平坦	緩斜	1	人為	縄文土器、石器	本跡→SK359・384
303	C 2d4	-	円形	3.16 × 3.06	-	94	平坦	直立	2	自然	縄文土器、石器	
304	C 2d5	-	円形	2.40 × 2.20	2.60 × 2.48	102	平坦	内巻	-	人為	縄文土器	
305	C 2d4	-	[円形・楕円形]	2.68 × (1.28)	-	85	平坦	直立 内巻	-	人為	縄文土器、土製品、石器	
306	C 2e4	N-73°-E	不定形	1.50 × 1.04	-	64	平坦	外傾	1	人為	縄文土器、石器	
307	C 2d4	N-73°-E	不定形	3.18 × 1.74	-	40	平坦	外傾	-	自然	縄文土器、石器	
308	C 2d5	N-87°-W	楕円形	2.08 × 1.43	-	28	平坦	外傾	2	自然	縄文土器、石器	
309	C 2d5	N-61°-E	楕円形	2.87 × 2.45	-	52-66	緩斜	外傾 直立	-	人為	縄文土器	
310	C 2d7	-	円形	2.65 × 2.57	2.45 × 2.39	93	平坦	直立 内巻	-	自然	縄文土器	本跡→SK385
311	C 2d7	N-69°-W	不整楕円形	1.76 × 1.57	-	28	緩斜	外傾	-	人為	縄文土器、石器	
312	D 3b1	N-86°-W	楕円形	2.28 × 1.57	-	45	平坦	外傾	-	自然	縄文土器	SK484→本跡→SK313
313	D 3e2	-	円形	3.52 × 3.46	-	63	皿状	外傾	2	人為	縄文土器	SK312・315・484→本跡→SD 2
314	D 3a1	-	円形	2.47 × 2.40	-	70	平坦	外傾	-	人為	縄文土器、石器	
315	D 3b2	N-26°-W	楕円形	2.04 × 1.84	-	129	平坦	直立	-	人為	縄文土器、土製品	本跡→SK313
316	D 3e6	-	円形	3.96 × 3.83	-	90	平坦	直立	2	自然 人為	縄文土器、石器	
317	D 3b6	-	円形	2.71 × 2.60	-	121	平坦	直立	3	自然	縄文土器、石器	本跡→SK318
318	D 3b6	N-63°-W	不定形	2.06 × 1.53	-	56	皿状	直立 緩斜	-	人為	縄文土器	SK317→本跡
319	D 3e8	-	円形	1.69 × 1.56	-	83	平坦	外傾 緩斜	-	人為	縄文土器	
320	D 3b9	-	円形	2.67 × 1.94	-	73	平坦	直立	1	自然	縄文土器	

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		高さ (cm)	底面	壁面	口	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部 長径 × 短径	最大径 長径 × 短径							
321	D 3b0	-	円形	1.66 × 1.58	-	53	平埴	外縁 緩斜	-	人為	縄文土器、石器	
322	C 2j0	N-14°-W	不整楕円形	2.16 × 1.65	3.04 × 2.82	128	平埴	内縁	1	人為	縄文土器、土製品、石器	SI 18 → 本跡
323	D 3a7	-	不整円形	2.16 × 2.04	-	58-65	有段	直立 外縁	2	人為	縄文土器、土製品	
325	C 2g6	-	円形	2.61 × 2.43	2.81 × 2.62	95	平埴	外縁 内縁	2	自然 人為	縄文土器、石器	
331	C 3d4	-	円形	2.12 × 1.97	2.85 × 2.20	90	平埴	内縁	3	人為	縄文土器、石器	
332	C 3a6	-	不整円形	1.10 × 1.10	-	50	平埴	直立	-	人為	縄文土器	本跡 → SI 3
333	C 3e4	N-3°-E	楕円形	2.46 × 2.23	-	60	平埴	外縁	4	自然	縄文土器、石器	SK576 → 本跡
334	C 3a6	N-50°-W	楕円形	0.43 × 0.38	-	100	平埴	直立	-	人為	縄文土器	本跡 → SI 3
335	C 3a6	-	円形	0.48 × 0.46	-	155	平埴	直立	-	人為	縄文土器	本跡 → SI 3
336	C 3b4	N-51°-E	不整楕円形	2.24 × 2.07	2.68 × 2.58	96	平埴	内縁	-	人為	縄文土器、土製品	本跡 → SK729
337	C 3b7	N-36°-W	楕円形	2.75 × 1.98	-	87	平埴	外縁 内縁	-	人為	縄文土器	SK285 → 本跡 → SK283-290、F 5
338	C 3c5	-	不整円形	2.25 × 2.10	-	58	平埴	直立	1	人為	縄文土器、石器	SK340 → 本跡
339	C 3c5	-	円形	0.58 × 0.55	-	73	平埴	直立	-	人為	縄文土器、石器	
340	C 3c5	N-18°-W	楕円形	2.80 × 2.41	-	62	平埴	外縁	1	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡 → SK338
341	C 2d8	N-5°-E	[楕円形]	(2.38) × 2.14	-	58	平埴	直立 内縁	-	人為		SI 4-36、SK344 → 本跡
342	C 2c7	N-71°-E	楕円形	(1.65) × 1.43	2.60 × 2.48	104	平埴	内縁	-	人為	縄文土器、土製品、石器	SI 36 → 本跡 → SK299
343	C 2c6	N-76°-E	楕円形	1.97 × 1.65	1.78 × 1.52	85	平埴	直立	2	人為	縄文土器、土製品	SK101 → 本跡
344	C 2d8	N-7°-W	楕円形	2.60 × 2.07	-	86	平埴	直立 内縁	-	人為	縄文土器、石器	SI 4 → 本跡 → SK311-352
345	B 2j4	N-13°-E	楕円形	2.51 × 1.87	-	45	平埴	外縁	-	自然	縄文土器、土製品	SK211-347 → 本跡
346	C 2a4	N-77°-W	不整楕円形	3.05 × 2.57	3.03 × 2.40	115	平埴	外縁 内縁	3	自然 人為	縄文土器、石器	本跡 → SI 5
347	B 2j4	N-19°-E	不整楕円形	2.60 × 2.10	2.36 × 2.17	101	平埴	内縁	-	人為	縄文土器、土製品、 石製品	SI 6 → 本跡 → SK345
348	C 2c8	-	円形	2.10 × 2.07	-	35-46	凹凸	外縁	1	自然	縄文土器	SI 4、SK381 → 本跡 → SK382
349	C 2e9	N-69°-E	楕円形	2.25 × 1.89	-	76	平埴	直立	1	自然	縄文土器、石器	SI 4 → 本跡 → SK734
350	C 2a5	-	円形	1.02 × 1.00	-	35	平埴	外縁	-	自然	縄文土器	SI 5 → 本跡
351	C 2b4	N-83°-W	楕円形	1.89 × 1.68	-	(106)	凹凸	直立	4	人為		SI 7 → 本跡
352	C 2d8	-	円形	1.53 × 1.45	-	60	平埴	緩斜	-	人為		SI 4、SK344 → 本跡 → SK660
354	C 2d9	-	円形	1.81 × 1.73	2.25 × 2.25	115	平埴	内縁	-	人為	縄文土器、石器	本跡 → SI 4、SK175
355	C 2c8	N-33°-W	楕円形	1.97 × 1.69	2.23 × 2.16	94	平埴	内縁	3	人為	縄文土器、石器	SK300 → 本跡 → SI 4
357	B 2j5	-	円形	0.30 × 0.30	-	87	皿状	直立	-	人為		SI 5 → 本跡
358	C 2c8	N-60°-W	[円形・ 楕円形]	(1.68 × 0.70)	-	50	平埴	直立	-	人為	縄文土器	本跡 → SI 4、SK212
359	C 2e3	-	[円形・ 楕円形]	(1.66 × 1.40)	-	38	平埴	直立	-	人為	縄文土器	SK302 → 本跡 → SK384-399
360	C 2b7	-	楕円形	(2.08 × 0.70)	-	53	平埴	外縁	-	人為	縄文土器、石器	SK101 → 本跡
361	C 3d4	N-49°-E	不定形	0.84 × 0.53	-	116	平埴	外縁	-	人為	縄文土器、土製品、石器	
362	C 3b4	N-18°-W	楕円形	1.10 × 0.94	-	67	平埴	外縁	-	人為	縄文土器	
363	C 3c9	-	円形	0.48 × (0.37)	-	40	皿状	外縁	-	人為	縄文土器	
364	C 3c6	N-32°-W	楕円形	2.78 × 1.83	2.50 × 1.84	66	平埴	直立 内縁	-	人為	縄文土器、石器	
365	C 3c5	N-13°-E	楕円形	0.52 × 0.47	-	60	平埴	外縁	-	人為		
366	C 3c6	N-21°-W	楕円形	1.66 × 1.42	2.13 × 2.00	86	平埴	内縁	-	人為	縄文土器、石器	
367	C 3c6	-	円形	1.70 × 1.64	-	68	平埴	直立	-	人為	縄文土器、土製品、 石製品	
368	C 344	N-50°-E	楕円形	1.65 × 1.41	1.87 × 1.75	67	平埴	内縁	1	人為	縄文土器、石器、石製品	
369	C 3d6	N-21°-W	[楕円形]	1.18 × (0.98)	2.15 × 2.15	114	平埴	内縁	-	人為	縄文土器、石器	
370	C 3e6	-	円形	2.50 × 2.50	-	60	平埴	直立	2	人為	縄文土器、石器	
371	C 3e5	N-28°-W	楕円形	1.89 × 1.46	1.94 × 1.63	72	平埴	内縁	1	人為	縄文土器、石器	本跡 → SK414
372	C 346	-	円形	2.52 × 2.42	-	26	平埴	外縁	-	自然	縄文土器、石器	
373	C 3g5	N-23°-E	楕円形	0.28 × 0.23	-	70	皿状	直立	-	人為	縄文土器、石器	
374	C 346	-	[円形]	0.34 × (0.33)	-	(134)	皿状	直立	-	人為	縄文土器	
375	C 3b6	N-19°-W	楕円形	0.59 × 0.50	-	(122)	皿状	直立	-	人為		

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		深さ (cm)	底面	壁面	口付	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部 長径 × 短径	最大径 長径 × 短径							
376	C 3e8	N-22°-E	楕円形	(2.23 × 1.95)	-	26	平坦	外傾	2	自然	縄文土器、石器	
377	C 3d8	-	[不整形円形]	150 × 143	-	31	皿状	直立 階段状	-	人為	縄文土器、石器	
378	C 3b8	-	[楕円形]	(1.08 × 0.34)	-	(20)	平坦	-	-	自然		本跡→SK288
379	C 3e7	N-45°-E	楕円形	158 × 130	-	37	平坦	外傾	2	自然	縄文土器、土製品、石器	SK412→本跡
380	C 3e0	-	[円形]	[2.20 × 2.08]	208 × 196	43	平坦	内傾	-	人為	縄文土器、石器	
381	C 2e9	[N-9°-W]	[楕円形]	1.23 × (0.68)	-	22	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	本跡→SK348・382
382	C 2b9	N-77°-E	楕円形	0.60 × 0.47	-	130	平坦	直立	-	人為	縄文土器	SK381・348→本跡
383	C 2a5	-	円形	1.94 × 1.82	-	68	平坦	直立	-	人為	縄文土器	SI 5→本跡→SK395
384	C 2e3	N-21°-E	[楕円形]	[2.24] × 1.90	-	14	平坦	緩斜 外傾	2	人為		SK302・359→本跡
385	C 2i7	N-29°-E	不定形	1.05 × 0.74	-	72	皿状	外傾	-	人為		SK310→本跡
386	C 240	N-63°-W	楕円形	2.43 × 2.15	265 × 250	98	平坦	内傾	2	人為	縄文土器、石器	本跡→SK387・503
387	C 249	N-62°-E	楕円形	1.66 × 1.44	-	52	平坦	直立	1	人為	縄文土器、石器	SK386→本跡
388	C 2e0	N-74°-E	楕円形	1.55 × 1.26	-	35	平坦	直立	-	不明	縄文土器	SK390→本跡
389	C 240	N-10°-E	[楕円形]	0.36 × [0.24]	-	[140]	平坦	直立	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SK390
390	C 249	-	円形	1.75 × 1.63	-	32	皿状	直立	2	自然	縄文土器、土製品、石器	SK389→本跡 →SK388
392	C 2a5	N-37°-E	楕円形	0.43 × 0.34	-	57	平坦	直立	-	人為	縄文土器	SI 5→本跡
394	C 2a6	N-43°-W	[楕円形]	1.00 × (0.71)	-	50	平坦	外傾	-	人為		本跡→SK396
395	C 2a5	N-86°-E	楕円形	2.40 × 1.55	225 × 190	117	平坦	内傾	-	人為	縄文土器、石器	SI 5、SK383・394→ 本跡→SK267
396	C 244	N-63°-E	[不整形円形]	(0.74) × 1.05	-	39	平坦	外傾	-	人為		SK398→本跡→SK399
398	C 244	-	[円形- 楕円形]	1.82 × (1.60)	2.20 × 2.10	120	平坦	内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SK396・641
399	C 2d3	-	円形	2.92 × 2.67	-	48	平坦	外傾	-	人為	縄文土器、土製品	SK359・396→本跡 →SK301
401	C 4e1	-	[円形- 楕円形]	2.29 × (1.82)	(2.15 × 1.59)	85	平坦	内傾	3	人為	縄文土器	SK481→本跡
402	C 3e0	N-66°-E	[楕円形]	(2.02 × 1.68)	-	32	平坦	外傾	1	人為	縄文土器	
404	D 3a9	-	円形	1.32 × 1.28	266 × 230	130	平坦	内傾	-	人為	縄文土器	本跡→SK405
405	D 3a0	N-56°-W	楕円形	2.80 × 2.27	-	120	平坦	外傾	3	人為	縄文土器	SK404→本跡
406	D 4b2	N-80°-W	楕円形	1.50 × [1.46]	-	20	平坦	緩斜	-	人為	縄文土器	本跡→SI 1A
407	D 4e1	-	円形	1.10 × 1.09	-	40	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	本跡→SI 1B
408	D 3e0	N-35°-E	不定形	1.72 × 1.38	-	21	平坦	緩斜	-	人為		本跡→SI 1B
409	C 2a7	-	円形	1.30 × 1.27	148 × 116	42	平坦	内傾	-	人為	縄文土器	本跡→SK195・260
410	D 3b2	-	[円形- 楕円形]	0.66 × (0.48)	-	37	皿状	緩斜	-	人為		
411	C 3e8	-	円形	0.48 × 0.47	-	85	皿状	直立	-	自然		
412	C 3e7	N-49°-W	[楕円形]	(1.48 × 1.20)	-	(24)	平坦	外傾 緩斜	1	自然	縄文土器	本跡→SK379
413	C 3e9	N-22°-W	楕円形	0.56 × 0.34	-	63	皿状	直立 外傾	-	自然	縄文土器	
414	C 3i5	-	円形	1.06 × 1.06	-	46	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	SK371→本跡
415	C 3i7	-	円形	2.29 × 2.24	-	60	平坦	外傾	3	人為	縄文土器	
416	D 4e7	N-28°-E	楕円形	0.82 × 0.74	-	16	平坦	外傾	-	人為		
417	D 4d7	N-65°-E	楕円形	1.32 × 1.18	-	60	平坦	直立	-	人為	縄文土器	
418	C 3i8	N-60°-E	[楕円形]	0.54 × [0.48]	-	32	平坦	外傾	-	自然	縄文土器	
419	D 4g6	N-58°-E	楕円形	0.71 × 0.55	-	10	平坦	緩斜	-	人為	縄文土器	SK439→本跡
420	D 4d4	N-50°-W	楕円形	0.36 × 0.33	-	76	平坦	直立	-	人為	縄文土器	
421	D 4i7	-	[円形]	0.84 × [0.80]	-	18	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	
422	D 4d3	N-50°-E	楕円形	0.38 × 0.30	-	65	平坦	直立	-	人為		
424	D 4e3	-	円形	1.50 × 1.40	-	65	平坦	直立	-	人為	縄文土器	本跡→SK428
425	D 4d3	-	円形	1.38 × 1.26	-	58	平坦	直立	-	人為	縄文土器	
426	D 4d2	-	円形	2.02 × 1.86	-	98	平坦	外傾 緩斜	-	人為	縄文土器	
427	D 4d2	-	円形	1.41 × 1.46	-	73	平坦	内傾	-	人為	縄文土器	
428	D 4e3	-	円形	1.58 × 1.56	-	78	平坦	直立	-	人為	縄文土器	SK424→本跡

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		深さ (cm)	底面	壁面	口	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部 長径 × 短径	最大径 長径 × 短径							
429	D 4 e2	-	[円形]	1.42 × (1.30)	-	50	平埴	直立	-	人為	縄文土器	
430	D 3 b9	N - 49° - W	楕円形	1.24 × 1.10	-	20	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器	
431	D 3 d0	N - 9° - W	楕円形	1.34 × 1.19	-	25	平埴	内傾	-	人為	縄文土器	
432	D 4 e1	N - 48° - E	楕円形	1.82 × 1.53	-	70	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	
433	D 4 e2	-	円形	1.33 × 1.30	-	41	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	
434	D 4 e1	N - 5° - E	不整楕円形	2.44 × 1.70	-	78	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	
435	D 3 b8	N - 64° - W	楕円形	1.41 × 1.14	-	26	平埴	外傾	-	自然		
436	D 3 d9	N - 58° - W	楕円形	1.38 × 1.21	-	14	平埴	緩斜	1	自然	縄文土器	
437	D 3 d9	N - 31° - W	楕円形	1.30 × 1.14	-	10	平埴	緩斜	1	自然	縄文土器	
438	D 3 b0	-	円形	1.85 × 1.78	-	17	平埴	緩斜	-	自然	縄文土器	
439	D 4 g6	N - 70° - W	楕円形	1.03 × 0.91	-	31	平埴	外傾	-	人為		本跡→SK419
440	C 4 i2	N - 22° - W	楕円形	1.75 × 1.65	-	50	平埴	外傾	-	自然	縄文土器	SK565 →本跡
441	C 4 i3	N - 36° - W	楕円形	1.42 × 1.20	-	62	平埴	緩斜	1	人為	縄文土器	
442	C 3 f3	-	円形	0.60 × 0.60	-	55	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	
443	D 4 b3	-	円形	1.61 × 1.56	1.45 × 1.45	87	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、土製品	
444	C 3 j8	N - 48° - W	不整楕円形	2.60 × 2.18	-	38	平埴	緩斜	1	人為	縄文土器、石器	
445	C 3 b8	N - 15° - E	[楕円形]	(1.10 × 0.78)	-	40	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器	
446	C 3 i9	N - 5° - E	楕円形	0.66 × 0.58	-	51	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器	SK542 →本跡
447	C 3 i9	-	円形	1.41 × 1.30	-	33	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	
448	D 4 a3	N - 80° - W	楕円形	1.26 × 1.07	-	12	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器	
449	D 4 a3	-	円形	0.98 × 0.97	-	14	平埴	緩斜	1	人為		
450	D 4 b3	-	円形	0.85 × 0.83	-	23	皿状	緩斜	1	人為	縄文土器	
451	D 4 c3	N - 0°	不整楕円形	1.72 × 1.20	1.58 × 1.27	100	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、石器	TP 1 →本跡
452	D 4 a4	N - 9° - W	楕円形	1.28 × 1.12	-	48	平埴	外傾	1	人為	縄文土器	
453	D 4 c3	-	円形	0.88 × 0.85	-	30	平埴	緩斜	-	人為		SI 2 →本跡
455	C 4 j2	N - 31° - E	楕円形	1.68 × 1.32	-	11	平埴	緩斜	1	人為	縄文土器	SK477 - 521 →本跡 →SK457
456	C 3 j9	-	円形	2.22 × 2.03	-	93	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	SI 37 →本跡
457	C 4 j2	N - 33° - E	[楕円形]	[2.38] × 1.60	-	20	平埴	緩斜	-	人為		SI 1B、SK455、477 →本跡
458	D 4 d7	-	円形	1.02 × 1.01	-	35	皿状	緩斜	-	人為		
459	D 4 e8	-	円形	0.95 × 0.92	-	22	平埴	直立	-	人為		
460	C 4 j6	N - 75° - E	楕円形	0.88 × 0.60	-	15	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器	
461	C 3 i9	-	円形	0.81 × 0.70	-	21	平埴	外傾	-	人為		
462	C 3 j9	N - 0°	楕円形	0.85 × 0.73	-	35	凹凸	外傾	1	人為		
464	C 3 e1	N - 80° - W	楕円形	1.65 × 1.50	1.50 × 1.34	75	平埴	内傾	1	人為	縄文土器	
465	C 3 e1	N - 50° - W	[楕円形]	(1.70) × 1.56	-	28	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	本跡→SK516
466	C 3 e1	N - 73° - E	楕円形	0.94 × 0.66	-	54	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	
467	C 3 i5	N - 77° - W	楕円形	1.60 × 1.44	-	72	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	
468	C 2 e0	N - 24° - W	楕円形	1.48 × 1.08	-	40	凹凸	緩斜	-	人為	縄文土器	
469	D 3 a5	-	円形	1.61 × 1.52	-	19	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器	
470	D 3 a5	N - 11° - W	[楕円形]	1.85 × (1.76)	-	22	平埴	緩斜	1	人為		本跡→SK471
471	D 3 a5	-	円形	1.20 × 1.12	-	12	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器	SK470 →本跡
472	C 3 j9	N - 23° - E	楕円形	0.98 × 0.82	-	30	凹凸	直立	1	人為	縄文土器	
473	C 4 j1	N - 64° - W	楕円形	0.75 × 0.68	-	18	皿状	緩斜	-	人為		
474	C 3 e1	N - 86° - E	不整楕円形	2.21 × 1.90	1.97 × 1.34	90	平埴	直立 内傾	-	人為	縄文土器、石器	SI 16 →本跡 →SK511 - 512
475	D 3 a2	N - 77° - W	楕円形	0.93 × 0.75	-	15	平埴	外傾	-	人為		
476	D 3 a2	N - 34° - W	楕円形	1.48 × 1.02	-	13	平埴	外傾	1	人為	縄文土器	
477	D 4 a2	N - 88° - W	楕円形	2.55 × 1.50	-	10	平埴	外傾	2	人為	縄文土器	本跡→SK455 - 457

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		深さ (cm)	底面	壁面	口付	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部 長径 × 短径	最大径 長径 × 短径							
478	C 3j2	—	円形	1.45 × 1.36	—	18	凹凸	外傾	1	人為	縄文土器	
479	C 3i2	N-82°-E	楕円形	1.43 × 1.21	—	13	平坦	緩斜	—	人為	縄文土器	
480	C 3i2	—	円形	1.26 × 1.18	—	15	平坦	緩斜	—	人為	縄文土器	
481	C 3e0	—	[円形-楕円形]	(1.02 × 0.55)	—	83	皿状	内傾	—	人為		本跡→SK401
482	D 4b6	N-72°-W	楕円形	0.65 × 0.58	—	15	皿状	緩斜	—	人為		
483	D 4a1	—	円形	0.68 × 0.70	—	23	皿状	緩斜	—	人為		SI 1B→本跡
484	D 3c2	N-22°-W	不明	(0.82 × 0.60)	—	21	平坦	外傾	1	人為		本跡→SK312-313
485	C 3b4	N-80°-E	楕円形	1.75 × 1.55	—	(35)	凹凸	外傾	3	人為	縄文土器	SI 23→本跡
486	C 2j0	—	円形	1.30 × 1.19	—	13	平坦	緩斜	—	人為		
489	C 3i1	—	円形	0.82 × 0.78	—	19	平坦	外傾	—	人為		
490	C 3i1	N-5°-E	楕円形	1.05 × 0.72	—	18	平坦	緩斜	—	人為	縄文土器	
491	C 3g8	—	円形	1.22 × 1.22	—	72	平坦	直立	—	人為	縄文土器	
492	C 3g9	N-63°-E	楕円形	1.12 × 0.96	—	48	平坦	直立	—	人為	縄文土器	
493	C 3j4	N-76°-E	不整楕円形	1.96 × 1.10	—	16	平坦	緩斜	—	人為	縄文土器	本跡→SK730
494	C 3j5	N-60°-W	楕円形	1.60 × 1.21	—	52	皿状	緩斜	—	人為	縄文土器	
495	D 3a4	N-30°-E	楕円形	2.47 × 1.60	—	25	平坦	緩斜	2	人為		SK496→本跡
496	D 3a5	N-55°-E	楕円形	1.67 × 1.31	—	16	平坦	緩斜	—	人為	縄文土器	本跡→SK496
497	C 3i3	—	円形	1.20 × 1.18	—	10	平坦	緩斜	—	人為	縄文土器	
498	C 3i3	N-28°-W	楕円形	1.07 × 0.90	—	13	平坦	緩斜	1	人為	縄文土器	
499	C 3i3	N-25°-W	楕円形	1.12 × 0.98	—	18	平坦	緩斜	—	人為	縄文土器	
500	C 3i3	N-83°-W	楕円形	1.52 × 1.30	—	66	平坦	直立	—	人為	縄文土器、石器	
501	C 3i4	N-23°-W	楕円形	2.28 × 1.66	—	56	平坦	外傾 緩斜	—	自然	縄文土器	
502	C 3i1	—	円形	0.51 × 0.47	—	30	皿状	緩斜	—	人為		
503	C 2e0	N-60°-W	楕円形	0.30 × 0.25	—	77	平坦	直立	—	人為		SK386→本跡
504	C 3j4	—	円形	2.13 × 2.12	—	78	平坦	直立	3	人為	縄文土器、石器	
505	C 2i0	—	円形	1.17 × 1.13	—	17	平坦	外傾	—	自然		SK536→本跡
506	C 3i2	—	円形	1.16 × 1.10	—	50	皿状	外傾	—	人為	縄文土器	
507	C 3j1	—	円形	1.18 × 1.09	—	14	平坦	緩斜	—	人為		
508	C 3j1	—	円形	0.81 × 0.78	—	17	平坦	緩斜	—	人為		
509	C 3j1	—	円形	0.84 × 0.79	—	20	平坦	外傾	—	自然	縄文土器	
510	C 4j8	N-51°-E	楕円形	1.16 × 1.05	—	40	平坦	直立	—	人為	縄文土器	
511	C 2e0	N-13°-W	楕円形	1.54 × 1.38	2.10 × 2.04	78	平坦	直立 内傾	2	人為	縄文土器、土製品	SK474→本跡→SK512
512	C 2e0	—	不整円形	2.13 × 2.01	—	31	平坦	外傾	3	自然 人為	縄文土器、土製品	SK474・511→本跡
513	C 4j5	N-53°-W	楕円形	2.80 × 2.41	—	56	平坦	直立	3	人為	縄文土器、石器	
514	C 4j5	—	円形	0.45 × 0.45	—	35	平坦	外傾	—	人為	縄文土器	
515	C 3g3	N-85°-E	楕円形	1.11 × 0.97	—	21	平坦	外傾	1	人為	縄文土器	
516	C 3e1	—	円形	0.80 × 0.76	—	79	平坦	直立	—	自然	縄文土器	SK465→本跡
517	D 3a7	N-28°-W	楕円形	3.44 × 3.07	—	79	平坦	直立	1	人為	縄文土器、石器	本跡→SD 2
518	C 3j8	N-71°-E	楕円形	1.70 × 1.28	—	78	平坦	直立	—	人為	縄文土器、土製品、石器	SK533→本跡
520	C 3j0	N-68°-W	楕円形	0.60 × 0.41	—	51	皿状	外傾	—	人為		SI 37→本跡
521	C 4j2	—	円形	1.05 × 1.00	—	52	皿状	外傾	—	自然	石器	本跡→SK455
522	D 4b8	—	円形	0.82 × 0.82	—	21	平坦	外傾	—	自然	縄文土器、土製品、石器	
523	D 4b9	—	円形	0.78 × 0.77	—	15	皿状	緩斜	—	人為	縄文土器	
524	D 2a9	N-3°-E	楕円形	0.79 × 0.52	—	22	平坦	外傾	—	人為	縄文土器	
525	D 2a9	N-83°-W	楕円形	1.21 × 1.09	—	27	皿状	緩斜	—	人為	縄文土器	
527	C 3j0	N-72°-W	楕円形	0.78 × 0.52	—	32	皿状	緩斜	—	人為		SI 37→本跡
528	D 2a9	—	円形	0.52 × 0.48	—	32	皿状	外傾	—	人為		

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		深さ (cm)	底面	壁面	傾斜	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部 長径 × 短径	最大径 長径 × 短径							
529	D 2a9	-	円形	0.75 × 0.71	-	10	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	
530	D 4b4	-	円形	0.89 × 0.85	-	25	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	本跡→SI 2
531	C 3g2	-	円形	0.96 × 0.85	-	35	平埴	外傾 縦斜	-	自然	縄文土器	
532	C 2j8	N-50°-W	楕円形	2.96 × 2.52	(3.04 × 3.00)	125	平埴	直立 内傾	4	人為	縄文土器、土製品、石器	
533	D 3a8	-	[円形]	2.00 × (1.07)	-	15	平埴	外傾	1	人為	縄文土器	本跡→SK518、SD 2
534	D 2b8	-	円形	0.70 × 0.65	-	48	凹凸	外傾	-	人為	縄文土器	
535	D 2b9	-	楕円形	1.15 × 0.92	-	28	平埴	直立	4	人為	縄文土器	
536	C 2x0	-	円形	2.25 × 2.08	2.33 × 2.21	103	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SK505
537	D 3b3	-	円形	1.75 × 1.64	-	78	平埴	直立	-	自然	縄文土器、石器	本跡→SD 2
539	C 3e2	N-52°-W	楕円形	2.10 × 1.73	2.86 × 2.74	120	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SI 12、SK540
540	C 3e3	-	不整円形	1.92 × 1.78	2.52 × 2.10	85	平埴	外傾 内傾	-	人為	縄文土器	SI 12、SK181・539→本跡
541	C 3f2	-	不整円形	1.47 × 1.45	1.82 × 1.75	79	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SI 12
542	C 3f2	-	不整円形	2.47 × 2.43	2.36 × 2.32	84	平埴	直立 内傾	2	人為	縄文土器、石器	SI 12・16→本跡
543	C 3g2	N-76°-W	楕円形	1.80 × 1.59	2.55 × 1.97	110	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SI 12
544	C 3h3	N-34°-W	楕円形	1.90 × 1.65	-	8	平埴	外傾	-	自然	縄文土器、石器	SK550→本跡
545	C 3h2	-	[円形]	[2.21 × 2.20]	-	14	平埴	縦斜	-	人為	縄文土器	SK550→本跡→SK548
546	C 3g1	N-20°-W	楕円形	1.59 × 1.40	-	22	平埴	外傾	1	自然	縄文土器	SI 17→本跡→SK548
547	C 3j9	N-30°-W	楕円形	1.80 × 1.32	-	37	縦斜	直立	-	人為	縄文土器	本跡→SK446
548	C 3h2	N-5°-W	不整楕円形	2.75 × 2.12	-	72	平埴	直立	1	人為	縄文土器	SK545・546→本跡
549	C 3g1	-	円形	1.69 × 1.65	1.99 × 1.95	74	平埴	内傾	-	人為	縄文土器、土製品、石器	SI 16→本跡
550	C 3h2	N-9°-E	楕円形	2.51 × 1.82	2.98 × 2.92	136	平埴	外傾 内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SK544・545・569
551	C 3h1	N-26°-E	楕円形	1.13 × 0.93	-	12	平埴	外傾	-	人為		本跡→SK552
552	C 3h2	-	円形	0.39 × 0.38	-	12	皿状	外傾	-	人為		SK551→本跡
553	D 3b5	N-3°-E	楕円形	3.49 × 2.84	-	139	平埴	直立	3	自然 人為	縄文土器、石器	本跡→SD 2
554	C 3f3	[N-3°-E]	[楕円形]	0.70 × [0.52]	-	122	皿状	直立	-	人為	縄文土器	
555	C 4f2	N-54°-E	隅丸長方形	2.40 × 1.03	-	34- 70	縦斜	直立	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SK440
556	D 3a7	-	円形	1.90 × 1.84	-	68	平埴	直立	-	人為	縄文土器、石器	SI 14→本跡
557	C 3f7	N-10°-W	楕円形	1.92 × 1.70	-	80	平埴	直立	-	人為	縄文土器、石器	SI 14→本跡
558	C 3b6	N-84°-E	楕円形	1.62 × 1.44	-	52	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	SI 14→本跡
559	C 4j3	N-34°-W	[楕円形]	1.42 × (0.65)	-	29	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	本跡→SI 10
561	C 4f1	N-85°-E	楕円形	1.19 × 0.96	1.86 × 1.66	70	平埴	外傾 内傾	-	人為	縄文土器、石器	SI 15→本跡
562	C 3h8	-	[円形]	1.26 × 1.23	-	55	平埴	直立	-	自然	縄文土器	
563	C 2x0	-	円形	0.66 × 0.70	-	48	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	SI 18→本跡
564	C 4f4	-	円形	1.69 × 1.62	-	64	平埴	外傾	1	自然	縄文土器	本跡→SI 21
565	C 4j7	N-71°-E	楕円形	2.76 × 2.24	-	36	平埴	縦斜	-	人為	縄文土器	SK566→本跡
566	C 4j7	N-73°-W	楕円形	(1.65) × 1.32	-	10	平埴	縦斜	-	人為	縄文土器	本跡→SK565
567	C 4e3	N-26°-W	楕円形	2.33 × 2.10	-	58	平埴	直立	2	人為	縄文土器、石器	本跡→SK568・577
568	C 4e3	N-73°-W	楕円形	1.70 × 1.55	-	28	平埴	外傾	2	人為	縄文土器	SK567・575・577→本跡
569	C 3g2	N-42°-E	[楕円形]	[1.40] × 0.93	-	33	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	SI 11、SK550→本跡
570	C 3j2	N-48°-E	楕円形	0.61 × 0.54	-	25	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	
571	C 3f3	N-60°-W	[不整楕円形]	[0.64 × 0.48]	-	67	凹凸	直立	-	人為	縄文土器	
572	C 3g3	N-18°-E	[楕円形]	(1.20) × 1.05	-	84	平埴	外傾	-	人為	縄文土器	本跡→SI 11、SK573
573	C 3g3	N-66°-W	不整楕円形	1.13 × 0.67	-	88	皿状	直立	-	人為		SK572→本跡
574	C 2h7	N-57°-E	楕円形	2.02 × 1.67	2.54 × 2.38	148	平埴	直立 内傾	1	人為	縄文土器、石器	SI 2f→本跡
575	C 4d3	N-65°-W	[楕円形]	0.94 × (0.75)	-	13	平埴	縦斜	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SK568
576	C 3d4	N-35°-E	隅丸長方形	2.42 × 2.10	-	55	平埴	外傾	4	人為	縄文土器	本跡→SK333
577	C 4d3	-	円形	2.40 × 2.40	2.70 × 2.58	77	平埴	外傾 内傾	-	人為	縄文土器、土製品、石器	SK567・578→本跡 →SK568

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規 模 (m)		深さ (cm)	底面	壁面	口	覆土	主な出土遺物	備 考
				開口部 長径 × 短径	最大径 長径 × 短径							
578	C 4 d3	N - 29° - W	[楕円形]	(2.00 × 1.84)	-	40	平坦	外傾	1	人為	縄文土器	本跡→SK577・579・636
579	C 4 d3	N - 24° - W	[楕円形]	(0.52) × 0.37	-	28	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	SK578→本跡
580	D 3 a2	N - 38° - W	楕円形	0.37 × 0.32	-	27	皿状	直立 緩斜	-	人為		
581	C 2 b0	N - 7° - W	楕円形	2.66 × 2.35	2.77 × 2.50	106	平坦	外傾 内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SK582
582	C 2 b0	-	円形	2.05 × 1.95	2.44 × 2.08	95	平坦	内傾	2	人為 自然	縄文土器、石器	SK581→本跡→SI 13
583	C 2 g0	-	円形	2.10 × 1.95	2.50 × 2.41	90	平坦	内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SI 13
584	C 4 c1	N - 50° - W	楕円形	1.35 × 1.12	-	70	平坦	直立	1	自然	縄文土器、石器	SI 22→本跡
585	C 3 g4	N - 16° - E	楕円形	1.81 × 1.40	2.22 × 1.90	140	平坦	内傾	1	人為	縄文土器、土製品、石器	SI 23→本跡→SI 24
586	C 2 b9	-	円形	1.30 × 1.21	2.42 × 2.20	109	平坦	内傾	-	人為	縄文土器、石器	
587	C 3 f2	N - 65° - E	楕円形	0.81 × 0.60	-	146	皿状	直立	-	人為	縄文土器	本跡→SI 12
588	C 4 e2	N - 45° - W	楕円形	1.88 × 1.55	2.19 × 2.14	84	平坦	直立 内傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SI 22 SK591・598
589	C 4 d2	N - 22° - E	楕円形	0.65 × 0.57	-	52	凹凸	外傾	-	人為	縄文土器	
590	C 4 e2	N - 36° - W	楕円形	[1.56 × 1.26]	-	20	平坦	緩斜	-	人為	縄文土器	
591	C 4 d2	N - 48° - E	楕円形	1.45 × 1.18	-	21	平坦	外傾	-	自然	縄文土器	SI 22 SK588→本跡 →SK598
592	C 4 f2	-	円形	[0.53] × 0.53	-	139	皿状	直立	-	人為	縄文土器	
593	C 4 f2	-	[円形]	[3.18 × 3.06]	-	64	平坦	外傾	3	人為	縄文土器、石器	SK594・600→本跡 →SK609
594	C 4 f2	N - 66° - W	不整楕円形	[1.53] × (1.31)	-	44	平坦	緩斜	-	人為	縄文土器	本跡→SK593
595	C 4 e2	-	円形	2.14 × 2.14	-	56	平坦	外傾	1	人為	縄文土器、石器	
596	C 4 e3	N - 78° - W	楕円形	1.02 × 0.78	-	67	平坦	直立	-	人為	縄文土器	SK599→本跡
597	C 4 e3	N - 12° - W	楕円形	1.89 × 1.69	-	30	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	
598	C 4 d2	N - 81° - W	楕円形	(0.90) × 0.79	-	44	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	SI 22 SK588・591→本跡
599	C 4 e3	N - 59° - W	楕円形	0.75 × (0.63)	-	60	平坦	外傾 内傾	-	人為		本跡→SK596
600	C 4 f2	-	円形	2.62 × (2.45)	-	93	平坦	直立	5	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→SK593
601	C 3 e1	N - 81° - W	楕円形	0.79 × 0.61	-	40	平坦	直立	-	人為		
602	C 2 b0	N - 15° - E	楕円形	2.45 × 1.80	2.32 × 1.50	65	平坦	直立 内傾	1	人為	縄文土器、石器	SI 25 SK603→本跡
603	C 2 b0	-	不整円形	(2.00) × 1.92	2.93 × 2.56	100	平坦	内傾	-	人為	縄文土器、土製品	SI 25→本跡→SK602
604	C 2 g0	N - 30° - W	楕円形	1.55 × 1.30	1.85 × 1.74	77	平坦	直立 内傾	-	人為	縄文土器、石器	SI 25→本跡→SI 13
605	C 2 g9	N - 76° - W	楕円形	1.90 × 1.59	2.11 × 1.85	61	平坦	内傾	-	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→SK655
606	C 3 g1	-	[楕円形]	(1.00) × 1.48	-	15	平坦	緩斜	-	自然		SI 23→本跡→SK607
607	C 3 g1	-	[楕円形]	(1.40) × 1.14	-	10	平坦	外傾	-	人為		SI 23 SK606→本跡
608	C 3 g5	-	[円形]	1.40 × [1.34]	-	25	平坦	外傾	-	自然		SI 23・24→本跡
609	C 4 g2	N - 68° - W	楕円形	[0.64] × 0.47	-	54	皿状	外傾	-	人為		SK593→本跡
611	C 4 b6	-	円形	0.98 × 0.92	-	40	平坦	外傾	-	人為		
612	C 4 g6	N - 56° - E	楕円形	1.43 × 1.24	-	58	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	SI 26→本跡
613	C 4 g8	N - 13° - W	楕円形	1.25 × 0.83	-	16	平坦	緩斜	-	人為		
614	C 4 f3	N - 20° - E	[楕円形]	0.40 × (0.33)	-	28	皿状	外傾	-	人為		
615	C 4 f3	N - 20° - E	[楕円形]	0.33 × (0.27)	-	21	皿状	外傾	-	人為		
616	C 4 f3	-	[円形]	0.37 × 0.35	-	30	皿状	外傾	-	人為		
617	C 4 f3	N - 68° - W	[楕円形]	(0.30) × 0.25	-	32	皿状	直立	-	人為		
618	C 4 e2	-	[円形]	0.35 × (0.35)	-	16	皿状	緩斜	-	人為		
619	C 4 f0	N - 65° - W	[不整楕円形]	2.49 × (1.82)	(2.40 × 1.80)	85	平坦	直立 内傾	1	人為	縄文土器、石器	SI 27→本跡
620	C 4 e5	N - 13° - E	楕円形	2.35 × 2.10	-	46	平坦	外傾	2	人為	縄文土器、石器	
621	C 4 f9	N - 38° - E	不定形	(1.91) × 1.50	(1.97) × 1.55	50	皿状	緩斜	1	人為		本跡→SI 27
622	C 4 e6	-	[円形]	1.79 × (1.43)	-	55	平坦	直立	1	人為	縄文土器	本跡→SI 29
626	C 2 b9	-	円形	2.15 × 2.03	2.12 × 2.04	82	平坦	内傾	-	人為	縄文土器、石器	SI 30→本跡
627	C 2 e8	N - 34° - E	楕円形	(1.53) × 1.26	-	20	皿状	外傾	3	人為		
628	C 2 e9	-	円形	1.88 × 1.82	2.13 × 1.95	108	平坦	外傾 内傾	-	人為	縄文土器、土製品、石器	

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		高さ (cm)	底面	壁面	口	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部 長径 × 短径	最大径							
629	C 2e9	N-42°-W	楕円形	1.97 × 1.76	2.42 × 2.11	95	平埴	内壁	2	人為	縄文土器、石器	本跡→SK654
630	C 2f9	-	不整円形	2.02 × 1.96	2.14 × 1.76	117	平埴	内壁	2	人為	縄文土器、石器	
631	C 2f9	-	不整円形	1.29 × 1.25	-	55	平埴	外壁	-	人為	縄文土器、石器	SK648→本跡
632	C 4b3	-	円形	0.55 × 0.52	-	15	平埴	外壁	-	人為		SI 26→本跡
633	C 4b6	-	[円形]	1.32 × (1.22)	-	59	平埴	外壁	-	人為	縄文土器	本跡→SD 2
634	C 4e6	N-23°-E	[楕円形]	(1.30) × 1.09	-	33	平埴	外壁	-	人為	縄文土器、土製品、石器	
635	C 4e7	-	[円形]	1.50 × (1.43)	-	72	平埴	直立	-	人為	縄文土器、石器	SK661→本跡→SI 29
636	C 4d3	-	円形	0.55 × 0.59	-	51	皿状	直立	-	人為	縄文土器	SK578→本跡
638	C 4c1	-	[円形・楕円形]	0.81 × (0.41)	-	46	平埴	外壁	-	人為	縄文土器、石器	
640	C 4d5	N-22°-E	[圓丸方形]	1.99 × (1.50)	-	68	平埴	直立	2	人為	縄文土器	
641	C 2d4	N-9°-W	[楕円形]	(1.75) × 1.52	-	42	平埴	外壁	-	自然	縄文土器	SK396→本跡
642	C 2c5	-	不定形	1.59 × 0.95	2.06 × 1.92	90	平埴	内壁	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SI 7・32
643	C 2d5	-	不定形	3.00 × 2.00	3.42 × 3.14	112	平埴	直立 内壁	1	人為	縄文土器、石器	SK697→本跡 →SI 9・32・33
644	C 2e6	-	円形	1.79 × 1.67	2.38 × 2.17	110	平埴	内壁	2	人為	縄文土器、土製品、石器	SI 33, SK717→本跡
645	C 2b5	N-15°-E	楕円形	1.34 × 1.07	1.64 × 1.52	63	平埴	内壁	-	人為	縄文土器、石製品	本跡→SI 7, SD 1
646	C 2e8	N-20°-E	楕円形	0.53 × 0.41	-	99	皿状	直立 外壁	-	人為	縄文土器	
647	C 2b9	N-60°-E	楕円形	1.80 × 1.60	1.76 × 1.68	66	平埴	外壁 内壁	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SK652
648	C 2f9	N-71°-W	[楕円形]	1.18 × (0.98)	-	53	皿状	直立	-	人為	縄文土器	本跡→SK631
649	C 2e8	-	円形	[0.54] × 0.50	-	91	皿状	外壁	-	人為		本跡→SK651
650	C 2e8	N-57°-E	不整楕円形	1.94 × 1.41	2.28 × 2.02	103	平埴	直立 内壁	-	人為	縄文土器、土製品	SK382→本跡 →SK651・659
651	C 2e8	N-5°-W	[楕円形]	2.12 × (1.26)	-	41	平埴	外壁	-	人為	縄文土器、石器	SK649・650→本跡 →SK659・718
652	C 2b9	N-9°-E	不整楕円形	1.78 × 1.47	1.84 × 1.70	52	平埴	内壁	-	人為	縄文土器、石器	SI 30, SK647→本跡
654	C 2e9	N-59°-E	楕円形	0.63 × 0.54	-	143	皿状	直立	-	人為		SK629→本跡
655	C 2g9	-	円形	2.09 × 1.99	2.06 × 1.91	82	平埴	直立 内壁	-	人為	縄文土器	SI 31, SK605→本跡
657	C 2f5	N-2°-E	不整楕円形	1.48 × 1.24	2.65 × 2.48	107	平埴	外壁 内壁	-	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→SI 35
659	C 2e7	N-27°-W	楕円形	2.69 × 2.00	2.35 × 2.12	36	平埴	緩斜 内壁	4	人為	縄文土器	SK650・651→本跡 →SK678
661	C 4e8	-	-	(0.82 × 0.55)	-	61	平埴	外壁	-	人為	縄文土器	本跡→SK635
662	C 2c5	-	不整円形	(1.31 × 1.21)	1.92 × 1.65	74	平埴	内壁	-	人為	縄文土器、石器	SK663→本跡→SI 9・32
663	C 2e6	N-10°-E	不整楕円形	2.25 × 1.44	2.87 × 2.63	112	平埴	直立 内壁	1	人為	縄文土器、石器	本跡→SI 9・32, SK662
664	C 2e5	-	円形	1.50 × 1.38	-	74	平埴	直立	-	人為	縄文土器、土製品	SI 33・35→本跡
665	C 2f5	-	円形	1.90 × 1.82	-	70	平埴	外壁	-	人為	縄文土器、石器	SI 35→本跡
666	C 2e4	N-78°-E	不整楕円形	1.92 × 1.67	2.37 × 1.91	85	平埴	内壁	1	人為	縄文土器	SI 8→本跡 →SI 7, SD 1
667	C 2b5	-	円形	0.50 × 0.48	-	134	皿状	直立	-	人為		SK668→本跡→SI 7
668	C 2b5	N-6°-W	[楕円形]	0.49 × (0.20)	-	50	皿状	[外壁]	-	人為		本跡→SI 7, SK667・668
669	C 2b5	-	円形	0.52 × 0.50	-	148	皿状	直立	-	人為		SK668・670→本跡 →SI 7
670	C 2b5	N-3°-E	[楕円形]	0.42 × (0.34)	-	30	皿状	[外壁]	-	人為	縄文土器	本跡→SI 7, SK669
671	C 2e7	-	不整円形	2.51 × 2.50	-	50	平埴	直立 内壁	-	人為	縄文土器	SK672・673→本跡 →SI 34, SK678
672	C 2f7	-	円形	1.60 × 1.55	1.96 × 1.64	48	平埴	内壁	-	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→SI 34, SK671
673	C 2f8	-	円形	1.40 × 1.33	2.82 × 2.75	135	平埴	外壁 内壁	1	人為	縄文土器、土製品、石器	本跡→SI 34, SK671
674	C 2d5	N-15°-E	楕円形	(0.60 × 0.37)	-	72	凹凸	外壁	-	人為		SK682→本跡
675	C 2b8	N-49°-E	楕円形	0.86 × 0.73	-	50	皿状	外壁	-	人為		本跡→SI 31
676	C 2d6	-	円形	1.82 × 1.71	2.22 × 1.96	60	平埴	内壁	-	人為	縄文土器、石器	本跡→SI 9・33, SK682
677	C 2g6	N-42°-E	楕円形	1.23 × 1.01	-	69	平埴	直立	-	人為	縄文土器	
678	C 2e7	N-25°-E	楕円形	1.24 × 0.89	-	2	平埴	緩斜	-	人為		SK659・671→本跡
679	C 2g7	N-76°-E	楕円形	1.22 × 1.00	-	33	平埴	緩斜	-	人為	縄文土器	本跡→SI 20
680	C 2b6	-	不整円形	1.89 × 1.79	2.75 × 2.42	89	平埴	外壁 内壁	2	人為	縄文土器、石器	本跡→SI 20
681	C 2e6	N-40°-W	楕円形	2.02 × 1.71	2.84 × 2.38	101	平埴	外壁 内壁	2	人為	縄文土器、石器	SK717→本跡

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		深さ (cm)	底面	壁面	口外	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部								
				長径 × 短径	最大径 長径 × 短径							
682	C 2d5	N-77°-W	楕円形	1.40 × 1.23	-	23	平坦	直立	-	人為	縄文土器、石器	SK676 → 本跡 → SI 9・32・33、SK674・723
685	C 2e6	N-30°-W	方形	0.98 × 0.90	-	32	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	SI 9・32 → 本跡
686	C 2e5	N-6°-W	楕円形	1.48 × 1.25	-	40	平坦	直立	1	人為	縄文土器、土製品、石器	SK697 → 本跡 → SI 33
687	C 2i6	N-75°-W	不整楕円形	2.70 × 2.23	3.47 × 2.82	106	平坦	外傾内傾	-	人為	縄文土器、石器	SI 35 → 本跡
689	C 2d7	N-31°-E	不整楕円形	1.66 × 1.45	1.62 × 1.45	70	平坦	外傾内傾	-	人為	縄文土器、石器	SI 9・36 → 本跡
690	C 2d6	-	円形	1.90 × 1.75	2.38 × 1.96	44	平坦	内傾	1	-	縄文土器、石器	SK712 → 本跡 → SI 9
696	C 4e5	N-18°-W	楕円形	0.66 × 0.57	-	110	皿状	外傾	-	人為		
697	C 2e5	-	不定形	2.74 × (1.73)	-	40	凹凸	外傾	-	人為	縄文土器、石器	本跡 → SI 9・33、SK643・686
698	C 4e5	N-77°-E	不整楕円形	0.90 × 0.80	-	15	平坦	緩斜	-	人為	縄文土器	
699	C 4e5	N-59°-W	不定形	0.68 × 0.46	-	50	凹凸	外傾	-	人為	縄文土器	
700	C 4d6	-	[円形]	0.60 × (0.35)	-	20	皿状	外傾	-	人為	縄文土器	
701	C 4e4	-	円形	0.65 × 0.56	-	12	平坦	外傾	-	人為		
702	C 4e5	N-52°-W	楕円形	0.34 × 0.30	-	12	皿状	外傾	-	人為		
703	C 4e5	-	円形	0.46 × 0.42	-	37	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	
704	C 4e5	-	円形	0.42 × 0.42	-	27	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	
705	C 4e5	N-24°-E	楕円形	0.30 × 0.26	-	30	皿状	直立	-	人為	縄文土器	
706	C 4d6	N-29°-E	楕円形	0.46 × 0.28	-	13	平坦	緩斜	-	人為		
707	C 4e5	-	円形	0.36 × 0.34	-	37	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	
710	C 2e7	N-70°-W	不整楕円形	2.05 × 1.76	-	43	平坦	直立	-	自然	縄文土器	SK717 → 本跡
711	C 2e6	N-26°-W	楕円形	1.48 × 1.30	2.02 × 1.86	62	平坦	内傾	-	人為	縄文土器	本跡 → SI 20
712	C 2d6	-	[円形]	1.10 × 1.09	-	20	平坦	直立	-	人為		SI 36 → 本跡 → SI 9、SK690
713	C 2d7	N-11°-E	不定形	0.72 × 0.42	-	38	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	SI 36 → 本跡
714	C 2d7	N-46°-E	楕円形	0.62 × 0.40	-	85	平坦	直立	-	人為	縄文土器	
715	C 2i7	N-25°-E	[楕円形]	1.46 × 1.32	1.58 × 1.30	78	平坦	内傾	-	人為	縄文土器	本跡 → SI 34、TP 2
716	C 2i7	N-8°-W	楕円形	1.80 × 1.50	2.22 × 1.67	58	平坦	内傾	-	人為	縄文土器	本跡 → SI 34
717	C 2e6	N-34°-W	[楕円形]	3.25 × (2.12)	-	20	平坦	緩斜	2	人為		本跡 → SI 9・33、SK644・681・710
718	C 2e8	N-73°-W	楕円形	0.91 × 0.59	-	146	平坦	外傾	-	人為		SK651 → 本跡
719	C 2d7	N-15°-E	楕円形	1.22 × 1.00	-	63	平坦	外傾	1	人為		SI 36 → 本跡
720	C 2d8	N-6°-W	[楕円形]	2.53 × 2.08	-	33	平坦	外傾	-	人為		本跡 → SK175
721	C 3b3	N-61°-W	楕円形	(0.42 × 0.30)	-	(31)	皿状	直立	-	人為		SK51・722 → 本跡
722	C 3b3	N-15°-W	楕円形	(0.46 × 0.32)	-	(53)	皿状	外傾	-	人為		SK90 → 本跡 → SK721
723	C 2d6	N-45°-E	楕円形	1.50 × 1.34	-	33	平坦	直立	-	-	縄文土器	SI 32、SK682 → 本跡 → SI 9
724	C 2b8	N-82°-W	[楕円形]	0.67 × (0.52)	-	50	平坦	外傾	-	人為		SK213 → 本跡
725	C 3a3	N-72°-E	[長方形]	(0.66 × 0.58)	-	(60)	平坦	外傾	-	人為		SK123・171 → 本跡
726	C 3a3	N-3°-E	[楕円形]	(0.42 × 0.32)	-	(29)	皿状	外傾	-	人為		
727	C 3a3	N-86°-E	楕円形	(0.41 × 0.36)	-	80	皿状	外傾	-	人為		SK123 → 本跡
728	C 3d3	-	円形	0.36 × 0.34	-	(98)	皿状	直立	-	人為		SK122 → 本跡
729	C 3b4	N-45°-W	楕円形	1.67 × 1.36	1.74 × 1.33	87	平坦	直立内傾	-	人為	縄文土器	SK336 → 本跡
730	C 3j4	-	円形	0.48 × 0.46	-	53	皿状	外傾	-	人為		SK493 → 本跡
731	C 3e1	N-63°-E	楕円形	0.39 × 0.26	-	73	皿状	外傾	-	人為		SK151 → 本跡
732	C 3d2	N-35°-E	楕円形	0.35 × 0.29	-	60	皿状	外傾	-	人為		SK151 → 本跡
733	C 3d2	N-60°-E	楕円形	0.32 × 0.26	-	55	皿状	外傾	-	人為		SK151 → 本跡
734	C 2d9	N-30°-W	楕円形	0.33 × 0.23	-	38	皿状	外傾	-	人為		SI 4、SK349 → 本跡

2 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡2棟を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

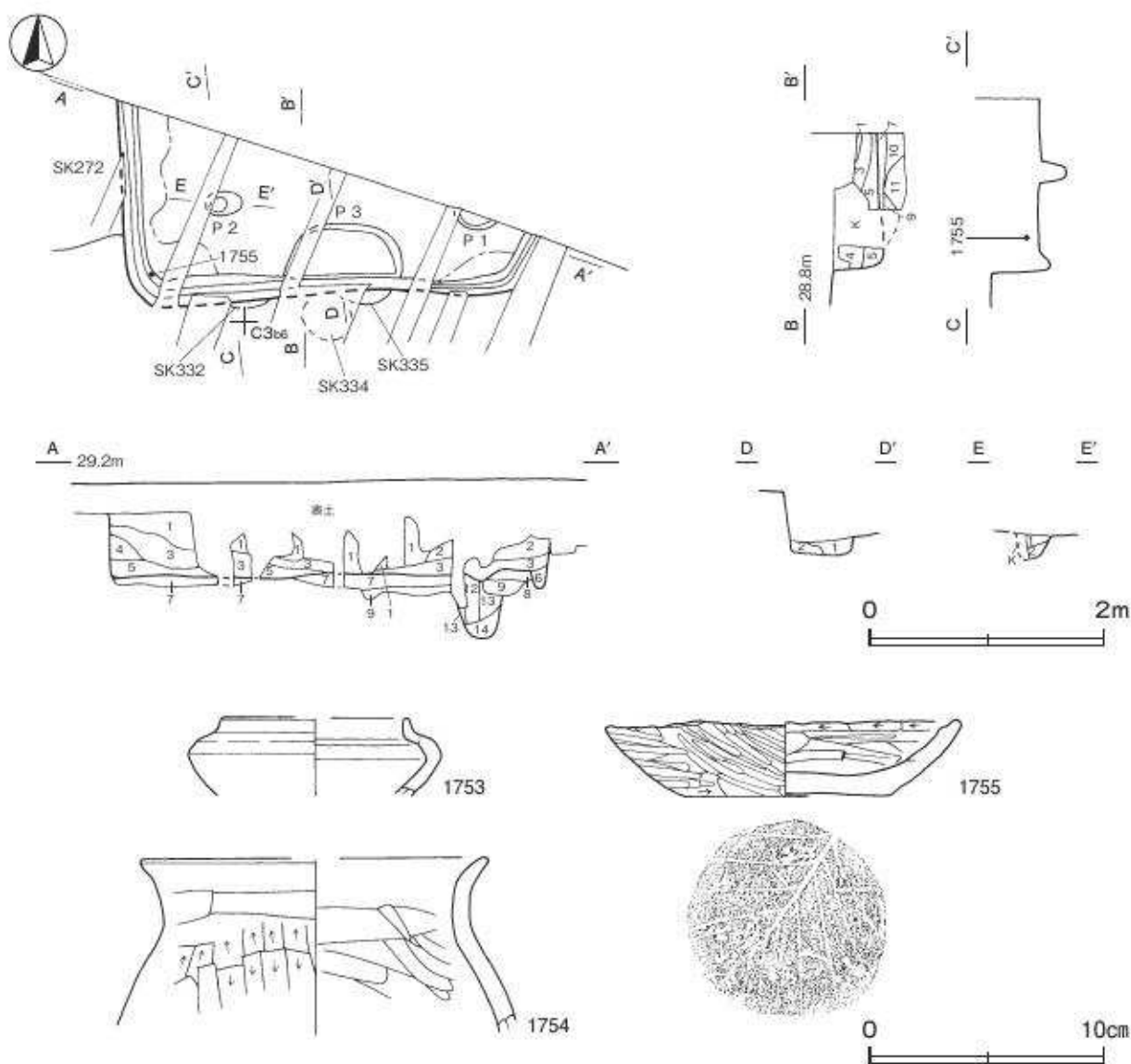
竪穴建物跡

第3号竪穴建物跡（第624図）

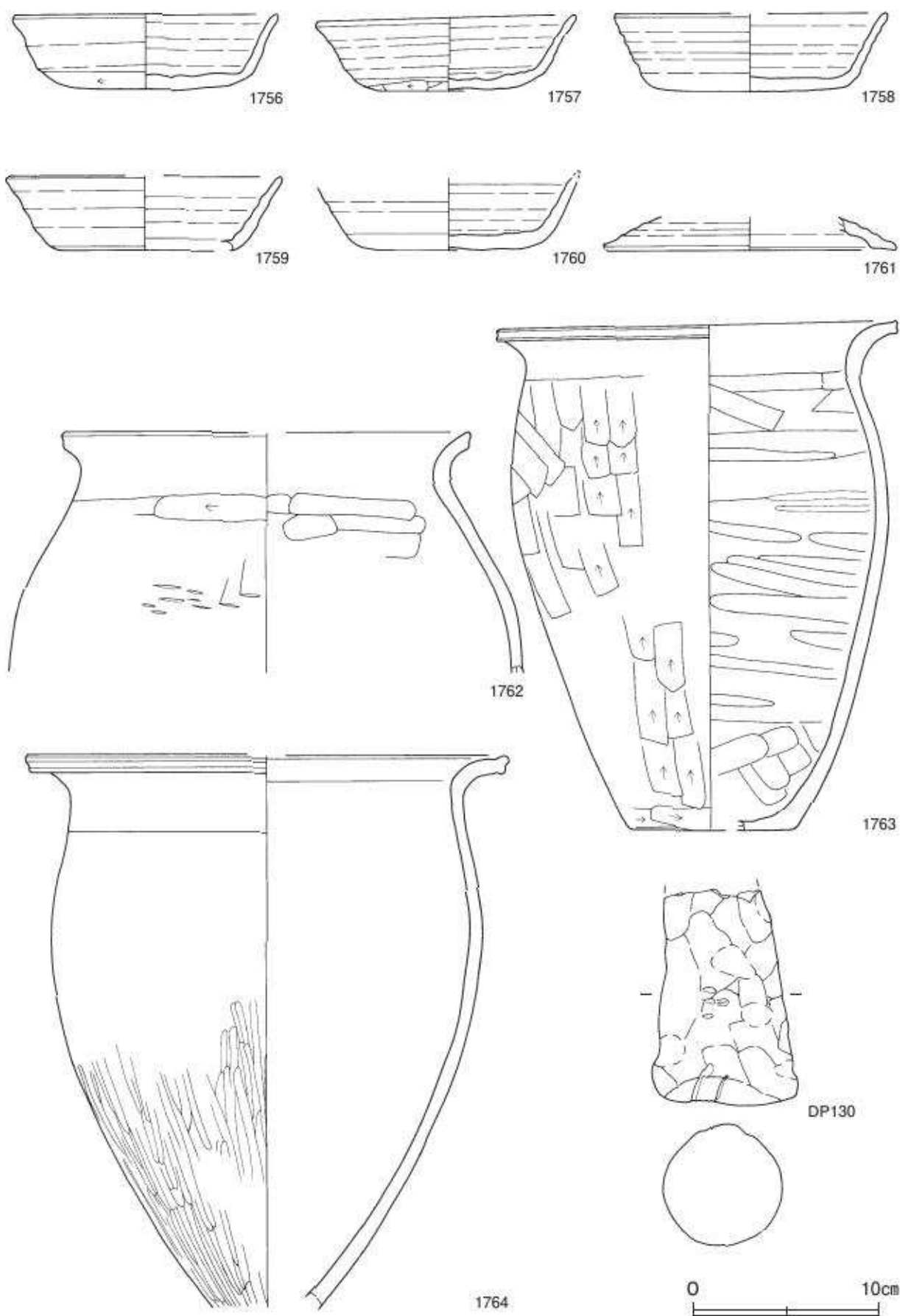
位置 調査区北部のC3a6区、標高29mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第272・332・334・335号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びていることから、東西軸は3.50mで、南北軸は1.70mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき、南北軸方向はN-3°-Wである。壁は高さ45～55cmで、ほぼ直立している。



第624図 第3号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第 626 图 第 10 号竖穴建物跡出土遺物実測图

覆土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、砂質粘土ブロック微量	9 暗褐色	ローム粒子少量、砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子少量	10 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、砂質粘土ブロック微量
3 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子微量	11 におい黄褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子少量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、砂質粘土ブロック・炭化粒子微量	12 褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
5 暗褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	13 暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量、砂質粘土ブロック微量
6 灰黄褐色	砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	14 灰黄褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック・ローム粒子少量
7 暗褐色	砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	15 灰黄褐色	砂質粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子少量
8 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、砂質粘土ブロック・炭化粒子微量	16 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
		17 灰黄褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 3か所。P1は深さ60cmで、支柱穴、P2は深さ20cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。P3は深さ15cmで、補助柱穴と考えられる。第1・2層は、柱抜き取り後の堆積土である。

ピット土層解説

1 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	2 褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
-------	-----------------------	------	---------------------

覆土 16層に分層できる。堆積状況及び遺物の出土状況から、第4層までを埋め戻した後、自然堆積したものと考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	11 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	12 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量	13 褐色	ロームブロック多量
6 暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	14 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
7 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	15 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
8 暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	16 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片125点(坏4、甕121)、須恵器片19点(坏18、蓋1)、土製品1点(支脚)のほか、縄文土器片282点(深鉢280、浅鉢2)、剥片2点(黒曜石・チャート)が、主に第4層の、中央部から東壁際にかけて出土している。1759・1760は焚口中央部から逆位の状態で重なって出土し、東壁際の床面から出土した破片と接合している。1756・1757は東壁際の床面、1762は中央部の床面からそれぞれ出土している。1758・1763・DP130は覆土下層、1761は覆土中から出土している。1764は、東コーナー付近の、覆土中層から覆土下層にかけて出土した破片が接合していることから、埋め戻す際に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。

第10号竪穴建物跡出土遺物観察表(第626図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1756	須恵器	坏	14.0	4.3	8.3	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	床面	90% PL182 新治産
1757	須恵器	坏	13.9	4.1	7.4	長石・石英・雲母・ 黒色粒子	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後手持ちヘラ削り	床面	70% PL182 新治産
1758	須恵器	坏	[14.6]	4.2	[10.6]	長石・石英・雲母	におい黄褐	普通	体部回転ヘラ削り	覆土下層	40% PL182 新治産
1759	須恵器	坏	[14.8]	4.0	[9.2]	長石・石英・雲母・ 黒色粒子	黄灰	普通	体部回転ヘラ削り 支脚転用	火床面 床面	10% 新治産
1760	須恵器	坏	-	(3.8)	9.8	長石・石英・雲母・ 針状鉱物・赤色粒子	灰黄	普通	体部回転ヘラ削り 口縁端部磨減 支脚転用	火床面 床面	80% PL182 本郷下産
1761	須恵器	蓋	[15.6]	(1.8)	-	長石・石英・雲母・ 角閃石	灰黄	普通	天井部外・内面ロクロナデ	覆土中	25% 新治産
1762	土師器	甕	[21.8]	(13.0)	-	長石・石英・雲母	におい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	床面	25% PL182

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1763	土師器	甕	21.5	27.6	9.1	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ、体部内面下縁斜め方向のナデ	覆土下層	90% PL182
1764	土師器	甕	[25.6]	[29.9]	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ、体部外面ヘラ磨き	覆土中層 覆土下層	30% PL182

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP130	支脚	(11.6)	7.8	(5.0)	(580.7)	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄褐色	指ナデ、指頭痕	覆土下層	PL182

表6 奈良時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)	(cm)				主柱穴	出入口	ピット	伊・壱	貯蔵穴				
3	C 3a6	N-3°-W	[方形・長方形]	3.50 × (1.70)	45-55	平坦	[全周]	2	1	-	-	-	自然	土師器、須恵器	8C 前葉	SK 272-332・334・335 → 本跡	
10	C 4 j4	N-44°-E	長方形	4.56 × 4.03	60-65	平坦	全周	1	1	1	北壁	-	自然	土師器、須恵器、土製品	8C 前葉	SE 21-SK559 → 本跡	

3 その他の遺構と遺物

時期が明らかでない炭窯跡1基、溝跡2条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 炭窯跡

第1号炭窯跡 (第627図 PL96)

位置 調査区北東部のC 5 g1区、標高28mほどの台地の緩やかな斜面部に位置している。

規模と形状 全体の形状は瓢箪形で、主軸方向はN-46°-Wである。煙道部、燃焼部、焚口部の3つの部位に分けられる。

煙道部 燃焼部最奥の中央に位置している。径30cmの円形で、壁は高さ80cmほどで、ほぼ直立している。壁面は火熱を受けて著しく赤変硬化している。

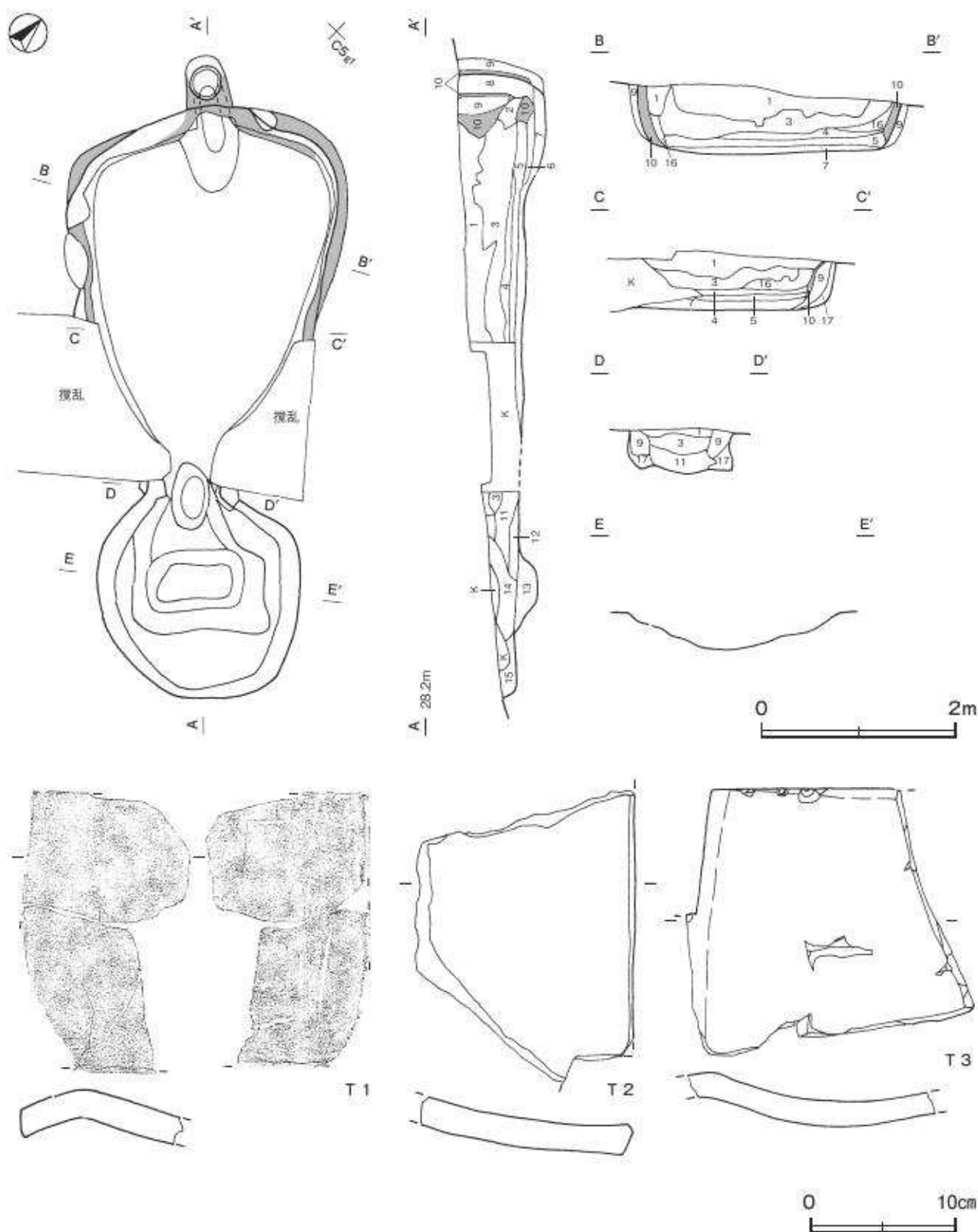
燃焼部 奥行き3.70m、最大幅2.50mの袋形で、壁は高さ60~70cmで、ほぼ直立している。底面はほぼ平坦であるが、煙道部に向かい部分的に緩やかに傾斜している。壁面は火熱を受けて著しく赤変硬化している。

焚口部 奥行き0.70m、幅0.40mの楕円形で、深さ15cmである。底面は皿状で、火熱を受けて著しく赤変硬化している。焚口部の南側には径2.13~2.20mの円形で、深さ40cmの掻き出し口が、中央部には長軸1.34m、短軸0.80mの長方形で、深さ15cmの掘り込みが確認できた。いずれも底面は部分的に火熱を受けている。

覆土 17層に分層できる。天井部の構築材と思われる砂質粘土が、各層にブロック状に含まれていることから、人為的に埋め戻されている。

土層解説

1	暗褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子中量、砂質粘土ブロック少量	8	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物・砂質粘土ブロック中量、ロームブロック少量
2	にぶい赤褐色	炭化物・焼土粒子・砂質粘土ブロック中量、ロームブロック少量	9	暗赤褐色	砂質粘土ブロック多量、赤変部分
3	赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック多量、炭化粒子中量、ロームブロック微量	10	黒褐色	砂質粘土ブロック多量、黒変部分
4	赤黒色	炭化物多量、焼土粒子少量、ローム粒子微量	11	黒褐色	焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック少量、砂質粘土ブロック微量
5	極暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック少量、砂質粘土ブロック微量	12	黒褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量、砂質粘土ブロック微量
6	黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子中量、ロームブロック少量、砂質粘土ブロック微量	13	黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量、焼土ブロック微量
7	黒褐色	ローム粒子・炭化物中量、焼土ブロック少量	14	暗赤褐色	焼土粒子多量、炭化物中量、ロームブロック少量
			15	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
			16	暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子微量
			17	にぶい褐色	砂質粘土ブロック多量



第 627 図 第 1 号炭窯跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 瓦 12 点（棧瓦）が覆土中から出土している。T 1・T 2 は煤状の炭化物の付着が著しい。
所見 時期は、出土瓦から近世以降と考えられる。

第 1 号炭窯跡出土遺物観察表（第 627 図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
T 1	棧瓦	195	112	20	(510.1)	紅煉	暗灰黄	良好	上・下面ヘラナデ・いぶし瓦	覆土中	炭化物付着
T 2	棧瓦	(201)	(146)	20	(636.1)	紅煉	灰	良好	上・下面ヘラナデ・いぶし瓦	覆土中	炭化物付着
T 3	棧瓦	(184)	(197)	18	(722.8)	紅煉	灰	良好	上・下面ヘラナデ・いぶし瓦	覆土中	

(2) 溝跡

今回の調査で、時期が明らかでない溝跡 2 条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述し、平面図は遺構全体図に示す。

第 1 号溝跡（第 628 図・付図）

位置 調査区西部の C 2 b6～C 2 c3 区、標高 28 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 7 号竪穴建物跡、第 30・645・666 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 分断される形で確認されたが、走行方向や規模・覆土が類似していることから、1 条の溝と判断した。北東・南西軸方向（N - 107° - W）へ直線的に伸びており、南西部は調査区域外へ伸びている。南西部が調査区域外のため、確認できた長さは 14.46 m で、上幅 40～120cm、下幅 28～78cm である。深さは 8～35cm で、断面形は逆台形であり、壁は外傾している。底面は南西側の谷部へ向かって緩やかに下降している。

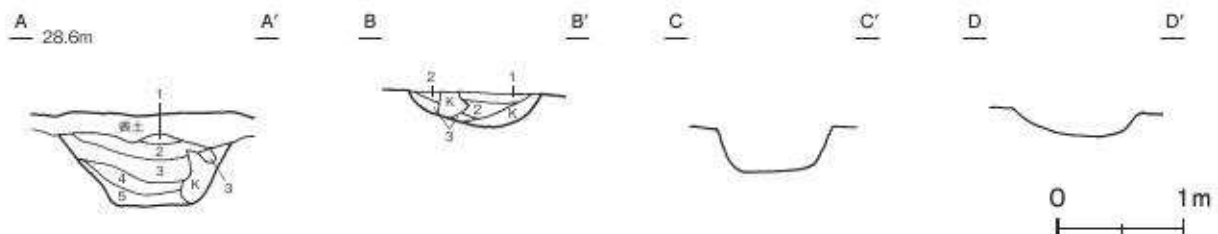
覆土 5 層に分層できる。各層にロームのブロックや粒子が多く含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片 40 点（深鉢）、石器 1 点（磨製石斧）、剥片 1 点（瑪瑙）、礫 1 点が出土している。いずれも流れ込んだもので、本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 時期を特定できる遺物が出土していないため、時期は不明である。第 2 号溝跡と走行方向や堆積状況が類似していることから、排水溝あるいは地割のための区画溝と考えられる。



第 628 図 第 1 号溝跡実測図

第2号溝跡 (第629図)

位置 調査区北東部から南部にかけてのC5f1～D3e1区、標高28mほどの台地上に位置している。

重複関係 第15・37号竪穴建物跡、第313・517・533・537・553・633号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 分断される形で確認されたが、走行方向や規模・覆土が類似していることから、1条の溝と判断した。北東・南西軸方向(N-108°-W)へ直線的に延びており、南西部は調査区域外へ延びている。確認できた長さは82.43mで、上幅20～98cm、下幅8～38cmである。深さは10～20cmで、断面形は浅いU字状であり、壁は外傾している。底面は地形の傾斜に沿って、北東・南西部が低くなっている。

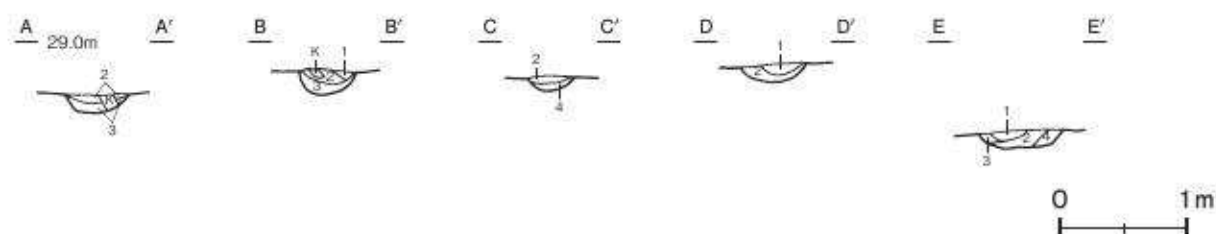
覆土 4層に分層できる。各層にローム粒子が多く含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子多量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量 |

遺物出土状況 縄文土器片287点(深鉢、須恵器片2点(坏、甕)、剥片3点(黒曜石、石英、瑪瑙)、礫5点が出土している。いずれも流れ込んだもので、本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 時期を特定できる遺物が出土していないため、時期は不明である。第1号溝跡と走行方向や堆積状況が類似していることから、排水溝あるいは地割のための区画溝と考えられる。



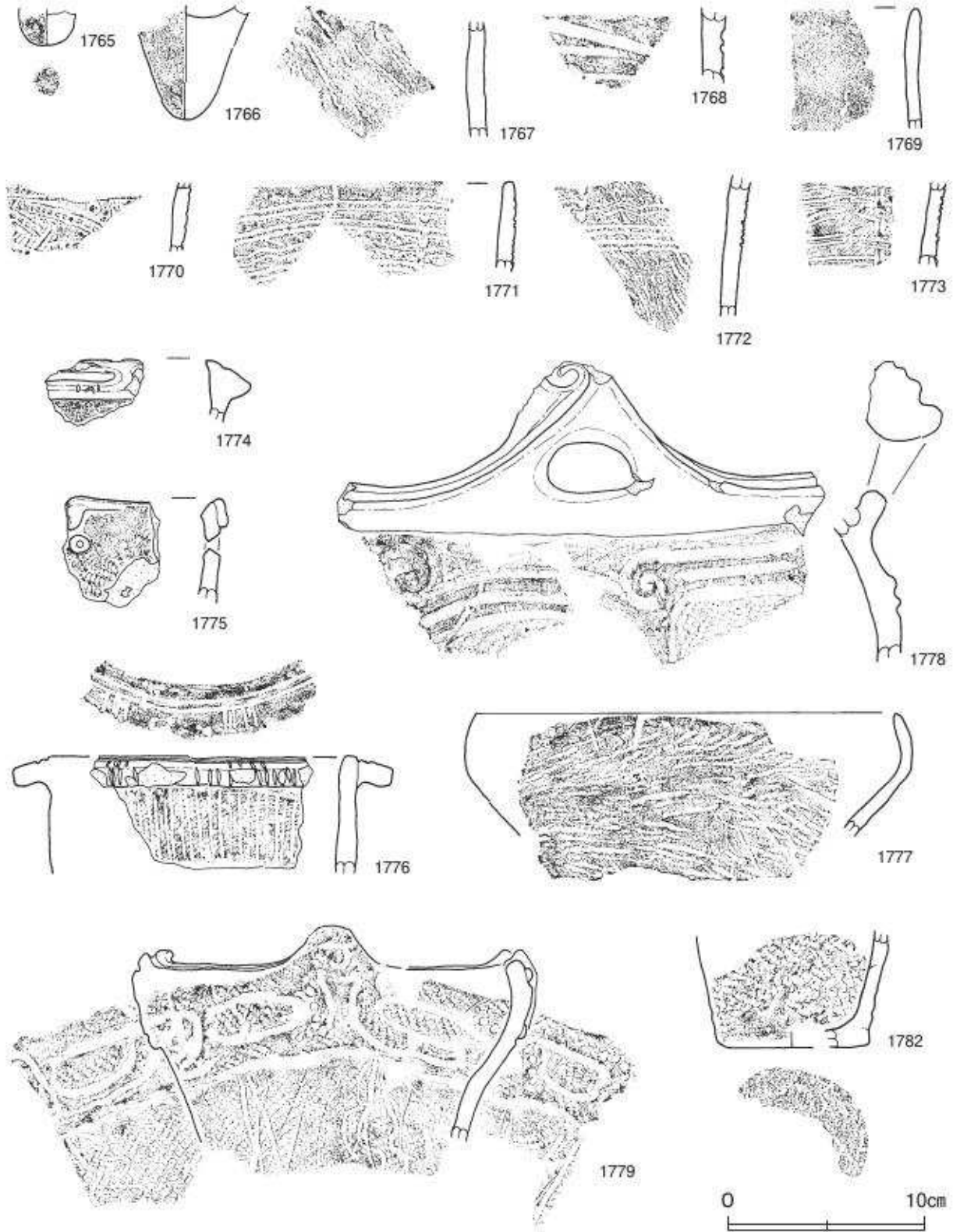
第629図 第2号溝跡実測図

表7 その他の溝跡一覧表

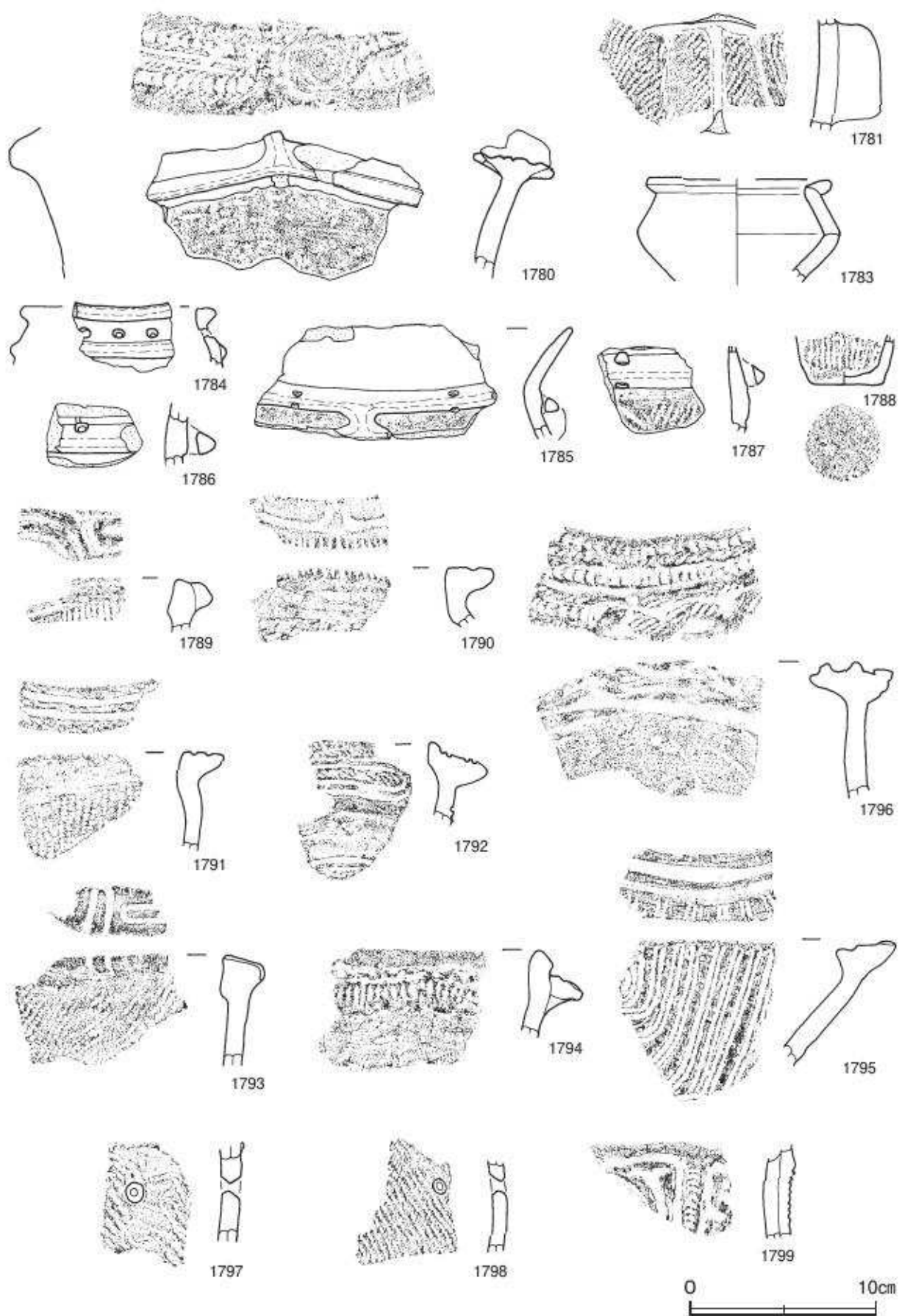
番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	C2b6～C2c3	N-107°-W	直線状	(14.46)	0.40～1.20	0.28～0.78	8～35	逆台形	外傾	人為	縄文土器、石器	SI 7、SK30・645～666→本跡
2	C5f1～D3e1	N-108°-W	直線状	(82.43)	0.20～0.98	0.08～0.38	10～20	U字状	外傾	人為	縄文土器、須恵器	SI 15・37、SK33・37・33・57・33・63→本跡

(3) 遺構外出土遺物 (第 630 ~ 640 図)

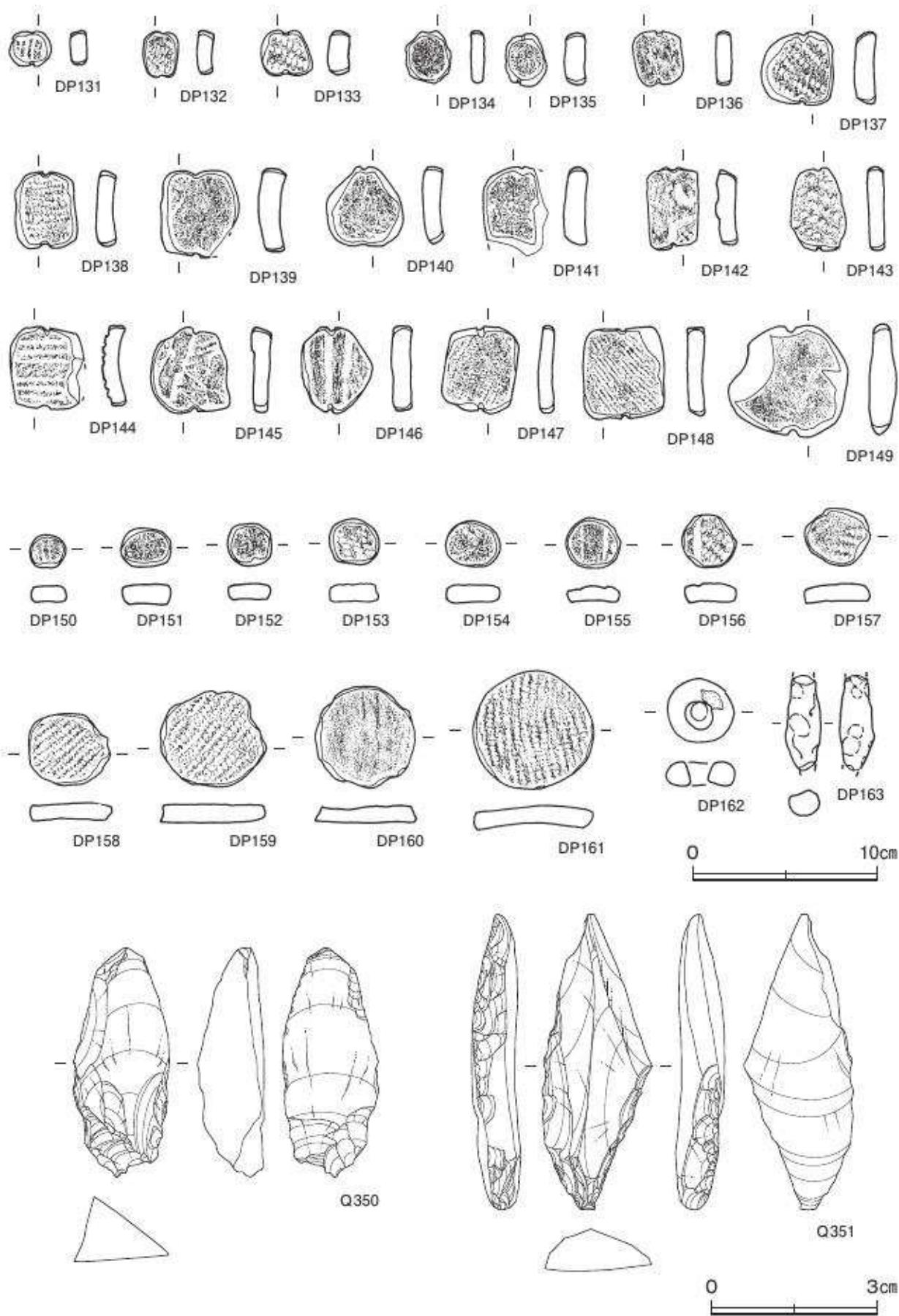
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



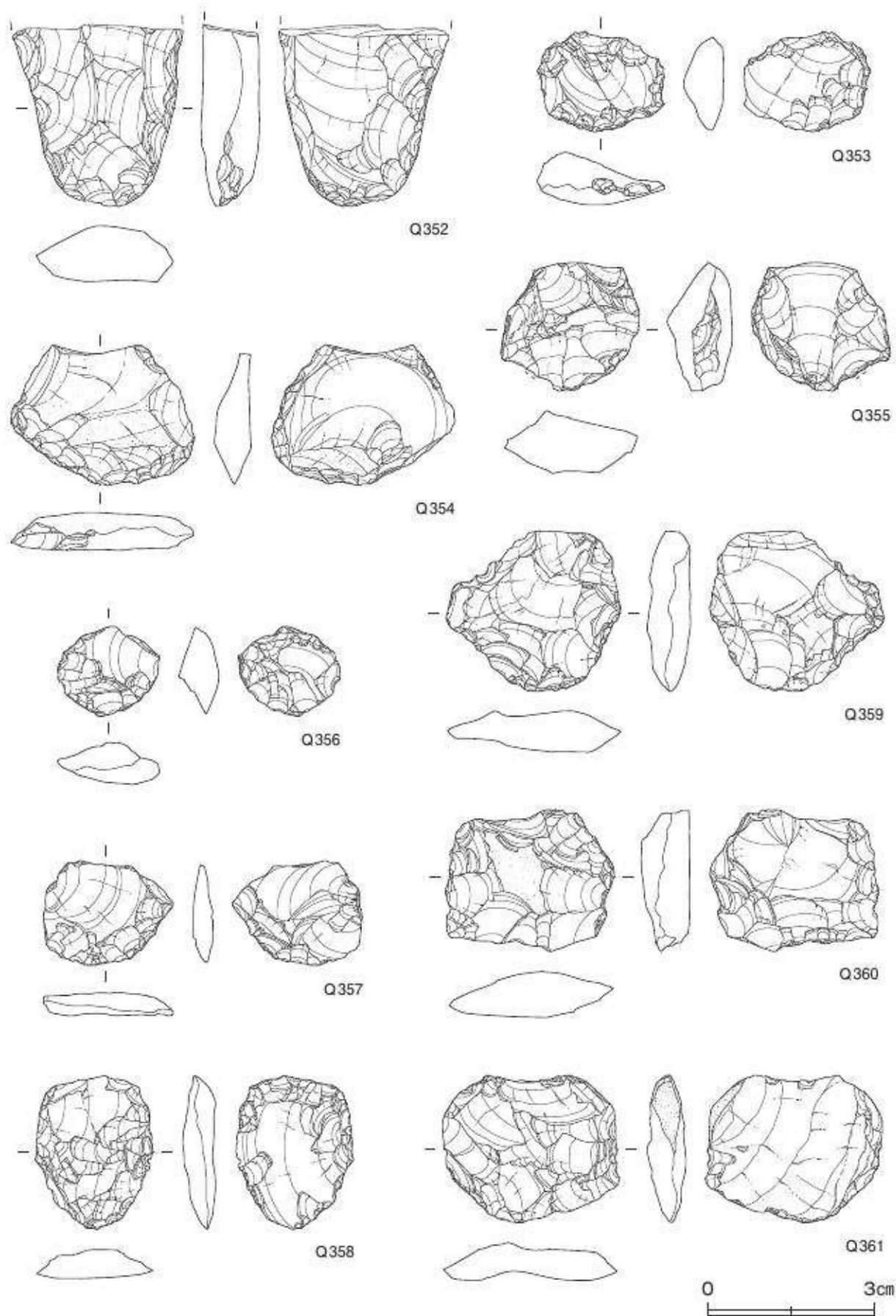
第 630 図 遺構外出土遺物実測図 (1)



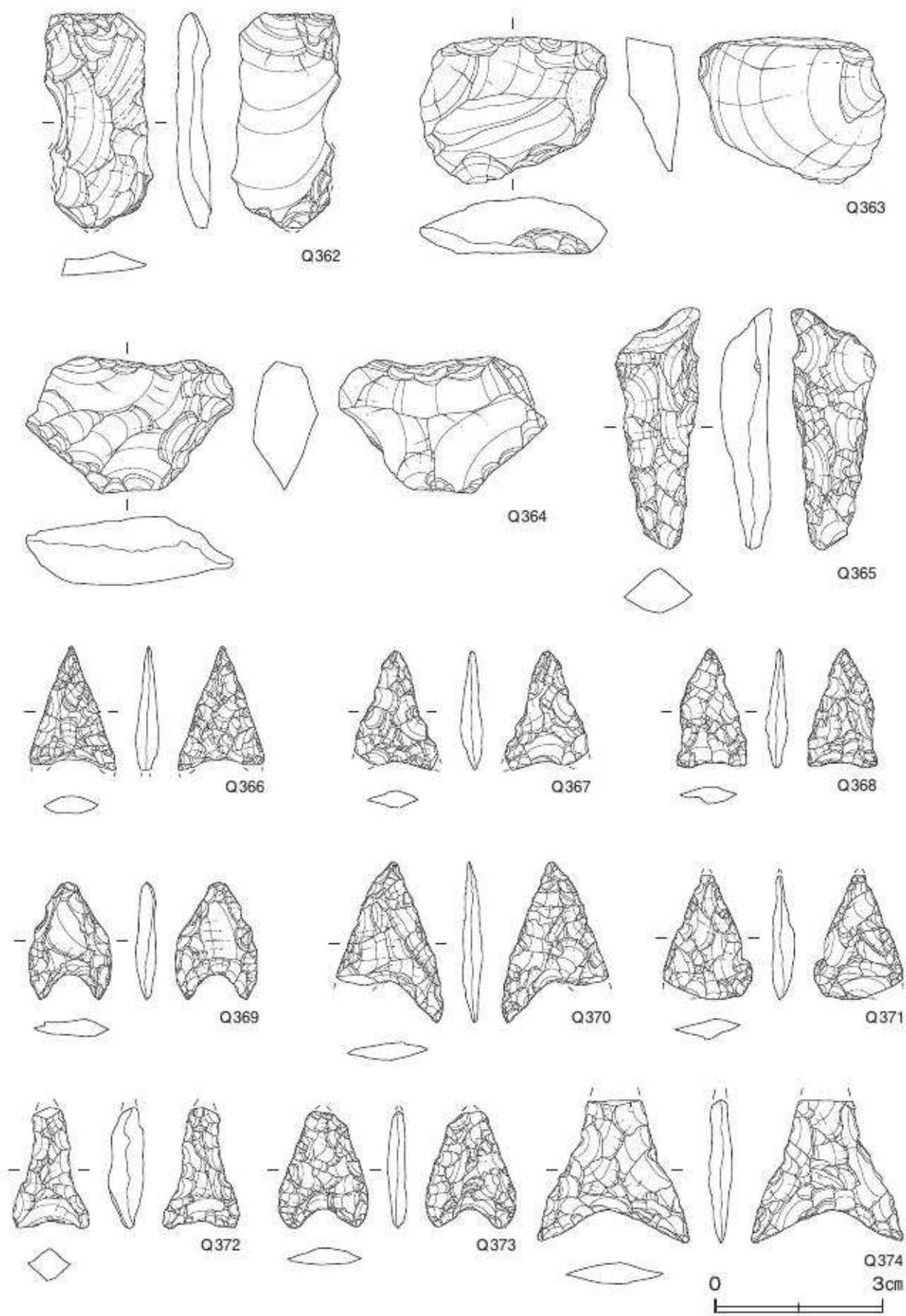
第 631 図 遺構外出土遺物実測図(2)



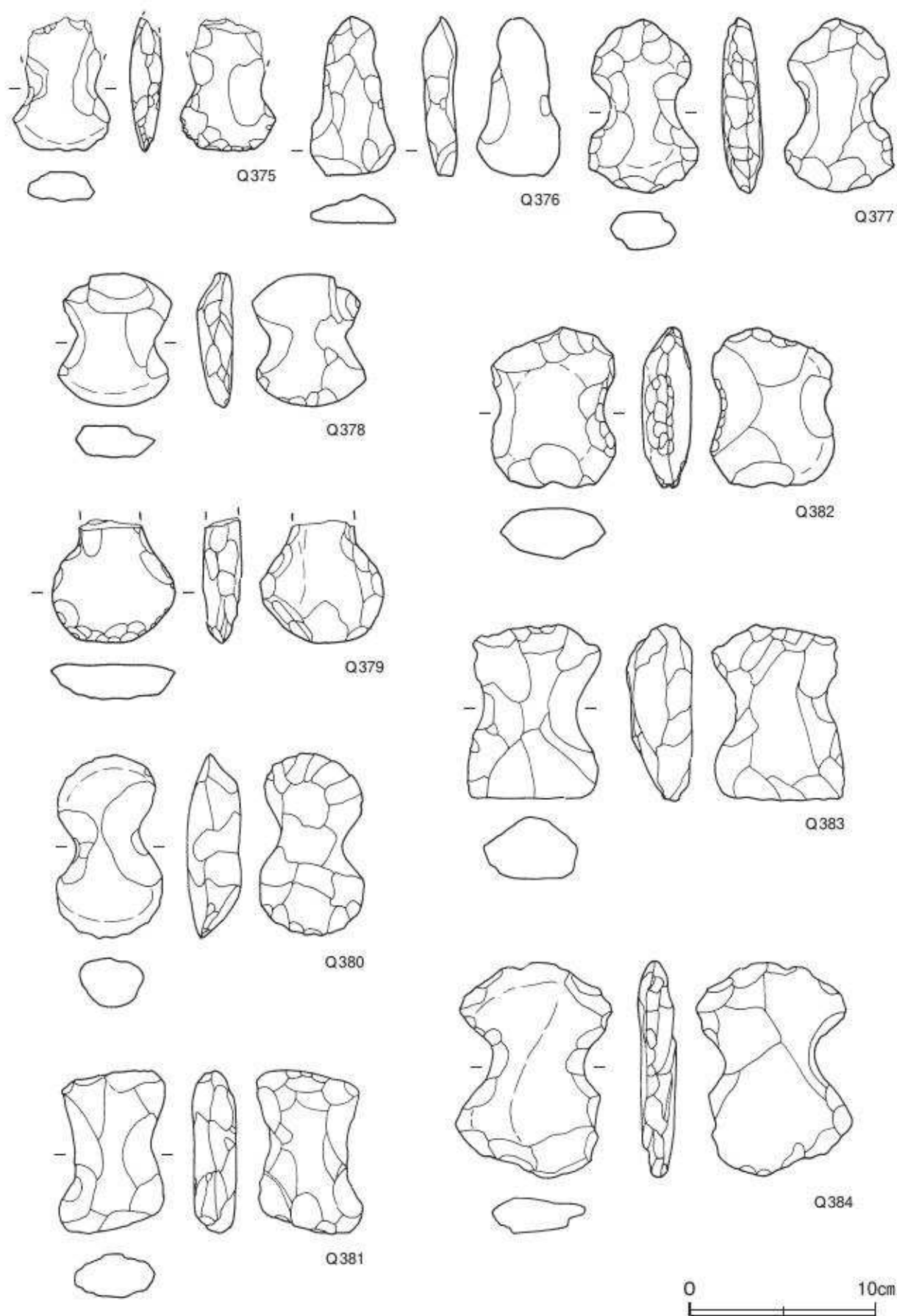
第 632 図 遺構外出土遺物実測図 (3)



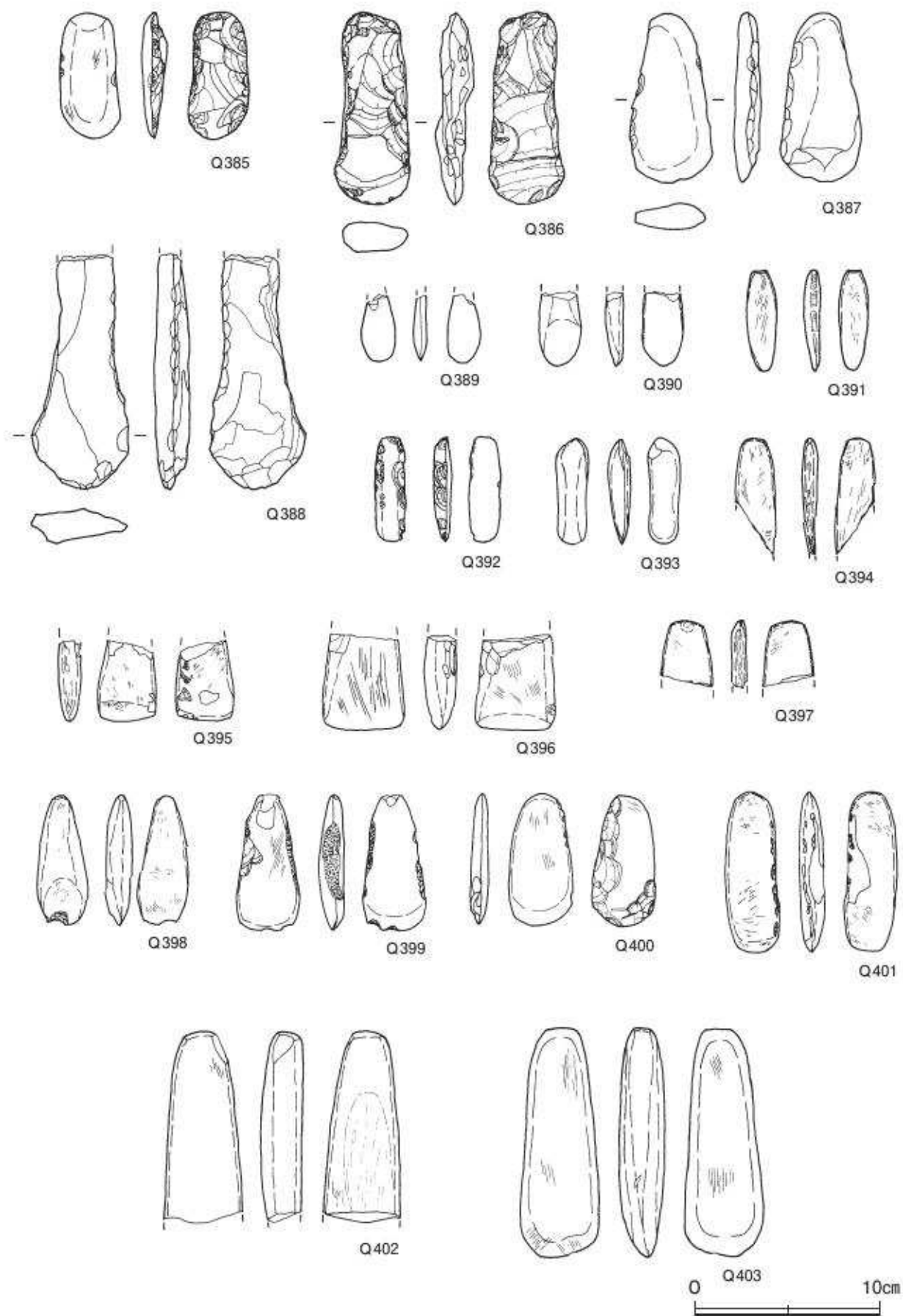
第 633 図 遺構外出土遺物実測図(4)



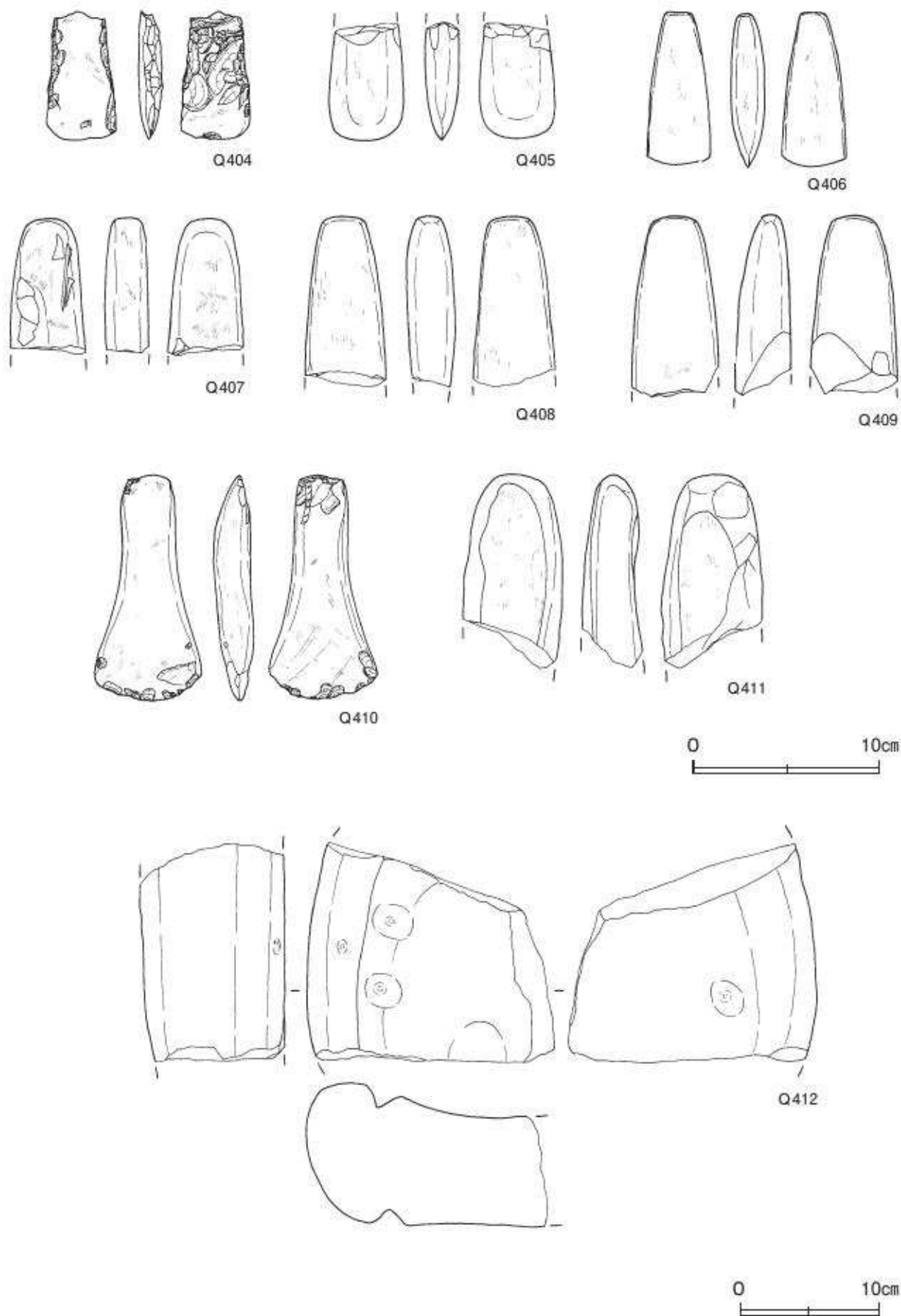
第 634 图 遗構外出土遺物実測図(5)



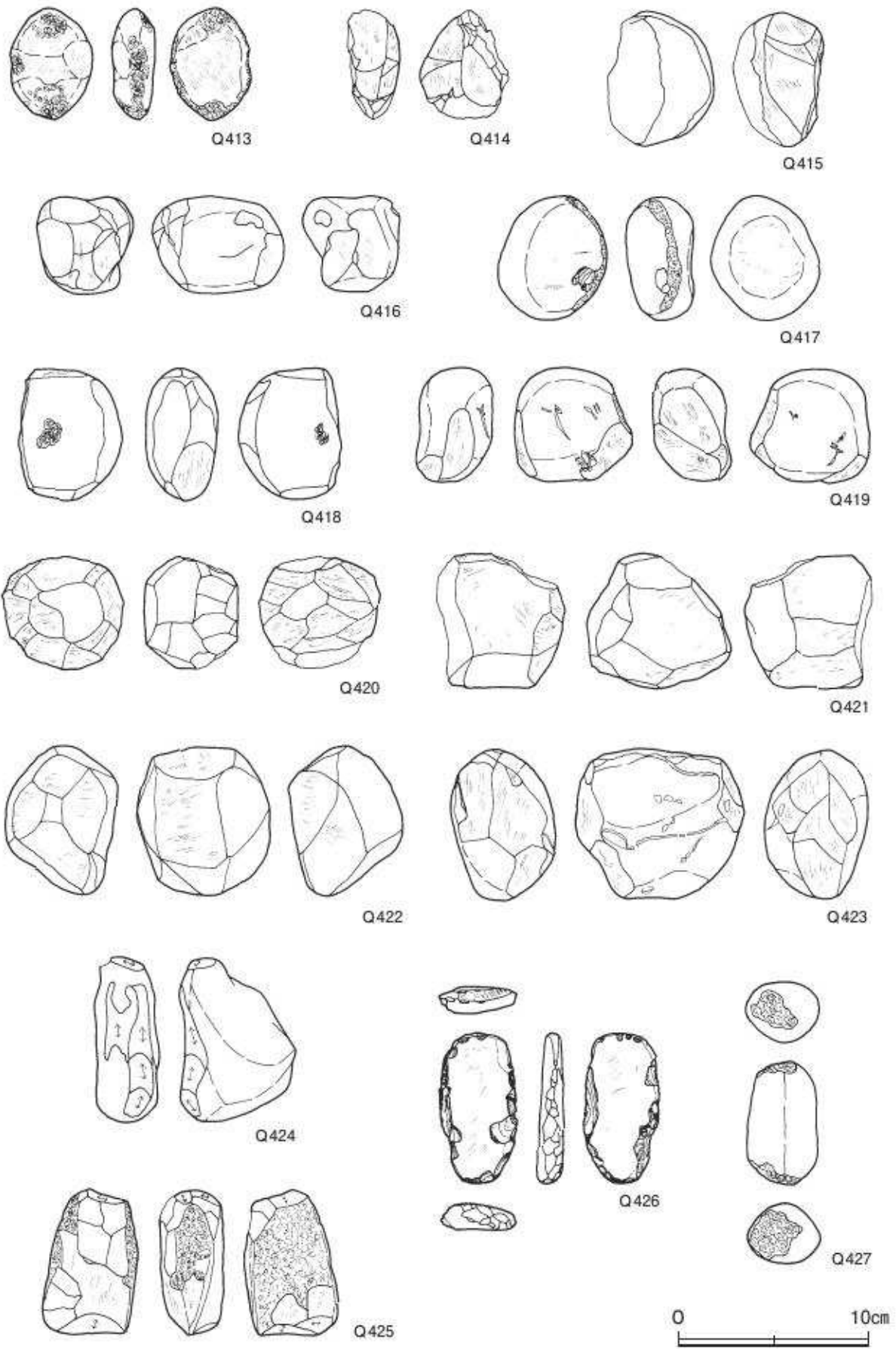
第 635 図 遺構外出土遺物実測図(6)



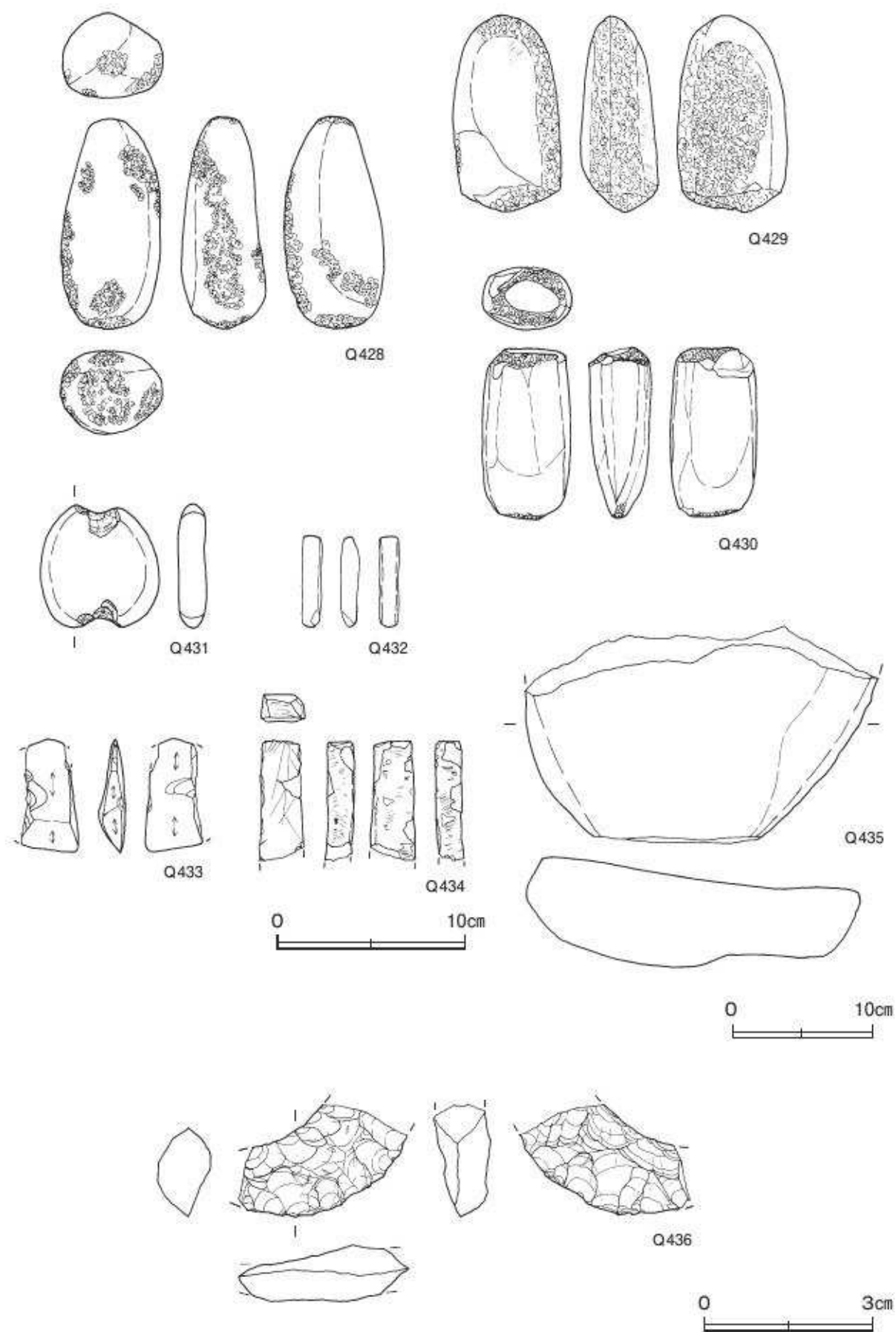
第 636 图 遗構外出土遺物実測図 (7)



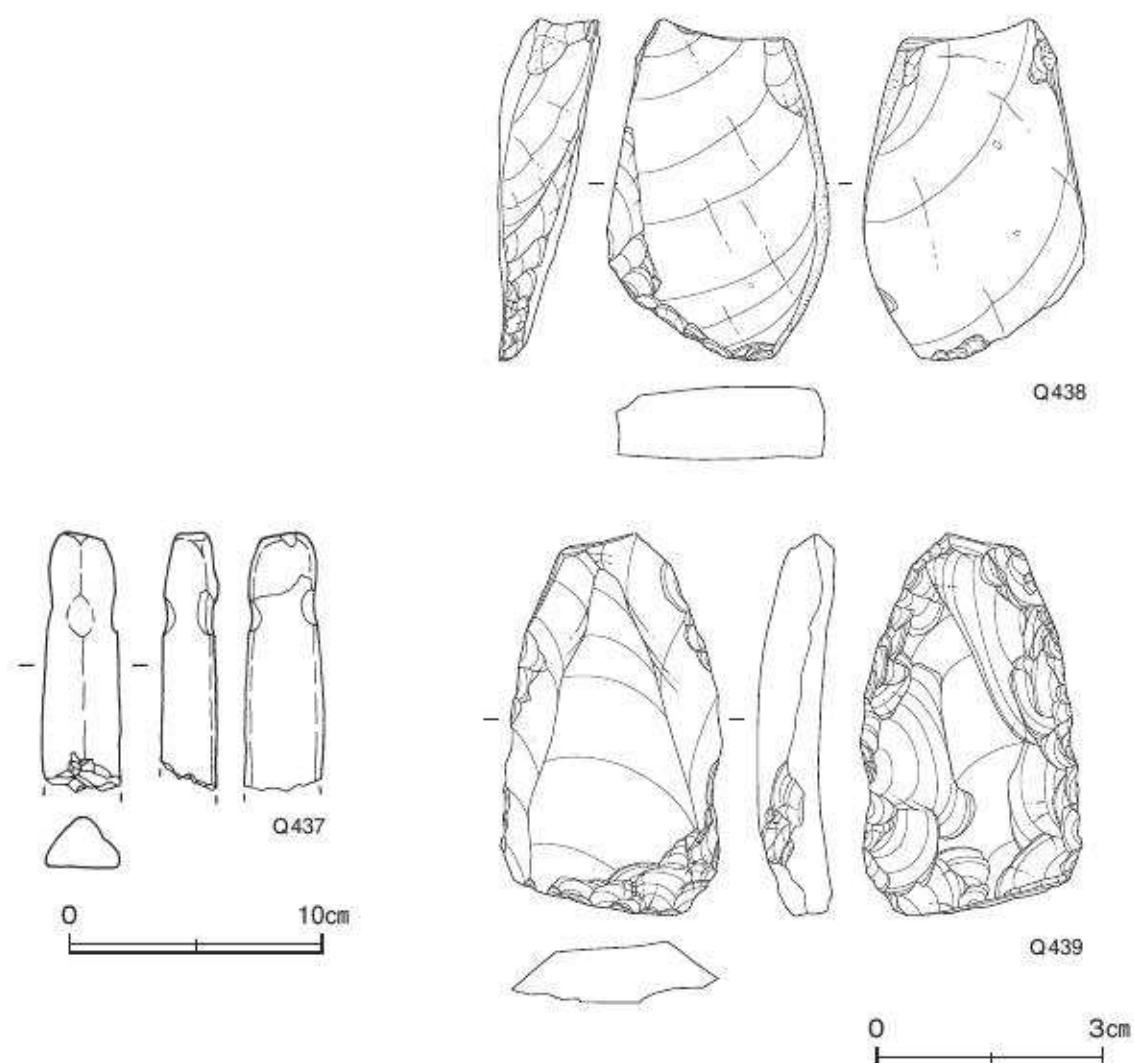
第 637 図 遺構外出土遺物実測図(8)



第 638 図 遺構外出土遺物実測図 (9)



第 639 図 遺構外出土遺物実測図 (10)



第640図 遺構外出土遺物実測図(11)

遺構外出土遺物観察表(第630～640図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1765	縄文土器	深鉢	-	(1.9)	1.4	長石・石英	にぶい褐色	普通	横方向のナデ 尖底土器	表土	早期中葉
1766	縄文土器	深鉢	-	(5.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい褐色	普通	横方向のナデ 尖底土器	表土	早期中葉
1767	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	貝殻痕線文(斜)	表土	早期中葉
1768	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粘土	赤褐色	普通	横位の太沈線間に貝殻痕線文	表土	早期中葉
1769	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	外面縦方向のナデ 内面指頭による縦方向のナデ	表土	早期中葉
1770	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	地文にまばらな熱赤文(斜) 竹管による凹形刺突 竹管による本葉文	表土	前期中葉
1771	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	地文に横り戻しのLLR(縦) 半截竹管による横位の波状文・竹管文 縦位の凹形刺突	表土	前期中葉 (172と同一器種)
1772	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	地文に横り戻しのLLR(縦) 半截竹管による横位の波状文・竹管文 縦位の凹形刺突	表土	前期中葉 (171と同一器種)
1773	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	明赤褐色	良好	地文にまばらな熱赤文(斜) 竹管による肋竹管文	表土	前期中葉
1774	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	口唇頂部平坦 隆帯による格間区画 頸部単節縄文LR(横)	表土	中期中葉
1775	縄文土器	深鉢	-	(5.6)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	地文に単節縄文RL(横) 隆帯を網み状に貼付 補修孔 1 内面に未貫通 1	表土	中期中葉
1776	縄文土器	深鉢	[15.2]	(6.0)	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	口唇部板状の指土指付による平坦面 半頸部中央に並行沈線が1道 部分的に4本単位の沈線 頸部地文に縄文(判別不明) 縦位の条線文	表土	中期中葉
1777	縄文土器	深鉢	[21.6]	(6.3)	-	長石・石英	にぶい赤褐色	良好	口唇直下から頸部縄文L(斜) 内面横方向のナデ	表土	10% 中期中葉
1778	縄文土器	深鉢	-	(15.5)	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	明赤褐色	普通	口唇頂部に沈線 波状の把手頂部に渦巻文 隆帯は単節縄文RL(縦) 隆帯による渦巻文・格間区画	表土	10% PL159 中期中葉

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1779	陶文土器	深鉢	18.0	(11.1)	-	長石・石英・小礫	灰褐色	普通	口唇部肥厚隆帯による楕円区画・溝巻文 隆帯上・区画内単節縄文 RL (横) 隆帯に斜突文 胴部同一原体による(縦) 並行沈線・波状沈線を重下	表土	60% PL159 中期中葉
1780	陶文土器	深鉢	-	(8.1)	-	長石・石英・雲母・白色粒子・磁礫	にぶい橙	普通	口唇部平坦・無節縄文 L (横) 水形文による楕円区画 区画内並行沈線	表土	中期中葉
1781	陶文土器	深鉢	-	(6.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	膝状の隆帯を縦位に貼付 単節縄文 RL (縦・斜)	表土	中期中葉
1782	陶文土器	深鉢	-	(5.9)	[7.6]	長石・石英・黒色粒子	にぶい橙	普通	地文に単節縄文 LR (縦)	表土	前期中葉
1783	陶文土器	小型器	[10.1]	(5.5)	-	長石・石英・磁礫	にぶい褐	普通	口唇部くの字状に外反 胴部くの字状に内彎外・内面磨き	表土	20% 中期中葉
1784	陶文土器	有孔持付土器	[10.6]	(3.5)	-	長石・石英・針状磁礫・赤色粒子	にぶい褐	良好	口唇部平坦 2条の隆帯を重らし 隆帯間に穿孔	表土	中期中葉
1785	陶文土器	有孔持付土器	-	(4.1)	-	長石・石英・磁礫	灰褐色	普通	口唇部無文 隆帯による楕円区画 区画内単節縄文 LR (横) 隆帯に垂直に穿孔	表土	中期中葉
1786	陶文土器	有孔持付土器	-	(3.5)	-	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	筒状の隆帯が1条 隆帯に垂直に穿孔	表土	中期中葉
1787	陶文土器	有孔持付土器	-	-	-	長石・雲母	橙	普通	地文に単節縄文 RL (横) 筒状の隆帯が1条 隆帯上に垂直に穿孔	表土	中期中葉
1788	陶文土器	ミニチュア土器	-	(2.6)	4.0	長石・石英・黒色粒子・赤色斑点	浅黄橙	普通	無文(縦) 二次焼成	表土	20% PL159 中期中葉
1789	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口唇部に背割れ隆帯が走る 胴部無文(縦)	表土	中期中葉
1790	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	口唇部平坦 沈線による区画文 口唇縁部にキザミ目	表土	中期中葉
1791	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	褐	普通	口唇部平坦 単節縄文 RL (横) 2本の沈線が走る 胴部は同一原体(斜)	表土	中期中葉
1792	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部平坦 地文に単節縄文 RL (横) 平截竹管による楕円区画	表土	中期中葉
1793	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部平坦 沈線による区画文 胴部単節縄文 RL (縦)	表土	中期中葉
1794	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・磁礫	にぶい褐	普通	口唇部肥厚隆帯 口唇部間に交互刻突による並行隆帯とヘラ状工具による横位の斜突文 胴部筒状工具による縦位の条線文	表土	中期中葉
1795	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口唇部平坦 平坦面に2本の沈線とキザミ目 口唇部平截竹管による風線文	表土	中期中葉
1796	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部平坦 2条の隆帯間に幅広い有節沈線部分的に並行隆帯貼付 隆帯上に無節縄文 L (横) 胴部横方向のナデ	表土	中期中葉
1797	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	地文に無節縄文 L (縦) 補修孔1	表土	中期中葉
1798	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	地文に1段多糸縄文 (横) 補修孔1	表土	中期中葉
1799	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	隆帯による方形区画 隆帯上にキザミ目 区画内三角形の縦刻文・蛇行文	表土	中期中葉

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP131	土器片鉢	1.9	2.2	0.9	4.4	長石・石英・雲母・黒色粒子	褐	胴部片 両端にキザミ目 周縁部部分的に研磨	表土	
DP132	土器片鉢	2.4	1.9	1.0	4.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	胴部片 両端に弱いキザミ目 周縁部研磨	表土	
DP133	土器片鉢	2.5	2.7	1.3	9.6	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	胴部片 両端にキザミ目 周縁部研磨	表土	
DP134	土器片鉢	2.8	2.4	0.7	6.1	石英	にぶい赤褐	胴部片 片端部に弱いキザミ目 周縁部研磨	表土	
DP135	土器片鉢	2.9	2.1	1.1	4.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	胴部片 両端にキザミ目 周縁部部分的に研磨	表土	
DP136	土器片鉢	3.0	2.7	0.8	8.4	長石・石英・雲母	橙	口唇部片 両端にキザミ目 周縁部研磨	表土	
DP137	土器片鉢	4.0	4.0	1.2	21.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤褐	胴部片 両端にキザミ目 周縁部部分的に研磨	表土	
DP138	土器片鉢	4.2	3.4	1.1	18.8	長石・石英・雲母	灰黄褐	胴部片 両端にキザミ目 周縁部研磨	表土	
DP139	土器片鉢	4.2	4.3	1.3	(32.2)	長石・石英	にぶい褐	胴部片 両端にキザミ目 周縁部研磨	表土	
DP140	土器片鉢	4.3	4.2	1.2	23.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	胴部片 両端にキザミ目 周縁部丁寧に研磨	表土	
DP141	土器片鉢	(4.3)	(3.5)	1.3	(23.0)	長石・石英・雲母	明褐	胴部片 片端部にキザミ目 周縁部丁寧に研磨	表土	
DP142	土器片鉢	4.5	2.8	1.1	17.5	長石・石英・黒色粒子	橙	口唇部片 両端にキザミ目 周縁部部分的に研磨	表土	
DP143	土器片鉢	4.5	2.9	0.9	16.0	長石・石英・雲母・赤色斑点	褐	胴部片 両端にキザミ目 周縁部部分的に研磨	表土	
DP144	土器片鉢	4.5	4.0	1.0	(22.9)	長石・石英	にぶい褐	胴部片 両端にキザミ目 片周縁研磨	表土	
DP145	土器片鉢	4.6	3.8	1.2	23.2	長石・石英・雲母	にぶい橙	胴部片 両端にキザミ目 周縁部部分的に研磨	表土	
DP146	土器片鉢	4.6	4.2	1.1	24.8	長石・石英・雲母	にぶい褐	胴部片 両端にキザミ目 片周縁研磨	表土	
DP147	土器片鉢	4.7	4.1	0.8	(21.3)	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい赤褐	胴部片 両端にキザミ目 周縁部部分的に研磨	表土	
DP148	土器片鉢	4.9	4.5	0.9	28.5	長石・石英・雲母	褐	胴部片 両端にキザミ目 周縁部粗雑に研磨	表土	
DP149	土器片鉢	6.0	6.4	1.5	53.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	底部片 両端にキザミ目 周縁部粗雑に研磨	表土	
DP150	土器片円蓋	1.8	1.9	0.9	3.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	胴部片 周縁部丁寧に研磨	表土	
DP151	土器片円蓋	2.1	2.7	1.1	7.5	長石・雲母・白色粒子	灰褐色	胴部片 楕円形 周縁部丁寧に研磨	表土	
DP152	土器片円蓋	2.3	2.2	0.9	6.2	長石・石英・雲母	褐	胴部片 周縁部研磨	表土	
DP153	土器片円蓋	2.5	2.6	0.9	8.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	胴部片 周縁部丁寧に研磨	表土	
DP154	土器片円蓋	2.5	2.9	1.0	9.2	長石・石英・雲母	にぶい褐	胴部片 周縁部丁寧に研磨	表土	
DP155	土器片円蓋	2.8	2.9	0.8	6.9	長石・石英	明赤褐	胴部片 周縁部丁寧に研磨	表土	
DP156	土器片円蓋	2.8	2.9	0.9	(8.9)	長石・石英・雲母	にぶい橙	胴部片 周縁部部分的に研磨	表土	未成品。

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP157	土器片断	3.0	3.6	0.9	(121)	長石・石英・雲母・緑礫	にぶい褐	割部片 周縁部部分的に研磨	表土	未成品。
DP158	土器片断	3.8	4.3	0.9	(200)	長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	割部片 周縁部部分的に研磨	表土	未成品。
DP159	土器片断	5.2	5.8	1.0	381	長石・石英・雲母	にぶい褐	割部片 周縁部敲打調整	表土	未成品。
DP160	土器片断	5.5	5.5	0.9	336	石英・黒色粘土	明赤褐色	割部片 周縁部敲打調整	表土	未成品。
DP161	土器片断	6.4	6.5	1.0	540	長石・石英・雲母・白色粘土・黒色粘土	にぶい赤褐	割部片 周縁部丁寧に研磨	表土	外面黒付着
DP162	管状土製品	3.4	3.6	1.4	134	長石・石英	にぶい黄褐	片面から棒状工具により穿孔 割縁が目立つ	表土	
DP163	不明土製品	5.2	1.9	1.7	160	長石・石英	にぶい褐	粘土塊を指頭により棒状に整形 指頭が小さく子供の作品。	表土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 350	ナイフ形石器	4.2	1.7	1.2	7.3	流紋岩	片側縁押圧割縁	表土	PL160
Q 351	ナイフ形石器	5.4	2.0	0.9	7.7	流紋岩	両側縁押圧割縁	表土	PL160
Q 352	尖頭器	(3.3)	(3.1)	1.1	(14.2)	黒色安山岩	側縁部押圧割縁	表土	未成品。
Q 353	スライパー	1.8	2.3	1.0	3.6	チャート	側縁部押圧割縁	表土	
Q 354	スライパー	2.6	3.3	0.7	6.7	チャート	側縁部押圧割縁	表土	
Q 355	楔形石器	2.3	2.5	1.2	6.7	チャート	側縁部押圧割縁	表土	
Q 356	未成品	1.6	1.9	0.8	1.9	チャート	側縁部押圧割縁	表土	
Q 357	未成品	1.9	2.4	0.4	2.1	チャート	先端部押圧割縁	表土	
Q 358	未成品	2.8	2.1	0.6	4.3	チャート	片側縁及び先端部押圧割縁	表土	
Q 359	未成品	2.9	3.2	0.8	7.8	チャート	側縁部押圧割縁	表土	
Q 360	加工痕のある割片	2.6	3.1	0.9	7.6	チャート	両側縁及び先端部押圧割縁	表土	
Q 361	加工痕のある割片	2.7	3.2	0.7	6.2	チャート	片側縁押圧割縁	表土	
Q 362	加工痕のある割片	3.9	2.0	0.6	4.4	頁岩	端部微細な割縁痕	表土	
Q 363	加工痕のある割片	2.6	3.4	1.0	9.8	石英	端部押圧割縁	表土	
Q 364	加工痕のある割片	2.5	3.7	1.2	10.6	石英	片側縁押圧割縁	表土	
Q 365	石鏃	4.3	1.5	0.9	5.0	チャート	側縁部押圧割縁	表土	PL160
Q 366	鏃	(2.2)	(1.5)	0.4	(0.9)	チャート	基部中央深く穿入	表土	PL161
Q 367	鏃	(2.1)	(1.5)	0.4	(0.9)	チャート	基部中央深く穿入 脚部欠損	表土	PL161
Q 368	鏃	2.1	1.3	0.4	0.8	チャート	基部中央深く穿入	表土	PL161
Q 369	鏃	2.1	1.5	0.4	1.1	チャート	基部中央深く穿入	表土	PL161
Q 370	鏃	2.9	(1.9)	0.4	(1.3)	チャート	基部中央深く穿入 脚部欠損	表土	PL161
Q 371	鏃	(2.2)	1.6	0.4	(1.2)	チャート	先端部欠損 片脚部欠損	表土	
Q 372	鏃	(2.2)	1.4	0.6	(1.3)	瑪瑙	基部中央深く穿入 先端部欠損	表土	PL161
Q 373	鏃	(2.1)	1.6	0.4	(1.0)	瑪瑙	基部中央深く穿入 先端部欠損	表土	PL161
Q 374	鏃	(2.6)	2.7	0.4	(2.1)	黒色安山岩	基部中央深く穿入 先端部欠損	表土	PL161
Q 375	打製石斧 未成品	(7.3)	5.2	1.8	(74.3)	ホルンフェルス	分銅形 側縁部微細な敲打調整 刃部片面を研磨 ハマグリ刃 片刃部欠損	表土	
Q 376	打製石斧	8.6	4.6	1.9	78.6	ホルンフェルス	分銅形 片面に自然面 挟り部は表裏を敲打 刃部は片面を敲打	表土	PL162
Q 377	打製石斧	9.5	5.9	2.2	131.8	ホルンフェルス	分銅形 表裏に自然面 挟り部・刃部は表裏を敲打	表土	PL162
Q 378	打製石斧	7.2	(6.2)	(1.9)	(90.7)	ホルンフェルス	分銅形 片面に自然面 挟り部は表裏を敲打 刃部は片面を敲打 片刃部割縁	表土	PL162
Q 379	打製石斧	(6.7)	6.7	2.0	(114.2)	ホルンフェルス	分銅形 表裏に自然面 挟り部・刃部は表裏を敲打 片刃部欠損	表土	PL162
Q 380	打製石斧	9.9	5.8	3.8	171.7	砂岩	分銅形 片面に自然面 挟り部は表裏を敲打 刃部は片面を敲打 表面中央に微細な敲打痕	表土	PL162
Q 381	打製石斧	8.9	5.7	2.4	156.0	ホルンフェルス	分銅形 表裏面研磨 挟り部・刃部は表裏を敲打	表土	PL163
Q 382	打製石斧	8.6	6.7	2.7	204.4	ホルンフェルス	分銅形 表裏に自然面 挟り部・刃部は表裏を敲打	表土	PL162 磨石の再利用
Q 383	打製石斧	9.7	7.2	3.5	277.1	流紋岩	分銅形 表裏に自然面 挟り部・刃部は表裏を敲打	表土	PL163
Q 384	打製石斧	11.7	8.5	2.1	203.1	安山岩	分銅形 表裏に自然面 挟り部・刃部は表裏を敲打	表土	PL163
Q 385	打製石斧	7.0	3.2	1.4	35.8	ホルンフェルス	小型 片面を敲打 両側縁敲打調整 刃部は片面を研磨	表土	PL166
Q 386	打製石斧	10.4	4.1	2.1	88.5	ホルンフェルス	楔形 側縁部微細な敲打調整 刃部片面を研磨 ハマグリ刃	表土	PL165
Q 387	打製石斧	9.1	4.5	1.4	67.8	砂岩	楔形 扁平な自然面を利用 刃部は片面を敲打 両側縁微細な敲打痕	表土	
Q 388	打製石斧	(12.8)	5.2	2.0	(127.4)	粘板岩	楔形 片側縁敲打調整 刃部は片面を敲打 基部欠損	表土	PL165
Q 389	磨製石斧	(3.7)	(1.8)	(0.7)	(7.1)	緑色岩	極小型 片側縁に稜 基部欠損 刃部は表裏から研ぎ出す	表土	PL170
Q 390	磨製石斧	(4.0)	2.3	0.9	(12.1)	角閃岩	極小型 基部欠損 刃部は表裏から研ぎ出す	表土	PL170

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 391	磨製石斧	5.4	1.7	0.9	12.1	角閃岩	極小型 表裏面研磨 刃部は表裏から研ぎ出す	表土	PL170
Q 392	磨製石斧	5.7	1.7	0.8	12.4	ホルンフェルス	極小型 表裏面研磨 両側縁敲打後研磨 基部に敲打痕 刃部は表裏から研ぎ出す	表土	PL170
Q 393	磨製石斧	5.8	1.8	1.2	(16.6)	緑色岩	極小型 刃部は表裏から研ぎ出す	表土	PL170
Q 394	磨製石斧	(6.3)	(2.2)	0.8	(15.4)	角閃岩	極小型 全面研磨 両側縁に弱い稜 刃部欠損	表土	PL170
Q 395	磨製石斧	(4.4)	3.2	1.2	27.8	緑色岩	小型 側縁部に弱い稜 基部欠損 刃部は表裏から研ぎ出す	表土	
Q 396	磨製石斧	(5.2)	4.4	1.7	62.8	石英斑岩	小型 両側縁丸みをもつ 基部欠損 刃部は表裏から研ぎ出す	表土	
Q 397	磨製石斧	(3.6)	(2.8)	(0.8)	(13.0)	頁岩	小型 側縁部に稜 刃部欠損	表土	
Q 398	磨製石斧	7.0	2.8	1.4	33.3	ホルンフェルス	小型 両側縁研磨 刃部は表裏から研ぎ出す 一部欠損	表土	PL169
Q 399	磨製石斧	7.3	3.4	1.4	47.1	緑色岩	小型 表裏面敲打 両側縁微細な敲打調整 刃部は表裏から研ぎ出す	表土	PL169
Q 400	磨製石斧	7.1	3.5	1.0	32.1	ホルンフェルス	小型 片側縁敲打調整 表裏面研磨 刃部は片面を研ぎ出す	表土	PL169
Q 401	磨製石斧	8.6	2.9	1.4	(48.9)	角閃岩	小型 片側縁研磨・微細な敲打調整 刃部は表裏から研ぎ出す	表土	PL169
Q 402	磨製石斧	(10.4)	(4.3)	2.3	(173.5)	変質ドレライト	定角式 全面研磨 刃部欠損 片面に凹状の研磨痕	表土	PL167
Q 403	磨製石斧	12.4	4.4	2.5	209.0	安山岩	定角式 刃部は表裏から研ぎ出す ハマグリ刃 使用痕	表土	PL167
Q 404	磨製石斧	(6.9)	3.8	1.3	41.6	ホルンフェルス	新形 表裏面研磨 両側縁微細な敲打痕 刃部は片面を研ぎ出す 平刃	表土	
Q 405	磨製石斧	(6.4)	4.1	1.9	83.0	緑色岩	定角式 側縁に弱い稜 基部欠損 刃部は表裏から研ぎ出す ハマグリ刃	表土	
Q 406	磨製石斧	8.3	3.5	1.8	81.2	変質閃緑斑岩	小型 全面研磨 刃部は表裏から研ぎ出す (接合資料)	表土	PL169
Q 407	磨製石斧	(7.3)	4.0	2.4	(131.3)	砂岩	定角式 全面研磨 側縁に稜 刃部欠損	表土	
Q 408	磨製石斧	(9.2)	(4.4)	2.7	(183.7)	砂岩	定角式 全面研磨 側縁に稜 刃部欠損	表土	
Q 409	磨製石斧	(9.7)	(5.1)	(3.1)	(187.5)	角閃岩	定角式 全面研磨 側縁に稜 刃部欠損	表土	
Q 410	磨製石斧	12.1	5.8	2.2	143.8	砂岩	新形 表面自然面 裏面研磨 両側縁面縁的に研磨 刃部未成かり・仏状	表土	PL168
Q 411	磨製石斧 未成品	(10.4)	(5.6)	(3.3)	(230.1)	砂岩	表裏面に研磨痕 基部及び片側縁に微細な敲打痕 片側縁に弱い敲打痕 片側縁は仏状に研磨	表土	PL171 原石の再利用
Q 412	石皿	(15.6)	(17.7)	10.3	(397.9)	砂岩	表面皿状に研磨 凹み径2か所 裏面平頂な研磨痕 凹み径1か所	表土	PL180
Q 413	敲石	5.8	4.3	2.2	73.8	チャート	側縁部に微細な敲打痕が走る	表土	PL174
Q 414	敲石	(5.8)	(4.6)	(2.8)	(75.4)	瑪瑙	楕円縁の周縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	表土	
Q 415	敲石	7.1	(4.6)	(5.6)	(201.2)	チャート	楕円縁の周縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	表土	PL174 板熱
Q 416	敲石	5.1	5.2	6.9	(235.1)	瑪瑙	楕円縁の周縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	表土	
Q 417	敲石	6.5	5.7	3.5	163.0	石英	円縁の側縁部に敲打痕・砥面をもつ	表土	PL174
Q 418	敲石	6.9	(5.4)	3.8	(222.1)	石英斑岩	楕円縁の周縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	表土	PL174 板熱
Q 419	敲石	6.0	6.2	4.1	214.4	黄色碧玉	円縁の周縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	表土	PL174
Q 420	敲石	(5.9)	6.4	5.0	(236.7)	アブライト	楕円縁の周縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	表土	PL174
Q 421	敲石	7.0	(6.7)	7.6	(466.5)	花崗岩	楕円縁の周縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	表土	PL174
Q 422	敲石	7.9	6.0	7.0	447.9	石英斑岩	楕円縁の周縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	表土	PL174
Q 423	敲石	8.0	9.0	5.4	533.0	チャート	楕円縁の周縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	表土	PL174
Q 424	敲石	8.7	3.4	6.1	217.5	石英	楕円縁の両端及び側縁部に敲打痕・砥面をもつ	表土	PL174
Q 425	敲石	7.7	5.1	3.3	(189.0)	ホルンフェルス	楕円縁の両端及び側縁部に敲打痕・砥面をもつ	表土	PL174 欠損 磨製石斧の再利用
Q 426	敲石	7.9	4.0	1.4	62.9	緑泥片岩	楕円縁の周縁部に多方向からの砥面により稜をもつ	表土	PL174
Q 427	敲石	6.5	3.8	3.2	102.8	砂岩	円縁の両端部に敲打痕・砥面をもつ	表土	PL174
Q 428	敲石	11.3	5.3	4.5	349.2	砂岩	楕円縁の両端及び側縁部に敲打痕・砥面をもつ	表土	PL174
Q 429	敲石	10.5	5.8	4.2	344.6	砂岩	円縁の片端部に敲打痕・砥面をもつ	表土	PL174 磨製石斧の再利用
Q 430	敲石	9.1	4.7	3.3	(215.1)	砂岩	円縁の両端部に敲打痕・砥面をもつ	表土	PL174 磨製石斧の再利用
Q 431	石錘	6.6	6.4	2.0	116.1	安山岩	扁平な自然縁の両端を敲打	表土	PL181
Q 432	砥石	4.9	1.0	1.0	9.5	頁岩	表裏面及び両側縁に砥面	表土	
Q 433	砥石	6.1	(3.0)	1.4	(25.1)	流紋岩	表裏面及び片側縁に砥面	表土	
Q 434	砥石	(6.4)	(2.4)	1.5	(37.3)	変質流紋岩	表裏面砥面	表土	
Q 435	砥石	(15.2)	(24.9)	8.1	(324.5)	アブライト	表面皿状 片側縁平頂な砥面	表土	PL180
Q 436	磨製石器	(2.0)	(3.0)	(1.0)	(4.4)	頁岩	肩縁部押圧剥離 両端部欠損	表土	PL160
Q 437	石棒	(10.3)	3.2	2.3	(93.2)	粘板岩	断面三角形 先端部微細な敲打によりくびれ 全面研磨 端部欠損	表土	
Q 438	加工痕のある銅片	4.5	3.0	1.4	20.4	黒色安山岩	先端に押圧剥離	表土	
Q 439	加工痕のある銅片	50.7	29.5	10.3	15.7	頁岩	両側縁押圧剥離	表土	

第4節 ま と め

1 はじめに

今回の調査で、竪穴建物跡38棟(縄文時代36・奈良時代2)、炉跡7か所(縄文時代)、陥し穴2基(縄文時代)、土坑669基(縄文時代)、炭窯跡1基(江戸時代以降)、溝跡2条(江戸時代以降)を確認した。このように、当遺跡には、人々の生活痕跡が縄文時代早期から江戸時代以降まで断続的に残されていた。時期が確定できた遺構は、奈良時代の竪穴建物跡2棟以外、すべて縄文時代中期のものであった。しかも、当遺跡は中期中葉から中期後葉にかけて、環状集落を形成している。遺物も縄文時代中期のものがほとんどであることから、本節では、縄文時代中期に焦点を当て、土器様相や集落変遷を概観することで、まとめとする。

2 縄文時代中期の土器様相について

(1) 中期の時間軸の設定について

本報告では、中期を5期区分している。初頭、前葉、中葉、後葉、末葉の5期区分であり、関東地方の土器型式では、五領ヶ台式→阿玉台Ⅰa・Ⅰb・Ⅱ式→阿玉台Ⅲ・Ⅳ式・加曾利EⅠ式→加曾利EⅡ・Ⅲ式→加曾利EⅣ式という5期である。

当遺跡の遺構・遺物の中心となる時期は、中期5期区分の前葉から後葉である。当財団では、吹野富美夫氏のつくばみらい市前田村遺跡¹⁾での時期細分を基に、茨城町宮後遺跡²⁾や大洗町千天遺跡³⁾などをすでに報告している。吹野氏の宮後遺跡における中期前葉から中期後葉の時期細分は、「阿玉台式を編年基準とし、一括土器と捉えられる共伴関係から、同時期の組成を明らかにしていく。」というものである。加曾利EⅠ式期については古段階・中段階・新段階の3段階に、加曾利EⅢ式期は古段階・新段階の2段階に分け、阿玉台Ⅰb式→阿玉台Ⅱ式→阿玉台Ⅲ式→阿玉台Ⅳ式→加曾利EⅠ式古段階→加曾利EⅠ式中段階→加曾利EⅠ式新段階→加曾利EⅡ式→加曾利EⅢ式古段階→加曾利EⅢ式新段階→加曾利EⅣ式という時間軸で考察している。

また、本県の縄文中期土器について長年研究している塚本師也氏は、小美玉市田木谷遺跡⁴⁾の中期土器を分析するにあたって、次のような基準で細分している。阿玉台式は西村編年を基準とし、加曾利EⅠ式については、吹野氏と同じで古・中・新の3段階に分けている。塚本氏は、加曾利EⅠ式3細分を「シンボジウム縄文中期後半の諸問題」(神奈川考古同人会1980)における「地域別報告(1)東京・埼玉における中期後半の各段階の様相」⁵⁾の第Ⅰ～Ⅲ段階の区分に準拠して細分するとし、「横S字文→渦巻文→渦巻文と楕円区画文の組み合わせ」という変化と、「貼付けた後沈線を沿わせない隆帯→沈線を沿わせる隆帯」とを考慮して分類している。地域は、那珂川下流域、土浦入り沿岸、高浜入り沿岸の三地域について考察しており、特に、那珂川下流域の宮後遺跡における分析は詳細で、当遺跡の該期土器分析の参考となるものである。

吹野氏と塚本氏の中期中葉の細分は、概ね一致しており、当遺跡の時間軸も二氏の変遷案を基に進める。なお、当遺跡の加曾利EⅡ式については、「磨消縄文の出現を加曾利EⅡ式」とする二氏とは異なり、大村裕氏の加曾利EⅡ式⁶⁾(一部)を採用する。大村氏の加曾利EⅡ式は、「山内清男による加曾利E式4細別の方針に従う立場」であり、大木8b式を「加曾利E式の中位の古さ」とし、大木9・10式を「加曾利E式の新しい方のもの」とする考え方である。塚本氏が田木谷遺跡出土土器の分析の中で準拠した「東

京・埼玉における中期後半の各段階の様相」の加曾利E 1 式を3段階に細分した新段階「加曾利E 式の渦巻文はさらに渦巻文と楕円区画文の組合せに変化する」を、当遺跡の加曾利E 2 式とする。したがって、当遺跡における加曾利E 1 式の3細別は、田木谷遺跡の加曾利E 1 式中段階の「加曾利E 様式の渦巻文が確立する段階」を2分して3細分としたものである。また、加曾利E 3 式については、口縁部の文様帯の在り方から古段階と新段階の2時期に分ける。これらをまとめ、当遺跡の時間軸を箇条書きすると、阿玉台I b 式→阿玉台II 式→阿玉台III 式→阿玉台IV 式→加曾利E 1 式古段階→加曾利E 1 式中段階（田木谷E 1 式中段階古）→加曾利E 1 式新段階（田木谷E 1 式中段階新）→加曾利E 2 式（大村加曾利E 2 式の一部）→加曾利E 3 式古段階→加曾利E 3 式新段階の10 時期となる。大木式との対応関係は、大木7 b 式が阿玉台I a・I b・II 式、大木8 a 式が阿玉台III・IV 式、加曾利E 1 式古段階、大木8 b 式が加曾利E 1 式中段階・新段階、加曾利E 2 式、大木9 式が加曾利E 3 式古段階・新段階である。

(2) 中期前葉から後葉にかけての土器様相について

当遺跡で詳細な時期が決定できた縄文時代の遺構は、竪穴建物跡36棟、炉跡7か所、陥し穴2基、土坑295基である。時期は、阿玉台I b 式期から加曾利E 3 式期新段階までの10 時期に細分される。ここでは、それぞれの時期の土器様相を述べる。

阿玉台I b 式期

第39・224・292・390・645号土坑出土の土器群が該当する。

いずれの資料も小片であり、詳しい様相は不明である。本時期の土器群は無文地で平縁のものが多いが、波状口縁のものもある。口縁部に扇状把手や断面三角形の隆起線による区画文が見られるものもある。隆起線に沿って1列の有節沈線文（角押文）や押圧されている厚みのある貼付文が施されることも、本時期の特徴である。胴部片では、鬚状瓦痕文をもつものがある。縄文地にY字状の隆帯が垂下している土器は、県北部や東北地方南部の土器の影響と思われる。

阿玉台II 式期（第641図）

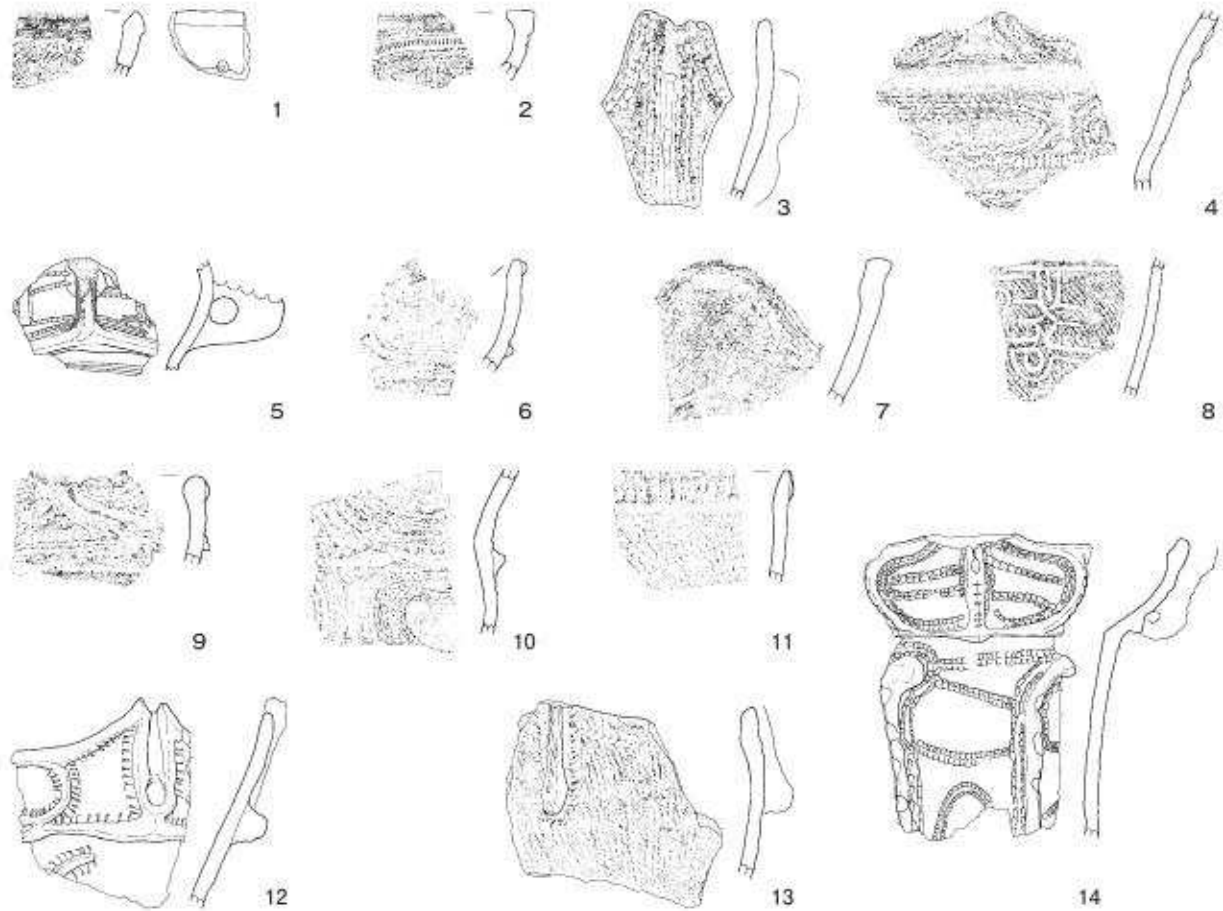
第95・238号土坑出土の土器などを標識とし、そのほか、第6・37号竪穴建物跡、第16・88・110・116・126・169・193・302・369・380・578・686号土坑出土の土器群が該当する。

本時期の土器群は、無文地で平縁のものもあるが、波状口縁を呈するものが多い。第641図3・7・12・14のように、波状口縁を呈し、厚みのある隆帯に沿って、半截竹管を斜めに割いた工具で複列の有節沈線文を施していることが特徴である。口縁部文様帯は、隆帯による区画文をもつものが多く、頸部文様帯はもつものもたないものがある。14は胴部に指頭押圧されている隆帯が垂下し、隆帯間に弧状の複列の有節沈線が施されている。

第116・193号土坑からは、口頸部に地文の縄文上に有節沈線による文様が施されている土器が出土しており、これらは県北地域の諏訪式土器⁷⁾や東北地方南部の七郎内II 群土器⁸⁾である。また、2のような連続爪形文（キャタピラ文）が施される土器は、勝坂式との関連が考えられる。本時期は、複列の有節沈線文施文に代表される阿玉台II 式土器を主体とし、一部、県北部の諏訪式や東北地方南部の七郎内II 群土器、千葉県方面からの勝坂式が客体として存在する時期である。

このような状況は、茨城町宮後遺跡においても確認されている。宮後遺跡第6号土坑⁹⁾（茨城町教育委員会調査）・第383号土坑例である。これらの土坑からは、無文地に隆起線に沿って1列や2列の有節沈線文が施されている阿玉台II 式を主体とし、三角形区画の隆帯貼付部に連続爪形文が施されている勝坂式

(新道式系) や口頸部の上位に有節沈線文が施され、胴部に相對弧文やX字状の有節沈線文が施されている諏訪式が伴出している。第383号土坑からは、波状口縁を呈し、無節繩文上に波状口縁頂部から蛇行隆帯が垂下している東北地方南部の土器と思われるものが確認されている。



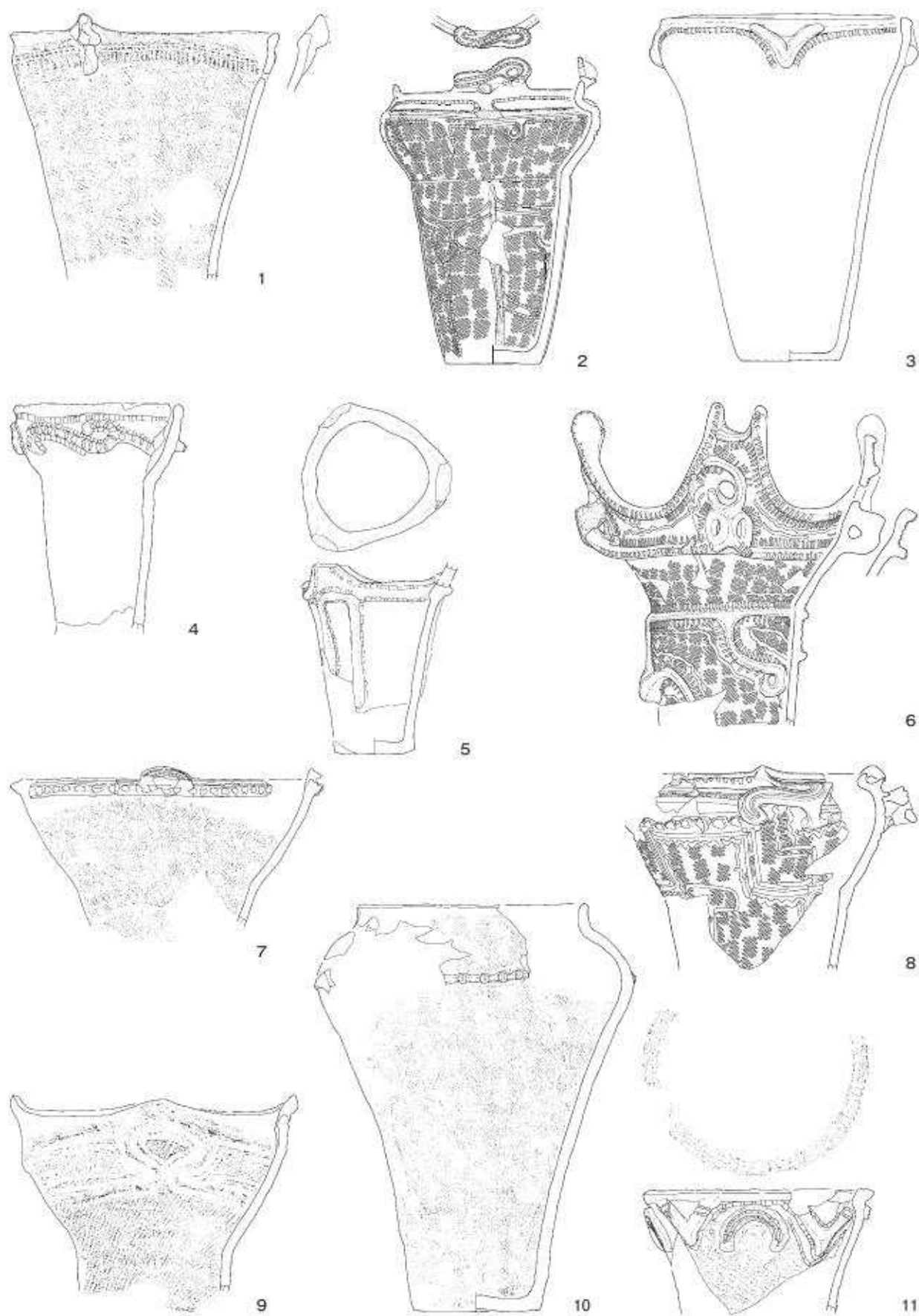
1～4：SK95 5～8：SK116 9・10：SK169 11～14：SK238 S=1/5

第641図 阿玉台Ⅱ式期の土器群

阿玉台Ⅲ式期 (第642図)

第68・211・281号土坑出土の土器などを標識とし、そのほか、第1B・8・11・25号竪穴建物跡、第1・6・8・10・63・87・112・114・171・180・182・209・216・336・346・347・377・386・415・518・541・564号土坑出土の土器群が該当する。

この時期の阿玉台式は、地文が無文から縄文に変わる時期であり、無文地のものと縄文地のものの割合はほぼ半々である。第642図6のような有文のものは、板状で大型化した大波状口縁と呼ばれる口縁形態をとるものが多くなる。6には眼鏡状把手もみられる。本時期の土器群のほとんどに、隆帯に沿って連続爪形文や有節沈線文が施されている。平縁のものでは、3・4のように厚みのある隆帯でV字状や横S字状などの貼付文をもつものが多い。貼付文上には、キザミ目が施されていたり、押圧されたりしている。4は無文地で、口縁に沿って連続爪形文が一巡し、横S字状の隆帯上にはキザミ目が、隆帯貼付部には連続爪形文が施されているものである。本時期が、横S字状貼付文の出現期と考えられる。



1~3 : SK68 4・5 : SK211 6 : SK182 7~11 : SK281 S=1/6

第642図 阿玉台Ⅲ式期の土器群

第 68 号土坑出土の 2 は、短く外傾する口縁上位を無文とし、強く内傾する位置に有節沈線による楕円形区画文が、内彎する口頸部の上位には有節沈線による縦状の文様や渦巻文が施されている。口頸部の下半部は、地文の縄文のほかに文様はみられない。口頸部と胴部は 1 本の有節沈線文で区画される。胴部は、垂下する隆帯で 4 分割されている。隆帯間には、有節沈線による X 字状文から変化した弧状文や渦巻文が施されている。2 の土器にみられる特徴は、まさに諏訪式そのものであり、文様構成や胎土から搬入品と思われる。同土坑から出土した 1 は、口縁部に押圧された貼付文を有し、口縁に沿って貼られた隆帯下に有節沈線文と連続爪形文が、胴部には無節縄文が縞状に施されているものである。隆帯下に一巡する有節沈線文、胴部の無節縄文の縞状施文など、東北地方南部の影響が感じられるものである。3 は口縁に沿って V 字状の貼付文を有し、隆帯の貼付部に連続爪形文が施されているもので、阿玉台Ⅲ式に比定される。第 281 号土坑出土の 10 は、口縁部は無文で、直立気味に立ち上がり、肩が張る形状である。胴部には縞状に無節縄文が施され、肩部に押圧隆起線が貼られているものである。同土坑から出土している 7 も、口縁に沿って指頭押圧されている隆起線が貼られ、口唇頂部は平坦で、平行する有節沈線文が施されている。この土器も口縁以下に無節縄文が施されている。9 も同土坑からの出土で、口唇頂部が平坦で平行する有節沈線文が施されている。第 281 号土坑例は、深鉢の形状や口唇頂部の手法、無節の縄文原体などに、東北地方南部の影響が強く感じられる。このように、本時期は阿玉台式と諏訪式や東北地方南部の影響がみられる土器群が約半数ずつで、組成を成す時期と考えられる。

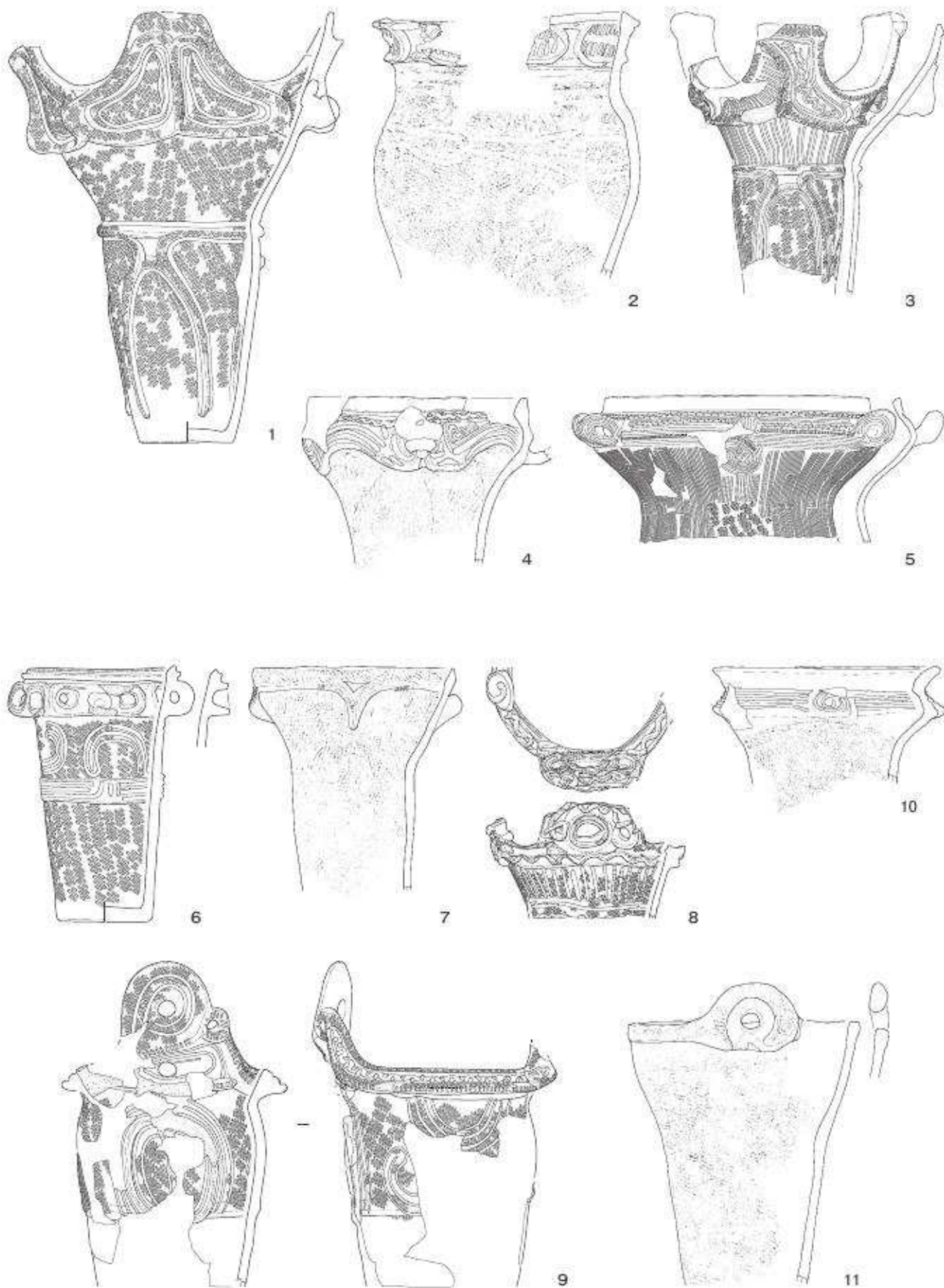
当遺跡周辺の宮後遺跡においても、第 362 号土坑から阿玉台式と諏訪式が、第 387 号土坑から阿玉台式と口縁部に横 S 字状の貼付文と隆帯区画文があり、頸部文様帯に文様は施されず、地文の縄文だけが見られる諏訪式系統の坪井上型深鉢³⁰⁾や、胴部に無節縄文を縞状に施文する東北地方南部の土器がそれぞれ伴出しており、当遺跡の様相と似た状況が確認できる。

阿玉台Ⅳ式期 (第 643 図)

第 285・543・657・673 号土坑出土の土器などを標識とし、そのほか、第 1A・16～18・21・23・30・31 号 竪穴建物跡、第 5・15・19・46・49・65・72・85・91・117・130・131・146・157・202・206・247・282・295・300・312・316・340・359・366・368・388・404・491・546・581・642・643・663・676・682 号土坑出土の土器群が該当する。

この時期の阿玉台式は、板状の大波状口縁のものと平縁のものに大別できる。大波状口縁を呈する第 643 図 1・3 は、口縁部に厚みのある縄文施文の隆帯による区画をもち、隆帯貼付部に半截竹管文が伴っているものである。1 は、頸部に地文以外の文様は見られず、胴部とは隆帯で区画し、逆 U 字状の隆帯が貼られている。3 は口縁部の区画内や頸部に半截竹管文が充填されているもので、この時期にまれにみられる手法である。平縁や小波状を呈するものは地文以外に文様がみられないことが多いが、7 や 11 は口縁に沿って縄文施文の隆帯が貼られ、V 字状の貼付文や環状把手が伴っている。

当遺跡では、阿玉台式期に搬入された周辺地域の土器や周辺地域の影響をみられる土器が加わって、土器組成が成されている。第 285 号土坑から出土の 2 は、隆帯区画内を深い爪形文で充填し、胴部には縄文上にやや太目の沈線で楕円形文や渦巻文を描いているもので、大木 8 a 式と思われる。6～8 は、第 657 号土坑からの出土である。6 は、口唇部に深い沈線が周回し、口縁部に背割れ隆帯による眼鏡状把手を有し、胴部上半部に 3 本組の沈線による弧状文・蕨手文が施されているものである。器形や眼鏡状把手から、群馬県方面の影響が考えられる土器である。8 は、3 孔をもつ鶏冠状把手を有し、口唇頂部に波状文が施されている。口縁部文様帯は幅が狭く、波状文が貼られている。頸部は、地文の縄文上に縦位の沈線文・有



1・2 : SK285 3~5 : SK543 6~8 : SK657 9~11 : SK673 S=1/6 (3・5はS=1/8)

第643図 阿玉台IV式期の土器群

節沈線文を充填している。口唇部の施文・把手・隆帯・沈線による文様などから大木8a式に比定される。前時期まで存在していた諏訪式や七郎内Ⅱ群土器はほとんど姿を消しているようである。

第543号土坑出土の5は、洋襟状口縁で眼鏡状把手を持ち、幅の狭い口縁部文様帯には交互刺突文と沈線による長方形の区画文が見られ、区画内を交互刺突文で充填している。胴部には、櫛歯状工具による条線文が施されている。9～11は第673号土坑からの出土で、9にはいくつかの型式の影響が認められる。双峰2孔の把手、縄文施文の厚みのある隆帯は阿玉台式の特徴で、胴部上半部の文様帯、重弧文、重楕円形文などは勝坂式の特徴である。また、口縁部文様帯は幅が狭く、隆帯区画間を交互刺突文で充填している特徴は中峠式¹¹⁾である。10の口縁部上半部は無文で外反し、内傾する口縁部下半部に沈線による横走文と渦巻文が施されているもので、無文の口縁部上半部や区画が見られない幅の狭い口縁部文様帯であることなど、勝坂式の影響が強い中峠式系統の土器である。

これらの大木8a式や中峠式は、いずれも縄文施文の隆帯による文様を持つ阿玉台Ⅳ式と伴出しており、本時期のものであることが裏付けられる。このように、当遺跡の本時期の土器様相は阿玉台式の占める割合が前時期より小さくなり、南から勝坂式・中峠式が、北から大木8a式の進出が目立つ時期である。

当遺跡のような阿玉台Ⅳ式と大木8a式・勝坂式・中峠式との伴出は、周辺地域では石岡市東田中遺跡第70号土坑¹²⁾、大洗町千天遺跡第49号土坑、鹿嶋市鍛冶台遺跡第7号土坑¹³⁾などに見られ、千天遺跡第49号土坑からは、馬高式も出土している。これらの遺跡においても、阿玉台式は南からの勝坂式・中峠式や北からの大木8a式の進出に押され、客体的な存在となっている。

加曾利E1式期古段階（第644・645図）

第14号竪穴建物跡、第322・355・550・585号土坑出土の土器などを標識とし、そのほか、第5・7・12・32・36号竪穴建物跡、第3・74・75・76・101・120～124・129・150・164・165・213・235・260・267・272・291・304・309・310・323・325・332・342・358・383・395・398・409・464・522・532・539・549・567・586・600・603～605・629・647・662・666・677・690・711号土坑出土の土器群が該当する。

本段階は阿玉台式が終焉し、加曾利E1式の成立する時期である。第644図1～4は第322号土坑出土で、1～3が加曾利E1式である。1は平縁で、口縁に沿う縄文施文の背割れ隆帯と同隆帯による横長のS字状文で口縁部を区画し、口縁に沿って交互刺突文を伴う小波状文が一巡し、区画内は沈線による楕円形文が施されている。頸部以下は縦位の熱糸文を地文としており、胴部上位には横位の沈線文が施されている。2は背割れ隆帯による中空把手を有し、口縁部は内彎し、口唇端部で外傾している。胴部中位は、やや膨らみをもつ。口縁部には厚みのある隆帯が貼られ、把手部で背割れ隆帯となり、中空把手としている。口縁部は地文の縄文を磨消し、無文とすることで区画している。口縁部には一部にキザミ目の施文や蛇行する隆帯貼付が見られ、把手は橋状となっている。頸部以下には地文の縄文だけが施されている。3は環状把手を有し、口唇端部は肥厚させて内傾し、角状工具で押押し、背割れ隆帯を作出している。口縁部は背割れ隆帯で区画し、区画内は同隆帯により波状文を施した後、角状工具による縦位の沈線文を充填している。

5～7は第355号土坑からの出土で、6・7は、加曾利E1式の特徴の一つである口頸部が膨らむ、いわゆるキャリバー形土器である。7の文様帯は、口縁部と頸部に分割されている。口縁部は、深い沈線文を伴う背割れ隆帯で把手部を巡って、区画文を構成している。区画内は指ナデにより無文である。頸部は、地文の縄文上に断面半円状の隆帯で胴部と区画し、同じ隆帯による波状文が巡っている。6は口唇部がくの字に外傾し、口頸部は内彎している。口縁に沿って2条の隆帯が貼られ、隆帯間と隆帯貼付部は押圧されて凹んでいる。隆帯下全面に櫛歯状工具による縦位の波状文が施されている。5の口唇部は平坦で、並

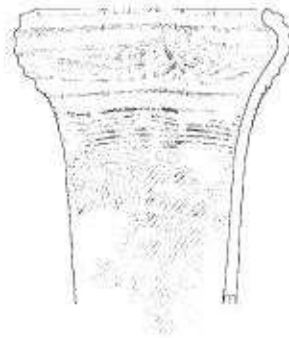


1~4 : SK322 5~7 : SK355 8~13 : SK550 S=1/6

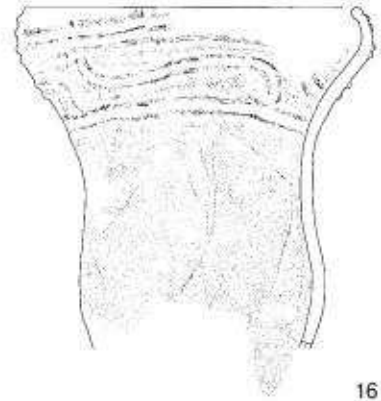
第644図 加曾利E1式期古段階の土器群(1)



14



15



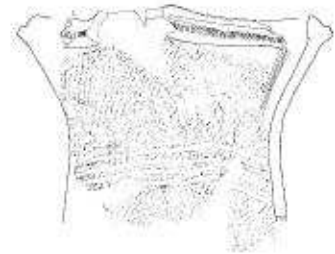
16



17



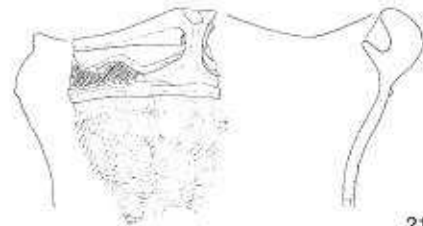
18



19



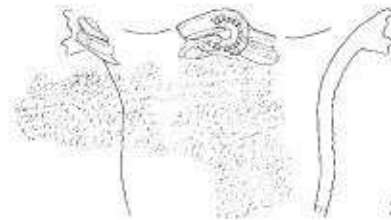
20



21



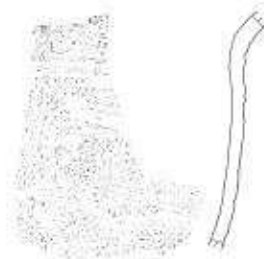
22



23



24



25

14 ~ 25 : S I 14 S = 1 / 6

第 645 図 加曾利 E 1 式期古段階の土器群 (2)

列する有節沈線文が施されている。口縁に沿ってキザミ目を有する隆帯が周回し、さらに、横J字状の隆帯が貼付されている。隆帯下には縞状に縄文が施されている。5は、平坦な口唇部に有節沈線文が施されていること、胴部に縞状に縄文が施文されていることなどから大木8a式に比定され、本土坑例は加曾利E1式古段階に位置付けられる。

7は、加曾利E1式成立を考える上で重要な土器である。大木8a式、中峠式、勝坂式系土器などが阿玉台IV式土器と伴出していることから、阿玉台IV式期の例とした鍛冶台遺跡第7号土坑や千天遺跡第49号土坑からは、口縁部文様帯の幅が狭く、隆帯による波状文が巡る大木8a式土器が出土している。この波状文を有する土器に中空把手が採用され、把手と把手を繋ぐ背割れ隆帯の区画を作ると、7のように口縁部文様帯の上にもう一つの文様帯が重なり、口頸部の大きな文様帯が形成されるのである。7の胴部には地文の縄文だけがみられる。胴部に懸垂文以外の文様が施されておらず、口縁部に中空把手が採用され、文様帯が重なる口頸部の文様帯の構成となるものは、石岡市東大橋原遺跡第A-J1住居跡例¹⁴⁾、宮後遺跡第1161・1166号土坑例、鍛冶台遺跡第229号土坑例、土浦市東台遺跡第153号土坑例¹⁵⁾などにあり、いずれも本段階の土器群と伴出している。7は、『日本先史土器図譜』図版80-2の土浦近傍発見とされる土器¹⁶⁾にも近似し、この類型は古くから知られ、「加曾利E式の古い段階」のものとして有名である。大木8a式の中空把手の採用が、口縁部の上半部に一つの文様帯を構成するという点では、8・11の第550号土坑例の大木8a式についても言えることである。この口頸部に、地文の縄文だけで胴部文様帯をもたない勝坂式・中峠式系土器の胴部が合体して、この類型が成立するのであろう。阿玉台IV式期の土浦市御霊遺跡第1号土坑例¹⁷⁾にみられた中峠遺跡0地点型と阿玉台IV式の折衷型の本段階版で、大木8a式と勝坂式・中峠式の折衷土器である。

8～13は第550号土坑からの出土で、10が加曾利E1式である。10は、地文の縄文上に2条の隆帯で口縁部を区画し、区画内に同隆帯による横走文と波状文が施されているものである。第322・550号土坑からみる加曾利E1式古段階の土器は、中空や環状の把手を有し、口縁部文様帯はさほど広くない。口縁部文様帯がさほど広くないものには、10のほかにも第322号土坑出土の2があり、2の口縁部と頸部の境界には隆帯の区画がなく、強い屈曲で境界としている。本段階の口縁部文様は、隆帯による波状文や横S字文などで、隆帯の断面形は蒲鉾状のものや、半円状で細めのもの、背割れのものがあり、沈線や有節沈線を伴っていないことに特徴がある。頸部以下には、地文の縄文だけが施されているものも多い。このような口縁部だけに文様帯があり、頸部以下に文様帯をもたないものは、阿玉台式や大木8a式にはなく、勝坂式の一部や中峠式にあり、その系統が当遺跡の加曾利E1式の成立に関わっていると考えられる。隆帯に沈線が伴わないことや背割れ隆帯の登場なども、阿玉台IV式にはみられない新しい要素である。背割れ隆帯による文様を有するものは、口縁部文様帯を縦位の沈線文で充填しているものがあり、千葉県方面からの影響と思われる。

第645図は、多量に土器が投棄されていた第14号竪穴建物跡出土の加曾利E1式期古段階の土器で、平縁を呈するものや小波状口縁を呈するもの12点を取り上げている。これらの特徴を列記すると、口縁部文様帯は2条の隆帯や背割れ隆帯で区画され、幅はさほど広くないこと、口縁部文様帯における縦の区画はなく、文様は背割れ隆帯や細めの隆帯によるもので、横長のS字状文、クランク文、小波状文、楕円形文、渦巻文などが描出されていること、隆帯に沿う沈線や有節沈線はみられないことなどとなる。これらの口縁部にみられる特徴は、前述の第322・550号土坑出土例の特徴とほぼ同じであるが、第14号竪穴建物跡出土の加曾利E1式の特徴は、頸部文様帯や胴部文様帯にある。第322・550号土坑例では頸部以

下が一つの文様帯となっており、地文の縄文以外の文様はみられないが、第14号竪穴建物跡例の12点の土器には、頸部と胴部を3～5本の横走沈線文で区画するという特徴がある。この区画により、16を除く11点の土器の胴部は頸部文様帯と胴部文様帯に分割される。頸部文様は、地文の縄文以外に文様が見られないもの(17・19・20・23・25)、頸部下位にだけ沈線文が施されているもの(14・21)、3～5本の横走沈線文が施されているもの(15・18・22)に分けられ、これらの特徴として、頸部は地文だけのものが多いことをあげることができる。このような「口縁部文様帯が狭く、縄文だけが施されている頸部文様帯をもち、胴部と何本かの沈線文で区画されている土器群」を常陸大宮市坪井上遺跡第251号土坑例を標識として「坪井上型深鉢」と呼んでおり、第14号竪穴建物跡例の11点の土器は坪井上型深鉢の系統と考える。当遺跡の坪井上型深鉢の胴部には、渦巻文、弧状文、波状文、横走文などの沈線による文様が盛んに施されており、大木8a式の影響を強く受けた坪井上型深鉢系統のものが、当地へ入ってきたことがうかがえる。第14号竪穴建物跡例は点数が多かったことも合わせて、坪井上型深鉢系統の土器群が本段階まで残ることや、本段階に県北部との関わりも大きかったことを示している事例と考えられる。

本段階の土器組成をみると、キャリバー形土器が出現し、文様帯が口縁(頸)部文様帯と胴(体)部文様帯に明瞭に分かれる加曾利E1式土器のほか、いくつかの系統の土器が出土している。第14号竪穴建物跡例に代表される坪井上型深鉢系統の土器群、第644図8・11などの中空把手をもち、胴部に沈線文が施される大木8a式、4などの口縁部文様帯が狭く、口縁に沿って交互刺突文が施され、縦の区画を持たない中時遺跡0地点型深鉢、9などの環状把手と中空把手をもち、口唇部に細条線文が施され、口縁部文様帯は狭く、沈線による楕円形文や弧状文が施されている中時遺跡0地点型深鉢系統と大木8a式の折衷土器、13の胴部上半部に文様帯をもち、眼鏡状把手から重層する隆帯と沈線による楕円形文が施されている勝坂式系統の土器、12の平縁で口縁に沿って縄文施文の隆帯が一巡する阿玉台式系統の土器などである。このように、本段階は様々な系統の土器群が混在して組成を成している段階である。

加曾利E1式期中段階(第646図)

第64・203・511・588号土坑出土の土器などを標識とし、そのほか、第9・13・20・28・35号竪穴建物跡、第35・41・96・151・199～201・204・205・245・266・286・308・331・399・424・428・432・536・548・558・574・582・583・602・626・628・635・650・652・680・687・710・716・723・729号土坑から出土の土器群が該当する。

第646図が当遺跡における本時期の土器で、代表的な土器を解説し、特徴を述べる。1は、太沈線を伴う中空把手と太沈線を伴う筒形の中空把手を有し、口唇部には中空把手へ繋がる指頭押圧による太沈線が周回している。口頸部は地文の縄文上に、中央部を強く押圧した隆帯が貼られ、文様帯が区画されている。その後、同隆帯により上半部と下半部に文様帯が分割され、上半部の区画端部には渦巻文を作出している。さらに、口頸部の全体を縦位の沈線文で充填している。胴部には、地文の縄文上にほぼ等間隔に2～3本の沈線による懸垂文が施されている。第203号土坑例は、1と似た文様構成を採っている。口唇部が凹んでいること、中央部を強く押圧した2条の隆帯となる背割れ隆帯で口頸部文様帯を区画していること、口頸部文様帯が上下に分割されていること、上半部を区画文とし、区画端部に渦状の文様を施していることなどである。1や第203号土坑例の文様帯の構成は、前段階の第355号土坑例と似ているが、頸部の文様帯(口頸部文様帯下半部)に文様を持たず、頸部には地文や充填文だけが施されている。これは、次の段階にみられる頸部無文帯へ繋がるものと考えられる。第511号土坑例は、口縁部は無文で外反し、口縁部下位には交互刺突文が周回している。やや幅広で膨らみをもつ頸部は、背割れ隆帯により区画されている。頸



第 646 図 加曾利 E 1 式期中段階の土器群

部には、地文の縄文上に背割れ隆帯による円形文と弧状文が交互に連結して貼られ、接点は突起状になっている。第588号土坑から出土した6～10には、次のような特徴がある。口縁部には、中空把手をもつもの、波状口縁のもの、平縁のものがある。口縁部文様帯は頸部を含む口頸部文様帯と呼ぶべきものとなっており、前時期より幅がやや広がっている。このことに関連して、頸部文様帯をもつものはない。口縁部文様帯を縦に区画するものが3点あり、口縁部文様としてはクランク文、波状文、渦巻文、弧状文、剣先文などが施され、隆帯は背割れのものが多い。隆帯の貼付部に沈線を伴うものも多くなっている。胴部の文様は、地文だけのものと沈線による懸垂文が施されるものがあるなどである。

また、第574号土坑からは、化粧土を貼り、赤彩された筒形の有孔鋳付土器が、第286号土坑からは、口縁部が無文で外反し、胴部と沈線を伴う鎖状の隆帯で区画し、胴部に鱗状の文様がみられる隆帯を垂下させている大木8b式が出土している。

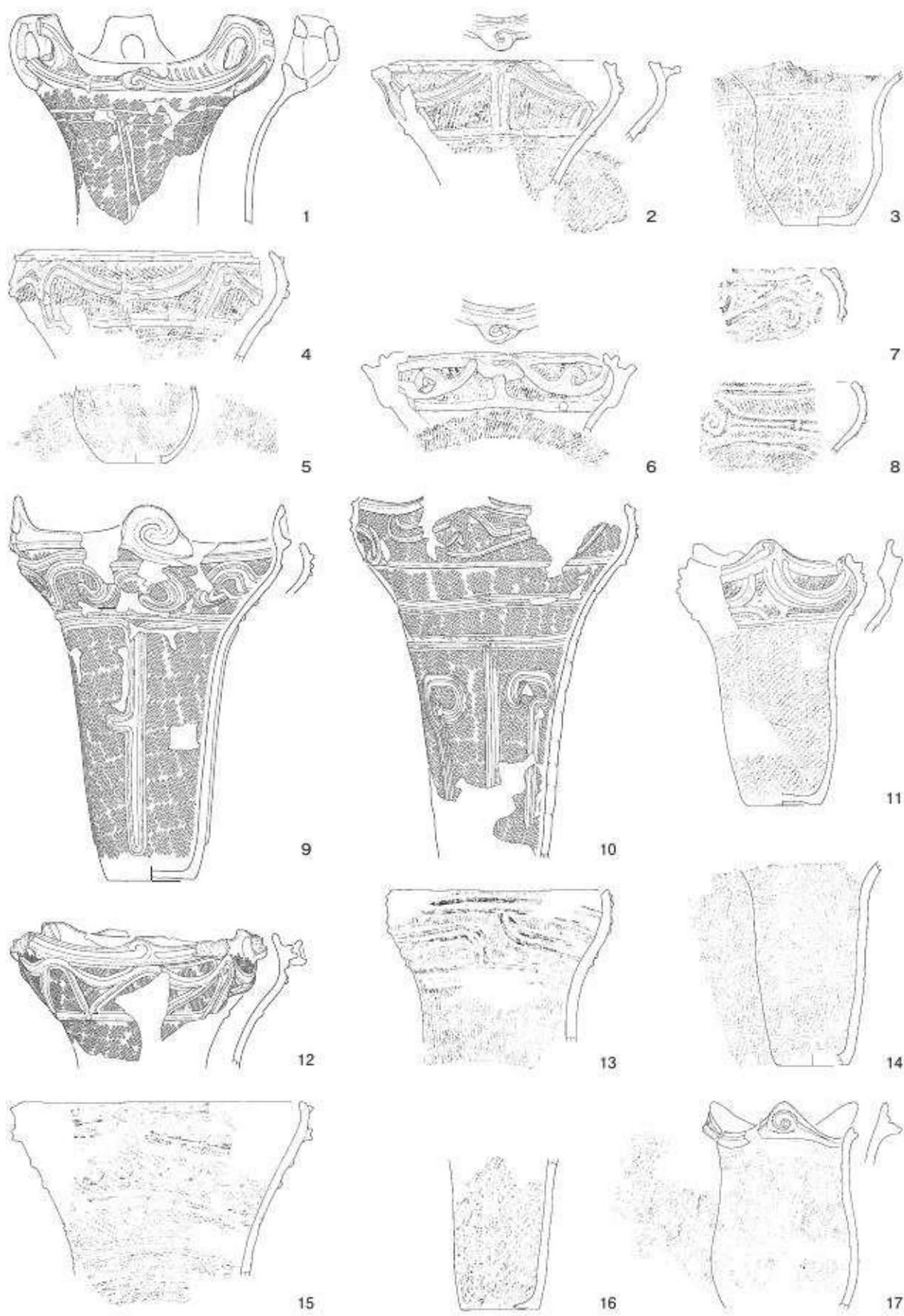
本段階の加曾利E1式は様々な型式の混合した組成から、口頸部が膨らむいわゆるキャリパー形深鉢を主体とする組成となり、一挙に斉一化が進んだものとなっている。阿玉台式や勝坂式などの影響を残したものはほとんど姿を消し、文様帯は口頸部と胴部の二つに分かれる。口頸部に背割れ隆帯による文様を、胴部に沈線による懸垂文を用いることが多くなっているのである。一方、大木8b式ばかりでなく、1・2のように口頸部の区画内を沈線文で充填しているものや、洋襟状口縁に交互刺突文を伴い、頸部文様として円文や弧状文が連続しているものは中峠遺跡6次1住型深鉢や子和清水型深鉢¹⁵⁾の系統のものと考えられ、千葉県方面との交流も続いている。このような状況は、宮後遺跡、東田中遺跡、鍛冶台遺跡などでも確認されている。

加曾利E1式期新段階（第647図）

第4号壜穴建物跡、第104・314・577号土坑出土の土器などを標識とし、そのほか、第19・33号壜穴建物跡、第32・51・77・84・174・181・190・195・198・208・227・231・283・299・315・354・367・371・401・492・542・544・559・595・596・630・640・644・655・665・672・715号土坑出土の土器群が該当する。

本段階の加曾利E1式はさらに斉一化が進む。中空把手、環状把手、眼鏡状把手をもつものは少なくなり、口縁は小波状を呈するものや平縁を呈するものを中心となる。口唇部は指頭押圧されたり、沈線により凹んでいるものが多い。隆帯は背割れ隆帯の系統のもので、中央部にやや深い沈線が施され、2本組に見えるものも多い。ほとんどの隆帯貼付部には、沈線が伴っている。中型土器の口縁部文様帯は頸部を含むものは少なくなり、幅が均一化する。口頸部文様帯が上下に分割しているものも、ほとんどなくなる。隆帯による弧状文や波状文が口縁や頸部の隆帯に達することによる区画文や、波状文の端部が渦巻状となり区画文となるものも出現してくる。

第647図1～8は、第4号壜穴建物跡出土である。2は平縁で、背割れ隆帯による弧状文による区画文がみられるものである。弧状文と縦区画の交点は突起状を呈し、頂部に渦巻文が施されている。口縁部の文様としては渦巻文が多くなり、クランク文、弧状文などがその次に多い。胴部の文様は地文だけのものもあるが、地文の縄文上に沈線による波状懸垂文が施されているものが前段階より多くなる。3は、頸部を無文帯とし、胴部と沈線による3本の横走文で区画し、胴部には沈線による蛇行文と長方形の文様が施されているものである。このような頸部を無文帯としているものは本段階から見られ、千葉県や埼玉県などでは本段階と次期のメルクマールとなっているが、当地域では、頸部に無文帯を採用する割合は少ない。3は、胴部中央からやや下位が膨らむ形態であることや胴部の沈線文から、大木8b式に比定される。第577号土坑出土の14・17も、胴部に沈線による鱗状の文様が施されていることや、胴部下位が膨らみ、



1~8 : SI 4 9~17 : SK577 S=1/6

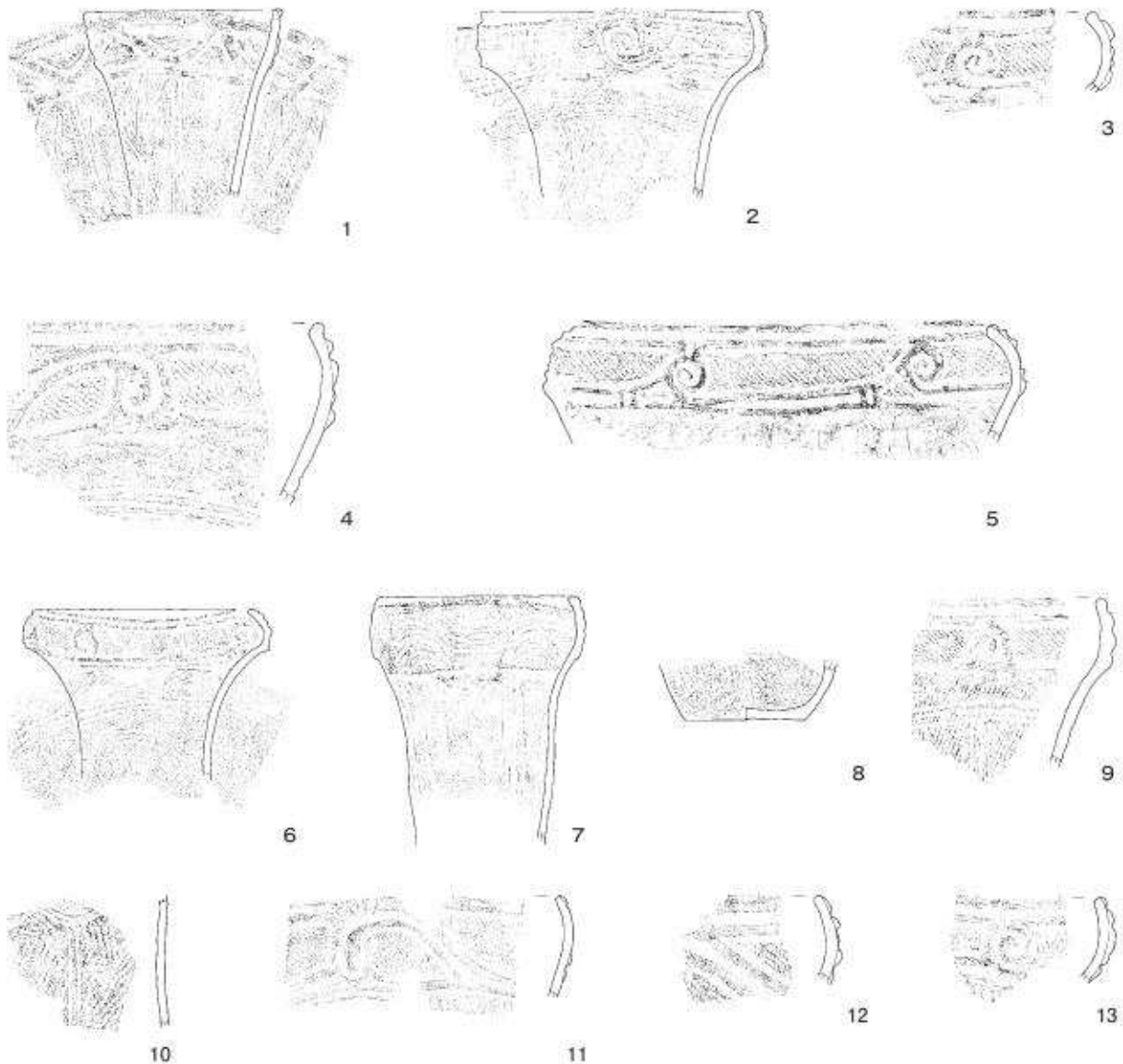
第 647 図 加曾利 E 1 式期新段階の土器群

胴部全体に沈線による垂下文や曲線文などが施されていることから、大木8b式に比定される。

一方、13は第577号土坑出土のもので、口縁部に沈線を伴う背割れ隆帯によるクランク文が施され、地文を燃糸文としているものである。クランク文や地文の燃糸文は、千葉県や埼玉県の土器にしばしば採り入れられており、その方面の影響と考える。第33号竪穴建物跡出土例は、平縁で頸部を無文帯としているものであるが、口縁部に区画文を採り入れながら、区画内を沈線文や刺突文で充填している。これは埼玉県方面などにみられる手法で、関東地方西部の影響を受けたものと考えられる。このように、当遺跡では本段階においても東北地方南部を中心に各地と交流していることがうかがえる。

加曾利E2式期（第648図）

第11・17・160・303号土坑出土の土器などを標識とし、そのほか、第22・24号竪穴建物跡、第7・30・47・73・78・80・93・105・162・175・229・311・317・343・350・364・370・379・444・456・467・468・499・517・576・631・641・651・664・671・689号土坑出土の土器群が該当する。



1 : SI 22 2・3 : SK11 4 : SK17 5 : SK160 6 : SK300 7~9 : SK303 10~13 : SK456 S = 1 / 6

第648図 加曾利E2式期の土器群

本時期の土器群は、波状口縁を呈するものはさらに少なくなり、ほとんどが平縁のものとなっている。口縁部文様帯の幅は、前段階より少し狭くなっていく。ほとんどの土器に沈線を伴う隆帯による区画文がみられ、区画端部に渦巻文を伴っている。この時期、この文様構成をもつものは関東地方一円に分布し、齊一化と広域化が進行し、地域差はほとんどなくなっている。当地域では、頸部を無文帯とするものは前時期と同様に存在するが少ない。第648図4～6などが、本時期の頸部を無文帯とする例である。

頸部と胴部の区画については、横走する沈線で区画するものと区画しないものがあり、沈線で区画するものが、少し多いようである。胴部には、地文の縄文上に沈線による懸垂文が施されることが多い。この時期の懸垂文は、3本単位が基本のようである。頸部と胴部を沈線で区画しているものは、胴部に沈線による曲線文などを施すものが多く、大木8b式の影響と思われる。この時期の大木8b式は、頸部を無文帯とするものは存在するが、沈線による懸垂文間はまだ磨消されておらず、大木式の編年では、この時期までを8b式と考える。6は、口縁部には沈線を伴う隆帯による渦巻文の見られる区画文をもち、頸部を無文帯としているものである。胴部とは3本の横走文で区画し、胴部には地文の縄文上に、3本組の沈線による懸垂文や大きな渦巻文が施されているもので、大木8b式の典型的なものである。大木8b式は、加曾利E1式中段階や加曾利E1式新段階においても出土している。このことから、大木8b式の幅は関東地方においては3段階に細別できそうである。本時期の大木8b式は、3段階細別で新段階となる。前述したように、山内清男氏は大木8b式を加曾利E式4細別で「加曾利E式中位の古さ」としている。これに相当するのは、大木8b式では3段階細別の新段階であり、大木8b式新段階並行のものを加曾利E2式とすべきと考える。

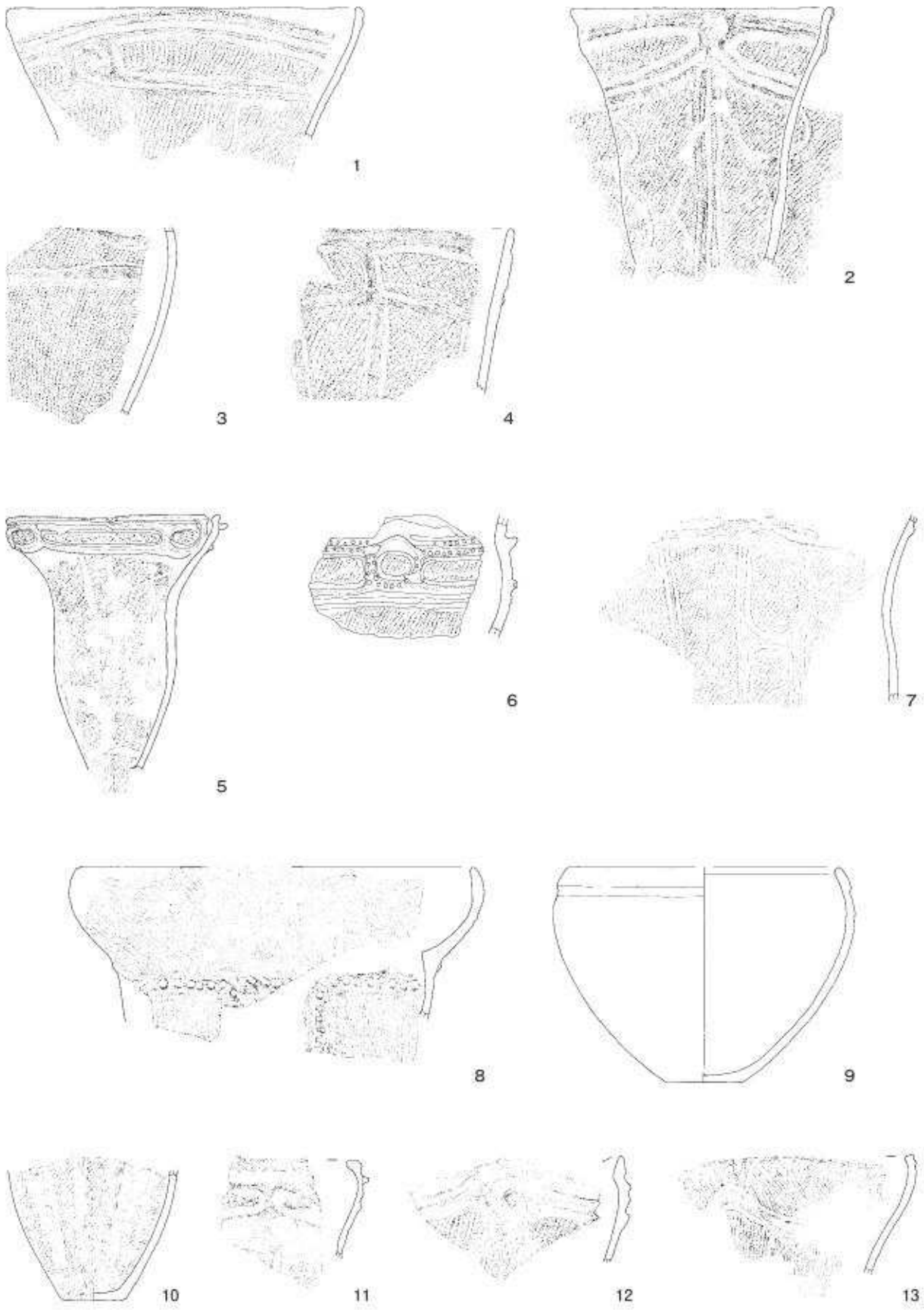
7の口縁部の文様は隆帯を用いず、沈線による弧状文を重層させ、文様を構成している。この沈線を重ねる文様構成は、前時期にもあり、埼玉県方面からの影響と考えられる。この土器と同じような文様構成をもつ土器は石川西遺跡第1号土坑例¹⁹⁾、東大橋原遺跡第A-J2号住居跡例などに見られる。石川西遺跡では、有孔鏝付土器と伴出し、関東地方西部からの影響が考えられる。また、東大橋原遺跡では、弧状文を重層させた土器の胴部文様は、懸垂文の一部が渦状になったり、鱗状になったりしている。この土器は、大木8b式との折衷土器となっており、本式と大木8b式との並行関係を知ることができる。

加曾利E3式期古段階（第649図）

第26号竪穴建物跡、第176・338・348号土坑出土の土器などを標識とし、そのほか、第27・34号竪穴建物跡、第31・38・40・43・45・50・152・212・301・305・307・313・320・333・345・349・387・443・451・455・504・547・553・555～557・584・591・593・622・634号土坑出土の土器群が該当する。

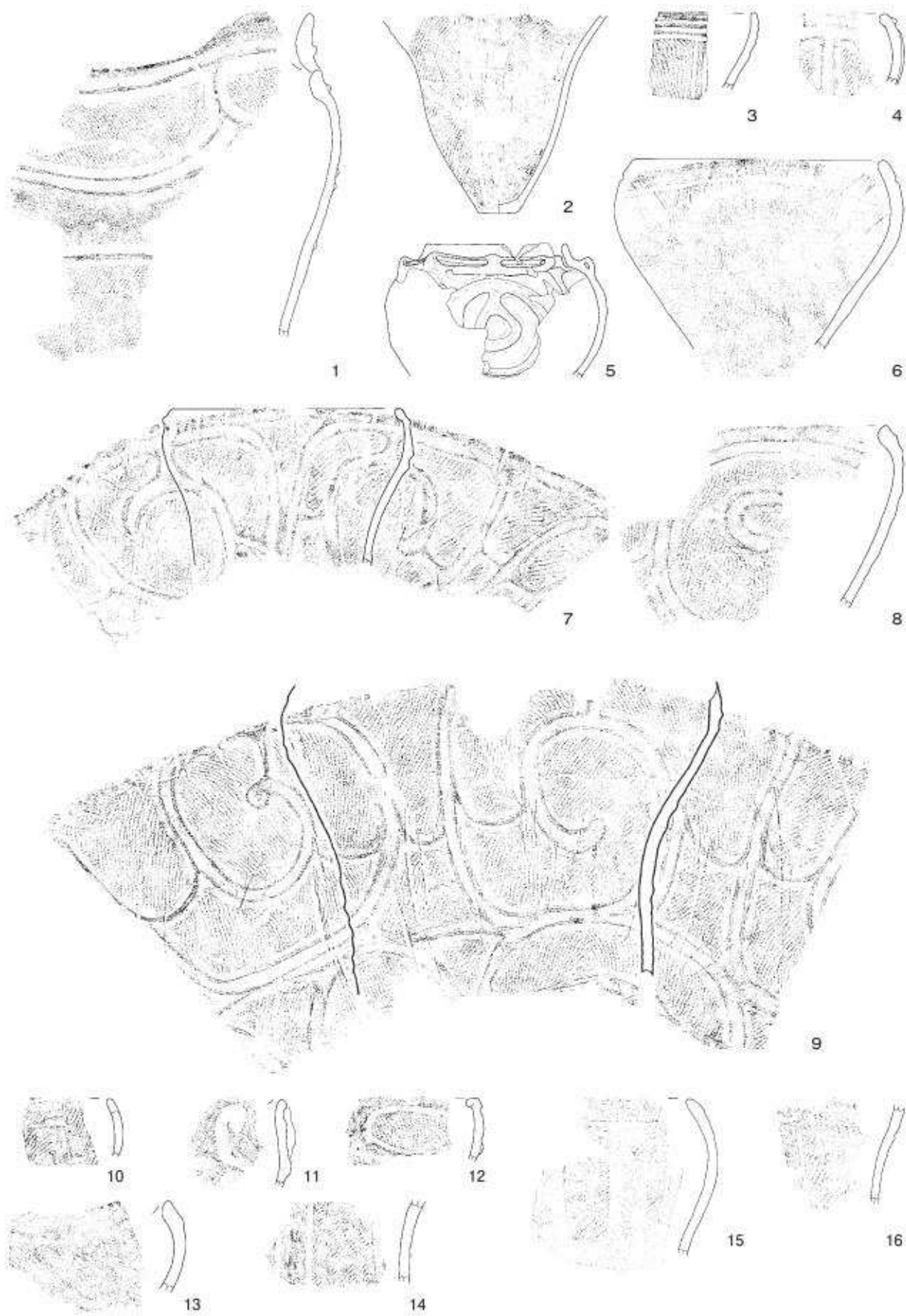
本段階の第一の特徴は、胴部の沈線による懸垂文間が磨消されることである。口縁は、波状を呈するものと平縁のものがある。口縁部文様帯の幅は、前時期よりさらに狭くなっている。口縁部の区画文に渦巻文をもつものが少なくなり、楕円形と円形の区画文を組み合わせたものがほとんどとなる。区画文は、太沈線文を伴う隆帯によって構成されている。胴部には沈線間が磨消される懸垂文をもつが、懸垂文は3本のものから2本のものとなっている。形状は口縁部に最大径をもち、底径が小さくなるものが多い。

第649図5～7は第348号土坑例である。5は口縁部に太沈線を伴う隆帯による楕円形と円形の区画文を有し、胴部にはやや幅広な沈線間が磨消される懸垂文をもつ本段階の典型的な土器である。6は隆帯上に刺突文が施され、7の磨消懸垂文はU字状のものと逆U字状が繋がった構成となっている。この刺突文や懸垂文の構成は、大木9式との関連と思われる。8～13は第593号土坑出土である。8は内彎する口頸部に斜行する条線文が施され、円形刺突文をもつ隆帯で胴部と区画している。胴部には同じ隆帯で垂下



1~4 : SK176 5~7 : SK348 8~13 : SK593 S = 1/6

第 649 図 加曾利 E 3 式期古段階の土器群



1 : SI 2 2~4 : SI 15 5~14 : SI 29 15 : SK537 16 : SK568 S = 1/6

第 650 図 加曾利 E 3 式期新段階の土器群

文がみられる。13は口縁に沿って2列の円形刺突文を施し、地文の縄文上に大振りな磨消連弧文が施されているものである。8は関東地方西部から長野県方面に分布する曾利式で、当遺跡においては第301・338号土坑からも出土しており、本段階の土器と伴出している。13のような磨消連弧文のみみられるものは、第348・584号土坑からも出土し、本段階においては、しばしば認められるものである。この磨消連弧文の土器は関東地方西部に多くみられるものであり、8の曾利式土器も関東地方西部からのものと考えられる。

このような、曾利式土器と本段階の土器の伴出は、石川西遺跡第1・2号竪穴建物跡で確認されている。また、第81号土坑などでは口縁に沿って2列の円形刺突文を有し、地文の捺糸文上に磨消連弧文を有する土器も出土しており、石川西遺跡における曾利式も関東地方西部からもたらされたものと考えられる。宮後遺跡でも、曾利式は前段階から本段階において比較的多く確認されている。

加曾利E3式期新段階（第650図）

第2・15・29号竪穴建物跡出土の土器などを標識とし、第274・405・414・425・434・440・512・513・537・540・568・612・619・620号土坑出土の土器群が該当する。

本段階は口縁部文様帯が明瞭でなくなり、隆帯による区画から沈線や刺突列などで代用するものとなっている段階である。また、口縁部文様帯が明瞭でなくなる半面、胴部文様帯が発達する段階である。口縁部文様帯をもつものは、前代の沈線を伴う隆帯区画からの流れを踏襲しているもので、16のように沈線で区画したり、1のように隆帯の貼付部を強くなでつけて微隆起線状に区画したりするようになってきている。胴部の磨消懸垂文は、2のように広がってきている。口縁部文様帯が存在しないものは大きく3種類あり、一つ目は前段階まで胴部文様としてしばしばみられた2条の隆帯間が磨消される（磨消隆帯とする）隆帯曲線文が口縁部文様帯まで及ぶもので、9は大型で推定口径が46cmほどある。二つ目は15のように沈線区画による逆U字状とU字状の磨消文が口縁部の無文帯に接続するもので、施文順序は区画が先行し、地文の施文が後となっているものである。三つ目は6のように口縁部を無文とし、沈線で区画された胴部以下には地文だけが施されるものである。

本段階の土器には、前段階まで認められた関東地方西部の曾利式系土器の伴出はなく、磨消隆帯や沈線区画による逆U字状の磨消文が口縁部までに及ぶなど、東北地方南部の影響が強く感じられるものが多くみられる段階である。宮後遺跡でも、本段階に曾利式の伴出はなく、本段階の土器と微隆起線による曲線文をもつ土器や磨消懸垂文間に蕨手文を有する土器が出土しており、当遺跡同様、東北地方南部の影響が認められている。

3 縄文時代中期の集落について

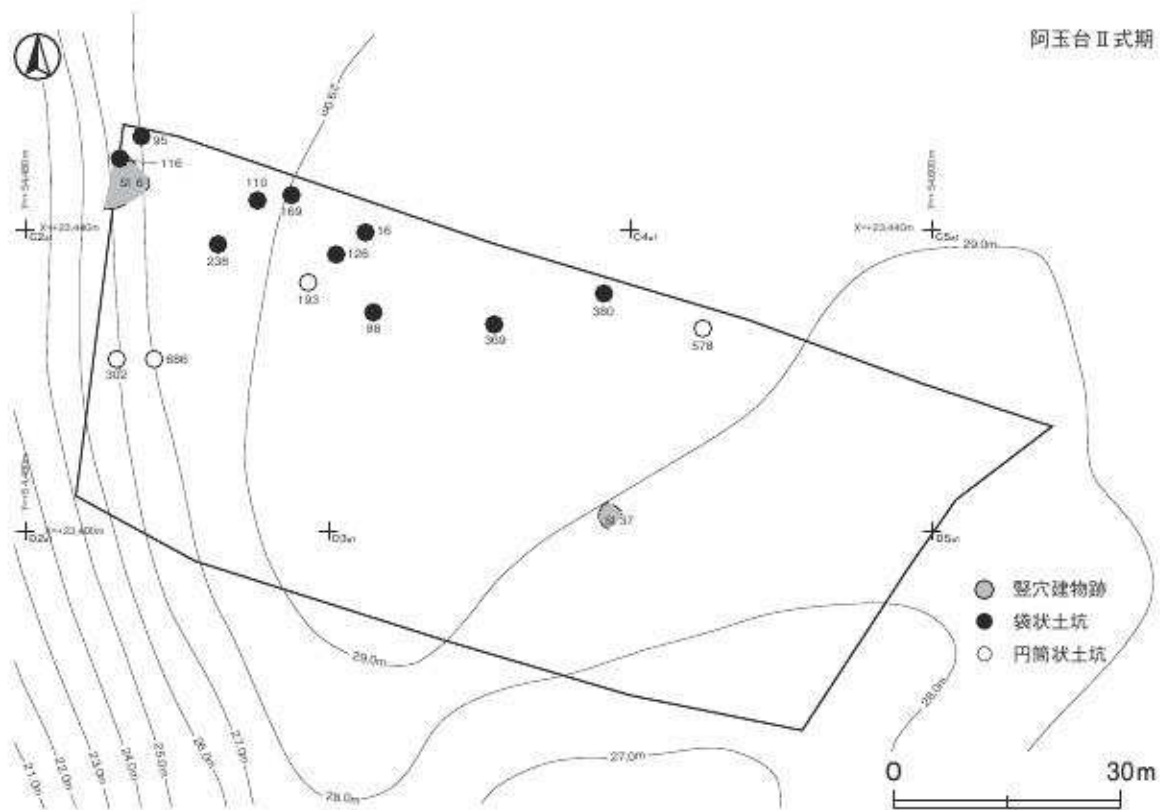
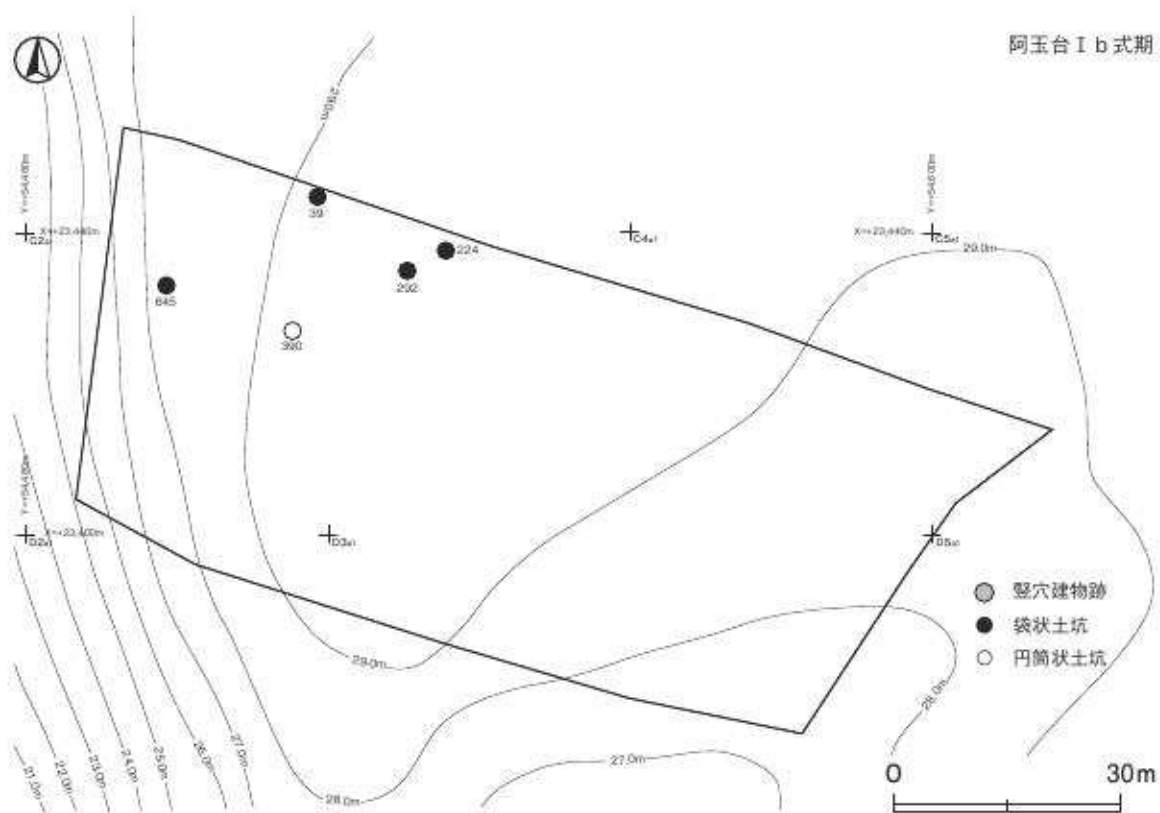
(1) 各時期の集落の様相について

当遺跡で確認できた縄文時代の遺構は、竪穴建物跡36棟、炉跡7か所、陥し穴2基、土坑669基である。ここでは、縄文時代の竪穴建物跡と土坑に焦点を絞って、集落の様相について述べる。

なお、新旧関係は土層と土器型式から判断したが、土層が不明なものについては土器型式のみで判断したため、同時期として区分した遺構が重複している場合がある。

阿玉台Ib式期（第651図）

阿玉台Ib式期の遺構は、土坑5基である。袋状土坑は4基で、袋状土坑の占める割合は高い。竪穴建物跡は確認されていないが、調査区域外に存在する可能性は高い。



第 651 図 遺構分布図 (1) (阿玉台 I b 式期・阿玉台 II 式期)

確認した袋状土坑4基は、いずれも南に張り出した標高28～29mの舌状台地の西側縁辺部に位置している。袋状を呈さない土坑（以下、「円筒状土坑」とする）1基は、南側にやや離れて位置している。

阿玉台Ⅱ式期（第651図）

阿玉台Ⅱ式期の遺構は、竪穴建物跡2棟、土坑14基（内、袋状土坑10基）である。袋状土坑の占める割合は71.4%と高い。

竪穴建物跡は、台地西部と東部に対峙するように位置している。

袋状土坑は、台地中央部から西部にかけて集中する傾向がある。円筒状土坑は、袋状土坑からやや離れて、袋状土坑を取り巻くように位置している。

阿玉台Ⅲ式期（第652図）

阿玉台Ⅲ式期の遺構は、竪穴建物跡4棟、土坑25基（内、袋状土坑16基）である。袋状土坑の占める割合は64%と高い。

竪穴建物跡は、南側に張り出した台地先端部の西部から東部にかけて台地を横切るように3棟がほぼ等間隔で位置し、中央部に第11・25号の2棟が隣接している。

袋状土坑は、台地中央部から西部に集中する傾向がうかがわれる。東部に位置する第1B号竪穴建物跡の付近から約40m以上離れて袋状土坑があり、円筒状土坑までは10m前後の距離（第518・564号土坑）に位置している。

阿玉台Ⅳ式期（第652図）

阿玉台Ⅳ式期の遺構は、竪穴建物跡8棟（内、有段式竪穴建物跡2棟）、土坑40基（内、袋状土坑26基）で、当集落が最も隆盛する時期である。袋状土坑の占める割合は65%と高い。

竪穴建物跡は、6棟が隣接して台地中央部西寄りに、2棟が台地東部に位置している。有段式の第1A・31号竪穴建物跡は、東西に対峙するように位置している。

袋状土坑は、阿玉台Ⅲ式期と同様な分布状況である。竪穴建物跡から北側で、台地中央部から西部緩斜面にかけて、より集中する傾向がうかがわれる。

円筒状土坑も、袋状土坑と同様の分布を示している。また、台地東部に位置する2棟の竪穴建物跡の内、有段式の第1A号竪穴建物跡の西側に袋状土坑1基（第404号土坑）、南西にやや離れて円筒状土坑が1基（第316号土坑）が確認されている。

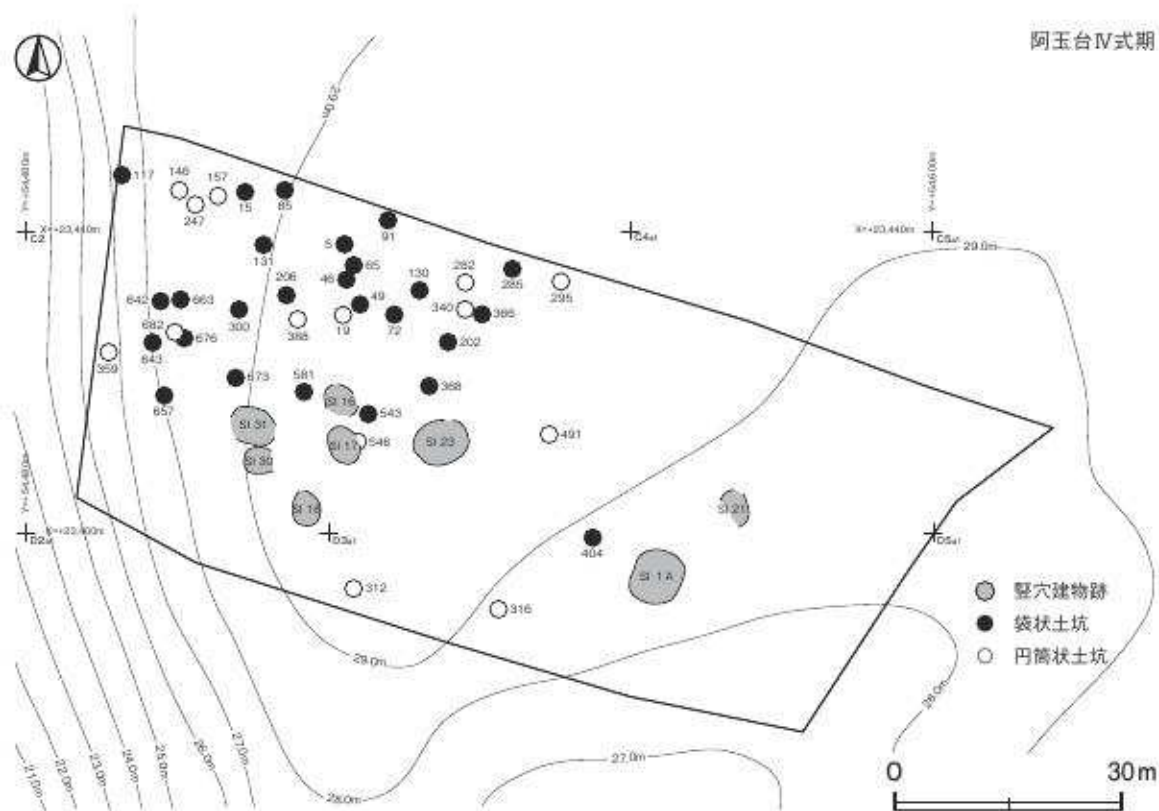
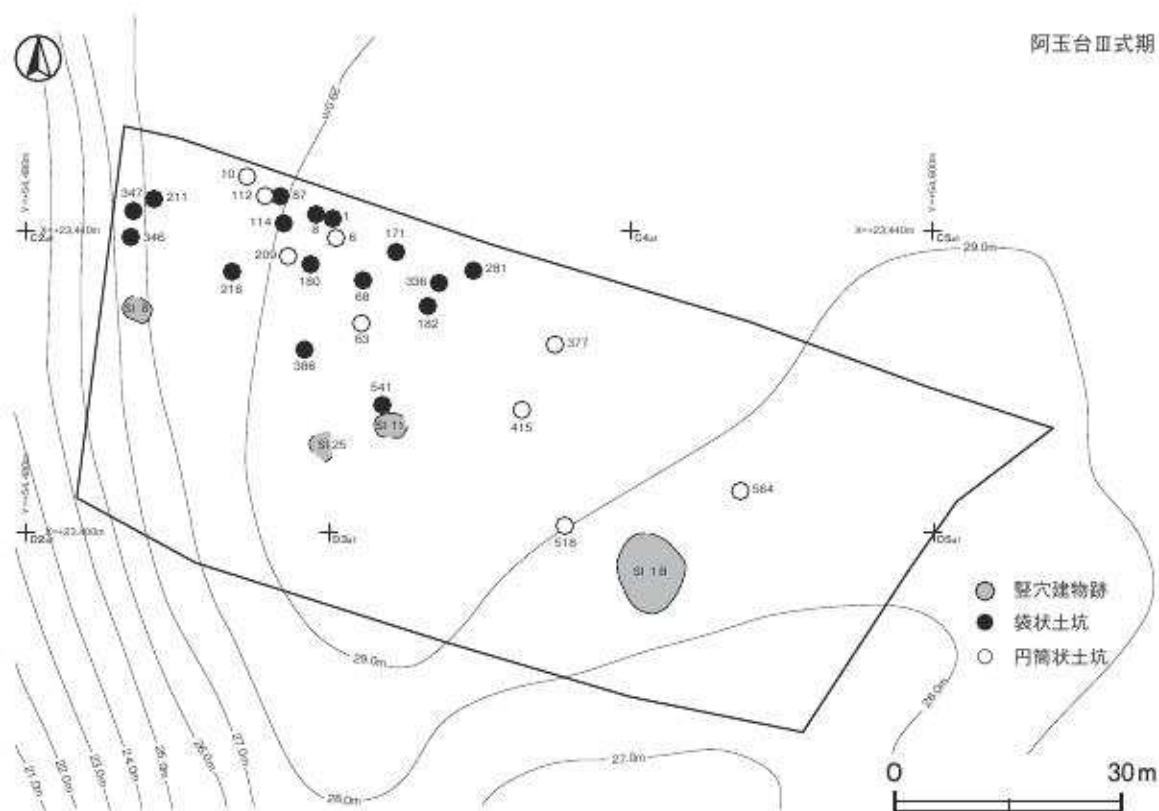
前段階の阿玉台Ⅲ式期と比較すると、竪穴建物跡も土坑も急激に増加している。集落の拡大と土坑の増加から、人口の増加に見合った生活基盤の変化がうかがえる。

加曾利E1式期古段階（第653図）

加曾利E1式期古段階の遺構は、竪穴建物跡6棟（内、有段式竪穴建物跡1棟）、土坑53基（内、袋状土坑40基）で、袋状土坑は75.5%と最も高い割合となる。袋状土坑の最盛期とも言える時期である。

竪穴建物跡の分布は、台地中央部に位置する有段式の第14号竪穴建物跡を東端とし、台地西部の標高28m前後に集中している。

袋状土坑と円筒状土坑は、台地中央部から西部の緩斜面にかけて、竪穴建物跡を取り巻くように密集している。第14号竪穴建物跡から東側には袋状土坑は存在せず、円筒状土坑が建物跡に隣接する形で南東部に1基（第323号土坑）、20～30mほどの距離を置いて北東部に2基（第567・第600号土坑）が位置している。土坑の多くは、第14号竪穴建物跡の北西半径約60mの範囲内に位置している。



第 652 図 遺構分布図 (2) (阿玉台Ⅲ式期・阿玉台Ⅳ式期)

加曾利 E 1 式期中段階（第 653 図）

加曾利 E 1 式期中段階の遺構は、竪穴建物跡 5 棟、土坑 40 基（内、袋状土坑 27 基）である。袋状土坑の占める割合は 67.5% と依然として高いが、前段階に比べ、集落構成に若干陰りが見え始める。

竪穴建物跡 5 棟はいずれも台地西部の緩斜面に位置している。

土坑は、竪穴建物跡に隣接するものと離れて位置するものに分けられるが、台地中央部から西側に集中する傾向があり、台地東部には円筒状土坑が数基だけで、袋状土坑は見られない。

加曾利 E 1 式期新段階（第 654 図）

加曾利 E 1 式期新段階の遺構は、竪穴建物跡 3 棟、土坑 35 基（内、袋状土坑 14 基）である。袋状土坑が 40.0%、円筒状土坑が 60.0% と、この時期に袋状土坑と円筒状土坑の比率が逆転する。集落の構成数、袋状土坑の減少等、生活基盤に何らかの変化が考えられる。

竪穴建物跡 3 棟は、2 棟が台地西部の緩斜面に、1 棟が台地中央部東寄りに位置している。

土坑は、台地中央部から西部にやや集中する傾向が見られる。台地東部の第 19 号竪穴建物跡の北には袋状土坑 2 基と円筒状土坑 4 基、南東には円筒状土坑 1 基が存在するのみであり、生活の中心は依然として台地西部に置かれていたようである。

加曾利 E 2 式期（第 654 図）

加曾利 E 2 式期の遺構は、竪穴建物跡 2 棟、土坑 35 基（内、袋状土坑 5 基）である。この時期になると袋状土坑は 14.3% と激減する。居住域は今までの台地西部ではなく、東部を意識するようになる。

竪穴建物跡 2 棟は、台地中央部に位置している。

袋状土坑は台地西部に 4 基、台地中央部北側に 1 基である。円筒状土坑は、台地中央部から西部にかけてまばらに位置し、第 24 号竪穴建物跡の南東側にも見られるようになる。

加曾利 E 3 式期古段階（第 655 図）

加曾利 E 3 式期古段階の遺構は、竪穴建物跡 3 棟、土坑 34 基（内、袋状土坑 4 基）である。袋状土坑は 11.8% と減少の一途をたどる。加曾利 E 2 式期からはじまった袋状土坑の減少という生活基盤の変化は、この時期においても引き継がれている。居住域も台地東部を占地するようになる。

竪穴建物跡 3 棟の内 2 棟は、台地東部に位置し、1 棟は台地西部に位置している。

袋状土坑は 4 基と少ないが、台地西部に 2 基、東部に 2 基確認されている。円筒状土坑は、台地の縁辺部にまばらに分布し、規則性や集合性は見られない。

加曾利 E 3 式期新段階（第 655 図）

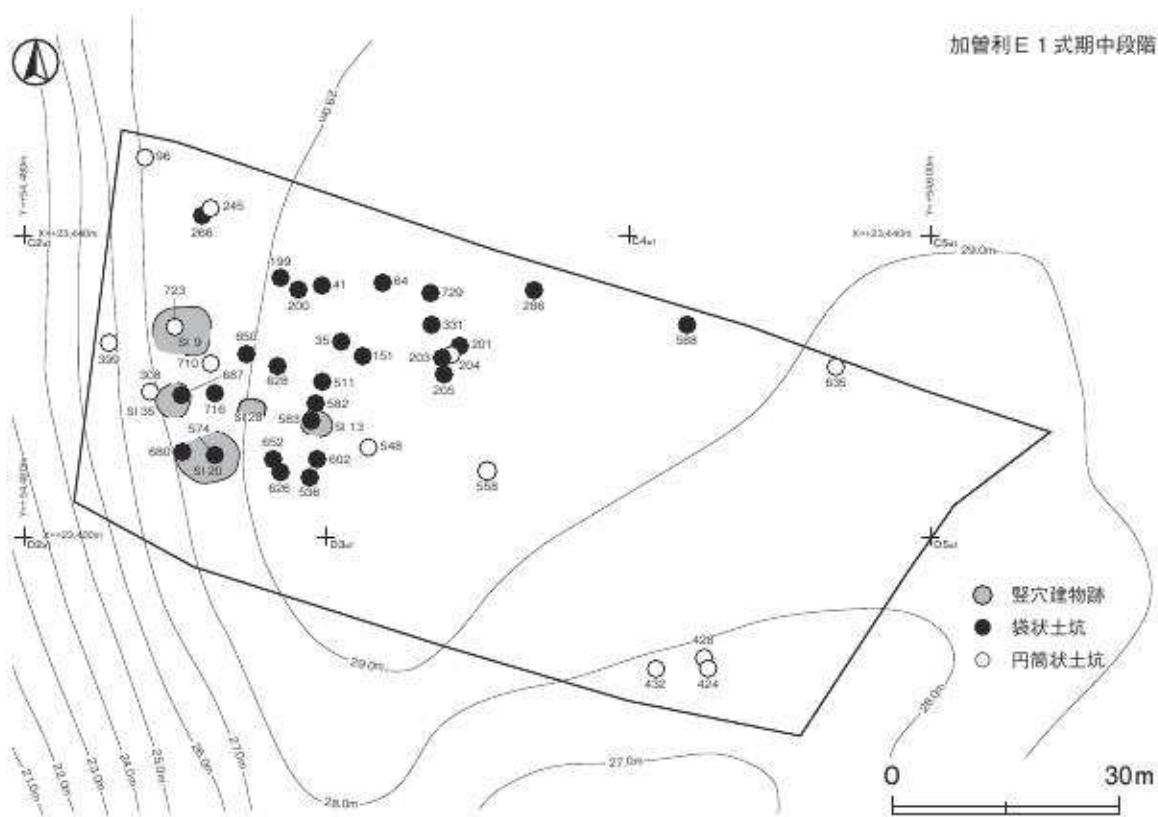
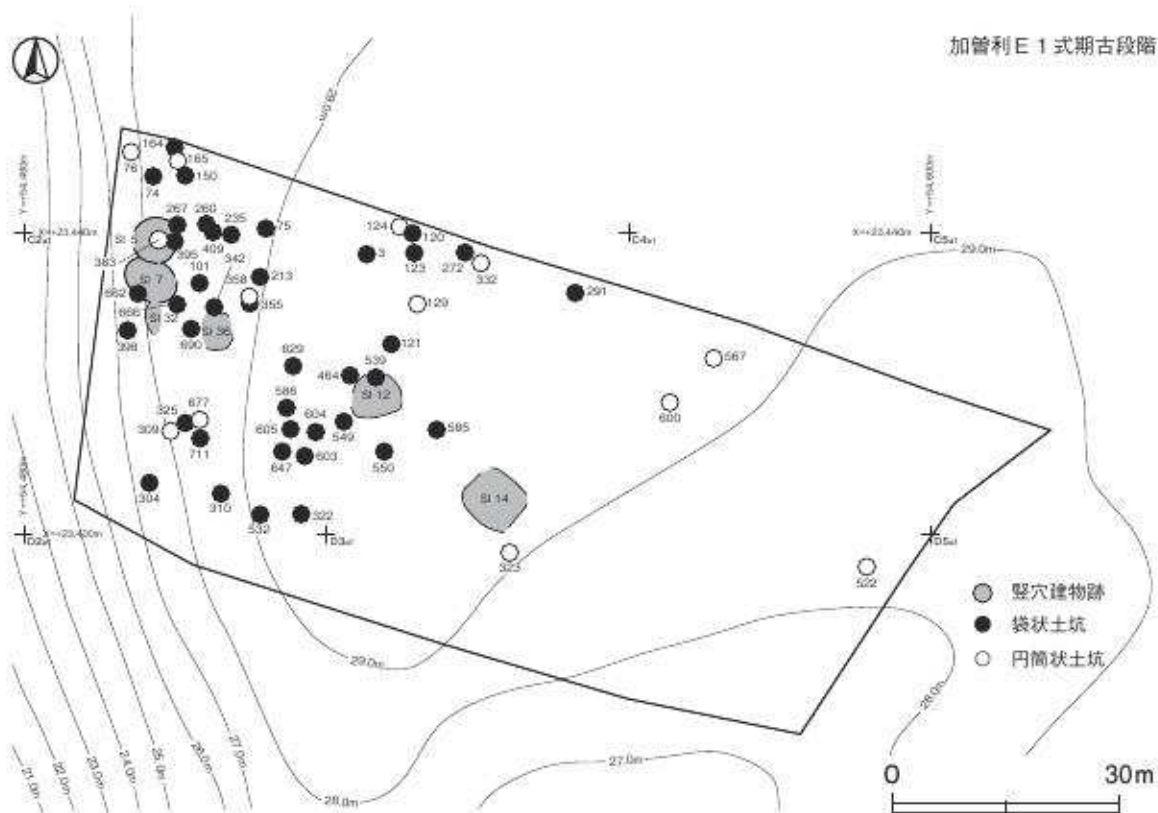
加曾利 E 3 式期新段階の遺構は、竪穴建物跡 3 棟、土坑 14 基（内、袋状土坑 2 基）である。この時期になると、土坑全体がさらに減少する。最盛期の加曾利 E 1 式期古段階と比べると、約 30% となる。居住域や生活空間も台地東部に移行し、台地西部はほとんど意識されない。

竪穴建物跡 3 棟は、いずれも台地東部に位置している。土坑は竪穴建物跡の周辺にまばらに見られるが、竪穴建物跡から離れた台地中央部から西部にかけても数基存在している。

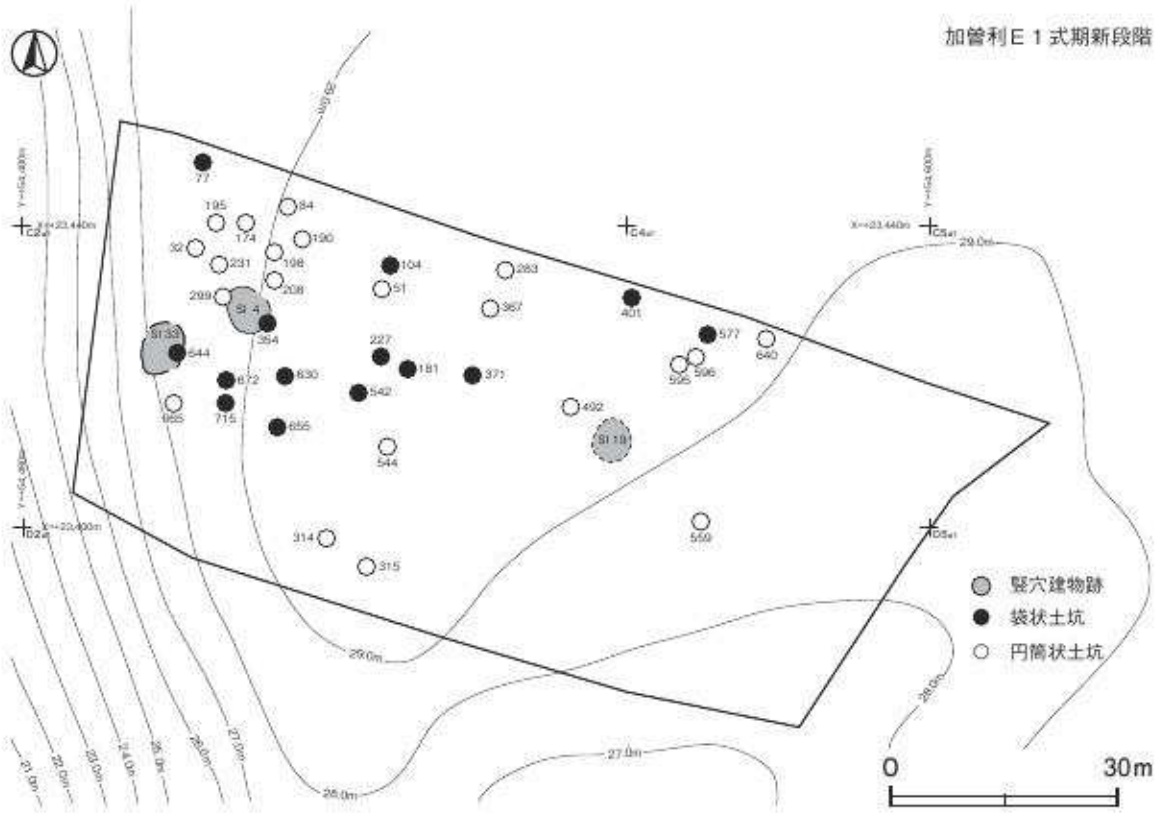
袋状土坑 2 基は、台地中央部に 1 基、台地北東部に位置する第 29 号竪穴建物跡の東側に 1 基確認されているのみである。

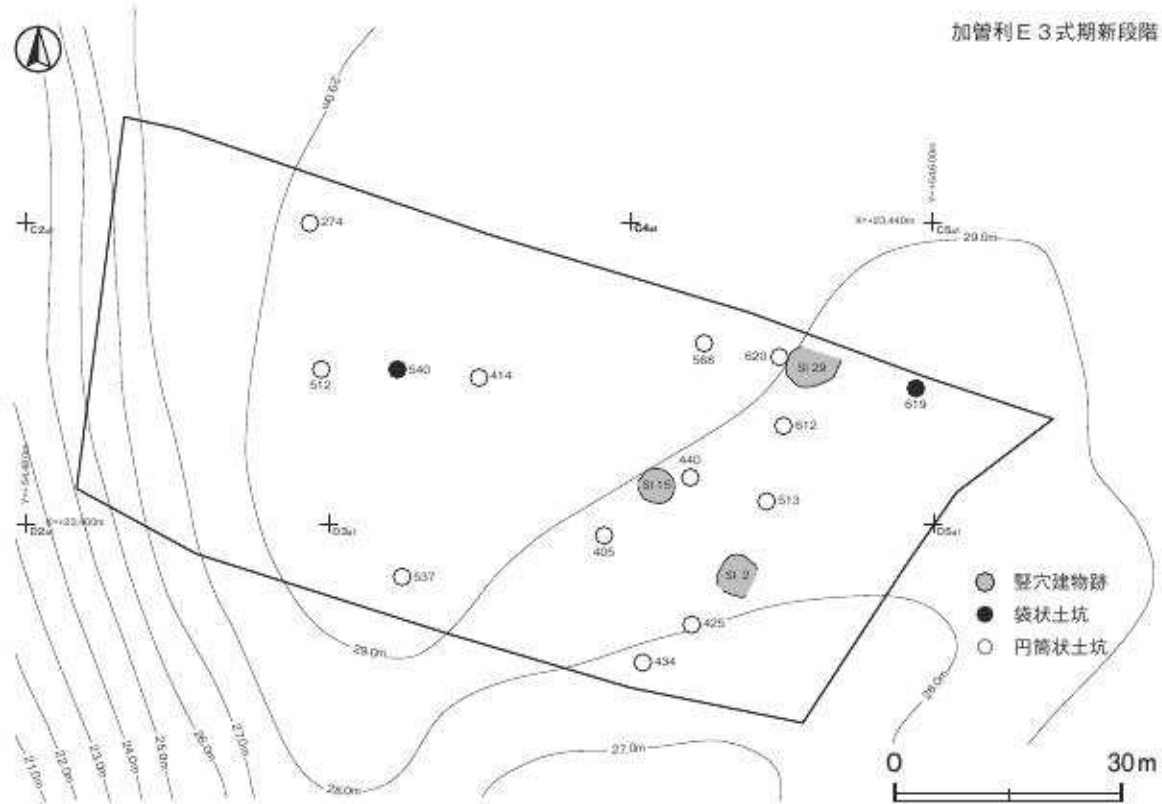
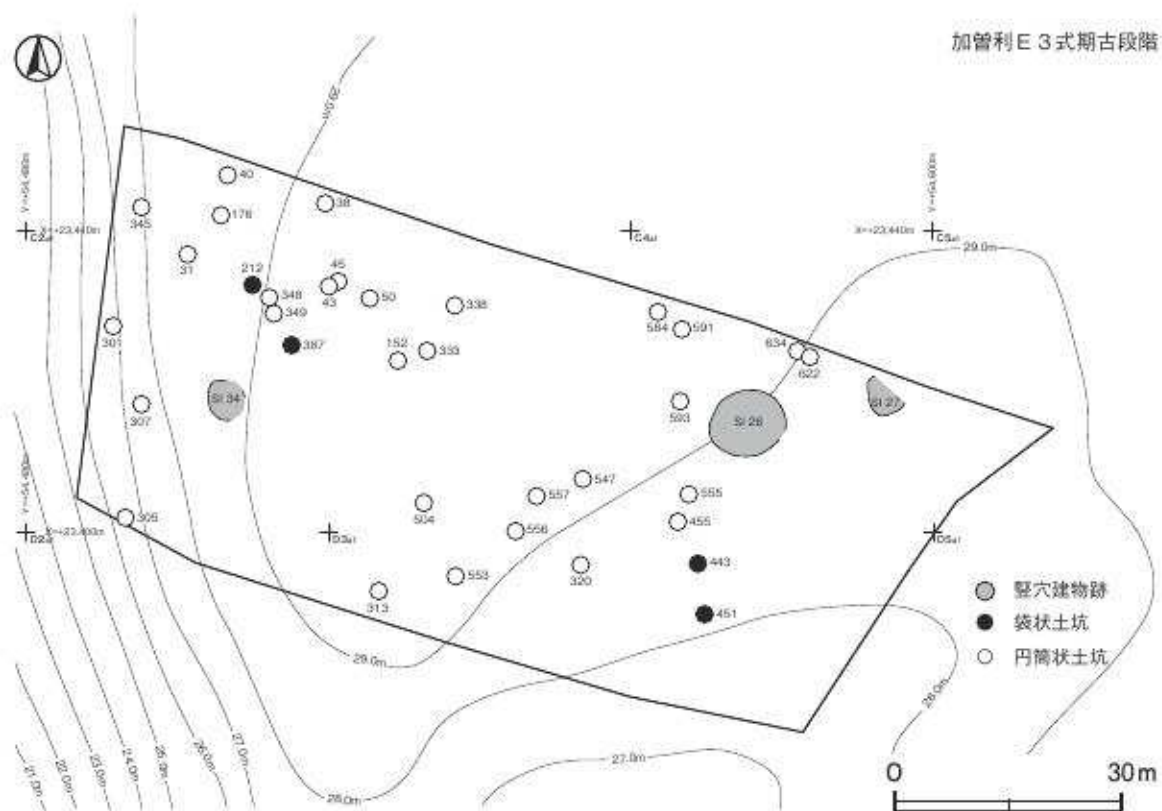
加曾利 E 3 式期（磨消縄文の発達段階）には、土坑の減少、特に袋状土坑の激減という現象が捉えられる。当遺跡においては、居住空間や生活基盤が西から東へという変化がうかがえる。

台地基部にあたる北側が調査区域外のため全体的な集落の様相は把握できないが、当集落は、阿玉台 I



第 653 図 遺構分布図 (3) (加曾利 E 1 式期古段階・加曾利 E 1 式期中段階)





第 655 図 遺構分布図 (5) (加曾利 E 3 式期古段階・加曾利 E 3 式期新段階)

b 式期に営まれはじめ、阿玉台Ⅱ式期に 2 棟、阿玉台Ⅲ式期に 4 棟と徐々に堅穴建物が増加し、阿玉台Ⅳ式期の 8 棟をピークに、加曾利 E 1 式期古段階 6 棟、加曾利 E 1 式期中段階 5 棟、加曾利 E 1 式期新段階 3 棟、加曾利 E 2 式期 2 棟、加曾利 E 3 式期古段階 3 棟、加曾利 E 3 式期新段階 3 棟と減少している。

袋状土坑は、阿玉台Ⅰ b 式期が 4 基、次の阿玉台Ⅱ式期が 10 基、阿玉台Ⅲ式期が 16 基、阿玉台Ⅳ式期が 26 基と増加し、加曾利 E 1 式期古段階で 40 基とピークを迎えている。そして、加曾利 E 1 式期中段階で 27 基、加曾利 E 1 式期新段階で 14 基と減少し続け、袋状土坑と円筒状土坑の数が逆転する。加曾利 E 2 式期で 5 基、加曾利 E 3 式期古段階で 4 基、加曾利 E 3 式期新段階で 2 基と激減し、やがて終焉を迎える。

土坑を貯蔵施設として考えた場合、住居に近接して設けた方が生活に密着しやすい。土坑の分布を見ると、どの時期においても住居から離れている。また、同時期における数量的なことも勘案すると、貯蔵する種類に伴う分化や貯蔵施設以外の機能も考える必要がある。

居住域も、阿玉台Ⅱ式期から加曾利 E 1 式期中段階までは、生活空間を台地中央部から西側を意識していたものが、次の加曾利 E 1 式期新段階で台地東側にも居住域を置くようになり、加曾利 E 3 式期新段階では台地東側への遷移が見られる。

一般に縄文時代中期中葉から後葉の集落は、環状集落と言われている。谷口康浩氏は、千葉県北部に多く確認されている環状集落の外周に堅穴住居を配し、内周に小堅穴（主として貯蔵穴と推定できるもの）が群在するものを「下総タイプ」としている。このような構造をもつ集落が、栃木県東部から茨城・千葉県北部にかけて、主として中峙式・加曾利 E 1 式期を中心とする限定された時期に広がっていた可能性がある」と指摘している²⁰⁾。鈴木克彦氏も、環状に配された住居群の内側に土坑が環状に巡っている構造は関東地方では共通する現象としている²¹⁾。

当遺跡でも、阿玉台Ⅳ式期から加曾利 E 1 式期新段階にかけて、堅穴建物群の内側に土坑が配される集落構造が見て取れる。集落構造の変化や土坑の減少、特に加曾利 E 2 式期段階での袋状土坑の激減、加曾利 E 3 式期新段階での居住域の変更という現象が他地域でも見られる現象なのか、類例を待ちたい。

(2) 土坑について

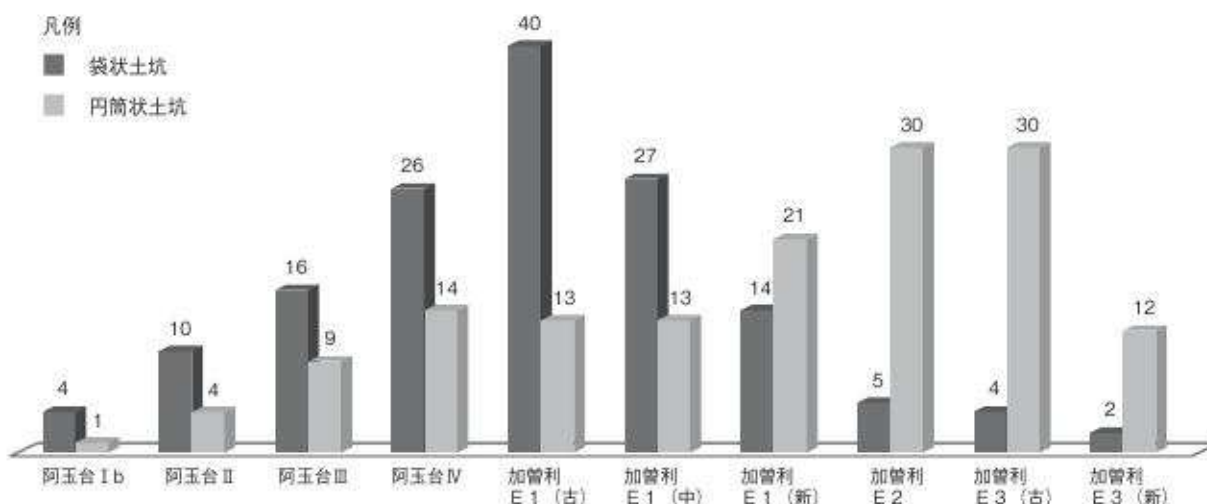
今回の調査では、土坑 669 基を確認している。その内、詳細な時期を確定できたのは 295 基で、時期は、縄文時代中期前葉から後葉に集中している。

各時期における土坑数は、阿玉台Ⅰ b 式期 5 基（1.7%）、阿玉台Ⅱ式期 14 基（4.7%）、阿玉台Ⅲ式期 25 基（8.5%）、阿玉台Ⅳ式期 40 基（13.6%）、加曾利 E 1 式期古段階 53 基（17.9%）、加曾利 E 1 式期中段階 40 基（13.6%）、加曾利 E 1 式期新段階 35 基（11.9%）、加曾利 E 2 式期 35 基（11.9%）、加曾利 E 3 式期古段階 34 基（11.5%）、加曾利 E 3 式期新段階 14 基（4.7%）であった。

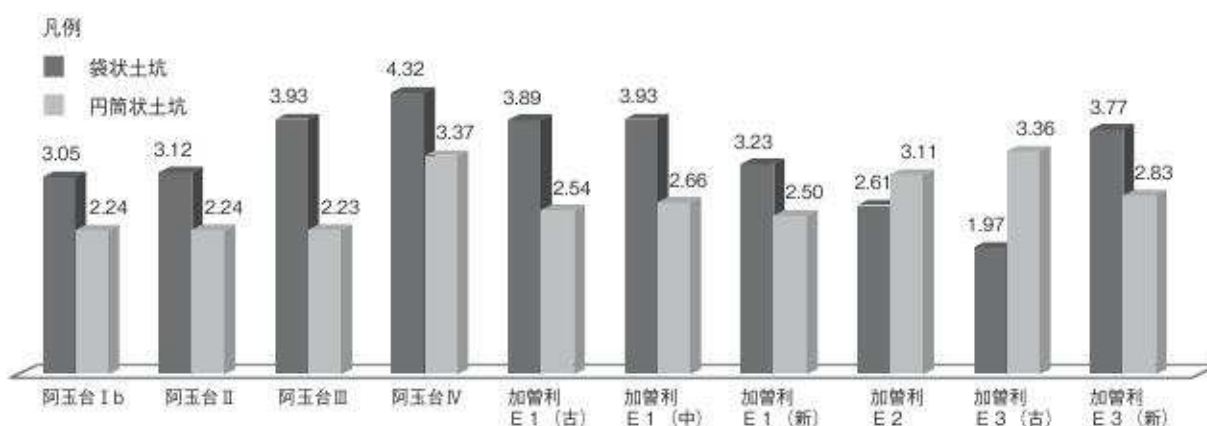
阿玉台Ⅰ b 式期から集落形成が始まり、阿玉台Ⅱ式期から数を増やし、阿玉台Ⅲ式期、阿玉台Ⅳ式期と増加し、加曾利 E 1 式期古段階でピークを迎え、加曾利 E 1 式期中段階以降は減少する。加曾利 E 3 式期新段階で激減する傾向が捉えられた（グラフ 1）。

底面積については、袋状土坑はその形状から底面積が大きいものが目につくが、加曾利 E 2 式期段階と加曾利 E 3 式期古段階では、円筒状土坑の平均底面積が上回っている。貯蔵食糧の減少と相まって、隆盛を極めた袋状土坑もこの段階になると形骸化し、底面積が小さくなったと考えられる（グラフ 2）。

グラフ1 土坑一覧



グラフ2 平均底面積一覧



ア) 袋状土坑について

時期が確定できた袋状を呈する土坑は、148基である。

時期別の内訳は、阿玉台 I b 式期 4 基 (2.7%)、阿玉台 II 式期 10 基 (6.8%)、阿玉台 III 式期 16 基 (10.8%)、阿玉台 IV 式期 26 基 (17.6%)、加曾利 E 1 式期古段階 40 基 (27.0%)、加曾利 E 1 式期中段階 27 基 (18.2%)、加曾利 E 1 式期新段階 14 基 (9.5%)、加曾利 E 2 式期 5 基 (3.4%)、加曾利 E 3 式期古段階 4 基 (2.7%)、加曾利 E 3 式期新段階 2 基 (1.4%) であった。

阿玉台 I b 式期以前の土坑は確認されていない。当遺跡では、阿玉台 I b 式期から時期を追うごとに増加し、加曾利 E 1 式期古段階でピークを迎え、加曾利 E 1 式期中段階で減少に転じ、急激に衰退していく傾向が捉えられた。

底面積については、3 m²を超える比較的大型のものは、袋状土坑全体で 94 基 (63.5%) で半数以上を占めている。各時期ごとの割合は、阿玉台 I b 式期 2 基 (50%)、阿玉台 II 式期 6 基 (60%)、阿玉台 III 式期 11 基 (68.8%)、阿玉台 IV 式期 17 基 (65.4%)、加曾利 E 1 式期古段階 28 基 (70%)、加曾利 E 1 式期中段階 19 基 (70.4%)、加曾利 E 1 式期新段階 7 基 (50%)、加曾利 E 2 式期 2 基 (40%)、加曾利 E 3 式期新段階 2 基 (100%) である。また、底面積が 7 m²を超える大型の袋状土坑は、阿玉台 IV 式期と加曾利 E 1 式期中段階にかけて 7 基確認されている。

イ) 円筒状土坑について

時期が確定できた円筒状土坑は、147基である。

各時期ごとの内訳は、阿玉台Ⅰb式期1基、阿玉台Ⅱ式期4基、阿玉台Ⅲ式期9基、阿玉台Ⅳ式期14基、加曾利E1式期古段階13基、加曾利E1式期中段階13基、加曾利E1式期新段階21基、加曾利E2式期30基、加曾利E3式期古段階30基、加曾利E3式期新段階12基である。

阿玉台Ⅱ式期から徐々に数を増し、加曾利E2式期・E3式期古段階にピークを迎え、加曾利E3式期新段階で急激な減少に転じている。袋状土坑が加曾利E1式期古段階の時期にピークを迎え、加曾利E1式期中段階で減少に転じるのに対し、増減に時期的なずれが捉えられた。

底面積については、3mを超える土坑が54基で、土坑全体の36.7%で、7mを超える土坑は6基（内、阿玉台Ⅳ式期1基、加曾利E2式期2基、加曾利E3式期3基）を確認している。全体的に小型の土坑が目立ち、加曾利E2式期と加曾利E3式期古段階では、平均が袋状土坑を上回っている。

ウ) ビットを有する土坑について

底面や壁際にビットが伴う土坑が確認された。底面中央部にビットを有する土坑は、上屋的な構造物が想定され、壁際のビットや浅い掘り込みは、補助的な貯蔵施設が想定される。

底面にビットが確認されている土坑は、122基で、土坑全体の38.9%にあたる。ビットの位置や大きさに規則性は見られないが、中央部に穿たれているもの、壁際に穿たれているものと、大きさや深さによってもその性格には違いがあるものと考えられる。

以下、ビットを有する袋状土坑と円筒状土坑を、各3分類、6分類して述べる。

エ) ビットを有する袋状土坑について(グラフ3-5)

袋状土坑は148基が確認されており、そのうち、底面にビットを有するものは53基で、全体の35.8%である。ビットの位置により、A類：中央にビットを有する土坑、B類：壁際にビットを有する土坑、C類：両者を併せもつ土坑に分類した。

A類とした袋状土坑は、上屋が想定されるもので、11基(7.4%)が確認されている。加曾利E1式期古段階に数を増すが、目立った傾向は見られない。

B類とした袋状土坑は、補助的な貯蔵施設が想定されるもので、物によって保存の場所や方法が考慮されていたと考えられる。34基(23.0%)が確認されている。阿玉台Ⅰb式期・阿玉台Ⅱ式期が各1基、

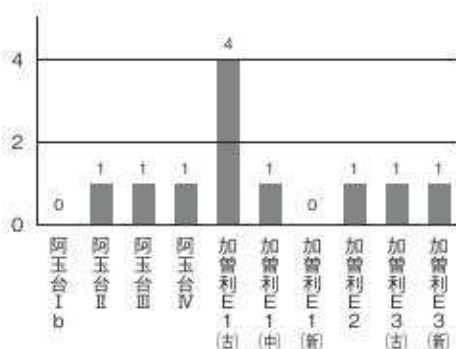
阿玉台Ⅲ式期4基、阿玉台Ⅳ式期9基、加曾利E1式期古段階9基、加曾利E1式期中段階・加曾利E1式期新段階各5基で、加曾利E2式期以降は見られなくなる。

C類は、8基(5.4%)が確認されており、加曾利E1式期中段階にピークが見られる。加曾利E2式期以降は確認されていない。

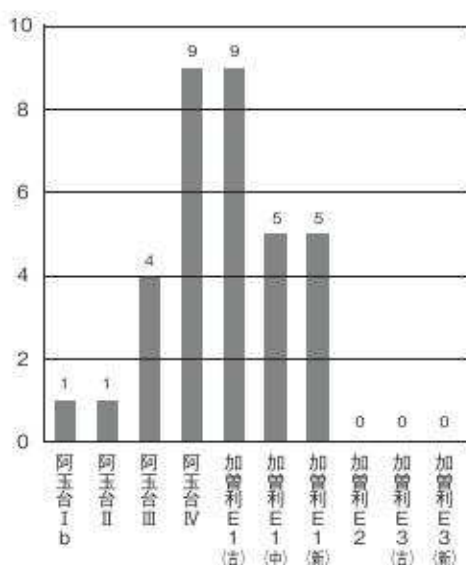
袋状土坑は、上屋が想定できるものは少なく、補助的な貯蔵施設を持つものが目立つ。袋状という特殊な形態には、付随する補助的な貯蔵施設が要求されたものと考えられる。

B類に分類される第267号土坑は、オーバーハングした壁

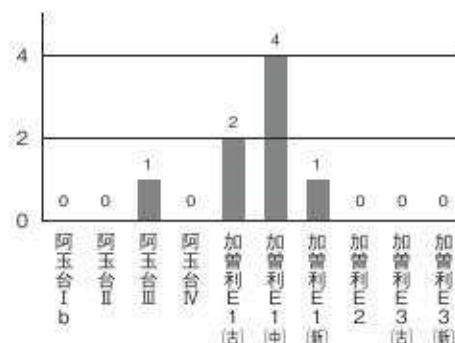
グラフ3 A類 中央にビットを有する袋状土坑



グラフ4 B類 壁際にピットを有する袋状土坑



グラフ5 C類 両方を併せもつ袋状土坑



際の南西部と北東部に対峙しているピットの1つ(P1)から、浅鉢が正位で据え置かれた状態で出土している。補助的な貯蔵形態が考えられる例である(第294図)。また、第581号土坑は、オーバーハングした北東壁際の底面に長径136cm、短径72cmの不整長方形の掘り込みがあり、その側から深鉢が直立した状態で出土している。墓坑的な要素も感じられる(第504図)。

オ) ピットを有する円筒状土坑(グラフ6～8)

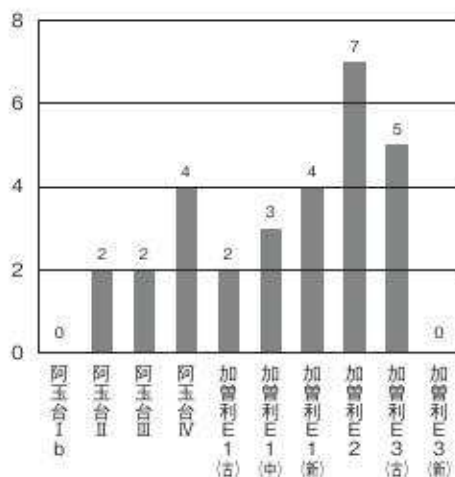
底面にピットを有する円筒状土坑は65基で、円筒状土坑全体の44.2%にあたる。ピットの位置により、a類：中央にピットを有する土坑、b類：壁際にピットを有する土坑、c類：両方を併せもつ土坑に分類した。

a類は、上屋が想定されるもので29基が確認された。阿玉台II・III式、加曾利E1式期古段階各2基、阿玉台IV式期・加曾利E1式期新段階各4基、加曾利E1式期中段階3基、加曾利E2式期7基、加曾利E3式期古段階5基である。阿玉台I b式期・加曾利E3式期新段階のものは確認できず、加曾利E2式期にピークを迎えている。

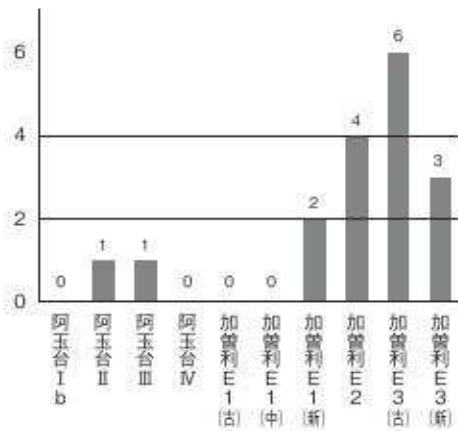
b類は、補助的な貯蔵施設が想定されるもので、17基が確認された。阿玉台II・III式期が各1基、加曾利E1式期新段階が2基、加曾利E2式期が4基、加曾利E3式期古段階が6基、加曾利E3式期新段階3基で、加曾利E1式期新段階から数を増やし、加曾利E3式期古段階にピークを迎えている。

c類は、上屋と補助的な貯蔵施設を併せ持つもので、19基が確認されている。阿玉台I b・III・IV式期・加曾利E1式期新段階が各1基、加曾利E1式期古段階2基、加曾利E3式期新段階3基、加曾利E2式期4基、加曾利E3式期古段階6基で、阿玉台II式期と加曾利E1式期中段階は確認されていない。加曾利E2式期から数を増やし、加曾利E3式期古段階でピークを迎え、その後徐々に衰退していく。

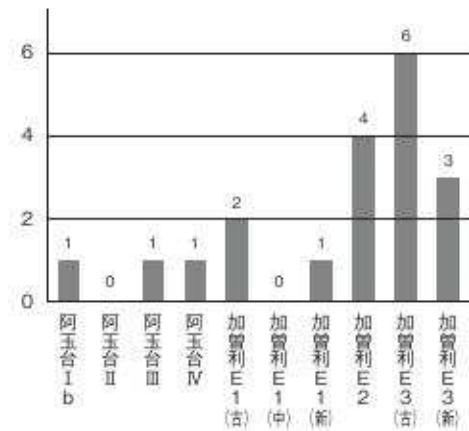
グラフ6 a類 中央にピットを有する円筒状土坑



グラフ7 b類 壁際にピットを有する円筒状土坑



グラフ8 c類 両方を併せもつ円筒状土坑



ピットを有する円筒状土坑は、加曾利E 1式期新段階から増加し、加曾利E 2・E 3式期古段階にピークを迎え、その後急激な減少が見られ、また、上層が想定できるものの割合が高いことも特筆される。

一つの土坑でたくさんのものを貯蔵するとともに、保存物を温・湿度の変化から守る形態として、土坑下部を掘り広げた結果生まれたものが袋状土坑と考え、当然、貯蔵するものの増減によりその数や形は変化するものである。袋状土坑が阿玉台I b式期で4基、阿玉台II式期で10期、阿玉台III式期で16基、阿玉台IV式期26基と数を増やし、加曾利E 1式期古段階で40基と、土坑全体の75.5%を占めてピークを迎え、加曾利E 1式期中段階で27基、加曾利E 1式期新段階で14基と前段階の約半分に減少し、この段階で円筒状土坑と逆転現象に転じている。そして、加曾利E 2期式で5基と落ち込み、加曾利E 3式期古段階で4基、加曾利E 3式期新段階で2基と急激に数を減らしている。

土坑の貯蔵形態が変化した要因の一つとしては、貯蔵食糧の量的な変化が考えられる。

安田喜憲氏は、群馬県八島ヶ原湿原の地層の花粉分析により、5,000年前頃高温期が終わり、冷涼化に向かった気候は、3,000年前頃にピークを迎えることが明らかになったとしている²²⁾。

また、石川日出志氏は、「こうした、中期段階には均衡していた人間集団規模と領域内資源とのバランスが崩れはじめるきっかけとして注目されるのが気候の寒冷化である。」とし、「こうした生態環境の変動が中期以来の一定領域内の環状集落の維持を困難とし、新しい環境に適応するために集落自体は分散せざるを得なかった。」と述べている²³⁾。

中期前葉から中葉にかけての温暖な気候は、豊富なナラ・クリ帯の落葉広葉樹林を育成してきたが、中期末から後期にかけての気候の寒冷化は、食用植物の収穫量の減少を加速させ、人口や集落規模に大きな打撃をもたらし、深刻な社会現象となったことは十分に考えられる。

袋状土坑が加曾利E 1式期中段階で減少し、加曾利E 1式期新段階で円筒状土坑との比率が逆転する現象は、気候変動により堅果類等の保存可能な食用植物が減少し、袋状土坑という特異な貯蔵形態でなくても、従来からの円筒状土坑で十分に対応できる量しか確保できなくなったためとも考えられる。

袋状土坑は、阿玉台I b・II・III式期と徐々に数を増やす傾向が捉えられたが、当遺跡におけるこの段階の土器組成は阿玉台式土器が主体ではあるが、県北地域の諏訪式土器や東北地方南部の七郎内II群土器、千葉県方面からの勝坂式土器が客体的に入ってくる時期である。袋状土坑が爆発的に増加する加曾利E 1式期古段階は、阿玉台式土器が終焉を向え、南から勝坂式土器や中韓式土器が、北からは大木8 a式土器がもたらされ、様々な系統の土器が混在する時期でもある。また、阿玉台IV式期から加曾利

E1式期古段階は、有段式竪穴建物も構築される。いずれも当時の社会的背景が要求した結果生まれたもので、大きな社会基盤の変化が想定される。

このように土器組成から見られる他地域との交流は、集落構造の変化や食糧の貯蔵形態にも大きな影響を与えたものと考えられる。

袋状土坑が堅果類や根茎類の貯蔵施設と仮定すると、阿玉台式期にそれまでの円筒状土坑から、袋状土坑という特異な形態の土坑が生み出される社会的背景として、貯蔵形態を変えなければならないという状況が想定される。豊富な堅果類・根茎類の収穫が可能な環境だからこそ生まれた独特の貯蔵形態であり、それは、土掘り具（食料調達具）としての撥形・分銅形・新形の石斧や、調理具としての石皿・磨石・凹石等の増加現象とも大いに関係していると考えられる。

袋状土坑の温・湿度の観測実験では、湿度は夏季、冬季に関係なく90%、温度は夏季は外気の変化に関係なく15℃前後に保たれ、冬期は蓋をすれば、外気に関係なく2℃前後であったという報告がある。

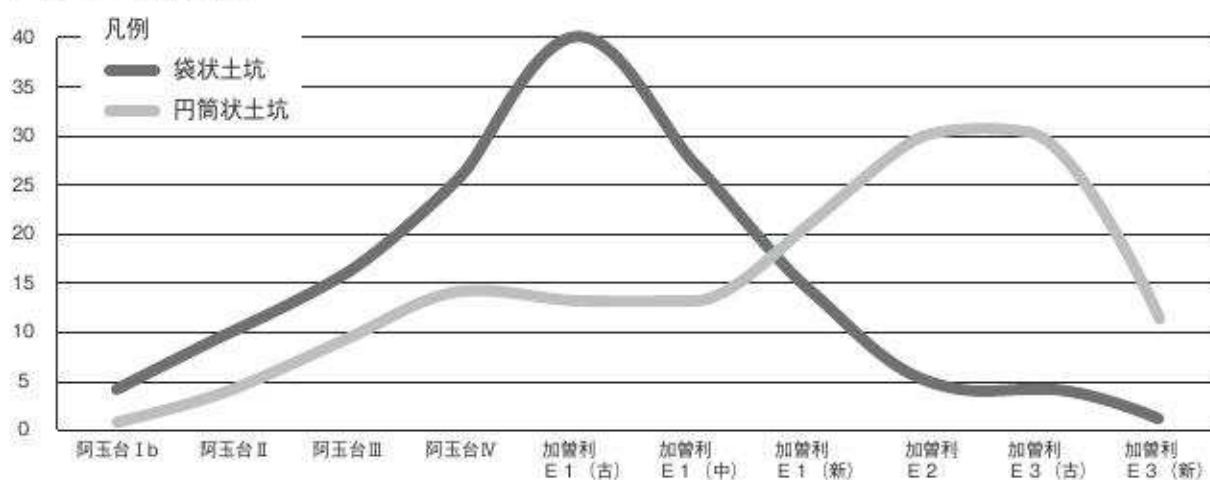
底面の壁際に小ピットをもつ袋状土坑の機能については、壁際は空気が滞留し、一定温度を保持しやすい位置にあることから、変質しやすい物質を貯蔵する「特別室」としての機能も考えられている²⁾。

以上のことから、袋状土坑の機能としては、豊富な収穫物に対応するために必要とした特異な食料の貯蔵形態と考えたい。

食料貯蔵以外の用途が考えられる例として、第72号土坑があげられる。3方向の壁面を横穴状に掘り込み、それぞれの横穴に敲砥石、側縁部に敲打痕のある磨石、磨製石斧の未成品を収納し、横穴を塞ぐように土器片が置かれていた。あたかも磨製石斧の製作道具一式が埋納されたような出土状態は、特異な事例である。

また、b類に分類される第44号土坑（加曾利E2式期）からは、北壁際の長径60cm、短径50cm、深さ14cmの比較的浅い楕円形のピットから小礫がまとまって出土している。土坑底面は湿度が非常に高く、保存する物によっては、土器に入れる、かごに入れる、敷物の上に置く、というような配慮がなされていたことも十分考えられる。壁際の浅い掘り込みや掘り込み内の小礫は、保存する物によって、保存方法を工夫していた証左ではないだろうか。

グラフ9 土坑の推移



(3) 特筆される土坑内出土遺物

円筒状土坑に分類される第635号土坑からは、22.7kgの花崗岩塊が出土している。当土坑は、台地東部の縁辺で、土坑が集中する地点から離れた場所に位置している。北部が調査区域外へ延びているため、東西径1.50m、南北径1.93mしか確認できなかった。深さは72cmの楕円形で、壁はほぼ直立する形状で、底面は平坦である。花崗岩塊は、底部中央部に置かれたような状態で出土している。加工の痕跡は見られず、火熱を受け、剥落も著しい状態であった。何らかの目的があって本集落に持ち込まれたものである。時期は、出土土器から加曾利E1式期中段階である。埋め戻されている覆土中からは、縄文土器片129点、磨製石斧1点が出土している。墓坑的な性格も払拭出来ないが、土器製作時の粘土への混和材の原石の可能性もある。類例としては、笠間市西田遺跡第1号住居（有段式竪穴建物跡）の北部上段からの被熱した花崗岩塊の出土があげられる²⁴⁾。この花崗岩塊も粘土への混和材と考えると、有段式竪穴建物跡の性格解明の一助になるものと思われる。

4 縄文時代中期の特殊な遺構・遺物について

(1) 有段式竪穴建物跡について

縄文時代の遺構の内、注目されているひとつが「有段式竪穴遺構」あるいは「二段掘り込み住居」などと呼称されている有段式竪穴建物跡である。本調査区域は当遺跡の南部に当たり、遺跡全体の約5分の2の調査である。したがって、遺跡全体の遺構数は調査で確認した遺構数の倍以上になると考えられる。当遺跡で確認した有段式竪穴建物跡は、縄文時代の竪穴建物跡36棟の内、3棟である。有段式竪穴建物跡は、千葉県、茨城県、栃木県などで確認され、その分布は阿玉台式土器の分布圏とほぼ一致している²⁵⁾。当遺跡の有段式竪穴建物跡の時期は、第1A・31号跡が阿玉台IV式期、第14号跡が加曾利E1式期古段階である。ここでは、有段式竪穴建物跡の時期や遺構の性格について、本県や近県の類例などから検討する。

ア) 本県や近県における有段式竪穴建物跡概観

本県では、有段式竪穴建物跡は当遺跡を含めて23遺跡、45棟が報告されている。ここでは、本県における有段式竪穴建物跡を集成²⁶⁾し、本県や近県における有段式竪穴建物跡の「消長」・「有段式竪穴建物跡と竪穴建物跡の規模」・「遺物の状況」について概観する。

有段式竪穴建物跡の消長

本県の有段式竪穴建物跡で一番古いと考えられるものは、笠間市西田遺跡第1号跡²⁷⁾で、阿玉台Ib式期のものである。千葉県では柏市水砂遺跡²⁸⁾、同市中山新田I遺跡²⁹⁾において、当時期の竪穴建物と有段式竪穴建物とで集落が形成されている。当地域では、有段式竪穴建物跡は阿玉台Ib式期頃に出現するようである。

有段式竪穴建物跡は阿玉台II式期には数を増し、阿玉台IV式期頃にピークとなる。土浦市下広岡遺跡³⁰⁾では、9棟の有段式竪穴建物跡が確認されている。常陸大宮市西橋遺跡³¹⁾では、調査が遺跡の一部にもかかわらず、阿玉台IV式期から加曾利E1式期にかけての有段式竪穴建物跡が3棟確認されている。

有段式竪穴建物跡の終末については、茨城町宮後遺跡³²⁾は阿玉台Ia式期から加曾利E4式期にかけての、下広岡遺跡は阿玉台Ib式期から加曾利E3式期にかけての大規模な環状集落跡であるが、加曾利E3式期以降の有段式竪穴建物跡は確認されていない。阿見町竹来遺跡³³⁾や鹿嶋市鍛冶台遺跡³⁴⁾などの加曾利E2式期の有段式竪穴建物跡を最後として、有段式竪穴建物跡は姿を消すと考えられる。

有段式竪穴建物跡と竪穴建物跡の規模

有段式竪穴建物跡の平面形は、長方形及び楕円形を基本とするようであり、阿玉台Ⅰb式期から加曾利E2式期まで、長方形・楕円形のものが多い。

主柱穴の状況は、阿玉台Ⅰb式期の中山新田Ⅰ遺跡では、下段部床面の中央部に1か所のものと2か所のものが確認されている。阿玉台Ⅱ式以降になると下段部の四隅に4か所のものが多い。大規模なものは長軸の壁に沿って各3か所、計6か所となっている。ほとんどの有段式竪穴建物跡にしっかりとした主柱穴が確認されている。

上段部の面積から規模をみると、阿玉台Ⅰb式期の中山新田Ⅰ遺跡の2棟の有段式竪穴建物跡の平均は13.39㎡で、4棟の竪穴建物跡の床面積の平均は9.10㎡である。阿玉台Ⅱ式期では、筑西市堂東遺跡³⁵⁾を取り上げる。有段式竪穴建物跡は第2号跡で、上段部の面積は27.74㎡である。同時期の竪穴建物跡は3棟確認され、床面積の平均は12.06㎡である。阿玉台Ⅲ式期では、常総市大谷津A遺跡³⁶⁾を取り上げる。大谷津A遺跡では、阿玉台Ⅲ式期の有段式竪穴建物跡が1棟、竪穴建物跡が3棟確認されている。有段式竪穴建物跡は第65号跡で、上段部の面積は29.75㎡である。竪穴建物跡3棟の床面積の平均は11.05㎡である。阿玉台Ⅳ式期の有段式竪穴建物跡は、石岡市東大橋原遺跡D-J1号住居跡³⁷⁾のように、上段部の面積が11.99㎡と小型のものもあるが、日立市上の代遺跡第3号跡³⁸⁾は57.00㎡と大規模であり、遺跡により規模にばらつきがある。当時期の竪穴建物跡は、宮後遺跡では4棟確認され、床面積の平均は15.98㎡である。加曾利E1式期では、土浦市六十原遺跡³⁹⁾を取り上げる。六十原遺跡では、当時期の有段式竪穴建物跡1棟、竪穴建物跡が5棟確認されている。有段式竪穴建物跡は第11号跡で、上段部の面積は24.51㎡である。竪穴建物跡5棟の床面積の平均は18.69㎡である。

有段式竪穴建物跡の規模については、その時期の竪穴建物跡の規模より大きい傾向がうかがえる。竪穴建物跡の床面積は時期が経つにつれ、少しずつ大きくなる。それに伴うように、有段式竪穴建物跡も大きくなっていく。阿玉台Ⅲ式期から加曾利E1式期にかけては、下広岡遺跡第39号跡や上の代遺跡第3号跡のように大型のものも出現するが、東大橋原遺跡D-J1号跡や下広岡遺跡第40号跡のように小型のものもあり、バラエティーがあるようである。

有段式竪穴建物跡で、床面の状況を確認できたものは、踏み固められているものが多い。炬については、付設されているものはほとんどなく、しっかりとした炬を伴うものは上の代遺跡第3号跡の一例だけであるので、有段式竪穴建物跡は炬を付設しないのが一般的と思われる。

遺物の状況

遺物が多量に出土したり、特徴的な遺物が出土している事例を紹介する。

多量の土器片が出土している事例は、中山新田Ⅰ遺跡第96号跡、下広岡遺跡第39号跡、大谷津A遺跡第65号跡、日立市諏訪遺跡第1号跡⁴⁰⁾、常陸大宮市滝ノ上遺跡第55号跡⁴¹⁾、六十原遺跡第11号跡、石岡市東田中遺跡第15号跡⁴²⁾などがあげられる。下広岡遺跡第39号跡からは7,668点、滝ノ上遺跡第55号跡からは4,438点もの土器片が覆土中層を中心に出土しており、何らかの意味があって、多量の土器片が投棄されたものと思われる。

多量の石器・剥片・母岩などが出土している事例として、西田遺跡第1号跡、阿見町小作遺跡第34号跡⁴³⁾、常陸大宮市三美中道遺跡第1号跡、下広岡遺跡第4・39号跡、滝ノ上遺跡第55号跡などがあげられる。西田遺跡第1号跡では、多量の石鏃、石鏃未成品、剥片などが出土していることから、本跡を石鏃製作のための工房跡と考察されている。また、下広岡第39号跡、滝ノ上遺跡第55号跡は土器片ばかりでなく、

石器類も多量に出土している。

特殊な遺物として、西高遺跡第6号跡からは、床面を中心に19点もの磨石が、西田遺跡第1号跡では、上段部の床面から被熱した多量の雲母を含む花崗岩が、滝ノ上遺跡第4号跡⁴⁰からは、床面から被熱した大型の礫がそれぞれ出土している。

イ) 当遺跡の有段式竪穴建物跡の特徴について

規模と形状

当遺跡の阿玉台Ⅳ式期の竪穴建物跡は8棟確認され、2棟が有段式竪穴建物跡である。竪穴建物跡6棟の平面形はすべて楕円形（不整楕円形を含む）で、床面積の平均は17.31㎡である。6棟の内5棟が炉をもち、内訳は地床炉3、石囲い炉1、土器埋設炉1である。有段式竪穴建物跡の第1A号跡の平面形は隅丸長方形を呈し、炉を伴っていない。下段部は隅丸長方形で、四隅に主柱穴をもち、上段部の中軸上に2か所の棟持柱と考えられる柱穴がある。床は下段部の中央部が踏み固められている。上段部の面積は42.48㎡である。第1A号跡は、当時期の竪穴建物跡8棟の中で一番大きい。もう一棟の有段式竪穴建物である第31号跡の平面形は楕円形を呈し、炉を伴っていない。下段部壁際、中軸線上に東西に対峙して柱穴があり、主柱穴と考えられる。床は下段部全体が踏み固められている。上段部の面積は22.87㎡である（第656図）。

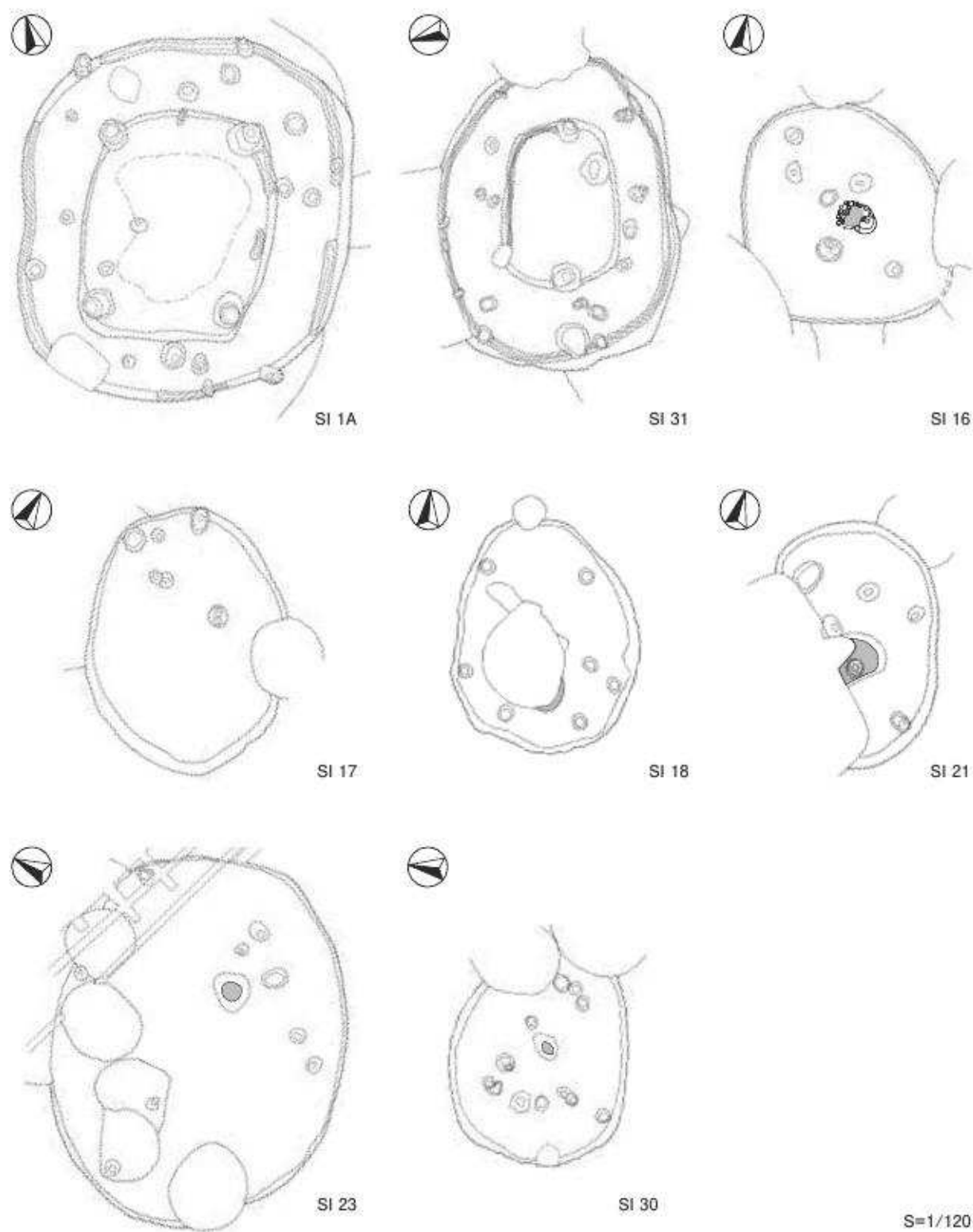
当遺跡の加曾利E1式期古段階の竪穴建物跡は6棟確認され、1棟が有段式竪穴建物跡である。竪穴建物跡5棟の平面形は、楕円形4棟、円形1棟で、床面積の平均は26.70㎡である。5棟の内4棟が炉を伴い（第5号跡は中央部を土坑に掘り込まれているため、炉を確認できなかったと考えられる。）、すべて地床炉である。有段式竪穴建物跡は第14号跡で、隅丸長方形を呈し、炉を伴っていない。下段部は隅丸長方形で、各コーナー寄りに4か所のピットがあり、主柱穴と考えられる。床はほぼ平坦であるが、硬化面は確認されていない。上段部の北部と西部では、下段部の壁に平行する浅い溝が2条ずつ確認され、2回の拡張が考えられる。上段部の面積は48.56㎡である。第14号跡も当該段階の竪穴建物跡の中で一番大きい（第657図）。

遺物の状況

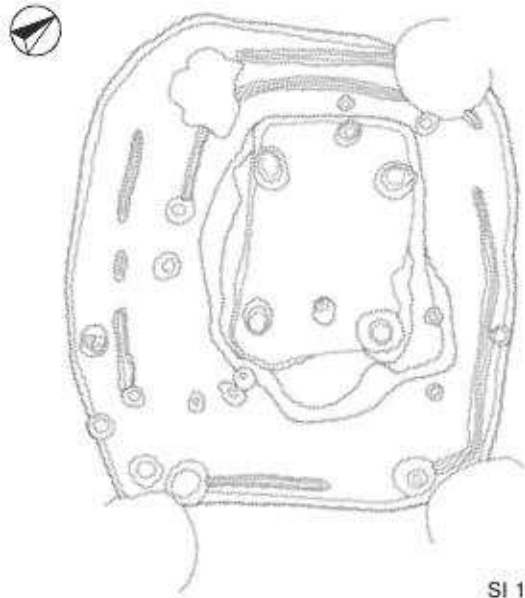
第1A号跡からは縄文土器片1,390点（深鉢1,344、鉢1、浅鉢44、小型浅鉢1）、土製品2点（土器片鏟）、石器14点（角錐状石器1、鏃1、打製石斧1、磨製石斧7、敲砥石2、砥石2）、石材母岩・石核97点（瑪瑙88、石英9）、剥片30点（石英13、瑪瑙6、チャート3、黒曜石3、ホルンフェルス2、粘板岩1、石英斑岩1、頁岩1）が、覆土中・下層を中心に散乱した状態で出土している。

第31号跡からは縄文土器片142点（深鉢）、石器5点（打製石斧1、磨製石斧3、磨製石斧未成品1）、自然礫4点が、床面や覆土中からまばらな状態で出土している。小型の磨製石斧や磨製石斧未成品は床面から出土しており、廃絶時に遺棄されたものと思われる。

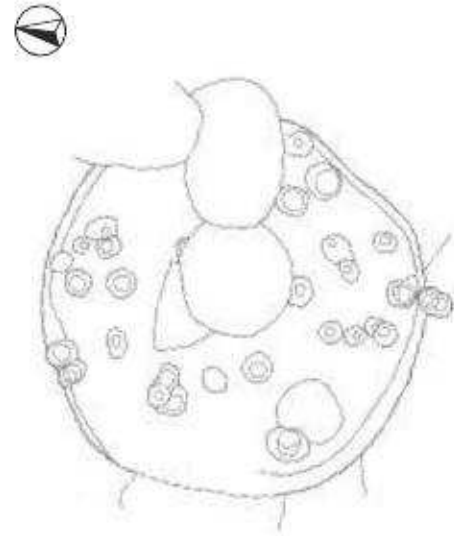
第14号跡からは縄文土器片2,240点（深鉢2,232、浅鉢7、有孔鏝付土器1）、土製品1点（土器片鏟）、石器14点（鏃1、打製石斧1、磨製石斧3、磨製石斧未成品1、磨石5、敲石1、石皿1、砥石1）、石核2点（石英）、剥片6点（瑪瑙1、チャート3、石英1、安山岩1）、石材母岩2点（瑪瑙・石英）、自然礫2点が、主に中央部の覆土中層から多量に出土している。これらの土器は残存率がやや高いが、底部などが欠損している。このことから、本跡がある程度埋め戻されて、窪地状となったところへ一括廃棄されたものと考えられる。



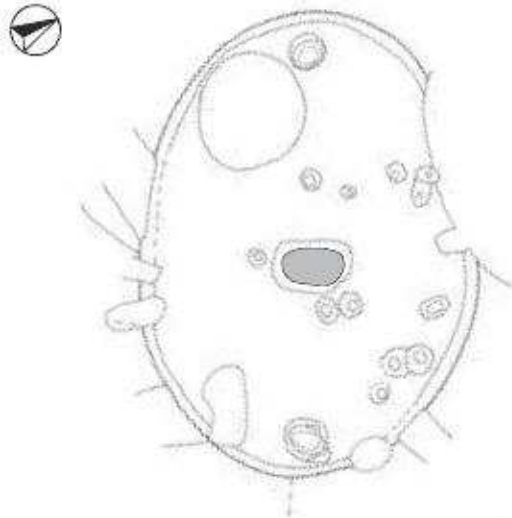
第 656 図 阿玉台Ⅳ式期の竪穴建物跡



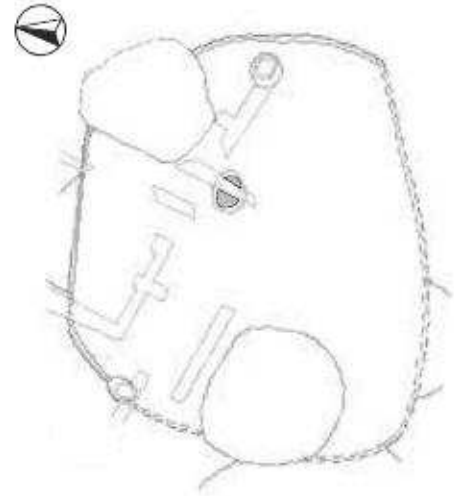
SI 14



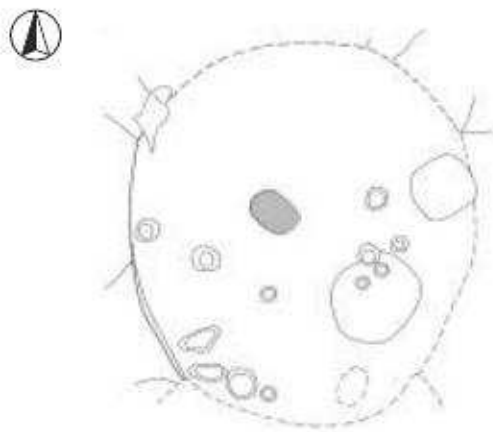
SI 5



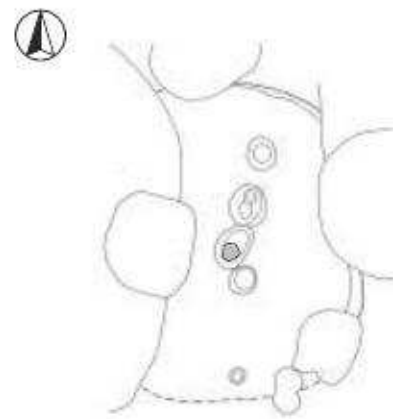
SI 7



SI 12



SI 32



SI 36
S=1/120

第 657 図 加曾利 E 1 式期古段階の竪穴建物跡

集落内での有段式竪穴建物跡の位置と土坑の分布

阿玉台Ⅳ式期の竪穴建物跡は当遺跡の台地端部に確認され、南東端部の第1A・21号跡のグループと南部の第16～18・23・30・31号跡の2つのグループが確認されている。有段式竪穴建物跡は南西に張り出す台地の南東端部に第1A号跡が、南西端部に第31号跡がそれぞれ位置する。当時期の土坑は40基確認され、その内26基が袋状土坑である。土坑は第31号跡が属する西グループの北側に多くあり、竪穴建物跡が存在する環状帯内やその内側に土坑域を形成している。有段式竪穴建物跡である第1A号跡が属する東グループ周辺には、当時期と確定された土坑はわずかである。

加曾利E1式期古段階の竪穴建物跡は、当遺跡の台地端部中央から西部にかけて弧を描くように存在する。竪穴建物跡は南部に位置し、やや間隔をおいて存在する第12・14号跡のグループと、南西端部に位置し、密接している第5・7・32・36号跡のグループが確認されている。有段式竪穴建物跡である第14号跡は、南グループの南東端部に位置する。当時期の土坑は53基確認され、その内40基が袋状土坑である。土坑は遺跡の南西端部の竪穴建物群周辺にまとまりをもって存在するものが多い。そのほか、竪穴建物が位置する環状帯の内側にも存在するが、第14号跡周辺には、当時期と確定された土坑は1基だけである。

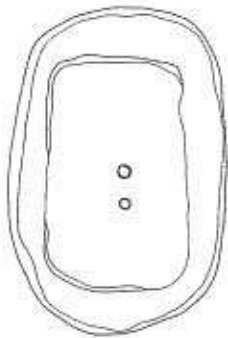
当遺跡の有段式竪穴建物跡の特徴を箇条書きすると、次のようになる。

- 1 時期は阿玉台Ⅳ式期と加曾利E1式期古段階で、当遺跡で竪穴建物跡と袋状土坑が一番多く確認されている時期に重なる。
- 2 二段の掘り込みで、炉を伴わない。
- 3 形状は隅丸長方形や楕円形で、同時期の竪穴建物より大きい。
- 4 主柱穴は4か所または2か所確認され、しっかりとした上屋を設けていたと思われる。床は踏み固められているものが多い。
- 5 数棟に一枚の割合で存在し、当遺跡では竪穴建物跡が確認されている環状帯内に位置する。
- 6 遺物は覆土中からであるが、3棟の内の2棟から多量の土器片、多量の石器・石材母岩・剥片が出土している。
- 7 集落内の有段式竪穴建物跡から少し離れたところに、袋状土坑群が存在する。

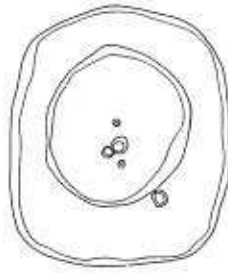
ウ) 当遺跡の有段式竪穴建物跡の性格について

有段式竪穴建物跡の出現時期については、今のところ阿玉台Ⅰb式期と考えられる。本県において、その時期の集落と有段式竪穴建物跡の関係を言及できる遺跡は見当たらなかったため、千葉県での例を取り上げる。柏市中山新田Ⅰ遺跡例は阿玉台Ⅰb式期の集落で、有段式竪穴建物の出現期のものと考えられる。中山新田Ⅰ遺跡の有段式竪穴建物跡は、前述の当遺跡の有段式竪穴建物跡の特徴である2～6までを備えていることに注目している。有段式竪穴建物跡を特徴づける「二段の掘り込みで、炉を伴わない」、「同時期の竪穴建物より大きい」、「上屋をもち、床が踏み固められている」、「数棟に一枚の割合で存在する」、「多量の土器片が出土している」の5点である。この5点を中心に据え、出土遺物や規模、土坑との関係などを考慮して有段式竪穴建物跡の性格に迫りたい。

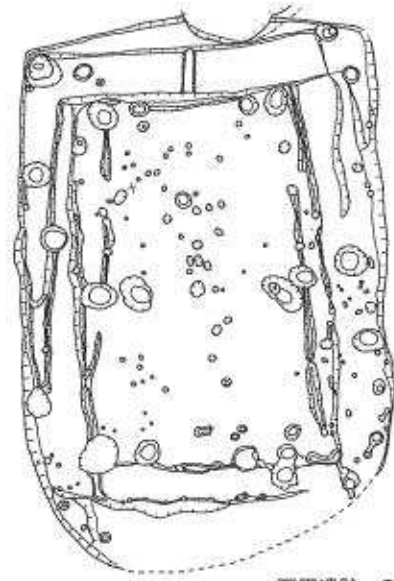
当遺跡では、阿玉台Ⅲ式期の竪穴建物跡4棟の内2棟に炉が伴い、阿玉台Ⅳ式期では、竪穴建物跡8棟の内5棟に炉が伴っている。阿玉台Ⅳ式期に竪穴建物に炉を付設することが、一般化しているようである。2の炉を付設しないことは、有段式竪穴建物跡を居住に使用しなかったからと考える。段構築



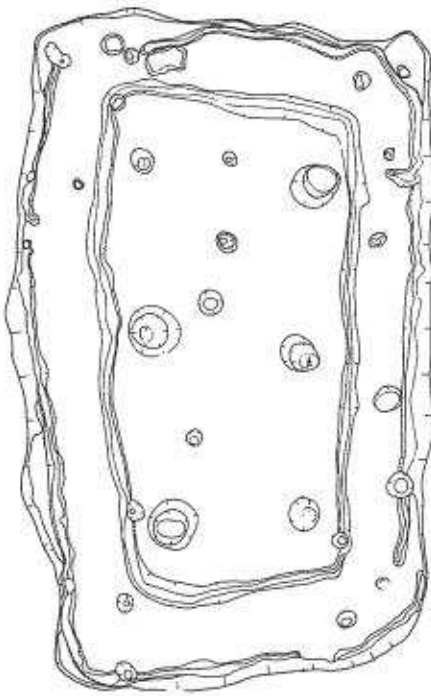
中山新田 I 遺跡 SI 96



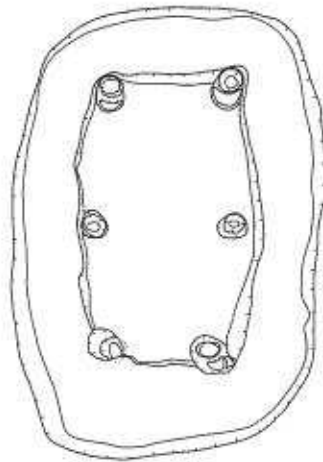
中山新田 I 遺跡 SI 97



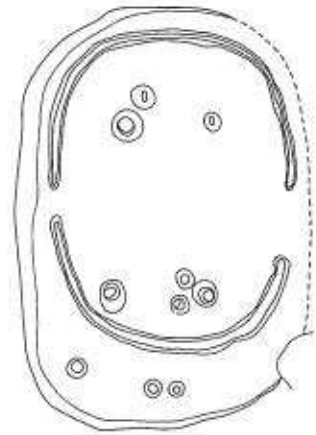
西田遺跡 SI 1



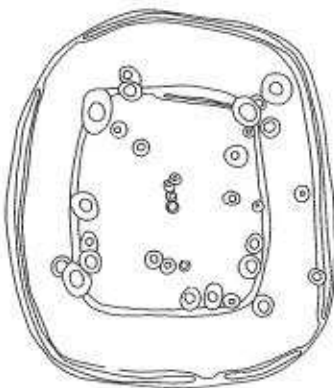
下広岡遺跡 SI 39



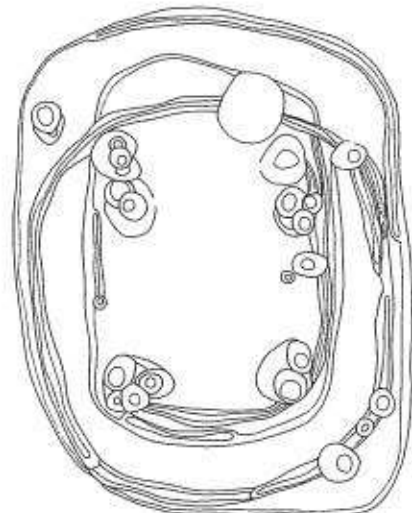
大谷津 A 遺跡 SI 65



堂東遺跡 SI 2



西塚遺跡 SI 3



西塚遺跡 SI 6

S=1/120

第 658 図 常総地域の主な有段式竪穴建物跡

については、この時期の竪穴建物には見られない構築法であり、居住とは異なる何らかの目的があったと考えられる。3・4からは、この時期の竪穴建物と同じ形状や方法で建物を造っていること、床面のピットの状況からはしっかりとした上屋を設けていたことがわかる。有段式竪穴建物跡には上屋が不可欠だったのである。炉をもたないため、床面積を有効に使うことができ、作業スペースとしていたと考えられる。そのため、床面はよく踏み固められている。5からは、数棟で共有していたと考えることができる。これらをまとめると、当地域では、有段式竪穴建物跡は阿玉台I b式期頃に出現し、竪穴建物数棟に一棟の割合で建てられ、規模は竪穴建物より大きく、集落の共有物として存在し、しっかりとした上屋と上段部・下段部のスペースをもつ建物とすることができる。

次に、当遺跡の有段式竪穴建物跡の性格について、出土遺物から検討する。第14号跡からは、報告した47点を含む2240点もの多量の土器片が、主に中央部の覆土中層からまとまって出土している。有段式竪穴建物跡に比較的残存率の高い土器が多量に投棄されている例は、中山新田I遺跡、大谷津A遺跡、下広岡遺跡、六十原遺跡、東田中遺跡、滝ノ上遺跡などでも認められている。そのほか、西田遺跡では、上段部床面から被熱した多量の雲母を含む花崗岩が出土していることが注目される。当遺跡でも、第14号跡から北東へ32mの竪穴建物跡が存在する環状帯内に位置する第635号土坑の底面中央部から、被熱した重さ22.7kgの花崗岩が出土している。この花崗岩は、土器製作時の混和材として利用するために持ち込まれた可能性が考えられている。有段式竪穴建物跡やその近くから、かなりの重さのある花崗岩が出土したことは、有段式竪穴建物の性格に関わると考える。これらのことと、有段式竪穴建物の構造的特徴である「二段の掘り込み（上段部の形成）」、「炉をもたない（下段部のスペース）」、「しっかりとした上屋をもつ（雨に濡れない）」、「数棟に一棟で、竪穴建物跡より大きい（共同利用的施設）」を考え合わせると、有段式竪穴建物は土器製作のための集落内共同作業場で、上段部を土器の乾燥場⁴⁵に使用していたと考えるのである。

さらに、有段式竪穴建物跡から出土した石器について見てみたい。第1A号跡では、重さにして4300g以上の石器14点、石材母岩・石核が97点、剥片30点などが出土していることに注目している。石材母岩・石核の材質はほとんどが瑪瑙で、次に石英が多い。剥片の材質は石英、瑪瑙、チャート、黒曜石の順である。石材母岩・石核としたものでは、100g以上のものが12点ある。第31号跡では、石器5点、礫4点が出土し、小型の磨製石斧と磨製石斧未成品が床面から一緒に出土している。第14号跡からは、石器14点、石核2点、剥片6点、石材母岩2点、自然礫2点が覆土中から出土している。第1A号跡から多量に出土した石材母岩・石核は覆土中からの出土ではあるが、第1A号跡あるいはその近くで、多量の石材を使おうとしていたことは確実である。石器の中で、当遺跡の特徴を示す一つに敲砥石があり、当遺跡では、66点出土している。敲砥石は、石斧を成形することと、刃部を研磨することの二つの工程を行うための石器である。石材として、チャート、石英、瑪瑙など石質が硬いものを使用している。第1A号跡から出土した石材母岩や石核は、敲砥石に成り得るものもあることから、敲砥石などの石器製作のために残されていたものが、何らかの事情で一括投棄されたと考える。第1A号跡は石器製作にも使用された可能性が高いと考える。

有段式竪穴建物跡から石器や剥片が比較的多く出土している遺跡として、西田遺跡、小作遺跡、西端遺跡があげられる。西田遺跡からは、石器191点、礫75点が出土している。石器191点の内訳は、鏃12、鏃未成品14、楔形石器2、剥片132、碎片22、鏃調整碎片2、石錐1、調整痕剥片2、磨製石斧3、凹石1である。西田遺跡の有段式竪穴建物跡については、鏃などの石器製作のための建物とされている。

小作遺跡では、有段式竪穴建物跡と考えられる第34号跡から石器2点（鏃）、剥片55点（黒曜石）が床面から覆土下層にかけて出土している。剥片55点の材質がすべて黒曜石であることなどから、第34号跡は鏃などの石器製作のための作業場と考えられている。西塙遺跡第6号跡からは、床面や覆土下層を中心に、近くを流れる那珂川で採集できる石を用いた石器・石製品24点（垂飾り1、磨製石斧1、磨石19、多孔石1、石皿1、台石1）が出土している。磨石が多いことから、磨石を用い、製粉を行っていた施設の可能性が指摘されている。有段式竪穴建物跡の用途として、西田遺跡や小作遺跡では石器製作のための作業場と、西塙遺跡では石器を利用した製粉を行った施設として、それぞれ考えられる。

また、第1A号跡から7点、第14・31号跡から各4点（未成品各1点）、当遺跡全体からは123点も出土した磨製石斧（定角式32、短冊形11、鉾形5、小型26、極小型23、未成品26）について述べる。磨製石斧の石材としては、砂岩・ホルンフェルス・角閃岩・緑色岩・変質ドレライト・変質閃緑斑岩・蛇紋岩などが用いられ、遠方から入手しなければならないものも多い。遠方からの石材入手には、石材との交換品が必要である。各地域に存在すると思われる拠点集落においては、その地域に必要なものを手に入れるために交易品となるべきものをもっていなければならない。当遺跡の場合、多量に出土した敲砥石と、それを使用して作った磨製石斧が交易品に関係していると考えられる。磨製石斧で作るものは木製品であり、それを交易品としていたと考えるのである。木製品作りのための道具として、磨製石斧を多量に必要とし、磨製石斧を作るため、敲砥石も多量に必要だったと考える。そういうふうに見てくると本建物は、石器作りの作業場でもあり、木製品を作るための作業場でもあったと考えられるのである。

最後に、有段式竪穴建物跡と袋状土坑との関連について述べる。本報告書では、袋状土坑の用途を「食料貯蔵用」としている。確かに、当遺跡における有段式竪穴建物跡の時期と袋状土坑数のピークの時期はほぼ一致している。しかし、阿玉台Ⅰb式期の水砂遺跡、中山新田Ⅰ遺跡、阿玉台Ⅱ式期の小作遺跡、阿玉台Ⅲ式期の大谷津A遺跡では、袋状土坑は確認されていない。有段式竪穴建物跡と袋状土坑との関わりが考えられない遺跡も存在するのである。一方、茨城県北部では、袋状土坑は阿玉台Ⅰa式期には存在している。常陸大宮市三美中道遺跡では、阿玉台Ⅱ式期の有段式竪穴建物跡の中に袋状土坑が作られ、有段式竪穴建物跡周辺にも数基の袋状土坑が確認されている。茨城県北部では、茨城県南部よりやや早く、有段式竪穴建物跡と袋状土坑は関わっている可能性が高いのである。そして、有段式竪穴建物跡の役割に食料管理に関する作業が加わっていたと思われる。有段式竪穴建物跡を集落共同の作業場としたが、冬季のための食料保存を袋状土坑に託している集落では、新たに食料管理のための作業が加わったと予想する。堅果類・根茎類の選別、乾燥、それを入れるための袋や籠作りなどである。

茨城県南部や千葉県方面で、袋状土坑の採用が多くなるのは阿玉台Ⅲ式期頃である。下広岡遺跡では、この時期から環状集落が形成されている。下広岡遺跡の有段式竪穴建物跡は環状の竪穴建物群の中に複数存在し、第39号跡のような大規模な建物も登場している。袋状土坑は意図的に環状帯の中に群として配置され、食料は、集落として管理されるようになってきているのである。

このように、有段式竪穴建物跡は、数棟に一棟の割合で存在する多目的屋内作業場として機能していた。土器作り、土器乾燥場、石器作り、木製品作り、食料加工、堅果類選別などの作業を時季を決め行っていたと考える。集落の規模により、大きさや棟数に違いはあるが、出現時から、有段式竪穴建物跡の特徴である「段をもつこと」「上屋があること」「炬を伴わないこと」「竪穴建物より大きいこと」は引き継がれてきた。加曾利E2式期頃、有段式竪穴建物はその役割を終えて、施設としては姿を消すようである。

表7 県内有段式竪穴建物跡一覧

番号	遺跡名	建物番号	平面形	規 模		柱穴数 (主柱穴数)	床	壁溝	如	時 期	出土遺物など	
				長径×短径 (m)	面積 (㎡)							
1	笠岡市 西田遺跡	1	上段	不整長方形	8.97 × 5.90	41.54	22	硬	有	無	阿玉台Ⅰb	土器片 1,645 点 石器 191 点 燧石 75 点 銅片 132 点 上段部床面から核熱花崗岩 出土
			下段	長方形	6.70 × 3.90	26.13	(6)	硬	有			
2	筑西市 東家遺跡	2	上段	隅丸長方形	6.70 × 4.60	27.74	10	軟	無	無	阿玉台Ⅱ	土器片 459 点 石器 1 点
			下段	楕円形	5.10 × 3.80	15.21	(4)	軟	有			
3	阿見町 小作遺跡	34	上段	—	上段部削平	—	7	—	—	無	阿玉台Ⅱ	土器片 128 点 石器・銅片 57 点
			下段	長方形	4.70 × 3.85	18.10	(6)	硬	無			
4	常陸大宮市 三美中遺跡	1	上段	隅丸長方形	6.93 × 4.78	29.81	7	—	一部	無	阿玉台Ⅱ	土器 126 点 石器 55 点 銅片・燧石 197 点
			下段	隅丸長方形	5.25 × 3.30	15.59	(4)	—	有			
5	常陸大宮市 三美中遺跡	2	上段	不整円形	5.40 × 4.73	21.05	8	—	無	無	阿玉台Ⅱ	土器片 36 点 石器 20 点 銅片・燧石 45 点
			下段	不整円形	3.35 × 2.85	7.49	(4)	—	無			
6	鹿嶋市 鍛冶台遺跡	12	上段	長方形	6.40 × 4.10	26.24	10	—	有	無	阿玉台Ⅲ	土器片少量 石器 2 点 土器片鏽 3 点 床面小ピット多数
			下段	長方形	5.20 × 3.80	19.76	(4)	—	一部			
7	土浦市 下広岡遺跡	39	上段	長方形	10.32 × 6.49	66.98	9	—	有	無	阿玉台Ⅲ	土器片 7,668 点 石器・燧石 73 点
			下段	長方形	7.95 × 4.05	32.20	(6)	硬	有			
8	常陸大宮市 滝ノ上遺跡	4	上段	—	上段部削平	—	—	—	—	無	阿玉台Ⅲ	土器片多量 床面大型燧石
			下段	隅丸方形	2.94 × 2.80	7.41	(4)	—	有			
9	常陸市 大谷津 A 遺跡	65	上段	隅丸長方形	6.96 × 4.75	29.75	6	硬	無	無	阿玉台Ⅲ	土器片 1,134 点 石器・石 29 点
			下段	長方形	4.54 × 2.90	13.17	(6)	硬	無			
10	茨城町 宮後遺跡	199	上段	隅丸長方形	6.66 × 4.56	27.33	4	軟	無	無	阿玉台Ⅲ-Ⅳ	土器片 657 点 石器 3 点
			下段	隅丸長方形	4.84 × 2.84	12.37	不明	—	無			
11	日立市 諏訪遺跡	1	上段	隅丸方形	4.82 × 4.12	17.87	6	硬	無	無	阿玉台Ⅲ-Ⅳ (大木 8 a)	土器片多量 石器やや多い
			下段	方形	2.32 × 2.84	6.59	(4)	硬	無			
12	日立市 諏訪遺跡	2	上段	ほぼ円形	径 4.60	16.61	7	—	一部	無	阿玉台Ⅲ-Ⅳ (大木 8 a)	土器片散在 石器 11 点
			下段	方形	2.20 × 2.70	5.94	(4)	—	無			
13	石岡市 東大橋遺跡	D-II	上段	隅丸方形	4.10 × 3.25	11.99	9	硬	無	無	阿玉台Ⅲ-Ⅳ	土器片少量
			下段	方形	2.15 × 2.15	4.62	(2)	硬	無			
14	石岡市 大作台遺跡	1	上段	隅丸方形	4.90 × 4.60	20.29	28	硬	無	無	阿玉台Ⅲ-Ⅳ	土器片やや多量
			下段	方形	3.00 × 3.00	9.00	(4)	—	一部			
15	石岡市 大作台遺跡	2	上段	隅丸方形	4.10 × 4.50	16.61	11	—	無	無	阿玉台Ⅲ-Ⅳ	土器片多量
			下段	隅丸方形	2.60 × 2.60	6.08	(4)	—	有			
16	常陸大宮市 三美中遺跡	5	上段	ほぼ円形	[径 4.30]	[14.51]	11	—	有	無	阿玉台Ⅲ-Ⅳ	土器片 5 点 石器 6 点 石核・銅片・燧石・母岩 45 点 北半分削平
			下段	ほぼ円形	[径 2.50]	[4.91]	(2)	—	無			
17	日立市 上の代遺跡	3	上段	長方形	10.0 × 5.70	57.00	多数	—	有	有	阿玉台Ⅳ	土器片少量
			下段	長方形	6.80 × 3.80	25.84	(4)	硬	有			
18	土浦市 下広岡遺跡	4	上段	隅丸長方形	6.20 × 5.30	29.57	16	硬	有	無	阿玉台Ⅳ	土器片 4,360 点 石 71 点
			下段	隅丸長方形	4.20 × 3.50	13.25	(4)	硬	無			
19	土浦市 下広岡遺跡	81	上段	不整台形	6.45 × 5.30	30.77	多数	硬	有	無	阿玉台Ⅳ	土器片 3,474 点 石 64 点 2 回披張
			下段	不整台形	3.60 × 2.55	8.26	(4)	硬	有			
20	阿見町 鳥津遺跡	3区 12	上段	隅丸長方形	9.52 × 5.01	42.93	6	硬	有	無	阿玉台Ⅳ	土器片やや多量 床小ピット多数
			下段	隅丸長方形	7.35 × 4.26	28.18	(6)	硬	有			
21	取手市 西方貝塚	B1	上段	台形	4.00 × 3.60	14.40	4	—	無	無	阿玉台Ⅳ	
			下段	方形	2.40 × 2.00	4.80	(4)	硬	—			
22	鹿嶋市 鍛冶台遺跡	42	上段	隅丸長方形	(6.40) × 5.20	29.95	10	—	有	無	阿玉台Ⅳ	土器片少量 石器 3 点 土器片鏽 2 点
			下段	長方形	4.24 × 2.92	12.38	(4)	硬	有			
23	東海村 堀米 A 遺跡	5	上段	[隅丸長方形]	[6.50 × 5.50]	[32.18]	9	硬	無	無	阿玉台Ⅳ (大木 8 a)	土器片 1,205g 燧石 1,180g
			下段	[隅丸方形]	[4.20 × 4.00]	[15.12]	(6)	硬	無			

番号	遺跡名	建物番号	平面形	規 格		柱穴数 (主柱穴数)	床	壁溝	切	時 期	出土遺物など
				長径×短径 (m)	面積 (㎡)						
24	常陸大宮市 西堀遺跡	3	上段	隅丸長方形	5.95 × 5.17	27.69	33		有	無	阿玉台Ⅳ 土器片少量 石器3点
			下段	隅丸長方形	3.61 × 3.14	10.20	(4)		有	無	
25	常陸大宮市 滝ノ上遺跡	55	上段	隅丸長方形	7.54 × 4.70	31.89	18	貼床	有	無	阿玉台Ⅴ 土器片4438点 石器181点 床小ビット多数
			下段	隅丸長方形	5.20 × 2.40	11.23	(4)	礎	無	無	
26	常陸大宮市 西堀遺跡	6	上段	隅丸長方形	8.05 × 6.30	45.64	13	貼床	有	無	阿玉台Ⅴ- 加曾利E1 土器片多量 石器23点 拡張
			下段	隅丸長方形	6.20 × 4.10	22.88	(4)	貼床	有	無	
27	つくば市 小山台貝塚	1	上段	長方形	6.50 × 4.35	28.28	24	礎	無	無	阿玉台Ⅴ- 加曾利E1
			下段	長方形	3.80 × 2.70	10.26	不明	礎	無	無	
28	土浦市 下広岡遺跡	8	上段	隅丸長方形	7.50 × 5.20	35.10	多数	礎	有	無	阿玉台Ⅴ- 加曾利E1 土器片769点 石11点
			下段	隅丸長方形	4.50 × 3.40	13.77	(4)	礎	有	無	
29	土浦市 下広岡遺跡	40	上段	不整隅丸方形	3.70 × 3.50	11.66	多数		有	無	阿玉台Ⅴ- 加曾利E1 土器片239点 石4点
			下段	不整隅丸方形	3.04 × 1.94	5.31	(4)		有	無	
30	土浦市 下広岡遺跡	54	上段	隅丸長方形	7.39 × 5.60	37.20	多数	礎	有	無	阿玉台Ⅴ- 加曾利E1 土器片1565点 石25点
			下段	隅丸長方形	4.90 × 3.40	14.99	(4)	礎	有	無	
31	土浦市 下広岡遺跡	10	上段	隅丸台形	6.40 × 4.80	27.65	15		有	無	阿玉台Ⅴ- 加曾利E2 土器片345点 石6点
			下段	隅丸方形	4.15 × 3.15	11.77	(4)	礎	有	無	
32	土浦市 下広岡遺跡	18	上段	隅丸長方形	6.80 × 5.50	33.66	31	礎	有	無	阿玉台Ⅴ- 加曾利E2 土器片1833点 石18点
			下段	隅丸長方形	5.04 × 3.60	16.33	(4)	礎	有	無	
33	土浦市 下広岡遺跡	68	上段	楕円形	6.32 × 4.35	21.58	16		有	無	阿玉台Ⅴ- 加曾利E2 土器片863点 石13点
			下段	楕円形	4.00 × 2.38	7.47	(4)		有	無	
34	つくば市 小山台貝塚	2	上段	円形	4.10 × 3.80	12.23	16	礎	無	無	阿玉台Ⅴ- 加曾利E2
			下段	長方形	2.30 × 2.10	4.83	(4)	礎	無	無	
35	牛久市 赤塚遺跡	15	上段	不整長方形	7.30 × 5.40	35.48	9		無	無	加曾利E1 土器片少量 土器片録5点 石器・銅片15点
			下段	長方形	4.80 × 2.97	13.84	(4)	礎	無	無	
36	土浦市 六千原遺跡	11	上段	楕円形	6.17 × 5.06	24.51	5	礎	有	無	加曾利E1 土器片多量 石器1点 土器片録9点
			下段	隅丸長方形	4.16 × 2.86	10.71	(4)	礎	有	無	
37	石岡市 東田中遺跡	15	上段	隅丸長方形	5.95 × 4.96	25.56	12		有	(有)	加曾利E1 土器片870点 土製品11点 石器・銅片2点
			下段	隅丸長方形	4.64 × 3.80	15.87	(4)	礎	有	無	
38	石岡市 東田中遺跡	20	上段	-	上段部倒平	-	-	-	-	無	加曾利E1 土器片63点 土製品1点 石器1点
			下段	隅丸長方形	4.32 × 2.42	9.41	(4)	礎	有	無	
39	阿見町 竹米遺跡	21	上段	隅丸長方形	8.47 × 5.80	44.21	5	礎	有	無	加曾利E1 -E2 土器片少量
			下段	隅丸長方形	5.96 × 3.84	20.60	(6)	礎	無	無	
40	常陸大宮市 滝ノ上遺跡	14	上段	ほぼ円形	5.17 × 4.90	19.89	14		有	無	加曾利E1 -E2 土器片2点 石器・銅片・礫18点
			下段	隅丸方形	3.13 × 3.13	8.82	(4)		一部	無	
41	鹿嶋市 敷治台遺跡	128	上段	不整隅丸方形	8.10 × 7.80	56.86	多数		有	無	加曾利E2 土器片少量 石器1点 床小ビット多数
			下段	長方形	5.50 × 3.20	17.60	(4)		有	無	
42	常陸大宮市 西堀遺跡	5	上段	[楕円形]			(3)		無	無	詳細な 時期不明 土器片少量 2/3調査区外
			下段	[隅丸方形]			(1)		無	無	
43	鉾田市 吉十北遺跡	1A	上段	隅丸長方形	7.25 × 6.51	42.48	18		有	無	阿玉台Ⅳ 土器片1390点 土製品2点 石器14点 母岩・銅片97点
			下段	隅丸長方形	4.70 × 3.83	16.20	(4)	礎	一部	無	
44	鉾田市 吉十北遺跡	31	上段	楕円形	6.20 × 4.70	22.87	15		有	無	阿玉台Ⅳ 土器片142点 石器5点 礫4点
			下段	楕円形	3.25 × 2.35	5.99	(6)	礎	一部	無	
45	鉾田市 吉十北遺跡	14	上段	隅丸長方形	7.60 × 7.10	48.56	3		有	無	加曾利E1 土器片2240点 土製品1点 石器14点 石核・銅片・母岩・礫12点
			下段	隅丸長方形	4.80 × 4.15	17.93	(3)		無	無	

※ 建物跡の面積の算出については、次の計算式で行った。

長方形・方形…長軸×短軸 隅丸長方形・隅丸方形…長軸×短軸×0.9 楕円形・ほぼ円形…長径×短径×π÷4

(2) 特徴ある石器について

本報告で取り上げた石器・石製品の総数は439点である。その内訳は、ナイフ形石器2点、角錐状石器1点、尖頭器1点、スクレイパー4点、石錐2点、鏃24点、鏃未成品4点、異形石器3点、楔形石器1点、加工痕のある剥片12点、打製石斧86点、磨製石斧97点、磨製石斧未成品26点、敲砥石66点、敲石17点、砥石38点、台石3点、磨石13点、凹石7点、石皿13点、多孔石1点、石錘5点、浮子3点、石棒3点、石剣3点、球状耳飾り1点の他、石核1点、母岩1点、粘土への混和石材1点である。使用石材は、表8に示したように、34種類が確認されている⁴⁶⁾。

表8 石器・石製品石材一覧

器種	石 材																																		合 計			
	砂岩	ホルンフェルス	チャート	角閃岩	安山岩	緑色頁岩	石英斑岩	石英	花崗石	頁岩	瑪瑙	粘板岩	アフライト	黒色安山岩	流紋岩	閃緑岩	変質ドレライト	雲母片岩	石英片岩	変質安山岩	凝灰岩	緑色凝灰岩	変質閃緑岩	蛇紋岩	黒曜石	閃緑斑岩	緑泥片岩	緑色片岩	斑れい岩	変質流紋岩	輝緑岩	黄色碧玉	凝岩	輝石				
剥片石器	ナイフ形石器																2																				2	
	尖頭器														1																						1	
	角錐状石器																									1											1	
	スクレイパー		2				1	1																													4	
	石錐		1									1																									2	
	鏃	1	18		1									3		1																					24	
	鏃未成品		4																																		4	
	異形石器	1									2																											3
	楔形石器		1																																			1
加工痕のある剥片		2					3	2	1				3									1														12		
打製石斧	分銅形	2	18		1										1																					22		
	撥形	7	16		7	4	3	5				5	1					1	3	1																53		
	新形	3			1					2									1																		7	
	小型	2	2																																		4	
磨製石斧	定角式	13	1		1	4	4								1	1					1	2		1		1		1		1					32			
	短冊形	1	1		4	3										1													1							11		
	新形	2	1											1					1																	5		
	小型	3	5		5	10	1			1						2			1		1	1	1													26		
	極小型	2	4		12	2				2													1														23	
未成品	13	2		2	1	3						2		2	1																					26		
工 具	敲砥石	10	2	17	1	2	3	6	11	2		4	3	2							1						1									66		
	敲石	8	1	3		1	1	2							1																					17		
	砥石	17			1	1	4		6	1		1	2	1	2	1														1						38		
	台石	2	1																																		3	
調理具	磨石	6			4	1	1						1																								13	
	凹石	3			4																																7	
	石皿	7			3				1									2																			13	
	多孔石								1																												1	
漁具	石錘	1	1		3																																5	
	浮子																																				3	
装身具	石棒								2			1																									3	
	石剣				1							1																									1	
	球状耳飾り				1																																1	
その他	石核											1																									1	
	母岩										1																										1	
	混和用石材								1																												1	
合 計	97	55	48	34	30	28	22	18	13	10	10	9	8	8	6	5	5	4	4	3	3	3	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	439		

石器及び石製品は、ほとんどが縄文時代中期の遺構から出土しており、当集落の性格をうかがい知ることのできる資料である。ここでは、今回出土した石器類の中でも当遺跡の特異性と捉えられる「敲砥石」を中心に、関連石器として打製石斧・磨製石斧を含めて考察し、まとめたい。

ア) 敲砥石について (第 659～667 図 グラフ 10)

円盤の周縁部が複数面にわたって研磨されているそろばん玉状の礫である。類例としては、縄文時代中期から後期にかけて出土し、「多面体敲石」⁴⁷⁾「凸多面体磨き石」⁴⁸⁾「多面体磨石」⁴⁹⁾「硬質敲石」⁵⁰⁾などと呼ばれている石器である。

グラフ 10 敲砥石の使用石材



今回、「敲砥石」と呼称したのは、一つの道具で「敲き・(敲打)」と「磨き・(研磨)」の二つの作業工程が想定されたことにある⁵¹⁾。

出土点数は 66 点で、使用石材はチャートが 17 点 (25.8%)、石英 11 点 (16.7%)、砂岩 10 点 (15.2%)、石英斑岩 6 点 (9.1%)、瑪瑙 4 点 (6.1%)、緑色岩・アブライト各 3 点 (4.5%)、ホルンフェルス・安山岩・花崗岩・黒色安山岩が各 2 点 (3.0%)、角閃岩・凝灰岩・緑泥片岩・黄色碧玉が各 1 点 (1.5%) で、硬質な石材が使用されている。

敲打面・砥面の部位や形状から、以下の A～G に分類できる。

A 類 円盤の周縁部に多方向からの砥面により稜をもつもの (第 659・660 図)

27 点が確認でき、全体の 40.9% である。使用石材は、チャートが 13 点と圧倒的に多く、48% を占めている。次いで石英 4 点、砂岩 3 点、瑪瑙・アブライトが各 2 点、安山岩・黒色安山岩・黄色碧玉が各 1 点である。最大重量は 462.3g、最小重量 119.5g、平均重量は 263.8g である。

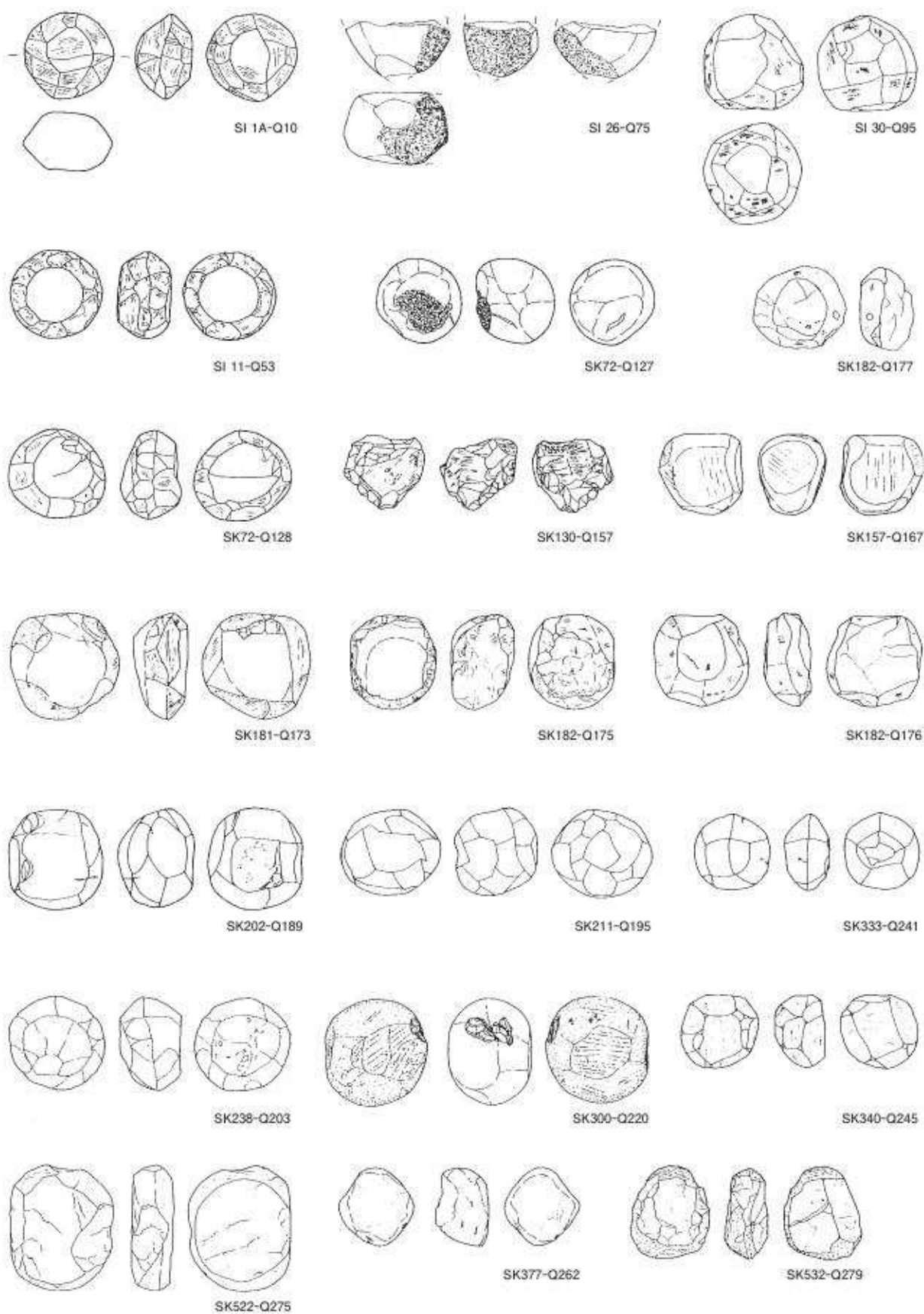
円盤の側縁を周回するように研磨しており、しかも双方向からの研磨により中央部に稜をもち、そろばん玉状を呈している。片手に入る大きさがほとんどであり、加工対象物を片手に持ち、もう片方の手で研磨したものと考えられる。

B 類 楕円盤の周縁部に敲打及び多方向からの砥面により稜をもつもの (第 661・662 図)

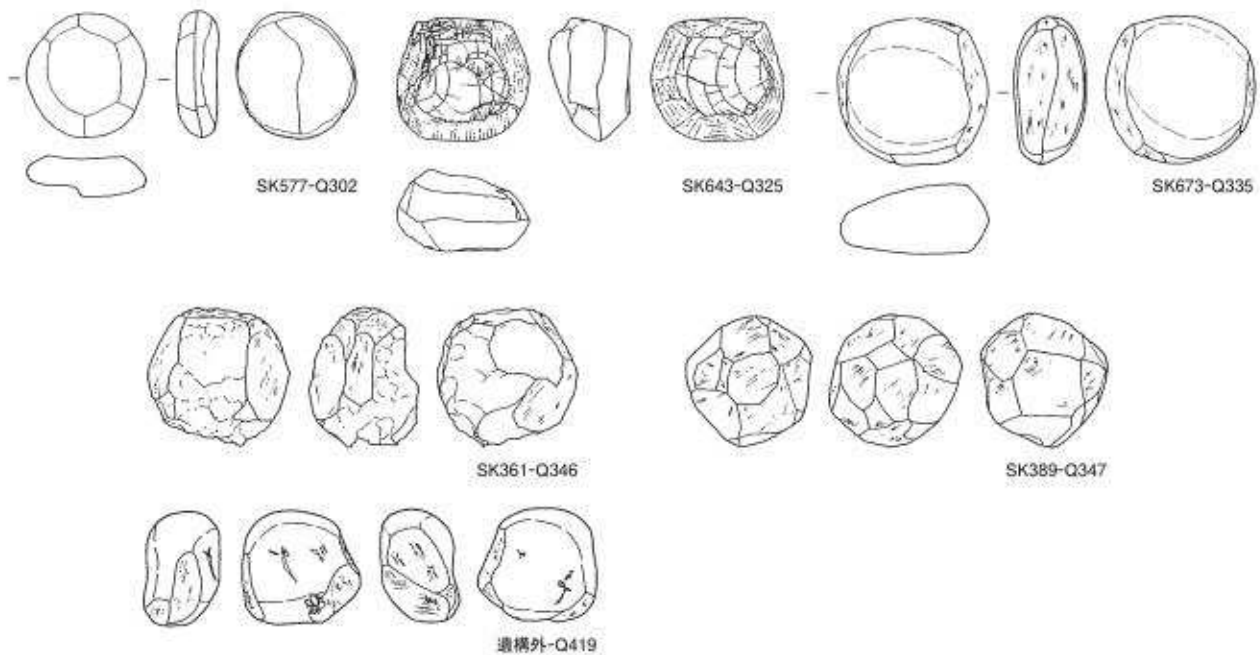
17 点が確認でき、全体の 25.8% である。使用石材は、チャート 4 点、石英 3 点、瑪瑙・石英斑岩が各 2 点、砂岩・角閃岩・緑色岩・花崗岩・アブライト・緑泥片岩が各 1 点である。最大重量は 979.5g、最小重量 62.9g、平均重量は 379.5g で、A 類より大型の礫が使われていることから、研磨する物は置か固定するかして、両手で使用したものと考えられる。

C 類 円盤の周縁部一面に敲打面・砥面をもつもの (第 663 図)

5 点が確認できた。使用石材は、石英斑岩が 2 点、砂岩・花崗岩・黒色安山岩が各 1 点で、最大重量は 447.6g、最小重量 85.7g、平均重量は 288.5g である。



第 659 図 敲砥石 A 類 (1)



第 660 図 敲砥石 A 類 (2)

D 類 円礫の側縁部に敲打面・砥面をもつもの (第 664 図)

5 点が確認できた。使用石材は、石英が 2 点、緑色岩・凝灰岩・石英斑岩が各 1 点で、最大重量は 671.7g、最小重量 79.4g、平均重量は 358.9g である。

E 類 楕円礫の両端及び側縁部に敲打面・砥面をもつもの (第 665 図)

6 点が確認できた。使用石材は、ホルンフェルスが 2 点、砂岩・安山岩・石英斑岩・石英が各 1 点で、最大重量は 549.3g、最小重量 217.5g、平均重量は 338.0g である。

F 類 円礫の両端部に敲打面・砥面をもつもの (第 666 図)

3 点が確認できた。使用石材は、いずれも砂岩で、最大重量は 355.2g、最小重量 102.8g、平均重量は 229.0g である。

G 類 円礫の片端部を敲打面・砥面をもつもの (第 667 図)

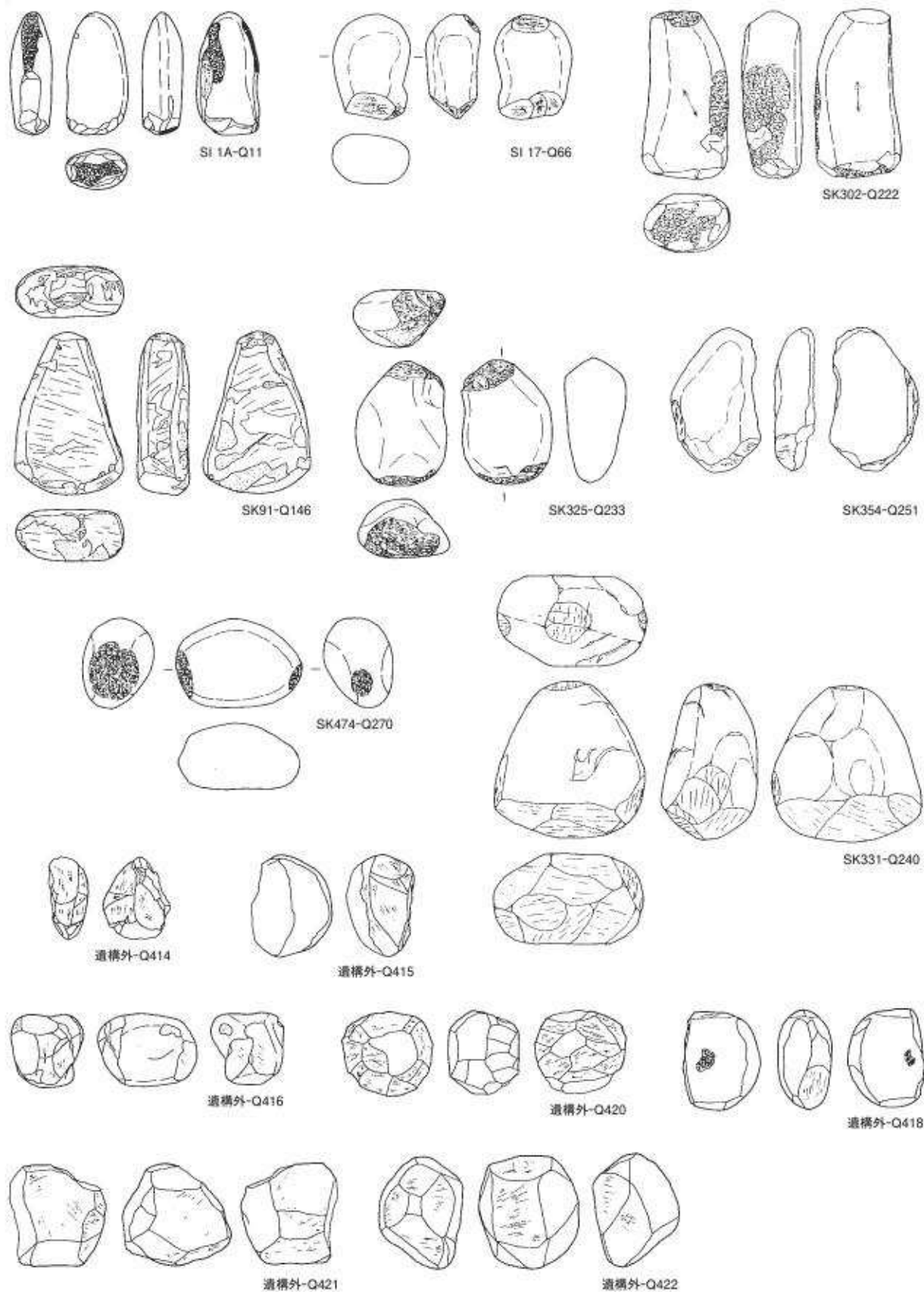
3 点が確認できた。使用石材は、砂岩・緑色岩・石英が各 1 点で、最大重量は 344.6g、最小重量 127.1g、平均重量は 240.1g である。

グラフ 11 敲石の使用石材

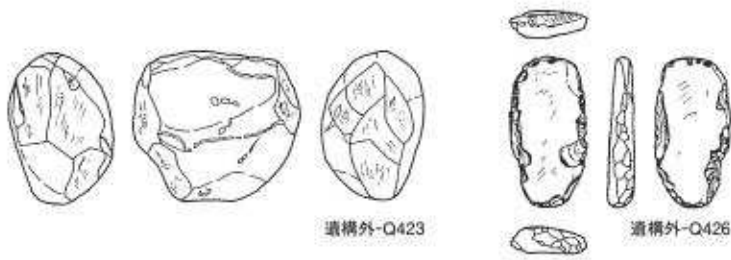


イ) 敲石について (第 668・669 図 グラフ 11)

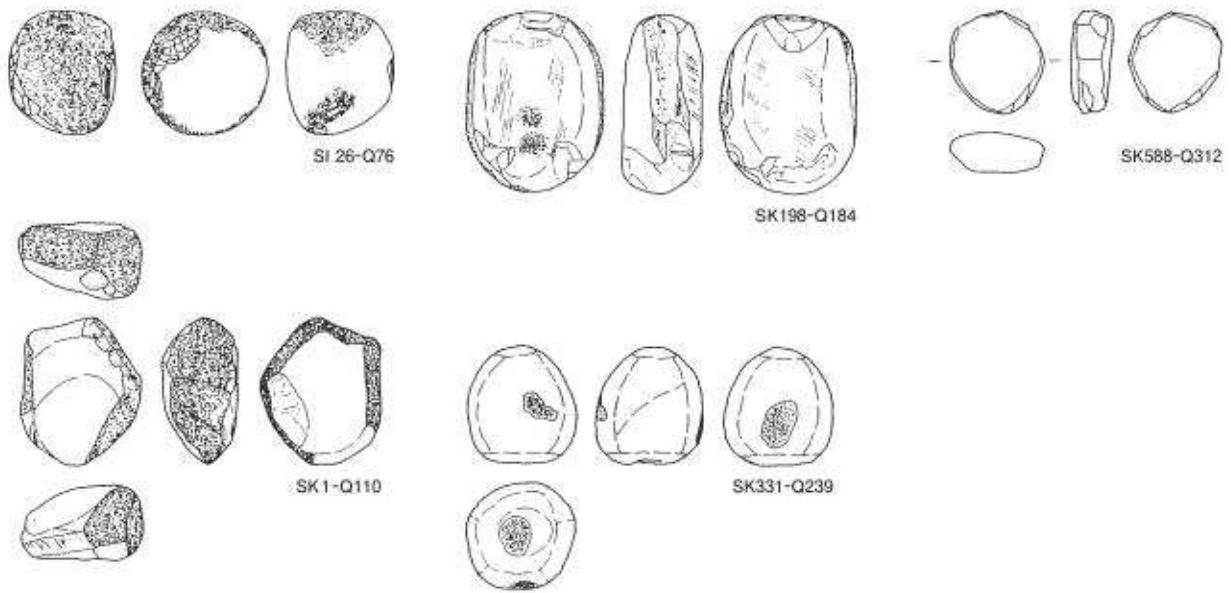
敲打痕のみで砥面が見られないもので、一般に敲石やハンマーと言われるものが、17 点確認できた。使用石材は、砂岩が 8 点 (47.1%)、チャート 3 点 (17.6%)、石英 2 点 (11.7%)、ホルンフェルス・緑色岩・石英斑岩・流紋岩が各 1 点 (5.9%) で、最大重量は 717.6g、最小重量 44.1g、平均重量は 301.9g である。



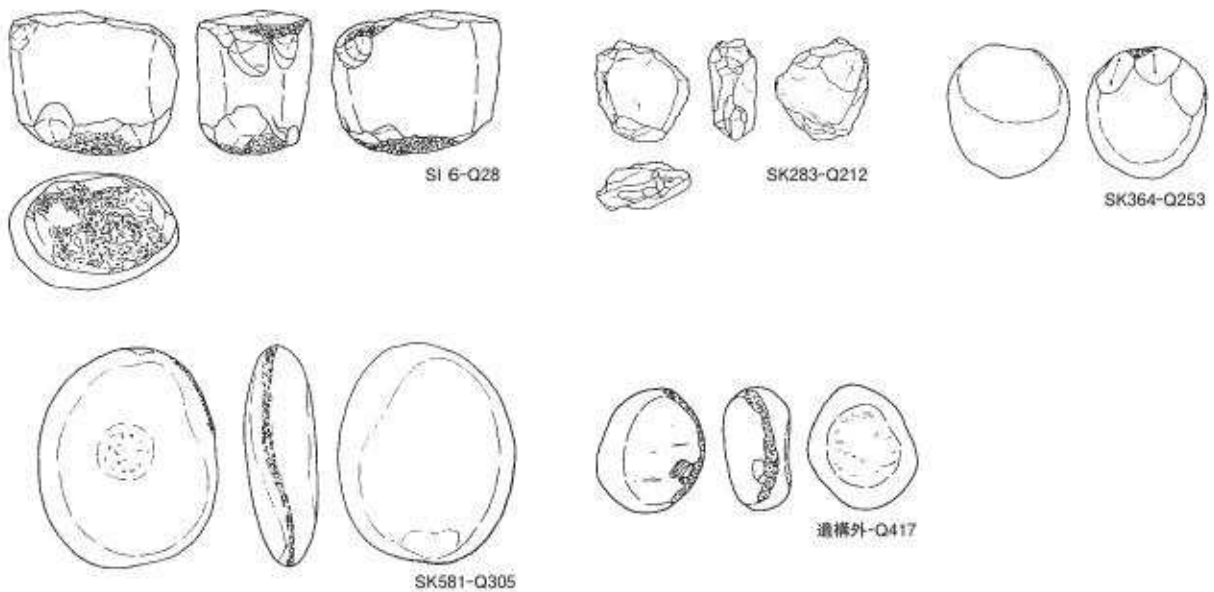
第 661 図 敲砥石 B 類 (1)



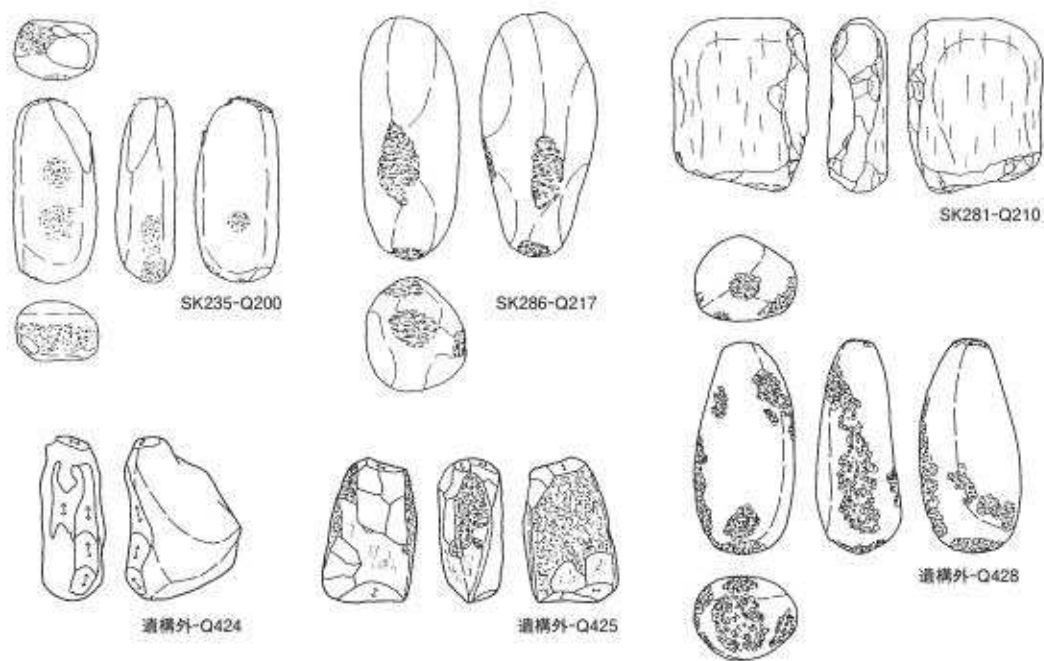
第 662 図 敲砥石B類 (2)



第 663 図 敲砥石C類



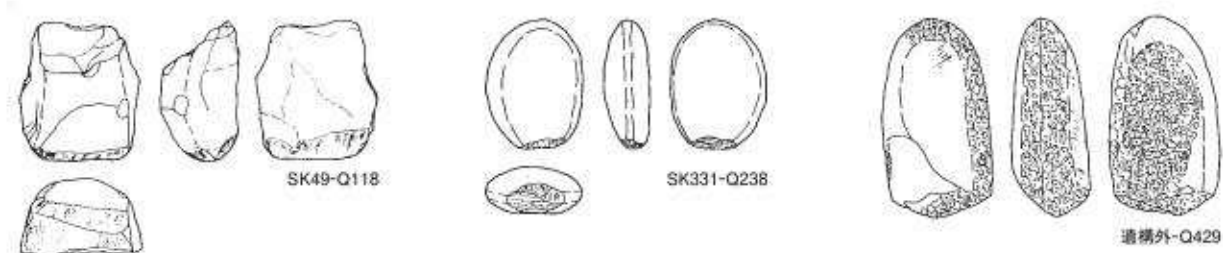
第 664 図 敲砥石D類



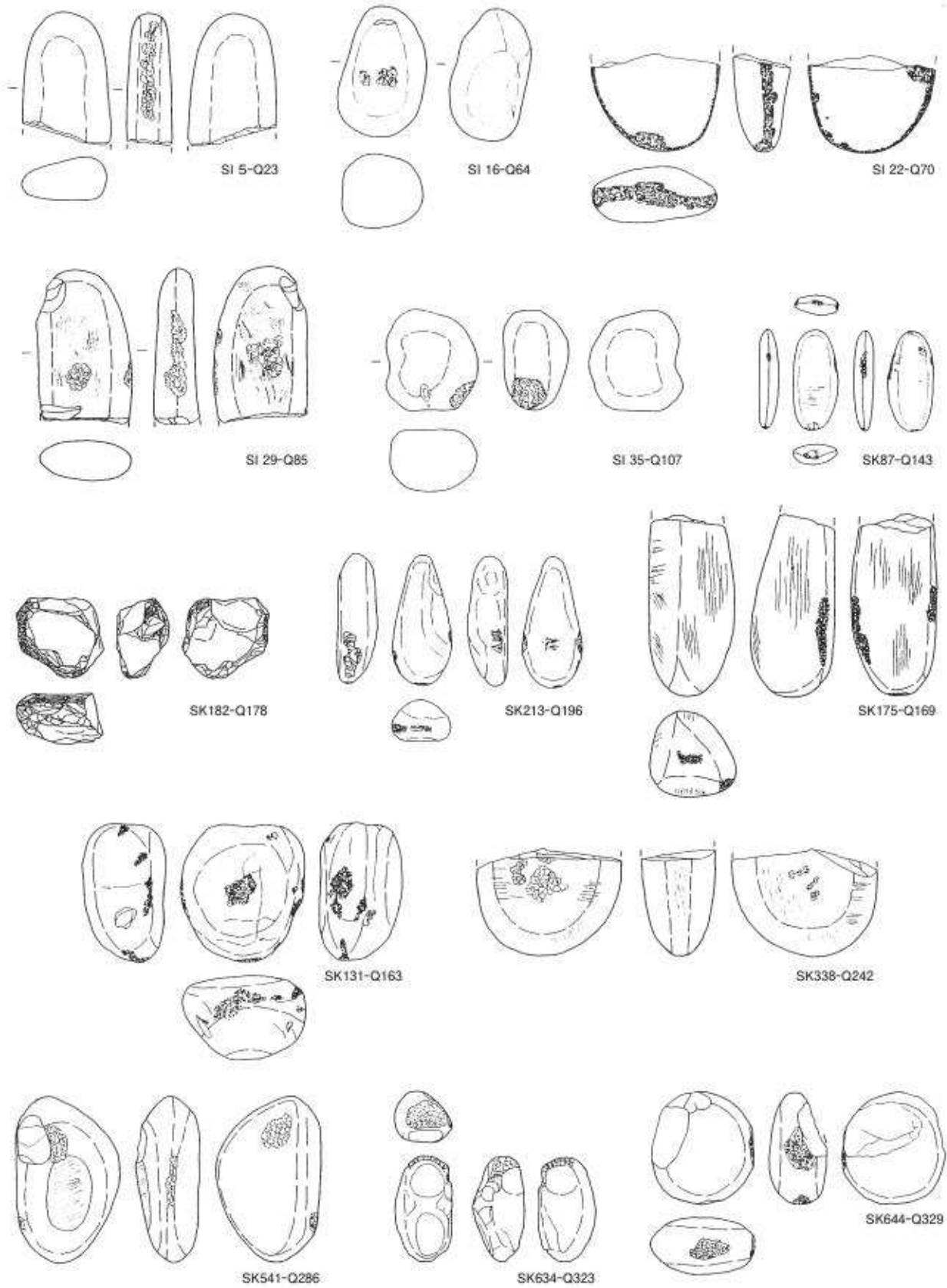
第 665 図 敲砥石 E 類



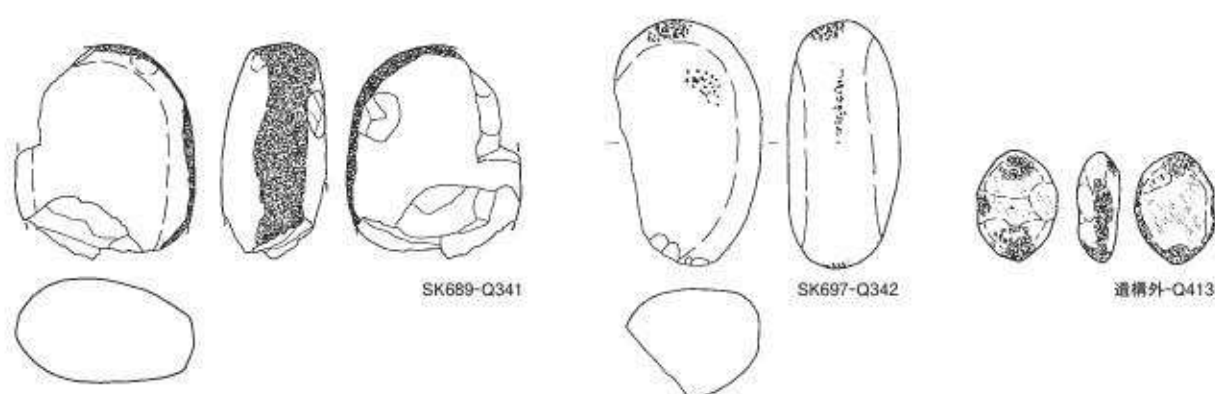
第 666 図 敲砥石 F 類



第 667 図 敲砥石 G 類



第 668 図 敲石 (1)



第 669 図 敲石(2)

ウ) 磨製石斧について (第 670～677 図 グラフ 12～16)

磨製石斧は 123 点が出土している⁵⁰⁾。形状により、定角式 32 点 (26.0%)、短冊形 11 点 (8.9%)、新形 5 点 (4.1%)、小型 26 点 (21.1%)、極小型 23 点 (18.7%)、未成品 26 点 (21.1%) に分類できる。

定角式磨製石斧 (第 670・671 図 グラフ 12)

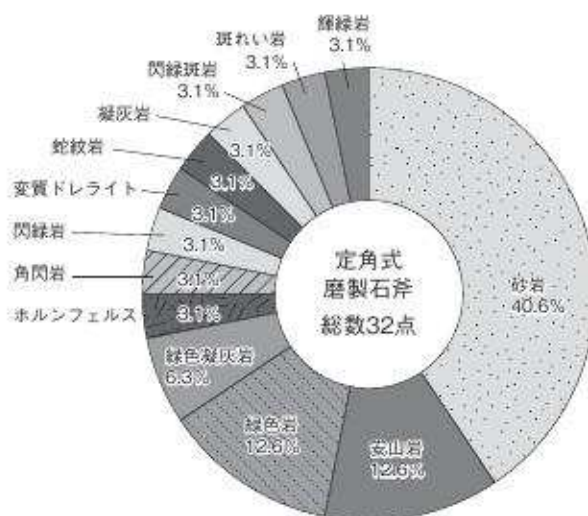
周縁部に明確な稜をもち、断面が長方形で、全体を研磨しているものである。刃部が両面研磨によりハマグリ刃状を呈するもの 9 点、平刃状のもの 4 点が確認された。

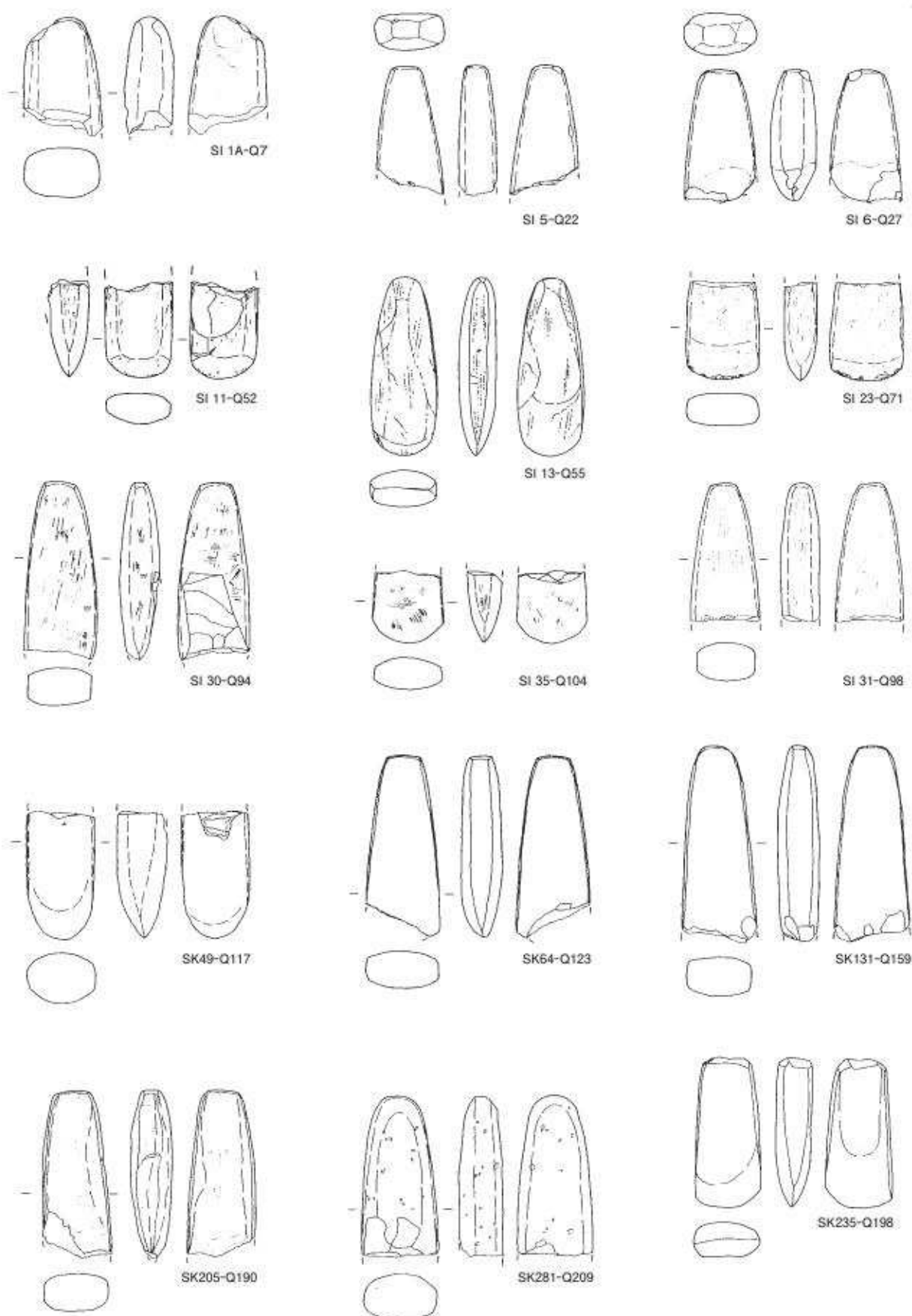
定角式磨製石斧の完形品はわずか 3 点 (9.4%) で、基部を欠損しているもの 11 点 (34.4%)、刃部を欠損しているもの 19 点 (59.4%) で、その

内 1 点は、刃部・基部ともに欠損している。欠損品は全体の 93.8% にものぼり、刃部を欠損しているものの割合が高い。また、欠損後の再加工や転用の見られる資料も存在し、廃品利用も盛んに行われていたことが推測される。完形品 3 点の平均重量は 237.3g である。

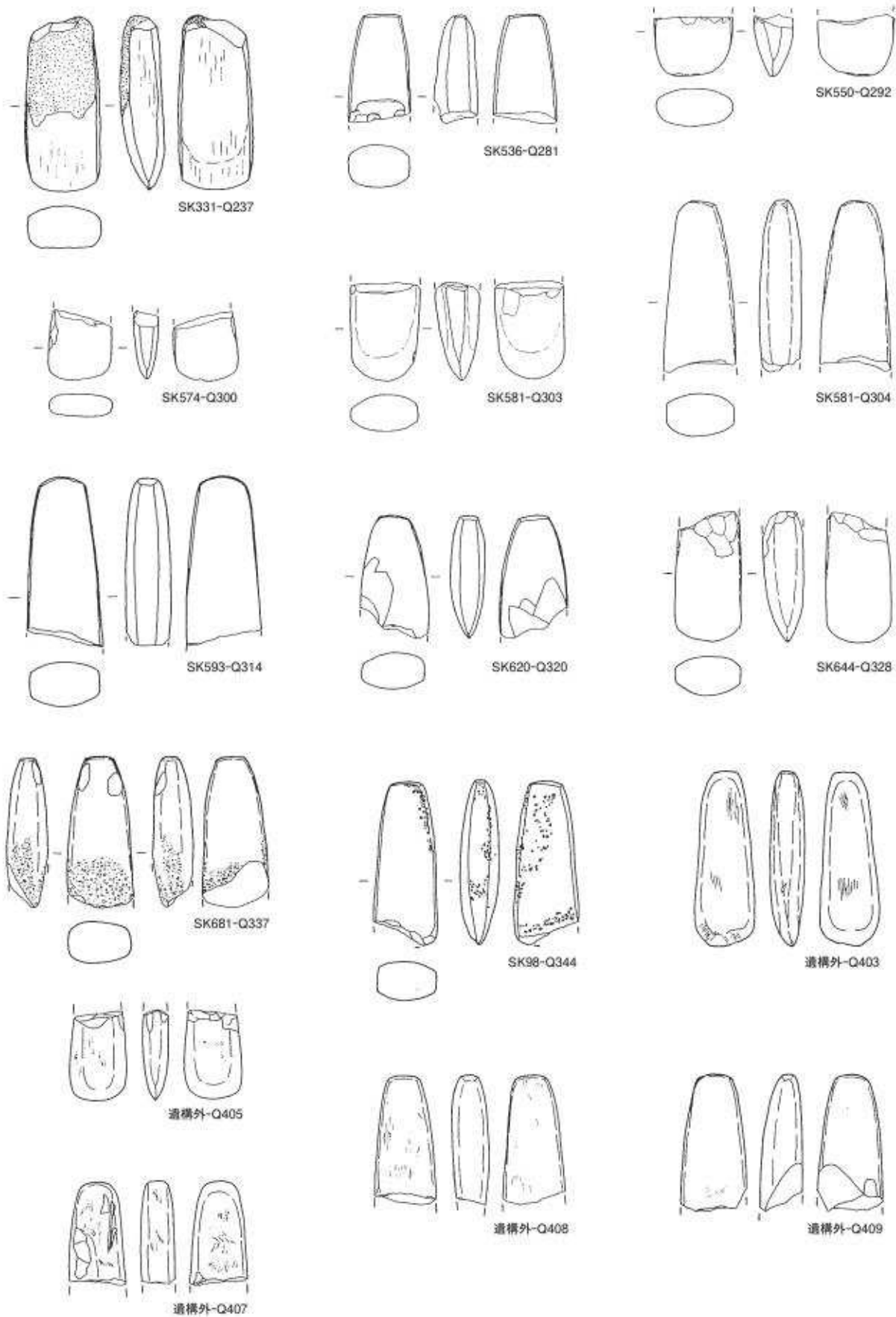
使用石材は、砂岩が 13 点 (40.6%)、次いで安山岩・緑色岩が各 4 点 (12.6%)、緑色凝灰岩が 2 点 (6.3%) で、ホルンフェルス・角閃岩・閃緑岩・変質ドレライト・蛇紋岩・凝灰岩・閃緑斑岩・斑れい岩・輝緑岩が各 1 点 (3.1%) である。多くは近隣では産出しない石材であり、他地域からの遠距離搬入石材が使用されている。

グラフ 12 定角式磨製石斧の使用石材





第 670 図 定角式磨製石斧 (1)

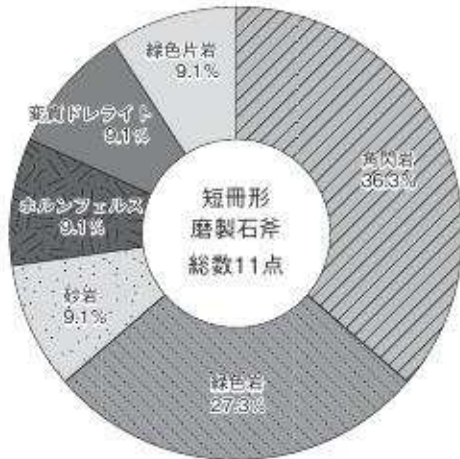


第 671 図 定角式磨製石斧 (2)

短冊形磨製石斧 (第 672 図 グラフ 13)

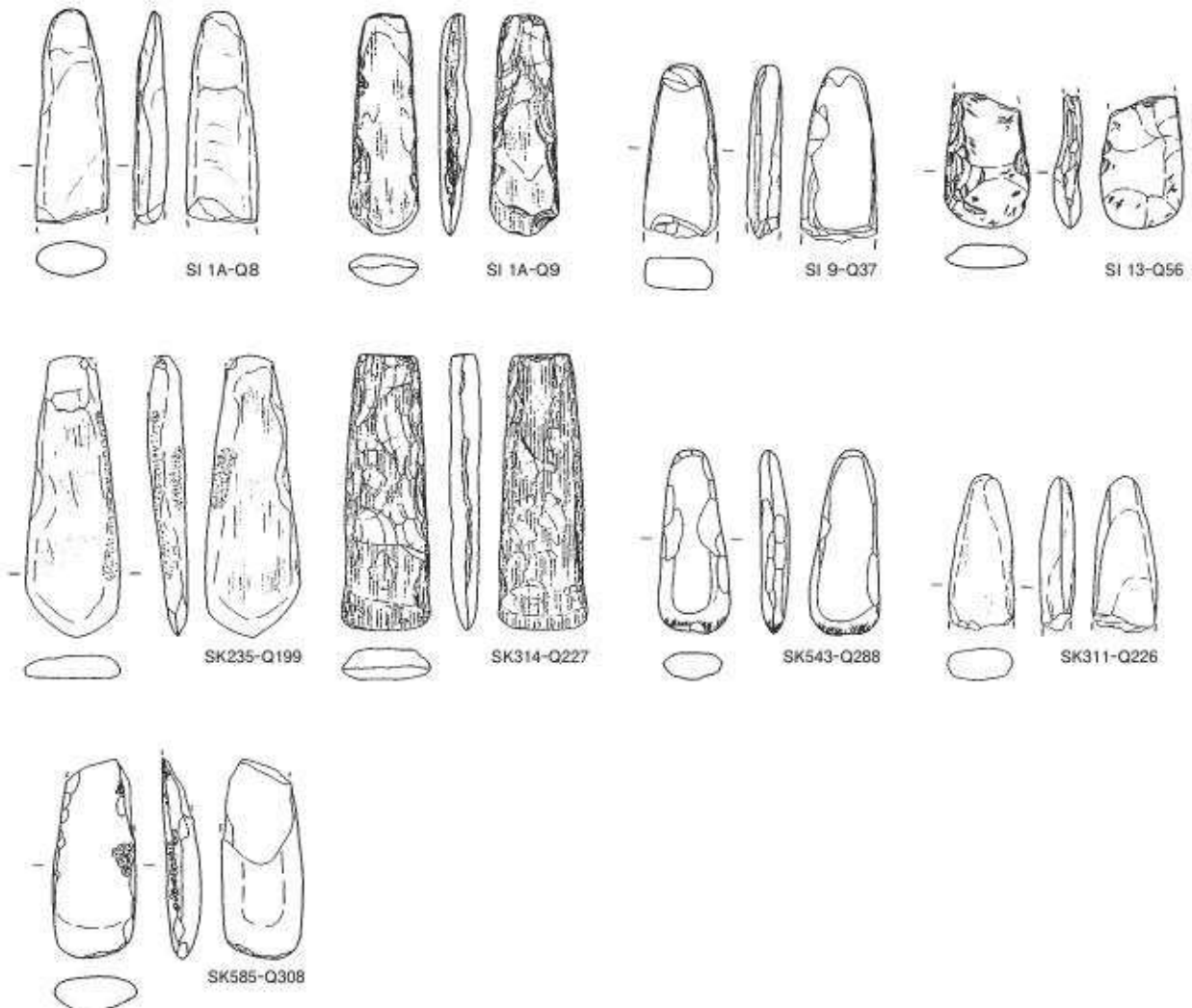
全面に研磨は見られるが、周縁部に明確な稜をもたないもので、11 点が確認された。石器素材として当初から扁平な礫を選択しているものが多い。平均重量は 142.9g である。

グラフ 13 短冊形磨製石斧の使用石材



使用石材は、角閃岩 4 点 (36.3%)、緑色岩 3 点 (27.3%)、砂岩・ホルンフェルス・変質ドレライト・緑色片岩が各 1 点 (9.1%) で、最大重量は 222.0g、最小重量は 82.3g、平均重量は 142.9g である。

全面を研磨し、刃部を平刃に研ぎ出しているもの 1 点、表裏面を研磨し刃部を剣先状に研磨するもの 1 点の他に、表裏面は研磨しているが、側縁部に微細な敲打痕を残しているもの 4 点、刃部を欠損しているもの 3 点、基部を欠損しているもの 2 点、刃部を研ぎ出しているのに、表裏面に研磨がなされていないもの 2 点である。製作途中に破損してしまったものと考えられる。木材の加工や地下茎類の採取・堅穴建物や土坑を作る際の土掘り具としての機能を備えている。

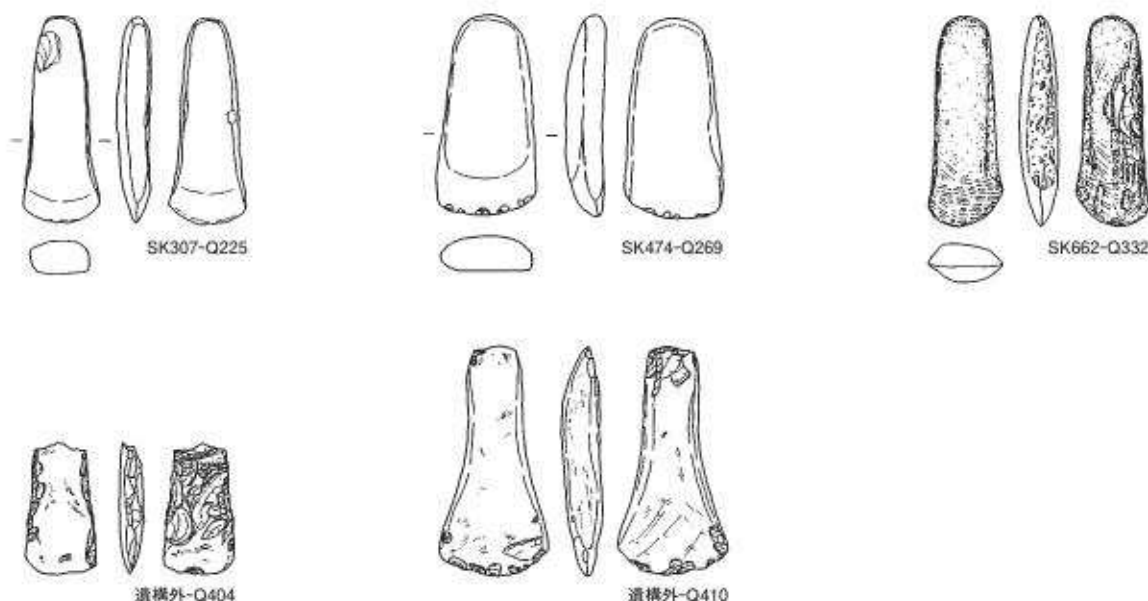


第 672 図 短冊形磨製石斧

新形磨製石斧（第 673 図）

特異な形態として、刃部の片面を研ぎ出し、末広りの刃部をもつ磨製石斧が 5 点確認されている。

使用石材は砂岩 2 点、ホルンフェルス・流紋岩・変質安山岩が各 1 点で、最大重量は 186.6g、最小重量は 107.6g、平均重量は 146.0g である。表裏面と刃部の片面を研ぎ出し、所謂「新（ちょうな）形」を呈するものである。柄は刃部に対し直角もしくは斜めに装着して、文字通り「新」として樹皮を剥いたり、畝のように堅穴建物や土坑を作る際の土掘具として使用したものと考えられる。同じような形態の石斧が打製石斧でも見られるのは当遺跡における特徴と言える。



第 673 図 新形磨製石斧

小型磨製石斧（第 674 図 グラフ 14）

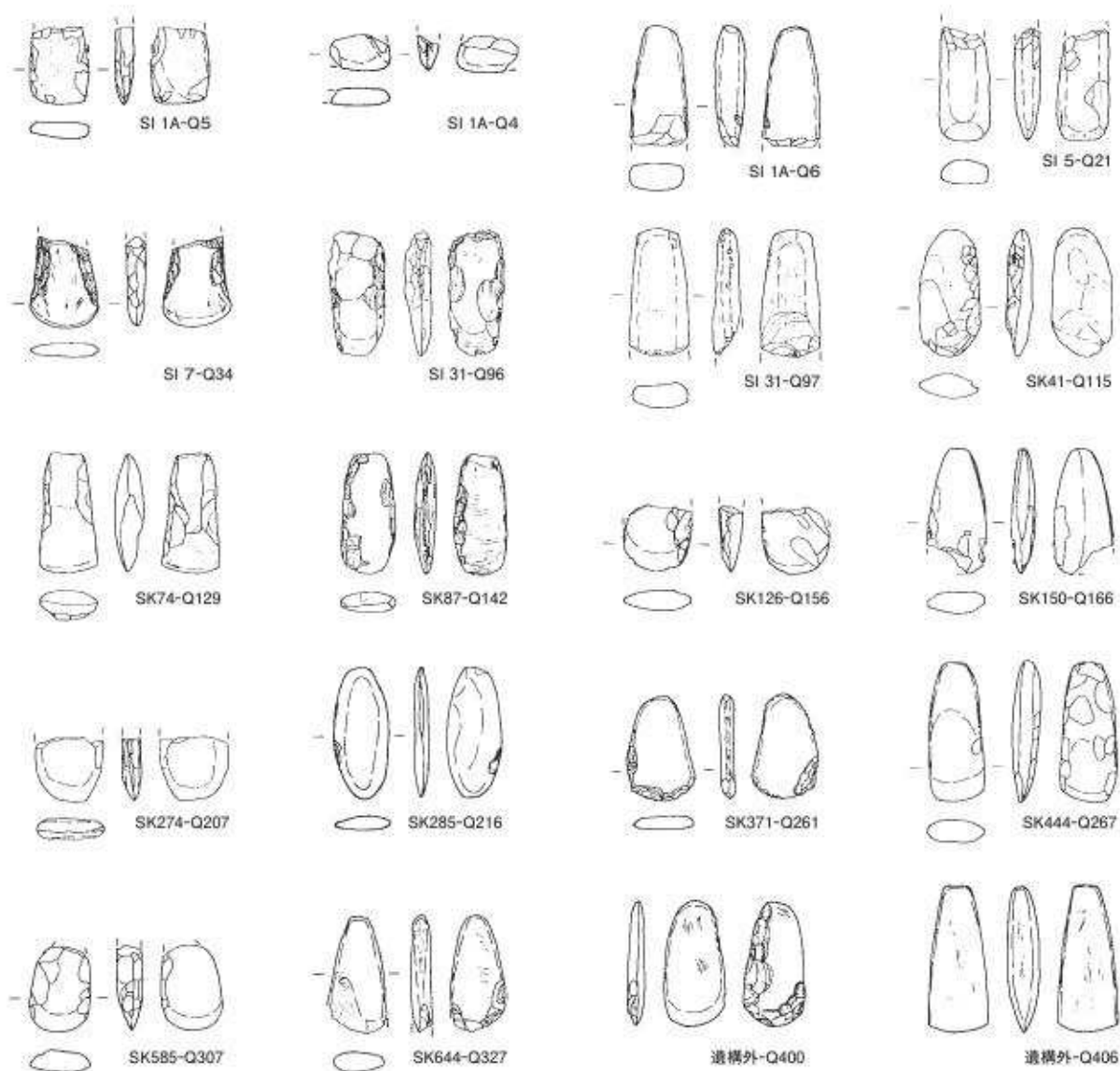
全長が 7 cm 前後の磨製石斧が 26 点確認されている。便宜上小型磨製石斧として以下に述べる。表裏面及び側縁に敲打調整及び研磨を施している。いずれも目的とする形状に類似した扁平な礫を選択・研磨し、加工時間を減じる工夫が見られる。

側縁部に研磨による稜を持つもの 7 点、側縁部に微細な敲打調整が残っているもの 7 点が確認されている。刃部はいずれも表裏から研ぎ出している。基部が欠損しているもの 7 点、刃部が欠損しているもの 6 点が確認された。

使用石材としては、緑色岩 10 点 (38.6%)、角閃岩 5 点 (19.3%)、ホルンフェルス 3 点 (11.6%)、変質ドレライト 2 点 (7.7%) で、石英斑岩・頁岩・変質安山岩・蛇紋岩・緑色凝灰岩・変質閃緑斑岩が各 1 点 (3.8%) ずつで、最大重量は 81.2g、最小重量 30.2g、平均重量は 50.8g である。用途は、鑿や楔のような機能が考えられる。

グラフ 14 小型磨製石斧の使用石材





第 674 図 小型磨製石斧

極小型磨製石斧 (第 675 図 グラフ 15)

グラフ 15 極小型磨製石斧の使用石材

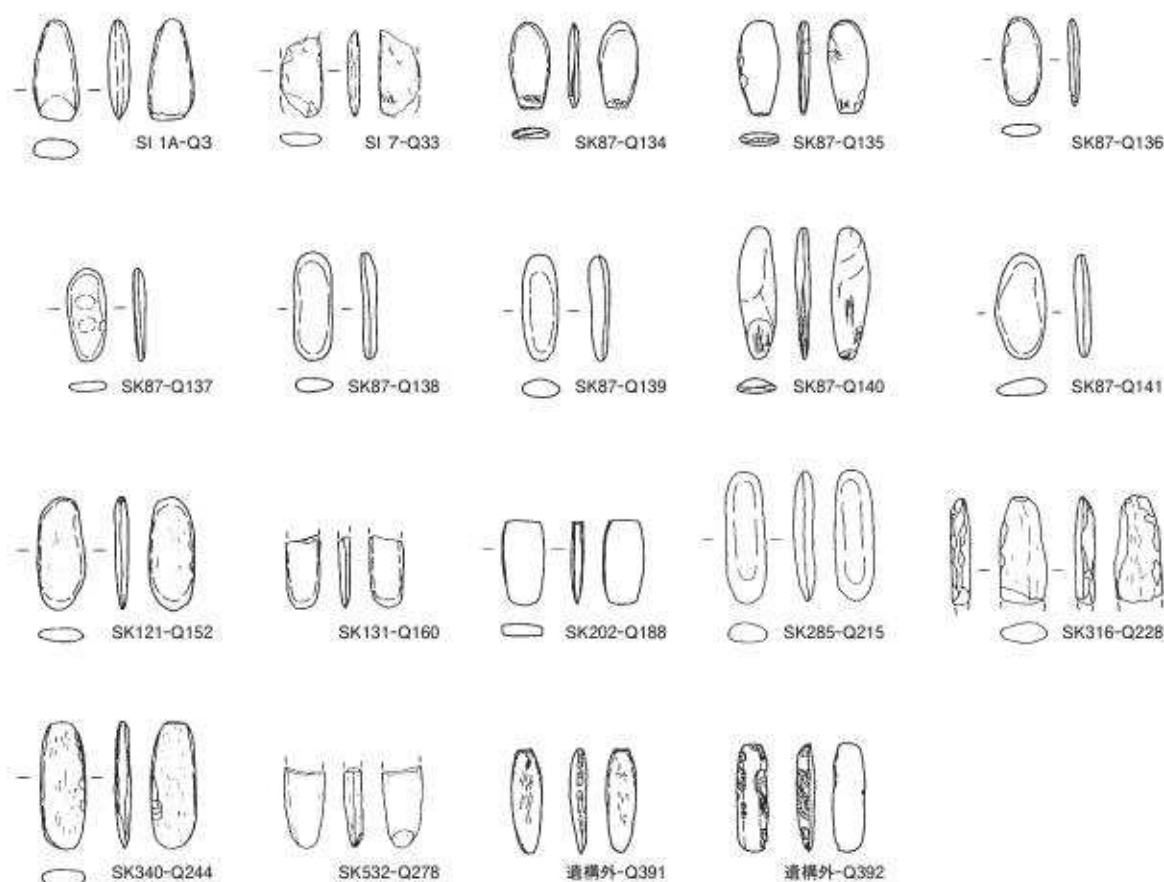


全長 6 cm 以下で、厚み 1 cm 以下の扁平な磨製石斧が 23 点確認された。側縁部に稜を作出し、刃部の表裏面を研ぎ出したものがほとんどである。

石材選択の段階で、目的とする形状に類似した細長い扁平な小礫を選んでいる。用途は、当初「楔」のような機能を考えてたが、基部に敲打痕等が確認できないことから、木材や骨角器などに細かな細工をする「彫刻刀」的な機能が考えられる。

使用石材は、角閃岩が 12 点 (52.2%) と半数を超えている。次いで、ホルンフェルス 4 点 (17.3%)、砂岩・緑色岩・頁岩各 2 点 (8.7%)、変質閃緑斑岩 1 点 (4.4%) で、最大重量は 24.1g、最小重量は 8.1g、平均重量は 15.6g である。

なお、第87号土坑からは、極小型磨製石斧とともに素材と考えられる扁平な自然礫が5点出土している。



第675図 極小型磨製石斧

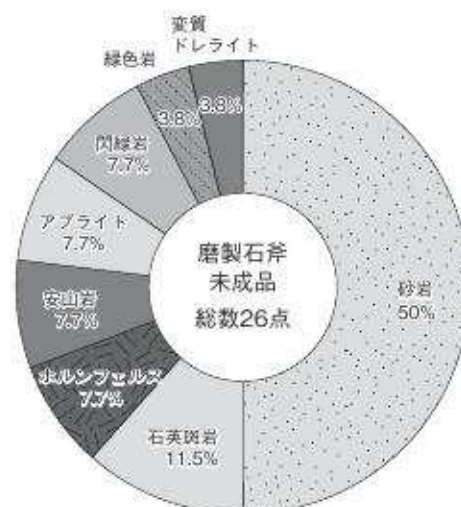
磨製石斧の未成（破損）品（第676・677図 グラフ16）

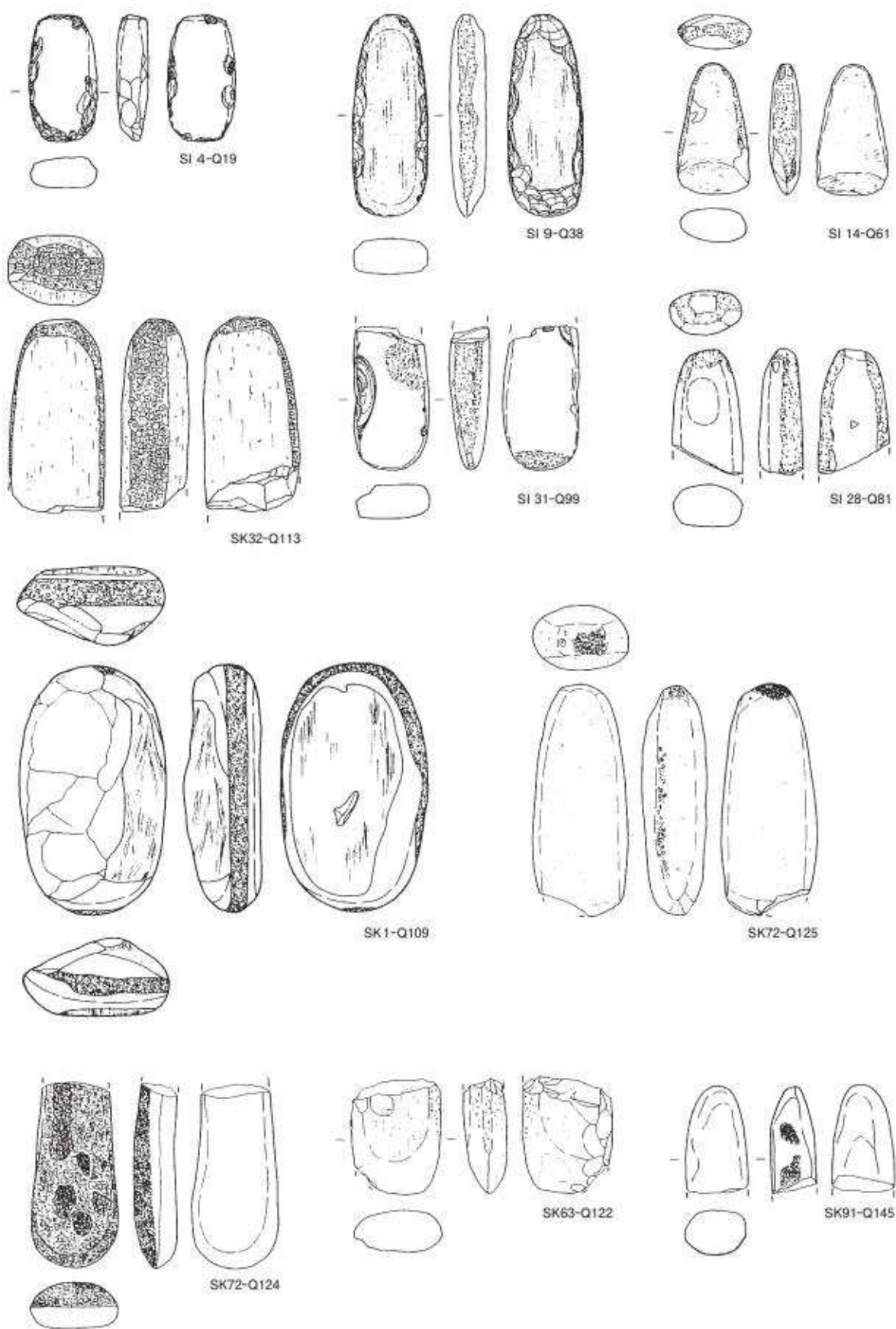
表裏面や周縁部に微細な敲打痕を有するものや、表裏面を研磨し、定角式磨製石斧製作を意識しているが、製作途中で欠損してしまったものである。26点が確認された。磨石や凹石・砥石として再利用しているものが目立つ。

欠損部位は刃部が8点、基部が5点確認されている。いずれも敲打段階での破損と考えられる。1点のみ基部の表裏面を研磨し、再刃をし、定角式の磨製石斧に作り替えようとしているものが見られる。

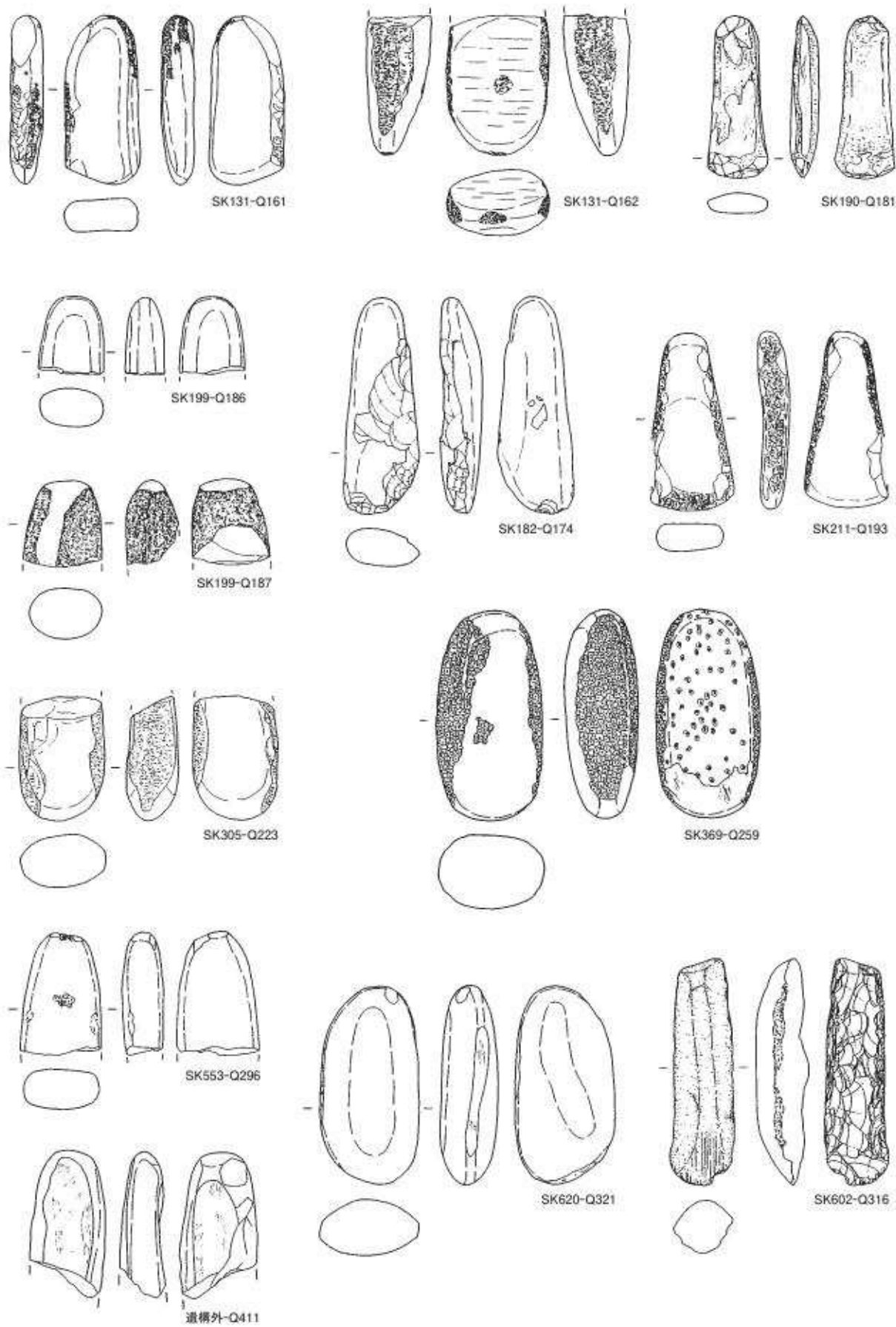
使用石材は砂岩13点（50%）で半数を占めている。次いで、石英斑岩3点（11.5%）、ホルンフェルス・安山岩・アブライト・閃緑岩が各2点（7.7%）、緑色岩・変質ドレライトが各1点（3.8%）である。砂岩の占める割合が多く、定角式磨製石斧の石材構成と類似している。

グラフ16 磨製石斧未成品の使用石材





第 676 図 磨製石斧未成品 (1)



第 677 図 磨製石斧未成品 (2)

エ) 打製石斧について (第 678～682 図 グラフ 17・18)

打製石斧は、86 点が出土している⁵³⁾。形状により、撥形 53 点 (61.6%)、分銅形 22 点 (25.6%)、新形 7 点 (8.1%)、小型の打製石斧 4 点 (4.7%) に分類でき、全体の約 60% 強が撥形である。

撥形打製石斧 (第 678・679 図 グラフ 17)

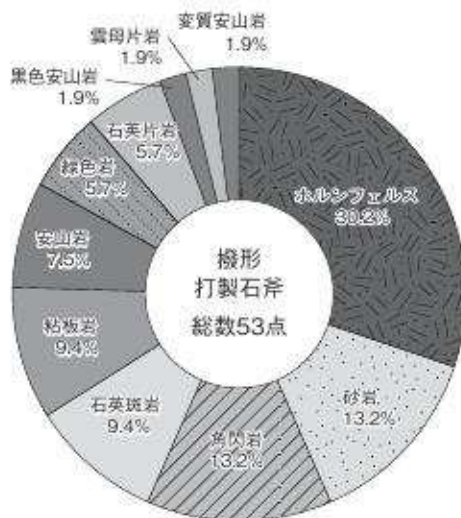
両側縁に微細な敲打調整を施し、刃部を研磨したものと刃部に使用痕の確認できるものがある。製作技法では、表裏に自然面を残すものが 8 点 (15.1%)、片側に自然面を残すものが 11 点 (20.8%) である。磨製石斧と同じように、あらかじめ目的とした形状に類似した扁平な礫を選択し、敲打工程を少なくしようとする意図が感じられる。

また、打製石斧でありながら、表裏及び側縁を研磨したものが 13 点 (24.5%)、刃部を研磨したものが 19 点 (35.8%) で、後者のうち、ハマグリ刃を意識しているものが 9 点 (17.0%)、平刃を意識しているものが 5 点 (9.4%)、剣先状を呈するものが 1 点確認されている。製作段階に研磨を入れるのは当遺跡における特徴と言える。また、刃部を欠損しているものが 8 点 (15.1%)、基部を欠損しているものが 12 点 (22.6%) 確認されている。製作途中か、使用時の欠損かは不明である。

薄手のものが目立つことや形状及び刃部の使用痕から、刃部が柄と直行方向に装着され、地下茎類の採取や堅穴建物や土坑を掘るのに用いたと考えられる。

使用石材は、ホルンフェルス 16 点 (30.2%)、次いで、砂岩・角閃岩が各 7 点 (13.2%)、石英斑岩・粘板岩が各 5 点 (9.4%)、安山岩 4 点 (7.5%)、緑色岩・石英片岩が各 3 点 (5.7%)、黒色安山岩・雲母片岩・変質安山岩が各 1 点 (1.9%) である。ホルンフェルスの使用頻度が高く、次いで砂岩、安山岩の順で、最大重量は 547.0g、最小重量は 27.8g、平均重量は 128.9g である。

グラフ 17 撥形打製石斧の使用石材



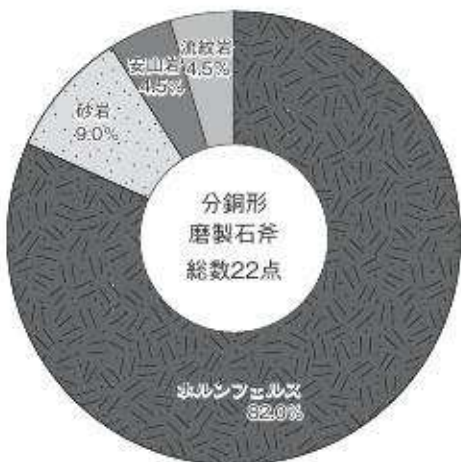
分銅形打製石斧 (第 680 図 グラフ 18)

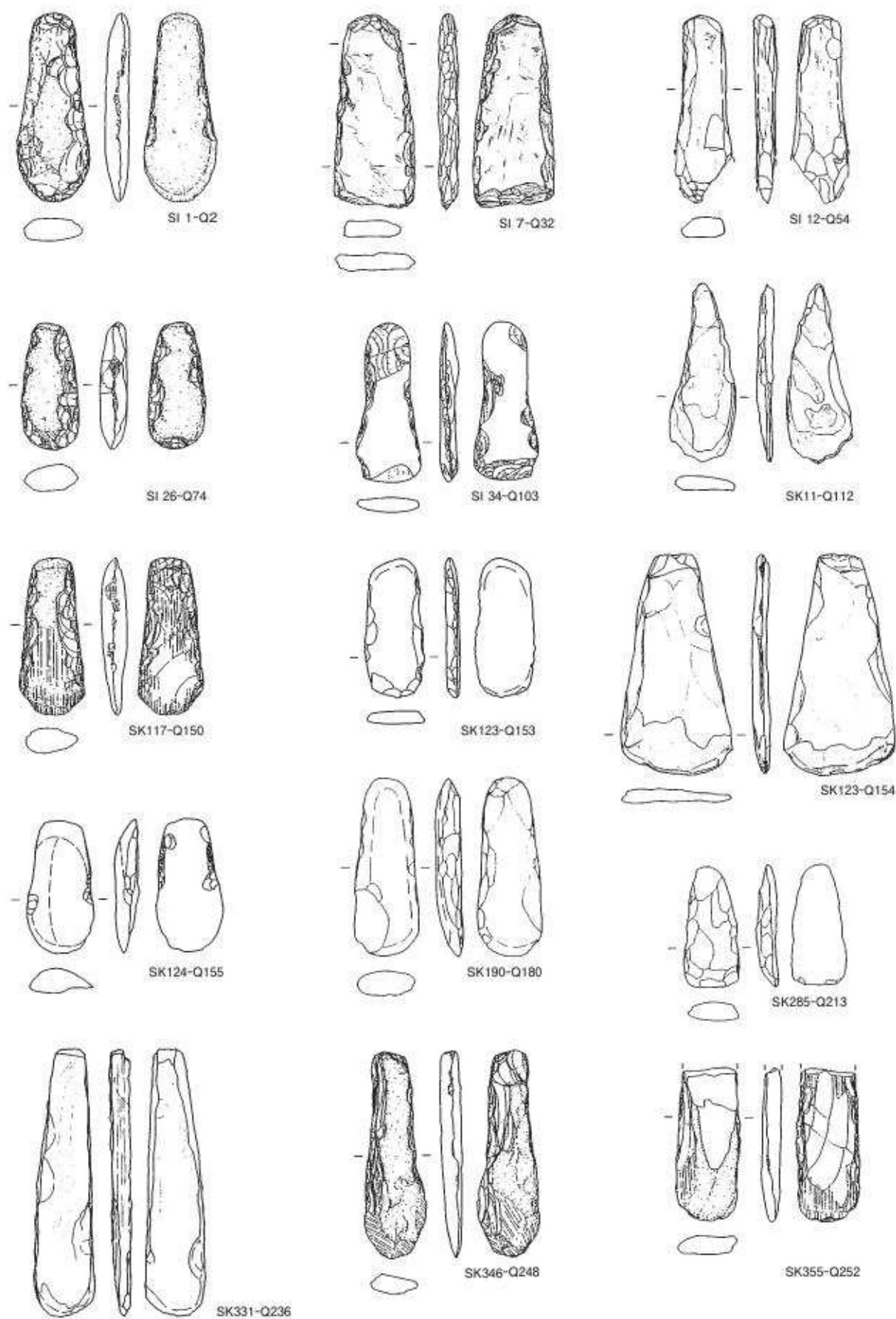
形状は、いずれも抉り部を有し、抉り部は丁寧な敲打調整をしている。

表裏に自然面を残すものが 10 点 (45.5%)、片側に自然面を残すものが 8 点 (36.4%) である。分銅型も、目的とする石斧の形状に類似した扁平な礫を選択していることから、製作段階での敲打工程をを少なくしようとする意図が感じられる。また、磨石を再利用し、素材としているものも 2 点確認できた。

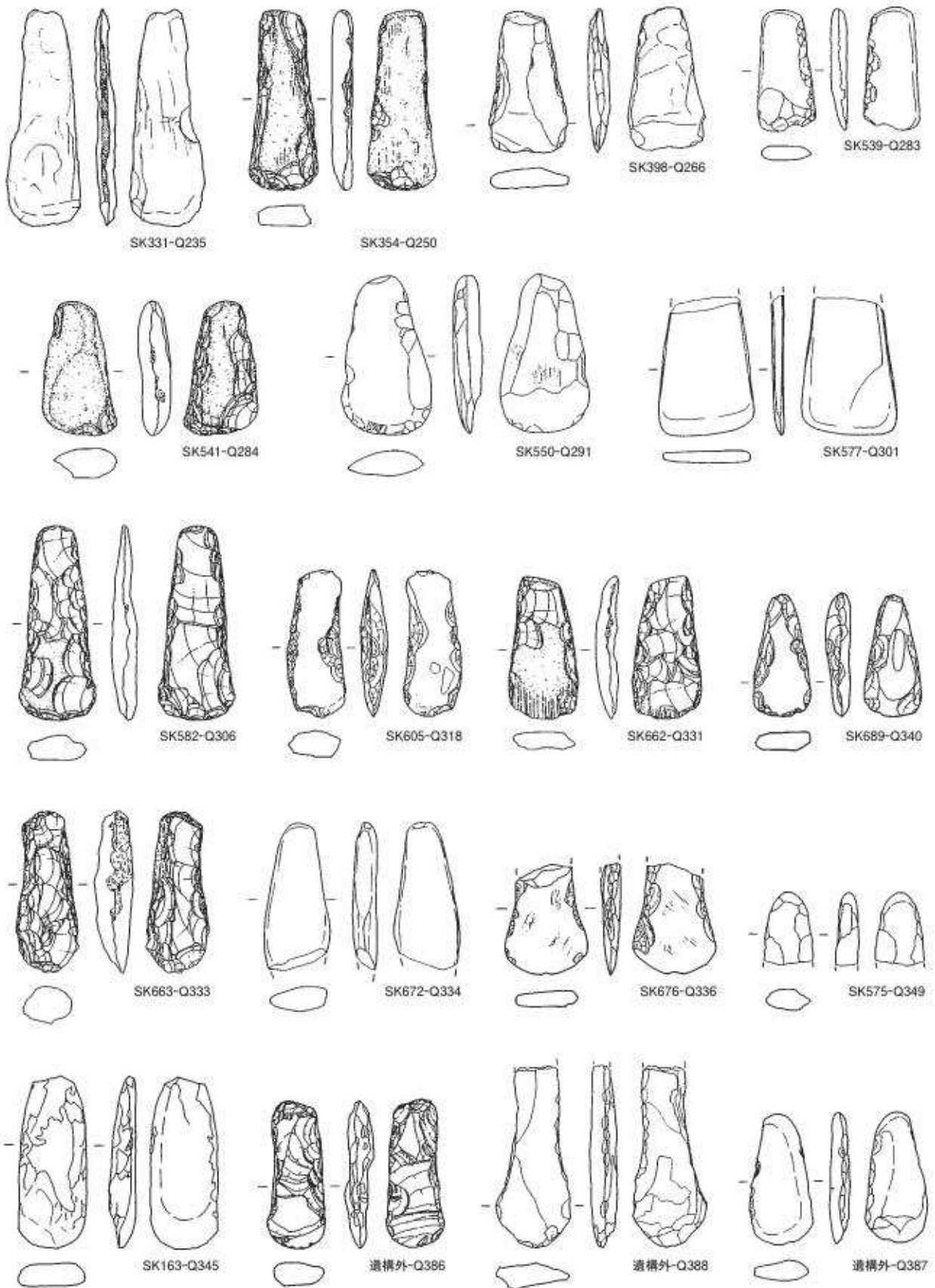
刃部の製作も、片面を敲打しているものが 6 点 (27.3%)、表裏を敲打しているものが 13 点 (59.1%) がある。また、刃部を欠損しているものが 4 点 (18.2%) 確認されている。使用石材を見ると、ホルンフェルスが 18 点 (82.0%) と使用頻度が高く、砂岩 2 点 (9.0%)、安山岩・流紋岩が各 1 点 (4.5%) という比率で、最大重量は 277.1g、最小重量は 78.6g、平均重量は 162.0g である。

グラフ 18 分銅形打製石斧の使用石材

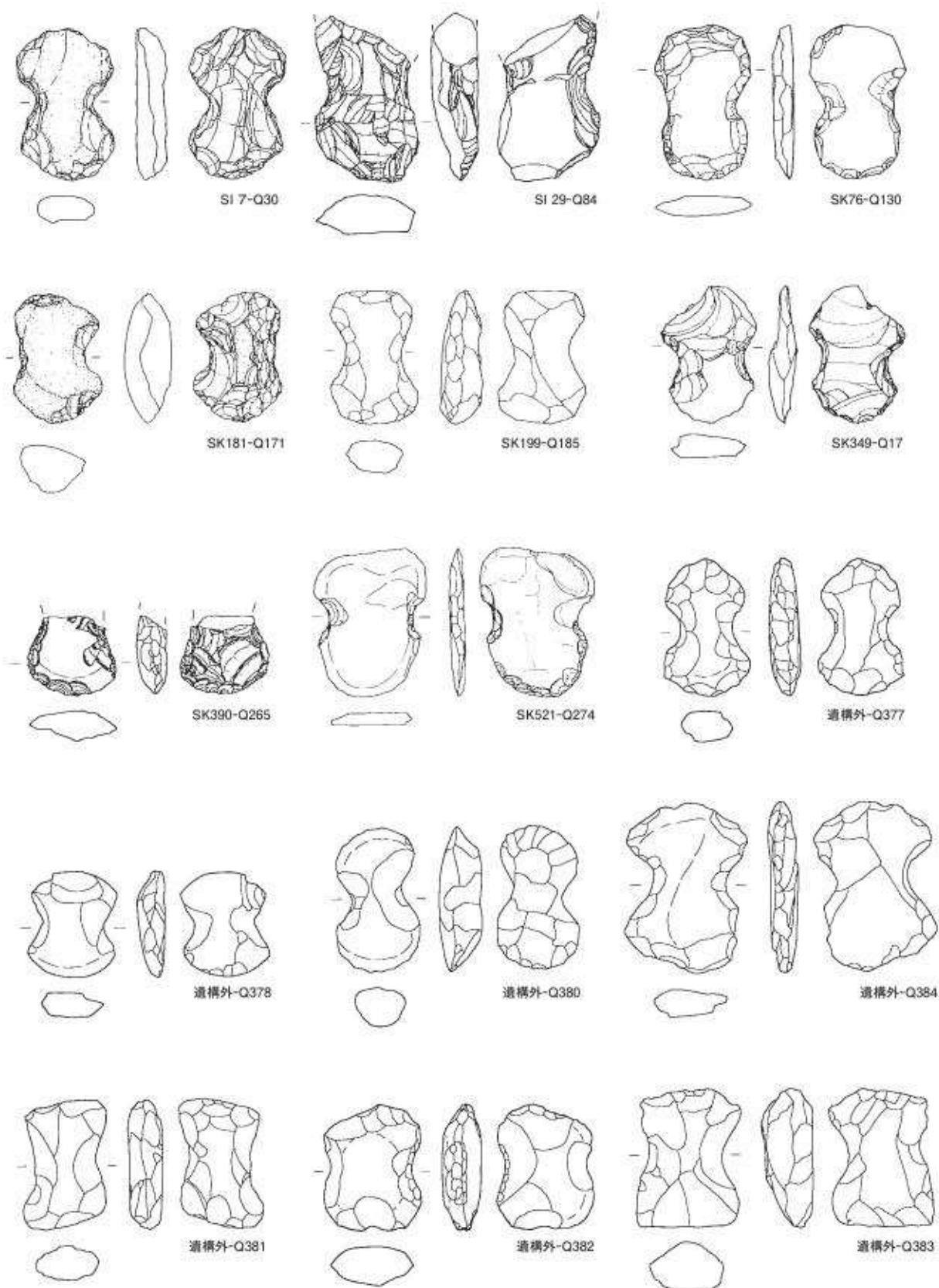




第 678 図 撥形打製石斧 (1)



第 679 図 撥形打製石斧 (2)

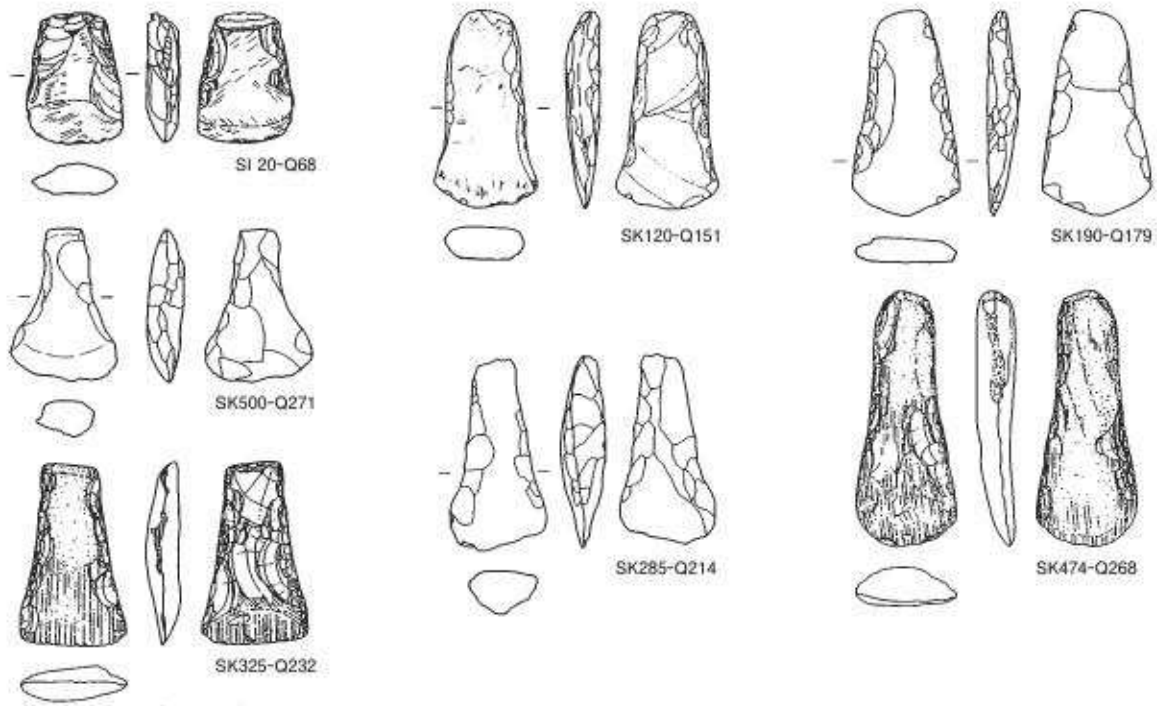


第 680 図 分銅形打製石斧

柄の装着は、刃部に平行に付け、振り下ろすようにして使用したものと考えられる。刃部の欠損は、堅いものを敲打した際の衝撃によるものであろう。しかし、刃部に鋭利さが見られないことや小型のものが目立つことから、土を掘るという用途に加えて、捕獲した獲物の撲殺具や藪などを切り払う鈍鎌的な用途が考えられる。

新形打製石斧（第681図）

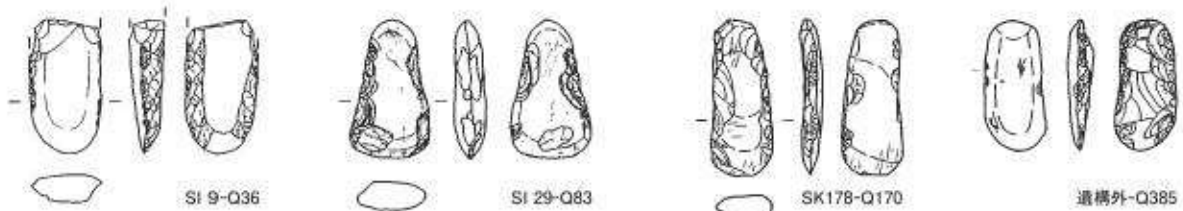
新形を呈する打製石斧が7点出土している。いずれも、自然面を片面に残し、刃部が広がるものである。使用石材は砂岩3点、頁岩2点、安山岩・石英片岩が各1点で、最大重量は160.2g、最小重量は74.0g、平均重量は112.4gである。柄を刃部に対して直角に付けて、樹皮を剥いたり、堅穴建物や土坑を掘るのに適した形態である。



第681図 新形打製石斧

小型打製石斧（第682図）

長さ7～8cmほどの小型の打製石斧で、4点が確認された。使用石材はホルンフェルス・角閃岩が各2点で、最大重量は63.7g、最小重量は35.8g、平均重量は47.0gである。扁平な自然礫を利用し、両側縁を敲打調整して、刃部を研磨している。小さいながら刃部が広がる新形とハマグリ刃形が見られる。鏟や彫刻刀のように木材や骨角器の加工に使用したものと考えられる。



第682図 小型打製石斧

オ) 吉十北遺跡における石器の特徴について

以上、当遺跡で出土した石器のうち、研磨・調整具としての「敲砥石」と石斧類について述べてきたが、「敲砥石」は、磨製石斧の製作に関わる道具と考えておきたい。

近年、調査例の増加に伴い、「敲砥石」と位置付けた石器については、「敲磨器」⁵⁴⁾「凸多面磨き石」⁵⁵⁾「多面体を呈する敲石」⁵⁶⁾「硬質砥石」⁵⁷⁾などと呼称されており、使用石材としては、チャートや石英・瑪瑙などの硬質で緻密な石材が多く、磨製石斧の製作跡とされる遺跡からまとまって出土する傾向が報告されている。用途としては、磨製石斧の製作道具や皮なめしや木製品の研磨のための用具が考えられている。

一般的に「砥石」は、研磨する物の下に置いて使用するものである。当遺跡でもこの「置き砥石」と考えられるものが、数点確認されている。しかし、ここで取り上げた「敲砥石」とした石器は、「ハンマー」としての敲打機能と、「砥石」としての研磨機能を兼ね備えた「手持ち砥石」⁵⁸⁾として位置付けたものである。石斧の素材となる石材よりも硬質な石材であること、片手で作業できる大きさであることなどからもうなずけるものである。

当遺跡出土の磨製石斧の製作工程を見ると、最初から目的とする製品の大きさに近い河川礫を選別し、微細な敲打調整・研磨調整を経て作り出している。

また、小型・極小型としたものも、同じように石器素材の選定段階で、目的とする製品に近い石材を選定し、研磨調整をして作り出している。これは、製作工程を短縮するための工夫と考えられ、同様の例は、新潟県三面川支流の奥三面ダム関連のアチャ平遺跡⁵⁹⁾や元屋敷遺跡⁶⁰⁾でも報告されている。

打製石斧の製作に関しては、研磨しないのが一般的であるが、当遺跡出土の打製石斧には微細な敲打痕と研磨痕が見られ、他遺跡には見られない特徴として捉えられる。打製石斧の研磨は、刃部研磨型の打製石斧と理解しておきたい。

当遺跡での石斧の製作過程は、①目的とする製品に近い石材の選定・搬入→②直接打撃による微細な敲打調整（敲砥石・敲石）→③研磨調整（敲砥石・置き砥石）→④仕上げ（敲砥石・置き砥石）→⑤完成品という過程が想定される。

石材の採取場所としては、筑波山・八溝山地方と考えられ、特に那珂川流域の河川礫を中心に搬入されたものと推測される。なお、遠隔地の石材として、北陸地方の蛇紋岩や新潟県三面地域の変質閃緑斑岩や変質ドレイイト・変質流紋岩も見られるが⁶¹⁾、これらは石材として搬入されたものでなく、製品として持ち込まれたものと考えられる。

新潟県朝日村のアチャ平遺跡上段の報文の中で宮樫秀之氏は、製作遺跡の条件として、第1に「素材となる石材の入手が容易である遺跡環境にあること」、第2に「その遺跡で消費するであろう量を超えた製品・未成品が出土すること」、第3として「未成品だけでなく、製作時に生じる剥片（調整剥片）と製作工具が出土していること」の3点をあげている⁶²⁾。

この条件を当遺跡に当てはめると、アチャ平遺跡が三面川支流の河川敷に展開した集落で、石材には大変恵まれた環境にあるのに対し、当遺跡は、産出地から離れた石材の入手が困難な地域の集落であり、趣を異にしているが、交易という手段を考慮することで、石材の入手を可能にしていたと考えることができる。34種に及ぶ多種類の石材や、蛇紋岩等の遠隔地石材の搬入、また、出土土器も南からの勝坂式や中峠式土器、北からの大木式土器等、様々な系統の土器の出土がそれを裏付けている。

第2の条件に関しては、磨製石斧123点（内、未成品26点）、これは取り上げた石器の28%にあたる。この数値は、その集落での消費量を超えた出土量と思われる。

そして、第3の条件は、磨製石斧未成品が26点で、磨製石斧全体の21.1%にあたる。調整剥片については、当遺跡の磨製石斧の製作は、石器素材の選定段階から、目的とする製品に近い自然礫を選定し、微細な敲打調整と研磨調整を行うという製作技法をとっているため、存在しない。また、製作工具として、敲砥石が66点、敲石17点、砥石38点、台石3点が確認されている。磨製石斧製作遺跡であるアチャ平遺跡では、磨製石斧製品331点、磨製石斧未成品1,062点に対し、多面体敲石は109点の出土である。単純に敲砥石（多面体敲石）の割合から考えると、アチャ平遺跡が7.8%、当遺跡は53.7%で、アチャ平遺跡をはるかに超える量の磨製石斧が製作できる数量である。

石材の入手が困難な地域にも関わらず、多種類の石材による磨製石斧及び未成品や製作工具としての敲砥石や砥石類が多量に出土していること、さらに、有段式竪穴建物跡を含めた集落構成という点を加味し、当遺跡は優れた研磨技術をもった集団が居住した磨製石斧の製作集落として位置付けられる要素を持っていると言える。

5 おわりに

今回の調査での第一の成果は、縄文時代中期前葉から中期後葉にかけての集落の様相がある程度明らかになったことである。竪穴建物は環状に配置され、建物には数棟に一棟の割合で、やや規模が大きく、有段のものがあり、共同の作業場として使用されていたと考えられる。その内側には群を成す貯蔵穴をもち、冬季の食料を蓄えていたようである。また、多量に出土した土器からは、当地域の中期の土器変遷を詳細にとらえることができ、時期により、影響を受けている地域が異なることが明らかとなった。石器が多量に出土したことも当遺跡の特色である。特に、敲砥石としたものは、これまで、その用途などがはっきりしなかったものであり、敲打と研磨という二つの工程を一つの石器で受け持っているという考えを提案することができた。当遺跡では、この敲砥石によりたくさんの石器を作り、木製品などを作って、交易品としていたと考えられるのである。

当遺跡は、巴川中流域の拠点集落として、周辺の集落とネットワークをもち存続していたが、鹿嶋市鍛冶台遺跡などで確認されている掘立柱建物跡群、茨城町宮後遺跡で確認されている墓坑群などは確認されていない。調査区域外の遺跡北部に存在している可能性があり、課題としておきたい。

註

- 1) 吹野富美夫 宮崎修士 柴田博行 「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 前田村遺跡 G・H・I区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第146集 1999年3月
吹野富美夫 「前田村遺跡G・H・I区における縄文時代中期中葉の土器様相」『研究ノート』8号 財団法人茨城県教育財団 1999年6月
- 2) 吹野富美夫 川又清明 野田良直 浅野和久 「宮後遺跡1 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集 2002年3月
吹野富美夫 和田清典 浅野和久 荒蒔克一郎 胸澤悦郎 「宮後遺跡2 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第240集 2005年3月
- 3) 寺内久永 「千天遺跡 主要地方道大洗支線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第384集 2014年3月

- 4) 塚本師也 「田木谷遺跡出土の縄文時代中期中葉の土器について－葎ヶ浦北岸における中期中葉の土器様相－」『玉里村立史料館報』Vol.10 2005年3月
塚本師也 「田木谷遺跡出土の縄文時代中期中葉の土器について(2)－縄文中期中葉の葎ヶ浦北岸における土器様相－」『玉里村立史料館報』Vol.11 2006年2月
- 5) 安孫子昭二・秋山道生・中西充 「地域別報告(1) 東京・埼玉における中期後半の各段階の様相」『神奈川考古』第10号 神奈川考古同人会 1980年4月
- 6) 大村裕 「Ⅶ.「山内・加曾利E式細別」の実態について」『日本考古学史の基礎研究』新装版 六一書房 2012年4月
- 7) 鈴木裕芳 「諏訪遺跡発掘調査報告書」日立市教育委員会 1980年3月
海老沢稔 「諏訪式土器について」『婆良岐考古』第6号 婆良岐考古同人会 1984年5月
- 8) 松本茂 「七郎内C遺跡・七郎内D遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告X』福島県文化財調査報告書第108集 福島県教育委員会 1982年3月
- 9) 戸田哲也・吉田浩明・麻生順司 「宮後遺跡発掘調査報告書」茨城町教育委員会 2003年3月
- 10) 鈴木素行 「坪井上の伝言－久慈川下流域における縄文時代中期中葉の土器群－」『婆良岐考古』第23号 2001年5月
阿玉台Ⅲ式期の第251号土坑出土例を標識とし、「口縁部文様帯の幅が狭く、地文の縄文だけが施されている頸部文様帯をもち、胴部と何本かの沈線文で区画している土器」を「坪井上型深鉢」としている。「坪井上型深鉢」は諏訪式の系統から生まれた土器であるが、直系は塚本師也氏の「宮後タイプ大木7b式」である。「坪井上型」と「宮後タイプ」の一番の違いは、胴部文様にある。「宮後タイプ」は、「胴部の施文域には4条隆帯を垂下させ、その間を沈線で連繋するように文様を描く。対弧状、「X」字状といった「スワタイプ」の文様とされたものが多い」というものである。「坪井上型」の胴部には、地文だけのものと大木式の影響を受けた沈線による直線文や曲線文が施されるものがあり、阿玉台Ⅲ式期から、諏訪式の系統は直系の「宮後タイプ」と「坪井上型」に分かれるようである。
塚本師也 「茨城県北部域に於ける縄文時代中期中葉の土器の一例相－宮後遺跡の調査成果から－」『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集－』2003年3月
塚本師也 「茨城県北部における大木7b式期の土器－特に七郎内Ⅱ群土器と所謂スワタイプについて－」『常総台地』16 鴨志田篤二氏考古学業45周年記念論集 2009年12月
- 11) 下総考古学研究会 「中峠遺跡調査概要」『下総考古学』6 1976年5月
下総考古学研究会 「(特集)中峠式土器の再検討」『下総考古学』15 1998年5月
本報告書で「中峠式」とする場合は、広義の中峠式である。詳しい系統などを言う場合は、「中峠0地点型」「中峠6次1住型」などを使用する。
- 12) 海老沢稔 木村光輝 「東田中遺跡 中津川遺跡2 一般国道6号千代田石岡バイパス(かずみがうら市市川～石岡市東大橋)事業地内埋蔵文化財調査報告書8」『茨城県教育財団文化財調査報告』第407集 2016年3月
- 13) 青木幸一 柿沼洗平 「畿治台遺跡(厨台No.19・23遺跡) 円籠台地区(厨台No.30遺跡)」『鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告Ⅸ』鹿島町の文化財第76集 財団法人鹿島町文化スポーツ振興事業団 1992年3月
- 14) 川崎純徳 海老沢稔ほか 「石岡市東大橋原遺跡－第2次調査報告－」石岡市教育委員会 1979年3月
- 15) 小川和博ほか 「木田奈台Ⅰ」土浦市遺跡調査会 1991年3月
- 16) 山内清男編 「日本先史土器図譜」第一部・関東地方・Ⅰ～ⅩⅡ集(1939～1941)再版・合冊刊行 先史考古学会 1967年4月
- 17) 註15) 文献に同じ
口縁部文様帯は中峠0地点型深鉢の文様をもち、胴部には阿玉台Ⅳ式の文様をもつ土器で、一つの土器に二つの型式が合体したものである。
- 18) 江原英 「阿玉台式土器の伝統と「中峠式0地点型」の成立(覚書)」『栃木県考古学会誌』第27集 2006年5月
松戸市子と清水貝塚240号住居跡出土例を標識とし、口縁部文様帯はやや幅広く、眼鏡伏把手を有している。キザミ目のある隆帯で円形や弧状の区画文を有し、胴部とは沈線文で区画している。胴部には縄文だけが施されているものである。キザミ目を有する隆帯や三叉文などから勝坂式の影響が強いもので、時期は伴出土器から加曾利E1式古段階と私考する。
- 19) 小川貴行 「石川西遺跡 茨城空港テクノパーク整備事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第321集 2009年3月

- 20) 谷口康浩「環状集落と縄文社会構造」学生社 2005年3月
- 21) 鈴木克彦 鈴木保彦編「集落の変遷と地域性」『縄文集落の多様性Ⅰ』雄山閣 2009年10月
- 22) 安田喜憲「3 気候変動」『縄文文化の研究Ⅰ 縄文人とその環境』雄山閣 1994年7月
海老原郁夫「第二編 原始古代」『高根沢町史 通史編Ⅰ』高根沢町 2000年3月
- 23) 石川日出志「農耕社会の成立」『シリーズ 日本古代史①』岩波新書 2010年10月
- 24) 西野元編「笠間市西田遺跡の研究」『筑波大学先史学・考古学研究調査報告』7 筑波大学歴史・人類学系 1996年3月
- 25) 今橋浩一「阿玉台式文化の一面—二段床構造住居址の検討—」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部 1995年12月
- 26) 当財団縄文時代研究班による集大成を基に、その後の報告例を追加した。
縄文時代研究班「関東地方における縄文時代中期の「有段式竪穴遺構」について」『研究ノート』5号 財団法人茨城県教育財団 1996年6月
- 27) 註24) 文献に同じ
- 28) 田中豪ほか「水砂遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—館林 水砂 花前Ⅱ・Ⅰ—』財団法人千葉県文化財センター 1982年3月
横山仁「千葉県柏市水砂遺跡における阿玉台式期の集落」『婆良岐考古』第29号 婆良岐考古研究会 2007年5月
- 29) 田村隆 原田昌幸ほか「中山新田Ⅰ遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ—元割・聖人塚・中山新田Ⅰ—』財団法人千葉県文化財センター 1986年3月
- 30) 高根信和 加藤雅美 小河邦男「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 下広岡遺跡」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』X 1981年3月
- 31) 小川和博 大瀧淳志「西堀遺跡発掘調査報告書」常陸大宮市教育委員会 2009年9月
- 32) 註2) 文献に同じ
- 33) 小川和博 大瀧淳志 鍛冶文博「竹来遺跡—茨城県稲敷郡阿見町所在の埋蔵文化財第二次調査—」阿見町教育委員会 1990年3月
- 34) 青木幸一 柿沼流平「鍛冶台遺跡(厨台No.19・23遺跡) 円籠台地区(厨台No.30遺跡)」『鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告Ⅸ』鹿島町の文化財第76集 財団法人鹿島町文化スポーツ振興事業団 1992年3月
- 35) 荒蒔克一郎「堂東遺跡—一般国道50号下館バイパス改築事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第213集 2004年3月
- 36) 鈴木美治ほか「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3 大谷津A遺跡」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第28集 1985年3月
- 37) 川崎純徳 海老沢稔ほか「石岡市東大橋原遺跡—第3次調査報告—」石岡市教育委員会 1980年3月
- 38) 瓦吹堅ほか「茨城県日立市上の代遺跡(発掘調査の概要)」日立市教育委員会 1973年3月
- 39) 小川和博 大瀧淳志 関口満「六十原遺跡」土浦市教育委員会 2003年11月
- 40) 註7) 文献に同じ
- 41) 田中浩江 中林香澄編「滝ノ上遺跡Ⅳ」『茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書』第30集 常陸大宮市教育委員会 2016年10月
- 42) 註12) 文献に同じ
- 43) 清水哲 舟橋理「小作遺跡 主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第346集 2011年3月
- 44) 後藤俊一 高橋清文 浅間陽 土井道昭「滝ノ上遺跡Ⅰ」『茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書』第19集 常陸大宮市教育委員会 2014年12月
- 45) 川崎純徳「いわゆる「ベッド状遺構」の諸問題」『常総台地』12 常総台地研究会 1981年9月
- 46) 石材については、柴田徹氏からご教示を得た。
柴田徹「比重を加味した岩石種判定基準の提案」『松戸市立博物館紀要』第16号 2009年3月
- 47) 阿部朝衛「多面体を呈する敲石について」『豊栄市史研究』第2号 1984年10月
阿部朝衛「多面体を呈する敲石 再論」『帝京史学』第5号 1989年2月

- 48) 市毛美津子「凸多面体磨き石について」『古代』94号 早稲田大学考古学研究会 1992年9月
- 49) 三宅徹也 白鳥文雄他「和野前山遺跡」青森県教育委員会 1984年3月
- 50) 中村信博「松の木遺跡Ⅰ」松の木遺跡調査団 2005年10月
- 51) 「敲砥石」の呼称については、大工原豊氏のご教示による。
- 52) 磨製石斧については、大工原豊氏から、以下のようなご教示を得た。
- ・多数の敲砥石が出土していること、すべての製作工程の未成品が存在していることから、遺跡内で製作されている。
 - ・製作技法については、剝離（第1工程）に関する未成品が非常に少なく、敲打（第2工程）のものが圧倒的に多いことから、原則として最初から敲砥石のみで敲打→研磨を行う製作技法が採用されている。
 - ・大型の磨製石斧は、定角式のもので、この時期の東関東（栃木・茨城地域）では特徴的な形態と言える。また、蛇紋岩製の磨製石斧は北陸地方で製作され、優品は玉斧と呼ばれている広域流通品であり、当遺跡のものも搬入品と考えられる。
 - ・中・小型の磨製石斧は、扁平鏃にいきなり研磨により刃部を作出しており、素材の選択・製作技法ともに大型の磨製石斧と異なっている。
- 53) 打製石斧については、大工原豊氏から、以下のようなご教示を得た。
- ・短冊形を呈するものは、石材採取場所から搬入された扁平鏃あるいは石斧素材剥片から垂直打撃技法により製作されていたようである。刃部や縁辺部に顕著な研磨痕が観察されるものが多く、「土掘具」として用いられていたと判断される。
 - ・刃部を作出あるいは再生の際に敲砥石により研磨されたものがしばしば認められる。
 - ・分銅形を呈するものは、両面に鏃面が残るものが散見される。また、使用痕の観察では、顕著な摩耗痕が認められないので、短い柄を装着した鈍鏃のような道具であったと推定される。
- 大工原豊「縄文石器研究序論」六一書房 2008年6月
- 芹澤清八「縄文時代中期末から晩期の打製石斧」『石斧の系譜』予稿集岩宿文化資料館 2002年10月
- 芹澤清八「分銅形打製石斧の出現と拡大」『季刊考古学』第119号 雄山閣 2012年5月
- 54) 註49) 文献に同じ
- 55) 註48) 文献に同じ
- 56) 註47) 文献に同じ
- 57) 註50) 文献に同じ
- 58) 大工原豊氏のご教示による。
- 59) 富樫秀之 阿部友晴 金内元 長田友也 高橋優「アチヤ平遺跡上段」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』朝日村文化財報告書第21集 2002年3月
- 60) 川村三千男 富樫秀之 石川智紀 立木宏明「元屋敷遺跡Ⅰ」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ』朝日村文化財報告書第10集 1995年3月
- 61) 柴田徹氏のご教示による。
- 62) 註59) 文献に同じ

第4章 勘十郎堀跡

第1節 調査の概要

勘十郎堀跡は、潤沼と巴川・北浦を内陸水路で結ぶため、東茨城郡茨城町海老沢から鉾田市紅葉までの総延長約8kmにわたって掘削された運河跡である。調査区は、巴川から北東へ約1.6km遡上した地点で、標高約27mの台地上へ延びる浅谷部に位置し、北東・南西軸方向に走行する運河跡を横断している。調査対象面積は5,770㎡である。運河跡の底部が湿地状を呈し、湧水が激しく、かつ、堆積土や地山が軟弱で崩落の危険性が生じたことから、全面的な発掘調査を断念し、トレンチによる断面形状及び堆積状況の観察・記録を行った。調査前の現況は山林、畑地である。

調査の結果、江戸時代の運河跡1条を確認した。遺物は出土していない。なお、運河跡の覆土下層から採取した植物遺体について放射性炭素年代測定を実施しており、その結果は付章として巻末に掲載した。

第2節 運河跡 (第683～687図 PL183～188)

位置 調査区北東部から南西部にかけてのA3g5～C1e0区、標高21～27mの浅谷部に位置している。

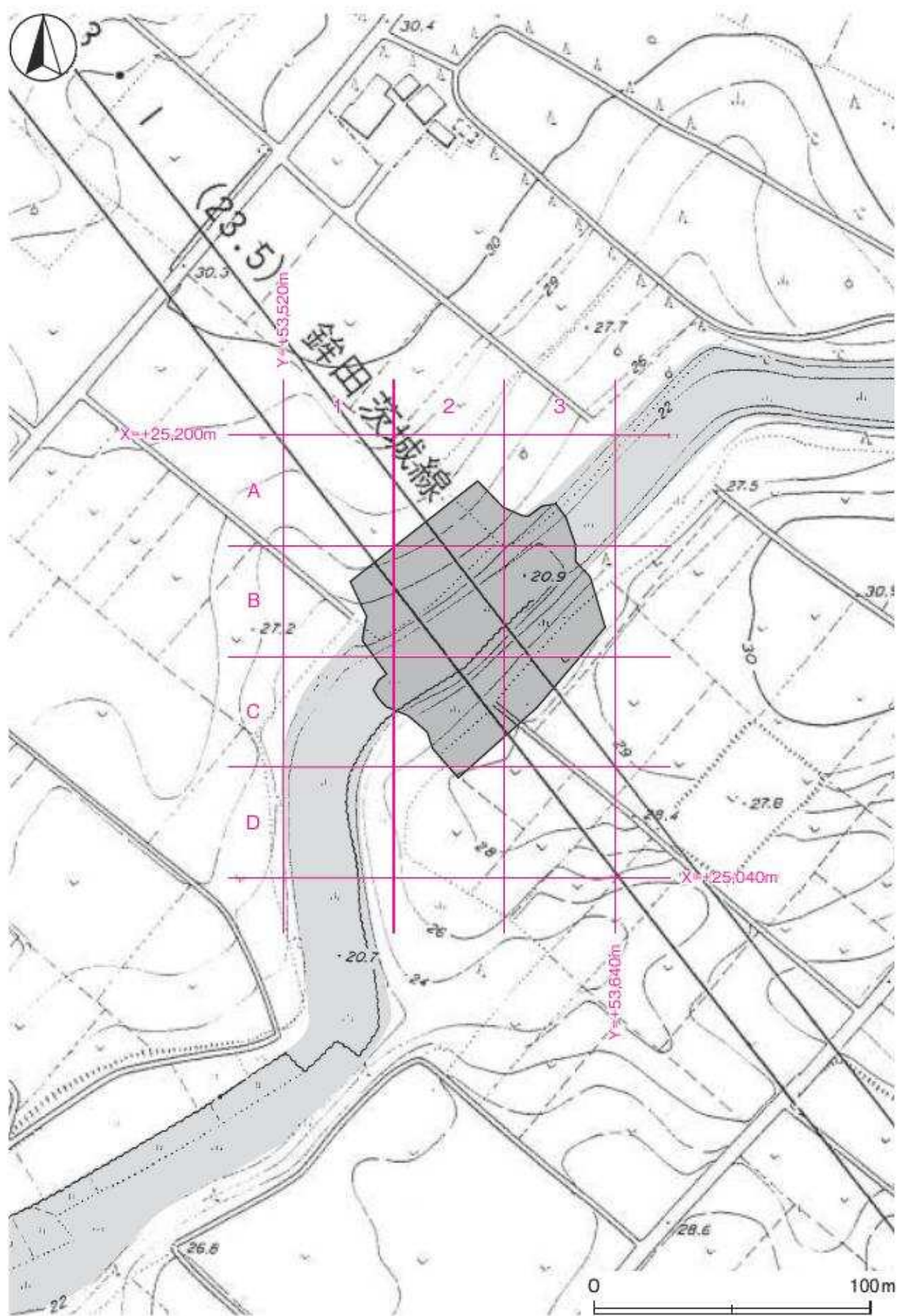
調査方法 運河跡の走行方向と直交するトレンチを設定し、北東壁面(Aライン)で断面形状と堆積状況の観察を行った。また、トレンチ掘削時の重機進入路の両壁面において、運河掘削時の排出土が確認できたことから、それぞれBライン、Cラインとして堆積状況を観察した。

規模と形状 谷地形を利用して構築されており、標高23～27mの旧表土が残存している部分は谷の斜面部で、標高23m以下の旧表土が失われている部分は、運河として掘削された部分と判断した。斜面部は、12～14度の勾配で緩やかに傾斜しており、旧表土の上部には運河掘削時の排出土が確認できた。しかし、現在の耕作により削平されているため、土塁や堤などの形跡は確認できなかった。運河跡は、上幅25.2m、下幅20.9mで、北東・南西軸方向(N-38°-E)へ直線的に延びている。底面は北西半部が逆台形状に一段深く掘り下げられており、肩部からの深さは北西半部が5.3m、南東半部が2.7mである。壁は約50度の勾配で外傾している。

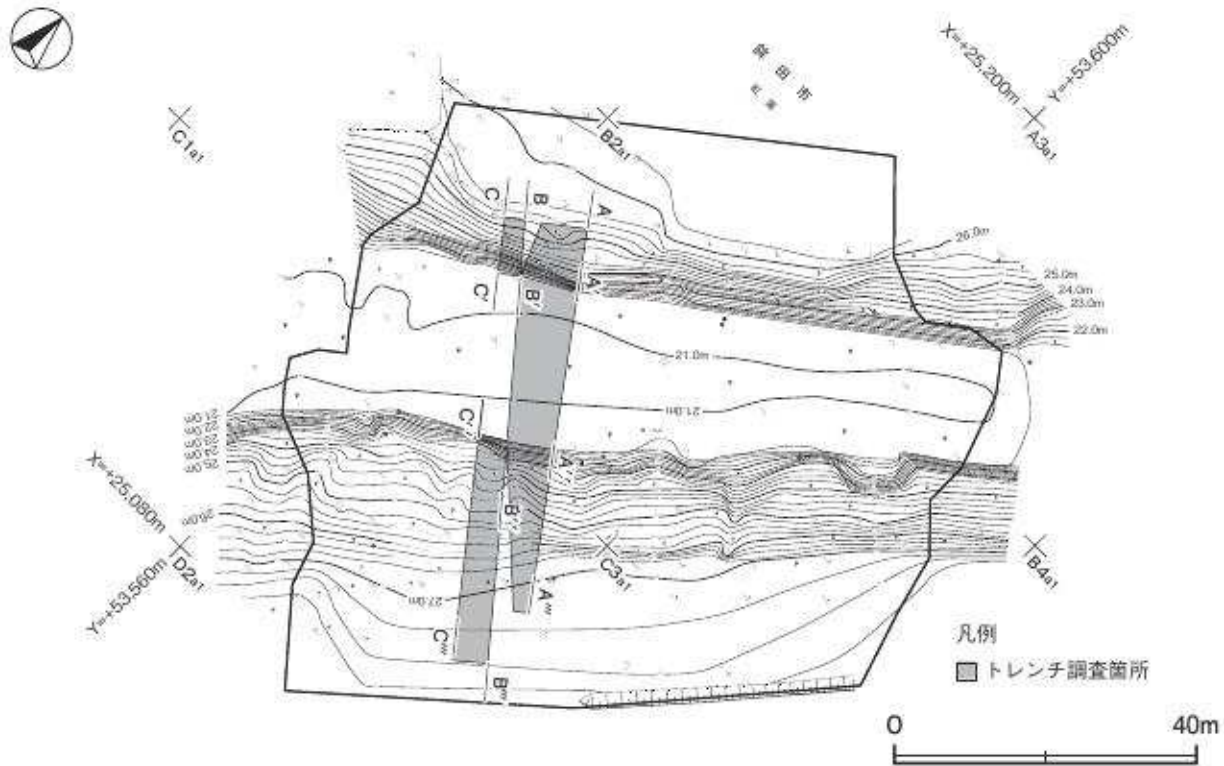
覆土 第1～24層は、運河跡が機能を停止した後の堆積土である。第1～8層は、地山起源の砂礫や粘土のブロックが多量に含まれていることから、埋め戻されている。第9～23層は、グライ化した粘質土が主体で、第10～12・22・23層中には多量の植物遺体(葉・茎・根など)が含まれており、水の流れのない湿地や沼地のような状態で堆積したと考えられる。なお、第12・21・22層及び直下の第26層の最上部から植物遺体を採取し、放射性炭素年代測定を実施した。

第24～26層は、青灰色の細砂層を主体とし、平行ラミナや粘土の薄い間層がみられることから、緩やかな流水に伴う堆積物である。また、砂層は、運河跡の底部や壁部からの自然湧水によって浸食された地山の砂礫層に由来するものと考えられる。

第27～101層は、谷の斜面部で確認した運河掘削時の排出土である。特に、B・Cラインの土層断面では、谷底部起源と考えられる暗灰色粘質土と地山起源の黄褐色粗砂がブロック状や互層状に堆積している様子が確認できた。ブロック状や互層状の堆積状況からは、斜面部の崩落や流出を防ぐための工法が考えられる。



第 683 図 勘十郎堀跡調査区設定図（銚田市都市計画図 2,500 分の 1 から作成）



第 684 図 現況測量図

第 102 ~ 120 層は、旧表土及び当地の基盤層である。第 102 層は、運河掘削以前の旧表土である。第 103 ~ 110 層はローム粒子を主体としているが、締まりが弱く、谷の深部に向かって斜方向に堆積していることから、台地上から流れ込んだロームの 2 次堆積層である。間層の第 105・108 層は、谷底部の黒色土の一部である。第 111 層以下は、粘土層を挟む砂礫層である。上層では平行ラミナ、中層では平行ラミナと斜行ラミナの互層がみられる水成堆積層で、見和層に相当すると考えられる。なお、第 120 層からは、激しい湧水が認められた。

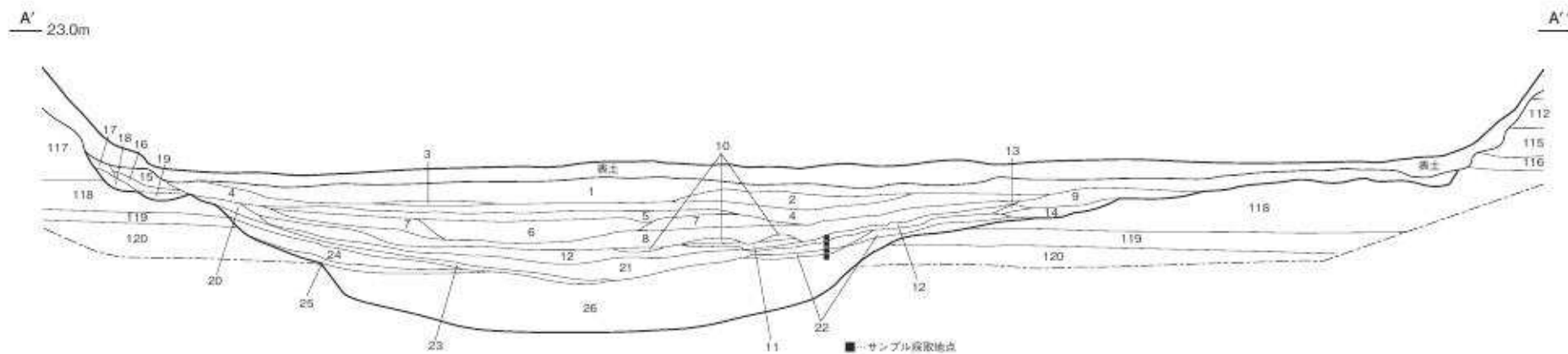
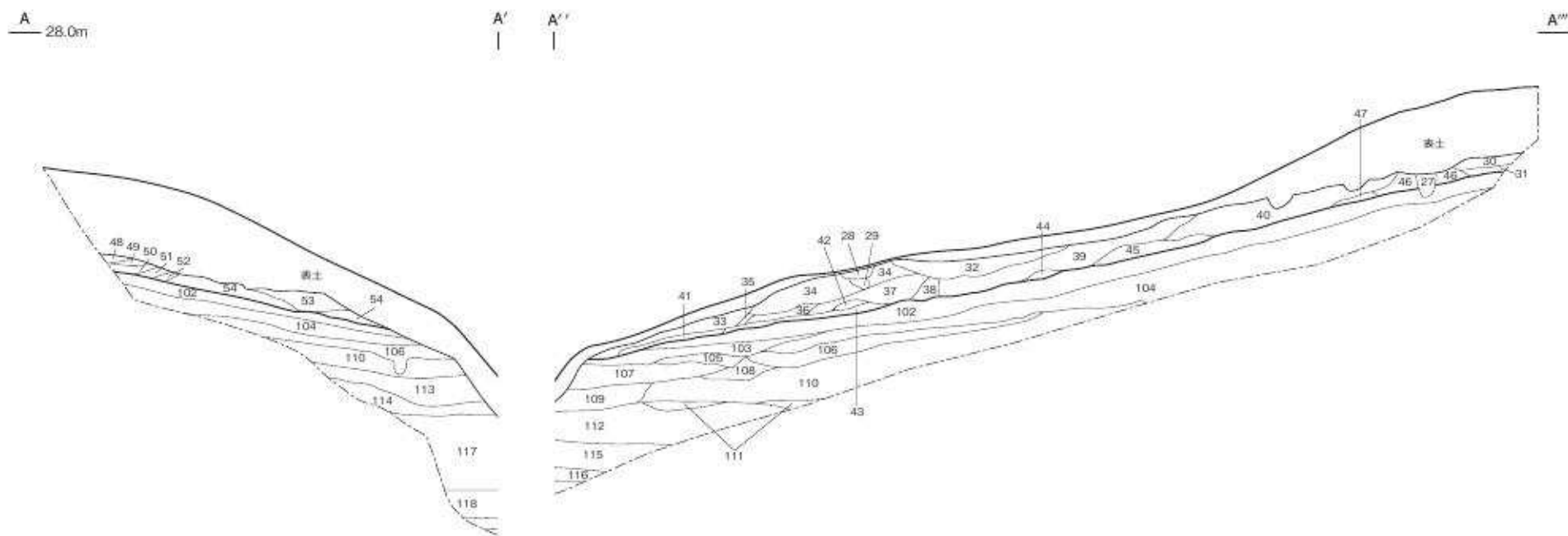
土層解説 (運河跡覆土)

- | | |
|-------------------------------------|--|
| 1 暗緑灰色 砂質土、黄褐色細砂ブロック多量、植物遺体少量 | 15 灰 色 砂質土、粗砂多量、明黄褐色粗砂ブロック少量 |
| 2 オリーブ黒色 粘質土、青灰色細砂ブロック多量 | 16 オリーブ黒色 粘質土、黄褐色細砂ブロック中量 |
| 3 灰 色 粘質土、灰色粘土ブロック多量 | 17 灰黄褐色 砂質土、細礫~粗砂多量 |
| 4 灰 色 粗砂、黄褐色細砂ブロック多量、オリーブ灰色粘土ブロック少量 | 18 オリーブ褐色 粗砂、オリーブ黒色粘質土ブロック少量 |
| 5 オリーブ黒色 砂質土、細礫多量、細砂中量 | 19 灰 色 砂質土、黄褐色細砂ブロック少量 |
| 6 暗オリーブ灰色 粘質土、植物遺体中量、黄灰色粘土ブロック少量 | 20 灰 色 粘質土、細礫中量 |
| 7 黒褐色 砂質土、オリーブ黄色・緑灰色粘土ブロック多量 | 21 灰 色 粘土、細砂・雲母末多量、植物遺体中量 ※サンプル③ |
| 8 灰 色 砂質土、細礫・緑灰色粘土ブロック多量 | 22 暗灰色 粘質土、細礫・植物遺体中量 ※サンプル② |
| 9 灰オリーブ色 細礫~細砂 | 23 暗灰色 粘質土、細礫~細砂・植物遺体中量 |
| 10 暗オリーブ灰色 粘質土、植物遺体多量 | 24 オリーブ灰色 細砂、雲母末多量、細礫少量 |
| 11 暗緑灰色 粘土、植物遺体多量 | 25 暗青灰色 粘土、細礫多量、植物遺体中量 |
| 12 オリーブ黒色 粘質土、植物遺体多量 ※サンプル④ | 26 青灰色 細砂と粘土の互層、下層は砂層主体で、間層に粘土の薄層を挟み、平行ラミナがみられる ※サンプル① |
| 13 灰 色 粘質土、細砂少量 | |
| 14 暗灰色 粘質土、細礫~細砂多量 | |

土層解説 (斜面部排出土 Aライン)

- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| 27 灰褐色 砂質土、細礫中量 | 34 黄褐色 粗~細砂、細礫少量 |
| 28 にい黄褐色 極細砂 | 35 暗褐色 砂質土、細礫微量 |
| 29 にい黄褐色 細砂、細礫微量 | 36 にい黄褐色 粗砂、明赤褐色粗砂ブロック多量 |
| 30 褐色 粗~細砂、細礫多量 | 37 明赤褐色 粗~細砂、黄褐色細砂ブロック中量、細礫微量 |
| 31 黒色 砂質土、細礫中量、明赤褐色粗砂ブロック少量 | 38 明褐色 砂質土、黒褐色土ブロック多量、細礫少量 |
| 32 黄褐色 粗砂、細礫少量 | 39 明褐色 細砂、細礫少量 |
| 33 明黄褐色 粗~細砂、黒褐色土ブロック少量、細礫微量 | 40 明褐色 粗~細砂、細礫少量 |

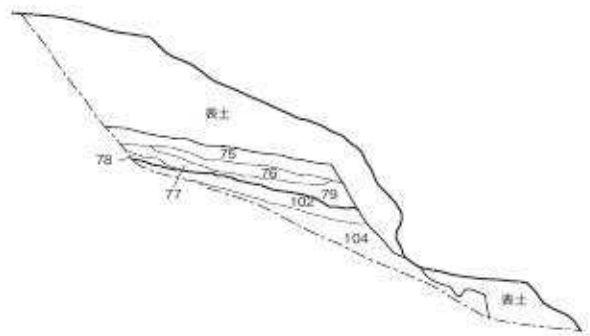
第 685 図 土層断面実測図 (1)



第 686 图 土层断面实测图 (2)

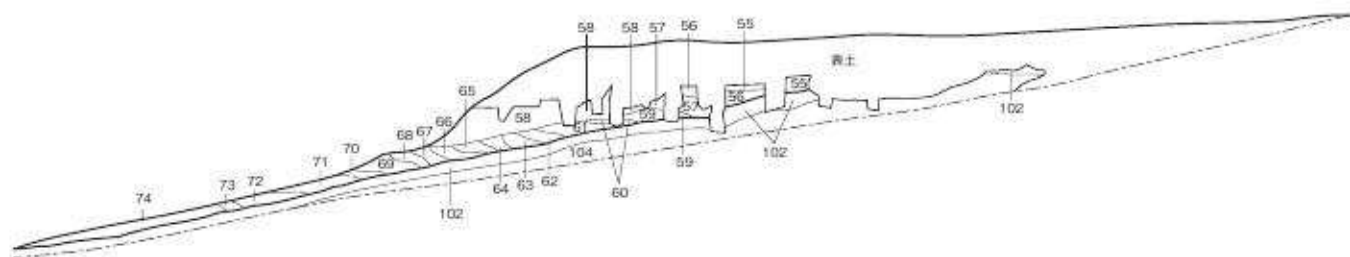
B 28.0m

B'



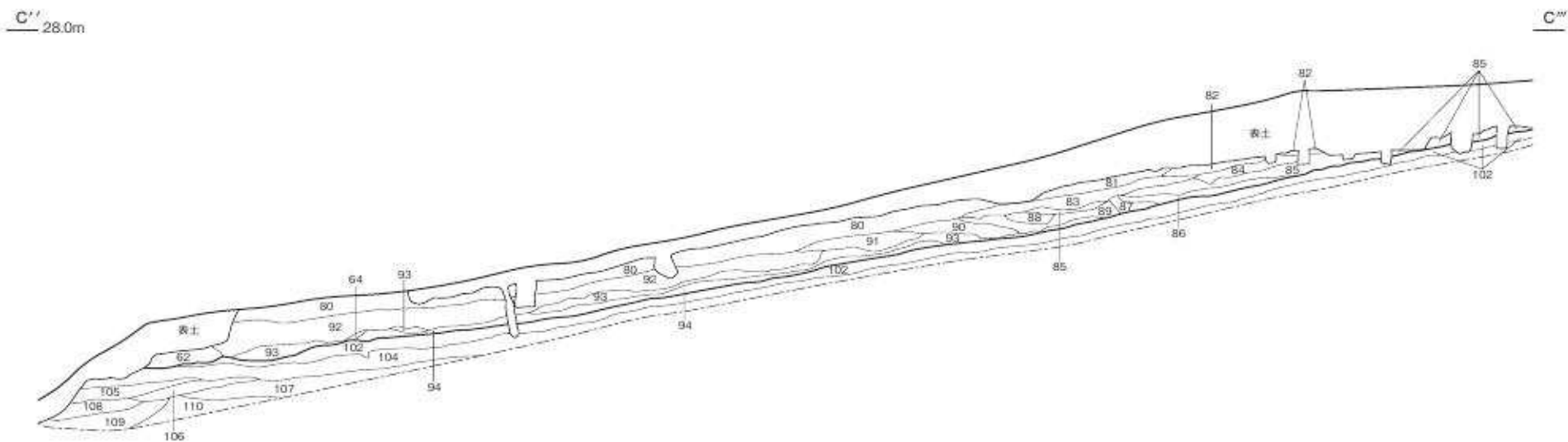
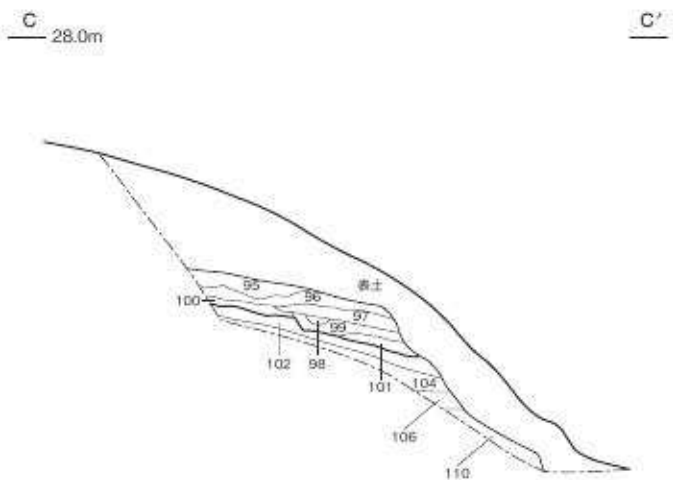
B'' 28.0m

B'''



0 4m

第 687 图 土層断面实例图 (3)



41	橙 色	細砂、細礫少量
42	黄 褐色	砂質土、細礫少量
43	灰 褐色	砂質土、黒褐色土ブロック少量、細礫微量
44	にぶい黄褐色	砂質土、細礫少量、黒褐色土ブロック微量
45	黄 褐色	粗砂、細礫・灰白色粘土ブロック少量
46	灰 褐色	粗～細砂、細礫少量、明赤褐色粗砂ブロック微量
47	黒 褐色	砂質土、細礫・明赤褐色粗砂ブロック少量

土層解説(斜面部排出土 Bライン)

55	浅 黄 色	粗砂、灰黄色・暗灰色粘質土ブロック少量
56	灰黄褐色	粘質土ブロック主体、黄褐色細砂ブロック中量、粗砂少量
57	にぶい黄色	細砂ブロック主体、暗灰色粘質土ブロック微量
58	にぶい黄褐色	粗砂、細礫中量
59	灰 黄 色	粗砂、細礫中量
60	黄 灰 色	粘質土ブロック主体、明赤褐色粗砂ブロック中量
61	オリーブ黄色	細砂ブロック主体、明赤褐色粗砂ブロック中量、暗灰色粘質土ブロック微量
62	灰 色	粗砂、灰黄色粘土ブロック・細礫中量
63	灰オリーブ色	粗砂、細礫中量、灰黄色粘質土ブロック少量
64	暗 灰 黄 色	粗砂、暗灰色粘質土ブロック中量、灰黄色粘土ブロック少量
65	暗 灰 色	粘質土ブロック主体、粗砂多量

土層解説(斜面部排出土 Cライン)

80	にぶい黄褐色	粗砂、細礫中量
81	オリーブ褐色	粗砂、細礫多量
82	灰黄褐色	粗砂、細礫多量
83	暗 灰 色	粘質土ブロック主体、細砂ブロック中量、粗砂少量
84	暗 灰 色	粘質土ブロック主体、粗砂多量、黄褐色細砂ブロック中量
85	黄 褐色	粗砂、灰黄色粘土・暗灰色粘質土ブロック少量
86	黄 灰 色	粗砂、暗灰色粘質土ブロック中量
87	灰 色	粗砂、灰黄色粘土ブロック少量
88	暗 灰 黄 色	粗砂、暗灰色粘質土ブロック中量、黄灰色粘質土ブロック少量
89	黄 灰 色	粗砂、暗灰色粘質土ブロック中量、黄灰色粘質土ブロック少量
90	黄 灰 色	粗砂、暗灰色粘質土ブロック・黄灰色粘質土ブロック少量

土層解説(旧表土～地山)

102	黒 褐色	砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量
103	暗 赤 褐色	ローム粒子主体(2次堆積層)
104	にぶい赤褐色	ローム粒子主体(2次堆積層)
106	黒 褐色	谷部堆積土
106	灰 褐色	ローム粒子主体(2次堆積層)
107	黒 色	谷部堆積土
108	暗 褐色	谷部堆積土
109	にぶい黄褐色	ローム粒子主体、粗～細砂・灰黄色粘質土ブロック中量
110	明 褐色	ローム粒子主体(2次堆積層)
111	褐 色	粗砂、鉄分・マンガン混沈着

48	暗 灰 黄 色	粗～細砂、黄褐色砂ブロック微量
49	灰オリーブ色	粗砂、黄褐色細砂ブロック中量
50	にぶい黄褐色	粗砂、黄褐色細砂ブロック少量
51	オリーブ褐色	粗砂、黄褐色細砂ブロック少量
52	暗 灰 黄 色	粗～細砂、細礫中量
53	暗 灰 黄 色	砂質土、粗～細砂・黒褐色土ブロック微量
54	灰オリーブ色	粗～細砂、細礫少量

66	黄 灰 色	粗砂、細砂中量
67	暗 灰 色	粘質土ブロック主体、粗砂中量
68	黄 褐色	粗砂、細礫中量、暗灰色粘質土ブロック少量
69	黄 灰 色	粘質土ブロック主体、灰黄色粘土ブロック少量
70	灰 黄 色	粘質土ブロック主体、粗砂中量
71	暗 灰 色	粘質土ブロック主体、灰黄色粘土ブロック中量
72	暗 灰 色	粘質土、細砂・灰黄色粘質土ブロック少量
73	灰 白 色	粘質土ブロック主体
74	暗 灰 色	粘質土、粗砂少量
75	暗 灰 黄 色	細砂、細礫・粗砂少量
76	黄 褐色	粗～細砂、細礫微量
77	暗 灰 黄 色	粗～細砂、黒褐色土ブロック少量
78	にぶい黄褐色	粗砂、細礫中量
79	灰 白 色	粗～細砂、細砂ブロック中量

91	灰 黄 色	細砂ブロック主体、黄灰色粘質土ブロック中量、暗灰色粘質土ブロック・粗砂少量
92	にぶい黄色	粗～細砂、暗灰色粘質土ブロック・黄灰色粘質土ブロック中量
93	暗 灰 色	粘質土、細砂少量
94	灰 褐色	砂質土、粗砂多量
95	黄 褐色	粗砂、細礫・粗砂中量
96	暗 灰 黄 色	粗～細砂、黒褐色土ブロック少量
97	暗 灰 黄 色	粗～細砂、細砂ブロック中量
98	黄 褐色	粗～細砂、細礫中量
99	灰 白 色	粗～細砂、細砂ブロック中量
100	黄 褐色	粗～細砂、細砂ブロック中量
101	黄 灰 色	砂質土、粗砂ブロック少量

112	にぶい黄褐色	細砂と粘土の互層
113	にぶい黄褐色	細砂
114	黄 褐色	粗～細砂
115	明 黄 褐色	粗砂、下部に鉄分沈着
116	にぶい黄褐色	粘土、細砂の薄層を挟む
117	にぶい黄色～灰オリーブ色	粗砂、上部は斜行ラミナ、下部は平行ラミナと斜行ラミナの互層がみられる
118	明褐色粗砂・灰黄褐色細砂	にぶい黄褐色粘土の互層
119	灰 白 色	粘土
120	オリーブ褐色	細砂、上部に鉄分沈着、湧水が著しい

所見 底面は、北西半部が一段深く掘り込まれており、最下層(第24～26層)には流水に伴って堆積した青灰色砂層が確認できたことから、掘削当初は、水路として機能していた可能性がある。一方、底面上段の南東半部には同様の堆積物が認められないことから、運河掘削の際、台地上へ掘削土を排出する中継的な作業面であったと考えられる。その後、植物遺体を多量に含む粘土層(第10～23層)が堆積しており、第12・21・22・26層から採取した植物遺体の放射性炭素年代測定で、19世紀中頃(1840年前後)の値が得られたことから、掘削終了から120～30年後には、排水不良の湿地や沼地のような環境になっていたと考えられる。

第3節 ま と め

1 はじめに

今回の調査では、運河跡について、トレンチ調査を行い、断面形状と堆積状況を確認した。本節では、勘十郎堀跡の概略と調査で明らかにできた運河跡の堆積過程を復元して、まとめとしたい。

2 勘十郎堀跡の概略

勘十郎堀跡は、潤沼と巴川・北浦の間を結ぶ江戸時代の運河跡である¹⁾。

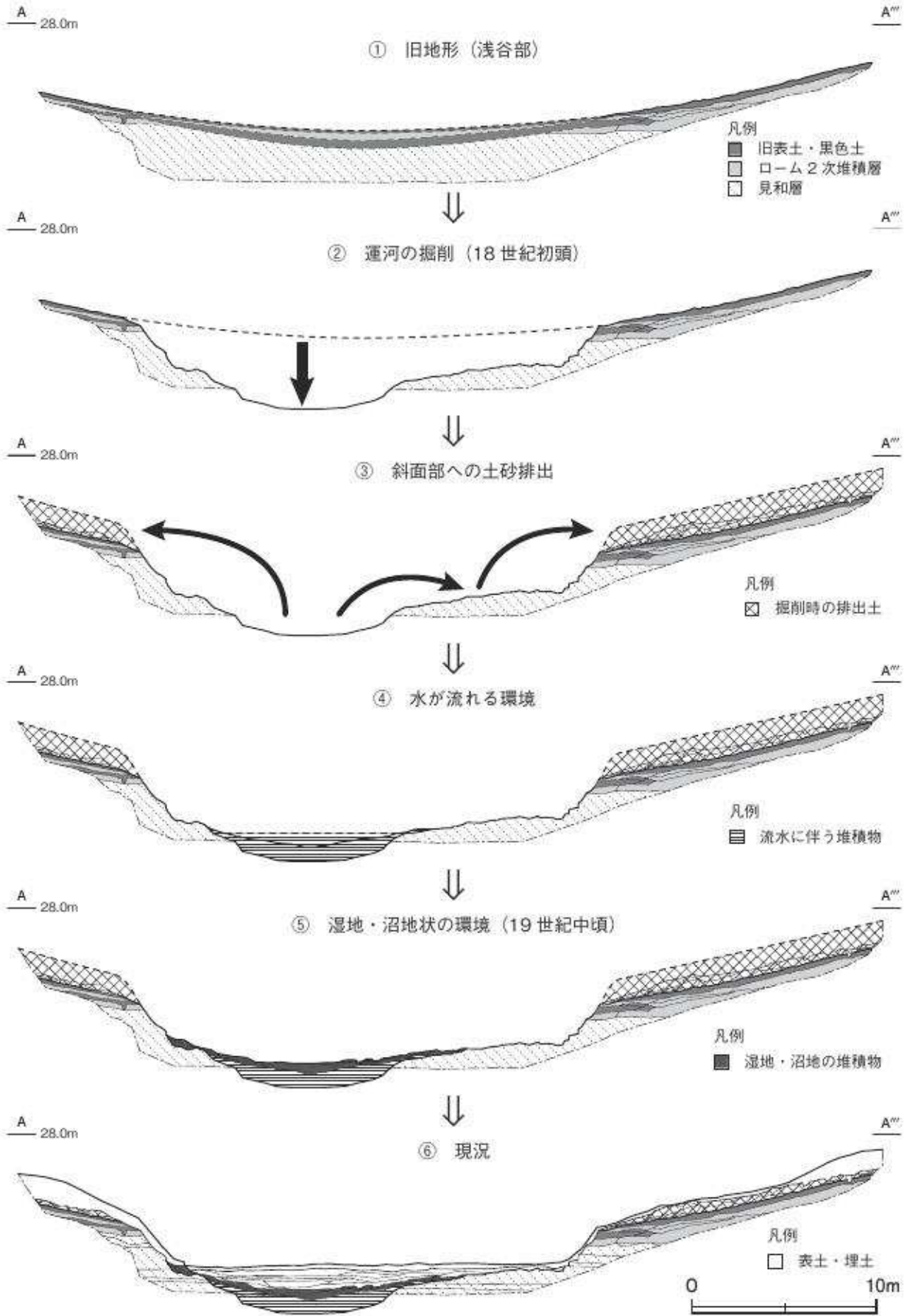
江戸時代、水戸・江戸間の米穀や日用物資の輸送手段として舟運が発達したが、海上は鹿島灘や房総半島沖が海上交通の難所であることから、太平洋岸の那珂湊（ひたちなか市）から川船に積み替え、那珂川・潤沼から、北浦・霞ヶ浦を経て、利根川を遡上し、江戸川を通じて江戸湾へ至る航路（内川廻り）が最も安全な輸送路であった。しかし、この輸送路の弱点が、潤沼と北浦・霞ヶ浦間の陸路であり、これを水路に替えることが、水戸藩の流通経済上の重要な施策であった。

この運河掘削計画は、「新川普請」と呼ばれ、寛文7年（1667）には小堤（東茨城郡茨城町）・紅葉（鉾田市）間、同10年（1670）には海老沢（東茨城郡茨城町）・紅葉間の普請を、江戸の商人らがそれぞれ願っている。しかし、前記は幕府の許可が下りずに着工できず、後記は郡奉行の平賀勘右衛門が延人員48万人余りを見込んで、「伏見屋」の手代に測量・工事を請け負わせたが、完成を見ずに中止したようである。

宝永3年（1706）、水戸藩に登用された松波勘十郎は、藩政改革の一環として潤沼の海老沢河岸と紅葉地先の巴川を結ぶ「紅葉運河」、大貫（東茨城郡大洗町）の太平洋岸から潤沼川を結ぶ「大貫運河」の2か所の運河掘削工事を計画し、津役銭（通行税）の増収と領内の経済の活性化を図った。今日、「紅葉運河」が当遺跡の「勘十郎堀跡」、「大貫運河」が「勘十堀跡」と呼称されている。「紅葉運河」については、宝永4年（1707）5月に運河の川敷にあたる部分の松林の伐採が行われ、同年7月12日に工事が開始された。工事は延人員130～140万人の農民が動員され、11月には藩に竣工の旨が報告された。しかし、その後も土砂の埋没や計画変更により、工事は継続された。工事の苛酷さと人足賃の未払いに苦しめられた農民は、宝永5年（1708）11月から翌年1月にかけて一揆を起こし、改革の中止と松波の罷免を強訴した。その結果、松波勘十郎は解任・追放され、工事も中止された。

その後、宝暦5年（1755）には、水戸藩の勤農役に任じられた羽生惣衛門により、紅葉・巴川間の勘十郎堀の改修工事が行われたが、これも長期間舟運に利用されたかは疑わしいとされている。

勘十郎堀跡の経路は、潤沼西岸の海老沢から海士部（東茨城郡茨城町）の開析谷を遡上し、台地上の城ノ内・逆川池（東茨城郡茨城町）・鳥羽田（鉾田市）を経て、紅葉・古新田地内の開析谷を通じて、巴川へと至っている。潤沼沿岸が標高0.5mほど、巴川沿岸が標高6mほどで、中間点の逆川池が標高21.5m、逆川池兩岸の台地上である城ノ内・鳥羽田付近が標高32mほどの最高所となっている。運河は、当初、逆川池から南北に配水して水路を機能させる計画であったが、水量が極めて少なく、実現には至らなかった。その後の計画変更で、堀留を設けて荷物を積み替える方法や水門を築き、水位を調整して舟を通す方法（閘門式運河）なども取られたが、いずれも大勢の人足を要する点で実用性に乏しく、失敗に終わっている。



第 688 図 堆積過程模式図

3 運河跡の堆積過程について（第 688 図）

今回の調査区は、巴川から北東へ約 1.6km 遡上した地点である。周辺地形や基盤層の状況から、浅い谷地形を利用した工事計画であったことがうかがえる (①)。

断面観察から、旧表土がある標高 23 m より上位は谷の斜面部で、下位が運河として掘削された部分と判断した。規模は上幅 25.2 m、下幅 20.9 m で、肩部からの深さは 2.7 ~ 5.3 m である。底面の北西半部は、深さ 2 m ほどの逆台形状に掘り下げられており、南東半部には大走り状の平坦面が存在している (②)。平坦面は、運河掘削時の作業面であったと考えられるが、比較的新しい堆積層に覆われていることから、上面は後世に削平されている可能性がある。また、斜面部の旧表土の上部には、谷底部の暗灰色粘質土と黄褐色粗砂が互層状に堆積しており、異なる土質を重ねることで斜面部の表面を補強し、崩落・流出を防ぐため工法がとられたと考えられる (③)。

運河跡の最下層には、青灰色の細砂層が堆積しており、工事が終了した段階では、水が流れる状態であったと推定でき、一定期間は運河として機能していた可能性が指摘できる (④)。砂層は上位ほど粘土が多く含まれていることから、徐々に水流が緩やかになったことを示している。

砂層の上層には、植物遺体が多量に含まれるグライ化した粘質土が堆積しており、排水不良の湿地・沼地状の環境に変化している (⑤)。これらの層から採取した植物遺体は、放射性炭素年代測定によって、1840 年前後の値が得られており、宝永 6 年 (1709) の工事中止から 120 ~ 130 年後には、運河の機能がほぼ失われていたといえる。

なお、覆土上層は人為的に埋め戻されている。現況は底面の標高がほぼ水平であることから、近年まで、水田として利用されていたと考えられる (⑥)。

4 おわりに

今回の調査は、トレンチ調査による断面形状と堆積状況の確認であったが、運河の規模、掘削当初の形状や機能、埋没過程について、新しい知見を得ることができた。勘十郎堀跡は、新川普請の苦役と松波勘十郎の悪行の記憶から、その名が付けられた。しかし、本県の土木・流通経済史上における重要性や計画の先見性は特筆すべきものであり、運河の構造や施工方法、歴史的な変遷については、考古学的手法から様々なアプローチが可能である。今後の調査によって、更なる解明が進むことを期待したい。

註)

1) 勘十郎堀跡の略史は、以下の文献を参考とした。

田子作太郎 「茨城県に於ける勘十郎堀運河の遺址に就て」『水利と土木』第 10 巻第 6 号 河川協会 1937 年 6 月

田子作太郎 「茨城県に於ける勘十郎堀運河の遺址に就て (其二)」『水利と土木』第 10 巻第 10 号 河川協会 1937 年 10 月

高橋六郎 「勘十郎堀運河の史的検討 (1)」『土木工学』第 8 巻第 12 号 工業雑誌社 1939 年 12 月

高橋六郎 「勘十郎堀運河の史的検討 (2)」『土木工学』第 9 巻第 2 号 工業雑誌社 1940 年 2 月

水戸市史編さん委員会 『水戸市史』中巻 (一) 水戸市役所 1968 年 8 月

水戸市史編さん委員会 『水戸市史』中巻 (二) 水戸市役所 1969 年 9 月

茨城町史編さん委員会 『茨城町史・通史編』茨城町 1995 年 2 月

鉾田町史編さん委員会 図説『はこたの歴史』鉾田町 1995 年 12 月

付 章

茨城県鉾田市勘十郎堀跡採取試料の年代測定

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

茨城県鉾田市に所在する勘十郎堀跡は、江戸時代の宝永4年(1707)に着工され、宝永6年(1709)に工事が中止された運河である。発掘調査において、運河跡の覆土下層から植物遺体を含む水成堆積層が確認されており、本分析調査は、その土壌サンプルについて放射性炭素年代測定を実施し、運河跡の年代に関する資料を得ることを目的とする。

1 試料 (PL188)

試料は、運河跡の覆土各層の下から順番に土壌サンプル①～⑤が採取されている。本分析調査では土壌サンプル①～④の4点を対象とした。以下、各サンプルの詳細を述べる。

サンプル①は覆土最下層の第26層の上部から採取されている。第26層は微量の未分解の植物遺体を含む青灰色の粘土層である。サンプル②は第23層から採取されている。第23層は未分解の植物遺体を含む暗灰色の粘質土層である。サンプル①、②ともに土壌中に含まれるヨシの地下茎と思われる植物遺体を取り出し、分析試料とした。サンプル③は第21層から採取されている。第21層は灰色で砂混じりの泥炭質シルト層であり、土壌中には未分解の植物遺体が多く含まれている。今回はこのうち広葉樹の葉(カシ類)を分析試料とした。サンプル④は第12層から採取されている。第12層も未分解の植物遺体が多く含むオリーブ黒色の泥炭質シルト層である。土壌中に多く含まれるヨシの地下茎を分析試料とした。

2 分析方法

分析試料はAMS法で実施した。分析では、まず、試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去した。次に、塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去した(酸-アルカリ-酸処理:AAA処理)。その後、超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させた。なお、アルカリ処理は、0.001M~1Mまで濃度を上げ、試料の様子をみながら処理を進めた。1Mの水酸化ナトリウムで処理が可能であった場合はAAAと記す。一方、試料が脆弱で1Mの水酸化ナトリウムでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の水酸化ナトリウムの状態で処理を終えている。その場合はAaAと記す(①、②はこれに該当する)。

精製された試料を燃焼してCO₂を発生させ、真空ラインで精製した。鉄を触媒とし、水素で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスし、測定試料とした。

測定は、タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定した。AMS測定時に、標準試料とバックグラウンド試料の測定も行っている。

δ ¹³C は試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのズレを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma:68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従っている (Stuiver and Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記している。暦年較正に用いるソフトウェアは、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1、較正曲線は Intcal13 (Reimer et al.2013) である。

3. 結果

結果を表 1 に示す。同位体補正を行った年代値は、サンプル①が 100 ± 20BP、サンプル②が 150 ± 20BP、サンプル③が 90 ± 20BP、サンプル④が 120 ± 20BP である。

暦年較正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪 (年輪は細胞壁のみなので、形成当時の ¹⁴C 年代を反映している) 等を用いて作られており、最新のものでは 2013 年に発表された Intcal13 (Reimer et al.2013) である。また、較正年代を求めるソフトウェアはいくつか公開されているが、今回は CALIB を用いた。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが (Stuiver and Polach 1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値 (1 年単位) を記している。

暦年較正 2σ の結果は、サンプル①が calAD1,690 ~ 1,920 (中央値 calAD1,841)、サンプル②が calAD1,670 ~ 1,950 (中央値 calAD1,768)、サンプル③が calAD1,690 ~ 1,920 (中央値 calAD1,846)、サンプル④が calAD1,680 ~ 1,940 (calAD1,837) である。年代幅が広いのは、近世以降の較正曲線が大きく波打っていることと関連する。4 点中 3 点がヨシ属の地下茎であることから後代の擾乱による影響も否定できないが、中央値が 19 世紀中頃に集中していることから、幕末~明治初頭の堆積物の可能性がある。

勘十郎堀跡は史料の記録によると、宝永 4 年 (1707) に着工され、宝永 6 年 (1709) に工事が中止とされており、その後、人為的もしくは自然に埋没したものと考えられる。今回実施した年代測定の結果は、このような史料記録と矛盾しない。上記のように中央値が 19 世紀中頃に集中していることから、工事中止から埋没が開始するまでに、ある程度の期間が空いていた可能性があるが、この点については現地発掘調査における運河跡の堆積物の観察結果等、調査所見と合わせて検討する必要がある。

引用文献

- 1) Reimer J Paula · Bard Edouard · Bayliss Alex · Beck J Warren · Blackwell G Paul · Ramsey Bronk Christopher · Buck E Caitlin · Cheng Hai · Edwards R Lawrence · Friedrich Michael · Grootes M Pieter · Guilderson P Thomas · Haffidason Haffidi · Hajdas Irka · Hatté Christine · Heaton J Timothy · Hoffmann Dirk L · Hogg G Alan · Hughen A Konrad · Kaiser K Félix · Kromer Bernd · Manning W Sturt · Niu Mu · Reimer W Ron · Richards A David · Scott E Marian · Southon R John · Staff A Richard · Turney S M Christian · Plicht van der Johannes.2013, Intcal13 and Marine13 Radiocarbon age Calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon.55,1869-1887.
- 2) Stuiver Minze and Polach A Henry.1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ¹⁴C Data. Radiocarbon .19.

表1 放射性炭素年代測定結果

番号	層位	種別	処理方法	補正年代 (BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 (BP)	Code No.
①	26層	ヨシの地下茎?	AaA	100 ± 20	-29.08 ± 0.29	160 ± 20	IAAA-150339
②	23層	ヨシの地下茎?	AaA	150 ± 20	-27.55 ± 0.27	200 ± 20	IAAA-150340
③	21層	カシ類の葉	AAA	90 ± 20	-30.13 ± 0.29	170 ± 20	IAAA-150341
④	12層	ヨシの地下茎?	AAA	120 ± 20	-26.89 ± 0.31	150 ± 20	IAAA-150342

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用した。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示している。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値である。
- 4) AAAは、酸、アルカリ、酸処理、AaAは、アルカリの濃度を薄くした処理を示している。

表2 放射性炭素年代測定結果

番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代					Code No.
		年代値			相対比	中央値	
①	95 ± 22	σ	cal AD 1696 - cal AD 1725	cal BP 254 - 225	0.331	calAD1841	IAAA-150339
			cal AD 1814 - cal AD 1836	cal BP 136 - 114	0.237		
			cal AD 1845 - cal AD 1848	cal BP 105 - 102	0.034		
			cal AD 1877 - cal AD 1897	cal BP 73 - 53	0.223		
			cal AD 1902 - cal AD 1917	cal BP 48 - 33	0.175		
		2σ	cal AD 1691 - cal AD 1729	cal BP 259 - 221	0.272		
cal AD 1810 - cal AD 1922	cal BP 140 - 28	0.728					
②	153 ± 21	σ	cal AD 1675 - cal AD 1691	cal BP 275 - 259	0.158	calAD1768	IAAA-150340
			cal AD 1729 - cal AD 1777	cal BP 221 - 173	0.516		
			cal AD 1799 - cal AD 1810	cal BP 151 - 140	0.123		
			cal AD 1923 - cal AD 1941	cal BP 27 - 9	0.203		
		2σ	cal AD 1668 - cal AD 1698	cal BP 282 - 252	0.167		
			cal AD 1723 - cal AD 1782	cal BP 227 - 168	0.409		
			cal AD 1797 - cal AD 1816	cal BP 153 - 134	0.113		
			cal AD 1834 - cal AD 1878	cal BP 116 - 72	0.117		
cal AD 1916 - cal AD 1949	cal BP 34 - 1	0.195					
③	85 ± 21	σ	cal AD 1699 - cal AD 1721	cal BP 251 - 229	0.287	calAD1846	IAAA-150341
			cal AD 1818 - cal AD 1833	cal BP 132 - 117	0.202		
			cal AD 1879 - cal AD 1915	cal BP 71 - 35	0.511		
		2σ	cal AD 1694 - cal AD 1727	cal BP 256 - 223	0.264		
			cal AD 1812 - cal AD 1863	cal BP 138 - 87	0.293		
			cal AD 1866 - cal AD 1919	cal BP 84 - 31	0.443		
④	116 ± 21	σ	cal AD 1691 - cal AD 1707	cal BP 259 - 243	0.156	calAD1837	IAAA-150342
			cal AD 1718 - cal AD 1729	cal BP 232 - 221	0.094		
			cal AD 1810 - cal AD 1826	cal BP 140 - 124	0.134		
			cal AD 1832 - cal AD 1886	cal BP 118 - 64	0.525		
			cal AD 1913 - cal AD 1923	cal BP 37 - 27	0.090		
		2σ	cal AD 1682 - cal AD 1736	cal BP 268 - 214	0.292		
			cal AD 1805 - cal AD 1896	cal BP 145 - 54	0.564		
			cal AD 1902 - cal AD 1935	cal BP 48 - 15	0.144		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1を使用した。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。
- 6) 中央値は、確率分布図の面積が二分される値を年代値に換算したものである。

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 10 Home
	編集	Adobe InDesign CS 4
	図版作成	Adobe Illustrator CS 4
	写真調整	Adobe Photoshop CS 4
	Scanning	6 × 7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000ED
	図面類	RICOH imagio MP W4001
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷	印刷所へは、	Adobe InDesign CS 4 でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第419集

吉十北遺跡 勘十郎堀跡 (第3分冊)

東関東自動車道水戸線(鉾田~茨城空港北間)
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29(2017)年 3月15日 印刷

平成29(2017)年 3月17日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 株式会社あけほの印刷社

〒310-0804 水戸市白梅1丁目2番11号
TEL 029-227-5505